ボディーガードは魔法少女

建御雷神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボディーガードは魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ７３３５Ｘ

【作者名】
建御雷神

【あらすじ】
７月２７日、明日から夏休みという事で浮かれていた俺こと、高校二年生の真之乃秀（まのしゅう）の前に謎の金髪碧眼のツインテールの少女が現れた。自分は未来からやってきたというトンデモ設定を語る少女は更に自分の事を『上級魔術師（トップソーサレス）』――つまりは、“魔法少女”だと言う。色んな設定が混じっているようなそいつは更に俺に対してトンデモ発言をしてきて――。

7月27日

「夏休み、どうする？」

「あん？」

7月27日――高校の終業式からの帰り道にて。

腰の辺りまである艶やかな黒髪が特徴の少女――夜華霧歌（やかきりか）は俺にそんな事を問いかけてきた。

「どうするって……明日から否応無しにやってくる夏休みに対しての今の心境を語ればいいのか？」

「私がそんな捻くれた答を待ち望んでいると思う？」

「いや、全く以て思わないな」

「そう思うのなら、そんな事は言わない事、良い？」

「は、ハイ……いや、その、ちょっと明日からの夏休みに浮かれてさ。ちょっとした悪ふざけを敢行しようと思い立ったから」

「全くもう……秀ちゃんはいつまで経ってもそういう所だけは変わらないんだから」

そう言って――俺の隣を歩く霧歌はぷうっと不満気に頬を小さく膨らませる。

夜華霧歌――彼女は一言で言うなら、俺の幼馴染だ。

彼女とは幼稚園の頃からの付き合いで、その後は小学校、中学校、そして今の高校と――ずっと共に歩みを進めている。

もしかすると、このまま二人でハッピーエンドまで到達してしまうのではないか。

余りにも歩む道が同じ過ぎて俺は時折そんな事を考えてしまう――のだが。

まぁ、そんな事は無いのだろう。

だって、僕は単なる平凡な学生で、彼女は生徒会の副会長も務めていて、学校では常に成績がトップのエリートだからだ。

同じ道を歩んでいても、互いに起きる変化は言うまでも無く大きく違う。

嫌になってくる程に――違っている。

昔、一緒に遊んでいた男女――その内の男子が平凡になって、その内の女子がエリートになる。

よくある話だ。

そして、大概はその後に二人を待ち構えているのは困難を乗り越えた先にあるハッピーエンドなのだが――。

今の所、ハッピーエンドの兆しどころか、困難さえ俺達の目の前に

立ちはだかる気配は感じられない。

非常に残念だ。

いや、冗談抜きで。

「ねぇ、秀ちゃん」

「あのな、霧歌……その呼び方、中学の時にはもう止めてくれって俺何度も頼まなかったっけ？」

「アレ？　そうだったかな？」

そうだったかな、じゃねーよ。

女子なら未だしも、男子が女子からあだ名で呼ばれるという事に何かしらの抵抗の意思を俺が見せ始めたのは中学校に入ってからだ。

そこで、俺は霧歌に土下座までしてそのあだ名を止めてくれるように頼んだのである。

「忘れたとは言わせねーぞ。俺なんかお前の前で土下座までして見せたんだからな」

「過去を勝手に改竄（かいざん）するのは止めてよ……秀ちゃん、私に土下座なんてしてないよ？」

「……」

どうやら、土下座まではしていなかったらしい。

それはそれで安心した。

何と言うか……男としてのプライドが護られたような気がする。

「とにかく、俺の事をもうあだ名で呼ぶのは止せ」

「えーっ、何でよー。可愛いよ？　あだ名」

「男に可愛さなんて要らない」

「それはおかしいよ……何かこう、女尊男卑（じょそんだんぴ）みたいな」

「難しい言葉を使って誤魔化そうとするな。そんな言葉、見た事も聞いた事も無いぞ。男尊女卑（だんそんじょひ）なら知っているが」

「……秀ちゃん、女尊男卑は今の日本を語る為の、男尊女卑に変わる四字熟語だよ？」

「……」

……時折、無知は俺に“羞恥”という贈り物をくれる。

いや、好きで貰っている訳では無いのだが。

「あ、揚げ足を取りやがって……」

「秀ちゃんがもっとちゃんと勉強すれば良い話じゃない」

「ふざけるな。俺は勉強なんかしない」

「高校生が言う言葉じゃないねぇ……」

呆れたように苦笑を見せる霧歌。

「夏休み明けには実力テストがあるんだよ？」

「知ってるよ。夏休み明けには忘れているだろうけど」

「秀ちゃん、夏休み明けにあるテストを夏休み明けには忘れている って、かなり危ない事だという事に気付いてる？」

「とにかく、俺は勉強なんかしねーよ。来年もあるし、来年一年間頑張ればどっかの大学くらい受かるだろ」

「そういう安易な考えが足元を突き崩すんだよ……秀ちゃん。仕方ないなぁ……それじゃあ、夏休みの何日間か私が個人レッスンして上げるから、頑張らない？」

「こ、個人レッスンってお前……俺達、まだ高校生だぜ？」

「……秀ちゃん」

「ハイ」

「怒るよ」

「……申し訳ありませんでした」

俺は素直に謝った。平謝りをした。

今のは完全に悪ノリをした俺が悪い。

いや――悪ノリをしている時点で悪いのはどう考えても俺なのだが。

7月27日？

「それで、話は元に戻るけど……夏休みはどうする？　私と一緒にお勉強する？」

「夏休みにお勉強、ねぇ……」

「物凄く嫌そうな顔だね……まぁ、解ってはいたけどさ」

再度、俺の顔を見て苦笑を見せる霧歌。

ていうか、顔を見られて苦笑を浮かべられるというのもどうなのだろうか。

「そうだなぁ……まぁ、気が向いたらお願いしようかな」

「おっ、普段の秀ちゃんに似合わず前向きな考えだね～」

「オイ、それは一体全体どういう意味だ」

今の言葉だけで俺は“前向き”だと捉えられてしまうのか。

それじゃあ、普段の俺はどんだけ“後向き”な人間だと言うのだ。

「まぁでも、私と一緒に勉強会した方が秀ちゃんも得だと思うよ？」

「えっ、何で？」

「秀ちゃん、今日夏休みの宿題貰ったでしょ？」

「ああ、そういえばそんなものも貰ったっけ……一瞬、現実逃避しようとして教室のゴミ箱に捨てそうになったけど」

「……秀ちゃん、あなたは一体どれだけ勉強というものが嫌いなのですか？」

「戦争や紛争、その中で死んで行く子供達――そんな感じの現実と同じくらいに嫌いだな」

「なるほど……秀ちゃんがどれくらい勉強というものが嫌いなのかが理解できた」

「それで、どうしてお前と一緒に勉強会した方が俺にとって得なんだ？」

「だって、解らない所は一緒に考えられるでしょ？」

「なるほど、確かに……解らない所は霧歌から写して貰えば良いし――」

「解らない所は一緒に考えられる、でしょ？」

「……ハイ、そうですね」

……霧歌は俺の言葉を遮る勢いでこちらに眼前まで顔を近付けつつ半ば俺を脅すようにそう言うのだった。

つーか、怖いよ、霧歌。

今のはマジで怖かったよ。

「それに……秀ちゃんと一緒に居られる時間も増える、し」

「あん？　今何か言った？」

「う、ううん……何でも、ないの、何でも」

「そうか……それならいいけど」

今、霧歌が何か口走ったような気がしたんだけど……空耳だったか。

「それじゃあ、早速明日から勉強会を決行しましょうか」

「明日から！？」

余りの急ピッチな予定に俺は思わず叫び声を上げてしまっていた。

俺達の通う高校は住宅街の傍にあって、無論今も俺達は住宅街の中にある帰路を使っている為――もしかしたら、家の中に居る主婦や子供達に声を聞かれてしまったかも知れない。

「あ、明日から、って、お前……幾ら何でも早過ぎるだろ」

「そうかな……私はいつもそうしてるけど？」

「あのな、エリートのお前の日常を平凡な俺に押し付けられても困るんだよ」

お前の日常はお前にとって日常であり、俺にとっては非日常だから

な。

天と地、月とスッポンくらいに違うのだ――過ごしている時間は同じでも。

「エリートって……私は別にエリートでも何でも無いよ」

「お前をエリートと呼ばずして他に何と呼べと言うんだよ。頭脳明晰で成績優秀――そんなお前がエリートという呼ばれ方を嫌うのなら今日から俺はお前の事を『エリート・ウーマン　霧歌』と呼ぶぞ」

「うーん……別にカッコイイからそれでも良いけど」

「マジで言ってんのかお前！」

しまった……霧歌のこういうネーミングセンスが壊滅している事をすっかり忘れていた。

壊滅しているというか、荒廃しているというか、崩壊しているというか、何だろう。

とにかく、霧歌のこういったセンスは酷いのだ。

それを考慮するなら、“秀ちゃん”というあだ名はまだマシなのかも知れない。

……いや、だからと言ってそのあだ名を認める訳では無いが。

「ていうか、夏休みの初日から宿題をする私を秀ちゃんは“エリート”って呼ぶけど……あっ、『エリート・ウーマン　霧歌』だっけ

？」

「言うな。そのあだ名はもう忘れろ」

何か俺が恥ずかしくなる。

くそっ……霧歌を辱める為に作り上げたあだ名でどうして俺が羞恥で悶えないといけないんだ。

何かまた揚げ足を取られているような気がする。

気のせいだろうか。

気のせいであって欲しい。

「それ自体は別段“エリート”って訳じゃないのよ？　夏休みの初日から宿題をする人くらい、沢山（たくさん）居るし」

「それって本当なのか……？　夏休みの宿題を夏休みの最終日辺りに全て片付けている俺にとってはお前達の考えは解らないな」

「ていうか、秀ちゃんって毎回夏休みの宿題は最終日まで全く手を付けない人だったんだね……まぁ、そこはあえて今はツッコまないけどさ」

「大体」と霧歌は人差し指を立てて説明口調で続ける。

「夏休みの初日から一週間以内に宿題を全て終わらせたら、それ以降は夏休みが終わるまでずーっと宿題の事なんか気にせずに遊べるんだよ？　そっちの方が得だと思わない？」

「……あのな、霧歌？」

「うん、何？」

「お前に良い事を教えてやるよ」

「良い事？」

「俺みたいな宿題を最終日まで全く手を付けない奴って言うのはな、まず、夏休みが始まった瞬間から宿題という“存在”そのものを頭の中から消してしまっているんだよ。だから、夏休みが始まって一週間以内に宿題を終わらせた方が得――なんて考えさえ、最初から俺の頭の中には入っていないという訳なのさ。解ったかい？」

「それは解ったけど……あの、そういう事を何か得意気に語られても私困るんだけど」

「でもまぁ、夏休み中は何度かお前に宿題を写させて――いや、一緒に考えさせて頂こうかな、うん」

その言葉を言い切る途中で俺は霧歌から鋭い視線で睨まれたので――ほぼ条件反射で台詞を言い直した。

「……まぁ、秀ちゃんが来てくれるのなら、もう何でも良いかなぁ」

「えっ、それじゃあ宿題を――」

「写させませんから安心して下さい」

「……」

どうやら、どうあっても霧歌は俺に宿題を写させる気は無いらしかった。

つーか、安心して下さいって。逆に安心できねーよ。

不安だ……難問にぶち当たったら、その問題で一日の貴重な時間を費やしてしまいそうな気がする。

7月27日？

「仕方ない……宿題の件はそういう事にしておくか」

「何で上から目線なのよ」

「ていうか、霧歌。ちょっと脈絡も無い話をしてもいいか？」

「脈絡も無い話という時点で何かアレだけど……まぁいいわ、どうぞ、秀ちゃん」

「夜華霧歌って名前……何か、物凄くレアな感じだよな」

「本当に脈絡も無い話ね……」

「何だよ、ちゃんと話す前に“脈絡が無い”って俺は言ったぞ」

「まぁ良いけど……そうね、『夜華霧歌』――確かに珍しい名前よね。苗字も、名前も……まぁ、そういう所を実は気に入ったりしているんだけど」

「その点については俺も同感だな。『夜華霧歌』って……何か、カッコイイ名前だよな」

「でも、珍しい名前と言えば、秀ちゃんの名前だってそうだよね？」

「えっ、そうか？」

「そうよ。真之乃秀（まのしゅう）なんて……名前はともかく、苗字は珍し過ぎる

ほどに珍しいわよ」

「うーん……そうか？　俺は今までこの苗字だったから、そこまで珍しいとも思わなかったけどな」

「ポケモンで言うなら、草むらから色違いポケモンが出て来るくらいにレアだと思うな」

「止めろ、霧歌。その例えだけは止めてくれ」

何か色々と危ない気がする。ていうか、その例えは確実に危ない。

「しかし、そうか……お前の例えが当たっているのなら、俺の名前――と言うより、苗字は中々に珍しいものだったんだな、今更ながら気付いてしまったぜ」

「この世に生を受けて17年――大きな発見だね、秀ちゃん」

「おうよ、やったぜ、霧歌」

「やっぱり、その嬉しさは色違いが草むらから出て来たくらいに嬉しいの？」

「だから、その例えは止めてくれって言ってんだろ。いや、まぁ、そのくらいに嬉しいかも知れんが」

「でも、色違いと言えば、最近やってないなぁ……黒と白が出たけど、ちょっと熱中したら全クリしちゃったし」

「……霧歌、お前さっきから発言が色々とギリギリだぞ」

「秀ちゃんは黒白どっち派？」

「お前、さり気無く俺の事も巻き込もうとしているだろ」

「良いから、答えてよ、秀ちゃん」

「俺は……白だな、ていうか、白以外には考えられないな」

まぁ、白以外には黒しかもう選択肢は無いのだけれど。

「黒って何か……ほら、伝説がゴツゴツしてるって言うかさ」

「えーっ、でもネーミングに関してはこっちの黒の方が上だと思うなー」

誰もお前にだけはネーミングの事を言われたくは無いと思う――そう思う俺だったが、決して口には出さない。

口に出せば、霧歌が怒るか、もしくは凹んでしまう事間違い無しだからだ。

「ほら、カッコ良くない？　ゼクロ――」

「わ――――――――っ！　言うな！　何言ってんだお前！　バカかお前！」

「秀ちゃんにバカだと言われる日が来るんなんて……何か心外だなぁ」

「いや、お前バカだろ！　実はバカだろ！　エリートと見せかけて実はバカなんだろ！」

「私はバカじゃないし、そもそもエリートでも無いよ、秀ちゃん。ていうか、バカって言う方がバカなんだよーだ」

そう言って霧歌は俺に舌を出してくる。

典型的な相手を挑発する行為の一つだ。

しかし――まぁ、何と言うか、霧歌がやると長髪で苛々する以前に何か萌え――ゴホン、いや、俺は何も言っていない。

別に、霧歌が俺に向かってべーっと舌を出してきたとしても、俺はその行為に対して“萌え”を感じたりはしないし、心に何かキュンと来るものを感じたりもしない。

本当だから。

いや、冗談抜きでこれは本当だから。

可愛いとは思ったけれども。

……。

「……秀ちゃん？」

「は、ハイッ？」

「今、何か私に対して邪な想像と言うか、感情を抱かなかった？」

ば、バレてる!?

何だこいつ、まさか霧歌には人の心を読む力があると言うのか！

「……そ、そんな訳ないじゃん。俺がお前に対して邪な想像とか感情を抱くなんて……なぁ？　知ってるか？　俺って、家の中では『善意の塊』って呼ばれてるんだぜ？」

「へーっ、それはまた狭い範囲の中での通り名だね、秀ちゃん、私見直しちゃった」

「そ、そうだろう？　どうせなら、もっともっと尊敬してくれても構わないぜ？」

「……秀ちゃん」

「何だ？」

「余り調子に乗ると怒って、それから……」

「何でそこで言葉を区切るの!?　なぁ、お前が怒った後にはどんな壮絶な仕打ちが俺に待ち受けているんだよ!」

聞きたくはないけど逆に気になって仕方が無い！

「あっ、気付けばもういつもの分かれ道だね」

霧歌の言う通り、気付けば俺達の前には左右に分かれたT字路があった。

ここで、いつも俺達は別れる。

霧歌は右の道に、俺は左の道に。

それぞれ――別れて、歩いて行く。

「それじゃあね、秀ちゃん」

「おう、霧歌」

「帰ってからまた、メールするからね」

「ああ、明日の打ち合わせだろ？　待ってるよ」

「うん」と霧歌は何故か嬉しそうに満面の笑みを俺に見せて。

「じゃあね、秀ちゃん」

そう言って俺に大きく手を振った霧歌は――俺に背を向けて自身の帰路を歩き始める。

「……さてと」

そして、帰路を歩いて行く霧歌を暫しの間見送った俺も自身の帰路をゆったりとマイペースに歩き始める。

どうせ、明日からは夏休みだ。

実質、終業式が終わった今日から既に夏休みは始まっていると言っ

ても良い。

それ以前に急ぐ用事も無いし――時間もある。

だから、ゆっくりと家に帰ろうと思った矢先だった。

「……ん？」

俺は地面に落ちていた“それ”を蹴飛ばしてしまった。

俺に蹴飛ばされた“それ”はアスファルトの上を滑空し――それから、ガチャンという金属音を立てて道路の上に落下した。

7月27日？

「何だ、あれは……？」

俺はそう疑問の声を漏らしながらも、その蹴飛ばしてしまった“それ”に歩み寄り、“それ”を拾い上げる。

俺が蹴飛ばしてしまったもの――ペンのような形をした白い物体だった。

いや、ペンのような形をしているとは言っても実際にはペンではないのだが。

ペンではなく――“それ”は何かの欠片に見えた。

ペンに近い形状をした何かの、欠片。

“それ”を俺は拾い上げたのだ。

「宝石……じゃあ、ない、よな？」

誰にでも無くそう確認を取る俺。

無論、俺は先ほど霧歌と別れたばかりであり、周囲には誰も居ない為、その問いに対する回答は幾ら待っても帰って来ない。

そして、俺がそんな問いかけをしてしまった理由は――ただ一つ。

その白い何かの欠片がキラキラと――太陽の光に反射してまるで宝

石のように煌びやかに光っていたからだ。

いや、ていうか、最早これは宝石なのではないだろうか？

「……」

えっ、どうしよう。

この場合……交番に届けた方が、いいのか？

交番に届けた場合、その落とし物を拾ってくれた人には何割かお礼が貰える制度があったような気がする。

いや、お礼が欲しいが為に交番に届けるんじゃないぞ？

ただ純粋に、純粋に落とし主の事を思っての行動だからな？

勘違いしないように。

「……」

――そして。

周囲の景色と、たった今拾い上げた宝石のような白い何かの欠片を何度も――何度も、何度も見比べて。

俺は。

◆

◆

◆

突然だが、ここで余談を一つしておく事にしよう。

余談と言うか雑談だ。

俺の家は二階建ての一軒家である。

そして、俺の部屋はその一軒家の二階にあった。

俺の部屋にあるベランダに出る為の窓からは住宅街の屋根の海が一望できて――それはそれで俺はその景色を少し気に入っていたりする。

時が流れて、夕刻になれば外から暖かな茜色の光が差し込んで来て――外に広がる景色は一層幻想的なものへと変化する。

無論、俺の部屋にも窓からその光が差し込んでくる。

今は夏なので少しばかり暑い気もするが――それを気にしないほどに、俺は夕暮れ時の太陽が放つ茜色の光が好きだった。

――そして。

現在、時は夕刻。

今日もベランダに通じる大窓から太陽の光が部屋の中に差し込んでいる。

壁、床、ベッド、パソコン――色々なものが茜色の光に染まってい

る中で。

俺の勉強机の上に置かれたその宝石のような白い何かの欠片もキラキラと神々しい光を放っていた。

「……」

……ああ、そうだよ。

結局、持ち帰って来てしまったのだ。

何とか夕暮れ時の茜色の光だとか、その辺りの素晴らしい風景で誤魔化そうかと思ったのだが――どうも、上手く行かなかったようだ。

幾ら現実逃避をしようとして目を逸らそうにも、実際に俺の勉強机の上には先ほど持ち帰った白い何かの欠片が置かれているのだから。

「ヤバい……何かヤバい代物だったらどうしよう……！」

俺はまるで土下座するかの如くベッドの上で小さく蹲(うずくま)りながら恐怖に慄(おのの)く。

「ヤバい……何か、マフィアとかヤクザとか、その辺りの人達の所有物だったらどうしよう……！」

その可能性も決して否めない訳では無い。

あんなにキラキラと輝く美しいものだ――そういう裏の人間達の所有物だったとしたら。

俺の人生はもう、終わりだ。

「ヤバい……質屋で高値で売れてしまったらどうしよう、１００万とか」

そもそも、質屋とはそういう金額も出してくれるのだろうか。

俺は実際行った事無いから解らないけれど……ドラマとか、その辺の知識からすればそんな値段を出した所は一度として拝見した事が無い。

「ヤバい……宝石店で物凄く高値で売れてしまったらどうしよう、１億円とか」

もう、あれだ、１億円とかで売れてしまった暁には俺はもう高校を止めて、大学にも行かなくて、勉強せずとも人生を満喫――。

……。

「って、俺途中からこの謎の物体を売る前提で話を進めてるじゃん！　恐怖に慄いている俺は一体全体どこに行ってしまったんだよ！」

そんな感じで俺はベッドから勢い良く起き上がると全力でノリツッコミをした。

自分でボケて、自分でツッコんで、一つだけ解った大切な事が有る。

――それは。

「……空しくなるだけだったな」

空しくなるだけだった。

悲しくなるだけだった。

心に一生モノの傷が入るだけだった。

もう二度と一人ボケ、ノリツッコミはしないでおこう――俺はそう心に固く誓った。

7月27日？

「ってオイ、違うだろう」

言っている傍からノリツッコミをしてしまっている俺であるが、そこは華麗にスルーして欲しい。

問題なのは、この謎の物体の正体だ。

本当にこれは一体全体何なのか？

俺の予想通り、これは宝石の類なのか？

宝石の類なら、これは質屋や宝石店で売れるのだろうか――って違う、そうじゃなくて。

「……何なんだろうな、これ」

宝石――と、一概に思おうと思えば、俺はその物体を宝石と認識する事が出来ただろう。

――しかし。

何かが、違う気がしたのだ。

どうしてそう思ったのかは解らない――どうしてそう言い切れたのか、その自信がどこから来たものかも解らない。

――ただ。

その白い何かの欠片は――“宝石”ではない。

何故か、俺はそう思う事が出来た。

誰かにこれが何なのかと問われれば、正体は解らなくとも、とりあえず“宝石ではない”――と俺は答える事が出来ただろう。

――そして。

ピンポーン、と。

不意に家のインターホンが鳴り響いたのだ。

「あっ、ハーイ」

俺はそのインターホンに――つい、いつものように応対してしまった。

どうして、もう少し細かく考えなかったのか。

この謎の物体を手に入れた直後にこの家を訪ねてくる者であるのにも関わらず。

――しかし。

インターホンが鳴るという事はつまり、この家に客人が訪れた事。

インターホンを“そういう風”に認識してしまっている俺は殆ど条件反射で立ち上がり、ベッドから下りて、部屋を出ると、一階へと

足を運んだ。

それから、俺は玄関に辿り着くと、扉の鍵を解除して。

「ハーイ、どちら様～？」

そう言いながら――俺は玄関扉を押し開ける。

玄関に射し込んでくる茜色の光。

扉の向こう側――我が真之乃家の玄関には変わった客人――もとい、少女の姿があった。

背丈は俺と同じくらいで、紅のライダースーツのようなぴっちりとしたものを身に纏っていた。

肩や膝、そして手首に装着しているのは何かの防具だろうか――何か見慣れない機械のようなものにも見えるが。

――そして。

その格好こそ珍しかったが――俺の目を引いたのはその少女の“髪の色”。

少女の髪の色は金色、だった。

真っ直ぐに切り揃えられた前髪、後ろ髪は二つに分けて結ばれている――いわゆる、ツインテールというヤツだろう。

「……」

俺は目の前に現れたその少女に言葉を無くす。

それから、対する少女は俺の姿を見てニッと笑みを見せると。

こう言った。

「……あなた、真之乃秀よね――」

その少女の言葉は最後まで俺の耳には届かなかった。

何故なら、俺が玄関扉を勢い良く閉めたからだ。

それならば、何故扉を閉めたのか――そう問われてみるとこれと言った理由は浮かんで来ない。

強いて理由を挙げるとするなら――そうだな、本能的なもの？

だって、よく考えてみろよ。

突然目の前に現れた不思議な雰囲気を漂わせる少女がどういう訳か俺の名前を知っているんだぜ？

もう本能的に閉め出すしかないだろうよ。

嫌な予感しかしねーよ。

「……さて、と……今日の晩御飯は何にするかなぁー」

「ってちょっと！　何で閉め出すのよ！　意味解んない！」

俺の後ろで扉が開く音が聞こえたと思えば、それとほぼ同時に先ほどの金髪の少女のものと思われる怒声が飛んできた。

俺は憂鬱な気分で後ろを振り返る。

やはり、先ほどの金髪の少女は有ろう事か家の玄関扉を勝手に開けて玄関に足を踏み入れていた。

「オイコラ、お前」

「お前って呼ばないで！　ちゃんと名前で呼んでよ！」

「いや、俺お前の名前知らないし」

「フンッ！　私だってあなたなんかに教える名前なんか持ち合わせていないわよ！」

「お前、言葉が支離滅裂になってるぞ！？」

俺に名前を呼ばたいのか、それとも呼ばせたくないのか、どっちなんだよ。

「いや、それ以前に、何でお前人の家に勝手に入って来てるんだ。お前はさっき門前払いをしたはずだろうが」

「ていうか、それ以前にどうして私の門前払いしたのか、理由を聞かせて貰いましょうか！」

「怪しかったから、以上」

「理由が簡易過ぎる！　ていうか、一目見ただけで私が怪しい人物なのかどうか見抜ける訳がないでしょ！　常識的に考えて！」

「解るよ、解るに決まってんだろ。突然現れた見知らぬ金髪の女性が俺の名前を何故か知っていた、これだけでお前は十分に、いや、十二分に怪しい奴だよ」

「解らないじゃない！　ただ単にあなたの事を好き好んで日々ストーキングしている可愛い女の子かもしれないじゃない！」

「ただのストーカーじゃねーか！」

「誰がストーカーよ！」

「いや、お前が言ったんだろ！？」

何だよ、こいつ……超遣り辛いんだが。

「それで、お前の用件は何だよ。何の為にここに来たんだ。まさかガチでストーカーじゃないだろうな」

「自惚（うぬぼ）れてんじゃないわよ。あなた、まさか自分がストーカーされるようなモテモテな人だって誤認しているんじゃないでしょうね」

「……」

明らかに罵られた訳だが――何だろう。

返す言葉が見付からなかった。

というより、何だか、穴があったら入りたい気分に途轍(とてつ)もなく襲われた。

「……最後に確認を取るけど、アンタが真之乃秀――で、良いのよね？」

「ああ、そうだけど……お前は？」

「私の名前は――ウリアール＝ブレイザー。あなたに会いに来たの」

「俺に会いに……？　何だ、告白でもしに来たのか？」

「あなた、次に話を逸らしたら殺してやるからね」

「……」

何か、物凄い形相で凄まじい脅し文句を言われた。

冗談だったのに……。

「……俺に会いに来たって、用件は何だよ」

「……あなたを“護る”為よ、真之乃秀」

「俺を護る――って、一体何から？」

「私達の、敵から」

「俺達の……敵？」

「ええ、そう」と金髪の少女――ウリアール＝ブレイザーは頷いて。

俺に対してこんなトンデモ発言を放ったのだった。

「私はあなたを護る為に未来からやってきた『上級魔術師（トップソーサレス）』――魔法少女よ」

上級魔術師

時計の秒針が時を刻む音が一定のリズムで部屋に響く。

俺は腕組みをした状態で部屋の机の椅子に堂々とした姿で座っていた。

「……もうそろそろか」

俺は部屋の時計を見上げて呟く。

あと１０秒、あと7秒、あと3秒、あと1秒――。

「よしっ、完成だ！」

午後7時３８分――俺は机の上のカップラーメンの蓋(ふた)を勢い良く開けた。

その瞬間、湯気と共に部屋をカレーの香ばしい匂いが包み込む。

ちなみに、例のカップラーメンのシリーズの中で俺が一番好きなのはカレーだ。

まぁ、だからこうして家の中にある数あるカップラーメンの中からカレーを選んでいるのだが。

「相変わらず美味そうだな……よし、いただきまーす」

俺は礼儀作法の一つである食事前の挨拶をすると夕飯であるカップ

ラーメンの容器を手に取る。
そして、箸で口にカレーに塗れた麺を加えるとそれを一気に啜って――。
すぐ左隣でベランダに通じている大窓が開く音が聞こえた。
「あら、良い匂いね」
「ブ――――――――ッ！」
俺は口に含んでいた麺をスープごと全て吹き出した。
「うわっ、ちょっと何やってんのよ！　汚いわね！」
「ゲホッ、ゲホッゲホッ……だ、誰のせいだと、思って、いるんだよ……！」
ていうか、それ以前に。
「ていうか……お前、どうやってベランダから入って来たんだ」
「さぁね。詳しい理屈は話さないけど、私が魔法少女だからじゃない？」
「まだ言ってんのかよ、お前それ……」
つい先ほども、俺はこの少女――ウリアール＝ブレイザーからそんなトンデモ発言を聞いていた。

有ろう事か、この少女は何の躊躇(ちゅうちょ)も無く自分の事を“未来からやってきた魔法少女”だと抜かしやがったのだ。

その時、俺はこう思った。

ああ、これは物凄く痛い奴が来たな、と。

だから、俺はこいつをとりあえずもう一度外に閉め出して、ちゃんと玄関に施錠して、夕飯を食べるべく部屋に戻って来ていたのだが――。

「ていうか、お前って言わないでよ、ちゃんと名前は教えたでしょ？」

「えーっと……ウリアーロ＝イレイザーだっけ？」

「ウリアール＝ブレイザー！　人の名前を間違えるなんてどういう事なのよ、あなた！」

「いや、だって、お前みたいな名前なんか今まで覚えた事も無いし……」

ていうか、それ以前に外国人の友人を持った事すら無い。

こいつを外国人の“友人”だと呼んでいいのかは――まだ、解らないけれど。

「何か、ややこしいんだよな、外国人の名前って……カタカナだし、パッとしないって言うか」

「あなた、今世界中の名前がカタカナ表記の人に喧嘩を売ったからね？」

「ていうか、実際ウリアーロ＝イレイザーの方がカッコ良くね？もういいだろ、ウリアーロ＝イレイザーで。いっその事、それに改名しろよ、ウリアーロ＝イレイザーに」

「何であなたの意見で勝手に私の名前を改名しないといけないのよこの屑が」

「屑？　お前今俺の事を屑って言ったか！」

「いいえ、言っていないわ、ゴミ屑の聞き間違いじゃない？」

「もっと酷くなってんじゃねーか！」

「ていうか、それを言うならあなたの名前だってややこしいじゃないの。真之乃秀……ああもう、何で“の”が苗字にそれも連結して二つも入っているのよ、殺すわよ」

「いや、先祖代々受け継がれてきた苗字に苛立ちを覚えて俺を殺そうとするな。それは色々と間違っているというか、根本的に何かが間違ってるから」

そもそも、殺人予告をする事自体が間違っているのだが。

「真之乃秀、真之乃秀、真之乃秀……ああもう、やっぱり言い辛いわ。ねぇ、苗字の“の”を1個少なくしてよ」

「知ってるか？　苗字と言うものはそんなに簡単に変えられるもの

じゃねーんだよ」

「良いじゃない、真乃秀の方が私的には結構カッコイイと思うわよ？」

「えっ、マジで？」

自分の苗字を否定される事は少し気に食わないけれど、何だろう、それでもカッコイイと言われる事は嬉しいと言うか、やぶさかではないと言うか、何と言うか。

「まぁ、カッコイイというのは嘘なんだけど」

「嘘だったのかよ！」

畜生！　人の心を弄（もてあそ）びやがって！

「鬼！　悪魔！　鬼畜！　人外！」

「ちょっ……な、何なのよ、急に！」

「今が青春の男子高校生の心を弄んだ罪だ！　この悪魔！」

「私は弄んでなんかいないわ。勝手に私に弄ばれたあなたが悪いのよ」

「自分の責任を被害者に押し付けるなんて最低だぞお前！」

「ていうか、もうあれね。真之乃なんて呼び難いから……あなたの事はこれから秀って呼ばせて貰うから」

「……」

さり気無く俺の事を呼び捨てにする事を決定しやがった……。

「さて、ところで秀」

「何だ」

「お腹が空いたわ。私にもそれ作ってよ」

「外で生ゴミでも漁(あさ)ってろ――って痛ってえ！」

脇腹に蹴りを食らった。

加害者の方は言うまでも無く、あいつだ。

上級魔術師？

「何しやがんだ！」

「何で私が生ゴミなんか漁らなきゃいけないのよ！　むしろ、秀がそれを私に譲渡して秀が生ゴミを漁りに行けば良いじゃないの！」

「お断りだね！　断固としてお断りだね！　せめてこれがシーフードだったらお前にやったかも知れんが、残念ながらこれはカレーだ！　カレーは断固として譲渡しないと俺はこの世に生を受けたその日に神に誓ったんだよ！」

「何よ、そのどうでもいい誓いは！」

「どうでもいいって言うな！　どうでもいいって！　いや、俺も半ばどうでもいいって思っているけれど、他人からどうでもいいって言われると何かイラッと来る！」

「秀もどうでもいいって思ってるんじゃないのよ！」

そんな時だった。

ぐうううううう……。

何か――音が聞こえて来た。

正確は、誰かの腹が鳴る音が。

無論、自分の腹が鳴った事くらい解る為、今の音は俺の腹のもので

はない。

――と、言う事は。

「……！」

――ていうか、そんな考えを巡らす前にウリアール＝ブレイザーが自分から赤面して自らの腹を両腕で抱き抱えるように隠していたので今の腹の音の犯人は一目瞭然だった。

「……はぁ」

「ちょっ、何ため息ついてるのよ！　い、今のはっ、そのっ、別にお腹が空いた訳じゃなくて、そんな訳じゃ、なくて、その……！」

「……解ったよ」

そう言って俺は立ち上がると部屋の扉を開ける。

「ちょっと、何が解って――ていうか、どこに行くつもりなのよ」

「……シーフード」

「……えっ？」

「シーフード、今から下で作って来るから。その間に、俺のカレー盗み食いするんじゃねーぞ」

俺はそれだけを言い残して部屋の扉を閉めようとして――。

「しゅ、秀！」

不意に部屋の中から聞こえて来たウリアール＝ブレイザーの声に手を止めた。

俺は部屋の中を振り返る。

そこには、先ほどの羞恥による赤面とは明らかに違う――頬を若干赤らめたウリアール＝ブレイザーの姿があって。

「……そ、その」

そして、彼女はボソボソと呟くような声でこう言うのだった。

「あ……ありがと、ね？」

「……どういたしまして」

――そいつのお礼を初めて聞けたのが嬉しかったのだろうか。

そう言って、扉を閉める俺の顔にはほんの少しの笑みが浮かんでいた。

◆◆◆

シーフードのカップラーメンを作った俺はついでにグラスにお茶も注いでトレイにそれらを乗せて部屋まで運んだ。

部屋の扉を開けると同時に、中でウリアール＝ブレイザーが立ち上がるのが見えた。

そこまで腹が減っているという事なのだろうか。

まぁ……あれほど大音量で腹の虫が鳴くのを聞いてしまえばそんな事は一目瞭然、と言うよりも、一耳瞭然なのだろうけれど。

「ほらよ、作って来てやったぞ、有り難く食べろ」

「あ、ありがと……秀」

「どういたしまして」

俺は適当に彼女に言葉を返しながら机の上に運んで来たトレイを置く。

そこで、俺はとある一つの小さな問題に気付いた。

しまった……彼女にどこで食事をさせるべきか。

「……」

少し考えた後、俺は先ほどまで食べていたカレーのカップラーメンの容器と箸を持ってベッドの上に腰を下ろした。

「えっ、そこで食べないの？」

「明らかに不法侵入してきているお前に席を譲るのも何かアレだけど……それ以前に、お前は女子だからな。男尊女卑ならぬ、女尊男

卑じゃないが、こういう時は女子を優先させるべきだろ」

さり気無く、今日霧歌から学んだ言葉を使っている俺なのであった。

大丈夫、こいつは霧歌の存在までは知らないだろうから、俺が霧歌から学んだ言葉をパクっている事には気付かないはずだ。

「そ、そっか……ふーん」

ウリアール＝ブレイザーの方はまた若干頬を赤らめて――俺に背を向けて、代わりに勉強机と向き合った。

「い、意外と……良い所あるのね、秀って」

「意外で悪かったな」

「……ね、ねぇ」

「何だよ、早く食べないとラーメン伸びるぞ」

「秀は……どうして、私の事を名前で呼んでくれないの？」

「さっきも言ったけど、お前が不法侵入者である事も理由の一つだし、お前には失礼かも知れないが……アレだよ、長いんだよな、お前の名前」

「それなら……ウリアで良いわ」

「えっ？」

「う、ウリア……ウリアで、いいから」

「名前で、呼んでよ……」とウリアール＝ブレイザーはこちらに背を向けたままそう頼み込んで来た。

「……」

そして、俺はと言えば、そんな彼女の背中を見上げて――まぁ、特にその頼みに断る理由も見付からなかったので。

「別に良いけど……それじゃあ、ウリアって、今度からそう呼べばいいんだな？」

「……呼んで、くれるの？」

「お前が呼べって言うんだ。仕方ないだろ」

すると、今度はウリアール＝ブレイザー、もとい、ウリアは嬉しそうな満面の笑みを浮かべてこちらを振り返って。

「秀って、やっぱり意外と良い所あるのね！」

――そう、言った。

「だから、“意外と”は余計だって言ってるだろ。お前は――」

「ウ・リ・ア！」

「――ウリアは、素直に人を褒めるという事を知らねーのか」

「知らない」

「一言であっさりと答えてんじゃねえ」

「ていうか、秀。何かトレイの上にお箸とフォークが乗ってるんだけど……何で？」

「いや、お前見た目外国人っぽかったから、念には念を入れてフォークも持って来てみた」

「フンッ、残念だったわね。私にはフォークなんて要らないのよ」

「そうか。それじゃあ、お前は箸を使えるという事なんだな？」

「使えないわ」

「使えないのかよ！　何なんだよそのオチは！」

「という訳で、まぁ、フォークを持って来てくれたのには素直に感謝するわ。ありがとね、秀」

「最初から箸は使えないって言えばいいのに……」

ブツブツとそう言いながら俺はすっかり伸び切ってしまっているカレーのスープに浸かった麺を箸で持ち上げる。

「……んっ！　これ美味しい！　ねぇ、これ美味しいわよ！　秀、ねぇ！」

「解った、解ったから。美味しいのは解ったから黙って食え」

「えーっと、これ“しーふーどー”って、言うのよね？　美味しい

わねー、これ。明日もこれを私に譲渡する事を要求するわ、秀」

「要求するわ、じゃねえ。お前――」

「だから、ウーリーア！」

「――ウリア、お前は一体いつまでこの家に居座るつもりなんだよ」

「決まってるでしょ？　あなたを敵から完全に護り切るまでずーっとよ」

「だから敵って何なんだよ……」

訳が解らん。

何言ってんだこいつは。

あれだろうか……いわゆる、“設定”というヤツなのだろうか。中二病に掛かっている奴が良く言うと言われている。

まぁ、俺も中二病に掛かっている奴と面と向かって出会った訳では無いから良く知らないんだけど。

そして、こいつが――ウリアが、中二病だという可能性も有り得る訳だし。

ひょっとしたら、こいつが初めて面と向かって出会う中二病に掛かっている奴になるかも知れないのかぁ……。

……いや、別に嬉しくとも何ともないけれど。

「……それで？　お前は一体どんな脅威から俺の身を護ってくれるんだ？」

「『混合機関（デュアルシステム）　科学発展側（サイエンスサイド）』」

「いや、そんな急に専門用語を使われても一寸たりとも理解が及ばないんだが」

「まぁ、秀みたいな頭の中に脳味噌が入っているかどうかも怪しい人の為に簡単に言わせて貰うと」

「簡易的な説明を行ってくれるのは助かるが、どう考えてもその前に一言余計な文章が添付されているのは気のせいか？」

「魔術と科学の二つの文明を合わせた後に、科学側へと更に発展を遂げた機関って事よ」

「……なぁ、それって簡易的な説明なんだよな？」

「えっ……まさか解らないの？　今の説明で？」

「ガチで引いてんじゃねーよ！　ていうか、今の説明でお前の話を理解できる奴が居たらここに連れて来て欲しいわ！」

「はぁ……これは、私が来た世界の事から話す必要がありそうね」

「ああ、是非ともそうしてくれ」

とは言うものの、俺はウリアの話を信じるつもりは毛頭も無いのだ

が。

だって、どうせ全てが“設定”だろ？

どんなに巧みで壮大で細かな設定を今から語るのか知らないが――

まぁ、何にしても、俺はこいつの話を信じるつもりは無い。

何故なら――有り得ないからだ。

未来だとか、魔術だとか。

そんなものはこの世に存在しないはずのものだからだ。

人間は実際に目の当たりにしたものしか心の底から信じる事は出来ない。

幽霊とか、ＵＭＡとか、ＵＦＯとか――それらも本当に信じているとか言う人は居るけれど。

その人でさえもきっとそれらの存在を心の底から認められている訳では無いのだ。

何故なら――実際に目の当たりにした事が無いから。

だから、俺もウリアが言う未来や魔術の事は一切信じない。

薄情と思われるかもしれないが――人間とはそういうものである。

事件を起こした際に、物的証拠で有罪か無罪かが決まる。

きっと、それと同じ事だろうから。

だから、俺は“そういう志”の下に――ウリアの話をラーメンを啜りながら聞き始めた。

「――私はね？　２０５６年からやってきたの」

「２０５６年って……えっと、今が２０１１年だから、４５年後の世界か」

「そうね、４５年後の世界」

「４５年も――半世紀近く経つと、やっぱり世界も色々と変わっているのか？」

「ええ、変わってしまっているわよ、色々と」

「例えば……どんな所が？」

「世界そのものが変わってしまったわ。まず、２０２３年に日本の首都圏で大地震が起こったの」

そう言えば――そんな話を俺は聞いた事がある。

今から３０年以内に首都圏で大地震が起きる確率が――えっと、何パーセントだっけ？

とにかく、ほぼ１００パーセントの確率で起きる、らしい。

これはあくまで予想であり、推測であり、噂なのだが。

「その大地震で首都圏をやられた日本は土地的にも国家的にも壊滅を余儀なくされたわ。そして、日本は藁(わら)をも縋(すが)る思いで外国に――アメリカに助けを求めた」

「……その結果は？」

「まぁ、アメリカも鬼じゃないからね。日本が伸ばしてきた手をちゃんと握り返してくれたわ。えっと、今のアメリカの大統領は……？」

「オバマだよ、バラク・オバマ」

「ああ、そうそう、そのオバマさんは本当に良い人よね」

どうでもいいけどオバマさんって。

お前はアメリカ大統領の友達か何かなのか。

まぁ、俺も呼び捨てにしているけれど。

「……って事は、２０２３年――だったか？　その今から１２年後の未来には、まだオバマは大統領としてご健在なのか」

「ええ、そうね。その年――２０２３年にはオバマさんは命を落としてしまうんだけど」

「えっ……何だよ、まさか暗殺とか？」

俺の問いかけに――ウリアは無言で首を左右に振って。

「――ハリケーンよ」

と、答えた。

「ワシントンがかつてない規模の大型ハリケーンに飲み込まれたの。ワシントンにはホワイトハウスがあるから――いや、“あったから”、オバマさんはそれに飲み込まれて死亡したわ」

「マジか……それは、その、大変だな」

「他人事みたいに言っているけれど、そのハリケーンの被害は秀達――日本人にも襲い掛かったのよ」

「えっ、どうしてだよ」

「その大型ハリケーンはね、アメリカ国土の殆どを横断して回ったのよ……だから、首都圏の大地震で一時的に避難していた日本人もそのハリケーンに襲われて殆どの人が亡くなったわ」

「そして」とウリアは真剣な表情のまま続ける。

「事態はハリケーンだけじゃ終わらなかった――今度は地球上のあらゆる国で地震や竜巻、様々な自然災害が起こったのよ」

「……それじゃあ、世界は」

「だから言ったでしょう？　世界そのものが変わってしまったって。自然災害は２０２３年から２０２５年の２年間に渡って世界中で連

続的に発生し続けたわ」

「……」

いつの間にか――俺はウリアの語りに思わずラーメンを食べる手も止めて真剣に聞き入っていた。

どうしてだろう。

ウリアの語りは全て――“設定”のはずなのに。

「それから、２０２６年――世界の人口も現在の3分の1くらいまで減ってしまったそんな世界で、世界中のあらゆる国々が同盟を結ぶの」

皆で生き残る為の同盟――とウリアは言う。

「自然災害によって、世界は人だけでは無く資源や食糧も失ってしまっていたから……まぁ、同盟は妥当な手段だと“思われていた”わ」

「……待て、“思われていた”？」

「そう……同盟を組んだ事が間違いだったの。結び合った契約は意外と簡単に解けてしまうものなのよ」

「それは……一体、どういう……？」

「今の戦争や紛争が行われている地域の事を考えればすぐに解るはずよ」

「……ああ」

「そういう事か」と俺は残念そうに呟く。

何となく解った気がした。

幾つもの自然災害が引っ切り無しに襲い掛かって来ていた非日常を切り抜けた後に。

そんな恐怖の日々を過ごした後に。

人々の精神が――まともなはずがない。

自然災害によって愛する人を失った人も居ただろう。

自然災害によってロクに食べ物や飲み物を供給できない日々を過ごした人も居ただろう。

言うなれば――戦争に負けた後の国、だろうか。

そんな荒廃して荒れ果てている国の中で真っ先に起こる事などたかが知れている。

「……紛争が、起こったんだな？」

俺の問いかけに――ウリアは無言で一度頷いた。

「幾ら同盟を結んだ所で、世界中の資源や食糧の数は決まっている――だから、人々は数少ないそれらを求めて、紛争を起こし、それ

はやがて戦争へと繋がり、同盟を組んだはずの世界はやがて2つに分裂したわ」

「そんな時よ」とウリアは俺を真っ直ぐに見つめてこう言った。

「あなたが――秀が、この世に本当の奇跡を齎（もたら）したのは」

「……俺が、世界に、奇跡を？」

「秀は――２０３０年に、かつて地球上で栄えていた文明の一つ――『魔術』を復活させたの」

「俺が魔術を……復活？　そんな馬鹿な、俺は単なる平凡な一人の人間だぞ？　ていうか、２０３０年まで自然災害から生き抜いている事自体も奇跡なのに……そんな俺が、魔術を復活させた、なんて、有り得る訳が無い」

「……ねぇ、秀？」

そして――ウリアが次に放った言葉に俺は驚愕して目を見開く事になる。

「今日――“白い宝石のような何かの欠片”を拾わなかった？」

「……！」

それを――“その事”を聞かれた瞬間、俺は余りに驚き過ぎて一瞬何の言葉も出せなかった。

「……ウリア、お前どうしてその事を……知って……！」

「……やっぱり、拾ったのね」

「それは鍵よ」とウリアは言った。

「いや、正確には鍵ではないのだけれど――実際は、その欠片は鍵のような役割を果たしたわ。秀の持っているその欠片がかつて栄えていた魔術の文明と共鳴したの」

「それで……この世に再び、魔術の文明が復活、したのか？」

「そう。秀の手によって魔術は完全にこの世に復活した。火・水・風・雷――様々な力を無限に創造する事が出来るその文明を世界に復活させた事で、戦争は治まるかと思われていたの」

「……でも、違ったんだな」

「……さっき、同盟を結んでいた世界が２つに分裂した――って、言ったわよね？」

「ああ」

「世界中で復活した魔術的な文明はすぐさまその分裂した2つの世界のそれぞれで活用されたの――“兵器”として」

「それで、戦争が更に激化したのか」

「そういう事よ。そして、その分裂した2つの世界――ううん、2つのグループにはそれぞれ名前が付いたわ。科学と魔術を融合させて、更に魔術的に発展したグループ――『混合機関（デュアルシステム）　魔術発展側（マジックサイド）』、そして、こっちはさっきも言ったけれど、科学の魔術を融合させて、更に科学的に発展したグループ――『混合機関　科学発展側』」

「それで、お前の話によると俺は後者の――その、科学側に命を狙われているみたいだけど。どうして、俺はそいつらに命を狙われているんだ？」

「元々、グループ同士の戦争で優勢だったのはその科学側だったのよ。科学的にもそっちのグループの方が技術力は上だったから。――でも、そんな時に」

「俺が魔術を復活させてしまった――って訳か」

「そういう事に……なる、のかな」

「という事は……お前は、その魔術側の人間、という事になるのか」

しかし、俺のその問いかけにウリアは意外にも首を横に振った。

「えっ……それじゃあ、お前は科学側の人間なのか？」

「ううん、それも違う……ていうか、まぁ、私はどちらかと言えば魔術側の人間だけど、私はどちら側の意思でも動いていないの」

「私を動かしているのは」とウリアは俺を微笑と共に見つめて言った。

「あなた――２０５６年の秀よ」

「……未来の、俺？」

「私は、未来の秀に頼まれて、２０５６年から過去の秀――つまり、現代のあなたを護る為に過去にやってきたの」

「……そう、だったのか」

俺はそう呟くと既にもう完璧に伸び切ってしまって――食べられない事は無いのだが、色々と手遅れなカレーのカップラーメンを床に置くとベッドから立ち上がる。

そして、机の引き出しの中から“それ”を――白い宝石のような何かの欠片を取り出した。

「これが……遠い未来、魔術を復活させる鍵になるのか」

「そうらしいわね。私は初めて見たけれど」

「えっ？」

俺はそのウリアの発言に少し疑問を持った。

「初めて見たって……未来の俺はウリアにこれを見せなかったのか？」

「見せる以前に……私と未来の秀があったのは、ほんの一瞬だけだから」

「……お前、よくそれで俺の為に過去までやって来れたよな」

「わ、私にも色々あるのよ、色々ね！」

どんな色々があればそこまで知らない赤の他人の為にこんな過去までやって来れると言うんだ。

ていうか、もしもそれが本当なら、意外とこいつ心が寛容なのかも知れなかった。

意外と、だが。

ここ重要ね。

「……ていうか、少し皮肉な話をしてもいいか、ウリア」

「……皮肉な話？」

「ちょっと考えたんだけど……今のお前の話が本当ならさ」

「それって」と俺は自嘲めいた笑みと共にその欠片を見下ろして言う。

「ここで俺とこの欠片がこの世から消えれば――そんな残酷な未来は訪れないんじゃないか？」

「……はぁ」

ため息をつかれた。

ウリアから呆れられたようにため息をつかれた。

あれ、どうしてだろう。今の俺結構真剣な雰囲気と口調で言ったつもりだったのに。

「オイ、ため息をつくとは一体全体どういう事だ」

「やっぱり……秀は秀、よね」

「あ？」

「未来の――２０５６年の秀が言っていたのよ。２０１１年の俺は自己犠牲的な事を言うかも知れないけど見捨てないでやってくれ、ってね」

「……」

……流石は俺。

当たり前だが、４５年経ってもどうやら俺は俺のようだった。

俺の事をよく熟知していらっしゃる。

まぁ、他でも無い俺自身の事だから、それは当たり前なのだろうけど。

上級魔術師？

「……そして、未来の秀からは、もう一つだけ伝言があるの」

「……何だ？」

「世界を救って欲しい、だって」

「……」

「この世界の俺には無理だったけど、４５年前の俺なら――世界を救い、未来を変えられるはずだって」

「……」

そのウリアの言葉に――正確には、未来の俺からの伝言に俺は再度嘲笑する。

オイオイオイオイオイオイ。

未来の俺……何を言い出すかと思えば。

お前が俺なら、俺の事をちゃんと解っているはずだろう？

俺は単なる平凡な一般人だ。

そこら辺を適当に歩ければ幾らでも居るような。

映画やドラマで映像の端から端を歩いて消えて行くエキストラみた

いな。

俺の人生においての立ち位置は――そんなものなんだよ。

それなのに――何だって？

世界を救え、だって？

馬鹿げている――ウリアの作り話も、全てが馬鹿げている。

ていうか、それ以前にウリアが今語った話は全て出鱈目（でたらめ）なのだ。

出鱈目で、単なる設定で、妄想で、想像で、幻想で――作り話。

平たく言えば、嘘だ。

そんな作り話に登場した未来の俺からの伝言に頭を悩ませるなんて――。

それこそ、馬鹿げているではないか。

「……今話した全ての事を、今ここで信じてくれとは言わないわ」

「でもね、秀」とウリアは言う。

「あなたには、どうせこの先、嫌でも今の話を信じなければならなくなる時が来るから……事前に、私がここにやってきた事情だけでも話しておきたかったの」

「ああ……お気遣いありがとな、ウリア。……でも」

……でも。

どんなに気を遣われたって、どんな事情を聞いていたって。

俺は……俺には。

「俺には……世界を救うなんて、未来を変えるなんて、そんな大それた役目を担うだけの器は無いぜ？　精々、受け止められるのは今の自分の人生くらいだからな。世界がどうとか、未来がどうとか言う前に、俺は今生きている人生を生き抜くだけでも精一杯なんだから」

「……そうね、そうかもしれない」

「けれど」と。

ウリアは椅子から立ち上がると――俺の前に移動してきて笑みを見せる。

その笑みは理屈も無く心が何だか落ち着くような――そんな笑顔で。

「だからこそ……私が、秀が受け止めきれないものを代わりに受け止める為に、未来からやってきたのよ？」

「……ウリア――」

俺がウリアの名前を呟いた時だった。

不意に、ウリアが何かの気配を察知したように急に目の色を変えて

ベランダに通じる大窓を――その向こう側に広がる景色を振り返った。

外にはいつの間にか夜の帳（とばり）が下りていた。

まぁ、夕飯を食べ始めた時点で既に時刻は午後8時を回っていたから――それは当然の事だろう。

「……オイ、ウリア、どうかしたのか？」

「……秀」

「ちょっと来て」と俺はウリアから手を掴まれると引っ張られる形でベランダへと強制的に出させられた。

「オイ……本当にどうしたんだよ」

俺はウリアに問いかける――しかし、ウリアは何も無い夜空を頻（しき）りに見渡していて俺の問いかけには何も答えない。

本当に何があったんだ……。

俺がうんざりした心境と共に心の内でそんな事を呟いた時だった。

不意に――本当に何の前触れも、音も、相図も無く。

俺の手の中で――その欠片が白く発光したのだ。

「な、何だよ、これ……！」

突如、俺の持つペンの形状をした欠片から放たれた白い光に――流石に恐怖はしなかったが、純粋に俺は驚いた。

しかし、俺の隣に居るウリアはどこと無く冷静な口調で。

「やっぱり……！」

納得したように呟いて――再度夜空を振り仰いだ。

俺も訳の解らないままウリアに続いて夜空を見上げる。

今夜は雲一つない快晴だった。

いや、夜なので快晴という言葉が正しいのかどうか解らないが――とりあえず、雲一つない、満天の星と綺麗な月の拝める申し分無い夜空だった。

――そして。

そんな夜空が――景色が不意に“歪んだ”。

「えっ……」

無論、歪み始めた景色に唖然とした声を上げたのは俺だ。

歪みを帯びた景色は更に歪みを重ねて、捻れて渦を巻き――。
最終的に夜空よりも黒い漆黒の穴を創造した。

「……来る」

そして、俺は漆黒の穴を仰いだままそう呟いたウリアの声を聞き逃さなかった。

「えっ、来るって、一体何がだよ」

俺のその問いかけにウリアは勇敢にも――いや、勇敢とは呼べないかも知れないが――その場で跳び上がってベランダの手摺の上に着地した。

「秀！　掴まって！」

俺はウリアから差し出された手を言われるがままに掴む。

すると、信じられない話だがウリアは俺の体を片腕で軽々と持ち上げた。

それが魔術の力なのか――それとも手首の辺りに装着されている機械の仕業なのか。

それは解らなかったが。

とにかく、ウリアは俺の体をまるで発泡スチロールのように軽々と持ち上げるとそのまま自身の体に押し付けるようにして抱き締めた。

「オ、オイ、ちょっ、お前……！」

まぁ、そのウリアの行動によって俺の顔は必然的にライダースーツのようなぴっちりとした服装によって強調されたウリアの谷間に埋まる訳で。

ていうか、こいつ意外と胸大きいんだな。

スーツで強調されているからだろうか。

下手すると霧歌クラスのバストを持ち合わせているのかもしれない。

霧歌もアレで意外と大きいからなぁ――。

「秀！」

「は、ハイッ！」

不意にウリアから名前を呼ばれた俺は邪な想像がウリアに伝達してしまったのかと焦って思わず裏返った声を発してしまった。

「この近くに、どこか……えっと、広い場所はある！？」

「何だよ、いきなり！　つーか、何そのアバウトな質問は！」

「いいから！　どこでもいいから答えて！　出来るだけ人が居ない所！」

「そ、それなら……確か、近くに海岸があったはずだ！」

「海岸――海の事ね、解った！」

どうして、ウリアが今そんな質問を俺にしてきたのか。

そんな疑問を考える余裕も無く――次の現象が起こった。

何と、ウリアの足元に赤く光るいわゆる“魔方陣”のようなものが出現したからだ。

そして、きっとその魔方陣の効力なのだろう。

次の瞬間、ウリアの背中から深紅の炎の翼が生えて来た。

「ウリア……お前……！」

「しっかり掴まっててね、秀！」

ウリアはその炎の翼を使ってベランダから空中へと飛び上がる。

それから、俺を抱えたウリアが屋根よりも高い位置に辿り着いた所で。

俺は――見た。

夜空に空いた漆黒の穴から出て来る――その“巨大な生物”を。

しかし、俺はその謎の生物の姿をハッキリと捉える事は出来なかった。

何故なら、その時には既にウリアが“飛行”を始めていたからだ。

一口に飛行とは言っても、ハングライダーとかパラグライダーとかそんな娯楽的なものでは決して無かった。

飛行中――周囲の景色が“歪んで見えた”。

それほどの速度で俺達は飛んだという事なのだろう。

人間の体は音速には耐え切れないという説があったような気もするが――俺の体は大丈夫なのだろうか？

しかし、そんな心配は無用だったようで。

俺がそんな疑問を感じ始めた頃には俺達は海岸の上空へと到着していた。

ウリアは深紅の炎の翼を羽ばたかせ――段々と降下していき、俺を砂浜の上に下ろした。

俺の顔がウリアの胸の谷間から離れる。

正直、もう少しあのまま飛行を続けていたかった――とは決して言わない。

広い場所と言われてハワイ沖を指定すれば良かったとも決して思っていないから。

変な下心は無いから。だって俺は紳士だもの。

ジェントルマンだもの。

「……大丈夫、心配しないで、秀」

そして、ウリアはそう言いながら――砂浜に俺を残して一人ゆっくりと上昇を開始した。

炎の翼を携えて夜空へと吸い込まれるようにして昇って行くウリアの姿は。

「私が……秀の事を、護るから」

まるで――天使のように思えた。

しかし、俺はそんな錯覚――と言うよりも、幻覚から一気に解き放たれる。

ウリアが飛んでいる高度よりも遥か上空を猛スピードで巨大な“何か”が飛び去った。

その巨大な“何か”は海上で旋回するとまたこちらに戻って来た。

かなりの速度で飛行しているのだろう――その巨大な“何か”が通った後、少し遅れて海面がまるで爆発したかのように水飛沫を上げた。

そして、その巨大な“何か”は俺とウリアの目の前で急停止する。

その巨大な“何か”に纏わり付いていたのだろう――それが停止した瞬間、凄まじい突風がこちらに向かって襲い掛かってきた。

舞い上がる砂塵――俺は目を瞑ると同時に片腕を文字通り目の前に持って来た。

段々と消滅していく砂塵。

完全にそれが消えた頃を見計らって俺は目を開けると――上空に佇んでいる“それ”を仰いだ。

“それ”の体は――“その生物”の体は全てが金属で構成されているようだった。

月明かりを反射している所を見るとおそらくはそうなのだろう。

そして――俺の予想では“その生物”は“機械”だ。

それならば、それは“生物”ではなく“機械”じゃないか――そう思うかもしれない。

だが、実際目の当たりにするとその見解はやはり“生物”に落ち着くだろう。

その“機械”染みた“生物”は――途轍もなく巨大な鳥の形をしていたのだから。

動きもかなりリアル――まるで、“本物の鳥のように”動いている。

空中で停止しておく為に一定の間隔で羽ばたく灰色の鉄製の翼。

同じく鉄製の尾も翼が動くリズムに合わせて左右に揺れている。

ライトでも仕込んであるのだろうか――本来、目が有るべき場所では黄色い光があった。

「……私が相手よ」

そう言って、ウリアはその鉄製の鳥の顔と同じ高さまで飛翔する。

「秀には……指一本触れさせない」

そして――そのウリアの挑発に対抗するように。

その鉄製の鳥は――鳴いた。

鳴いたとは言っても、凄まじいノイズを放っただけなのだが。

思わず耳を押さえたくなるようなそんなけたたましいノイズを。

その空間をも歪ましてしまいそうなノイズが解き放たれた瞬間、ウリアは凄まじい速度で海上へと移動し始めた。

その動きを目で――正確には黄色いライトで追う鉄製の鳥。

海上の上空に辿り着いたウリアは停止して鉄製の鳥と向き合う。

――その直後だった。

不意に鉄製の鳥がその巨大な口を開けて――そして。

どこからとも無く一瞬で集約させた光の束を凝縮させた光の弾をウリア目掛けて解き放った。

しかし、挑発するだけあってウリアもその弾に易々と当たるつもりは毛頭も無いらしい。

ウリアは光速で――冗談抜きで光の速度で迫ってきたその弾をいとも容易く躱す。

標的を失った光の弾は水平線上の彼方まで飛んで行き――。

海の果てで大爆発を起こした。

海の果てが一瞬だけ昼間になった――それほどの光が遥か水平線上の彼方で解き放たれたのだ。

そして、その光よりもワンテンポ遅れて台風の時でもここまで酷くは無いと思える突風が俺の立っている砂浜を襲った。

あれほどの距離からここまでの威力の風が吹き荒れるくらいである。

あの爆発の衝撃で津波が押し寄せて来る可能性もありそうだ。

それから、俺はウリアと鉄製の鳥との戦闘へと視線を向ける。

しかし、向けられたのは視線だけで実際には速過ぎて殆ど視界に捉える事は出来なかった。

時折、どちらかが更なる加速をする為に空中で一旦停止するくらいで。

それ以外はウリアも鉄製の鳥も、俺はその姿を捉える事すら出来なかったのである。

どちらが優勢なのだろう。

俺がそんな事を思った時――光速の戦闘が繰り広げられている上空で何かオレンジ色の光が一瞬だけ光った。

――そして。

おそらく、あの鉄製の鳥の片翼と思われる鉄の塊が砂浜に落下して

きた。

「ちょっ……うおおおおおおおっ！？」

俺は間一髪、砂浜に飛び込む形で落下してきたその巨大な翼を避け切る事が出来た。

「あ、危ねえ……死ぬかと、思った……！」

ていうか……うん、俺を助けてくれるのは物凄く嬉しいのだけれど。

ウリア、翼を落とす場所をもう少し考えて下さい、マジで。

そんな地味に九死に一生を得た俺はそれを教訓に砂浜の端の方へと急いで移動する。

そして、その俺の行動はどうやら正解だったらしく。

俺が移動した直後にすぐさまもう片方の鉄の翼が落下してきた。

その翼も轟音を発しながら落下した際に地震並みの揺れを大地に齎した。

「……」

ていうか、両方の翼を？がれてしまったら流石に飛べないのではないか。

俺がそんな素朴な疑問と共に夜空を見上げた瞬間――本当にその瞬間。

今度は本体が砂浜に落下してきた。

それと共に翼とは比べものにならないほどの轟音と、揺れと、砂塵が俺に襲い掛かる。

舞い上がった砂塵の向こう側に――俺はオレンジ色の光を捉えた。

そして、その砂塵が晴れて行く中で俺はその光の正体が鉄製の鳥の本体の上に仁王立ちするウリアが持つ炎の剣だと気付く。

ウリアはその炎の剣の切先を鉄製の鳥に向けたまま――最期にこう言った。

「――バイバイ」

ウリアが相手へと贈ったその言葉は単なる別れの挨拶だったのか、それとも単なる皮肉の言葉だったのか。

――何にせよ。

ウリアはそう言って炎の剣を鉄製の鳥の胸に深々と突き刺した。

魔導獣機？

断末魔めいた凄まじいノイズをその口から発する鉄製の鳥。

すると、どういう理屈か、鉄製の鳥のその全てが一瞬にして劫火に呑まれた。

鉄製の鳥の顔も、胴体も、尾も、？がれた翼でさえも。

その全てが――一瞬にして炎に包まれて。

消失――いや、焼失、した。

跡に残ったのは深紅の炎の翼を背に生やしたウリアだけだった。

――それは一瞬の戦いだった。

呆気無いとも言って良い。

けれど――俺にとって、ウリアにとって今の戦闘は命を懸けた戦闘なのだ。

その戦いに何か“別のもの”を求める方が間違っているのだろう。

俺がそんな事を思っているとウリアがこちらに歩いて来るのが見えた。

ウリアの手に握られていたオレンジ色の光を放つ炎の剣はこちらに向かって来る途中にただの炎となって空中に霧散した。

そして、俺の前にやってきたウリアは得意気な笑みと共に腕組みをしてこう言った。

「……何か言う事は？」

……そんなもの。

お前に今言うべき事なんて一つしか無い。

「……お前って、意外と胸デカいんだな」

「キーックッ！」

「痛ってえ！」

ウリアから蹴られた。

また脇腹を今度は全力で蹴られた。

ていうか、威力が強過ぎて俺はそのまま砂浜の彼方まで吹き飛ばされた。

「ぐ、ぐふっ……！」

俺は蹴られた脇腹の辺りを押さえながらその場に立ち上がる。

つーか、俺の脇腹ちゃんとご健在だよね？

蹴られた衝撃で抉（えぐ）られていないよね？

「秀――――っ！」

すると、５０メートルほど向こうから怒りに満ち溢れたウリアの声が飛んできた。

「こっちは決死の覚悟で秀の為に戦ったのに、戦闘後に私に掛ける言葉が私の胸の感想って一体全体どういう了見なのよ――――っ！」

「スマン！　お礼を言うべき場面はあそこだと思ったんだよ！」

「この変態！　バーカ！　秀みたいな変態はもうここから歩いて帰ればいいのよ！」

「えっ――あっ、オイ！　ちょっと待て！　ウリア！」

俺の呼び止める声も空しく――夜空の彼方へと消えて行く深紅の光。

つーか、ウリアの奴、マジで俺だけ置いて帰りやがった……。

「……口は災いの元、か」

今度から真剣な場面ではボケないようにしよう。

俺は先人達が遺してくれたその言葉の意味を噛み締めながら、自宅へと何とか辿り着く為に歩き出す。

ちなみに、この後俺はちゃんと家に帰り着く事になるのだが……。

５時間くらい掛かった。

マジで足が棒になるかと思った。

◆◆◆

翌朝――俺は携帯の画面に表示された『13：12』という時間に驚愕してベッドから跳び上がるように起床した。

「遅刻――ってああ、何だ、そう言えば今日から夏休みか」

7月28日。

“昨日の事”で――何かもう日付が1週間くらい過ぎてしまっているような気がする。

偶然拾った宝石のような白い何かの欠片。

突然この家を訪れた金髪碧眼のツインテールの少女。

その少女から聞かされたとんでもない未来の話。

突如、俺の前に現れた機械の怪物。

そして、それをいとも容易く――容易過ぎるほどにあっさりと倒して見せたウリア。

「昨日の事が全て……夢だったらいいんだろうけど」

そう言いながら、俺は何故かベッドの傍でうつ伏せに行き倒れている少女――ウリアを見下ろして現実逃避すら不可能な事に気付いた。

「……オーイ、そこの金髪の少女」

「……何よ、秀」

「お前、特徴の一つであるツインテールはどうした」

「それよりも今は聞くべき事があるでしょーが！」

ガバッと昨日の戦闘ではないが光の速度で起き上がったウリアは涙目で俺の眼前まで顔を近付けてきた。

「どうして！　私が！　ここで！　行き倒れて！　いるのかとか！」

「いや、それも気になったんだけどさ。それよりも俺はお前の髪型の方が気になったから」

「部屋の中でまでツインテールはしなくていいって思ったのよ！　ほら私は秀の質問に答えたわ！　だから昨日の“しーふーどー”を出しなさいよ！」

「待て、その等価交換はおかしいだろ」

ていうか、まず等価交換すら成立していない。

「解ったよ……とりあえず、腹が減ったって事で良いんだよな？」

「当たり前よ……だって秀、何か昼まで起きないんだもん、死んじ

やったのかと思ったわ」

「俺を勝手に殺すんじゃねえ」

「だって秀、私がこんなにお腹空いてるのに昼まで起きないんだもん、殺してやろうかと思ったわ」

「さっきとは別の意味で俺を勝手に殺すんじゃねえ！」

ていうか、お前って立場的に俺のボディーガードなんだよな？
それで度々俺に対して殺人予告をするってどうなんだよ。

「ウリア」

「何よ、下僕――あっ、間違えた、秀」

「何をどうしたら俺の名前と下僕と間違えるのか聞いてみたいものだな。ええ？」

「いや、今のは態とじゃないのよ？　偶々、秀の事を“下僕”って呼ぼうとしたらそう呼んでしまっただけの事で」

「要するに意図的に呼んだって事じゃねーか！」

「ちっ、バレたか。馬鹿な秀には解らないと思って言ったのに」

「解るわ！　流石に無知な俺でもそれくらいは解るよ！」

ていうか、そこまで俺は馬鹿じゃないから！

「全く……ほら、付いて来いよ」

「私に命令しないで」

「シーフード欲しくないのか？」

「あなたに付いて行きます、どこまでも」

「……」

従順なのか否か――よく解らない奴である。

ていうか、こいつはただ単に欲望に忠実なだけなのかも知れない。

要約すると単なる馬鹿だ。

……俺も人の事は言えないけれど。

◆◆◆

一階に下りて、台所に辿り着いた俺はシーフードのカップラーメンが切れている事に気付く。

本来、俺が日々を生き抜く為に必要なカップラーメンの数々はキッチンの一角に山積みしているのだが――。

「……アレ、無いな、シーフード」

「え――――――――っ！？」

「うるさいぞ、ウリア。こんな事で絶望染みた声を上げるな」

「私には死活問題なのよ。地球温暖化で南極の氷が解けるみたいな」

「お前の問題を世界レベルの問題と同列に考えるな」

「仕方ないわねぇ……それじゃあ、こうしましょう、秀」

「どうするんだ？　別のヤツにするか？」

「今から急いで“しーふーどー”を買って来てよ」

「ふざけるな。昼飯どころか夕飯も抜きにするぞ、お前」

とりあえず、俺はカレーと――シーフードはやはり探しても見付からなかったので、スタンダードスタイルの味のカップラーメンをウリア用に作る事にした。

そのスタンダードスタイルのカップラーメンのパッケージを見たウリアは――。

「ねぇ、秀。これ何か“しーふーどー”みたいに何味か書いていないんだけど。まさか、これって味の無いヤツなの？」

とか何とか余りにも馬鹿げた発言をしていたので俺は無視してラーメン作りに取り掛かる事にした。

まぁ、ラーメン作りとは言っても単にお湯を注いで三分待つだけなのだが。

「しかし、このカップラーメンを世に生み出してくれた人は本当に天才だな」

「そうね。秀の方は甜菜（てんさい）って感じだけど」

「俺を北海道を中心として栽培されている野菜と一緒にするな」

「だって、秀の顔って甜菜っぽい形してるじゃない」

「止めろ！　勝手に俺の容姿について変な情報を語るな！　ただでさえ俺は自分の容姿についてここでは語っていないんだから！」

「それじゃあ、私が説明するわね。何と言うか……秀は人の首から甜菜が生えた感じの容姿をしています」

「ただの化物じゃねーか！」

「頭からは髪の毛の代わりに甜菜の葉が生えています」

「黙れ！　誰が上手い事を言えと言った！」

いや、実際問題そこまで上手くは無いのだが。

そして、俺がウリアとそんな遣り取りとしている内に三分が経過してカップラーメンが完成した。

俺は二つのカップラーメンを両手にリビングへと向かい――何と言うか、久しぶりに使う食卓、もとい、テーブルの上にそれらを置いた。

俺は四つある椅子の内の一つに腰を下ろす。

ウリアは俺の正面の椅子に座って――。

「いっただっきまーす！」

――すぐさまそう声を上げるとフォークを引っ掴んでカップラーメンを食べ始めた。

それほどお腹が減っていたという事だろうか……まぁ、部屋の中で行き倒れるくらいだしな。

「ていうか、一つ思ったんだけどさ――」

「何、秀、それ食べないの？」

「……いや、食べるけど。俺が言いたいのはそういう事じゃなくて」

俺はカップラーメンの蓋を開けながら言う。

「その食事前の挨拶――って言っていいのかな。それって、２０５６年の未来でも皆普通に使っているものなのか」

「モグモグ……世界中のそういう挨拶とか言葉は変わっていないわ。私の場合は知識として日本の言葉とか挨拶とか色々なものを知っているから、それを使っているだけよ」

「ああ……お前、そう言えば日本語かなり達者だもんな」

「でしょう？」

「でもお前、言葉が達者な割には箸を使えないんだな」

「あー、“しーふーどー”じゃないけどこっちも意外と美味しいわねー」

「……」

誤魔化しやがった。

白々し過ぎるだろ。絶対誤魔化すの下手だよ、こいつ。

魔導獣機？

「まぁ、いいや……いただきます」

「ていうか、秀……未来の事を聞いて来るって事は、私の話を信じるつもりになったの？」

「当たり前だろ……ていうか」

俺の脳裏に浮かび上がる“昨日の出来事”――。

「……あんなものを見せられちゃ、信じるしかないだろ」

人間は見た事が無いものを絶対に信じない代わりに――“見てしまったもの”に対しては否が応でも信じてしまう生き物なのだから。

「ていうか、昨日のアレは一体なんだ。あの機械の鳥は何なんだよ」

「『魔導獣機（メカニカルビースト）　大鳥型（タイプ・ファウル）』よ」

「だから、昨日も言ったけど、急に専門用語を出されても解らないって」

「単にこういう名称は英単語を繋げているだけなんだけど……ああ、そっか、秀って馬鹿だもんねー。英語とかも解らないかー」

「……カップラーメンを没収する」

「ヤだ！　このカップラーメンだけは絶対に譲らないから！」

俺が伸ばした手から容器を持ち上げる事でスタンダードのカップラーメンを頭上に避難させるウリア。

「全くもう……解ったわよ。良心的な私が豆粒並みの脳味噌しか持ち合わせていない秀に解るように説明して上げる」

「それは有り難いんだけど、俺の脳味噌の事を悪く語っている時点で“良心的”って言葉は間違っていると俺は思うぞ？」

「『メカニカル』、『ビースト』――つまりは、“機械的な獣”の事で、『タイプ』、『ファウル』――こっちはつまり、“鳥の形”って事よ」

「ああ、なるほどね……。ウリア、お前って精神的にはかなり子供だけど、頭脳的にはかなり大人なんじゃないか？」

「殴るわよ、秀」

「何だ、高校生時代に変な薬でも飲まされたか？」

「だから殴るわよって！　ていうか、それはどういう意味よ！」

そんな時だった。

テーブルの上の俺の携帯が震えたのは。

「電話……霧歌から？」

「もしもし？」と俺はラーメンを食べる手を一旦休めて霧歌からの

電話に出た。

（あっ、秀ちゃん？　ゴメンね、昨日はメールできなくて）

「ああ、良いよ、別に。お前の事だから、どうせ塾とか習い事とか、その辺の事で忙しかったんだろ？」

（うん、そうなの……ゴメンね？）

「だから、別に良いって。お前はお前で、俺には俺の日常があるんだからさ。お前の都合を俺に合わせる義務なんか無いんだし」

（でも、私的には何か秀ちゃんにお詫びがしたいなぁ、って思っている訳なのよ）

「お詫びって……だから、別に良いって。そう言うのは」

（何でも良いから、何でも良いから私に何かお詫びをさせてよ。そうしないと、私死んじゃう）

「お前はお詫びをしないと死んでしまう病気にでも掛かっているのか」

（だから、ね？　お願い）

「……解ったよ。それで、具体的には何をしてくれるんだ？」

（秀ちゃんは、何か今私にして欲しい事は無い？）

「霧歌にして欲しい事……そうだな、メイドコスで１日だけ俺のメ

イドに――」

（却下）

「……それじゃあ、もう、お前が考えていいよ」

（ていうか、それ以外に私にして貰いたい事が無かったんだね……逆にショックと言うか、安心したと言うか、何と言うか）

携帯電話の向こう側で霧歌は俺に対して呆れているようだった。

まぁ……当たり前だろうけど。

（うーん、そうだなぁ……私が秀ちゃんに出来る事……）

「……」

何やら、霧歌が無言で考え始めたようなので、俺は霧歌が次に喋り始めるまでの繋ぎにカップラーメンの容器を持ち上げるとそれを口に傾けてスープを飲んで――。

（解った！　それじゃあ、今から秀ちゃんの家に行く！）

「ブ――――――――ッ！」

俺は口に含んでいたカレーのスープを盛大に前方へと吹き出した。

あれ？

ていうか、何かデジャヴじゃね？

昨日もこんな事があったような――。

そんな事を思っていたら、俺は正面でカレー塗れになっているウリアに気付いた。

誰のせいでああなったのだろう――またそんな事を思っていたら、ウリアがこちらを鋭い視線で睨んで来たので、俺の現実逃避は崩壊した。

間違いない、俺のせいだ。

俺のせいで全身カレー塗れになったウリアは怒りに体を打ち奮わせている。

（秀ちゃん？　どうしたの？　大丈夫？）

携帯電話の向こう側からは何やら俺を心配している霧歌の声が頻りに聞こえて来た。

しかし、今の俺にはその声に対してリアクションを取る余裕などなく――。

「何をして……くれるのよこのバカ――――――――――ッ！」

そう家の外まで響き渡りそうな怒声と共にウリアが投げてきたスタンダードのカップラーメンを俺は顔面で受けた。

「ふぐっ！？」

（河豚？）

「っていうか、あっつっ！」

（えっ？　河豚が熱いの？　ていうか、秀ちゃん、こんなお昼から河豚食べてるの？）

「いや、違う！　そういう訳じゃない！」

俺はとりあえず霧歌に向かってツッコミを入れながらこちらも全身ラーメンのスープ塗れになった体をどうしようかと椅子から立ち上がる。

俺の前では同じくウリアも「あーもうベタベタ～」と髪やスーツに付着したカレーに心底嫌そうな声を漏らしていた。

……。

何かエロかった。

「て、ていうか、あの霧歌。今ちょっと緊急事態に陥ったからさ、とりあえず今は電話切ってもいいか？」

（緊急事態？　大丈夫なの、本当に？）

「ああ、大丈夫だから。ちょっと今は切らせて貰うな！　それじゃあ！」

（あっ、ちょっと秀ちゃ――）

俺はその霧歌の返事を待たずしてその通話を切った。

その直後、空かさず俺にウリアの怒声が飛んでくる。

「ちょっと！　本当に何をしてるのよ！　どうして急にラーメンを吹き出したりしたのよ！」

「いや、だって霧歌が――俺の友達が家に来るなんて言うから」

「友達が家に来る事の何が駄目なのよ」

「いや、別に駄目では無いんだけど……ほら、だって、今はお前が居るだろ？」

「……私が居たら何か駄目なの？」

カレー塗れのウリアはそう言って小首を傾げた。

どうやら、本当に解っていない様子だ。

本当にこいつは……肝心な所で馬鹿なんだから。

まぁ、カレー塗れなのは何か興奮するし？　今の小首を傾げた動作も何か可愛かった――いや、何でも無い。

「……だからな？　普段は一人暮らししている俺の家に、お前のような俺と同世代の女の子が居たら何かと誤解を受けるだろ？」

「良いじゃない、説明して上げれば。昨日から俺の家に居候する事になったウリアです、昨日はこいつと一緒に一晩過ごしました――って」

「お前の言い回しに悪意を感じざるを得ないんだが！　つーか、お前は俺を社会的に抹殺（まっさつ）するつもりか！」

「私は秀の事を身体的には護るけれど、秀の事を“社会的”に護るつもりは毛頭ないわ」

「何爆弾発言を言っちゃってるんだよ！」

「ていうか、秀。何か体がベタベタするんだけど……どうしたらいい？」

「そうだな。俺が今からタオルを持って来るから、俺がお前の体の隅々を吹いて――」

「秀、社会的にも身体的にも今すぐここで殺して上げましょうか？」

「スマン、冗談だ。だから怒るな」

……本気の殺意が込められた視線を初めて受けたような気がした。

「仕方ない……それじゃあ、風呂使えよ。風呂は流石に２０５６年にもあるよな？」

「あるに決まっているでしょ。お風呂はどこにあるの？」

「そこの扉からリビングを出たら玄関前に出るから、左に曲がれば風呂場に繋がる扉がある」

「そっか、りょーかい」

「あっ、それと、お湯は入れてもいいが、入るならシャワーでカレーを洗い流してから入れよ」

「解ってるって、私、これでもかなりの常識人なのよ？」

常識人は日常的に相手に殺人予告などはしない。

そうツッコミを入れようと思ったが――あいつをカレー塗れにしたのは俺なのであえて言わない事にした。

つーか、魔術を使える時点で常識人とは掛け離れているような気がする。

「……」

そこで、俺は昨日ウリアが使っていた魔術の数々を思い出す。

背中から出現した深紅に光る炎の翼――オレンジ色に光る炎の剣。

「……魔術、か」

ウリアはその魔術を駆使して昨日の怪物をいとも簡単に薙ぎ倒した。

――つまり、魔術は“兵器的”にそこまで強力という事だ。

そして、俺が――今ここに立っている俺が今から19年後にその魔術を世界に復活させる。

余りにも理解し難い話だった。

余りにも現実的ではない話だった。

しかし、それは当たり前の事で。

今から“起こる事になっている”未来の事を――現実的に理解しようとしても無駄な事だ。

蛇足――と言うのが正しいか。

だって、本来ならば。

未来というのは――何が起こるか解らないものなのだから。

◆◆◆

「……」

ウリアが風呂に入りに行ってから――1時間近くが経過していた。

つーか、遅いよ。

あいつ、まさか箸の時と同じで実は風呂の使い方を知らなかった――とか、そんなオチを用意しているんじゃないだろうな。

ちなみに、俺はウリアから被せられたラーメンのスープを浴びた後の格好のままで居る。

洋服を着替えればいい話なのだが――何と言うか、どうせ風呂に入るのなら着替えるのはその後でも良いと思ったのだ。

洗濯機も風呂場の脱衣所にしか置いていないから。

万が一、着替え途中のウリアと鉢合わせしてしまったら、社会的には未だしも身体的に本当に殺されかねない。

……それにしても。

「遅い、遅過ぎる……」

流石の俺も業を煮やしていた――ていうか、何度も言うけど流石に遅過ぎだって。

「……まさか」

まさか――湯船で溺れているとか、そんな事は無いだろうな。

いや、流石にウリアでもそんな事は有り得ないだろう。

いや、でも、万が一、しかし――。

「……はぁ」

俺はため息をつくと立ち上がる。

いや、これはウリアの事が心配なだけだから。

万が一、ウリアが溺れているなんて事態になっていたら――なぁ？

だから、これはただ単にウリアが心配なだけだから。

別にあわよくばウリアの着替えシーンを覗く事が出来るなんてそんな下心は全くないから。

皆無だから。

そんな言葉を自分自身に言い聞かせながら俺は脱衣所へと繋がる扉の前に立った。

「……」

俺は無言で扉を二回ほどノックしてみる。

しかし、ウリアからの返事は無い。

「おーい、ウリアー？」

今度はノックに加えて中に居るはずのウリアに向かって呼び掛けてみた。

しかし、またもや返事は無い。

「……」

リアルに心配になってきた俺は恐る恐る扉を少しだけ開けてみる。

魔導獣機？

脱衣所の中にウリアの姿は無かった。

「……あれ？」

疑問に思った俺は脱衣所に足を踏み入れる。

本来、脱いだ洋服を入れている銭湯に置いてあるような脱衣籠の中にはウリアの洋服も、下着も、何も入れられていなかった。

「……」

別に、ウリアの下着が入っていなかった事に若干俺は残念に思ってなんかいない。

むしろ、安心できた。

脱衣籠の中に衣類が入っていないという事は、ウリアは既に風呂から上がったという事なのだろう。

「全く、上がったなら上がったで一声掛けろよ……つーか、風呂の電気も点けっぱなしだし」

曇りガラスが嵌め込まれた風呂場へと繋がる扉の向こう側には電気が灯っていた。

今はエコがどうとか騒がれている時代なのだが――魔術が復活した時代にはその辺りの思考も無くなってしまうのだろうか。

まぁ、魔術さえ使えれば大概生活には困らないような気がする。

火を生み出す事が出来ればガス代掛からないし、水を生み出す事が出来れば水道代掛からないし、雷を生み出す事が出来れば電気代要らないからな。

「……ん？」

そこで、俺は脱衣籠の中にウリアが肩や腰、手首などの様々な箇所に装着していた防具や機械などが入っている事に気付いた。

「何だ、あいつ、忘れて行ったのか……やっぱり、こういう所は抜けてるんだな」

そう言いながら俺は洋服を全て脱ぎ終えると風呂場へと繋がる扉を押し開ける。

そして、俺は一糸纏(まと)わぬ姿のウリアと“対面”した。

「……」

「……」

互いに向き合ったまま言葉を失い――互いの姿を呆然と見据える俺とウリア。

しかし、俺も思春期真っ盛りの平凡な男子高校生である。

別に変な下心は無かったのだが――俺の視線はウリアの顔から首よ

りも下の方へと勝手に移動し初めて。

「キャ――――――――ッ！」

またもや、カレーの時の怒声と同じく家の外まで伝わってしまいそうな悲鳴を上げたウリアは俺の体を突き飛ばした。

「おっ、おお！？」

不意な出来事だったので、俺はバランスを取る事が精一杯で――風呂場を出て、脱衣所を抜けて、そのまま廊下に尻餅を着いてしまった。

「痛てててて……て？」

そして――気付けば目の前にはバスタオルを身に纏ったウリアの姿が。

「……何か言う事は？」

そこで、俺は今の状況が昨日あの鉄製の怪鳥を倒したシチュエーションとほぼ同じだという事に気付く。

違うのは、俺とウリアが裸で――ウリアの顔に浮かんでいるのは得意気な笑みでは無く、明らかに“殺意”が込められた黒々しい満面の笑みだという事だ。

あっ、ヤバい、殺される。

俺の中の本能的な部分が周囲のただならぬ雰囲気からそれを察知し

た。

おそらく、何を言っても殺されるだろう――謝罪の言葉を述べたとしても。

……それならば。

ここで言うべき事なんて一つしか無い。

「ウリア……お前の胸、やっぱりあれはスーツで強調されていただけみたいだな」

「死ね――――――――――っ！」

ウリアに蹴られた。

しかし、今回蹴られたのは脇腹では無く顔面だった。

正確に言えば側頭部。

本来ならば俺はまた５０メートルほど吹き飛ばされていたのかも知れないが――。

魔術的な力が込められていなかったのか、それともウリアの怪力の根源はあのスーツにあるのか。

俺は玄関の辺りまで飛ばされただけでそのまま玄関を突き破って外まで飛び出すような事にはならなかった。

身体的には死ぬ所だったが――そういう意味では俺は社会的には死

ななくてラッキーだと思える。

――しかし。

そんなラッキーも長くは続いてくれなかった。

何故なら、玄関扉が開く音が聞こえて来たからだ。

俺は頭だけを動かして玄関の方へと視線を向ける。

そこに立っていた人物に――俺は驚愕して目を見開いた。

「……きり、か……？」

何故か、そこには霧歌が立っていた。

「……」

霧歌は呆然と頬りに状況を整理しようと視線を至る所に彷徨(さまよ)わせている。

――さて、ここで問題を一つ。

俺の幼馴染、夜華霧歌が俺の家を訪ねた際、彼女は玄関先でこんな光景を捉えました。

一つは、俺、もとい、自分の幼馴染が全裸で玄関先に転がっている光景。

そして、もう一つは廊下の奥では誰か見知らぬ女子が明らかに風呂

上りで――しかも、裸にバスタオル一枚という格好でそこに立っている光景。

――さて。

その二つの光景を合わせた際、霧歌の頭の中に生み出される見解は一体何でしょうか？

「……」

そして、霧歌の中でその問題に対する見解が出たのだろう。

霧歌は無言で扉を閉めて我が真之乃家の玄関から姿を消した。

「ってちょっと待て！　待って下さい霧歌さん！　これは誤解なんです！　俺の話を聞いてくれ！　いや、聞いて下さい！　霧歌さん！」

俺は玄関に向かって手を延ばす。

しかし、無論そこには霧歌の姿は既に無い訳で。

そんな俺を見兼ねてか――後方でウリアのこんな言葉が俺の耳に届いたのだった。

「……無様ね」

紅焔天使

7月２８日。

僕は幼馴染に裸を見られてしまいました。

しかも、玄関という余り裸で居る事に相応しくない場所で。

だから、僕はもう社会的に抹殺されたのも同然です。

社会的に――死んでしまったも、同然です。

だから、僕は身体的にも死んでしまおうと思います。

お父さん、お母さん。

今まで、こんな変態で馬鹿で脳味噌も空っぽな僕の事を育ててくれてありがとう。

今更ですが、僕はお父さんやお母さんが望んだような――そんな息子になれていたでしょうか。

それだけが気がかりです。

それ以外には気がかりなんてありません。

最期に、それだけが気がかりです。

お父さん、お母さん。

僕を生んでくれてありがとう。

僕を育ててくれてありがとう。

僕に笑顔を見せてくれてありがとう。

僕におもちゃを買ってくれてありがとう。

他にも色々と――言い尽くせないけれど、本当にありがとう。

ありがとう、お父さん、お母さん。

――さようなら。

◆◆◆

「何書いてんだお前」

何やら俺の部屋の勉強机で一心不乱に何かを書いているウリアの背後に忍び寄り、その書いていた紙を奪い取った。

「……何だ？　これ」

「何言ってるの、遺書に決まってるじゃない」

「誰の？」

「秀の」

「何でお前が俺の遺書を書いてるんだよ。遺書というものは本来その人自身が書くものだろうが」

いや、俺も今書くつもりは毛頭ないけれども。

「だって、今から秀自殺しちゃうんでしょ？」

「俺を勝手に自殺志願者に仕立て上げるな」

「だって、あの幼馴染の人に裸を見られたんだもん……自殺するくらいまで落ち込んで、悩んで、死にたがっているのかと思った」

「確かに落ち込んで、悩みもしたが、死にたいとは思ってねーよ」

「何だぁ……残念」

「オイ、今残念って言ったよな？　絶対に言ったよな？」

「言っていないわ。残念と思ったのは本当」

「お前は否定したいのかしたくないのかどっちなんだよ！」

「そっかぁ……」とやはり残念そうな声色でウリアは俺の手の遺書（仮）を取る。

「折角書いたのに無駄になっちゃったなぁ……」

「お前が勝手に遺書なんて書くからだろうが」

「だって、自殺する際には遺書が必要でしょ？」

「だから自殺なんてしないって言ってるだろうが。ていうか、何度も言うけど、お前って俺の身を護る役目を担ってるんじゃないのかよ」

「秀が自殺を志願した場合には止めない事にしているの」

「いや、止めろよ！　自殺なんて絶対にしないけどそこは止めてくれよ！」

「私、個人の意見を尊重させようと思っているの」

「確かにそれは良い事だが、今使うべき言葉じゃねえ！」

本当にこいつは俺のボディーガードなのだろうか……いや、実際に昨日は俺の事を護ってくれたが。

「……ん？」

と、そこで俺はとある疑問に辿り着く。

「なぁ、ウリア」

「何？　自殺するつもりになった？」

「残念ながらそんな思考には辿り着いていない。それから、嬉しそうに目をキラキラと輝かせるな――それと残念そうに顔を伏せるな！」

「……それで、何よ」

「昨日の怪物……あれって、機械なんだよな？」

「そうよ」とウリアは答える。

「正確には――“生きた機械”、とでも言っておこうかしら」

「“生きた機械”？」

「ああいう『魔導獣機』の全ての機体には『ＡＩ』――つまり、『人工知能』が搭載されているから」

「ああ、なるほどね――って」

今、何て言った？

「……待て、昨日の化物以外にもその『魔導獣機』とやらは存在するのか？」

「当たり前でしょ。それなら態々『大鳥型』なんて呼び名を付ける訳が無いじゃない」

「ああ、そう言われてみれば、そうだな」

「多分だけど――今夜辺りにも、また秀の命を狙って別の『魔導獣機』が現れると思う」

「随分と重要な案件をさらりと言ってくれるものだな……。それじ

ゃあ、あの『魔導獣機』に人工知能が搭載されているって言うのなら、あいつらは勝手に俺の命を狙ってここまでやって来ている――って事なのか？」

「ううん、それは“ちょっとだけ”違うわ」

「言ったでしょ？」とウリアは椅子を回転させて面と向かって俺を見上げてきた。

これは単なる余談で聞き流して貰っても一向に構わないが――上目遣いのウリアは何だか可愛かった。

「あいつらはね、人工知能を搭載しているとは言っても単なる“機械”なのよ」

「……どういう事だ？」

「知っているとは思うけれど、『魔導獣機』は未来の科学が作り出したもの――と、なれば、この世界に『魔導獣機』を呼ぶ為には、勿論、過去と未来の時空を繋ぐ架け橋を作る為の人間が必要になる」

「……って、事は。お前以外にも誰か未来の人間がこの時代に来ていて、未来から『魔導獣機』を転送――しているって事なのか？」

「そういう事よ」

ウリアは俺の問いに頷いて、続ける。

「だから――そうね、その『魔導獣機』を転送している奴を“消せば”……一応、今の所は安全になる」

「オイオイ“消せば”って……また随分と物騒な言い回しをするじゃないか、ウリア」

「解ってる。解ってはいるけれど……秀？　あなたの方こそ解っているの？」

「……ああ、解ってるよ」

解っている、つもりだ。

やらなきゃ、やられる。

俺が今立っているのはそんな危ない場所――そう、言うなれば戦場の真っただ中に俺は今立っているのだ。

だから――“そんな事”は解っている。

――だけど。

「でも、それは……その『魔導獣機』を転送している奴を“殺す”なんていうのは」

「……大丈夫。心配しないで」

「秀の手は汚させない」とウリアは椅子から立ち上がってこう言った。

「汚れるのは……私の手だけで十分だから」

「いや、だから……それも違うだろ」

「……秀、お願い」

そして――ウリアは俺にこう懇願してきた。

「今は……今だけは“そういうもの”だって……割り切って、お願いだから」

「……ウリア」

「秀がそうしてくれなきゃ……いつか、私は秀の事を護り切れなくなるかもしれない」

「……」

間違っている――ウリアの考え方は絶対に間違っている。

俺はそう思う。

――けれど。

今が“そう思うべき”なのなら――“そう思わざるを得ない”のならば。

……俺は。

「……解ったよ、ウリア」

「うん、ありがとう、秀。……そして、ゴメンね、秀」

「気にするな……お前は俺を護る為に、頑張ってくれているんだからな」

「だから、謝らなくていい」と俺は言う。

……まぁ、皮肉を言わせて貰うと俺の事を護る為に頑張っている奴が勝手に俺の遺書を書くのもどうかと思うが。

「……さてと、それじゃあ」

しかし、そんなウリアでも俺を護る為に頑張ってくれているのは列記とした事実な訳で。

「今晩の戦闘の前に……腹ごしらえでもしておくか」

◆◆◆

そして、夜はやってきた。

現在――時刻は午後9時半。

てっきり、また昨日と同じような怪物がやって来るのなら予め昨日の海岸に移動するのかを俺は思っていたので――今夜、ウリアが戦闘を行う為に選んだ場所に俺は少しばかり驚いていた。

俺とウリアは未来から転送されてくるであろう『魔導獣機』を待ち構えるべく――自宅から少し離れた住宅街の通路のど真ん中に立っていた。

「……なぁ、ウリア。本当にこんな所で戦うつもりなのか？」

「ええ、勿論」

「勿論って……お前、昨日の同じくらいの規模で戦ったら、ここら辺一帯が吹き飛ぶぞ」

「だから、言ったでしょ、ここを出る前に。今日の戦闘は……あくまで、『魔導獣機』を未来から転送している奴を見付ける為」

「だから」とウリアは昨日と同じく夜空を見上げたまま言う。

「心配しないで……『魔導獣機』が転送されたら、それを一瞬で倒して、私は転送している奴を捜しに行くから」

「……何だろう。普段のお前を見ているとその言葉に一寸たりとも頼もしさを感じない」

「なっ！　ちょっ、それは一体全体どういう意味――」

――その時だった。

俺の手の中で白い欠片がこちらも昨日と同じように光を放ったのだ。

「来たわね……」

そう言って――夜空を振り仰ぐウリア。

しかし、俺は未だ光り輝くその欠片を見据えたまま先ほど家でウリアが語ったこの欠片についての説明を思い出していた。

◆◆◆

「その欠片はね、魔力に対して反応を示すの」

俺の部屋にてウリアは俺が持っているペン状の白い欠片を指差して言った。

「だから、昨日は『魔導獣機』が現れた時にその欠片が光ったのよ」

「なるほど……まぁ、古代に滅びたはずの文明に反応するのなら、『魔導獣機』にも反応するのか――って、あの化物、原動力は魔力なのか？」

「ガソリンとかで動いているのかと思った？」

「……い、いいや？」

正直、そう思っていたけれど俺はとりあえず誤魔化した。

ここで、俺がガソリンで動いていると思っていたなんて白状したらまたウリアに脳味噌が入っていないとか罵倒を浴びせられかねないからだ。

「『魔導獣機』の原動力は魔力――そして、あの巨大な機体自体も魔力であの形を保っているようなものなの」

「そうだったのか」

「そう。だから、『魔導獣機』の中にある『核（コア）』と呼ばれる場所を破壊すれば、『魔導獣機』の機体の全ては一瞬にして破壊されて、跡にはその欠片すらも残らないわ」

「……なるほど」

俺は昨日のウリアが破壊した『魔導獣機』の事を思い出す。

あの時――砂浜でウリアが炎の剣を『魔導獣機』の胸辺りに突き立てた瞬間、本体から？がれた翼までもが一気に焼失した。

「……とりあえず、秀が拾ったその欠片は、鍵であり、センサーのようなものだから。その欠片が光った時は――『魔導獣機』か、その他の何かが来ると思って警戒した方が良いわね」

◆

◆

◆

――以上が、ウリアのこの白い欠片についての説明だった。

「本当に光った……って、事は」

俺は隣に居るウリアと同様に夜空を見上げる。

その瞬間、またもや空の景色の一部が歪みを帯び始めた。

「……なぁ、ウリア。ちょっとした質問があるんだけど」

「何よ。手短にね」

「この欠片が魔力に反応するのなら、どうしてこの欠片はお前に反応しないんだ？」

「それは……その、私には周囲に感知されないように、私の中の魔力を外に出さない為の――そう、術が掛かっているから」

「そうなのか……いや、聞きたい事はそれだけだ。宜しく頼むな、今夜も」

「うん、任せておいて、秀」

そう言って――前方へとゆっくりと歩き出すウリア。

――何だろう。

俺が今の質問を――どうしてウリアそのものにこの欠片が反応しないのかを聞いた時。

気のせいかも知れないが……ウリアはどこか、その問いに答え難そうにしていた。

どうしてだろう。

そんな疑問を考えている内に――俺から5メートルほど離れた距離で立ち止まったウリアの足元に深紅に光る魔方陣が出現した。

魔方陣から湧き上る魔力のせいだろうか――ウリアのツインテールが空に向かってフワフワと上向きに漂っている。

……ていうか、今更だけどいつの間にかあいつツインテールに戻してるな、髪型。

戦闘中はあの髪型だと落ち着かないのだろうか。

そして――そんなどうでもいい思考を俺が巡らせている中で、夜空に段々と漆黒の穴が形成されていく中で。

ウリアは――“唱え始めた”。

「――天よ。我は器なり」

夜空ではそこに広がる満天の星を呑み込むかのように空間の捻れが激しさを増していく。

「神の力を受けるべき、器なり」

捻れはやがて渦へと変化して――そして。

「天よ――その神の器である我に神の力を授けよ」

夜空よりも暗い――漆黒の穴を創造した。

「神の力――紅焔天使（ウリエル）の力を」

不意に――俺の前からウリアの姿が消えた。

いや、消えたのではない――俺にはそう見えただけだ。

正確には“突如地上から溢れ出した巨大な火柱にウリアが呑み込まれた”――と言うべきなのか。

「ウリア……！」

初めはウリアが敵の攻撃に呑まれたのかと俺は誤解した。

しかし、まだ漆黒の穴からは『魔導獣機』は出て来ていない。

それならば――この炎の柱の正体は何なのか。

そう思った所でゆっくりと目の前の炎の壁が解け始めた。

そして――俺はその中に。

劫火の中に佇むウリアの姿を発見した。

「……ウリア」

炎の中からその姿を現したウリアは昨日と同じように背中から翼を生やしていた。

しかし、その翼は昨日の翼とはまるで“姿形（すがたかたち）”が違っていた。

昨日、ウリアが背中から生やした翼は単なる炎で形成された深紅に光る翼だった。

――けれど。

今、ウリアが背中から生やしているその翼は――何と言うか“実体”が完全に再現されていた。

正確に言うならば、炎で無理矢理翼を象っているのではなく、深紅の光を仄かに帯びた白い天使の翼――と言った所だろうか。

そして、咄嗟に今俺が使った“天使の翼”という呼称はあながち間違ってはいなかった。

ウリアの頭の上には――その翼と同じように深紅に光る天使の輪が浮かんでいたからだ。

まさしく――今のウリアは天使だった。

すると、不意にウリアはその天使の翼を羽ばたかせて上空へと飛翔した。

それと同時に空に出現した漆黒の穴からも何かが出て来た。

最初は――その『魔導獣機』を俺は蛇かと思った。

しかし、現代の常識が未来の常識にどれほどまで通用するかは解らないが――少なくとも、蛇は空を飛ばない事を俺は知っている。

それならば、その非常に蛇に近い『魔導獣機』は何をモチーフにして創られたのか。

――それは。

紅焔天使？

「……龍……！」

漆黒の穴から出て来たのは灰色の鉄製の巨大な龍だった。

その巨大な龍は蛇のようにくねくねと空中を滑るように進んで行く。

すると、その龍の進行方向に天使化したウリアが立ちはだかった。

巨大な機械の龍はそのウリアの姿を捉えると――その大きな口を開けて昨日の怪鳥のように鳴いた――いや、吠えたと言うのが妥当か。

何しろ、凄まじくけたたましいノイズのような鳴き声を発したのは間違いなかった。

そして、昨日は建物も無い殺風景の海岸で戦っていたから解らなかったのだろう。

そのノイズで――周囲の家の窓ガラスが一瞬にして吹き飛んだ。

「うわっ！」

俺は降って来るガラス片に咄嗟にその場にしゃがみ込んで最低限自身を護る。

上空ではウリアが俺の為に戦ってくれているのだ。

俺だって――最低限は自分の身を自分で護らなければ示しが付かな

いだろう。

「くっ……！」

ガラス片の雨を凌ぎ切った俺は再度その場に立ち上がって上空を見上げた。

そこでは未だウリアと巨大な機械の龍が対峙している所だった。

すると、ウリアの“右手”に変化が起こった――深紅の光がその手に集約する。

そして、その光は大きな深紅の弓へと姿を変化させた。

創造された深紅の弓――更にウリアの“左手”にも深紅の光が集約し始める。

ウリアの“左手”に創造されたのは矢の方だった。

そのウリアの動きに『魔導獣機』は危険を察知したのか――それとも、それを転送した人物の方が危機を感知したのか。

不意にその巨大な機械の龍はウリア目掛けて突進を開始した。

昨日の怪鳥ほどでは無いが――それでも、龍は猛スピードでウリア目掛けて空中を突き進んでいく。

対するウリアは迫り来る巨体に臆する事無く――創造した光の矢を同じく創造した弓で構える。

ウリアの手によって矢が引かれる――光の弓の弦が軋んだ音を立てた。

――そして。

ウリアは左手を光の矢から“離した”。

解き放たれた深紅の光の矢は巨大な龍の口を貫通し、胴体を貫通し、最後に尾を劈(つんざ)いて――光の一閃となって夜空の彼方へと消えた。

それは一瞬の出来事だった。

光の矢に劈かれたその巨体は――昨日の怪鳥とは違い、燃えるのではなく大爆発を起こした。

周囲に響き渡る轟音――吹き荒れる突風が空中に漂っている爆煙を纏めて吹き飛ばした。

しかし――結果は昨日と同じだった。

爆発の跡に残っていたのは――やはり、天使の如く翼を生やしたウリアの姿だけだったのだから。

「……ウリア」

俺は戦いの終わりを見届けて――安堵の息を漏らす。

――けれど。

ウリアの戦いの方はまだ終わっていなかった。

巨大な龍を一瞬で破壊したウリアは光の弓をその手から消すと再び足元に深紅の魔方陣を出現させる。

それから、暫しの沈黙の後――ウリアはこう言った。

「……見つけた」

そう呟いたかと思うや否や、ウリアはその深紅の光を帯びた天使の翼で羽ばたき――どこかへと飛び去ってしまった。

◆◆◆

巨大な機械の龍が――『魔導獣機』が私を殺そうと迫ってくる。

けれど、私は全く臆しない。

恐怖すらも、感じない。

私はただ、弓を携えて、矢を構えて――ただそれを解き放てばいいのだから。

私の放った光の矢は私の飲み込もうとその両顎（りょうあご）を上下に開いた『魔導獣機』の口の中に命中した。

そして――その矢は命中しただけでは止まらなかった。

光の矢はその龍の胴体を貫通し――大穴を空けて、夜空の彼方へと

まさしく光速で過ぎ去ってしまったのだから。

私の前で龍が爆発を起こす。

秀は大丈夫だろうか――いや、大丈夫だろう。

爆発を起こしたという事は私の矢は見事『核』を撃ち抜いたのだから。

破片が秀に当たる訳が無い。

だから、私は次の行動を起こした。

爆風で空中に立ち込めていた灰色の煙が吹き飛ばされていく中で――私は発動している弓を一度解除して、更なる魔方陣を出現させる。

この魔方陣は――今の『魔導獣機』を現代に転送した人間を探索する為のものだ。

転送した人間の中に宿る魔力によって『魔導獣機』は人間からの命令を理解して、動く。

だから、周囲に残っている魔力の流れを辿れば――自(おの)ずと、先程の『魔導獣機』を操っていた人間のもとに辿り着く事が出来るのだ。

そして、私の思惑通り――魔方陣に反応があった。

「……見つけた」

私はそう呟いて背中に生やした翼で飛び――光の速度でその人間の

もとへと向かう。

紅焔天使？

住宅街の外れ――そこにあった森の広場に。

その男は、居た。

私はその男の居る広場へと降り立つ。

私が地面へと足を着いた瞬間、背後の木々の陰から新たな『魔導獣機』が飛び出してきた。

おそらく、この男が予備として念の為に転送しておいたものなのだろう。

モチーフとしている形は『狼』――だったのだろうか。

よく解らなかった。

何故なら――私はその『魔導獣機』が飛び出してきた瞬間に条件反射で創造した炎の剣を振るっていたから。

私の放った斬撃はその『魔導獣機』の首を刎ね飛ばした。

それから、私はやっとその『魔導獣機』の姿をちゃんと見る為にその機械の獣と向き合う。

首は無くなっているが――おそらくはモチーフは『狼』、もしくは『犬』だろう。

少しばかり――私の知っているそれらとはサイズが大きいような気もするけれど。

「くそっ！」

そして、私の後ろでそんな男の悪態を付く声と草むらを揺らす音が聞こえて来た。

逃げたか――私はそう思いながらも首を失った『魔導獣機』と対峙する。

首を刎ねたとしても、そこに『核』が無ければ倒した事にはならない。

「……」

私は無言で炎の剣の柄を握り締める。

それと同時に首を失った『魔導獣機』が私に襲い掛かって来た。

しかし――遅い。

私は翼を羽ばたかせ――光速で移動しながら剣を振るう。

一般的に『魔導獣機』の『核』はその機体の中心にある。

だから、私は『魔導獣機』の機体を真っ二つに両断した。

二つに分かれた『魔導獣機』の機体は――地面に落下する前に劫火に焼かれて焼失した。

「……」

焼失した『魔導獣機』に私は先ほどの男が逃げたであろう森の中を振り返る。

しかし、無論そこには既に男の姿は影も形も残ってはいなかった。

けれど、私は秀の為にあの男を殺さなければならない。

秀の為に、殺さなければならない。

「……後で、秀に怒られるかも知れないなぁ」

いや、秀はきっと怒るだろう。

これだけの規模の森林を“焼き払ったら”――自然保護団体でなくとも、怒りを覚えるだろう。

でも――仕方ないのだ。

秀の命を護る為には。

例え森林を巻き込んだとしても――その命を狙う人間を殺さなければならない。

だから、私は周囲から取り込んだ魔力を光に変換して――その光を炎の剣に集約させる。

集約された光は炎の剣を進化させ、その形状を変化させ、“炎の塊

”から“本物の剣”へとその姿形を変化させる。

私はその変化させた剣の柄を両手で握り締めると――目を閉じて、その切先を天に向けるように構えた。

すると、私が立っている森の広場から炎が巻き起こった。

湧き上った劫火は渦を巻いて――私が天に掲げている剣の刀身に集中していく。

――そして。

私は一度閉じた瞼を開けると――そのまま、一気に掲げていた剣を前方に広がる森林に向かって振り下ろした。

その瞬間。

広大な森林を――深紅の劫火が一瞬にして呑み込んだ。

◆◆◆

「……」

俺はウリアの帰りを家の前で待っていた。

ていうか、先ほど住宅街の外れの森の方でオレンジ色の――まるで、森全体が燃えたかのような、そんな光が見えたのだが。

気のせいだろうか……気のせいであって欲しい。

まさかのウリアでも、俺を護る為とか言いながら森林を全て焼き尽くすほど、馬鹿では無いだろう。

馬鹿では――。

「……いや、馬鹿かも知れないなぁ……」

俺は遠い目でそんな事を呟いた。

だって、カップラーメン如きで俺に忠誠を誓うかのような事を言う奴である。

そんな事を思っていると――夜空に深紅の光を帯びた天使の翼を携えた少女が飛んできたのが見えた。

ていうか、紛れも無くウリアだった。

「よう、お帰り、ウリア」

「う、うん、ただいま、秀」

「お疲れ様、今日も大活躍だったな」

「で、でしょう？　もっともーっと褒め称えてくれてもいいのよ？」

「ああ、跡で褒め称えてやるよ。……でも、その前に一つだけお前に聞きたい事があるんだけど」

「な、何？」

「さっき、住宅街の外れの森がある辺りで、まるで大火災みたいな、そんな感じの勢いの炎の光が見えたような気がしたんだが……」

「……」

「まさかお前、俺を護るとか言う名目の下に、森を全部燃やした――なんて事は言わないよな？」

「……」

「……」

俺はウリアの頭をチョップした。

「い、痛いわね！　急に何すんのよ！　私まだ何も言ってないじゃない！」

「うるせえ、三点リーダの数、と言うか、沈黙が既に答を語ってるんだよ」

「解らないじゃない！　ただ単に文字数を稼ぐ為の三点リーダの羅列かも知れないじゃない！」

「なるほどな、そういう考えもあるが、そっちの方がもっと駄目だ」

「だ、だって、仕方ないじゃない……あの『魔導獣機』を操っていた奴を倒す為にはああするしかなかったんだから」

「……」

俺は目の前であからさまにしゅんとしてしまっているウリアに少し驚いていた。

だって、戦いの時もそれ以外の時もずっと強気のウリアが――俺の前で凹んだ表情を見せたのである。

何か……こう、更にからかいたくなるのは何故だろうか。

もしかすると、俺は物凄くサディスティックな人間なのかも知れない。

「……って事は、ウリア。お前はあそこにあった森林を全て燃やし尽くしてしまったと言う訳だな？」

「う、うん……ゴメンナサイ」

「仕方ない……それじゃあ、罰として今日のお前の夕飯は抜きだ」

「ええっ!?　な、何で!?」

「実は、俺って森林愛好家なんだよ」

「そ、そうだったの!?」

「ああ、実はそうだったんだよ。お前は気付かなかっただろうが、俺の部屋の至る所には森林に関する本や雑誌が置いてあって、更にパソコンの中にはマイベスト森林画像が山ほど保存してある――俺はそれほどの森林愛好家なんだ」

「そ、そうだったんだ……あのっ、えっと、私……秀がそんな趣味を持っている事なんか、気付かなくて――ていうか、知らなくて」

「ああ、残念だなぁ、あの森には二度と行けないのか……あの森には週に一度散策をする為に三年前から通い詰めている物凄く馴染みのある森だったんだけどなぁ」

「ええっ、そ、そうだったの!?」

「ああ、最近ではあの森の精霊の声が聞こえるくらいにまで達してしまったくらいだ」

「そ、そこまで……！　秀、あなたって聞こえない声が聞こえてくるほどの痛いくらいの森林愛好家だったのね……ゴメンナサイ、私その事知らなくて」

「……」

本気で凹んでいるのか、それとも今俺の目の前に居るウリアが猫を被っているのか――何か解らなくなって来た。

「で、でも！　心配しないで、秀！　今日あなたの最後の友達の幼馴染の子は秀を見捨てちゃったけれど、今度からは私が秀の唯一無二の親友になって上げるから！」

「勝手に話を進めるな！　俺にだって友達くらいは居るよ！　流石に！」

「えっ、でも、友達が居ないから有りもしない友達を――いわゆる、エア友達を森の中で勝手に作っていたんじゃないの？」

「違うわ！　俺はそこまで残念な性格じゃねーよ！」

「えっと、友達の名前はトモちゃんだっけ？」

「それは俺の事を言っているのか、それとも他の誰か残念な性格を持つ架空のキャラに対して言っているのか、どっちだ」

ていうか、それ以上は言わないで欲しい。

色々と危ないような気がする。

「ああもう、いいよ、解った……森を燃やした件は水に流してやるよ」

「えっ、ほ、ホント！？」

「ああ、本当だ」

まぁ、俺一人の権限でどうにかしていい問題ではないのだろうけれど。

「けど、今度からはあそこまで大規模な事はやらかすなよ、ウリア」

「うん、解った……解ったから、その、今日の夕飯は……？」

「……」

そこで気になるのが夕飯の事かよ。

「解ったよ。夕飯もちゃんと作ってやるから、そこまで凹むな、からかいたくなるだろうが」

「えっ？」

「間違えた。心配になって来るだろうが、そこまであからさまに凹まれると」

「……もしかして、私の事、心配してくれてた？」

「当然だろ。今に限らず、お前が戦っている時はいつも心配してやってるよ」

俺はウリアに向かってそう言った。

すると、俺は背中に衝撃を受けた。

ウリアに叩かれでもしたのだろうか――俺はそんな事を考えたがど

うやら違うようだった。

何故なら、未だ俺の背中には“その感覚”が残っていたからだ。

その――“二つの柔らかい弾力のある感触”が。

そう、俺は今、後ろからウリアに抱き着かれたのである。

「……う、ウリア？」

「私の事を心配してくれていたみたいだから……そのお礼で、抱き着いて上げたのよ」

「同世代の可愛い女子に、後ろから抱き着かれる」とそう言いながらウリアは俺の背中から顔を離してこちらを仰いできた。

「男子のロマンの一つでしょ？」

「フッ……自分で可愛いとか自惚れた言葉を言う女子に抱き着かれても……なぁ？」

「何よそれー、素直じゃないんだからー」

「俺はあくまで素直だよ。単に素直な感想を語っただけで」

「何よ、もー」

「折角抱き着いて上げたのにー」とウリアはぷくーっと頬を膨らませながら少し不機嫌な様子で家の中へと入って行った。

そして――ウリアが家の中へと姿を消したのを確認した俺は。

「……はぁ……！」

ずっと我慢していたため息をついた。

ため息とは言っても――呆れたものでは無く“至福”のため息である。

「う、ウリアの奴……不意打ちにも程があるだろ……」

実際、俺はウリアに抱き着かれた時、冷静な言葉を述べていたのだが――内心はドッキドキだったのである。

つーか、あのシチュエーションでドキドキしない方がおかしい。

正直言うとウリアが戦っている時よりも緊張したような気がする。

不謹慎だろうか。

「……しかし」

俺はまだ微かに残っている“その感触”に先ほどのウリアが抱き着いてきた時のシーンを思い出した。

「ウリア……やっぱり、あの妙なスーツ着ている時の方が胸デカいよな……ずっと着てればいいのに」

「秀～？」

「お、おう、どうした！」

おおう、危ない……まさか、今の俺の独り言聞かれてないよな？

「早くしてよ。私、戦った後でお腹ペッコペコなんだけど」

「ああ、解った……カップラーメンで良いんだよな？　ていうか、それしかないけど」

「あったりまえじゃない！　本当は“しーふーどー”があればいいんだけど、今日はまたあの無味の方で勘弁して上げるわ」

「無味って言うな、スタンダードと言え。ていうか、何気にお前あっちの味も気に入ってんじゃねえか」

そんな事を言いながら俺はウリアと共に家の中へと入る。

ウリアはどうやらシーフードと言うかカップラーメンそのものが大のお気に入りらしい。

今度カレー味のヤツも食わせてやるか。

俺はそんな事を思った。

そんな事を思えるくらいに――俺はウリアに心を許せるようになってきた。

7月29日

（昨夜、●●町の住宅街の外れの森林が一夜にして焼失するという怪現象が起こりました）

「……」

（周囲の住民の話に寄れば、その怪現象が起こる前に謎の音で窓ガラスが割れたり、大きな爆発のような音がしたりした模様で、警察側はこの一連の騒動がテロの可能性もあると懸念しており、●●町の住人に注意を呼び掛けて――）

そこで俺はリモコンの遠隔操作でテレビの電源を落とした。

見ていられなかった――聞いていられなかった。

つーか、これ以上見たくもなかったし、聞きたくもなかった。

すると、リビングに大きな欠伸をしながらウリアがやってきた。

家の中ではやはりツインテールを解いているらしく――その金髪は寝起きだからなのか至る方向へとボサボサに跳ねてしまっている。

「あっ、おはよう、秀。今日は早いのね――って、何よ、何か顔色悪いわよ？　大丈夫？」

「……俺の顔色が本当に悪いのなら、それは多分お前に原因があると俺は思う」

「ちょっと、何を勝手に私のせいにしているのよ。どうせ、アレでしょ？　変な夢でも見て夜中によく眠れなかったんでしょ？」

「……いや、よく眠れなかったのは事実なんだけどな」

しかし、変な夢を見た訳では無い。

昨日の夜、ベッドで寝ていた俺はウリアによって強制的にそこから立ち退かされる羽目になったのだ。

ウリアは俺の部屋で俺と一緒に寝ているのだが――いや、別に変な下心が俺にある訳では無くて。

寝惚(ねぼ)けていたのか、意図的にやったのかは解らないけれど――とにかく、俺はウリアの手でベッドから立ち退く羽目になったのである。

ていうか、引き摺り下ろされたと言っても良い。

放り投げられたと言っても過言では無いだろう。

「いやー、昨日はよく眠れたわ……お陰でもう昼なのに今の今までグッスリ眠っちゃったもん」

「そうか……ベッドは寝心地良かっただろ？」

「うん、案外良かったわね……って、あれ？　私、昨日ベッドで寝たっけ？」

「さぁな、俺は“部屋の床”でグッスリ眠っていたから知らないな」

「そう。それならいいけど」

「……」

態と“部屋の床”という部分を強調して皮肉交じりに言ったつもりだったのだが――どうやら、効果どころか、昨日自分が寝惚けてやった事を思い出す気配すらない。

まぁ、普段使っているベッドで女子が寝るというシチュエーションも中々――って、いやいや、何を言っているんだ、俺は。

「ていうか、テレビ点けないの？」

「点けたいなら点けろ。そして、現実を受け止めろ」

「何よ、それ……訳解んないんだけど」

そう言いながらウリアはテレビの電源を入れるとリモコンを弄って適当なチャンネルに合わせ始める。

すると、意外にもウリアがチャンネルを合わせたのはとあるニュース番組だった。

それも、地方のニュース番組だから丁度良く先ほど俺が見た“その怪現象”の事が報道されていた。

「……」

俺は傍にあった新聞を手に取りながらウリアの反応を見る。

さて、こいつは自分が起こした“怪現象”に対してどんなリアクションを見せるのか。

俺は新聞の記事を読むフリをしながら――ウリアの反応を伺う。

そして、そのニュース番組にてその“怪現象”についての報道が終わった所でウリアはこう言った。

「……ふーん、世の中不思議な事も起こるものね」

「……」

俺は筒状に丸めた新聞でウリアの頭を比較的強く殴った。

「痛いわね！　昨日もそうだったけれど、何で急に私の頭を叩くのよ！」

「お前に罪の意識が全く存在していなかったからだ」

「何よそれ！　全く以て意味が解らないんだけど！」

「うるさい、黙れ。お前に戦闘以外の何かを期待した俺が馬鹿だった」

「何言ってるのよ！　私だって戦う以外に出来る事くらいあるんだから！」

「ほー、それじゃあ、何か一つ見せて貰おうじゃないか」

「良いわよ。秀、それじゃあ」

そう言って――握り拳を俺に見せ付けたウリアは。

「ジャンケン――ポン！」

ウリアの掛け声に俺は反射的にグーを出す。

ちなみに、ウリアはチョキを出していた。

「……」

「……」

――そして。

「……ほらね！」

「ほらね、じゃねーよ！　ジャンケンくらいルール知ってたら誰でも出来るよ！　そして、そのドヤ顔を止めろ！　何かイラッと来るから！」

つーか、お前負けてるし！

ジャンケンが出来るって主張したいのならせめて俺に勝ってから言えよ。

「……ていうか、話は変わるけどさ、ウリア」

「何よ、秀」

「お前、着替えなくていいのか？」

「着替え？」

「いや、だから、お前ずっとその洋服着てるじゃんか。だから、その……他の洋服に着替えたくはないのか？」

「うーん、そうねぇ……確かにこの洋服はいわゆる戦闘服みたいなものだから、動き易いけど、正直に言えば可愛くないわよね」

7月29日？

「だろう？　だったら、他の洋服に着替えてみたいよな？」

「それは着替えてみたいけど……それ以前に、この家って女物の洋服あるの？」

「あるに決まっているだろう」

「……」

「……えっ、何で俺は今ウリアから蔑（さげす）むような視線を受けているんだ？」

「……何で、今の所、秀しかこの家の住人を見た事が無いのに、この家に女物の洋服があるのよ」

「……」

……あっ。

「お前、俺を女装が趣味の変態だと思っているな！？」

「それ以外にどう思えって言うのよこの変態！」

「既に“変態”という呼ばれ方が定着している！？　違う！　この家に洋服があるのは俺に姉が居るからだ！」

「……その姉って、秀が女装した際に生み出される姉という設定の

話じゃないわよね？」

「お前、どんだけ俺に女装趣味を定着させたいんだよ！」

「女装趣味を定着させたい訳じゃないわ。秀に変態キャラを定着させたいの」

「断固拒否させて貰おうか！」

「ていうか、既に秀には変態キャラが定着しているけれどね」

「何っ！？　莫迦（ばか）な、一体いつ俺に変態キャラが定着していたと言うんだ……！」

「私の胸に顔を埋（うず）めたり、私の裸を見たり」

「全部不可抗力じゃねーか！」

それは決して俺のせいではない！

「全く、不可抗力で変態扱いされては堪らないぜ……確かに、幼馴染の霧歌にはメイドコスを頼もうとした事はあるが」

「……」

「……」

「……ねぇ、ちょっとそこの変態」

「変態じゃない！　幼馴染の女子にメイドコスを頼む事くらい日常

茶飯事だろ！？」

「今すぐに黙らないと私が強制的に黙らさせるわよ」

「えっ、キスで？」

そして、俺はウリアの拳を鳩尾（みぞおち）に受けた。

「ぐっ、おおおおおおお……！」

「……拳で黙らせるって、言ったのよ」

「言ってないじゃん！　言う前に飛んできたぞ、お前の拳は！」

「それで？　秀のお姉さんの部屋はどこにあるのよ。さっさと案内しなさいよこの変態」

「案内してやるのは構わないけれど、俺の呼称を“変態”で統一し始めるのは止めろ」

「えっ？　秀って罵（ののし）られる事に快感を覚える特殊な性癖の持ち主じゃなかったっけ？」

「それこそただの変態じゃねーか！　俺は生憎（あいにく）、そんな特殊な性癖を持ち合わせてなんかいない！」

「ふーん……それで？　そこの変態さん」

「兵隊さんみたいに言うな。名前で呼べって言ってんだろ」

「真之乃変態さん」

「俺の名前は変態じゃねえ！　俺の大事な名前に何て事をするんだ！」

「えっ？　名前で呼べって言うのは“変態”という呼称を名前の代わりに使って下さいって意味じゃなかったの？」

「何そのお前の捻くれた理解の仕方は！　違うに決まってるだろ！」

「解ったわよ……それじゃあ、変態秀さん」

「今度は苗字に何て事をしやがるんだ！　つーか、いい加減に俺の名前をちゃんと呼んで下さい、お願いします！」

「まぁ、そこまで頼まれちゃ仕方ないわね……」

「……」

こいつ……！

実は、生粋のSだな……！

「……まぁ、いい。俺の名前の事は許してやろう」

「あら、怒らないの？」

「怒らないよ。今は、な」

「……“今は”？」

「今日のお前の夕飯を抜けば済む事だからな」

「なっ……！」

すると、ウリアは戦慄した表情を見せると椅子からガタッと音を立てて立ち上がった。

「わ、私の夕飯を抜くなんて……！　秀、私はあなたがそんな極悪人だなんてちっとも思わなかったわ……！」

「お前、何か昼ドラでも観たのか？」

台詞が演技染みていると言うか、昼ドラ染みているのだが……。

「冗談だよ。別に怒ってなんかいないから、さっさと俺に付いて来い」

「何だ。やっぱり、秀って女子から罵られると興奮するような変態だったのね」

「だから変態じゃないって言ってるだろ」

「見直したわ」

「見直すな！　俺は見直されるような事は一度もしていない！」

そんな会話を交わしながら俺はウリアと共に二階の姉の部屋へと向かうのだった。

◆
◆
◆

姉の部屋は俺の部屋のすぐ隣に存在する。

俺は部屋の扉を押し開ける。

扉の向こう側には――当たり前だが、姉の部屋があった。

姉の部屋を見るのは――何年ぶりだろうか。

初めてくらいに感じるほどに――久しい感じがする。

7月29日？

「へーっ、ここが秀のお姉さんの部屋なのね……」

すると、俺より先にいつの間にかウリアが姉の部屋に入っていた。

「……ああ、そうだよ」

俺は何となく苦笑しながらウリアに続いて姉の部屋に入る。

部屋に敷かれた赤いカーペットも、タンスも、机も、何もかもが昔のままだ。

しかし、少しだけまた埃（ほこり）が溜まっているだろうか。

また今度掃除をしなければならない。

「そこのタンスに洋服が入っているはずだから、適当に出して合わせて良いぞ」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて……流石は秀ね、尊敬するわ」

「どういう理屈で尊敬したのかは知らないが、本来、尊敬すべきではない事柄で俺の事を勝手に尊敬し始めるのは止めろ」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて……流石は秀ね、尊敬するわ」

「オイ、何故その言葉を二回言った」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて…
…流石は変態ね、軽蔑（けいべつ）するわ」

「だから、何故その言葉を――」

……ん？

「あっ、お前！　今さり気無く俺の事をまた“変態”って言ったな
！」

「“変態”とも言ったし、“軽蔑する”とも言ったわよ」

「何だと!?　お前、いい加減にしないと今度は俺がお前の口を黙
らせるぞ！　主にキスで！」

「そんな事をしたら、警察を呼ぶわよ」

「警察だけは勘弁して下さい、お願いします」

気が付けば、俺はまだ未遂であるにも関わらずウリアに平謝りをし
ていた。

ていうか、どうして俺はウリアに謝っているのだろう。

これでは、まるで俺が日常的に犯罪染みた行動を取っているみたい
ではないか。

そんな事を思っていたら、タンスの引き出しを開ける音が聞こえて

来たので俺は顔を上げた。

「……ていうか、秀」

「何だ？」

「洋服を貸してくれるのは嬉しいんだけど……これ、私が勝手に使ってもいいの？　お姉さんのでしょ？」

「ああ、良いんだよ、別に」

「ていうか、秀にお姉さんが居るのなら……そのお姉さんはどこに居るのよ。今の今まで一度も見掛けていないけど」

「姉は東京の大学に見事合格して、今は向こうに住んでるんだよ」

「へーっ……東京――首都圏辺りの大学って、もしかして名門なんじゃないの？」

「ああ、名門の中の名門だ。日本一頭の良い大学と言っても過言では無いかも知れないな」

「……秀のお姉さんってそんなに頭が良い人なんだ。秀のお姉さんだから、てっきり馬鹿な人だと思い込んでた」

「お前、遠回しに俺の事を馬鹿呼ばわりしていないか？」

「気のせいじゃない？　私はそんな事、微塵（みじん）たりとも思っているわよ」

「微塵には思っているんじゃねーか」

「それじゃあ……ついでに聞くけど、お父さんとお母さんは？」

「母さんはここことは別の県で――別の場所で、とある洋服のブランドの専属デザイナーをしていて、滅多に家には帰って来ない。まぁ、仕送りをいつも送ってくれているから、文句は全くないけど。それで……」

……父さんは。

「父さんは……三年前に、交通事故で死んじまった」

すると――俺のその言葉にウリアはハッとして罰の悪そうな表情を浮かべて。

「あっ……その、ゴメンナサイ、秀」

「気にするな。三年前の事だ……俺ももう流石に“その事”を気にしていないから」

「……でも」

「ほら、そんな事よりも早く色々と着て回れよ。俺はお前が洋服を選んでいる間にカメラを持って来るから」

「……うん、解った――って、ちょっと待ちなさい」

姉の部屋を出ようとした所で俺はウリアから呼び止められた。

「……ねぇ、秀」

「……何かな、ウリア」

「シリアスな雰囲気に呑まれて見落とす――いや、聞き落す所だったけれど。どうして、今から私が色々と洋服を着て回るのにカメラが必要な訳？」

「……なぁ、ウリア」

「……何よ、秀」

「シーフードのカップラーメン……買って来ようか？」

「そうね、久しぶりに食べたいわね、“しーふーどー”。買って来てくれたら、今の秀の失言については忘れて上げようかしら」

「そ、そうか……それじゃあ、俺ちょっと行って来るから」

「うん、解ったわ。いってらっしゃい、秀」

「おう、行って来るわ」

そう言って――俺はウリアの視線を背中に感じながら部屋の外に出ると扉を閉めた。

「……」

シリアスな雰囲気で誤魔化せると思っていたのだが――。

「世の中……そこまで上手く行く訳ないか」

そう呟いた俺はトボトボとした足取りで寝間着から洋服へと着替える為に部屋へと戻るのだった。

◆◆◆

晴れ渡った雲一つない晴天の下。

家から出て――近くのスーパーの前まで来た所で俺はふと疑問に思った。

「……そういえば、俺って追われている身なんだよな？」

今更ながらの疑問であったが、俺はそんな事を思って咄嗟（とっさ）に周囲を見渡す。

7月29日？

「拙（まず）いな……ウリアに同伴して貰えば良かった。でも、そういえば、今まで『魔導獣機』が襲ってきたのは夜だったよな……」

それに、ウリアは昨日その『魔導獣機』を操っていた奴を――倒したのだ。

「……それなら、比較的安心なのか」

若干の平穏を感じつつ俺はとりあえずスーパーの中へと足を運ぶのだった。

◆◆◆

「シーフード、シーフード……おっ、あった」

俺は買い物籠に棚から発見したシーフードのカップラーメンを入れる。

「それから、後は……ついでにカレーでも買っておくか」

続いて、俺はカレー、及び、スタンダードのカップラーメンを適当な数だけ買い物籠に入れた。

しかし、こうやって買い物籠にドカドカと商品を入れる行為というのは、些細（ささい）か心地よい気分になる。

何だか、大富豪になったみたいな――そんな気分を味わえるからだ。

まぁ、買い物籠にドカドカと入れられる商品が未だにカップラーメンから一向に増えないのも考える所ではあるが――。

「……ん？」

――と。

そこで、俺は野菜コーナーを歩いている霧歌の姿を発見した。

「おっ、きり――」

俺は霧歌にいつも通り声を掛けようとして――口を噤（つぐ）む。

何をやっているんだ、俺は。

俺は一度、玄関で霧歌に全裸で居る所を見られたんだぞ！

しかし――このまま霧歌に誤解を受けたまま夏休みを終わらせる訳には行かない。

せめて、二学期が始まるまでには霧歌との関係を修復しておかなければならない。

そして、これが唯一無二のチャンスかも知れない。

……それならば。

俺が取るべき行動は――たった一つだ。

「……き、霧歌～！」

俺が選択した行動はいつも通りに霧歌に向かって声を掛ける事だった。

大丈夫、大丈夫だ。

霧歌なら――ちゃんと事情を説明すればあの事を許してくれるはず。

俺の呼び掛ける声に霧歌は陳列している野菜から俺へと視線を向けた。

――そして。

「……あっ、真之乃君じゃない。どうしたの？」

そう言って――俺に笑みを見せてくれた。

良かった。

どうやら、霧歌は怒っていないようだ――って、ん？

んん？

あれ、何か違和感が……あるような気がする。

今、霧歌は俺の事を何と呼んだ？

「き、霧歌？」

「何？　真之乃君、あなたの名前は真之乃君でしょ？　何を名前を呼び間違えられたみたいな顔をしているのよ、真之乃君は」

「いや、だって、最近まで霧歌、俺の事を下の名前で――正確にはあだ名で呼んでいたじゃないか」

「あれ、そうだったっけ？　ゴメン、よく思い出せないわ。どうしてかしら。もしかしたら、最近途轍もなく記憶の中から抹消（まっしょう）したい出来事があったからかも。ゴメンナサイね、真之乃君」

「……」

――ここで、俺は確信する。

こいつ、絶対に“あの事”を根に持ってやがる！

いや、当然と言えば当然なのだろうけど、まさかここまで根に持っているとは！

明らかに苗字で呼んでいるのも態とだし！

さり気無く会話の中に“あの事”を臭わせる発言を織り交ぜているし！

怖い！　やっぱり、こいつ怖いよ！

「……あ、あの、霧歌、さ」

「何？　真之乃君――って、あっ、またカップラーメンばかり買おうとして～。駄目よ、真之乃君。ちゃんとカップラーメンだけじゃなくて、料理を作れとは言わないけれど、他にもちゃんと食べないと。栄養、偏っちゃうよ？」

「いや、うん、忠告ありがとう、霧歌。ところでさ――」

「あっ、それから、真之乃君はちゃんと夏休みの宿題は終わらせてる？　駄目よ、ちゃんと日々一つずつ終わらせないと。夏休みというのものはね、永遠に続きそうで実は短いんだからね？　真之乃君、ちゃんとそこら辺理解してる？」

「ああうん、理解してる……でさ、霧歌――」

「本当に？　理解してるの、真之乃君は。今の今まで夏休みの宿題を真之乃君は期日までに終わらせた事が無いんだから、本当に、ちゃーんと理解しなきゃ駄目だよ、真之乃君は。真之乃君が今年の夏休み、提出日までに宿題を終わらせて来なかったら私怒っちゃうんだから――」

「俺が悪かった！　この通りだ！」

俺は咄嗟にその場で土下座をしていた。

周囲の視線など関係無かった。

俺がこんな所で土下座をするような格好悪い人間だと思われても良かった。

女子の前で土下座をするようなそんな格好悪い人間とも思われても

全然構わなかった。

ただ、長い事名前で俺の事を呼んでくれた幼馴染からこれ以上苗字で呼ばれ続けるのには――精神的なダメージがあった。

一言で言えば嫌だった。

いや、意外と辛いんだよ、苗字で呼ばれるのって。

死ぬほど辛いんだって、本当に。

ていうか、辛い以前に――俺はきっと霧歌から嫌われたくなかった。

あんな誤解を受けたまま嫌われるのが嫌だったのだ。

どうしようもなく嫌だったのだ、俺は。

多分、だけど。

7月29日？

「……」

当然ながら、俺には今霧歌がどんな顔をしているのか解らない。

だって、土下座をしているから地面――もとい、スーパーの床しか見えていないからだ。

だから、霧歌が今どんな表情をしているのか――俺には到底解るはずもない。

もしかしたら、“あの事”で軽蔑した表情を浮かべているかもしれない。

こんな真昼間から公衆の面前で土下座をした俺に引いているかもしれない。

ていうか、それ以前にもう既に俺の前から音も無く立ち去ってしまった後なのかもしれない。

そして、俺はただ一人で無言のまま土下座をしている状態なのかもしれない。

……。

最後のだけは、何か嫌だな。

そんな自分を思い浮かべるだけで何か泣きたくなってくる。

「……顔――いや、体を上げてよ」

すると、頭上から霧歌の声が降って来た。

その声に俺は少しばかり安堵する――どうやら、霧歌はこんな俺を無視して立ち去るほど薄情な奴では無かったようだ。

まぁ、霧歌がそんな事をしないのは幼馴染だから知っていたけどな！

……。

さて。

霧歌から声を掛けられた俺はゆっくりと――顔を上げて見る。

顔を上げた先には、無論、霧歌の姿があった。

そういえば、今更だけど霧歌の私服姿を見たのは随分と久しぶりな気がする。

幼馴染とは言えども、小学校くらいから余り遊ばなくなったからなぁ……。

だから、今の俺には霧歌の私服姿は物凄く有り難いものであり、また、物凄く萌えるものなのであった。

……いや。

今はそんな事を言っている場合じゃないな、うん。

「……この前の事、だけど」

霧歌は床に座ったままの俺を見下ろして言う。

「ちゃんと、私が納得してくれる説明をしてくれるのなら……許して、上げる」

「あ、ああ、する、するよ。ちゃんと霧歌が納得してくれるような、説明をするから……だから」

「……うん、解った」

「それじゃあ、許して上げる」と。

そう言って——霧歌は俺に笑みを見せてきた。

「えっ……も、もう、俺の事を許してくれるのか？」

余りの呆気無さに俺は拍子抜けしてしまった。

「だって、私が納得するような説明をちゃんとしてくれるんでしょ？」

「あ、ああ……勿論」

「だったら、“あの事”が一体どんな状況下で起きた事であっても、ちゃんとした説明をしてくれるのなら、私は許すよ？」

「……霧歌、お前——」

「でも、正確な説明をした上で、“あの事”が納得できたとしても“私的に”納得できなかったら――その時は、どうなるか解っているよね？」

「あ、ああ、うん……勿論、だよ」

霧歌は黒々としたオーラと共に俺に向かって満面の笑みを見せて来たのだった。

つーか、やっぱり怖い。

小学校の頃はそこまで怖くなかったのになぁ……何が霧歌をここまで変えてしまったのか。

「それじゃあ、今はとりあえず、呼び方を“秀ちゃん”に戻して上げる」

「ていうか、やっぱり態とだったのか……。もう二度とその呼び名で呼ばれないかと思うとヒヤヒヤしたぜ」

「あれ？　秀ちゃん、あだ名で呼ばれるのは嫌いじゃなかったっけ？」

「あだ名で呼ばれるのは嫌いだが、お前にあだ名で呼ばれる事自体は嫌っていないのさ」

「何よそれ、変なの」

そう言って――小さく笑う霧歌。

いつも笑っていれば可愛いのだが……こいつも。

いや、笑っていなくても十分に可愛いが。

◆◆◆

俺は自宅の前に辿り着いた所で重要な事に気付いた。

いや、ていうか、何故家に辿り着くまでに“その事”に気付かなかったのか。

俺は馬鹿か。

その場面はカットされたから――何て理由は言い訳にはならない。

ていうか、俺が言っていい台詞では決してないだろう。

俺が自宅前で――漸く気付いた重要案件（そのこと）。

それは――霧歌にウリアの事を“どうやって”納得させるか、だった。

ウリアの事を納得させる為にはウリアの全てをありのままに語ればいいのだろうか。

例えば――。

「こいつはウリアだ。俺の事を護る為に、２０５６年の未来からやってきた魔法少女なんだよ」

いや、無理だろう！

絶対に無理だ！

大体、ウリアのその説明自体にも無理があるのに！

そもそも、未来からやって来たのに魔法少女って、ウリアは色々と混ざってるんだよなぁ！　設定が！

未来からやって来た未来人なのか！

それとも、魔法少女なのか！

せめてどちらかにしてくれよ！

そして、例えそんな説明をしたとして――。

「へーっ、そうなんだ～。凄いね、ウリアちゃん。私、ちょっと尊敬しちゃった☆」

なんて展開になる訳が無い！

霧歌が語尾に『☆』を付けた口調になる事も含めて有り得ない！

誓ってもいい――神に誓ってそんな展開には絶対になる訳が無い。

7月29日？

「……」

どうしよう。

どうすればいいんだろう、この状況。

「秀ちゃん」

「えっ、な、何？」

「入らないの？　家に」

「い、いや、入るよ？　入るけど……えっと、その、鍵をズボンのどちらのポケットに入れたか忘れちゃって」

「秀ちゃん、それは多分両手を同時にポケットに突っ込んじゃえば解決すると思うよ？」

「……」

そう言えばそうだ。

何を言っているんだ俺は。

追い詰められていたとしても今の言い訳は酷過ぎるぞ。

そんな訳で、俺は両手をズボンのポケットに同時に突っ込んで（ち

なみに、鍵は左のポケットに入っていた）鍵を取り出すと玄関の施錠を解く。

とりあえず、霧歌は俺の部屋に上げよう。

ウリアはきっと今、リビングで何かしらテレビを見ているはずだ。

２０５６年――ウリアが話した通りの世界ならば、テレビなんて代物は余りお目に掛かれないはずだから。

きっと、ウリアは今頃テレビに熱中している事だろう。

だから、ウリアに気付かれないように霧歌を俺の部屋に上げる。

ウリアの説明はそれからだ。

「……よし」

完璧な作戦を一瞬にして作り上げた俺は玄関扉を引き開けて――。

「あっ、やーっと帰って来た」

――玄関に座っているウリアの姿を発見した。

「もう、何やってたのよ、秀は。お腹空き過ぎて死んじゃうかと思ったじゃない」

「……」

そのウリアの言葉と共に――俺の中で折角作り上げた完璧な作戦が

音を立てて崩れて行くのを俺は感じていた。

いや、そもそも完璧な作戦だったのかどうかさえ、崩れ去った今では解らないけれど。

とりあえず、作戦が崩壊してしまったのだけは解った。

「……」

……つーか。

「何でお前こんな所に居るんだよ！」

「ええっ！？　何か秀が急に怒り始めた！？」

「折角、普段は活用しない脳細胞を全てフルに使って作り上げた最上級の作戦が台無しだろうが！　どうしてくれるんだよ！」

「ちょ、ちょっと、何を理不尽な怒りを私にぶつけているのか知らないけど、それは多分私のせいじゃ――」

「うるせえ！　責任取れ！　責任取って後で俺の前でメイドコスをしろ！」

「秀！　ドサクサに紛れて私にメイドさんの格好をさせようとしてるでしょ！」

「つーか、何でお前テレビ見てないんだよ！　２０５６年から来たお前にはテレビは結構珍しいはずだろうが！」

「いや、確かに珍しいんだけど……この時間帯は昼ドラとニュースばかりで余り面白くないと言うか何と言うか」

「確かにそれには俺も同意だがな！　何で昼ドラの再放送ばかりするのかと夏休み中には特に思ってしまうがな！　それでも昼ドラは面白いものなんだよ！　ニュースは為になるものなんだよ！　余り見た事無いけどさ！」

「秀、何かさっきから言っている事が支離めとぅれ――メチャクチャだよ！」

「言えろよ！　支離滅裂ぐらい言えろよ！　まさかお前、日本語が達者っていう設定も実は嘘なんじゃないだろうな！」

「せ、設定って言うな！　今のはちょっと噛んじゃっただけだもん！　本当だもん！」

――そして。

「秀ちゃん、何をそんなに怒って――あっ」

「あっ」

ウリアと霧歌は――出会った。

出会って、しまった。

つーか、出会わなくて良かったのに。

……そして。

互いに出会った二人が互いに向けて言った言葉はこうだった。

「この前、この家の廊下でタオル一枚で居た人じゃない」

「この前、全裸で居る秀に親友としての見切りを付けて出て行った人だ」

霧歌とウリアは――そんな言葉を互いを指差して交わしたのだった。

それが二人の交わした最初の言葉だった。

そして、それは二人の交わした最初の言葉であると同時に、最悪の言葉でもあった。

シチュエーション的にも。

俺のイメージ的にも。

今後の――展開的にも。

色々と――最悪の言葉だった。

三つ巴

『三つ巴（みつどもえ）』――という言葉をご存知だろうか。

『三つ巴』という名の通りなのか否かは解らないけれど、とにかくその単語には三つの意味が存在する。

一つは、三つのものが互いに対立して入り乱れる事だ。

人とか、国とか――とにかく、三つのものが抗争を繰り広げたりする事を言う。

そして、もう一つは紋所（もんどころ）、及び、文様（もんよう）の名前だ。

紋所・文様とはいわゆる家門の事であり、特に、お玉杓子（たまじゃくし）のような形をした『巴』と呼ばれる柄が三つ合わさって円形になっているものの事を『三つ巴』と言う。

それから、最後の三つ目の意は――三人が向かい合って座る事である。

その場合は『三つ巴』ならぬ『三つ鼎（がなえ）』とも言うらしい、のだが。

何故俺が何の脈絡も無く、何の前置きも無く、突如こんな日本語の意味をペラペラと語り始めたのかと言えば。

「……」

「……」

「……」

まさに――現在がその『三つ巴』状態だったからだ。

7月29日、この日遂に俺の幼馴染である霧歌と俺の家に居候している身であり、未来からやってきた魔法少女であるウリアは出会ってしまった。

しかも、“昨日の事”もある為なのか――こうして、今はリビングのテーブルに三人の人間か一堂に会していると言うのに、『三つ巴』状態と言うのに。

「……」

「……」

「……」

誰も――本当に誰も、一言も、一単語も、一文字も喋らないのである。

こういう時にこそ、ウリアにはいつもの馬鹿げた発言をして欲しいものなのだが――この場の雰囲気を流石に察知しているのか、ウリアでさえこの状況には口を開かないで居る。

「……」

「……」

「……」

……つーか。

誰か喋れよ。喋ってくれよ。

沈黙が辛いという事もあるが――何より。

このまま無言で一章が終わってしまいそうな事が何よりも怖い。

一章の全てが三点リーダで無言と言う名の会話を交わすだけなんて――誰も見ないし、読まないぞ、そんな物語は。

――という訳で。

とりあえず、俺がこの場を打開する事にした。

いや、今言ったメタ発言が俺の勇気を奮い立たせた訳では決して無いのだが。

とりあえず、ね。

ただし、“昨日の事”もあって、霧歌には話し掛け辛いので――俺はとりあえず、ウリアに話を振る事にした。

意気地無しとも、ヘタレとも思って頂いて構わない。

だって、怖いもの。

怖いものは怖いもの。

「……そ、そういえば、ウリア？」

「えっ……な、何よ」

「お前、上の部屋で着替えの為に洋服を選んでいたんじゃなかったのか？　さっきはちょっと動揺していて完全に忘れていたけれど、そういえばお前その変な格好のままじゃないか」

「へ、変な格好って言わないで。これは立派な戦闘服なんだから。……いや、その、着替えようと思ったんだけど、着た事無い服ばかりだったから、着方が解らなかったって言うか……何より」

「……何より？」

「何より……その」

ウリアは俺の方を暫し無言で見据えると――俺を避けるかのように若干頬を赤らめて視線を逸らして。

「な、何でも無い。とにかく、着る事が出来なかったから、着替えていないのよ」

「あ、ああ。そうだったのか……ふーん。それは何か、悪かったな」

「いや、別に……秀のせいじゃ、ないけれど」

「だ、だよなぁ……」

「……」

「……」

……拙い。

また沈黙が訪れてきやがった。

つーか、呼んでねーよ、沈黙。

お前どこかに帰れよ、沈黙。

そんな感じで俺が有りもしない存在に心の中で罵倒を浴びせていた時だった。

俺が勇気を奮い立たせた事がどうやら沈黙を打ち破る打開策になり得たようで。

「……ねぇ、秀ちゃん」

霧歌が――漸(ようや)くその口を開いたのである。

「その人の事、私に紹介してくれないの？」

「えっ……ああ、紹介、紹介、ね。ああ、勿論するよ」

「ほら」と俺はウリアの背中を軽く叩いてこう促した。

「ウリア、霧歌に挨拶するんだ」

「ハーイ……えーっと、ウリアール＝ブレイザーよ。ウリアって呼

んで貰っても構わないわ」

「ウリアール＝ブレイザー……って事は、やっぱり見た目からもそうだけど、外国人なのね。えーっと……ウリアちゃん、で良いのよね？」

「ええ、勿論よ。何なら神とでも呼んで崇（あが）めて貰っても一向に構わないわ」

何やら意味も無く調子に乗ってきたウリアの後頭部を俺は叩いた。

そして、ウリアはその衝撃に勢い余ってテーブルに顔面をぶつけた。

「な、何するのよ、顔が痛いじゃない……特に鼻」

「うるせえ。お前が勝手に何か調子に乗り始めるからだ」

三つ巴？

「え、えーっと……」と俺とウリアの遣り取りに呆れたのか、それともウリアの言い回しに呆れたのか、どちらかは解らないが霧歌は苦笑を浮かべてこう言った。

「ウリアちゃんは……その、何と言うか、この前この家でお風呂に入っていたみたいだけど。その……秀ちゃんとは、一体全体どういう関係なの？」

「……」

その問いかけに――頭を叩かれた事を根に持っているのか、ウリアは俺を横目でじっと見据えた後に、その霧歌の質問に対してこう答えた。

「私は、この家に居候させて貰っている身なの。もう、秀とは本当に仲良くさせて頂いて。昨日なんか、私は秀がいつも使っているベッドで、それも秀と同じ部屋で寝たわ」

「オイ、お前！　どうしてそんな勘違いされるような表現をあえて使うんだ！」

「何よ、私は嘘は言っていないわよ？」

「確かにそうだけども！　霧歌に誤解を招いたらどうするんだよ！　折角この前の疑いが晴れそうと言う時にお前はまた爆弾を落としやがって！　お前は俺をそんなに社会的に抹殺したいのか！」

「抹殺したくないと言えば嘘になるわね……」

「要するに抹殺したいと思っている訳だな！　お前、やっぱり後で罰として夕飯を抜かれるか俺の前でメイドコスをするかどちらかを選べ！」

「ていうか、秀はどうしてそこまでメイドコスに拘（こだわ）るのよ！　そこまでメイドさんの格好をした誰かが見たい訳！？」

「メイドさんにはなぁ！　夢と希望が沢山詰まっているんだよ！」

「何それ訳解んない！　私が抹殺する以前に秀は社会的にはもう終わっちゃってるよ！」

そこで俺はハッと我に返る――いや、ずっと素面（しらふ）だったつもりなのだが、世間一般的には“我に返る”という言葉を使った方が良いだろう。

そして、ハッと我に返った俺はただならぬ黒々しいオーラを放っている霧歌の存在に気付いた。

「……」

あっ、ヤバい。

今のメイドさん発言で更に引かれてしまったかもしれない。

もしかすると、日々俺はこの居候しているウリアに対してメイドコスを強要しているような変態だと思われてしまったのかも知れない。

……。

いや、もしかしなくてもそう思われて当然か。

「拙い、墓穴を掘ってしまった……ん？　墓穴？　ああ、なるほど、穴があったら入りたいという言葉は元々こういう組み合わせを用いる為に作られた言葉だったのか」

「秀ちゃん」

「それ違うから」

前方と左隣から一斉にツッコミが来た――ていうか、ツッコまれたという事はまだ俺は完全に霧歌、及び、ウリアの二人に見放されてしまった訳では無いらしい。

「『墓穴を掘る』というのはね？　自分で自分のお墓を作るという事から、自らが進んで破滅に向かっていく事を表した言葉なの。解った？　秀ちゃん」

「そして、『穴があったら入りたい』は、身を隠したいほどに恥ずかしいと思える事から、自分の身を隠せる穴があるならば今ここで入ってしまいたい――という心情を表した言葉なのよ」

「『穴をして入るべからしむ』も大体そんな感じの言葉だったかな」

「そうそう、『汗顔の至り』とか、それから、『面目ない』って言葉も確かそういう感じの意味よ」

「あら、意外と物知りなのね～、ウリアちゃん。私見直しちゃった

☆」

「エヘヘ～、イヤー、それほどもであるかなー、なんちゃって☆」

「……」

……何、お前等急に仲良くなっちゃってんの？

つーか、霧歌……お前が語尾に『☆』を付けて話すなんて思っても見なかったよ。

そして、ウリア。お前も少しは否定しろよ。

それからお前は語尾に『☆』を付けるな。

何かイラッと来る。

「……」

……しかし、待てよ。

この状況はもしかして……かなり良い感じの雰囲気なのではないだろうか。

これは更に会話を交わして雰囲気をより緩和させるべきだな、うん。

「……ま、まぁ、その程度の言葉くらい、俺は知っていたけどな。ほら、アレだよ、アレ。日本人だから、あえて、日本語を間違えたみたいな？　ウリアは外国人だから、何と言うか……ハンディキャップみたいな、そんな感じのノリで俺はあえて間違えたんだよね、

実は」

「秀ちゃん」

「『嘘吐(うそつ)きは泥棒』の始まりって言葉知ってる？」

「……スミマセン、本当は知りませんでした」

つーか、何なの、お前等の驚異のシンクロ率は。

お前等さっき出会ったばかりじゃんか。

それなのに、どうしてそんなにシンクロして話す事が出来んの。

あれか、俺のコミュニケーション能力が低いだけなのだろうか？

それは何と言うか……嫌だな、何となく。

いや、こうして幼馴染の霧歌はともかく、出会ってまだ三日しか経っていないウリアとこうして仲良く話せているのだから、コミュニケーション能力が皆無という事は無いのだろうが――“仲良く”という部分は差し引いたとしても、だ。

「それで？　秀ちゃん？」

「ん？　どうした、霧歌」

「秀ちゃんからも、ウリアちゃんの事を紹介してよ」

「紹介して――って、たった今ウリアから紹介があったばかりじゃ

ないか。ていうか、自己紹介の順番的に今度はお前がウリアに自己紹介をすべきだと俺は思うんだけど」

「それはそうだけど……そうだけど。でも、これは私の勘でしかないけど――ウリアちゃんの事で、まだ私に何か隠している事があるよね？」

「……」

全く、こいつにはいつも驚かされてばかりである。

忘れていた――霧歌にあらゆる隠し事は通用しないのだ。

先日、終業式の帰り道の際に俺が霧歌から心を見抜かれた事もそうである。

超能力では無いのだろうが――霧歌は人の心の内の、それも、隠し事有無について見抜く事に長けているのだ。

それは霧歌が人の事をよく見ているという事もあるのだろう――『観察眼』を持っている、とも言うのだろうか。

三つ巴？

とにかく、霧歌に隠し事は一切通用しない。

それならば――ありのままを全て語るしか他に道は無いだろう。

例えその“ありのまま”を霧歌が受け入れてくれなかったとしても。

「……あのさ、霧歌」

「何？　秀ちゃん」

「今からウリアの事を語る前に――お前に一つ、忠告しておかなければならない事がある」

「どうぞ、何なりと言っちゃって」

「ウリアの事――今から話す事を聞いてしまったら、もう後戻りは出来ない。今、俺とウリアが関わっている問題に、お前は必然的に“巻き込まれる”事になる。知ってしまった以上は、お前は俺達に“関わってしまう”事になる――それでも、俺とウリアが隠している事を、聞きたいか？」

「うん、聞きたいよ」

「当たり前じゃない」と霧歌は平然とした表情で即答する。

「例え、秀ちゃんとウリアちゃんが隠している事がどんな事だったとしても――私はそれを受け止められる自信がある。それに……秀

ちゃんとは幼馴染同士、ウリアちゃんとは――友達同士。そんな親密な間柄に隠し事なんて野暮だと思わない？」

「と、友達同士って――私と、あなたが？」

すると、ウリアが若干焦った様子で霧歌にそんな事を尋ねた。

そして、そんなウリアに霧歌は優しげな笑みを浮かべて言う。

「勿論よ、当たり前じゃない。私はまだしていないけれど、ウリアちゃんは私に名前を語ってくれた――自己紹介をしてくれたでしょ？　自己紹介を互いに交わした間柄というのは、その瞬間から友達同士になれるものよ。……まぁ、尤も、それはウリアちゃんが私の事を友達だと認めてくれないと成立しないのだけれど――どうかな？　ウリアちゃん」

「そ、それは……その、私もあなたと友達になれるのはやぶさかではないと言うか、嬉しくないと言えば嘘になると言うか、むしろ嬉しいと言うか……」

「こういう時くらい素直になったらどうだ」

「う、うるさいわね！　秀は黙っててよ！」

顔を赤らめながらウリアは俺に向かって怒声を放って来た。

まぁ、何と言うか……嬉しいというのは本当の事なのだろう、今のこいつを見る限り。

ウリアの心を疑った訳では無いが。

「……それじゃあ、本当に話しても良いんだな？　霧歌」

「うん、話してくれても構わないよ、私は。どんな話をされたって、私はその言葉を信じてみせるよ」

「だって」と霧歌は俺にそう言って微笑み掛けてきた。

「他でも無い、秀ちゃんの言葉だもの」

「……そ、そうか。それは何よりだ」

その笑顔に魅せられて少し照れるように俺は霧歌から視線を逸らす。

すると、何故か俺はウリアから左足を踏み付けられた。

「痛ってーな！　何するんだよ、急に！」

「……鼻の下が延びてるわよ、変態」

「えっ、マジで――ていうか、さり気無く俺の事をまた“変態”って呼び始めるな」

「ふーんだ」

「何を急に不機嫌になってるんだよ……まぁ、いいか」

後でシーフードのカップラーメンを作ってやればウリアの苛々も治まる事だろう。

――だから。

「……それじゃあ、話すぞ、霧歌」

そう言って――俺は霧歌に全てを打ち明けた。

ウリアが２０５６年からやってきた未来人であり、尚且つ、魔法少女だという事。

２０１１年以降――日本が、そして、この世界がどんな道筋を辿るのかという事。

そして、２０３０年に俺が古代の文明――『魔術』を復活させてしまう事。

そのせいで俺は２０５６年の『混合機関　科学発展側』という組織から命を狙われているという事。

その組織の魔の手から俺を護る為に――ウリアはボディーガードとして２０５６年の俺からこの時代に派遣されてきたという事。

俺はその全てを話した。

正直――霧歌はどんな話でも信じるとか言ってくれていたけれど。

俺は霧歌がそれらの全てを信じてくれるとは到底思っていなかった。

前にも語った事だが――未来人だとか、魔法少女だとか、この世に存在しないはずの摩訶不思議な存在を人は簡単に信じる事は出来ない。

宇宙人然り、ＵＦＯ然り、ＵＭＡ然り――例え、それらを支持する人が居たとしても、その人々でさえその曖昧な存在を完全に信じていると言う訳では無いのだ。

何故なら――人は、実際にその目で見たものしか信じられないから。

それ以前に、俺の隣に座っているウリアという存在は――現在騒がれている宇宙人だとか、ＵＦＯだとか、ＵＭＡだとか、その辺の噂話とは訳が違う。

“２０５６年からやってきた魔法少女”――そんな余りにも馬鹿げた話を信じられるのはきっとウリアの力を目の当たりにした俺くらいだろう。

そう思って、いたのだが。

「なるほど……それじゃあ、ウリアちゃんは２０５６年の秀ちゃんが、この時代――２０１１年の秀ちゃんを――えっと、『デュアルシステム　サイエンスサイド』だっけ？　その組織からこの時代の秀ちゃんを護らせる為に派遣された未来人で、尚且つ、魔法少女――という訳なんだ」

「……」

「……え？　何？　秀ちゃん。私の聞く限りではそう聞こえたんだけど……私、何か間違った事言った？」

「いや、間違っていると言うか――こんなとんでもない話を聞いて、それを素直に纏められているお前にただただ驚いているだけだ」

「素直に纏められているって――私、話す前に言ったよね？　どんな事でも、秀ちゃんの話は信じる、って」

三つ巴？

「いや、でも、お前――普通は信じないだろ。こんな何の確証も無い話なんか、普通は」

「確証は無いけれど、筋は通っていたから一応信じる事にしたの。２０１１年以降に本当に世界がそんな事になってしまって、２０３０年に秀ちゃんが本当に『魔術』を復活させたとして、未来の世界が戦争を行っていたのなら――秀ちゃんがその組織みたいなものから命を狙われる理由は解るもの。『デュアルシステム　サイエンスサイド』――アレよね？　名前と今秀ちゃんが話してくれた事から推測するに、魔術と科学を合わせた結果、更に科学の方を発展させる事に成功した組織――みたいな感じよね？　当てられた漢字を知らないから、まだ自信無いけど」

「いや、うん……大体合っているというか、もう殆ど正解と言うか……何で、お前そんな事解るの？」

「えっ、そんな事って？」

「いや、だから、『デュアルシステム　サイエンスサイド』って組織の名前だけ聞いて、その組織がどんな組織か解るなんて――お前、やっぱりエリートの頭してるよな」

「えっ？　普通は名前と今の粗筋（あらすじ）を聞いたら誰でも解ると思うけどなぁ……」

いや、普通は誰でも解らないだろ。

お前くらいだよ、そこまで理解できるのは。

しかも、余り説明の上手くない俺の語りで。

「……ていうか、こいつの――ウリアの、未来人で魔法少女という設定を霧歌は信じてくれるんだな？」

俺は霧歌に問いかける。

左側から「だから設定って言うな！」というツッコミが聞こえて来たような気がしたが――それはとりあえずスルーで。

「だから、信じるって言っているじゃない。何でそこまで頑（かたく）なに秀ちゃんは私の事を信用しないかなぁ」

「いや、信用するしない以前に――ほら、だって、“未来人”に“魔法少女”だぞ？　どちらかなら未だしも、両方なんて逆に怪しいとは思わないのか？」

「思わないよ？　ていうか、そんなのフィクションの世界だと案外、粗（ざら）にある設定だよ？」

「……まぁ、確かに。“未来人、兼、魔法少女”という設定を否定してしまったら、２０１１年に大ヒットしたあの名作アニメを否定してしまうような気もしないでもないな」

「まぁ、あれは実際には未来人じゃなくて、ただ単に一度経験した時間軸を何度も行き来していただけなんだけどね」

「霧歌、それ以上は言うなよ。それ以上のメタ発言は無しだ」

「でも、今の話をし始めたのは秀ちゃんだよ？」

「例えそうだったとしても、実際問題、根本的に悪いのは“未来人、兼、魔法少女”という設定を持ったこいつだ」

「って何で私が悪者扱いされてるのよ！　ていうか、何度も言うけど設定って言うな！」

「いや、お前の存在を否定する訳では無いけれど、逆に設定という言葉以外で説明しようとすると難しいんだよ、意外に」

「だからって必要以上に連呼する必要は無いでしょ！　次に“設定”って言葉使ったら、円環の理に導かれてしまったという名目の下に秀を抹殺するからね！」

「メタ発言が移った！？　ていうか、何度も言うけどボディーガードのお前が俺に殺人予告をするのはどうかと思うんだが！」

そんな時だった――俺の前で不意に霧歌が小さな笑い声を漏らしたのは。

「……霧歌？」

「あっ、ゴメンナサイ……。予想以上に秀ちゃんとウリアちゃんが仲良かったから、何かその掛け合いを見てると可笑しくなってきちゃって……」

「仲が良い？　違うな」

「私と秀はただ言い争っているだけよ」

「えーっ？　そうかなぁ……私の見る限りでは、相当仲が良さそうに見えるんだけど」

そう言って霧歌はまたフフッと小さく笑って微笑む。

「……そういえば、ウリア」

「何よ、秀」

「一つ聞きたい事があったんだけど……お前、昨日『魔導獣機』を操っていた奴を倒したんだよな？」

「まぁ、あの広範囲を一気に燃やしたから生きてはいないと思うけれど――『異空繋門（ワームホール）』はそう簡単に空間に創り出せるものではないし」

「ワームホール？　何だよ、それ」

「ワームホールと言うのは、空間のとある地点ととある地点を結ぶ時空のトンネルのようなものよ。机上の空論だけれど、既にアメリカの学者さんがワームホールを使ったタイムトラベルの方法が可能である事を証明しているわ。まぁ、実際にワームホールを創り出す事は今の科学力では不可能だから、よって、タイムトラベルも殆ど不可能に近いんだけど――まぁ、そういう事で、解った？　秀ちゃん」

「確かに辛うじて理解は出来たが、どうしてお前がそうスラスラと流れるように説明しているんだよ、霧歌」

万能すぎるぞ、お前。

「まぁ、とにかく、私は昨日『魔導獣機』を操っていた奴を倒したわよ、ちゃんとね」

「そうか……それなら、当分の間は安全――って事になるのか？」

「まぁね。敵の方が新たな刺客をこの時代に送り込むまで――は、安全、かな」

「でも、お前が昨日倒した奴はこの時代――つまりは、お前の時代からすれば“過去”で死んだ事になるんだよな？　それなら、未来ではその事がすぐに解るはずだから、敵の方も案外間隔を空けずに次の刺客とやらを送り込んで来るんじゃないのか？」

「あら、秀ちゃんにしては中々良い所に気付いたわね」

「霧歌、褒めてくれるのは有り難いが“中々”という言葉は余計だ」

「それなら大丈夫よ」とウリアは言う。

「確かに、私達の時代からすればそれは過去の出来事なのだろうけど――重要なのは、死んだ人間が“未来の人間”だったという事よ。未来の人間が過去で死ぬという事は通常ならば有り得ない事――だから、未来の人間が過去で死んだ場合、未来の――例えば、新聞とかに、その出来事が“書き加えられる”」

「って事は……少なからず、未来が変わった――って、事なのか？」

「でもまぁ、未来の人間が過去で死んだとしても、その人間は“本来ならばこの時代に存在しないはずの人間”だからね。歴史に加えられる事無く、未来の方でもまだ昨日の『魔導獣機』を操っていた奴が死んだなんて事は知られていないかも知れない――でもまぁ、未来とはおそらく連絡を取っていたでしょうから、連絡が途絶えたら解っちゃうかもだけど」

「そうだったのか……それじゃあ、昨日の夜にお前が森林を焼き払ったのもそこまで未来には差し支えは無いと言う訳だ」

「……」

「オイ！　何故そこで黙る！」

「いや、だって、あの森林はその……現代のもの、だから。今の時代のものだから。未来で何かしらの変化が起こっちゃってるかも……」

「アバウトな説明で余計な恐怖を感じさせるな！」

「そうね……あの森林が無くなった事で、将来の地球の酸素量が半分以下に陥(おちい)ってしまうかもしれないわね」

「霧歌！？　お前まで一体全体何を言い出すんだ！？」

怖い事言うのは止めてくれ！

俺はただでさえ命を狙われているんだぞ！　これ以上の恐怖はご免だ！

三つ巴？

「まぁ、良かったじゃない、秀ちゃん。比較的だけど、安全だという事は証明されたんだから」

「おう、やったぜ、霧歌。これで漸く夏休みを満喫できそうだ」

「本当に良かったわね、秀ちゃん。これで心置きなく宿題がやれるというものだね」

「……」

「……」

「……さて、次の『魔導獣機』が襲って来た時の為に体でも鍛えるか」

「秀ちゃん、ちょっと待ちなさい」

「何だよ、霧歌。お前もトレーニングに付き合うか？」

「何トレーニングをするという前提で話を進めようとしているのよ、秀ちゃんは」

「これぞ俺の本当の力――話の流れを我が手中に収める秘儀、『川（リ）の如き話術（バートーク）』とはこの事だ」

「もう……また秀ちゃんは。カッコイイ技名で私を誤魔化そうったってそうは行かないんだから」

……。

「……スマン、霧歌。やっぱり今のは無しにしてくれ」

「えーっ？　『川の如き話術』を？　カッコイイじゃない、どうして無しにしちゃうのよ、『川の如き話術』」

「霧歌、それ以上言うな。それ以上言われたら俺は羞恥で死んでしまう」

「プッ……『川の如き話術』（笑）だって」

「オイ、そこの金髪少女。笑うだけなら未だしも（笑）を付けてんじゃねえ」

……ていうか、川と言えば。

「……あっ、そうだ。折角、敵も居なくなって安全になった事だし――ここは、お祝いも兼ねて明日は皆で泳ぎに行こうぜ！」

「ええっ！？　お、泳ぎに！？」

そんな素(す)っ頓狂(とんきょう)な声を上げたのは意外にも霧歌だった。

「ああ、泳ぎにだ――って、霧歌は別に泳げたよな？　海でもプールでも」

「そ、それは、勿論だけど……そんな、急に言われても、私、困るんだけど」

「困るって……何が？」

「いや、その……」

そう言って、霧歌は自分の体を――主にお腹の辺りを気にしているように見えた。

何なのだろうか。

「そっか……いや、別に俺が急に泳ぎに行きたくなっただけだし。霧歌は無理して付いて来なくても――」

「いや、行く！　行くよ！　一度誘われたからには付いて行くのが男の定め！」

「そ、そうか……ていうか、霧歌は女だよな？」

まぁ、これで霧歌も同伴する事が決まったのだが――問題は。

「ウニ？　何？　明日皆で海栗（うに）を食べに行くの？」

「……」

やっぱり、この未来系魔法少女は海の存在を知らなかったか……。

「……オイ、ウリア。お前プールって知ってるか？」

「ウール？　羊の毛の事？」

「未来から来たから仕方ないかも知れないが、それにしてもその知識の偏り方は一体全体どういう事だ」

つーか、どうして海栗を知っているのに海を知らないんだよ。

海栗の名前の中にも入っているというのに。

それ以前に、お前最初に『魔導獣機』と戦った時に海岸という言葉をちゃんと理解していたよな？

海岸を知っていて海を知らないなんて事があるのだろうか……。

「……あのな、ウリア。海栗――間違えた、海というのはだな……えっと、つまり」

あれ、おかしいな。

案外、海というものを説明しようとすると難しいものがあるぞ。

さて、どう説明したものか――。

「海というのは……そうね、イメージ的には大きな水溜りを連想すれば良いかな。その水溜りに水着という泳ぐ為の専用の洋服みたいなものを着て、それから皆で水遊びをするのよ」

「えっ！？　何それ！　超面白そう！」

「……」

霧歌の素晴らしい説明によって目をキラキラと輝かせているウリア

なのであった。

……つーか、俺の立場は？

「ねぇ、秀！　明日皆で海行くの！？　それじゃあ、私も連れて行ってよ！」

「解ってるって。最初からそのつもりで言ったし」

「7月だから、まだ人余り居ないだろうし……プライベートで遊びに行くなら良いタイミングかもね」

「そうだな……俺もカメラの準備を怠らないようにしないと」

「……」

「……」

「……」

……あれ、何だろう。

ウリアと霧歌の視線が痛い。

ていうか、若干体に刺さっているような気がする。

気のせいだろうか。

「……ねぇ、秀ちゃん」

「な、何だ？　霧歌」

「ちょっとそのカメラ、見せてよ」

「お、おう、解った」

その霧歌の提案に俺は二階の部屋からカメラを持って来た。

ちなみに、デジタルでは無く一眼レフの一般的な真っ黒い方のカメラである。

値段は――忘れたけど、かなりしたのではないだろうか。

「ふーん、中々良いカメラだね、これ」

霧歌は俺の一眼レフを掌で裏、表、更には側面など色々な部分を見ながら感心したような声を上げて――。

「ウリアちゃん、パス」

――ウリアの方へと一眼レフを放り投げた。

そして、宙を舞った俺の大切なカメラは。

「あっ、手が滑っちゃった～」

不意にウリアの右手に出現した炎の剣に両断されてしまった。

「わ――――――――っ！　お、俺の！　俺のカメラが！　ウリアお前何て事しやがる！」

「ゴメン、秀。手が滑って炎の剣を出しちゃった☆」

「出しちゃった、じゃねーよ！　手が滑ってそんなものが出るなんて聞いた事も無いわ！」

「……てへぺろっ☆」

「打ん殴るぞお前！」

しかし、実際に殴った所で――まぁ、殴るつもりは毛頭無いが――二つに割れたカメラは戻って来ない訳で。

「……はぁ」

どうやら、明日はカメラ無しで霧歌やウリアと一緒に海へと出掛ける事になりそうだ。

俺は単に思い出を写真に収めたかっただけなのに……。

……。

いや、本当だって。

変な下心なんて無いって。

本当だって。

7月30日

7月30日。

この日は、俺はウリアと霧歌を交えて何ともリア充な海水浴を味わう――つもりだったのだが。

（――台風●号は勢力を拡大しながら、本州を次第に北北東へと向かっており――）

「……」

そんなテレビから聞こえてくるニュース速報を耳にしながら俺はリビングの外に広がる灰色の空と降り頻る雨、更には吹き荒れる突風――それらが一堂に会している景色をただ無言で見据えていた。

まぁ、昨日の三つ巴の話ではないのだが。

……ていうか。

実際問題、本当に愕然としているのは俺では無くて。

「……」

多分……今、俺の隣で佇んでいるウリアの方だろうなぁ。

俺は横目で先ほどから外の景色を眺めたままで一言も何も喋らないウリアを見据える。

そして、俺は同時に昨日の――霧歌が帰った後の事を思い出していた。

◆◆◆

物語の時間軸は昨日へと遡り――時は、霧歌が帰った後だから、午後3時くらいか。

その辺りで、俺はとある重要な事に気付いたのである。

「そういえば……海には水着が必要なんだけど。ウリア、お前水着なんか持っていないよな？」

「当たり前でしょ。言っておくけどね、私はこの時代に娯楽を求めに旅行しに来た訳じゃないのよ？」

「いや、それは解っているけど……だったら、どうするんだ？」

「えっ、何が？」

「だから、水着だよ、水着。お前、水着が無いと海には入れないんだぞ？」

「ああ、何かそうらしいわね。でも、私は必要無いわよ。いざとなったらこのまま海に入るし」

「いや、それは駄目だろう。お前のその手首にあるヤツって――その、機械だよな？」

「ああ、これ？」

そう言って――ウリアは右腕の手首に装着されている携帯電話ほどの画面が付いた少し大きな腕時計のようなその機械を俺に見せてきた。

「まぁ、ね。これは機械よ。でも、別に心配要らないわよ。精々、周囲の魔力の濃度がどれくらいあるのかを計測して、私の力がその場所でどれほど発揮できるのかを知るくらいしか機能は付いていないから」

「物凄く重要なアイテムじゃねーか。この上無いほどに重要なアイテムじゃねーか。なぁ、ウリア。今度の俺の身の安全の為にもそれを付けたまま海には入らないでくれ、頼むから」

「もう、仕方ないわねぇ……それじゃあ、どうするのよ」

「そうだなぁ……どっちにしろ、服装もそのままじゃ駄目だろうかな。姉さんの部屋にまた着替えを探すついでに、水着も借りたらどうだ」

「実の姉の所有物をまるで自分のものみたいに言うのね、秀って」

「当たり前だろ。自分の家族の所有物は全て俺の所有物みたいなものだ」

「……今の言葉の“自分の家族の所有物”って所を“自分の姉の所有物”に置き換えて復唱してみて」

「あん？　自分の姉の所有物は全て俺の所有物みたいなものだ――これでいいのか？」

「うわぁ……実の姉の洋服だけに飽き足らず、下着や水着までも自分のものと称するなんて、秀はやっぱり生粋の変態だったのね」

「お前が言わせたんだろうが！　何だその誘導尋問は！　告訴するぞ！」

まぁ、余りに見え透いたその罠に引っ掛かってしまった俺も俺で悪いのだが。

「……そういえば、一つ気になったんだけどさ、ウリア」

「何よ、秀」

「お前のその服――どうやって着てるんだ？」

「ああ、これ？　これはね、私の胸元に六角形の中くらいのボタンみたいなものがあるでしょ？」

「ああ、あるな」

「それを押したら、私の着ているこの戦闘服が自動で脱げる機能になっているのよ」

「そうなのか」

「そうなのよ」

俺はウリアの胸元にあるその六角形のボタンのようなものに触れた。

すると、そのボタン全体が何やら光を放ったと思ったら――ウリアの着ている赤いライダースーツのようなものは一瞬にしてそのボタンの中に吸い込まれてしまった。

肩や腰、膝など――それぞれの防具のようなものは吸い込まれたライダースーツに引っ張られて六角形のボタンのようなものの周囲に集まり、合体する。

――そして。

後には一糸纏わぬ――つまりは、全裸のウリアだけが残っていて。

「なっ……ななっ、なっ……！」

俺の前でウリアは顔を真っ赤にして何やら体を震わせ始めた。

どうしたのだろうか。

「何だ、寒いのか？　仕方ない、俺がお前をそっと抱き締めて――」

「何やってくれるんだこの変態がぁあああああああああっ！」

ウリアのその叫び声が響き渡り――ウリアが前方へと突き出した右足は見事俺の腹部を捉える。

「ぐふっ！？」

そして、俺は凄まじい衝撃を腹部に感じながら後方へと吹き飛ばさ

れて――リビングの壁に背中をぶつけて床にうつ伏せに倒れ込んだ。

すると、間髪入れずウリアの怒声が聞こえてくる。

「何すんのよ！　この変態！　バーカ！　死ね！　一回死んで、ついでにもう一回死んで、生き返ってからまた死ね！」

「いや、あの、本当に申し訳ない……単なる出来心だったんです」

「出来心で済めば警察は要らないのよ！　このバーカ！　変態！　さいってい！」

「押したらどうなるかなぁ、って。そしたら、ボタンを押した後の世界には桃源郷が広がっていましたとさ、お終い」

「何を童話チックに語っているのよ！　ていうか、何を勝手に話を終わらせようとしているのよ――って、顔を上げるなっ！　この変態！」

「痛いっ！」

ウリアはあの赤いライダースーツが変形した防具の塊を俺の顔面に投げ付けてきた。

7月30日？

そして、顔面にその防具の塊を受けた事で顔を伏せた俺の頭の上でウリアの足音が聞こえて来た。

おそらく、たった今投げた防具の塊――もとい、自分の洋服を拾いに来たのだろう。

それから、足音は俺の傍から段々と遠ざかって――そして。

「良い！？　秀！　私がこれを着替え終えるまでにまた顔を上げたら、あなたの目を焼き払うからね！」

「……ハイ、了解しました」

俺はウリアの脅し（脅迫と言ってもいい）に素直に応じる。

無論、顔は床に伏せたままだ。

顔を上げれば目の前には同世代の女子が着替えているという全裸を見るよりも何だか興奮するシチュエーションを見す見す逃すのは勿体無いが――って、いやいや、そうじゃなくて。

俺は単に目を焼き払われたくないからだから。

単に、高校二年生にして視力を奪われたくないだけだから。

それだけだから。別に変な下心なんてものはないから。

本当だから。

「……着替え終わったわよ、秀」

「えっ、マジで？」

何の衣服の擦れる音も聞こえなかったのだが――まぁ、衣服ではないから当たり前か。

いや、でも、しかし。

「……まさかお前、俺に意図的に自分の裸を見せて俺の目を潰そうという魂胆（こんたん）じゃないだろうな」

「誰がそんな捻くれた悪知恵を思い付くか。秀じゃあるまいし」

「そうだな……まぁ、それはそうだ」

そこで納得してしまう自分も何か悲しいが。

そんな事を思いながら俺はその場に立ち上がるとウリアの胸元辺りを見据えて――。

「……ん？　あれ？　ウリア、その胸元辺りの六角形のボタンを押すとどうなるんだ？」

「何を忘れたフリをしてもう一度私の服を脱がそうとしているのよ！　本当に記憶が飛ぶまで蹴り続けるわよ！」

ウリアは自分の身を護るべく両腕で胸を隠すような仕草を見せる。

しかし、その行動によってウリアの胸は押し潰されてより一層エロい感じに――って、いやいや、俺は何を言っているんだ。

「全くもう、秀は、え、エッチなんだから……」

「……」

そんな若干頬を赤らめてとても恥ずかしそうに体を捩じらせるウリアに不覚にも心がキュンと来たのはきっと俺の気のせいなので華麗にスルーして貰って構わない。

「……ウリア」

「な、何よ。もうこの服は脱がせないわよ」

「いや、何と言うか……今の表情、合格だ」

「合格!?　私、知らない間に何の試験に合格してしまったの!?」

「日本全国萌える女子の表情コンテストでお前は百点満点で合格した」

「何そのコンテストは！　現代の日本にはそんなに馬鹿げたコンテストが開催されていると言うの!?」

「馬鹿げたとは何だ！　“萌え”は今の日本で最も追求すべき事柄なんだぞ！」

「いや、だから、そんな馬鹿げた事を力いっぱい語られてもなぁ…

…」

「日本全国萌える女子の表情コンテストで見事合格、及び、優勝したウリアさんには、優勝賞品として、胸元のボタンを押される権利が与えられます」

「放棄！　そんなものは貰った瞬間にすぐ放棄するわよ！　ていうか、もう二度と押させないって言ってるでしょ！」

「……ちっ」

「露骨に舌打ちをするな！　ていうか、早くお姉さんの部屋に行くわよ、秀！」

「そうか、今からウリアの嬉し恥ずかしコスプレ大会が開催されて――」

「秀？　何か言った？」

「いや、何でも無い。俺は何も言っていない。さぁ、姉さんの部屋に急ごうか」

ウリアからの問いかけに俺はとりあえず言葉を羅列させてそれを誤魔化しながらウリアと共に二階の姉の部屋に向かうのだった。

◇　◇　◇

ちなみに、これは余談だが、閑話休題の為に行間に挟んでいる三つ

の菱形（ひしがた）の色は物語が進行している時間によって変化する。

つまり、現代の時刻を語る際は黒い菱形を、未来、及び、過去の時刻を語る際は白い菱形を使っている。

だから、上の三つの菱形の色は別に配色を間違っている訳では無いから安心して欲しい。

そして、そんな注意事項を述べている間に俺はウリアと共に姉の部屋の前に辿り着いた。

今度は俺が部屋の扉を開けて先に部屋の中へと足を踏み入れる。

それに続いてウリアも部屋の中に入ってきた。

「ていうか、水着ってどこにあるんだろうなぁ……」

「えっ？　知らないの？　姉さんの洋服・水着・下着の全ての位置は俺の脳味噌に全て叩き込まれている――とか言っておいて？」

「俺はそんな変態染みた発言は生まれてこの方一度もした事は無い。事実を捏造するな、それを信じた人が居たらどうしてくれるんだ」

「心配しなくとも、私はそれを信じているから、安心しなさい」

「安心できねーよ。むしろ不安だよ。ウリア、今すぐに頭の中からその間違った知識を捨てるんだ」

「解ったわよ……えっと、真之乃秀は女子のお風呂を覗いたり、女子の服を無理矢理脱がせたりするような、そんな変態染みた人間で

は無い普通の真人間です――ハイ、捨てたわよ」

「よし、よくやった。流石はウリア――」

……。

「あっ、今お前、本来捨てるべきでは無い知識を捨てやがったな！？」

「真之乃秀は真人間である――私はそれを間違った知識と判別したので」

「その判別が間違ってるじゃねーか！　仕分けに失敗してしまっているじゃねーか！　ちゃんと自分の知識くらい自分で仕分けできるようになれよ！」

7月30日？

そんな会話を交わした後、俺とウリアは二人で部屋の中を隈なく捜索して――漸く水着を発見したの、だが。

「……ねぇ、秀」

「……何だ、ウリア」

「これ――ビキニ、って言うんだっけ？」

「ああ、そうだな」

「このビキニ……私の胸よりも、遥かに大きいん、だけど」

「……」

「……」

「……う、ウリア？」

「……何よ」

「ひ、人には……どうしたって、越えられない壁というものが存在してだな」

「……」

「し、心配するな。貧乳は逆にステータスとも言うぞ？」

「慰めの言葉なんて要らないわよっ、この馬鹿！」

目に涙を浮かべて俺にそう怒声を上げるウリア。

どうやら、自分よりも俺の姉の方がバストのサイズが大きい事が相当ショックだったらしい。

「……ま、まぁ、気にするなって。俺の姉さんは、同性の友達からも羨ましがられるほどの巨乳だったからな。お前の貧相な胸が到底通用しないのは仕方が――」

「貧相？　今貧相って言った！？」

「いや、言ってない！　言ってないから！　その右手に持った炎の剣を仕舞え！　リアルに危ない！」

「……良いもん、別に」

炎の剣を右手から消したウリアはその場にしゃがみ込むと床に人差し指で何度も円の形にグルグルとなぞり始めた。

典型的な落ち込んでいる際に人間が見せる仕草であった。

つーか、お前未来人のくせに遣る事成す事がいちいち古臭いんだが。

「別に、胸があったって、戦闘の邪魔になるだけだし。胸が大きいと肩が疲れるとも言うし。だから別に……別に、胸なんか、胸なんか要らないし……うう……！」

「……」

そして、何かガチで泣き始めるウリア。

赤いカーペットの上にウリアの目から零れ落ちた涙がポタポタと次々に落下してはそこに吸収されていく。

「お、オイ、ウリア、泣くなよ……。し、心配するな、俺は小さい胸の方が好きだぞ？」

「ぐすっ……ほ、ホントにぃ？」

「あ、ああ、本当だとも。俺は巨乳よりも貧乳の方が好きなんだよな、実は。ていうか、案外この日本で巨乳と貧乳でアンケートを取ったら貧乳の方が好きだという人で溢れ返ると思うぞ？」

実際の所は五分五分の良い勝負――と言うか、微妙な結果になりそうだが。

「ぐすっ……それじゃあ、秀は貧乳の方が――小さい胸の方が、好き、なの？」

「勿論だとも。俺は根っからの貧乳派だよ。巨乳はそこから育つ事は稀（まれ）だが、貧乳はまだまだ育つ余地があるだろう？　俺が貧乳を好きなのはそこに理由があるんだよ」

「……ぐすっ」

――そして。

「そ、そっか……えっと、何かありがとね、秀。元気、出た」

「お、おう、そうか。それは何よりだ」

「……でも」

「……でも？」

「秀みたいな……変態に私の胸を好きだと言われても余り嬉しくないなぁ……」

「……」

俺はウリアの脳天に拳を振り下ろした。

「いったぁい！　ちょっと、何て事してくれるのよ！　少し前まで本当に泣いていたか弱い女の子に！」

「うるせえ、さり気無く俺の事を“変態”と呼んだ罰だ」

「何よ！　変態を変態と呼んで何が悪いのよ！」

「何を！？　いい加減にしろよ、この貧乳！」

「ひっ、ひんにゅ……！　そ、そっちこそ、いい加減にしなさいよ、この変態！」

「黙れ、この貧乳が！　まだ言うならもう一度服を脱がすぞ！」

「ひゃあっ！　ちょっ、もう本当に勘弁して！　お願いだから！」

割と本気で俺から距離を取り始めるウリア。

ていうか、今の俺の会話だけを切り取ると何だか俺がウリアの洋服をいつも無理矢理脱がしている変態みたいだな……。

以後、言葉には気を付けなければ。

「仕方ない……胸元のボタンを押すのはまたウリアが寝ている時にこっそり押すとして」

「……秀、今何か不穏な言葉を口走らなかった？」

「いや、何でも無いぞ？　俺は何も言っていない。これは本当だ」

「ていうか、私達この部屋で水着を探していたのよね？　全くもう……誰のせいでここまで話の流れが拗れてしまったのか」

「お前が勝手に胸の大きさがどうとかこうとか言って泣き始めたんだろうが」

「もう、『川の如き話術』の異名を持つのなら、この程度の話の流れくらいちゃんと操作しなさいよ」

「まだその二つ名を引っ張るのかよ！」

それはもう前回で使ったネタだからいいよ！

それ以前に俺の精神的に限界が来ているからもう使わなくていいよ！

じゃないと、俺の精神が本当に羞恥で崩壊してしまう！

7月30日？

「ていうか、どうするのよ。水着が無かったら海に入れないんでしょ？」

「そうだなぁ……おっ、何かあったぞ」

「……何その、水着」

「これは学校とかで使用される指定の水着――通称スクール水着、略称だとスク水だとか呼ばれていてだな。学校とかで着る為だけに作られた水着だが、案外海でも結構こういう水着を皆着ていたりするんだよ」

「その水着……そんなに着たら何というか、可愛く見えたりするの？」

「そうだなぁ……仮に俺がスク水姿のウリアの姿を見たら、そのままお前を家まで誘拐してしまうかもしれないほどに可愛いぞ？」

「解った、スク水は着ない、以上」

「……お前、今の俺の発言を聞いてそう決めたな？」

冗談のつもりだったのに……いや、半分は本気だけれど。

……さて。

「それなら、他に新しい水着を買いに行くしか手段は無いな」

「でも、私お金持っていないわよ？」

「何言ってんだ。俺が出すに決まってるだろ」

「えっ……い、良いの？」

「自慢じゃないが。お前も知っている通り、基本俺は家ではカップラーメンばかりで料理は作らないからな。安いカップラーメンばかり毎日買い込んで食べているから、それなりに仕送りの金が余っているという訳なんだ」

「おお……！　凄い、何か秀が今までで一番輝いて見える！」

「そうか。それはとても有り難いが、俺が水着を奢ってやると言った端からいつもとは真逆の態度になったのは何故だ？」

全く以て現金な奴である。

「今は……まだ3時半か。よし、それじゃあ、ちょっと遠出になるけど、今から水着買いに出掛けるか」

「うん！　そうしよう！　今すぐ行こう！　早速行こう！」

「待て。財布に金を補充する時間くらい作ってくれ」

そんな皮肉を言いながら俺は姉の部屋を出る。

後ろからは嬉しそうな満面の笑みでスキップをしながら付いて来るウリアの姿があった。

◇　◇　◇

少し長らく過去の話を語っているが、実際の所、俺とウリアが台風で海に行けなくなるのは周知の事実なので、少し物語を語るスピードを速めて――。

「わぁ――っ！　凄い、凄いよ！　秀、見て！　景色が後ろに流れて行ってるわ！」

「……そりゃあ、電車に乗ってるんだからな」

――速められそうにも無かったので、諦めて物語の続きを語る事にする。

俺とウリアは流石に家の近くに水着を売っているデパートは存在しないので、電車に乗って少し都会化している街へと出掛ける事にした。

そして、聞けばウリアは電車に乗るのが初めてだそうで。

２０５６年の未来にはこんな身近な技術まで失われてしまっているのか――まぁ、ウリアと一緒に飛んでみて解ったけれど、飛んだ方が電車に乗るより速そうだからなぁ、失われるのも当然か。

しかも、自分で飛べば金掛からないし。

そんな俺が現代の科学技術の将来についてしみじみと考えに耽って

いる内に電車は目的の駅に着いた。

俺とウリアは電車を下りて改札口を出る――その際、ウリアが切符を入れずに改札口を通ろうとして遮断機（と言っていいのか解らないが）で思い切り腹を打つというとても天然で可愛らしいエピソードがあったのだが――そこはあえて詳しくは語らないでおく。

そして、駅を出た俺は微かな記憶を頼りにしてウリアと共にどうにか目的のデパートに到着する事が出来た。

デパートの中の案内板に寄れば水着売り場は三階にあるらしい。

俺はエレベーターのボタンを押してその入り口の前でウリアと共にエレベーターの到着を待つ。

「……」

俺は周囲からの様々な視線がこちらに向けられている事を電車に乗っている時からずっと感じ取っていた。

いや、別に俺がどうとかではなく――問題なのはウリアの“服装”だった。

いつもの戦闘服で出歩くのは流石に周囲の視線を集めるので俺が姉の洋服に着替えてから家を出ようと提案したら――。

「ヤだ！　だって、一刻も早く水着が欲しいんだもん！」

――と、何だかんだで言い包められてしまったのである。

まぁ、実際問題ウリアは先ほどから周囲を頻りにキョロキョロと興味津々に見渡しているので、自分が見られている事に対して差ほど気になっていないようだけれど。

……隣でウリアと同伴している俺は気になるんだよなぁ、視線。

だって、一緒に居る時点で俺に向けられているのと殆ど変わらないからな。

そんな感じで俺が周囲の数多（あまた）なる視線にうんざりしているとエレベーターが漸くやってきた。

俺はウリアと共にエレベーターに乗り込むと三階のボタンを押して急いでエレベーターの扉を閉める。

エレベーターは扉をゆっくりと閉じて――そのまま上の階へと上昇を始めた。

「……エレベーターを見て驚かないって事は、流石に２０５６年の未来にはエレベーターという発明は生き残っているのか？」

「うん、流石にこれくらいの技術は生き残っているわ。尤も、最近ではエレベーターの価値も薄れつつあるけれど」

「まぁ、お前飛べるもんなぁ」

そんな会話を交わしている内にエレベーターが三階に到着し、俺達の前で扉が開く。

エレベーターを出てから少し歩いた所で俺達は早速水着が売られて

いる店を発見した。

「うわぁ……！」

目をまるで星のようにキラキラと光り輝かせながら周囲の至る所に展示された水着を見渡すウリア。

そんなウリアを見て、やっぱりこいつもただの女の子なんだなぁ、と俺はしみじみ思う。

そういえば、最近は忘れつつあったけれど、ウリアはただの俺と同じ歳の女の子なのだ。

魔術を使える――という点を除けば、だけど。

7月30日？

「ほら、さっさと選んで来いよ、ウリア」

「う、うん！　解った、行って来る！」

俺の言葉に二度ほど頷いたウリアは猛スピードで店内へと吸い込まれるようにして消えた――と思ったら、すぐに一着の水着を手にしてこちらに戻って来た。

「これに決めた！」

「えらく速いな！　どれどれ……って、赤いビキニか」

「どう？　どう？」

「良いんじゃないのか？　何と言うか、お前らしさが出ていて」

まぁ、赤いビキニだと単なる露出度が高くなったいつもの戦闘服にしか見えないかも知れないが。

「そっかぁ……それじゃあ、秀！　これ買って！」

「ハイハイ、解ったから。そう急かすな」

そう言いつつ俺はズボンの後ろポケットから財布を取り出しながらレジへと向かって――。

「あっ」

「えっ？」

――偶然、レジにて会計をしようとしていた俺の幼馴染、夜華霧歌と鉢合わせした。

◇　◇　◇

オチが解っているにも関わらず、過去編はまだまだ続く。

「き、霧歌、お前……何でこんな所に」

「……それはこっちの台詞よ」

そう言って――霧歌の視線は俺の手の中にある女物の水着と財布へと移動してから、再び俺の顔へと向けられて。

「……秀ちゃん、まさかそっちの趣味に目覚めたの？」

「お前、一体全体俺に対してどんな誤解を抱きやがった！」

「いや、だって、もう、この状況だけ見ればもうそういう風にしか見えないと言うか何と言うか」

「違う！　俺は女物の水着を買って家でそれを着るような変態じゃない！　ほら、明日海に行くから、ウリアの水着を買ってるんだよ！」

「あ、ああ、そういう事か。もう、秀ちゃんったら、ちゃんと説明してくれればいいのに」

「お前が勝手に勘違いし始めたんだろうが……」

まぁ、誤解が晴れたのならそれはそれで結構だが。

「秀ちゃん、先にお会計済ます？」

「いや、良いよ。お前から先に払えよ。レディーバーストという言葉もあるくらいだし」

「秀ちゃん、それを言うならレディーファーストだよ」

「ああそう、それそれ。俺はそう言いたかったんだ。初めて気付いた」

「自分が言おうとしている言葉くらい理解して喋ろうよ……」

霧歌は苦笑しながらレジに水着を提出した。

「ていうか、ウリアちゃんお金持っていなかったよね？　まさか、秀ちゃんがお金出したりするの？」

「仕方ないだろ。そうしないと、ウリアだけが明日泳げなくなるんだから」

「……フフッ」

「……何が可笑しい」

「いいや、別に」

笑みを浮かべたままレジに財布からお金を出す霧歌。

「秀ちゃんって……やっぱり、優しいんだな、って」

「優しい訳じゃないよ。ただほっとけないだけだ」

「それを世間一般的には優しいって表現するんだよ、秀ちゃん。……ハイ、私は終わったから、次どうぞ」

水着の入ったレジ袋を片手に霧歌は俺にそう促してきた。

「ていうか、秀ちゃんがここに居るって事は……ウリアちゃんも居るんだよね？」

「ああ、店の外で待ってると思うぜ」

「それじゃあ、秀ちゃんの会計が終わるまで私ウリアちゃんと話してくるね」

「ああ、解った」

俺は店の外へと出て行く霧歌の背中を見送る。

そして、俺はレジにウリアが選んだ赤いビキニを提出するのだった。

◇　◇　◇

俺が会計を終えて店の外に出ると、店の前にある木製のベンチでウリアと霧歌は何やら楽しそうに話していた。

ていうか、何度も言うけどお前等この前――と言うか、昨日出会ったばかりなんだからな？

外見だけは数年来（すうねんらい）の友達の雰囲気を醸（かも）し出しているよ、この二人。

「……あっ、秀！」

すると、俺の存在に漸く気付いたウリアがベンチから立ち上がってこちらに駆け寄って来た。

「ちゃんと買って来てくれた！？」

「当たり前だろ。買うと言っておいて買わないという意地悪を俺がすると思うか？」

「思う」

「即答するな」

「ほら」と俺は買って来た水着をウリアにレジ袋ごと差し出す。

「あ、ありがと……うわぁ……！」

早速、レジ袋の中からその赤いビキニを取り出したウリアは顔をキラキラと輝かせる。

本当に精神的には完全に子供だな、こいつは。

年齢的には俺と同じ――戦闘能力では俺よりも遥かに上だというのに。

精神は本当に、子供だ。

まるで――精神は子供のまま、魔術的な知識や戦闘能力だけを詰め込んでいきなり成長させたみたいな。

そんな感じ。

7月30日？

「秀、これで私も海に入れるんだよね！？　秀や霧歌と一緒に海に入れるんだよね！？」

「ああ、勿論だとも。お前は明日海に入れる。この俺が保証してやる」

「そっかぁ……エへへ。楽しみだなぁ……」

赤いビキニを抱き締めながら満面の笑みを浮かべるウリア。

どうやら、見る限り本当に心の底から楽しみにしているようだ。

「……」

明日はちゃんとウリアが海を満喫できるように俺も何か頑張らないとな……。

俺はウリアを見ながらそんな事を思った。

◆◆◆

まぁ、現実には台風で海には行けないというオチが待ち構えていたのだが。

「……お、オイ、ウリア？」

そして、俺はこの章が始まった冒頭から今の今までの回想シーンが終了するまで一言も喋らないウリアを振り返る。

しかし、その俺の問いかけにもウリアは窓の外の暴風雨の方を見たまま一向に言葉を発しようとしない。

「……」

つーか、一言でも良いから何か喋って下さい。

でないと怖いので。何か。

お前が黙っているのって何か物凄く怖いんだよ、ウリア。

すると――そんな俺の思いが届いたのか漸くウリアはその堅く閉ざしていた口を開いた。

「……ねぇ、秀」

「お、おう。どうした、ウリア」

「今日海に行けないのって……その台風ってもののせいなのよね？」

「ああ、台風のせいだ。外でこんなに風とか雨とかが吹き荒れているんじゃ、海どころかおちおち外も出歩けないからな」

「台風って――いわゆる、ハリケーンみたいなものなのよね？」

「まぁ、そうだな。アメリカでは台風の事をハリケーンって呼ぶら

しいし」

「……そっか、解った」

「……解った――って、何をだ？」

「ちょっと今から、外に出て台風を消し飛ばしてくる」

「待て！　落ち着け！　冷静になれウリア！」

何やら不穏な事を言い始めたウリアを必死に押さえる俺。

「離して、離してよ！　だって、台風が無くなれば海に行けるんでしょ！？　だったら、私の力で台風を消し飛ばせばいい話じゃない！」

「確かにそれはそうだが、そういう訳も行かないんだよ！　大体、台風が突然消えたらそれこそまたこの前のお前が焼き払った森林みたいに大騒ぎになるだろうが！」

「知らないわよ！　私は自分の娯楽の為なら幾ら未来が変わろうったって構わない！」

「お前、今物凄く最低な事を言ったぞ！　自分の私利私欲の為にこの世界の未来を棒に振ろうとするな！」

「だって、あれだけ楽しみにしてたのに！　新しい水着も買ってあれだけ楽しみにしてたのにぃ！」

「……まぁ、一章を丸々注ぎ込まないと行けないようなボリューム

の経緯が水の泡になるのは確かに悲しいけれど。それでも、台風を消しに行くな。これ以上の騒ぎはご免だ」

『台風を消す少女！』――なんて記事が新聞の一面を飾るのだけは避けなければ。

「ああもう、解ったから。それじゃあ、また今度行こうな？　夏休みはまだまだ日数あるんだし、我慢してくれよ。な？」

「ううー……ほ、本当に？」

「ああ、今度俺がまた海に連れて行ってやるよ。保証する」

「……何か、昨日もそんな事を言われて、それなのにこんな状況に陥っているような気がする……」

「……き、気のせいじゃないか？」

俺はウリアから目を逸らしながらそう言った。

あからさまな誤魔化し行為だった。

しかし、気が動転しているのかウリアはその事にも全く気付かずに。

「うん……解った。秀がそう言うのなら、そうする」

「まぁ、元気出せよ。今日はお前の好きなシーフードを作ってやるから」

「お昼？」

「ああ、勿論。お昼だけには飽き足らず、夕飯もシーフードを作ってやるよ」

「……いや、夕飯は“しーふーどー”じゃなくてスタンダードが良い」

「……ああそう」

……ウリアは欲望に忠実な少女なのであった。

そして、そんな時である。我が家のインターホンが鳴ったのは。

「おっ、誰か来た……誰だろうな、こんな台風の時に」

「タクシー会社の人が私に気を遣ってタクシーを派遣してくれたとか」

「そんな訳あるか。お前は日本国民全員に認知されているほどの有名人か何かか」

つーか、それ以前にタクシーに乗って行ったとしても海は多分荒れているだろうから入れねーよ。

お前は流されても平気かも知れないが俺が死ぬわ。

そんな事を思いながら俺は玄関へと向かい、扉の鍵を解除する。

「お邪魔しまーす」

すると、玄関扉の向こう側から現れたのは霧歌だった。

7月30日？

傘を持っているようだが――この台風の中では余り活躍出来なかったのだろう。

霧歌の体は雨に濡れていて、それによって透けた洋服の下にはピンク色の下着が――。

「秀ちゃん、一体全体どこを見ているのかな？」

「……えっと、ヴァルハラを」

「へーっ、『神の宮殿（ヴァルハラ）』、ねぇ……」

「いや、色的には桃源郷なのかな？」

「秀ちゃん」

「……ん、ゴホン。それで霧歌。そんな事よりも、お前は一体全体どうしてこんな台風の中、俺の家を訪ねて来たんだ？」

「うーん、何と言うか……我ながら名案を思い付いちゃって」

「名案？　この台風の中、海に行く為のか？　それなら俺もたった今思い付いたけど」

「私が思い付いたのはそういう事じゃないんだけど……まぁいいわ。秀ちゃんの考えから聞かせて貰いましょうか」

「要するに、水着で泳げればいいんだろ？　それじゃあ、皆で水着になって今から風呂で泳ごうぜ！」

「秀ちゃんの考えを聞こうとした私が馬鹿だったよ……」

その場で項垂れながら呆れ返ったため息をつく霧歌。

「……と、言うのは冗談で」

「嘘。絶対半分は本気だったでしょ」

「半分じゃねーよ。三分の二は本気だった」

「半分以上じゃない」

……。

「……そ、それで？　お前の方は何だ？　その名案とやらを聞かせて貰おうじゃないか」

「それはねぇ……」

そう言いながら、霧歌は背中のリュック（今更ながらその存在に気付いた。いや、他の部分に気を取られていた訳では決してない）を下ろし始める。

そして、霧歌はその中から学校で使っている数学の教科書を取り出して――。

「こんな台風の中で私が秀ちゃんの家に押し掛けちゃえば、逃げ場

もどこにも無いし、二人で宿題に集中できるわよね？」

「……ちょっと、俺今からウリアに頼んで台風を消し飛ばして貰うように頼んで来るわ」

「待ちなさい」

俺は洋服の首根っこを霧歌から掴まれた。

「嫌だ！　離せ、霧歌！　俺は絶対に宿題などしない！」

「秀ちゃん。夏休みだから、全く遊ぶなとは言わないけれど、一日くらい宿題とか勉強とかで使ってみたらどう？」

「却下する」

「その言葉を出すまでに一秒と掛からなかったね……秀ちゃん。私、何だか泣きたくなってきたよ」

「とりあえず、俺は宿題なんてしない。夏休みが終わってから、一度宿題を忘れた後に与えられる猶予（ゆうよ）期間で俺は宿題を終わらせて――」

「秀ちゃん」

その言葉と共に俺は霧歌から体を後ろに引かれて――その霧歌に倒れ掛けた体を受け止められる。

その際、霧歌の胸が俺の背中に当たって――。

「さっきの『神の宮殿』――色的には桃源郷だっけ？　あの事を忘れて欲しければ、私と一緒に宿題をやった方が身の為だと思うよ？」

「……いや、しかし」

「さもないと、ウリアちゃんに言い付けちゃうよ？」

「……りょ、了解」

……ここで、俺は改めて理解した事が一つある。

霧歌は怖い。

何だかんだ言って怖い。

今だって俺の事を脅迫してきたしな。

それ以前に、先ほどの事をウリアに言い付けられてしまっては俺の命が危ないのでとりあえず、不本意に渋々と嫌々ながらも霧歌と共に俺はその後勉学に励む事となった。

機械仕掛けの戦士

7月31日――。

「秀！　お腹減った！　“しーふーどー”を作れ！」

「惜しいな。最後の言葉が命令形じゃなければ俺は作ろうと努力はしていた」

「命令形じゃなくても作らないんじゃない！」

「ていうか……お前がこの時代に来てもう4日だぞ、4日。そろそろカップラーメンの作り方くらい覚えてくれよ」

「嫌よ、覚えないわ。だって覚えたらもう秀が朝食・昼食・夕食を作ってくれなくなるじゃない」

「自堕落にも程がある！　ていうか、そんな裏があったのなら本当に今度から作らねーぞ、お前のご飯だけ！」

「嫌よ、拒否権を発動するわ」

「お前にそんな権限を与えた覚えは無い」

「残念だったわね。拒否権というのは私の有する魔術の内の一つよ」

「何だと！？　魔術の中にはそんな便利なものまで存在するのか！」

「嘘だけどね」

「嘘!?　お前、俺の事を騙しやがったな!　折角今、拒否権の使い道をあれこれと考えていた所だったのに!」

「……ちなみに聞くけど、秀は拒否権という魔術が存在したとして、それを一体何に使おうと考えた訳?」

「まぁ、一つ礼を上げさせて貰うなら……あれだな。お前に対して拒否権を発動して、俺がその六角形のボタンを押す手を拒否しないようにする」

「魔術を変態染みた用途(ようと)に使用しないで!」

「良いじゃねーか。どうせ、俺が復活させないと魔術なんてこの世に蔓延(はびこ)らないんだろ?」

「何か開き直り始めた!?　そんな理由でセクハラ行為を正当化するのは止めてよ!」

まぁ、そんなこんなで――繰り返すようだが、7月31日。

7月最後のその日は台風一過で天には果てしなく澄み渡った青空が広がっていた。

燦々(さんさん)と太陽の光が地上に降り注いでいる――まぁ、太陽は別に悪気がある訳では無いのだろうけれど、夏の太陽の光は人間も含めて地球上に存在する全ての生物達には少しばかり強過ぎる。

一時間ばかり外を出歩くだけで体が干上がってしまいそうな――そんな熱帯に居るかのような暑さを夏の太陽は地上に齎(もたら)す。

少しばかり過言のような気もするが。

ていうか、俺達普通の人間の体が干上がりそうならばゾンビとかは一体全体どうなってしまうのだろうか。

一瞬にしてゾンビからミイラへと変貌を遂げてしまうのだろうか。

何となく、そんな事を考えてみる。

ちなみに、これは決して尺稼ぎ――もとい、文字数稼ぎでは無い。

決して。

「秀～、“しーふーどー”、いつもの場所に置いてないよ～？」

「えっ、マジで――ていうか、お前いつの間にキッチンに行きやがった」

「秀が何か適当に変な言葉を並べて文章稼ぎをしている間に」

「文章稼ぎとか言うな。俺はただ単に……そう、哲学を語っただけだ」

「太陽の光が持つ熱の強弱でゾンビがミイラ化するのか否かなんて哲学でも何でも無いわよ」

「心を読まれている！？」

「哲学でも何でも無くて、戯言――いや、それよりも下の存在よ」

「戯言よりも下！？　お前、流石にそれは言い過ぎだぞ！」

「大体、秀が哲学を語るなんて似合わないわよ。ていうか、むしろ、語られる哲学が可哀想だわ」

「哲学に可哀想も何もあるか！　つーか、そんな言われ方をされている俺の方が可哀想だろ！」

「秀の語る戯言なんて所詮はぞんざいな存在よ」

「上手い事言ってんじゃねーよ」

俺にとっては全然全くこれっぽっちも上手くは無いのだが。

「ていうか、どうして“しーふーどー”が無いの？　この前買いに行ったばかりじゃない、カップラーメン」

「それはえーっと……あれだ。俺はいつもシーフードを食べないから、多分その時には一個しか買わなかったんだと思う」

「もう……全く、使えないわね。流石はぞんざいな存在だわ」

「誰がぞんざいな存在だ。確かに語呂は良いかも知れないが、それを連呼するのは止めろ。俺が心の傷が原因で死んでしまったらどうするんだ」

「大丈夫よ。秀は心の傷如きじゃ死なないと私は信じているわ」

「信用してくれるのは有り難いけど、そんな勝手な信用なら俺は要

らない」

「だから、私はこれからも秀の心を中心に攻撃するのよ」

「何をさり気無く悪質な決意表明を行ってるんだよ！　ていうか、俺の心が強いとか云々（うんぬん）はお前が勝手にそう思い込んでるだけだからな！？　逆に言うと俺のハートはガラス製だからな！？」

「ガラス製と言うか障子紙でしょ？」

「障子紙！？　お前、俺の心に何て事を言うんだ！」

障子紙は流石にねーよ！

流石の俺の心でもガラスくらいの耐久力はあるよ！

「しかし、“しーふーどー”が無いのか……仕方ない、それじゃあこうしましょうか、秀」

「一体全体どうするんだ」

「秀がまたスーパーで“しーふーどー”を買ってくる」

「まぁ、それに落ち着くわな。最終的に」

つーか、それ以外に手段は見つからないと思うし。

「解ったよ……まぁ、ウリアー――もとい、女子から罵倒され続けるという事は案外心が躍るものだが――」

「秀？　今何か変態染みた発言をしなかった？」

「間違えた。女子から罵倒され続けるというのは余りやぶさかではないし、俺のガラスのハートが耐え切れないから、素直に俺はスーパーに行く事にするよ」

「何だ、私の聞き間違いか。また何か秀が変態発言をしたら霧歌に報告しようと思っていたのに」

「それだけは勘弁してくれ。ていうか、お前等いつからそこまでのコミュニティを形成してしまうほどに仲良くなったんだよ」

「私達、秀を更生させる為に同盟を組む事にしたの」

「更生って言うな。俺はただ日々を素直な気持ちで生きているだけだ」

「要するに、欲望に忠実に生きているから変態染みた行動を思わず取ってしまうという事なのね？」

「さーて、買い物に行って来るかー」

俺はその場をあからさまに誤魔化してスーパーへと急ぎ足で出掛けるのだった。

◆◆◆

スーパーにてシーフードのカップラーメンをとりあえず三つほど買い込んだ俺は茹(う)だるような夏の暑さの中を一人歩いていた。

俺が今歩いている住宅街の通路には誰も居ない。

人っ子一人居ない――人影すらも、見えない。

おそらく――というか、確実に皆家の中でぐったりまったりと過ごしているのだろう。

冷房を利かせた部屋の中で。

俺の家にも勿論クーラーはあるのだが……電気代を考えるとまだ点けるには至らないか。

ていうか、まだまだクーラーなんか点けなくても大丈夫だしな。

扇風機もあるし、クーラーの出番はまだまだ遠いか。

まだ7月だからか、まだ比較的騒がしくない蝉（せみ）の声を聞きながら俺がそんな事を思っていると。

ふと、前方に佇んでいる一人の男を俺はその視界に捉えた。

最初は、その人物の性別を俺は女だと勘違いした。

何故なら――その男の髪は女のように長くて、後ろで一つに束ねられている（いわゆるポニーテール）髪型だったからだ。

ちなみに、前髪は真ん中から左右に分けられていた。

そして、髪型について俺が女と勘違いした点はもう一つ。

それは、その男の髪の色が“赤”だったという事。

その人物の顔が男らしい顔だったから俺は勘違いせずに済んだものの――って、あれ？

顔も何だか女らしい、と言うか、えらく整った顔立ちをしていないか？

あれ？　それなら俺はこの人物のどこを見て男だと納得したのか。

何となく――というものもあるが、やはり、胸の大きさだろうか。

女だったらあんな断崖絶壁は有り得ないだろう。

しかし、それだけで男と断言するのもおかしいか――女性だってあんなぺったんこな胸をお持ちの方も居るだろう。

あれ？　それじゃあ、今俺の正面に立っている人は男なのだろうか、それとも女なのだろうか。

あれ？　何か夏の暑さのせいか思考が上手く働かないぞ。

そして、その男か女か解らない人物（失礼極まりないが心の声という事でスルーして欲しい）の服装を俺はボンヤリと見据える。

あれは――軍服、だろうか？

軍服のような洋服だが、軍服特有の迷彩柄では無く――その人物が着ているものは黒一色だった。

上も、下も、靴までもが全て――黒。

まるで、それは軍服が森の木々に紛れ込む為の服装ならば、その黒い軍服は夜の闇に紛れ込む為の服装みたいな。

そんな事を――その色は思わせた。

そして、その男は俺の正面に佇んだままゆっくりと口を開く。

「……お前」

……ああ、何だ。

これでハッキリした。

今の声色からすれば、この人物は列記とした男だ。

全く、俺は一体全体何を勘違いしていたのか。性別を間違えるなんて失礼極まり無い――。

「真之乃秀、だな？」

「……」

――その男の問いかけが俺の聴覚器官に伝わった瞬間。

俺の頭の中でモヤモヤとしていた夏の暑さによる倦怠感（けんたいかん）はどこかへと吹き飛んでしまった。

待て……待て。

今、今この男は……俺に向かって、何と言った？

“誰の名前”を――呼んだ？

「……えっ？」

「……もう一度問おうか」

そして――男は再度、言う。

“その名前”を口にする。

「お前は……真之乃秀、だな？」

「……」

どうして――今日初めて出会ったような人物が俺の名前を知っているのか。

不意に目の前に舞い降りた現実に俺は戦慄する。

どうして、この男は俺の名前を知っている？

あっちは知らないけれど、俺の方は確実にこんな容姿の人物には会った事が無いはずなのに――って。

ちょっと、待て。

何か、こんな感じ前にも……無かったか？

そう、四日くらい前にもこんな事が無かったか？

四日くらい前にも――そんな感じの言葉を言いながら俺の目の前に現れた人物は――“少女”は誰だ？

そして、その少女は何と言っていた？

“魔法少女”というトンデモ設定だけでも十分過ぎるほどに十分なのに、その少女はそれに加えて自分を何だと言っていた？

「答えない、か――その沈黙を、俺は答だと受け取っても構わないのか？」

赤い長髪を携えた男は不敵に笑い、俺に再度そんな事を問いかけてくる。

機械仕掛けの戦士？

そして、そこで俺は漸く口を開き――言葉を発する事が出来た。

「お前……何者だ」

「……どうやら、漸く現実が頭に付いて来たらしいな。この夏の暑さで頭でもやられたか」

「そんな事はどうでもいい……俺は、今、お前に聞いてるんだよ。お前の正体をな」

「俺の正体、か。“この時代”の人間がどれほど理解できるか知らないが、かと言っていちいち全てを説明するのも気怠いからな。説明は省いて、専門用語で説明させて貰うぞ」

「構わねーよ。俺だって、一応そういった専門用語はこの四日間で聞き慣れているはずだからな」

「そうか……やはり、“お前”が」

俺の言葉のどこに反応したのか――男はニヤリと再度不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「――俺は『混合機関　科学発展側』に属する“第一級（ファースト）”『機械（メカニ）仕掛け（カルウォーリア）の戦士』――ストレンドだ。宜しくな、真之乃秀」

「……やっぱり、お前は未来人か。という事は、お前は俺の事を殺しにやって来たんだな？」

「その通りだ。先日、この時代に送り込んだ俺の部下からの連絡が不意に途絶えてな。部下の生死を確認するついでに、今度は俺がこの時代に派遣されたという訳だ」

「その派遣された奴が、自分から俺の前に出て来るなんて……余裕だな。そんなにお前が未来から転送する『魔導獣機』には自信があるのか？」

「……お前は何を言っているんだ？」

赤い長髪を携える男――ストレンドは怪訝そうに眉を顰めて言う。

「俺が“そんなもの”に頼る訳が無いだろうが。“あんなもの”は、実際に自分の手で戦う事の出来ない腰抜けが使う兵器だ。俺をそんな弱小な人間と一緒にされては困るな、真之乃秀」

「……それじゃあ、お前は一体どうやって俺を」

「まぁ、“今の所”一般的な人間であるお前と、俺の戦闘能力の差は著しく差があるからな。その気になれば白兵戦でお前を片付ける事も出来るが……それは詰まらないだろう？　本当はお前の前で俺の手の内を少しでも明かしてやろうとは思ったが――“アレ”も傍におらず、尚且つ、“今のまま”のお前に、残念ながら俺は少しも興味が湧かないんだよ」

「……お前は一体、何を言っているんだ？」

今度は俺の方が怪訝な声を漏らしていた。

おそらくは表情も怪訝なものとなっている事だろう。

“アレ”という代名詞の正体は解る――おそらく、それはウリアの事だ。

しかし、こいつが――ストレンドがその後に放った言葉の意味が全く以て理解できない。

“今のまま”の俺？

それは一体全体――どういう事だ？

すると、ストレンドは徐に雲一つない快晴の空を仰ぐと――口の端に笑みを浮かべる。

「……オイ、真之乃秀」

「……何だ」

「今、俺はお前に言ったな？　俺はお前には興味が無い――手の内を明かせそうに無い、と」

「……ああ」

「……済まないが、その言葉を少しばかり撤回させて欲しい」

「お前には依然として興味は無いが」とストレンドは俺に右の掌を向けた。

その瞬間、俺はストレンドの右目が僅かに一瞬だけ光ったような気

がした。

――そして。

不意にストレンドの右腕の周囲の空間が歪み始めた。

その現象は『魔導獣機』が転送される際に空間に生じる歪みと似ていた――と言うよりも、同じようだった。

「――手の内を少し、お前に明かさせて貰うぞ」

そうストレンドが言葉を放った瞬間、ストレンドの右手に巨大なガトリング砲が出現した。

「なっ――――」

それ以上、俺が言葉を発する事は許されなかった。

何故なら、ストレンドの右腕に出現したガトリング砲から凄まじい音と共に数多の銃弾が俺目掛けて解き放たれたからだ。

勿論、高速で迫り来る銃弾を俺は捉える事は出来ない――しかし、俺は“銃で撃たれる”という出来事に条件反射で咄嗟に目を閉じる。

――そして。

「秀！」

頭上から聞こえてきた声に俺は閉じた目を再度開いた。

それと同時に目の前に降り立つウリア。

ガトリング砲から放たれた銃弾はウリアの目の前に現れた魔方陣に当たると一瞬にして焼失し、次々と消滅していく。

しかも、その魔方陣は一つだけでは無い――飛んでくるそれぞれの銃弾の進行方向の行き先に一つずつ小さな魔方陣が次々と出現しては、銃弾を焼失させると消えて行く。

一体どういう原理なのか。

それとも、そういう魔術なのか。

とにかく――理屈は解らないが、俺にはウリアが途轍もなく高度なスキルを使用している事を理解する事が出来た。

そして――不意に銃弾の嵐が止む。

それによってウリアの前に小さな魔方陣が現れる事も無くなった。

こちらに向けたガトリング砲を下ろしながら――ストレンドは言う。

「……やはり、実弾はお前には効かないか」

「……何者？　あなた」

「『混合機関　科学発展側』の“第一級”『機械仕掛けの戦士』のストレンド――と、言えばお解りかな？　ウリアール＝ブレイザー」

「ええ、勿論よ。ていうか、まさかあなたのような“第一級”の階

級を持つ『機械仕掛けの戦士』が派遣されるなんて――未来のあなた達はそこまで私達に手古摺（てこず）っていると思い込んでしまってもいいのかしら？」

「まぁ、そう思うのが妥当だろう。手古摺っていなければ、俺みたいなクラスの戦士は普通、派遣されないからな。……それに」

そこで一旦言葉を切ったストレンドは――静かに俺の方へと視線を向けてきた。

「……少々、未来で解った事があってな。“それ”を警戒する為にも、この俺がこの時代に派遣されたという訳だ」

「解った事……？　それは一体何？」

「俺達は敵同士だという事を忘れるなよ、ウリアール＝ブレイザー。俺はお前の敵で、お前は俺の敵だ――敵に俺がそう易々と情報を受け渡す訳が無いだろう」

「……まぁ、それはそうでしょうね」

「……まぁ、そう熱くなるな。ウリアール＝ブレイザー」

ストレンドがそう言った直後、その右腕からガトリング砲が出現時と同じように空間と共に歪んで――消滅した。

「今日はただの挨拶だ。それなりに収穫はあったがな……お前の力を少しでも垣間見れて良かった」

「あなたがこの時代にやって来たという事は、先日までこの時代に居たあなたの仲間がどういう末路を迎えたのかも承知しているのよね？」

「……だったらどうした？」

「覚悟しておきなさい――って、言ってるのよ」

「……それはこちらの台詞だ。ウリアール＝ブレイザー」

「精々首を洗って待っていろ」とストレンドは最後にそんな言葉を俺達に残して。

空間の歪みと共にその場から消えた。

「消えた……？　何だあいつ、未来に帰ったのか？」

「いいえ、違うわ。『空間移動（テレポート）』――魔術と科学を融合させた事で生み出された技術の一つで、二つの地点の空間を無理矢理歪ませて強制的に二つの空間同士の接続する――それで、一瞬にして別の場所へと移動する事が出来るの」

「へーっ、テレポート、か。これは、電車だけじゃなくエレベーターも２０５６年にはすぐお役御免になりそうだな」

「ていうか、秀！」

不意にそう声を上げたウリアは両手で俺の頬をガッチリと捕えると顔を眼前（冗談では無く本当に目の前）まで近付けてきた。

こんな時に不謹慎かもしれないが……その、キスされるかと思った。

ていうか、唇を突き出せばウリアの唇に届くような、ウリアの顔は今そんな近距離にある。

雰囲気に呑まれているのか――俺は唇をウリアに向かって突き出す事が出来なかった。

いや、シチュエーション的には正解なのだろうか、男としては何か不正解のような気がしてならない。

「大丈夫だった!?　怪我とかしてない!?」

「あ、ああ……俺は大丈夫だった――」

「良かった――――っ！」

「むぐっ!?」

俺が言い掛けた言葉はウリアのその叫びに――いや、ウリアの胸によって遮られた。

何故なら、ウリアは不意に俺の顔を自分の胸に押し付けるようにして抱き着いて来たからである。

いや、実際押し付けられていたのだけれど。

「良かった、本当に良かった……！　秀が帰って来るの遅いから、迎えに行こうとして外に出たら魔力の気配がして――ああもう、本当に間に合って良かった！」

「そ、そうか……それは良かったな」

「本当よ！　私もう……秀が死んじゃったらどうしようかと思った……！」

「そうだな……今、俺幸せ過ぎてもう死にそうだ」

目の前に三途の川じゃなくて、何か桃色の世界が見えてきた。

なるほど、人は主に胸に押し付けられたりして至福の時を過ごしながら死ぬ場合、死ぬ前に桃源郷を見るのか。

新発見だな。

……。

「ウリア。もうそろそろ俺の体を――いや、正確には顔を離せ。これ以上は危ない。何と言うか……理性が保てなくなりそうだ」

「えっ――ひゃっ！」

そして、漸く今自分がやっている事に気付いたのか――ウリアは途轍もなく可愛らしい声を上げて頬を軽く上気させた状態で俺から素早く離れるとアスファルトの上に着地する。

「……その、ご、ゴメン、秀」

「い、いや、礼は要らないって。つーか、礼なら俺が言うべきだし、二つの意味で」

「ん？　二つの意味で？」

「いや、何でも無い、忘れろ。つーか、忘れてくれ」

霧歌に今の発言を申告されたら堪らない。

「ていうかほら、シーフード、買って来たぞ」

「あ、ありがと……その、何度も言うけど、ゴメンね？　私が秀に買い物なんか頼まなかったら、こんな事にはならなかったのに」

「だから、別に良いって。どうせ、買い物に行かなくてもあのストレンドとか言う奴とはすぐに会い見えたんだろうし」

「それに」と俺はウリアに微笑んで言う。

「俺がまた誰かに襲われたら、その時はお前が――ウリアが俺の事を助けてくれるんだろ？」

「あ……う……！」

すると、ウリアは顔を真っ赤にしたかと思うと口をまるで地上に投げ出された魚の如くパクパクとさせて。

「あ……当たり、前じゃない！」

そう声を上げて俺から顔を背けてしまった。

「しゅ、秀がまた、ピンチになった時は……この私が、助けに来て上げるわよ」

「おう、宜しく頼むな、ウリア」

「……」

「……」

……いや、何で俺の方をジッと見つめて来るんだよ。

俺の顔に何か付いてるのか？

「……何だよ」

「べ、別に何でも……！　て、ていうか、早く帰るわよ！　早く帰って、秀には“しーふーどー”を作って貰わないといけないんだから！」

「ハイハイ、解ったよ……ていうか、今日はお前にも作り方見せるからさ。それでいい加減、作り方覚えろよ」

「だから、作り方は覚えないって。覚えちゃったら私の自堕落な生活が崩壊――じゃなくて、秀が私にカップラーメンを作ってくれなくなるじゃない」

「お前、今自堕落な生活が崩壊するって自分で言い掛けただろ！？」

「おっと、口が滑る所だったわ。危ない危ない」

「滑ってるよ！　既にお前の口は滑りまくってるよ！」

そんな会話をウリアと交わしながら――俺は先ほどのストレンドの事を思い出す。

（――“今のまま”のお前に、残念ながら俺は少しも興味が湧かないんだよ）

……あの時。

あの時、ストレンドが言っていた言葉の真意は一体何だったのか。

“今のまま”の俺とは――どういう意味なのか。

そんな思考を巡らせながら――俺はとりあえずウリアと共に自宅へと帰路を歩くのだった。

◆　◆　◆

「……なぁ、ウリア」

俺はカップラーメンが出来るまでの三分という時間を待つ間に今、頭の中に浮かんだ疑問をウリアに聞いてみる事にした。

ちなみに、俺とウリアは例の如くテーブルに、互いに向き合う形で座っていて――俺達の前にはそれぞれの昼食であるお湯を注ぎ終えたカップラーメンがあった。

更に余談を語っておくならば、俺はカレーで、ウリアはシーフードである。

「……何よ、秀。私はね、今一秒たりともカップラーメンから目を離す事が出来ないのよ」

「それじゃあ、離さなくていいから。ちょっと聞きたい事があるんだけどさ」

「何？」

「聞きたい事と言うか――その、俺、やっぱりこの前の話って理解できないんだよ」

「この前って、どの前の話よ」

「ほら、お前が森林ごと『魔導獣機』を操っていた奴を倒した時の話だよ。過去で死んだ未来人は歴史に残らないとか――そこら辺の話」

「ああ、そんな話もそう言えばしたわね……それで？　その話のどの辺りが理解できない訳？」

「あの時、俺はお前にこう言ったよな？　お前が倒したその敵は過去で死んだ事になるんだから、未来の本拠地に居る敵にはすぐにその事が解るんじゃないかって」

「ええ、そうね」

「そして、お前は俺にこう答えた――未来の人間は元々過去の世界に存在しない架空の人物みたいなものだから、例え未来の人間が過去で死んだとしても、その死んだ事実自体が残らないから未来に居る敵にその事実は伝わらない――だったよな？」

「うん、多分そんな感じ」

「でも、それってやっぱりおかしくないか？」

「だから、どこがよ」

「だって、確かにその未来の人間がこの時代で死んだ事はすぐには伝わらないかも知れないけどさ。いつかは――いつかの未来にはその事実は伝わっているんだろ？　それなら、その事が伝わった時点の未来からこの時代の過去に来たとすれば、やっぱり、あいつらは間髪入れずに俺達を襲って来るんじゃないのか？」

「うーん……秀のくせに難しい事を尋ねて来るわね」

「“秀のくせに”って言葉は余計だよ」

「確かに、秀の言う通りではあるわね。例えその人が死んでしまった事が“その時”には伝わらなかったとしても、“１０分後”にその事実が伝わってしまえば、その“１０分後”の未来からこの時代に来ればいい話だもんね」

「ああ、そうだろ？」

「でも……よく考えて、秀。それなら、どうして敵は――科学側の人間はその自分の味方が死ぬ前の時間に戻らないと思う？」

「それは……えっと」

……あれ？

「えっ……何でだろうな？　ていうか、そう言われてみればそうだな」

「その味方が死んでしまう前の時間に戻ればその味方を助ける事が出来るのに――どうして、敵はそれをしないのか」

「それはね」とウリアは言う。

「そうしようにも、それが不可能だからなの」

「……どういう、事だ？」

「『世界線（せかいせん）』――って言葉、秀は知ってる？」

「いや、悪いけど全く知らない。聞いた事も無い」

「それじゃあ、『平行世界（パラレルワールド）』は？」

「ああ、それなら流石に聞いた事ある。確か、この世界とは別にこの世界とはほんの少しだけ“何かが違う”世界の事だよな？」

「まぁ、概（おおむ）ね正解かな。この世界とは決定的に“何かが違う”世界――それが『平行世界』。例えば、日本の総理大臣が違っていたり、私達が愛用しているカップラーメンが無かったり――極端に言えば人間自体が存在していなかったり、『平行世界』というのはそういうものの事を言うわ」

「それで、その『平行世界』が今回の話に何か関係あるのか？」

「ええ、勿論よ。ていうか、関係無かったらこんな話しないわよ。秀の脳味噌の許容範囲（きょようはんい）を超えてしまうかもしれないのに」

「そうか、それはそうだな。そして、俺の脳の許容範囲はそこまで狭くは無いから安心しろ」

「でね？」とウリアは話の続きを語り始める。

「敵が過去で死んでしまった自分の仲間を助ける事が出来ないのは――不可能なのは、この『平行世界』が原因なの」

「『平行世界』が、原因？」

「『世界線』――過去から未来に向かって延びる一本の線。それが何らかの出来事によって、二つに分岐した事――それによって、『平行世界』は生まれるの」

「何らかの出来事って……例えば、何だ？」

「そうね。まぁ、何でも良いんだけど……簡単な例で言えば、誰かが死ぬとか、かな」

「誰かが……死ぬ」

「まぁ、だからそれだけが『世界線』が分岐する要因に成り得る訳じゃないんだけどね。例えば、いつも秀が学校とかスーパーとかで使っている道があるでしょ？　そのいつも通っている道順を――“使わないで”、左に曲がる所を右に曲がるとか、そういう事でも『世界線』は移動して、『平行世界』は生まれるの」

「えっ、そ、そんな事で？」

「そうよ。例えば――このカップラーメン」

そう言ってウリアはカップラーメンの蓋を剥がし始める。

そう言えば、もうそろそろ三分経つ頃か。

「秀がこのカップラーメンを箸じゃなく、フォークで食べる事でも、『世界線』は移動して、『平行世界』は生まれるし、今はテレビが点いていないけれど、今この時にテレビを点けるか否かでも『世界線』の変動によって『平行世界』が生まれるの」

「つまり、日々の生活の中で……次々と『平行世界』は生まれているって事なのか」

「そう。でも、『世界線』が移動して、数多の『平行世界』が生まれたとしても、その殆どの『平行世界』は全て同じ結果に辿り着く事になっているの。だって、カップラーメンを箸じゃなくフォークで食べた事で未来が完全に変動して――そうね、アメリカに大型ハリケーンが上陸しなくなるなんて、有り得ると思う？　いや、可能性的には０パーセントではないんだけど、そんな事は殆ど有り得ないよね？」

「それじゃあ……やっぱり、その『世界線』の変動で『平行世界』が生まれる事で未来がそこまで変わらないのなら、あいつらはどうして過去に死んだ味方を助ける事が出来ないんだよ」

「確かに、日常的な『世界線』の変動で創造される『平行世界』では未来そのものは変化しない――だけど、“非日常的”な『世界線』の変動ならば、その時に創造された『平行世界』の先に待つ未来は――変化するのよ」

「“非日常的”な……『世界線』の変動」

「そう、例えば……さっきも言ったけれど、人が死ぬとか、そういう“非日常的”な出来事が起こった場合、『世界線』は大きく変動する。そして、勿論その時生み出された『平行世界』もその変動した分だけ未来が変化するのよ」

「それは解ったけど……でも、どうしてもあいつらが過去の味方を助けられないって事実には結び付かないんだけどなぁ」

「それじゃあ、秀。例えば、自分の味方が過去に死ぬ事が解っていて、秀がその人を助けに行ったとするじゃない？」

「ああ」

「そして、秀はその死ぬはずだった味方を見事助ける事に成功した――そしたら、その時、その味方を助けた秀はどうなると思う？」

「どうなるって……それは――」

……。

「……あっ、そういう事か。『世界線』が“非日常的”な出来事で大きく変動するのなら、その過去で起こった“非日常的”な出来事を無かった事にしてしまったら、未来の自分が消えてしまうのか」

「そういう事よ」とウリアは得意気な笑みを浮かべて頷く。

「『世界線』が変動する要因を消してしまえば、その先に存在していた『平行世界』そのものが消滅して、その先の未来に存在していた自分は消滅してしまう――だから、あいつらは過去の出来事に余り手を出せないの。例え未来人だとしても、死んだのは過去――そ

んな大きな過去の出来事を変えてしまえば、その先の未来が何らかの形で大きく変動するのは目に見えているから」

「何だ、そうだったのか――って、あれ？　でも、あいつらが俺の事をすぐ襲って来ない理由にならなくないか？」

「それは……えっと、これは私の推測なんだけど。多分、今日初めて会ったストレンドって男は、私があの『魔導獣機』を操っていた男を倒したすぐ後にこの時代にやって来たのよ。正確には、私があの男を森林ごと焼き払った――あの場所に」

「えっ……それじゃあ、どうしてすぐに俺の事を襲って来なかったんだろうな。今日みたいに」

「単に、秀の事を捜していたからじゃないの？　だって、２０５６年の未来に――それも、数多の自然災害で地球上のあらゆる文明が根こそぎ滅ぼされたそんな時代にこの家の場所を記したデータが残っていると思う？」

「ああ、なるほど……そういう事か」

「そういう事よ。だから、あいつらは、あの『魔導獣機』を操っていた男が最後に連絡を絶ったこの場所に目星を付けたのね。２０５６年は今から４５年後の未来だし、この町で森林が一夜にして燃えてしまったという怪現象も誰かが覚えていたのかもしれないし」

「なるほどなぁ……あれ、ていうか、それじゃあ最初の男はどうやって俺の事を見つけたんだろうな」

「さぁ？　日本全国の魔力が集中している場所でも探索して、ここ

に辿り着いたんじゃない？」

「でも、俺って魔力持ってないよな？　そして、『魔導獣機』が襲って来たのはウリアが来た後――って、オイ、まさかお前が来た事で俺は急に狙われるようになったんじゃないだろうな」

「さーてと、伸びる前に食べなくちゃ。いっただっきまーす」

「……」

どうやらそういう事らしかった。

まぁ、こいつが来なくても遠い未来のどこかで俺は確実にあいつらから狙われる事になっていただろうから……こいつが来てくれただけ良かったのか。

しかし、『世界線』に『平行世界』ねぇ。

こいつ、本当に頭が良いんだか悪いんだかよく解らない奴だよな――。

「……ん？」

そこで再度俺の頭の中に新たな疑問が浮かび上がった。

「……なぁ、ウリア、もう一つだけ質問があるんだけど」

「何よ、今度は」

「どうして……あいつらは4日前の7月27日から俺の事を襲い始

めたんだ？　ていうか、それ以前にお前も――ウリアも、どうして7月27日に俺の所に現れたんだ？」

「……どういう事？」

「いや、だってそうだろ？　俺は単なる一般的な人間だけど、子供の頃とかの方が圧倒的に襲い易いだろうし、ウリアだって、子供の俺の方が護り易かったりするんじゃないのか？」

「そう言われてみればそうね……でも、その件については私も解らないわ。だって、私のこの時代に送り込んだのは未来の秀なんだから」

「何だろう……俺の子供の頃の時代に行く事が出来ない理由とか、何かあるのだろうか」

「さぁね……そこまでは流石に私も解らないわよ。ていうか、食べないの？　早く食べないと伸びちゃうよ？」

「お、おう、解ってる、解ってる」

そう言って俺は咄嗟にカレーのスープの中から箸で麺を掬い上げる。

カレーのカップラーメンはやはり美味しかった。

いつもと変わらない味で――物凄く美味。

美味しく感じられた――のだが。

俺の頭の中では様々な疑問がグルグルと回ったままで。

ストレンドが言った謎の言葉だとか。

どうして、ウリアもストレンド達も今よりも過去の俺の事を相手にしないのか、とか。

そんな感じの事が――色々と頭の中に残ったままで。

俺はカップラーメンを食べ終わるまでの間、正直、殆ど落ち着いてその味を味わう事は出来なかった。

強襲

8月1日――この日、俺の部屋にはウリアと霧歌が居た。

同世代の女子が自分の部屋に居る――という言葉を聞けば、それはとても喜ばしい言葉かもしれないけれど。

無論、そんな幸せな空間を創り上げる為には何らかの代償が居る訳で。

その代償として、俺は今霧歌と共に宿題を行っていた。

何の宿題かと言えばそれは夏休みの宿題と言う訳で――ちなみに、教科は数学である。

霧歌曰(いわ)く、数学は量だけ多くて意外と面倒に感じるのだが、意外と解いてみれば基本ばかりが集められた問題が多く、それらの全ての問題を解いた後の解放感は凄い――との事だった。

確かに、霧歌の言いたい事は解る。

数学はワークだとか、プリントだとか、量が途轍もなく多いのだがそれらの全てを解いてしまった後は何だか気が楽になりそうな気がする。

とても複雑な迷路から脱出する事が出来た後みたいな。

富士山の頂上に辿り着いた後みたいな。

多分、数学の宿題の山を越えた先に待っているのはそんな解放感なのだろう。

山だけに、富士山と同じ解放感みたいな。

なんちゃって。

……。

……しかし、霧歌の言いたい事の内で理解できたのはそこだけで。

理解できなかった事と言えば――“基本問題ばかりが集められている”という部分か。

「オイ、霧歌。このワークやプリント、基本問題が全然載っていないぞ。どうやら、霧歌の言っていた事は外れたみたいだな」

「えっ、そうかな？　私が解く分には基本問題ばかりで結構楽なんだけど……」

「そうか。それならあれだ。普段成績の悪い俺に対して先生が態と問題を難しくするという嫌がらせをしているんだ、きっとそうだ」

「いや、見比べた限り、私と秀ちゃんがやっている問題は同じだと思うけれど……」

「何？　それじゃあ、どうして俺はお前が基本問題と呼ぶ簡単な問題を解く事が出来ないんだ？」

「秀の理解が通常では“基本”だと呼ばれるレベルにまで達してい

ないからじゃない？」

「……」

ちなみに、俺と霧歌は物置から持って来たテーブルを部屋の真ん中に置いてそこで宿題をやっている。

時には互いに教え合ったりしながら――まぁ、俺が基本的に聞くだけなのだけれど。

時には互いの答を覗いたりしながら――これも俺しかやっていない訳だが、決してズルなどではない。

先に答を知っていた方が計算意欲をそそられるみたいな、そんな感じだから。

だから、別に俺が霧歌の答を時折丸写ししているとかそんな不正は断じて行っていないから。

――そして、少し話は逸れてしまったが。

部屋にテーブルの奥となると狭いので、霧歌のすぐ後ろには部屋の壁が、俺のすぐ後ろにはベッドがあるのだが。

金髪未来系魔法少女はそのベッドの上で漫画を読み耽（ふけ）っていた。

ついでに、時々後ろから先ほどのように俺に罵倒を浴びせて来たりもする。

……厄介な話である。

「……オイ、ウリア。お前は何て事を言うんだ。折角俺がその事実を遠回しにオブラートに包んで話していたというのに。これじゃあ、俺の努力が台無しじゃないか」

「秀、そんな努力を積み重ねるくらいならもっと勉強した方が良いと思うよ？」

「嫌だね、俺は高校で勉強なんかするつもりは毛頭ない。数学なんか特にやる気はゼロだ。方程式とか図形の公式とか、色々な事を高校では習うけれど、それが一体全体将来何の役に立つんだよ」

「まぁ、確かに秀ちゃんの言う通り、将来的には二次方程式とか、球体の体積を求める公式とか絶対に使わないよね」

「だろう？　まさか霧歌が同意してくれるとは思わなかったけどさ」

「でもね、秀ちゃん」と霧歌は言う。

「将来、例えば、どこかの会社に就職した後はそれらの知識は使わないかも知れないけれど。大人になったら、折角覚えたその知識はどこか記憶の隅っこで消えて行くのかも知れないけれど。でも、その会社に就職する為には、大人になる為には、こういう無駄な知識を覚える事も大事なんだよ、多分」

「そういうものなのかねぇ。確かに、勉強すれば良い大学に行けて会社とかも良い所に入れるかも知れないけれど。そういうのって俺は間違っていると思うな。世の中、経歴だけが全てじゃない気がする」

「そうだね、確かに秀ちゃんの言う通りだよね。まともに学校とかに行かずに――こういう言い方は駄目かも知れないけど、不良やニートになってしまった人が案外社会では上手くやれていて、逆に、頭の良い人――俗に言うエリートとかが将来犯罪者とか事件を起こしてしまったりするんだよね」

「そうだな、その考えについては俺も同意だ」

「でしょう？」

「でもまぁ、同じエリートでも霧歌は絶対にそんな事はしないけどな」

「だから、私はエリートじゃないよ……でも、擁護（ようご）してくれてありがとう、秀ちゃん」

「どういたしまして。お礼に俺にキスしてもいいぜ？」

霧歌からのツッコミが飛んでくる前に俺は後頭部を何者かに蹴られた。

ていうか、何者かと言う以前に犯人は一人しか居ない。

「……オイ、何をするんだ、ウリア」

「ゴメン、漫画読んでたら思わず足が滑った」

「そうか。そのまま本当に足を滑らして頭でも打ってれば良かったのにな」

「何か言った？　秀？」

「さーて、宿題宿題、っと」

俺はウリアに対してスルースキルを発動させると何事も無かったかのように宿題に再度取り掛かる。

「はぁ……しかし、８月に入ったばかりだというのに、夏休みだというのに、俺はどうして宿題をやっているのだろうか」

「秀ちゃんのその疑問に答えさせてもらうと、今が夏休みで、夏休みの宿題は夏休みにやるものだからだと思うな、私は」

「霧歌、俺の半分冗談みたいな疑問に真面目に答えなくても良いんだぞ？」

「えーっ、でも、誰にも拾われずにスルーされたら秀ちゃん辛いでしょ？」

「……」

微妙に心配されている俺なのであった。

ていうか、逆に自分がみじめに思えてくるのは気のせいだろうか。

気のせいであって欲しい。

強襲？

「そうよ、霧歌。そんな頭の悪い質問にいちいち答えていたら秀の馬鹿が伝染しちゃうわよ？」

「ウリア、お前もいちいち俺達の会話に割り込んで来るな。それから、俺を微妙に病原菌みたいに言ってんじゃねーよ」

俺の馬鹿さ加減は別に病気じゃねーよ。

元々からこんな感じなだけで。

……何か、自分で言ってて悲しくなってきた。

泣こうかな。泣いたらこの心のモヤモヤは無くなるだろうか。

「……ねぇ、秀ちゃん」

「ん、どうした？　やっぱりキスするつもりになったか？」

「いや、そういう訳じゃなくて……その」

「……何だよ」

「もしかして、何かこの前聞かせてくれた話に進展があった？」

その霧歌の問いに俺は一瞬――ほんの一瞬だけ宿題をやっているシャーペンの手を止めて、それから霧歌に“気付かれないように”またその手を再開させた。

「……どうして、そう思うんだ？」

「いや、何となく……何となく、そう思っただけ」

「そうか……残念だけど、お前の思惑は外れてるよ。まだ、あの話の続きを俺はお前に語る事が出来そうにない。ネタが無いからな」

「そっかぁ、それは残念だなぁ」

「ああ、ゴメンな。霧歌」

「ううん、別に良いのよ……良いんだけど」

「……だけど？」

「……前にも言ったように、隠し事だけは止めてよね、秀ちゃん」

「……」

「私達、友達同士なんだから」

「……ああ、解ってる」

解っている――解ってはいるのだ。

解っているからこそ、俺は“昨日の出来事”を霧歌には話さない。

ストレンドという未来から来た新たな刺客に出会った事を俺は霧歌に話さない。

そう――俺は昨日ウリアと一緒に決めたのだ。

霧歌は確かにもう俺達に――正確には、俺達が関わっている問題に巻き込まれてしまっているけれど。

まだ実際に巻き込まれた訳じゃない。

それならば――更に深入りさせる必要など皆無だろう。

話した所で、更に霧歌を俺達に関わらせてしまうだけ。

話した所で、霧歌に余計な心配をさせるだけ。

話した所で――何も変わらない。

何も変わらないのならば――話す必要など無い。

態々霧歌をこれ以上深入りさせる必要は無い。

そうやって――俺とウリアは昨日二人でその答を出したのだった。

これ以上霧歌を関わらせてはならない。

そんな――答を。

「だから……話の続きが、ネタが出来たら、またお前に話すとするよ」

「うん……絶対だよ？　秀ちゃん」

「当たり前だろ。だってお前は……俺の友達で、唯一無二の幼馴染なんだから」

「……秀ちゃ――」

その霧歌の言葉を俺は最後までよく聞き取る事が出来なかった。

何故なら、俺はまた後ろから――もとい、ウリアから後頭部を蹴られたからである。

しかも、先ほどよりも若干強めに。

「……だから、ウリア。お前は一体全体何がしたいんだよ。もう足を滑らせたという理由は通用しないからな」

「心配しないで。何か秀がカッコイイ事を言い始めたから、それに対するキャラ補正」

「勝手に俺のキャラを補正するな！　ていうか、少しくらい俺にだってカッコイイ場面があってもいいだろうが！」

これでも一応主人公だぞ！

「つーか、今更だけど補正って！　それじゃあ、俺は普段は何もカッコイイ事を言わない、むしろ逆にカッコ悪い人間だって事なのか！？」

「そうね。秀の情報を正確に補うとそうなるわね。秀は普段、いつも犬に噛まれたり、いつもガキ大将から虐（いじ）められたり、いつもテス

トで零点取ったり、それが原因で母親に怒られたりするようなカッコ悪さを持っているから」

「俺はどっかのメガネを掛けた冴えない永遠の小学五年生か」

つーか、逆に考えればその名作は２０５６年まで生き残っているという事なのか……。

ちょっと感動した。

いや、あれは名作中の名作だよ。本当に。

「……ていうか、もし俺がウリアの言う通りのキャラだったとしたら、助けを求めるべきなのは霧歌という事になるのか？」

「えっ、私？」

「おーい、キリえもーん！　助けてよー！」

「あっ、『キリえもん』って良いネーミングだね。合格」

「……」

何か知らないけど霧歌から合格の言葉を貰えた……。

ちょっと感動した。

ていうか、俺さっきから感動してばかりだな。

涙脆い年頃になってきたという事だろうか。

まだ高校二年生なのに。

難儀（なんぎ）な話である。

強襲？

「……ねぇねぇ、キリえもん」

「何だい、しゅう太君」

「……」

まさか、霧歌が俺のボケに乗って来てくれるなんて……。

また感動だな。

くどいようだけど俺はまた少しだけ感動した。

「ねぇねぇ、キリえもん。キリえもんは便利な道具が沢山入っているポケットを持っているんだよね？」

「うん、持っているよ、しゅう太君。私の十六次元ポケットに不可能は無いよ」

「じゅっ、十六次元ポケット！？　次元の桁が違い過ぎる！　十六次元って多過ぎだろ！」

ていうか、それ以前にそんな桁数を兼ね揃えた次元って存在するのか！？

「いや、流石にここだけは元ネタと被ったら駄目かな、って」

「それでも十六次元は多いよ！　何なんだよその空間！　何か多過

ぎて逆に怖いよ！」

「そうかなぁ……？　私のネーミングセンス的にはかなり良いと思ったんだけど」

いや、お前のネーミングセンスはそもそも良くなんかないから。

それこそ、あの青い猫型ロボットが未来の道具を使っても治せないほどに。

「……まぁ、いいか。俺も正直何でこんな小芝居をやっているのか自問自答したい所なんだけど、こうなったらやれる所までやってみるか」

「そうね、どうせならやってみましょうか」

「よし、それじゃあ続きを……ねぇねぇ、キリえもん」

「何だい、しゅう太君」

「僕、女子のスカートの中を覗く為の道具が欲しいんだけど、何か無いかなぁ？」

「よーし、解ったよ、しゅう太君。ちょっと待ってて、台所から包丁持って来るから」

「キリえもん！？　僕が欲しいのはそんな道具じゃないよ！？　つーか、その道具で一体全体何をするつもりだ！」

原作にそんな場面はねーよ！

流血沙汰なんてあの物語の中には存在しねーよ！

原作のイメージが悪くなるだろ――って、こんな小芝居をやっている時点で既に悪くなっているかもしれないが。

「えっ？　霧歌包丁取りに行くの？　何なら私が代わりに秀の首を落としましょうか？」

「ウリア、お前も悪ノリをしてくるな。これ以上被害を拡大しようとするんじゃない」

「……ねぇ、秀ちゃん？」

すると、霧歌が不意に俺に向かって満面の笑みでこんな事を問いかけてきた。

「知ってる？　ルミノール反応を完全に消し去るにはシンナーとかアルコールを使えば大丈夫なんだって」

「何故今のタイミングでそんな小話を挟んで来るんだ！　ていうかお前、その予備知識を用いて今からここで何をするつもりだ！」

「ううん、何にも……ただちょっと言ってみただけ」

「そうか、解った。それならもう金輪際（こんりんざい）そんな事は言うな」

恐怖で俺の精神が崩壊してしまいそうだから。

つーか、霧歌が言うとまた迫力違うんだよなぁ……。

マジで殺人犯とかが誰かを殺す前に言う台詞みたいだった。

いや、そんな事は口が裂けても言えないが。

言ったら本当に殺されそうで怖い。

「……あっ、オイ、ウリアよ」

「何？　秀」

「お前、暇なら一階からお茶注いで来てくれよ」

「えーっ？　秀、見ても解ると思うけれど私は今とても忙しいのよ？」

「どう見たって漫画を読んでいるようにしか見えないんだが」

「えーっ。待ってよ、今キー坊が地球からの留学生として宇宙に旅立っていく感動の場面なんだから」

「お前も今の話題に乗っかって来るのかよ！」

何その無駄なシンクロ率！

ていうか、キー坊って……これまた俺が好きな話の中で一・二を争うものを読んでいるじゃないか。

台風のフー子の話とか、途中であった一時的な最終回も良いんだよなぁ……あの一度未来に帰っちゃう話とか。

「……いや、ていうか、そんな思い出話に浸っている場合じゃなくて。ウリア、頼むからお茶注いできてくれよ」

「もう、仕方ないわねぇ……」

その言葉の通り、仕方無さそうにベッドから下りたウリアはこれまた仕方無さそうな足取りで部屋を後にするのだった。

◆◆◆

暫くして、ウリアがお茶の注がれたコップを三つ乗せたトレイを持って部屋に戻って来た――のだが。

ウリアはまるで雇い立てのまだ働き始めて一週間足らずのウェイトレスみたいな、そんな感じでトレイをブルブルと震わせていた。

つーか、今にも全てを引っ繰り返してしまいそうなんだが。

これってそういうフラグとかじゃないよな？

「お、オイ、ウリア」

「は、話し掛けないで……こ、零れる。零れちゃう、から」

トレイどころかもう何か体にも力が入っているのか、ウリアは体全体を震わせながらテーブルの傍に屈み込んで――何とかお茶を零さずにトレイのテーブルの上に置いた。

「み、ミッションコンプリート……あーっ、疲れた～！」

「お、お疲れ様、ウリアちゃん」

そして、テーブルの上にトレイを置き終わった瞬間、大の字になって仰向けに倒れてしまったウリアに苦笑で労(ねぎら)いの言葉を贈る霧歌。

「ありがとな、ウリア。これで宿題が捗(はかど)りそうだ」

「どういたしまして……ていうか、次からはもう自分で持って来て。これ戦うよりも精神力使うわ……」

「いや、どんだけお前はバランス感覚が無いんだ」

ウリアのような運動神経のある人間はバランス感覚に長けていると聞いた事がある気がするのだが――違うのだろうか？

まぁ、それ以前にウリアは戦闘能力に長けているだけであって運動神経が長けているという捉え方をしていいのかどうか解らないけれど。

強襲？

「ていうか、もうそろそろ４時なんだねー」

霧歌はお茶が注がれて汗を掻いているコップを手に取ると――部屋の時計を見上げてそう言った。

「そういえば、もうそんな時間なんだな。何だかんだ言って、宿題やってて時間の経過にそこまで気付いていなかった」

「案外、宿題で一日を潰すのも悪くないでしょう？」

「うーん……そうだな。霧歌が毎回傍について俺に宿題を教えてくれるのならそこまで悪くないかな」

「あら、嬉しい事言ってくれるじゃない。秀ちゃんが頼めば私はいつでも秀ちゃんに付き合うから、また今度誘ってよ」

「ああ、了解。考えとくよ」

その後、俺と霧歌は宿題に一段落を付けてお茶を飲みながら暫し談笑をした。

その間、それほどまでにお茶を運ぶ作業は辛かったのか――ウリアは仰向けに寝転んだまま一言も言葉を発しなかった。

つーか、疲れ過ぎだろ、お前。

「さて、と……私はもうそろそろ帰るかな。宿題も一段落付いたし、

今日は秀ちゃんと一緒に居られてたのしかったし、秀ちゃんもちゃんと集中して宿題やってたし。今日はかなり充実した一日だったよ」

「充実した一日って、お前は全然充実していないじゃないか。逆に充実しているのはどちらかと言うと俺の方だろ？」

「確かに、それはそうだけどね。でも、私は自分の幸せよりも他人の幸せを感じる方が嬉しく感じたり、充実を感じたりするんだよね」

「そういえば……昔からお前はそんな感じだったような気もするな。自分の事なんか差し置いて、いつも俺の事を優先して助けてくれていたような気がする」

「秀ちゃんは私にとって、“二つの意味”で放っておけない存在だから」

「あん？　“二つの意味”で？」

「なーんでもないわ」

「それじゃあ」と霧歌は持って来た鞄に教科書類を詰めるとその場に立ち上がった。

「またね、秀ちゃん」

「あっ、玄関まで送るよ」

「いいよ、大丈夫だから。どちらかと言うと、昨日も今日も私が強引に押し掛けて来たようなものだし」

「そうか……？　まぁ、霧歌がそう言うならそれでいいけど」

「うん、私が言うからそれで良いんだよ。ウリアちゃんも、またね」

「うん、またね、霧歌」

霧歌はウリアを見下ろしたまま――未だ床に倒れたままのウリアは逆に霧歌を見上げて互いに二人は笑みと共に手を小さく振り返した。

つーか、ウリア。こういう時くらいはせめて起き上がって挨拶をしろよ。

俺が呆れ顔でそんな事を思った時だった。

不意に俺の机の上であの白い欠片が光を放ったのである。

「これは……！　オイ、ウリア！」

「来たわね、久しぶりに……！」

俺とウリアは互いにそう言葉を交わして部屋の大窓から外の景色を振り返る。

茜色に染まる空――そこのとある一点が歪み始めた。

「何！？　何なの！？　これ！？」

そして、霧歌だけが部屋の真ん中で狼狽（ろうばい）していた。

そうだ。霧歌だけはまだ『魔導獣機』に遭遇した事が無いのだ。

霧歌だけはこれ以上深入りさせない――そう誓ったばかりなのに。

「……くそっ！」

俺は光を放ち続けているその白い欠片を引っ掴むと霧歌を振り向いた。

「霧歌！　お前はここに居てくれ！」

「何なのこれ！？　どうなってるのよ、秀ちゃん！」

「奴等が襲って来たんだ……今から、俺はウリアと一緒に外に出る」

「そんな……だって、秀ちゃんが狙われているんでしょ！？　だったら、秀ちゃんは家の中に居た方が……！」

「家の中に居たら……ここに居るお前にも、危険が及ぶだろ？」

「……でも」

「お願いだ、霧歌。俺はウリアと一緒に外に出る。だから、お前はここに居てくれ。今だけは頼む……俺の言う事を聞いてくれ、霧歌」

「……秀ちゃん」

そう呟いて霧歌は少しだけ俯き加減になって少し考えるような表情を見せると。

それから無言で――頷いた。

頷いて、くれた。

俺の言葉を――了承してくれた。

「……ありがとう、霧歌」

俺は霧歌に向かって笑みを見せるとすぐさまウリアを振り返った。

「行くぞ！　ウリア！」

「うん、秀！」

そして、俺とウリアは部屋から飛び出す。

ただ一人、霧歌をその場所に残して――俺達は家の外へと飛び出した。

◆◆◆

俺とウリアが家の外に出た時には既に夕焼け色に染まる空に漆黒の穴が生み出されていた。

しかし、今回の漆黒の穴は今までのものとは少しだけ違っていた。

いや、形状は今までと同じなのだが――違ったのは穴の“向き”。

今までは地上に対して平行に向いていた漆黒の穴は――今は地面と

は垂直に向いている。

穴の向きの違いには何か理由があるのだろうか？

俺がそんな考えを巡らせている内にその穴から“二体”の『魔導獣機』が連続で飛び出してきた。

強襲？

まるで戦闘機のような轟音を周囲に響かせながら夕焼け空の下を猛スピードで飛行するその『魔導獣機』は――最初のものと同じで鳥の形をしていたが、機体の大きさはそれの二分の一程度しか無かった。

しかも、最初のあの怪鳥の『魔導獣機』とは違ってスピードも視界に捉えられないほど速くは無いようだ。

いや、それでも十分に速いのだが。

鳥――と言うよりも、どちらかと言えば先ほど比喩した戦闘機に近い『魔導獣機』は空を高速で旋回している。

俺達が居る位置を把握したのだろう――あと数秒で、あの二体の『魔導獣機』はこちらに向かって来る。

だが、俺は臆さない。

何故なら、俺にはウリアが居るから。

同じ年頃の女子を完全に頼り切るのもどうかと思うが――しかし、これ以外に手段は存在しない。

この時代で、あの『魔導獣機』という未来の技術で作られた兵器を破壊できるのは、同じく未来からやってきたウリアだけなのだから。

「……秀はまた、この前と同じように少し下がっててね」

「ああ、解った。頑張れよ、ウリア」

「勿論よ」とウリアは不敵な笑みと共にこう言った。

「あんなただの兵器――私が一瞬で破壊して上げるわ」

◆◆◆

「――天よ。我は器なり」

私は――唱え始める。

「神の力を受けるべき、器なり」

私の下で深紅の光を放つ魔方陣から溢れ出す魔力が私の体を押し上げて――半重力状態のような、そんな感覚を私の体に与える。

「天よ――その神の器である我に神の力を授けよ」

上空ではこちらに目掛けて『魔導獣機』が旋回を開始していた。

もう数秒もすれば奴等はこちらに襲い掛かって来るだろう――けれど。

「神の力――紅焔天使の力を」

数秒もあればそれで十分だった。

私がそれを唱え終えた瞬間、私の周囲の地面から湧き出した炎が渦を巻いて天に昇った。

巨大な火柱の中で私は自分の体に魔力が満たされていくのを感じていた。

自分の体に更なる力が付与されていくのを感じていた。

背中から生えた淡い深紅の光を帯びた翼。

私の頭のすぐ上に出現する――こちらも淡い深紅の光を帯びた天使の輪。

天使化――紅焔天使となった私は地面を強く蹴って飛ぶ。

背中から生えたその翼を羽ばたかせて私は火柱を突き破って外の世界へと飛び出した。

すると、すぐにこちらに向かって来る二体の『魔導獣機』の姿を捉える事が出来た。

そして、その内の一体が私に向かって接近してくる。

どうやら突進してくるようだ――それを悟った私は右手に魔力を集中し始める。

集約される光――その光は束となり、実体のある剣の形へと変化した。

炎を纏いしオレンジ色の光の剣。

その剣を私は突進してきた『魔導獣機』目掛けて振り下ろした。

しかし、流石は人工頭脳を搭載しているだけあるのか、『魔導獣機』は私の斬撃を躱して私の後方へと飛び去って行った。

私は素早く後ろを振り返る。

それと同時に、先ほどは別の機体が私に襲い掛かってきた。

巨大な刃のようなその機体の翼を私は剣で受ける。

「……！」

凄まじい金属音が鳴り響き――私は剣から腕に伝わって来た衝撃に顔を顰める。

すると、私は二体の『魔導獣機』が不意に上空へと上昇を開始したのに気付いた。

上空へと私を誘っているのか――私は空へと飛翔しようとしてどうにか踏み止まる。

回転しながら上昇し続ける『魔導獣機』の機体から放たれる数多の針のような光線。

それはやがて重力に従い落下を開始して――光の雨となって地上に降り注ぎ始めた。

「させない……！」

地上ごと下界に居る秀を攻撃しようという魂胆だろうけれど――そうはさせない。

そんな事は私がさせない。

私は光の剣を右斜め下に構える。

そして、私は剣に魔力を集中させた。

光の剣に集中するオレンジ色の光――それはやがて眩い(まばゆ)ほどの光を放ち始める。

それは剣の中に十分な魔力が溜まった事を知らせるものだった。

「――《太陽の斬閃(ソーラーレイ)》」

私は剣を左斜め上に思い切り振り上げる。

剣から解き放たれた全ての魔力は光へと変化し――それはオレンジ色の天を劈く閃光を創造する。

私が放った斬撃から生み出されたその光線は雨のように降り注いでいた針のような光線を全て消し去った。

それから、今の私の攻撃を避け切れなかったのだろう――二体の『魔導獣機』の内、一体が今の熱線によってその機体を半分に削り取られていた。

そして、半分に削り取られたという事は――勿論、『核』も破壊されてしまった訳で。

私の攻撃を受けたその『魔導獣機』は轟音と共に空中で爆発を起こした。

その爆発によって空中に立ち込める爆煙――すると、不意にその煙の壁を突き破ってもう一体の『魔導獣機』が私のすぐ隣を高速で通り過ぎた。

強襲？

その『魔導獣機』が向かう先は――言うまでも無い。

「しまった……！」

私は天使の羽を羽ばたかせて高速で地上へと降下を開始する。

事実上、今回現代に転送された『魔導獣機』よりも私の速度の方が上だ。

けれど――中々追い付く事が出来ない。

段々と地上が迫り来る中で私は更に降下するスピードを上げて――

そして。

「秀！」

その名前を呼びながら、私はその名前の持ち主である彼の手を掴んで――再度、空の方へと上昇を始めた。

私に追い抜かれた『魔導獣機』はそのまま地上に衝突する事は無く――流石は機械と言うべきか、本当に地上擦れ擦れで減速すると、私達を追って再度上空へと飛び上がってきた。

「……ウリ、ア……！」

後ろの方から――そんな秀の途切れ途切れの声が聞こえてくる。

「安心して、秀！　絶対に……絶対にこの手は離さないから！」

すると、私達の後ろを追って来る『魔導獣機』がこちらに向かって先ほどの針のような光線を連射してきた。

「くっ……！」

私はそれを躱しながら、時には剣で弾きながら何とかその攻撃が秀に当たらないように空を逃げ続ける。

それでも、執拗（しつよう）に私達を追って来る『魔導獣機』。

「……！」

私は空中で一旦停止すると、不意に向きを変えて別の方向へと飛んだ。

すると、『魔導獣機』はそれに引っ掛かったらしく――方向を変えられないまま元々の進行方向へと飛び去って行った。

しかし、それでも飛び去っただけで――また数秒後にはこちら目掛けて突進してくるだろう。

「……」

……どうしよう。

空中で旋回を始めた『魔導獣機』を見据えながら私は思う。

秀を護りながらではこちらの分が悪過ぎる。

一度、秀を地上に下ろすか――いや、そんな事をしていたらまたあの『魔導獣機』に後ろを取られてしまう。

しかし、このままでは事態は劣勢になっていくばかりだ。

「……どうしたら……！」

「……オイ、ウリア」

私のそんな悲痛な声に応えるように――不意に秀がその口を開いた。

「何よ、秀」

「一つ……俺に提案があるんだけど」

「提案？　提案って何の」

「この場の打開策だよ。良いか？　今から――」

「……」

その秀が語った打開策の内容に私は思わず目を見開いた。

「確かに、そうすればあの『魔導獣機』を倒せるかも知れないけれど……でも、秀は大丈夫なの？」

「この場合、大丈夫なのか問われるべきなのはお前だろ。今俺が語った打開策……成功させる自信はあるか？」

「……うん、勿論。当たり前じゃない」

「だろうな……そう答えてくれなかったら、俺は死んでしまう所だ」

私は前方を見据える。

既に旋回して向きを変えた『魔導獣機』はこちらに向かって来ていた。

「……ねぇ、秀」

だから、私は最後の確認を秀に取る。

「本当に、良いのね？」

「ああ、俺はお前を信じるよ、ウリア」

「……解った」

迫り来る巨大な鋼の機体。

私は握っている秀の手を強く握り締めて――そして。

「……ゴメン、秀！」

私は秀を――“空高く放り投げた”。

秀の体を空に放り投げるのは天使化している私にとっては造作も無い事だった。

それから、私は秀を投げる際に使った天に向けたままの左手に向かって――自身の光の剣を握っている右手を上げる。

私の両手は頭上でそのまま合わさって――私は両手で光の剣の柄を握り締める。

集約される魔力――剣から溢れ出す炎と光。

高速でこちらに飛んで来る『魔導獣機』目掛けて私は剣を振り下ろした。

「――《太陽の一閃（ソーラーブレード）》！」

次の瞬間、私の５０メートルほど前方にあった『魔導獣機』の機体が真っ二つに切断された。

正確に言うならば、その機体は私が振り下ろした剣――そこから魔力によって延長された光の刀身によって半分にその本体を断たれたのである。

真っ二つにされる事で『核』を破壊された『魔導獣機』は慣性の法則によって私の左右を猛スピードで過ぎ去り――私の後方で大爆発を起こした。

「……ふう」

それから、私は一息つくと右手に持っていた光の剣を消して頭上を仰ぐ。

そして――落ちて来た秀の肘の裏と背中を両手で受け止めた。

「……ちゃんとキャッチして上げたわよ、秀。感謝しなさいよね」

「ああ、礼を言うよ、ウリア。シチュエーション的には立場が男女逆なような気もするけどな」

苦笑と共に冗談染みた事を平気で言う秀。

本当に――こんな時に冗談染みた事を言えるなんて、よっぽど緊張感が無いのか。

それとも……それだけ、私の事を信頼してくれているのか。

どうなのだろう。

後者だったら……嬉しいのに。

◆◆◆

不意な二体の『魔導獣機』による強襲もウリアの活躍によって無事逃れる事に成功した俺はウリアからいわゆる“お姫様抱っこ”をされたまま地上に下ろされた。

ていうか、だから何度も言うけど男女が逆だって。

女子にとっては誰か好きな男子からされたいみたいな、そんな羨望（せんぼう）があるかも知れないが。

男子の場合はただ単に恥ずかしいだけだからね？

それも、女子にお姫様抱っこされるって……二重に恥ずかしいよ。

冗談抜きで。

強襲？

しかも、よくよく見れば俺の家の前では何か霧歌が仁王立ちしていた。

どうしてそんな所に立っているのか知らないけれど、とりあえずウリアにお嬢様抱っこされている所を見られてしまった……。

拙い。軽く死にたい気分になってきた。

「……秀ちゃん」

そして、俺がウリアの手を借りて地上に本当に意味で降り立っていると霧歌が腕組みと共に話しかけてきた。

「……ど、どうした、霧歌」

「……今のが、この前言ってた『魔導獣機』って言う未来から秀ちゃんを狙う兵器？」

「あ、ああ、そうだ。あれが『魔導獣機』って兵器で、その名の通り――ていうか、この前も説明したけど、一つ一つが何かの獣のような形をモチーフにしていて――」

「バカ――――――――――ッ！」

何故か俺はその霧歌の叫び声と共に右の頬を思い切り叩かれた。

その余りの衝撃に俺はアスファルトの上に倒れ込む。

「な、何故……何故俺は今叩かれたんだ……！」

「今私が秀ちゃんを叩いた理由？　そんな事も解らないの！？　秀ちゃんのバカ！　バーカ！」

「いや、解らないって言うか……何か俺さり気無く馬鹿にされていないか――」

――そこで俺は思わず口を噤んだ。

何故なら、いつの間にか俺の目の前に立っている霧歌が――泣いていたから。

「……いや、本当は私だってバカだったの。秀ちゃんから『魔導獣機』って兵器で自分は狙われているって聞いた時――私、何となく戦闘機とか戦車とか現代に既存している兵器を思い浮かべちゃったの。違うに決まっているのにね。２０５６年の未来から転送されてくる兵器だもん……戦闘よりも戦車よりも更に凶悪で強力なものに決まってるのに」

「でも……！」と感極まった声で霧歌は続ける。

「でも、やっぱり……私よりも、秀ちゃんの方がバカだよ。何で……何でもっとあの兵器について教えてくれなかったの？　あんな戦闘機よりも戦車よりも怖いものから秀ちゃんが命を狙われているなんて……私、思いもしなかった。だって、秀ちゃんは私に“いつも通り”に話してくれたから――ううん、違う。あえて“いつも通り”に話す事で、私に余計な心配を掛けさせたくないって、そう思ってくれたんだよね？」

その霧歌の言葉を聞きながら俺はその場に立ち上がる。
やはり――霧歌には隠し事は通用しないようだった。

「……ああ、ゴメン。そう思って――お前にこれ以上心配を掛けさせたくなくて、俺はこれ以上お前には何も話さないし、お前を深入りさせないって、そう決めたんだ」

「という事は……やっぱり、最近また何かがあったんだね？　話をする為のネタが……増えたん、だね？」

「……何か、敵側の戦士の中で一番強い階級を持った男に――この間、会った。会って、ほんの少しだけ戦闘にもなった――まぁ、その時にはウリアが駆け付けてくれて、事無きを得たけれど」

「……心配を掛けさせたくないって気持ちは解るけれど。でも、やっぱり……私にもちゃんと、話して欲しかったなぁ、秀ちゃん」

「でも……話したって同じ事だろ？　俺がそんなかなり強い奴と出会って戦闘になった、って――お前に話した所で何かが変わる訳でも無いし。話した所で、余り意味は無いと思ったから――」

「言わないでよ」

俺の言葉を遮って――霧歌はその目から涙をボロボロと零しながらこう言った。

「話した所で……意味が無い、なんて。そんな事は……言わないでよ……！」

そして、俺はそこで漸く気付く。

自分が口走ってしまった言葉の罪の重さに――漸く、遅くて、遅過ぎるほどに今更ながら気付く。

俺は霧歌に――何て事を言ってしまったんだろう。

「確かに、秀ちゃんの言う通りだよ……私がそんな未来の人から秀ちゃんの命を狙いに来た話を聞いたって、何も出来ない。別に、私はウリアちゃんみたいに秀ちゃんを護れる力を持っている訳じゃないから、そんな話を聞いた所で確かに――“何も変わらない”」

「でもね」と霧歌は未だ涙を流したまま――それでも、俺に優しく微笑み掛けてくれた。

「私にだって……何も出来ない訳じゃないんだよ？　秀ちゃんが、未来の人達から狙われているなんて私達以外に誰も知らないから、秀ちゃんがそんな話を話す事が出来るのはウリアちゃんを除けば私しか居ないし。これは、秀ちゃんが命を狙われている事とは直接的には関係無いかも知れないけれど、秀ちゃんが日々命を狙われて、疲れている時に私が宿題とか、勉強を教えて気を逸らして上げる事も出来る」

「……こんな時に言うのも何だけど、俺は多分宿題や勉強で疲れは取れないぞ？」

その俺の言葉に――霧歌は呆れたように苦笑を浮かべて。

涙に濡れた苦笑を浮かべて言う。

「そうだね……秀ちゃんの事だから、多分宿題とか勉強をしたら逆に疲れちゃうよね？　だったら、今日の宿題の時みたいに、私は秀ちゃんの何気なくて、他愛なくて、どうでもいい話に付き合って上げるよ」

「どうでもいいとか……言ってんじゃ、ねーよ」

「アハハ、そうだね。ゴメンゴメン……ついちょっと、口が滑っちゃって」

「“何気ない”や“他愛ない”は許せるけれど――“どうでもいい”というのは、流石に聞き捨てならないよ、霧歌」

「だから、ゴメンって謝ったでしょ？　秀ちゃん」

「いや、謝られただけでは俺の心の傷は癒されないな。せめて、霧歌が俺の前でメイドコスをしてくれないと俺の心の傷は癒されない」

「ていうか、まだメイドコスを執拗に私に要求してくるんだね、秀ちゃんは。そんなに頼み込まれても、私は多分一生その要求をうんとは頷かないと思うよ？」

「それでも、俺は引き下がらないさ。お前がうんと頷くまでいつまでも頼み込んでやるよ」

「果てしなく無駄な執着心だね……そういう心を問題を解く時に使えるようになれば万々歳なんだけどね」

「……なぁ、霧歌」

「何？　頼まれてもメイドコスはしないよ？　例え土下座をされたとしても」

「……ありがとな」

「……えっ？」

「お前と話していたら――お前といつも通りの談笑を交わしていたら、何かさっきまで感じていた恐怖感とかが無くなっちまったよ。流石はエリートだな。いや、本当に、お前に話しても何の意味も無いなんて……言って悪かった。謝るよ。本当にゴメンな、霧歌」

「……も、もう、秀ちゃんったら」

霧歌は笑みと共に目の端に溜まった涙を指先で拭った。

「そういう所……本当に、秀ちゃんは昔から狡(ずる)いよね」

「狡い？　何が狡いんだ？」

「そして、そういう感じで自覚していない所もまた狡いよね……ねぇ、ウリアちゃん？」

「ええっ！？　な、何でそこで、わ、わたっ、私に話を振って来るのよ！」

急に霧歌から話を振られたウリアは顔を真っ赤にしてあたふたと慌てふためいていた。

ていうか、こいつ最近やけに顔が赤くなるな。

風邪か――熱でもあるのだろうか。

強襲？

「えっ、ウリアちゃんはそんな事を思った事が無いの？　何だ、私てっきりそう思った事があるのかと思ってた」

「べ、別に……わ、私は、その……」

「何だ。俺には何の事かさっぱりだけど、お前も何か霧歌と同じ事を思っているのか？」

「……秀のそういう所を言っているのよっ！」

「そういう所――って痛てえ！」

何か今度はウリアから太ももを思い切り蹴られた。

地味に痛みが後に残りそうな威力だった。

「オイ、ウリアお前！　何でまた俺の事を急に蹴ってきやがるんだ！」

「知らないっ！　自分の胸に聞いてみれば！？」

「自分の胸に聞いても解らないから言ってんだろうが！　よし、解った。お前の言葉の真意を知る為にお前の胸にちょっと聞くから、胸を貸せ、耳を当ててみる」

「なっ、何をさり気無くセクハラ行為をしようとしているのよ！」

ウリアはそのライダースーツのような戦闘服によって強調された胸を隠す為に更に押さえ付けて――更に自身の胸を強調させながら俺から後ずさりを見せた。

「いや、俺は単にウリアの言葉の真意を確かめようと探求心を発動させただけであって、別に疾(やま)しい気持ちはこれっぽっちも無いぞ？」

「いや、疾しい気持ちは絶対あったでしょ！　て、ていうか、探求心を発動させても私の心の中は絶対に明かさないわよ！　秀だけには絶対に明かさないわ！」

「何だよその無駄な決心は……」

何かそれ、差別されているようで逆に傷付くぞ。

「仕方ない、ここはウリアの代わりに霧歌の胸に聞くとするか……。オイ、霧歌、ちょっと胸を貸してくれ」

「家から包丁とシンナーとアルコールを取って来てからで良いなら構わないよ？」

「すまない、俺が悪かった」

霧歌の場合は差別どころの話では無かった。

遠回しだが明らかなる殺人予告だった。

殺人予告をされるのなら、何か訳の解らない差別をするウリアの方がマシというものである。

「ていうか……その、毎回秀ちゃん達は敵から襲われる度にあんな堂々と空を飛んだりして敵と戦っているの？」

「ああ、まぁな。凄いだろ？」

「ちょっと秀。何でアナタが得意気なのよ。空を飛べているのは私の力のお陰でしょ」

「それじゃあさ」と霧歌は人差し指を立てて俺達にこう言ったのだった。

「目撃とか……写真とか、動画とか撮られたりしてないのかな……？」

「……写真に動画を撮られる？」

「いや、だからほら……そういうのって大概がテレビ局とかに持って行かれるじゃない？　ＵＦＯを偶然撮影する事に成功した写真とか動画って。だから、もし秀ちゃん達の闘う姿が写真とか動画に撮られていたら……」

「そしたら……えっ、俺まさか齢（よわい）１７歳でテレビに出られるという事なのか！？」

「秀ちゃんが気になる所はそこなの！？」

「オイオイ、ウリア。どうするよ、俺達もうそろそろテレビデビューだぜ？　取材とか来たらどうしようかな、デパートで新しい服とか買って来なくちゃ」

「そんな心配しなくても秀は新しい洋服を買ったとしてもそもそも顔が何かアレだから意味が無いと思う」

「顔が何かアレって一体全体どういう意味だよオイ！」

「顔が何かアレだから、詳しくは言わないけれど」

「そこをハッキリと言えよ！　何だ、俺の顔がどうアレなんだ！」

「……秀の顔は甜菜に似ている」

「もうそのネタはいいんだよ！」

いい加減くどいよ！

いや、そこまで連続させて使った訳じゃないのだが。

「ていうか、今の霧歌の話だけど……多分、それは無いと思うわよ？　確かに、『魔導獣機』が爆発した音とか、私が空に撃ち上げた魔術とかは見えたかも知れないけれど――私や秀や『魔導獣機』が飛んでいる姿なんて写真や動画じゃ速過ぎて撮る事なんて不可能よ。まぁ、それこそＵＦＯとかに見間違えられるんじゃないかしら」

「そ、そうかしら……？　まぁ、それならそれで良いんだけど。何か腑に落ちないわね」

「大丈夫よ、そこまで心配しなくても。それよりも秀、私お腹空いちゃった。夕飯にカップラーメンを作りましょう」

「作るのは俺だけどな」

「それじゃあな、霧歌」と俺は霧歌を振り返る。

「今日は巻き込んでゴメンな。何なら、家まで送るけど……どうする？」

「……あの、えっと。秀ちゃん？」

「何だ？」

「その事なんだけど……あの、出来ればお願いが」

「何だ、やっぱり家まで送って欲しいとか？」

「う、ううん。そういう事じゃなくて……その」

そう言って——霧歌はどこか言い難そうに俺に向かってこう言うのだった。

「今日……秀ちゃんの家に泊めてくれない？」

「……は？」

「いや、ほら、その……今日も、なの」

「……ああ」

なるほど、そういう事か。

「“また”、か……まぁ、俺の家も同じようなものだからな。同情

するよ、霧歌」

「ありがとう、秀ちゃん。という事は、私は今日泊まっても良いんだね？」

「ああ、勿論だ。俺の家族が俺以外一人も家から居なくなってからは流石に拙くて出来なかったけど、今はウリアも居るし、大丈夫だろ」

「うん、ありがとう。秀ちゃん」

「その代わり、夕飯はカップラーメンしか出ないからな」

「ああうん、泊めて貰うんだし、その点については何の文句も無いよ。ただ、スタンダードがあると助かるかな、私あの味好きなんだぁ」

「……ていうか、お前もスタンダードって名称を使っているんだな」

そんな名称を使っているのは俺だけかと思ってたぜ。

「ああ、あるよ、スタンダードも。この家のカップラーメンの比率はカレーが6割、スタンダードが2割、シーフードが1割だ」

「好物と好物では無い種類の数に歴然たる差があるね……何か逆にシーフードが可哀想に見えて来たよ」

そんな会話を交わしながら俺と霧歌は家の中へと入る。

数年ぶりに霧歌が俺の家に泊まる――俺はその事実に少なからず興

奮せざるを――間違えた、緊張せざるを得ないのであった。

夜の秘密の御話

急な話ではあるが、霧歌が俺の家に泊まる事になり、俺は三人分の手料理を作っていた。

手料理とは言ってもカップラーメンには変わりないのだが。

しかし、インスタント食品も言い方を変えれば手料理と同じなのである。

何故なら、お湯を注いだり電子レンジにそれらを入れたりする際には必ず人の手を使わなければならないからだ。

だから、俺はインスタント食品が手料理であると胸を張って言う事が出来る。

……まぁ、それならば、手を使ってパンに塗るジャムとかも手料理になってしまうが。

ていうか、逆に手を全く使わないで完成する料理などあるのだろうか？

そんなどうでもいい疑問を考えている内に俺の目の前で三つのカップラーメンが三分という時を経て完成した。

蓋の隙間から溢れる湯気とその香り。

俺はトレイの上にカレー、スタンダード、シーフードの三種類のカップラーメンを乗せてリビングへと向かう。

そこで待っていた霧歌とウリアが座っているテーブルの上に俺はそのトレイを置いた。

「ハイ、お待たせ」

「サンキュー、秀」

「ありがと、秀ちゃん……って、あれ？　何で蓋を開けてくれていないの？」

「……お前は一体全体何を言っているんだ。お前、ひょっとしてカップラーメンというものを余り食べた事が無いな？」

「う、うん……大概は手料理を作っているから。どうしても食べる機会が減っちゃって」

「良いか？　カップラーメンに限らず、焼きそばもうどんもそれらのインスタント食品というのはそれぞれ蓋を開ける瞬間が大切なんだよ」

「そ、そうなの？」

「そうだよ、霧歌！　カップラーメンの蓋を開けた瞬間に溢れ出す暖かな湯気と香ばしい香り……！　カップラーメンの蓋を開けるのはね？　夢が沢山詰まっている宝箱を開けるようなものなのよ！」

「あ、ああ、そうなんだ……まさかウリアちゃんにまでそこまでカップラーメンについて力説されるのは思わなかったよ」

「フッ、当然よ」と腕組みと共に得意気な笑みを見せるウリア。

「私、こう見えてもカップラーメンマスターだから」

「にわかが何を言ってやがる、この金髪未来系魔法少女が。まだこの時代に来て一週間足らずのお前がカップラーメンを語ってんじゃねーよ。百万年早いわ」

「秀こそ何を言っているのよ。この“しーふーどー”の良さが生まれてこの方未だに解っていないくせに！」

「それじゃあ、お前だってそうじゃんか！　この前、お前が欲しがるからカレーを一口やったら何かドロドロしていて喉（のど）に詰まる――とか何とかかんとか言っていたくせに！」

「何よ！　このカレーオタク！」

「カレーオタク!?　お前、そんな言葉どこで覚えやがった似非（えせ）未来系魔法少女！」

「誰が似非よ！　誰が偽物よ！　私は列記とした本物よ！」

「現代の時代の流れに完全に呑まれてしまっているお前はもう似非未来系魔法少女で十分だバーカ！」

「くっ、こ、この……！」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて」

まさに一触触発の空気だったのだが――それは霧歌の仲介によって

緩和される事となった。

◆　◆　◆

夕食後――午後１０時を回った辺りでウリアが俺にこんな事を聞いてきた。

「ねぇ、秀。私と霧歌で今からお風呂入って来るんだけど、良いかな？」

「ああ、別に良いけど？　もう暑くなって来たから今日からはシャワーな――って、何でいちいち俺にそんな事を聞いて来るんだよ」

「だって、秀はまた前の私の時のように偶然を装って私達の入浴を覗きに来るかも知れないでしょ？」

「言い掛かりにも程があるな。俺は偶然を装って態とお前達の風呂を覗くほど落ちぶれてはいない。ていうか、この前のお前の一件は事故だって何度も言ってるだろうが」

「ふーん、そっか。まさか、お風呂場に隠しカメラを設置していないわよね？」

「だから言い掛かりにも程があるって！　大体、そんなものを取り付けるくらいなら素直に覗くわ！　いや、覗かないけどさ！」

「……と、言う訳で」

「一応安心は出来そうよ」とウリアは後ろで苦笑を浮かべている霧歌を振り向いた。

「ああ、うん。ありがとう、ウリアちゃん……ていうか、二人ともまさか毎日お風呂に入る前にはこんな会話を交わしているの？」

「当たり前よ、霧歌。念には念を入れて更にその上から念で加工して更に念を新たに重ねないと秀は信用できないからね」

「俺はどんだけ信用されていないんだよ」

まさか、ここまでウリアに信用されていなかったとは……まぁ、居候し始めて一週間足らずだからそこまでの絆を期待するのもおかしいのかもしれないけれど。

「解ったわよ、秀。それじゃあ、私達はお風呂に入って来るからね？　もう一度言うけれど、私達は今からお風呂場に行って来るからね？」

「解った、解った、解ったから。そう何度も言わなくていい。耳に烏賊（いか）が出来たらどうするんだ」

「秀ちゃん、それを言うなら耳に胼胝（たこ）が出来たら、だよ？　それと、耳に胼胝が出来るの『胼胝』は海に居る軟体動物の方の『蛸（たこ）』じゃないからね？」

「……」

苦笑と共に霧歌から訂正されてしまった。

やはり、いざと言う時に無知というものは何だか恥ずかしいと言うか、悲しいものである。

「それじゃあ、行って来るね、秀」

「秀ちゃん、お風呂お借りしますね」

「おう。存分に堪能（たんのう）して来い」

風呂場に向かって行く二人の姿を見送った俺は何気なくテレビを点けてみる。

ニュース番組では相変わらず昨日のウリアと『魔導獣機』との戦闘――もとい、“怪現象”についての報道が。

別のチャンネルでは音楽番組とか、バラエティ番組とか――時折チャンネルを変えながら俺はテーブルに頬杖を着いてそれらの番組を網羅していく。

夜の秘密の御話？

母さんとか、姉さんとか……最近はウリアがこの家にやって来て改めて気付いた事なのだが。

女性というものは風呂を入り終わるのに掛かる時間が男性と比べて比較的長いのである。

いや、それは偶々俺の家に集まる女性がそういうものであるだけなのかも知れないが。

しかし、その仮説が成り立つ場合――ただでさえ、ウリアも中々一度風呂に入ったら上がって来ないのに、霧歌まで一緒に入っているようでは単純計算で二人が入り終わる時間はいつもの二倍になる。

だから、こうやってテレビでも眺めていないと俺は暇で暇で暇過ぎて仕方ないのである。

「……」

……しかし。

あれだけ先ほどウリアに風呂は覗かないと豪語しておいて何だが――今、この家の風呂場に俺と同世代の女子が二人も入浴していて、それにも関わらずここでボーっとテレビを見ている俺は一体全体どうなのだろうか。

何か俺、今世界から自分の存在意義について問われているような気がする。

耳を澄ませてみれば、周囲から聞こえてきそうなくらいだ。

真之乃秀よ、お前はそこで呆然とテレビを鑑賞していていいのか――的な、そんなちょっと渋い声で。

アニメとか映画とか、そういったフィクションに出て来る神様の声は大概がちょっと渋くてカッコイイ声だからなぁ。

きっと、この世界をどこかで見守っている傍観者――もとい、神の声もそんな感じなのだろう。

「……」

いや、行かないけどね？

俺は風呂場には行かないけどね？

こういうシチュエーションで逆に風呂場に行かない事はヘタレだとか意気地が無いとか思われるかもしれないけれど。

俺は常識に則って絶対に行かないからね？

普段の俺を見て常識がどうとか語れる資格は無いかも知れないが、俺は断じて風呂場には行かない。

だって――ウリアなら未だしも、今回は霧歌が居るのだ。

そんな時に風呂場を覗こうものなら――ウリアの如く蹴りだけじゃ済まないだろう。

本当に、冗談抜きで、殺されてしまいそうな……そんな気さえしてきた。

……。

「……バラエティ番組でも観るか」

そう言って俺はリモコンを手に取るとテレビのチャンネルを変え始めるのだった。

◆◆◆

４０分ほど経って、漸くウリアと霧歌は風呂から上がってきた。

その後には無論、俺が風呂に入ったのだが。

ウリアと霧歌が使ったであろうシャンプーや石鹸の香りがそこにはまだ充満していて――いや、何でも無い。

そして、ウリアと霧歌が浸かったであろう浴槽の水に俺は少なからず興奮を――いや、何でも無い。

とりあえず、俺は風呂に入った。

風呂場から出てリビングの時計で時間を確認してみると――俺はどうやら１０分程度で入浴を完遂（かんすい）したようだ。

やはり、男と女では入浴に掛かる時間に違いがあるのだろうか。

何がそんなに時間が掛かるのだろう……髪、とか？

俺がそんな事を思っているとリビングでウリアと共にテレビを鑑賞していた霧歌がこう言ってきた。

「あの、秀ちゃん。ちょっとお願いしたい事があるんだけど」

「おう、何だ？」

「着替えをお借りしたいなぁ、って。急な話だったし、私が着替えを持って来なかったのが悪いんだけど……ほら、その、下着もそのまま、だから」

「ああ、別に構わないぜ？　今から姉さんの部屋に行って適当に漁って来いよ」

「うん、ありがとう。ゴメンね？　秀ちゃん」

「お安い御用だよ」

「それじゃあ、ウリアちゃん」と霧歌はテーブルの椅子から立ち上がる。

「今から私と一緒に着替えに行こうか？」

「えっ、私はこのままで良いわよ」

「でも、ウリアちゃんこの時代に来てからずっとその格好のままな

んでしょ？」

「ああ、これは、その……大丈夫なの。この戦闘服は未来の技術でどんな環境でも適応するように作られたものだから。こんな夏の暑さでも、南極に居てもこのスーツがあれば私はどんな環境にも適応できるの」

ていうか、そうだったのかよ。

しかし、まぁそうだろうな。

だって、そんな機能が付いてないと絶対暑いもん、今の時期。

「だから、別に汗とか私は余り掻かないから大丈夫だよ、霧歌」

そんな事を言うウリアだったが、それでも尚、霧歌は引き下がらないようで。

「駄目だよ、ウリアちゃん。例え余り汗を掻いていなくても、同じ服を1週間くらい着続けるのは女子にとって余りどうかと思うよ？」

「で、でも、この時代の洋服ってその、余り着方が解らなくて」

「それなら、私が教えて上げるから」

「で、でも……その、これと違う洋服を着るのは……」

そう言って——何故かウリアは俺の方を一瞥（いちべつ）して。

「……は、恥ずかしいよ」

「同じ洋服をずっと着ている方が恥ずかしいわよ。ほら、ウリアちゃん立って。このまま同じ服を着ていたら幻滅（げんめつ）されちゃうかもよ？」

「そ、それはヤだ！」

その霧歌の言い回しに勢い良く椅子から立ち上がるウリア。

ていうか、幻滅されるって……一体誰からなのだろうか？

テレビに出ていた憧れのアイドルか誰かか？

ちなみに、俺だったら多分幻滅なんかしないだろうけど。

だって、その格好の方が何かエロティックだし。

……。

……風呂上りの牛乳でも注いで来るか。

「それじゃあ、秀ちゃん。今から私達ちょっと着替えて来るから」

「おう、了解。牛乳注いで待ってるわ」

「うん、ありがと、秀ちゃん」

俺にそう言って笑みを見せた霧歌はウリアと共に二階の姉さんの部屋へと向かうのだった。

◆◆◆

それからまた２０分ほど経って霧歌とウリアはそれぞれ寝間着に着替えて戻って来た。

霧歌は淡いピンク色のパジャマをその身に纏っていた。

「……ど、どうかな？　秀ちゃん」

「……ああ、良い。可愛い。思わず襲い掛かりたくなりそうだ」

「ありがとう……でも、襲い掛かりはしないでね？」

「……それで？」

俺は霧歌の隣で恥ずかしそうに俯いているウリアを振り向く。

「お前はどうして……そんな服装をしているんだ？」

何故かは解らないが、ウリアはおそらく姉が高校時代に着ていたであろうセーラー服を身に纏っていた。

つーか、本当に何でだよ。

もっと他にマシな洋服があっただろうに。

……いや、俺にとっては得な光景なのだが。

「霧歌も一緒に居てこの結果はどういう事なんだよ」

「あ、あの、それが……その。ウリアちゃん、秀ちゃんのお姉さんの服がどれもサイズ合わなくて」

「ああ……なるほどな、そういう事か。まぁ、流石の姉さんの洋服でも高校生時代のものなら合うわな。特に胸とか」

「言うな！　それを言わないでよ、秀！」

「何度も言うが貧乳はステータスとも言うぞ？」

「だから貧乳って言うな！　それからそんな慰めの言葉も要らない！」

……しかし。

「霧歌よ。お前はさり気無く姉さんのパジャマを着こなしているん

だな。俺の記憶が正しいなら、それは確か姉さんが大学に受かって家を出る直前まで使っていたものなんだけど」

「えっ、そうだったの？　でもまぁ、流石の私でも秀ちゃんのお姉さんのバストには適わないよ」

そう言いつつ、見る限り余り適っていない訳でも無さそうだが……。

ていうか、ウリア。お前霧歌の胸を睨み付けてんじゃねーよ。

それは生まれ付きの“差”なのだから、気にしたら終わりだぞ。

「しかし、パジャマ姿の霧歌にセーラー服姿のウリアか……くそっ、カメラを壊されなければ記念に一枚撮っていたものを」

「秀ちゃん、さっきから思考がだだ漏れだよ？」

「おっと、危ない……口を滑られてしまう所だった、ギリギリセーフだな」

「いや、もう秀ちゃんは口を滑らせてしまっているから、ギリギリアウトと言うか、むしろ完全にアウトだよ」

「そうだよ、秀。秀はもう既にアウトローだよ」

「誰がアウトローだ！」

誰が罪を犯した無法者だ！　誰が！

「ていうか、ウリア。お前それ意味を知っていて言ったのか、それ

ともただ単に言葉のニュアンスが似ていたから使ったのか？」

「私はその言葉の意味を理解していてあえてその言葉を使ったの」

「そうか、それはつまり態とという事なんだな！？」

「良いじゃない、アウトロー。アウトローって案外カッコイイ呼び名じゃない」

「確かにアウトローという単語自体はカッコイイかも知れないが、そのレッテルを貼られてしまったら人として終わってしまうんだよ」

「えっ？　秀ってもう既に人として終わっているわよね？」

「怒るぞ、ウリア。流石の俺でも怒るぞ」

俺は別に人として終わってなんかいない。

……そう思いたい。

◆◆◆

午後１１時頃、霧歌の提案で俺とウリアは寝る事になった。

午後１１時に寝るというのは流石に早過ぎると俺は思った。

女子とは言え、幼馴染の友達が家に泊まりに来ているのだから――

何と言うか、雑談と言うか談笑と言うか、そんな事で深夜まで時間

を潰したかったのである。

しかし、霧歌の言う所に寄れば、休みの日であっても毎日この時間帯には寝ているらしい。

……つーか、早過ぎだろ。毎日１１時には寝ているなんて。

「そうでもないよ？」

歯ブラシ（この家にある予備をウリア、及び霧歌には使ってもらっている。いつ母さんや姉さんが帰って来ても良いようにこの家には数本の歯ブラシが常備されているのだ）で歯を磨きながら霧歌はそんな事を言った。

「毎日１１時に寝れば、朝課外までかなりの時間寝る事が出来るし……まぁ、今は夏休みだからそんな事は関係無いけれど、何と言うか習慣付いちゃって。今の生活習慣を変えたくないっていうのが本音だけど」

「ふーん、そうなのか」

「そうそう。ていうか、早く寝ないとお肌とか荒れちゃうし」

「えっ！？　そ、そうなの！？」

ウリアが不意に素っ頓狂な声を上げた。

つーか、ウリア。口から歯磨き粉が飛んでいるんだが。

汚いよ。

「そうよ、ウリアちゃん。知らなかったの？」

「そ、そうだったんだ……全然知らなかった」

まぁ、それを知らないのはウリアにとって当然なのだろう。

何せ、２０５６年はいわゆる未来的な戦国時代である――そんな時代にお肌の事なんかいちいち気にしていられる訳が無い。

その証拠に、ウリアは毎晩俺の部屋で夜遅くまで漫画を読み耽（ふけ）っていた。

時々その漫画に対して笑う等のリアクションを見せるから――いや、俺も夜更かしはするのだが、眠りたい時に眠る事が出来ないのである。

つーか、正直に言うとうるさい。

厄介な話――と同時に難儀な話である。

夜の秘密の御話？

「そっかぁ、今度から気を付けないと……。秀の部屋で寝ると、毎回眠れないんだよね」

「……秀ちゃん、ウリアちゃんと一緒に何してるの？」

「何もしてねーよ！　こいつがただ漫画読んで勝手に燥(はしゃ)いでいるだけだから！　だから霧歌も俺に対して何か疑惑の視線を向けるんじゃない！」

つーか、ウリアも勘違いされるような言い方をするんじゃねえ！

霧歌から睨まれたと言うか蔑まれた視線を向けられただろうが！

「……あっ、霧歌。ちょっと右にずれてくれ」

「あっ、うん。解った」

霧歌は右側に一旦退いて、俺に洗面台を解放してくれた。

俺はコップに注いだ水で口を濯(ゆす)ぐと、歯ブラシを丁寧に洗ってコップの中にそれを入れた。

「それじゃあ、俺、霧歌の分の布団を運んでおくから」

「ああ、うん。ありがと、秀ちゃん」

「どういたしまして。三人寝れるかどうかまだ解らないけどな」

「うん――うん？　ちょっと待って、秀ちゃん」

洗面所から出ようとした俺は霧歌から不意に呼び止められた。

「何だよ、霧歌」

「それはこっちの台詞よ。どうして、秀ちゃんは今三人――つまり、私達が一緒に寝る事が出来るのか否かを気にしている訳？」

「えっ、霧歌もウリアと一緒に今日は俺の部屋で寝るんだろ？」

「何で勝手にいつの間にかそう決定されているのよ。何をさも当然と言った表情で言っているのよ。私は寝ないわよ、秀ちゃんの部屋では」

「な、何だって……！」

「いや、そんなに驚愕されても……当たり前じゃない。年頃の男女が一緒の部屋で寝るなんて不健全です」

「そうよ、秀。秀は不健全な存在なんだからそこら辺の事に注意して貰わないと」

「誰が不健全な存在だ！」

俺自体は不健全じゃないから！

「何だ、そうなのか……てっきり俺は今日霧歌がこの家に泊めてくれたお礼に俺と添い寝してくれると期待していたのに」

「添い寝なんかしません」

「それじゃあ、メイドコス――」

「メイドのコスプレもしません」

「仕方ない……解ったよ。今回は見逃してやるが、次は覚悟しておけよ？」

「……次に秀ちゃんの家に泊まった時に私は一体全体何をされちゃうのかな……？」

「……それでさぁ」

「秀ちゃん、話を逸らさないで」

だが断る。

「確か、物置に客人用の布団があったから、先に行ってそれを――えっと、姉さんの部屋で良いよな？　そこに運んでおくから」

「華麗に私の言葉をスルーしたね、秀ちゃん……まぁいいわ。今回はこれ以上、追究しないでおく……藪を突いて蛇じゃなくて熊が出て来たら嫌だし」

「熊じゃなくてライオンかもしれないしな」

「秀ちゃん、ちょっと黙って」

……幼馴染から黙れと言われてしまった。

何かちょっと凹む。

「……ま、まぁ、とりあえず、布団は姉さんの部屋に運んでおくから」

「うん、解った。お願いね」

霧歌のそんな言葉を背に受けながら俺は洗面所を後にするのだった。

◆◆◆

俺が布団を物置から姉さんの部屋に運び終わった頃に丁度霧歌とウリアが二階にやってきた。

「それじゃあ、また明日ね、霧歌。良い夢を」

「ちょっと待ちなさい」

霧歌にセーラー服の首根っこを掴まれるウリア。

「な、何？」

「ウリアちゃんは一体全体どこに向かおうとしているのかな？」

「しゅ、秀の部屋だけど――って霧歌？　何か笑顔が怖いんだけど？」

「何でウリアちゃんは秀ちゃんの部屋に向かっているのかな？」

「だ、だって……私はいつも秀の部屋で寝ているから」

「私が今日この家の中に居る以上、そんな事は許しません」

「えーっ？　だ、だって、秀の部屋に行かないと漫画が読めない……昨日途中まで読んで物凄く続きが気になるんだけど……」

「ウリアちゃん。自分の貞操（ていそう）と漫画の続き、どちらが大切なの？」

「漫画の続き！」

「……ウリアちゃん」

「何？」

「……怒るよ……？」

「ひぃっ……ご、ごごっ、ゴメンナ、サイ……！」

「それじゃあ、もう秀ちゃんの部屋で寝たりなんかしない？」

「し、しない……しないわよ。誓う、誓うから、許して下さい……！」

「そっか。うん、解ってくれればいいの」

そう言ってニッコリと満面の笑みを見せる霧歌。

対するウリアは青ざめた表情で目の端に涙を浮かべていた。

『魔導獣機』にも全く臆さないウリアが霧歌に対しては本気で恐怖していた。

ウリアの中での恐怖を感じるものの順列が間違っているような気がする――いや、確かにあの笑顔を浮かべる時の霧歌は何物にも勝る恐怖を感じさせるが。

ていうか、ツッコミが遅れたが、俺と一緒の部屋で寝る事で貞操どうとかこうとかっていう話になるのはおかしいだろ。

まぁ、確かに同世代の男女が同じ部屋で寝泊まりをするのは駄目かも知れないが……。

何と言うか、信用されていないようで、俺はまた若干凹んだ。

夜の秘密の御話？

「……という訳で、ウリアちゃんは私と一緒に秀ちゃんのお姉さんの部屋で寝る事になったから」

「ああ、うん。解った」

「ウリアちゃんの貞操は私が護り切るから」

「何か無駄な決心と共に俺に濡れ衣が！？　そんな決心しなくても大丈夫だから安心しろ！」

そして、姉さんの部屋へと向かって行く霧歌とウリア――いや、ウリアだけは霧歌に殆ど引き摺られているような感じだったけれど。

「……はぁ」

何と言うか、俺は心の傷から溢れ出したため息をついて自分の部屋へと戻るのだった。

意外にも、俺の心に入った傷は深かったのである。

致命傷だったのである。

しかしまぁ、俺のハートがただ単にガラス製だったからという理由も挙げられるのだろうけど。

◆　◆　◆

私は今晩、霧歌と一緒の部屋で寝る事になった。

正直、秀の部屋にある漫画本の続きは物凄く気になっていて、それこそ夜も眠れないほどに気になっているのだが……。

あの霧歌の黒々しいオーラを見せ付けられては、霧歌の言葉に同意せざるを得なかっただろう。

ていうか、あんな霧歌初めて見た。

怖かった……いや、冗談抜きで本当に怖かった。

『魔導獣機』とか、戦闘中でさえあんな恐怖を感じた事は無かったのに。

何と言うか……私があの霧歌の笑顔を見た時、根源的な恐怖を感じ取ったのだ。

私の肌が、私の身体が、私の神経が――私の全てが。

霧歌から発せられるそのオーラを――感じ取った。

……まぁ。

ラスボスに遭遇してしまった時のようにな、そんな感じで私は語っているけれど、実際問題、霧歌はラスボスでも無ければ中ボスでも、ましてやその辺に居る雑魚キャラでも無く――ただ単なる一般人なのである。

でも、あんなオーラを一般人が出せるものなのだろうか……霧歌は一体何者なのだろう。

「ウリアちゃんは、ベッドで良いからね」

そう言って、霧歌は今ベッドの隣の床に秀が運んで来た布団を敷いていた。

何か、先ほどの威圧感から私は咄嗟に霧歌にベッドを譲ろうかと思ったのだが――。

その霧歌の気持ちを裏切っても何か後が怖いので、私は素直に霧歌の言葉に従う事にした。

「……あの、霧歌？　手伝おうか？」

「ううん、大丈夫。泊めて貰っている身なんだから、これくらいは自分でやらないとね」

「そ、そっか。それならいいけど……」

「……よし、これで完成、と」

布団を敷き終わった霧歌はその上で両手を腰に当てて得意気な表情を見せた。

「それじゃあ……もう、寝る？」

「もう寝ちゃうの？　ウリアちゃん、今日の戦いで疲れていたりす

る？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」

「そっか。それならもう少し起きていようよ。折角なんだし、今日は特別に夜更かしして色々と話さない？」

「話すって……何を？」

「色々よ、色々。私とウリアちゃん、時空を越えてこうして巡り会えたのに、お互いの事をまだ余り知らないじゃない？」

「……確かに」

私は先ほどの霧歌から感じ取った黒々しいオーラ――と、あの時感じた凄まじい悪寒を思い出す。

「お互いの事……まだ余り知らないかもね」

「でしょう？　それに、ウリアちゃんから未来の事とか色々聞いておきたいし」

「未来の事？　それならこの前、秀から説明があったじゃない」

「そういう未来じゃなくて……その、ウリアちゃんが覚えている範囲で良いから、そういう戦争とは別の未来の事とかを聞いてみたいなぁ、って」

「ああ……そういう事か。でも、私が生まれてきた時には既に戦争の真っただ中だったし、この２０１１年から戦争が始まるまでの歴

史に関する情報は全て自然災害で無くなってしまったから……多分、私から話せる事は何も無いわ」

「そっかぁ……それは残念だなぁ」

「ゴメンね、霧歌」

「ううん、良いのよ。別にそこまで聞きたいって訳じゃなかったし。言うなれば、ついでに聞いておこうかなって感じだったから」

「……それじゃあ」

私はベッドに腰を下ろしながら霧歌にこう問いかけた。

「霧歌が私に聞きたい本命の事柄は――何なの？」

「うーん……そうだね。私の本命は……私が本当に聞きたいのは」

そう言って、霧歌は私にニッコリと微笑み掛けるとこう言ったのだった。

「――秀ちゃんの事、かな？」

「……秀の事？」

私は唖然とする――唖然として、瞼（まぶた）をパチパチと瞬（またた）かせた。

「秀の事で……霧歌が私に聞くの？　秀の事を知りたいなら本人に聞けば良いというか――それ以前に、私なんかよりも霧歌の方が秀の事を知っているんじゃないの？　幼馴染なんだから――」

「違うわ」

そう言って――霧歌は私の言葉を途中で遮って、言う。

「私が聞きたいのは……ウリアちゃん、あなたが秀ちゃんの事をどう思っているのかって事よ」

「私が……秀の事をどう思っているのか？」

何だろう。

どういう意味なのだろう、それは。

私は、その霧歌の質問の真意が解らなかった――その目的が理解できなかった。

「そんな事を聞いて……どうするの？」

「どうもしないよ、私は。ただ……ちょっと、ね。今の内にそれをハッキリさせておこうと思って」

「……」

やはり――何度考えても霧歌のその質問の意味が私には解らなかった。

だから、私はその質問を聞いて頭の中に浮かんだ答えを――霧歌に答える。

「私は……秀の事を、“護らなければならない対象”として見ているわ。だって、それは未来の――２０５６年の秀から私に科せられた任務のようなものだから。だから、私は……秀の事を護るべき人間として、そう見ているわ」

「……本当に？」

「……な、何が？」

「本当に――ウリアちゃんは、秀ちゃんの事を“そういう風な見方”しかしていないのかな？」

「えっ……な、何？　霧歌は私に何が言いたいの？」

霧歌が何を言っているのか――私に何を聞こうとしているのか。

全く――理解、できない。

「……ううん、ゴメン」

「何でも無い」と霧歌は不意に顔を伏せてそう言った。

「私がちょっと……勢い余ってウリアちゃんに色々と聞き過ぎちゃった。本当にゴメンね、ウリアちゃん」

「う、ううん……私は別に、気にしないけど」

「うん……ありがとう。でも、今のは本当に……本当にただ、確認したかっただけだから」

「確認？　確認って……何の？」

「さぁ、何だろうね？」

「でも」と霧歌は私に向かって顔を上げる。

その霧歌の顔には――いつもの笑顔が浮かんでいた。

「私にもまだ……チャンスはあるって事が、解ったよ」

「……チャンス？」

私は首を傾げてみる。

しかし、当然の事ながらそんな事をしてもその霧歌の言葉の真意は解るはずも無く。

「いや、本当に何でも無いから、ウリアちゃん。さっきの事は忘れて――ていうか、忘れてくれると嬉しいかな」

「まぁ、別に良いけど……それじゃあ、次は何を話す？」

「そうだねぇ……ウリアちゃんから私に対して何か質問はある？」

「霧歌に……質問、か」

うーん。

あの黒々しいオーラの事を聞いてみてもいいのだろうか……いや、何か駄目なような気がする。

理由は解らないけれど、何か駄目なような気がする。

だから、私は今浮かんだとある素朴な疑問を霧歌にぶつけてみた。

「それじゃあ……霧歌はどうして、今日秀の家に泊まりたいだなんて言ったの？」

「ああ、それは……そういえば、まだウリアちゃんには話してなかったね」

「何を？」

「私の家庭の事、だよ」

霧歌は苦笑と共に話し出す。

「私の家って――秀ちゃんの家とは逆で、さ。私には父親が居ないの」

「それって……その、もしかして事故？」

「ううん、事故じゃないよ。お父さんがお母さんと喧嘩して家を出て行った――まぁ、一般的な言い方を使用させて貰うのなら、離婚だね」

霧歌は、言う。

苦笑であるが、明らかに“笑み”を浮かべて――霧歌はまるで自分の自慢話を語るがの如く淡々とした口調で語り始める。

「私のお父さん、酒癖が悪い人だったの。お酒を飲むと私やお母さんに暴力を振るって来て……それで――お母さんの方も怒りか何かが爆発しちゃったんだろうね。最終的には、お父さんとお母さんは大喧嘩になっちゃって、お父さんは家を出て行っちゃった。普通は逆なのにね。それで、お父さんの方の行方はまだ解らないんだけど、事実上は離婚になったの」

「……その、ゴメンね？　霧歌……そんな事聞いちゃって」

「ううん、別に良いのよ。私が聞かれて、私が話したかったから話しただけだし。それに、もう幼稚園生くらいの事だから……そこまで鮮明に覚えている訳でも無いし」

「よ、幼稚園生って……そんな頃から、霧歌にはそんな事があったの？」

「うん、そう。でも、そこまで珍しい事じゃないと思うよ？　いや、こんな私みたいなケースはそこまで多い訳じゃないけれど、少ない訳でも無いだろうから」

「……霧歌は、どうしてその事をそんな風に話せるの？」

「そんな風にって……どんな風に？」

「……だから」

――だから。

「そんな……何となく、平気そうに、だよ。本当は辛い事なのに、それをどうして――そんな風に、平気そうに話す事が出来るのかな、って」

「……ウリアちゃん？」

「私だったら……私にもし――もし、だけど、そんな過去があるのなら、私は多分、霧歌みたいには話せない、かな」

「……そうだね」

そう言って――霧歌は私に優しげな笑みを見せてくれた。

「確かに、ウリアちゃんの言う通りだよね。辛い事を平気そうに話す事なんて出来ないよね、普通は。辛い事を思い出す時には辛い表情で、時には泣いたりするのがセオリーだけど……でも、でもね？」

そして、霧歌はこう言った。

「でも、そんな辛い経験の後に人生が変わるような――そんな素敵な出来事があったら、多分人はどんなに辛い事でも……まぁ、私みたいに全然平気って訳じゃないだろうけど、でも、少しは辛い気持ちにならないで話せるんじゃないかな？」

「……それじゃあ、霧歌にはそんな辛い出来事も覆（くつがえ）してしまった――そんな幸せな出来事があったの？」

「勿論よ。物凄く幸せな出来事が――あの時の私を変えてくれた」

「……それは、何？」

「……それはね」

私の質問に――霧歌はまた嬉しげな笑みを見せてこう言った。

夜の秘密の御話？

「私のお母さんがお父さんと離婚したって言ったでしょ？　それで、いつ行方不明になったお父さんが現れるか解らないから、お母さんと一緒にこの町に引っ越して来たの。でも、私はその事に余り賛成じゃなかったの。だって、幼稚園に入ってその頃は結構経っていたから、友達と別れたくなくて……でも、お母さんの事を考えたらそういう訳にも行かなかったから、仕方なく、私は元居た幼稚園を離れる事になったの」

「こっちに来て幼稚園に入ったばかりの頃は……辛かったなぁ」とその当時の事を思い出しているのだろうか――霧歌は布団の上で膝を抱えながら苦笑を見せた。

「ウリアちゃんにも解るかな？　学校もそうだけれど、幼稚園とかって時間が経過した後に転入とかするとその時はもうその施設の中で子供同士の絆が色々と出来ちゃってて……余り、友達の輪に入れないんだよね。だから、こっちに引っ越して来たばかりの頃は本当に辛かった。幼稚園に行っても誰とも喋らずに、遊ばずに、ただ敷地内の隅っこにある砂場で一人で遊んでいたから……」

「でもね？」と霧歌はまた嬉しそうな微笑を浮かべて言う。

「そんな時……秀ちゃんが私に話し掛けてくれたの。秀ちゃんは私に話し掛けてくれて、私と一緒に遊んでくれて……そして、私と友達になってくれた。あの時は本当に嬉しかったなぁ……冗談抜きで、あの時の秀ちゃんが私の目にはヒーローに見えたの。女子的な発想で言えば白馬に乗った王子様って所なのかな？　今は言うだけで恥ずかしいけれど、当時の私は子供だったから、そういう発想が生ま

れたのかもしれないわね」

「……秀が、白馬に乗った王子様」

「あっ、その事だけど。秀ちゃんには絶対秘密だよ？　約束だからね？」

そう言って私に霧歌はウインクと共に人差し指を口に当てる仕草を見せてきた。

その霧歌の仕草に私は無言で頷く。

「あの時……秀ちゃんが私に話し掛けてくれなかったら、一緒に遊んでくれなかったら、友達になってくれなかったら――私はきっと、今のような人間にはなれなかったと思う。勉強を頑張れたのも、自分でも驚くくらいに明るい性格になれたのも……きっとそれは、秀ちゃんのお陰だから」

「……霧歌は、随分と秀の事を尊敬しているのね」

「うん、当たり前じゃない。だって、秀ちゃんは私の未来を変えてくれた人なんだから」

「……秀が、未来を」

その霧歌の言葉に――私は“その事”を思い出す。

そう、秀は私を“助けてくれた”。

秀は深い闇の中から私を“救い出してくれた”。

秀が居なければ――きっと、今ここに居る私は存在しないのだろう。

過去にも、未来にも。

現在だって。

こんな――こんな“平和”な私はどこの時空にも、世界線にも、平行世界にも存在しなかっただろう。

秀が、居なければ。

だから――だからこそ。

私はこう思うのだ。

秀を助けたいと、秀を救いたいと。

秀は私を助け、救ってくれた――それならば、今度は私が秀を助ける番だ。

秀のお陰で今の私が居る。

それならば、私が秀の未来を護らなければ。

秀が私の未来を切り開いてくれたのと――同じように。

「……そうね、霧歌の言う通りかもしれない」

「何が？」

「秀が白馬に乗った王子様みたい――って事よ」

「何よ、それ。どちらかと言えば、秀ちゃんにとってはウリアちゃんの方が白馬に乗った王子様でしょ？　あっ、この場合は白馬に乗った王女様か」

「でも……何かアレよね。秀が白馬に乗って現れたらカッコイイと感じるよりもまず笑ってしまうかもしれないわ」

「あっ、それ言えてるかも。秀ちゃんが白馬に乗って登場なんかしてきたら、逆に笑いが止まらないかもね」

「……霧歌、せめてあなたくらいは私の言葉を否定しないと駄目だと思う」

秀の立つ瀬が無くなってしまうだろうから。

幼馴染からも貶（けな）されてしまうのは流石に可哀想な気がする。

「……あれ？　そういえば今更だけれど、霧歌の家庭の事が、霧歌がこの家に泊まる事と何の関係がある訳？」

「う……そ、それは、その」

言葉を濁らせながら霧歌は苦笑と共にモゴモゴと私にこう答えたのだった。

「私その……お化け屋敷のトラウマのせいで、幽霊が苦手で……」

「幽霊？　そんなものが怖いの？　あんな非科学的なもの、過去にも現在にも未来にも存在しないから、怖がるだけマシだと思うわよ？」

「うう……未来からやってきたウリアちゃんが科学的に否定してくれると少しだけ心が軽くなるけれど、心に芽生えたトラウマは中々無くならないものなんだよ……」

「そ、そうなんだ……」

半分泣きそうな表情でそんな事を言ってくる霧歌。

何と言うか……先ほどの黒々しいオーラを放つ時の霧歌とは真逆で。

「……フフッ」

それが何だか可笑しくて、私は思わず小さく笑ってしまった。

「わ、笑いごとじゃないんだよ！？　ウリアちゃん！　私にとっては死活問題なんだから！」

「あ、ああうん……ゴメン、霧歌」

そして――私と霧歌は暫し談笑を重ねに重ねた後。

夜の1時を回った所で漸く寝る事にした。

「……それじゃあ、話す事も話したし。もうそろそろ寝ましょうか、ウリアちゃん」

「うん、そうね。これ以上話す事も無さそうだし、漫画も無いし」

「ていうか、今度から夜更かしは止めるんじゃなかったの？　美容と健康の為に」

「……そ、それは」

……えっと。

「そ、その……今読んでる漫画を全部読み終わったら……夜更かしは止めるわよ」

そう言った私に――霧歌は全てを見透かしたが如く笑みを見せて。

「……そうだね。今読んでいる漫画を全部読み終わったら、早寝早起きを心掛けてね、ウリアちゃん」

「うん……出来るだけ心掛けてみる」

「それじゃあ、電気消すね」と布団の上に立ち上がった霧歌はそのまま部屋の入り口に向かって歩き出す。

そして、霧歌が部屋の入り口の傍にある電灯のスイッチに触れようとした所で――。

「き、霧歌」

私は霧歌の背中に向かって声を上げた。

「何？　ウリアちゃん？」

「……その」

「ん？」

「……いや、何でも無い。お休み、霧歌」

「うん、お休み、ウリアちゃん」

そう言って霧歌は私に微笑んでくれた――その笑みは私の心に安心感を齎してくれた。

そして、私はそんな霧歌に微笑み返しながら布団に潜り込む。

すると、程無くして部屋の電気が消えた。

私のすぐ隣の布団に霧歌が潜り込む音が聞こえてくる。

「……」

私は暫しの間――何も見えない真っ暗な空間を見据えた後。

何(いず)れは話さなければならない“その事”を考えながら――静かにその目を閉じた。

決闘

8月2日――。

あの二体の『魔導獣機』の強襲があった翌日、やはりニュースや新聞では昨日の事が大きく騒がれているようだった。

霧歌の心配していた写真や動画は無かったようだが――それでも、昨日のウリアと『魔導獣機』の戦闘を見ていた人は少なからず存在しているらしい。

それこそ、ＵＦＯだとかそんな噂も流れ始めているようだ。

「しかし……何かアレだな」

俺はテレビで流れているニュースをテーブルに座ってそこに頬杖を着いて見ながら言う。

「段々と昨日の事が――と言うよりか、この前の森林の一件からこの町に都市伝説が増え始めているけれど、その中心に居るのが自分だと思うと……何だかやぶさかではないと言うか、少なからず嬉しい気分になるのは何故だろうな」

「自分の事で世間が騒いでいると勘違いするからじゃない？」と俺の正面に座るウリアは俺と同じ体勢で言う。

「ネット上で誰かに対して殺人予告を出して世間を騒がせるみたいな――そういう感じで秀は誰でも良いから自分の相手をして欲しい頭のおかしい人みたいな考えを持っているのね」

「長々と語っておいて最終的に俺を罵倒する言葉で落ち着かせるな」

「ていうか、やっぱりテレビは来なかったわね」

「お前もそれを気にしているじゃないか。案外俺と同類じゃないか」

「秀と同類なんてゴメンよ。虫唾（むしず）が走るわ」

「お前、侮辱罪って犯罪を知っているか？」

「秀の同類なんてゴメンよ。悪寒（おかん）が走るわ」

「言い直しても同じだ！　虫唾も悪寒もそこまで変わらねーよ！」

そもそも、意味はともかくどちらにしてもそれらの言葉は罵倒だからな！

「まぁ、テレビは来なくて良かったかもね……」

「えっ、どうしてだよ」

「だって、秀が生き恥を掻かずに済んだじゃない？」

「お前、それは一体全体どういう意味だ！」

どうしてテレビに映るだけで生き恥を晒す事になるんだよ！

「……あれ？」

俺はここで漸くその事に気付いた。

「そういえば、霧歌は？」

「さぁ、私が起きた時にはまだ寝ていたわよ？」

「何だ、そうなのか……てっきり、今日は起きたばかりで洗面台で少し乱れたパジャマを着た霧歌に会えると楽しみで柄にも無く早起きをしてきたというのに……」

「秀が珍しく早起きしていると思ったらそんな裏話があったのね。殴ってもいい？」

「だが断る」

「まぁ、昨日は日付が変わって、1時まで二人で話していたからね……霧歌が寝坊しているのは慣れない夜更かしのせいでもあるんじゃないかしら？」

「1時まで夜更かしってお前……何を話してたんだよ」

「べっつにー。何でも無いわよ。互いに持ち合わせている颯人の変態談をどちらが多く話す事が出来るか勝負した以外には何も話していないわ」

「お前、俺が傍に居ない事に託けて何てトークショーを開催してやがるんだ！　つーか、最早それは虐めの域だよ！　陰口を叩くなんてお前等最低だぞ！」

「陰口なんて叩いていないわよ。昨日は単なる自慢話をしただけな

んだから」

「その自慢話に問題があるって言ってるんだよ！　ていうか、変態談って何だよ！　失敗談みたいに言うな、初めて聞いたわそんな単語！」

「ああもう、五月蠅いなぁ。朝からツッコミだけは冴え渡っているわねぇ……流石は変態だわ」

「それから、何かと俺を罵倒する時に変態という言葉を乱用するな。俺がそれに慣れてしまったらどうするんだ」

「慣れるの？　逆に慣れてしまうの？　秀は」

そんな会話を交わしている内に――霧歌がリビングにやってきた。

霧歌の目は開いているのか否か判別できないほどに一本の横線となっていた。

つーか、あれって閉じたままなんじゃね？

ほら、時々フィクションの世界とかで居るじゃん。確実に目を閉じたままなんだけど、それでも平気そうに道を歩いて人と会話している奴。

あれって、実際問題前とか見えているのだろうか？

霧歌が二階からここまでやって来れたという事は見えてはいるのだろうが……。

後で聞いてみるか。

「オイオイ、大丈夫か霧歌。お前は何度かこの家に泊まりに来た事はあるけれど、そこまでの顔を見たのは俺生まれてこの方初めてだぞ」

「うーん。私って目覚まし時計が無いと起きれないタイプで……ふわぁ。だから、目覚まし時計があればどんなに睡眠時間を削ってもその時間に起きれるんだけど、その代わりに目覚まし時計が無いといつまでも寝ちゃうんだよねぇ……」

「何かそれ、さり気無く話している割には物凄い体質だよな」

「もう歳なのかねぇ……」

「いや、俺達まだ高校二年生なんだが。つーか、そこまで眠いのか？　何なら俺が一緒に添い寝をしてやってもいいぞ？」

「ううん、いい、大丈夫、間に合ってます」

「……」

……何、今の対応速度。

以上に速かったと言うか、光の速度だったと言うか。

ていうか、別に光速で一蹴しなくても良いじゃないか……。

「……それじゃあ、私ちょっと洗面台で顔洗って来るねー」

相変わらず眠たそうな顔で霧歌はそう言って――。

徐にパジャマを脱ぎ始めた。

「ってオイオイオイオイオイオイオイオイ！」

そこは流石の俺でも止めざるを得なかった。

「待て、ちょっと待て、霧歌！　お前、言葉と動作が噛み合っていないぞ！？」

「ん……あっ、ゴメンナサイ、秀ちゃん。私、寝惚けていると言葉とは逆の動作をしてしまうのよ」

「だから何その特異体質は！　つーか、顔を洗うという言葉の逆が服を脱ぐってどういう事だよ！」

そんな反意語は存在しないだろ！

「まぁ、今のはいつもの癖でもあるんだけどね。私の家、お母さんとか朝帰りで私が起きた時にはまだ寝ているから。だから、朝はとりあえず服を脱いで、外の空気を肌に直接当てて目を覚ますんだよね、私」

「……と、いう事は。お前が起きる時間帯に合わせてお前の家を訪問したらお前の全裸が拝めるという事なのか？」

「秀ちゃん、流石の私でも下着くらいは身に着けてるよ？」

「霧歌。ツッコむ所が間違っていると俺は思うんだが」

うーん。

やはり、寝惚けている時の霧歌といつものように会話を噛み合わせるのは難しいようだ。

決闘？

「仕方ないなぁ……ほら、俺が洗面台まで連れて行ってやるから。付いて来い」

「うん、解った……それじゃあ、私はパジャマを脱ぐね？」

「だから何故そうなる！　寝惚けている時のお前の思考回路は一体全体どうなっているんだ！」

つーか、“俺が洗面台まで連れて行く”という言葉の逆も“服を脱ぐ”になっちまうのかよ！

さっきは“顔を洗う”という言葉の逆でそうなっていましたよね！？

そんな感じで俺は洗面台に辿り着くまでに五度霧歌がパジャマを脱ぎ出すのを阻止したのだった。

今考えればそれはとても惜しい事をしたと懸念していたりもするのだが――。

まぁ、それは後の祭りである。

引っ繰り返ったお盆の中の水は決して元に戻る事は無いのだ。

◆◆◆

霧歌は顔を洗うといつも通りの真面目な俗に言うエリート的な雰囲気をその身に取り戻した。

その証拠に、霧歌が顔を洗い終えた後、俺は霧歌とこんな会話を交わした。

「ところで霧歌。お前、さっき寝惚けてパジャマを何回も俺の前で脱ごうとしたんだぜ？」

「まさか秀ちゃん、それに託けて私の下着の色を見たり、胸を揉んだりしていないでしょうね？」

――という言葉が霧歌から返って来たから、もう霧歌は完全に覚醒したようである。

万々歳だ。

……いや、俺の心境は万々歳では無いのだが。

まさか、あの質問をするだけで霧歌からあんな言葉を返されるとはな。

幼馴染で、しかも親友であるだけに何か複雑な心境である。

「秀ちゃん、何か冷蔵庫とかに野菜ある？」

リビングに戻る途中、俺は霧歌からそんな質問を受けた。

「いや、多分――と言うよりも、確実に存在していないな。葱（ねぎ）の切れ端さえも存在していないと俺は自身と誇りを持ってそう断言しよ

う」

「いや、多分そんな事に誇りは要らないと私は思うよ？」

苦笑と共にそんな事を言って来る霧歌。

うん、やはり、いつもの霧歌にちゃんと戻っているようだ。

「でもそっかぁ……無いのかぁ。あるなら、私が何か手料理を御馳走して上げようと思っていたんだけどなぁ、昨日泊めて貰ったお礼に」

「えっ？　泊めて貰ったお礼は身体で返すって俺に言わなかったっけ？」

「……だから、返そうとしているじゃない。私がこの体を――主に、手を使って、秀ちゃんに料理を振る舞うって言ってるんだから」

「……お前、よく俺が咄嗟に、それも適当に思い付いたどうでもいい言葉に対してすぐそんな返答が出来るよな」

「まぁ、秀ちゃんの言語パターンは長年の付き合いで熟知しているからね」

「マジか」

「うん、マジ、大マジ。ちなみに、秀ちゃんの言語パターンは百八式まであるよ」

「百八式って」

波動球かよ。

「儂の波動球は百八式まであるぞ」

「止めろ、霧歌。それ以上言うな」

「大丈夫だよ、秀ちゃん。色々と漢字を変換して元ネタの本文とは繋がりが無いように見せ掛けたから」

「そのネタバレをしている時点で既にアウトと言うか、そもそも、意味が一緒なら幾ら漢字を変えても無駄だからな？」

そして、俺達はリビングの扉を開けてその中に入る。

リビングでは、ウリアが一人テーブルに頬杖を着いてテレビを見ていた。

「それじゃあ、話を戻すけれど」

「ああ、大いに戻してくれて結構だ。つーか、戻せ」

「私は秀ちゃんに手料理を御馳走したい訳なのですよ」

「……だから？」

「だから……その、お買い物に付き合ってくれると、嬉しいなぁ、なんて」

「どうかな？」と霧歌は小首を傾げて俺にそう問いかけて来た。

いや、別に買い物に付き合うくらい造作も無い事と言うか。
それ以前に、そんな小首を傾げて可愛らしく問われてはそもそも断れないと言うか何と言うか。
「……あ、ああ、別に構わないけど？」
「おっ、引き受けてくれるんだ。ありがとね、秀ちゃん」
「別に……買い物に付き合うなんて、俺で良ければいつでも付き合ってやるよ」
「本当に？　未来永劫？」
「未来永劫って……未来にまでそんな関係を俺に求めるな。行くなら将来結婚するであろう旦那さんと行けよ」
「……だから言ったんじゃん」
「あん？」
「ううん、何でも無い」
「ウリアちゃーん」と霧歌はテレビをボーっと見据えているウリアに向かってこう問いかけた。
「私達、これから昼食の買い物に行くけどウリアちゃんはどうする？」

「いや、私は遠慮しておく。昼食の準備が出来るまで自堕落にテレビを見る――それが私のアイデンティティー」

「お前のアイデンティティーは最低最悪だな」

要するに、お前は単なる自堕落で怠惰な人間だという事か。

自分で言っていて悲しくないのだろうか……ていうか、そもそもこいつは意味を知っていて言っているのか。

矢鱈知識が豊富そうに見えるこいつだが、知っているのは未来の知識だけで余り常識的な事は知らないからなぁ、こいつ。

決闘？

「それじゃあ……ウリアちゃん、私達が帰って来るまでお留守番してるの？」

「うーん、まぁ、そうなるかな」

「……本当にそれで良いの？」

「えっ？」と不意に低い声を出した霧歌にウリアはこちらを振り返ってきた。

ていうか、俺も思わずウリアを振り返った。

何だ。一体全体どうしたと言うんだ、霧歌。

何か怖いぞ。

「ウリアちゃんは確かに、秀ちゃんを護る時には激しい運動をしているかも知れないけれど。女の子の体って、少し気を抜いたら……“膨らむ”のよ？」

「……まっ、またまたそんなぁ」

引き攣った笑顔でウリアは霧歌にこう言葉を返す。

「い、幾ら霧歌の言葉であっても私は騙されないんだから。そ、そう、簡単に、人の体が膨張する訳が――」

「そう？　それなら別に私はもうウリアちゃんに構わないけれど。まぁ、一人家の中で自堕落にテレビ番組を貪って下っ腹が出て来ても？　それはウリアちゃんの怠惰な私生活が招いた結果であって、私には無関係だし？　ウリアちゃんの体がどうなってしまっても私は知らないけどね」

「待ってっ！　ちょっ、霧歌、私を見捨てないで！」

涙目でこちらに――主に霧歌に向かって手を延ばしてくるウリア。

つーか、霧歌よ。

お前将来詐欺師とか、その辺の職業に就けそうだな。

いや、詐欺師は別に職業でも何でも無いのだが。

「ねぇ、霧歌！　私は一体全体どうすればいいかな!?」

「うーん、まずはさっき言ってた変なアイデンティティーを変える――と言うか、抹消する事と。それから、買い物に付いて来るのが面倒なら、お散歩にでも行って来たらどうかな？」

「う、うん、解った！　行って来る、私今すぐ行って来る！」

そう言ってすぐさまテーブルの椅子から立ち上がるウリア――。

「ってちょっと待てウリア。出掛けるならせめて着替えてからにしろよ」

言い忘れていたが、ウリアは昨日の寝間着――もとい、姉さんの高

校時代のセーラー服を未だに着ているままなのである。

俺的にはウリアがその格好をしなくなるのは些か悲しいと言うか、寂しいものがあるが――まぁ、近所をあんな格好で出歩かれるよりかはまだマシだろう。

それ以前に、金髪の少女とセーラー服は何だかミスマッチのような気がする。

いや、俺は別に構わないのだけれど。

「う、うん、解った！　いつもの格好に着替えてから行って来るね！」

そして、俺達にそう声を上げたウリアは全速力で俺と霧歌の間をすり抜けて二階へと戻って行った。

「……ウリアちゃんって純粋なのねぇ、ああ見えて」

「いや、お前が言葉巧み過ぎるだけだろ」

「そうでもないよ。あんなの、心理学の本を読んでいたらちょちょいのちょいだよ？」

「一般的な高校生はそんな本なんか読まねーよ」

ていうか、多分読んでいたとしても今の高校二年生の時点で理解できているのはそれだけ本気の奴だけか、ほんの一握りの人数だけだと思うのだが。

まぁ、そんな特殊なカテゴリーに入ってしまうのがエリートである所の霧歌であって。

「それじゃあ、私達も準備を済ませて出掛けるとしますか」

「ていうか、何でウリアも買い物に誘わなかったんだ？　ウリアが昼食に何を食べたいのかも聞けるし、外を出歩かせるんだったら別に俺達と一緒でも良かったんじゃないのか？」

「……もう、相変わらず秀ちゃんは鈍感だなぁ」

「えっ？」

「女心が解っていないって話だよ。全くもう……秀ちゃんったら」

そう言って廊下を階段に向かって歩き出す霧歌。

呆然とその背中を見据える俺なのであったが――今霧歌が何を言いたかったのか、幾ら考えてもその欠片さえも理解できない俺なのであった。

◆　◆　◆

私は、秀のお姉さんの部屋に辿り着くと、すぐさまセーラー服からいつもの戦闘服に着替えて、部屋を飛び出した。

階段を下りる途中で私は霧歌と擦れ違う。

「あっ、もう行くの？　頑張ってね、ウリアちゃん」

「うん！　応援ありがとう、霧歌！」

そんな応援の言葉を私に投げ掛けてくれた霧歌にお礼を言った私は階段を駆け下りて玄関に飛び出す。

ちなみに、言い忘れていたが、私は靴を履いていない。

いざと言う時に邪魔だし――それ以前に、この私が着ている戦闘用のスーツは足の爪先（つまさき）まで覆い隠してくれるので、靴を履かなくても大丈夫なのである。

問題無いのである。

この時代にある韓国という国では『無問題（もーまんたい）』って言うんだっけ？

確か、この前見ていたテレビでそんな事が言われていたような……まぁ、別に思い出さなくてもいいか。

「オイ、ウリア」

私は玄関扉を開けようとした所で後ろからそんな声が飛んできた。

私は後ろを振り返る――そこには案の定、秀の姿があった。

「余り遠くまで行くなよ？　迷子になった時、捜すのが面倒だし、それ以前に心配するからな」

「うん、解ってるって」

「それから、俺もだけどお前も狙われている身だという事を忘れるなよ」

「うん、それも解ってる。この前みたいに、秀がピンチに陥っている時はすぐに助けに行くから」

「ああ、ありがとな、ウリア」

「どういたしまして、秀」

「いってきます」と。

私は秀にそう言って――玄関扉の向こうに広がる外の世界へと足を踏み出した。

◆◆◆

それにしても、散歩というのは一体全体何をすればいいのだろうか？

流石の２０５６年の未来からやっていた私にも“散歩”という存在

は知っているのだが。

具体的に“散歩をする”という概念については全くに無知と言っても過言では無いのである。

まぁ、意味については“ただそこら辺を果てしなく歩く”というのが散歩だと私は思っているのだけれど。

そんな事をして本当に何か面白い――もしくは、楽しいのだろうか？

私の中のその疑問が私の頭の中にインプットされている“散歩”についての情報がもしかして間違っているのではないかと更なる疑問を抱かせる。

「やっぱり、家でテレビを見ていた方が良かったかなぁ……いや、でも、太るのは嫌だからなぁ」

その理由もあるが――私が家に戻らないのは霧歌の存在も少なからず理由として存在している。

何と言うか……今戻っても霧歌は秀と一緒に買い物に出掛けていて家の中には決して居ないのだろうけど。

何か、後から私が散歩をサボって家に戻った事がバレでもしたら……怖い。

その先の未来には死が待っているような気がする。

死が私を手招きしていそうな気がする。

いや、割と本気で私はそんな事を思った。

「しかし……死ぬのは嫌だけれど、こうしてただただ道を歩き続けるというのも何だか暇よね」

かと言って他に行く当ても無いのだが。

……いや、待てよ。

「……久しぶりに、行ってみるかな」

◆◆◆

私がふと思い付いて気ままに向かった“その場所”は――私が以前、最初に『魔導獣機』を操っていた男と戦った場所だった。

いわゆる、“一夜にして森林が燃えて無くなるという怪現象が起こった森”――である。

まぁ、怪現象とは言っているけれど、その怪現象を起こした主犯は私なのだが。

でも、魔術が正当化された未来でも魔術は怪現象の内の一つなのだから――ニュースとかで報道されている“怪現象”という表現は一応正しかったりもする。

ちなみに、ここまで私は歩いてきた。

こんな真昼間から空を飛ぶような馬鹿な真似は幾ら私でもしない。

いざとなれば人の目にも止まらぬ速さで飛ぶ事は出来るけれど――何と言うか、そこまでしてこの場所に向かう事はしたくなかったのである。

ていうか、空を飛んでしまってはそもそも散歩している意味が無い。

「……」

その土までも黒く焼け焦げてしまった場所には何も残ってはいなかった。

ただただ――平らな地面が続いている。

何度見渡しても――見据えても、目を凝らしても、そこには何も無かった。

私の炎で――全てが燃え尽きてしまったのだ。

「……」

――そして。

その目の前に広がる真っ黒な景色の上にふと――“その光景”が重なる。

「……っ！」

私は“その光景”が見ていられなくて、咄嗟にギュッと目を閉じた。

それから――暫く経って、私はその目を開いてみる。
そこには先ほど映った“その光景”は無かった。
「……はぁ」
私は思わずため息をつく。
ため息と言うよりも――安堵の息、だろうか。
そもそも、どうして私は安堵の息なんかをついているのだろうか。
どうして私は――“その光景”が見えなくなった事で安心感を覚えているのか。
安心なんかしてはならないはずなのに。
私は“その光景”を逆にずっと見ていなければならないはずなのに。
“その光景”は――私が犯した決して消える事の無い罪であるはずなのに。
未来でも、現代でも、過去でも――どこに行ったとしても消えない大罪であるはずなのに。
どうして――どうして。
どうして、私は。

「――余裕だな、ウリアール＝ブレイザー」

「！」

不意に後方から聞こえてきた声に私は咄嗟に後ろを振り返る。

――そこには。

「……あなたは、確か」

「俺の事を覚えていてくれたか。光栄だな、ウリアール＝ブレイザー」

赤く長い髪を後ろで束ねた髪型――いわゆる、ポニーテールに上から下まで真っ黒な軍服を着た男。

「……ストレンド」

「ほう、俺の名前まで覚えていたのか。それは更に光栄な話だな」

決闘？

「……言っておくけれど、ここに秀は居ないわよ」

「以前に会った時には俺はお前にまだ言っていなかったか？　俺は、“今の”真之乃秀には興味が無いんだよ。ウリアール＝ブレイザー」

「今の秀には興味が無い……？　それは一体どういう事なの？」

「……そうか。お前はまだ知らないのか」

「だから、一体何を――」

「そう慌てるな、ウリアール＝ブレイザー」

私の言葉を遮ってストレンドは言う。

「お前が“それ”を知らないのも当然なのだろう。何故ならお前は“目覚めた”後すぐに、未来の真之乃秀の手によってこの時代へと送られたのだからな」

「……」

「まぁ、慌てる事は無い。近々お前にも――知る時が来るだろうからな」

「……あなたが何を言いたいのかは解らないけれど。秀の事を狙わずに、私の方にそっちから出向いてくれた事には礼を言っておくわ、ストレンド」

「確かにそうだな。俺は本来、真之乃秀の命を狙うべきなのだが――“今は”あいつを襲う時ではない。と言うよりも……ウリアール＝ブレイザー、先ほども言ったが、お前は意外と余裕だな」

「……何が余裕なのよ」

「お前はこの時代の真之乃秀を守護する為に派遣された存在なのだろう？　それならば――今のように真之乃秀の傍から離れていていいのか？」

「私も、あなた達にそれなりの信頼を抱いているという事よ。あなた達が夜――もしくは、夕方にしか秀を襲わないのは、この時代の歴史が少なからず変動するのを恐れているからでしょう？」

「ほう、その事を見透かされていたか」

「少し考えれば解る事よ、馬鹿にしないで。……それに、私だってそれは同じだし」

「まぁ、確かに陽が落ち始めてから真之乃秀を襲った方が『魔導獣機』や魔術による戦闘をこの時代の人間が目にする確率は下がるだろう――しかし、ウリアール＝ブレイザー。これは俺なりの気遣いだが、最近ではそうも言っていられなくなったようだぞ？」

「……どういう事よ」

「先日の『魔導獣機』がお前等を襲った件については覚えているな？」

「ええ、勿論」

「ああいう襲撃は本来、真之乃秀を襲う為にこの時代に派遣された人物――今は俺だな。そういう人間が真之乃秀を襲撃する為に、未来に『魔導獣機』を要請して、初めてこの時代に転送できるものだ――しかし、先日のあの『魔導獣機』は俺の要請によるものではない」

「……この時代に、もう一人未来からやってきた人物が居るって事？」

「無論、それはお前等の敵であり、俺の同士であるという事になるのだが――まぁ、それは表面上の同士であり、本当の同士ではないと俺は思っているがな。どうやら、組織内のいわゆる『強硬派』の奴等が勝手に動き始めたようだ。奴等の動きは味方の俺としても気に食わない事だが――流石の俺でも、この時代に居るそいつらを捜し出して抹殺する訳にも行かないのでな」

「……どうして、そんな事を私に教えてくれる訳？」

「だから、その理由は今言っただろう。俺が抹殺する訳には行かないから、ウリアール＝ブレイザー――お前が代わりにそいつを捜し出し、抹殺しろと言っているんだ」

「だから、どうしてそんな事を私に頼んで来る訳？　本当に秀の命を狙っているのなら――その強硬派だか何だか知らないけど、その連中に私達をこれからも襲わせていた方が任務を遂行しやすいでしょう？」

「実の所、『科学発展側』と『魔術発展側』の抗争など、俺にはど

うでもいいんだよ。俺はただ、戦争でより強い奴と戦いたくて、そして、俺が偶然所属していた組織がお前達の敵である『科学発展側』だった――俺がお前達の命を狙っているのは単なる名目に過ぎないからな。お前等が俺が殺すよりも先に他の誰かに殺されるのを指を銜えて待っている訳には行かないんだよ、ウリアール＝ブレイザー」

「……それで、その強硬派の人達よりも先に私を殺しに来たって訳？」

「いや、今日の所は単なる遊びだ」

「えっ？」

私はそのストレンドの言葉に思わず唖然とした声を上げてしまった。

「遊び――って、何なのよ、それ」

「より正確に言えば――そうだな、俺はお前と決闘をしに来た。それ以前に、お前には特に抹殺の指令は出ていないからな。むしろ、機会があれば未来に連れて帰って来いとも俺は上層部から命じられている」

「そう――未来に連れ帰って、自分達の武器にしようという訳なのね」

「お前はそう簡単に他の誰かに対して屈するような人間では無いように見えるがな。まぁ、その時はどうにかして上層部はお前を支配しようと努めるのだろう――薬でも、頭の中に機械を入れてでもな」

「……決闘、って言ったわよね？　遊びの決闘だって」

「ああ、俺はそう言った」

「でも、それはあなたがそうしたいだけであって――私は別にそうしなくてもいいって事よね？」

「そういう事だ。私を殺したければ殺すがいい――まぁ、お前に出来るなら、だが」

「……言ってくれるわね。いいわよ、受けて立とうじゃない」

「――俺の申し出を受けてくれて感謝するぞ、ウリアール＝ブレイザー」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべたストレンドの右目がキラリと赤く光った――ように見えた瞬間。

ストレンドの右側の空間が歪み――そこから細長い筒のような物体が姿を現した。

それは、いわゆるロケットランチャーであった。

ストレンドは宙に浮かぶその武器を引っ掴むと――その武器に備え付けられているスコープで一瞬にして私に標準を合わせてその引き金を引く。

細長い筒のような砲口の後ろが爆発を起こし、白い煙を上げながらその筒から放たれた弾頭が一直線に私目掛けて滑空してきた。

しかし、私に現代兵器は効かない。

私は迫り来るその弾頭を見据えながら素早く目の前に深紅色の光る魔方陣を生成する――飛んできた弾頭はそれに衝突して大爆発を起こしたが、私はその衝撃も爆風も――粉塵すらも届く事は無かった。

「……現代兵器は効かないって以前の戦闘で確認したんじゃなかったかしら？」

私は魔方陣を消しながら風に流れて行く粉塵の奥からストレンドにそう問いかける。

「今のはただの挨拶だ」

晴れて行く粉塵の向こう側からストレンドの姿が現れる――その手には既に先ほどのロケットランチャーの姿は無かった。

「開戦の狼煙（のろし）というものは――派手な方が良いだろう？」

「……そうね」

私はそうストレンドに言葉を返しながら足元に深紅の光を放つ魔方陣を出現させる。

その魔方陣から放出される魔力――私はその魔力で背中に炎の翼を、右手に炎の剣を創造した。

決闘？

「それは――あなたの言う通りだと思うわ」

私は黒い地面を蹴って――飛んだ。

一気にストレンドとの距離を縮めた私は右手に携えた炎の剣を振り下ろす。

私の放った斬撃をストレンドはその場から跳び上がる事で躱した。

私は後ろを――ストレンドが跳び上がった方を振り返る。

ストレンドは跳んで――更に“空中を蹴って”ジャンプし、地上２メートルほどの高さで“立ち止まった”。

“空中に平然と立っている”ストレンド――私はその足に履かれている靴を見据えてそのストレンドの行動を理解する。

「――『大気踏靴（スカイウォーカー）』、か。良いもの持っているじゃない」

「空を飛べるお前にはさして羨望は湧かないだろう。それに、良いものとは言っても、これは兵士になれば全ての人間に配給される基本的な装備の一つだ――故に」

これはただの安物に過ぎないのだよ――とストレンドは再度空間を歪ませてその右腕に先日と同じくガトリング砲を装備する。

「……まぁ、基本的な装備にしてはちゃんとしていると俺は思って

いるがな！」

そう声を上げてストレンドは私目掛けて幾千もの銃弾の雨を放射する。

しかし、私はそれを躱さない――躱す必要など皆無だ。

何度も言うが、私には現代兵器は通用しない。

《守護聖域（サンクチュアリ）》――それは周囲に存在している魔力の層を物体が通過する振動からその物体の位置を特定し、それに対して自分を自動的に守護する術の事だ。

自分で言うのも何だけれど、こんな上級クラスの魔術は私か――もしくは、私と同等の才能を持った魔術師にしか扱う事は出来ないだろう。

“自動的に守護する”とは言っても、少なからず自分の意識は必要なのである。

《守護聖域》に入り込んで来る銃弾によって魔力の層の振動を感知した際には一瞬だけそちらに意識を向ければ私とその銃弾との間に魔方陣の壁が出現する。

簡単そうな話に聞こえるだろうけれど、それはガトリング砲になるとまた違ってくる。

雨のように降り注ぐ銃弾全てに意識をそれぞれいちいち向けなければならないからだ。

けれど――私にはそれが出来る。

出来て、しまう。

自分でも怖いくらいに――完璧にそんな攻撃でさえも防ぐ事が出来てしまうのだ。

よって――ストレンドが頭上から放ったガトリング砲による銃弾の雨も私は《守護聖域》によって難無くその雨を全て魔方陣によって焼失させた。

ちなみに、この《守護聖域》に通用しないのが何故現代兵器だけなのかと語っておけば――それは単純な理由で。

単に、魔術が物体ではないからである。

いや、正確には物体なのだけれど――銃弾や先ほどのロケットランチャーの弾頭のように、確実にそこにある魔力の層をその質量で圧迫し、そこで発生させる振動を魔力は起こさない。

つまり、魔力は現代兵器と比べて“軽量”という事なのである。

まぁ、それは当然の事で――そこら辺に漂っている空気のような存在を寄せ集めて周囲に出現させるものなのだから、実際に目に見えるほどの質量を持った兵器よりも、軽量なのは当たり前の事なのだが。

しかし、そこまで重量の違う現代兵器よりも強力であるのが――魔術の怖い所なのである。

「……お前のその≪守護聖域≫という魔術は資料では確認していたのだが――なるほど。それは資料に記されていたよりも更に厄介な魔術であるらしいな。前回も試してみたが、全く現代兵器が役に立っていない」

「だから、さっきからそう言っているでしょ？　いつまで無駄な事をやるつもりよ」

「それは、お前が俺に少なからず本気で掛かって来るようになるまでだ」

「それじゃあ、あなたの方から少なからず本気を出してみたらどう？　まさか、未来からやって来てまでこの時代の兵器を使う戦い方が――あなたの戦い方って訳じゃないわよね？」

「無論、それは違うがな。俺なりに、お前に対して敬意を表しているつもりなんだよ――ウリアール＝ブレイザー。俺はお前の事を強者として認めている、故に、俺はお前がその力を発揮するまで、それと同程度の力は発揮しないんだ」

「敬意を表しているという言葉が嘘では無いのなら――それこそ、その強者である私を全力で倒そうとするのが敬意というものじゃないのかしら？」

「……」

その私の言葉に空中に佇むストレンドは再度ニヤリと不敵な笑みを見せて。

「そうだな……確かに、お前の言う通りだ。それならば、その言葉

の通り――俺は、お前の敬意を表して、少しだけ手の内を明かす事にしよう」

そう言ったストレンドの右側の空間が――また歪む。

そして、その空間の歪みから現れたのは十字架のような形をした漆黒の剣だった。

「――これは、この時代にあるスイスという国の『ロングソード』と呼ばれる武器をモチーフにそれを科学的に改良したものだ」

「名前は『ミスティルテイン』」とストレンドはその漆黒の剣の柄を静かに掴む。

「北欧神話において、主神であるオーディンの息子、バルドルの命を奪ったとされる剣の名前だ――まぁ、無論それは当てられた名前であって、本物ではないがな」

「さて」とストレンドは空中から飛び降りて――地面に着地する。

「俺はこうやって手を明かしたぞ――お前も、何かこれに見合う力を出したらどうだ？」

「けれど、私はその剣の――その剣を携えた状態でのあなたの力を知らないもの。その力を知るまでは、私はそれに見合う力を出す事は出来な――」

――そこで私の言葉は途切れる事になる。

いや、“遮られた”――と言うのが一番適当なのだろうか。

何故なら――私がその言葉を言い掛けた瞬間に。

ストレンドの手によって振るわれたその漆黒の剣から放たれた白い光の斬撃が――私のすぐ左隣を轟音と共に猛スピードで過ぎ去ったからだ。

私の言葉はその爆発にも似た轟音によって掻き消されてしまったのだ。

そして――暫し時は流れてその斬撃は私の左隣から消滅する。

光の斬撃が通った後の地面は――まるで地割れでも起こったが如く大きく抉(えぐ)られていた。

「――《裁きの光(ジャッジライト)》」

ストレンドはそう言って振り上げ切った漆黒の剣をゆっくりと下ろす。

おそらく、それが今の斬撃の――魔術の名前なのだろう。

決闘？

「……言い忘れていたが、この剣は――この兵器は、２０５６年の未来にも一本しか存在しない。何故なら、これは俺の為に製造された特注品だからだ。自分で言うのも何だが、俺はそれほど未来では認められた人間であり――この『ミスティルテイン』はその俺に見合う武器なんだ」

「――さて、もう一度問おうか」とストレンドは依然として不敵な笑みをこちらに向けたまま言う。

「今の俺の力を見て、まだ“力を見せない”などと言えるのなら、言ってみろ。何度も言うが、俺はお前に敬意を表している――よって、１０秒だけお前に時間をくれてやる」

「……でも、あなたは私を殺せないはずでしょう？」

「敵である俺のその言葉に信頼を置いているとすれば、お前はそこまでの存在だったという事だな、ウリアール＝ブレイザー。まぁ、確かに、俺のその言葉は嘘ではないが、お前が本気――ではなくとも、少なからず力を発揮しなかった場合、俺はお前の事を殺すぞ」

「……良いでしょう、解ったわ」

「あなたの要求に応じて上げる」と私は足元に深紅の光を放つ魔方陣を出現させた。

「――天よ。我は器なり。天よ――その神の器である我に神の力を授けよ」

足元の魔方陣から立ち昇る魔力を私は感じる。

そして――私はその最後の言葉を唱えた。

「神の力――紅焔天使の力を」

私の周囲から湧き上る炎の柱――それは渦を巻いて、私を中心とした巨大な火柱を創造する。

その中で、魔力によって私の背中には先ほどの翼とは違い、ちゃんとした形状を持つ深紅の光を帯びた翼が創造される。

そして、私の頭上には――同じく、深紅の光を放つ天使の輪が浮かび上がった。

炎の火柱が解けて行く――その向こう側に見えたストレンドはやはり不敵な笑みを浮かべたまま私に向かってこう言った。

「――≪紅焔天使（ウリエル）≫か……お前によく合った上手い名前を付けたな」

「……一体全体何の事かしら？」

「惚けるなよ、ウリアール＝ブレイザー……本当は解っているのだろう？」

「……さぁね」

私の右手にオレンジ色の光が集約される――それは光の剣となって空中に創造された。

私はその光の剣の柄を握り締める。

「あなたが何を言っているのか――言おうとしているのか。私にはさっぱり理解できないわ」

私は地面を軽く蹴って――文字通り、そこから飛び上がった。

淡い深紅の光を帯びた翼を羽ばたかせて飛翔した私はストレンド目掛けて突進する。

私は光の剣を振り下ろす――すると、ストレンドは先ほどのように避けず、私の斬撃に合わせて漆黒の剣を振り上げて来た。

ぶつかり合う二つの刃――焼け焦げた大地に凄まじい金属音が鳴り響いた。

「……そうか、なるほどな」

そして、ストレンドは納得したようにこう言った。

「お前――まだ、真之乃秀に“その事”を話していないんだな？」

「……だから、さっきから何を言っているのか、私には全く解らないわね」

「まぁ、良いだろう。誰にだって……話したくない事柄はあるものだからな」

「……何よ」

……何なのよ、その口ぶりは。

「解ったような口ぶりで……話さないでよ。あなたには解らないわよ……私の気持ちなんて！」

私は剣を振り下ろしてストレンドを前方へと弾き飛ばす。

その直後、私は剣をまた振り上げた――そして、その刀身に魔力を集中させる。

集約されていく魔力は光へと変換され、刀身はオレンジ色の光を放つ。

「――《太陽の斬閃（ソーラレイ）》！」

私は振り上げていた光の剣を一気に振り下ろした。

その瞬間――前方で着地するストレンド目掛けてオレンジ色の閃光が解き放たれた。

対するストレンドはその漆黒の剣を――『ミスティルテイン』を迫り来る閃光に向かって振り上げる。

「――《裁きの光（ジャッジライト）》」

ストレンドの剣から解き放たれた光の斬撃は私の放ったオレンジ色の光と衝突し――互いの魔術は相殺し合って大爆発を起こした。

大地に吹き荒れる突風――凄まじい衝撃波が私を襲う。

その衝撃波の勢いに任せて私は空中に飛び上がった。
私は空中から下界に広がる焼け焦げた広場を見下ろす。
その場所は今起こった爆発によって大量の砂塵に包み込まれていた。
ストレンドの姿は私の目には映らない――。
「――――っ！」
――そして、私が気付いた時にはもう遅かった。
いつの間にか――私の背後には剣を振り上げた状態のストレンドが居た。
振り下ろされる漆黒の刃。
私はその斬撃を咄嗟に光の剣でどうにか受け切った。
「くっ……！」
間一髪――ストレンドの攻撃を受け切った私は淡く光るその翼を羽ばたかせてストレンドと距離を取る。
「惜しいな」
ストレンドは『ミスティルテイン』の刀身を肩に乗せながら不敵に笑う。

「もう少し――お前が気付くのが遅ければ、一太刀入っていたものの」

「……どうして？」

私はストレンドに問い掛ける。

「どうしてあなたはそんな速度を――『魔術発展側』の人間でも無いあなたがあんなに速く動けるのよ」

「何だ、気付いていなかったのか――いや、ここは覚えていなかったのかと問いかけるのが正しいのか？」

「……何ですって？」

「俺は、お前に一度見せたはずだがな。お前も、未来の人間ならば知っているだろう？　空間と空間の狭間を行き来する――『空間移動』と呼ばれる移動方法を」

「ああ……そういえば、そんなものもあなたは見せてくれたわね」

先日の事である――先日、ストレンドが秀を襲撃した際の事だ。

迂闊（うかつ）だった。

そんな最近の事を、忘れていたなんて。

決闘？

「まぁ、お前がそんな事すらも忘れてしまうのは当然の事なのだろう――なぁ、ウリアール＝ブレイザーよ。今の毎日は――楽しいだろう？」

「……黙って」

「２０５６年の未来と比べると流石に技術力では劣るが――平和の度合いではかなり勝っていると感じるだろう？」

「……黙ってよ」

「平和な日々は楽しいだろう？　何故なら……お前は未来で――」

「黙れ！」

私は咆哮（ほうこう）する。

そして、足元に深紅に光る魔方陣を出現させた。

――何も、何も聞きたくは無かった。

ストレンドの言葉をこれ以上聞いていたくは無かった。

私が――私が何者であるかなんて。

そんな事は、私が一番知っている。

だから、これ以上は知りたくは無い。

改めて自分が何者かなんて――気付きたくはない。

私は――私は、私は、私は……っ！

「――――っ！」

魔方陣から飛び出した大量の炎が空中のとある一点に集まって行く。

その多大なる炎は――巨大な球体へとその形を変えた。

「《破滅の業火（プロメテウス）》！」

私はその魔術の名前を叫ぶ。

すると、それに呼応するように空中に浮かぶ巨大な炎の塊はストレンド目掛けて落下を開始した。

魔術のその大きさから避けようにももう間に合わないだろう。

『空間移動』をしようにも距離的にも時間的にもそれは不可能だ。

――それなのに。

迫り来る死の炎にストレンドは怯えるどころか再度不敵な笑みを浮かべて。

「――《裁きの光（ジャッジライト）》！」

振り上げられる漆黒の剣――そこから放たれた光の斬撃は巨大な炎の球体に向かって直進する。

その炎の塊にぶつかった瞬間、光の斬撃はそれに弾き返されてバラバラに砕け散った。

「ほう――ならば」

依然として不敵な笑みを浮かべたままのストレンドの手にある漆黒の剣の刀身が――二つに割れる。

いや、二つに分裂して左右に分かれたというのが妥当か。

剣の鍔（つば）の横幅ギリギリまで分かれたその漆黒の刀身の狭間が光を放ち――その狭間から更に大きな光の刃が飛び出してくる。

その身の丈ほどの大きさへと変化した『ミスティルテイン』をストレンドは振り上げて。

再度、斬撃を繰り出すと共に――その魔術を再び迫り来る巨大な炎の塊に向けて解き放った。

「《裁きの光（ジャッジライト）》！」

空中の巨大な炎の塊を劈く光の斬撃。

真っ二つに斬り裂かれた炎の塊はゆっくりと左右に割れて――大爆発を起こした。

「……」

周囲に立ち込める爆煙――その隙間から見えるその空中に佇むストレンドを私は見据える。

「……ふう。まさか、お前に“この形態”を見せる事になるとはな」

変形した漆黒の剣――『ミスティルテイン』を見てそんな事を言うストレンド。

「あわよくば、お前の“本当の力”を見る事が出来ると思ったのだが――しかし、ここまで追い詰められては無理のようだ。どうやら、ここが退き時らしい」

二つに分かれた漆黒の剣が閉じる――その間にある光の刀身は押し潰されるように消滅した。

「勝手にお前に決闘を申し込んでいて何だが、俺はここで退かせて貰う。次に会い見(まみ)える時はお前の本当の力と対峙できる事を――心待ちにしているぞ」

その言葉と共にストレンドは『空間移動』でその場から景色に吸い込まれるようにして消えた。

「……」

私は何も言えなかった。

何も言葉を返す事が出来なかった。

私はただ――空中に漂う砂塵の中で何の言葉も発しないまま。

その空中に浮かんだまま――暫しの間、無言で俯いているだけなのであった。

◆◆◆

「ウリア！」

「ウリアちゃん！」

私がフラフラとした足取りで道を歩いていると――不意に私を呼ぶ声がして、私は顔を上げる。

すると、前方から買い物袋を手に提げた秀と霧歌がこちらに向かって走って来るのが見えた。

そこで、私は漸く気付く。

ああ――そうか。

気付けば、私は秀の家の近くまで辿り着いていたのか。

「……どうしたの？　二人とも」

「それはこっちの台詞だ！　この馬鹿！」

「そうよ、ウリアちゃん！　どうしたのか聞きたいのはこっちなんだから！」

秀はいつに無く血相を変えて――霧歌は今にも泣きそうな声で私に向かってそう声を上げてきた。

「お前、未来からやってきた奴と今の今まで戦っていたんだろ!?　そうなんだな!?」

「ウリアちゃん、私本当に心配したんだから……！　秀ちゃんの家の前まで戻って来た時点で向こうの森の方で何か爆発みたいな音が聞こえて来たから……私、またウリアちゃんが誰かと戦ってるんだって、そう思って……！」

決闘？

「……だから、どうしたのよ、二人とも。秀はそんなに怒って、霧歌はそんなに泣きそうな顔で……私がこうして帰って来ているのはその戦った敵に勝った――いや、今回は買っていないけれど、そういう事なんだから、それはそれでそこまで言わなくても――」

「そこまで言うに決まってるだろ！　この馬鹿！」

私の言葉を遮って――私の声を遮って秀は再度そう声を荒げて。

私に向かって、こう言った。

「勝敗が全てじゃない、お前が帰って来たから良いなんて事は決して無い！　お前が帰って来るか否か以前に――こっちはお前の事を物凄く心配したんだぞ！」

「……心配、してくれたの？　私の事を？」

「当たり前だろ！　今日だって、お前が散歩に出掛ける前にそう言ったばかりだろうが！」

「……ああ、そういえば」

そうだったわね――と私は俯き加減で呟く。

「……ゴメン、秀。でも、敵から喧嘩を売られちゃったら、それはもう買うしかないって、そう思っちゃって」

「……いや、俺こそ悪い。お前の気持ちも考えないで怒鳴っちまった。お前は俺の為に戦ってくれてた……そうなんだな？」

「うん、そう。この前、秀を襲って来た人――今回は、勝負は着かなかったけれど」

「そっか……頑張ったな、ウリア。俺の為に……今日も、ありがとな」

そう言って、秀は微笑みながら私の頭の上に手を置いてくれた。

その行動によって私は頬が紅潮するのを感じ取る。

その秀のさり気無い行動が――何だか嬉しくて、何だか恥ずかしくて。

思わず笑顔になるのを――抑える事が出来なくて。

「……ウリアぢゃん」

すると、私は何か私の事を変な呼び方をしてきたその人物を――霧歌の方を振り向く。

私が霧歌の方を向いた時には既に霧歌は頬に大量の涙を垂れ流していて――。

「ウリアぢゃ――――――んっ！」

「うわっ！」

私は不意にこちらに跳んできた霧歌の抱擁を躱す事が出来なかった。

霧歌の大きな胸に埋まる私の顔。

何だか、このシチュエーションは秀がとても喜びそうだなぁ、とか。

霧歌私と違って胸大きいなぁ、とか。

そんな事を考えていたら――何だか、とても複雑な気分になった。

いや、霧歌は私の事を心配して私を抱き締めてくれたのだろうけれど。

何かその……素直に、その抱擁を私は喜ぶ事が出来なかった。

私の心が捻くれているのだろうか？

「ウリアぢゃん……本当に、本当に無事で良かったぁ……！」

「き、霧歌……苦しいよ」

「もう嫌！　苦しくても絶対に離して上げない！　もうウリアちゃんを家に連れて帰って私の部屋のぬいぐるみコレクションの一つにする！」

「霧歌、好意は有り難いけれど、その気持ちは受け取れないわ」

ていうか、霧歌の部屋ってぬいぐるみコレクションがあるんだ。

そんな事を私は思う。

もしかしたら――ていうか、おそらく確実に秀も私と同じ事を思ったに違いない。

「……それじゃあ、無事にウリアも帰って来た事だし。ちょっと遅いけれど、今から昼飯の準備をするか？」

「うん……そうだね、秀ちゃん」

未だに涙ぐみながら漸く私をその谷間から解放してくれる霧歌。

「ほら、ウリア、行こうぜ。今日の昼飯は霧歌お手製のオムライスだってさ」

「オムライス？」

「ああ、お前は知らないのか。でもまぁ、知らなくても心配するな。初めて食べたとしても絶対に万人が気に入るかなり美味しい食べ物だからな」

「味って作る人によって変わるものじゃないの？」

「何だ、お前霧歌の料理の腕を疑っているのか？　一応言っておくけれど、霧歌の料理の腕は抜群だぞ？」

「……そっか」

それならちょっと楽しみ、かな。

「それじゃあ……私、今から料理の下準備を始めて来るね」

「ああ、うん、解った霧歌――って、いい加減お前は泣き止めよな？」

「これは違うの。玉ねぎを切っていたら自然と涙が出て来て……」

「まだ玉ねぎを切るどころか料理さえ始めてないじゃねーか」

そんな秀のツッコミを受けながら霧歌は秀の家の中へと消えて行く。

――そして。

「ほら、俺達も行こうぜ」

そう言って――秀は私に向かって左手を差し出してきた。

「俺達も何か手伝える事があるかもしれないし」

「ああ、うん――」

――そう言って、私は秀の左手を握ろうとして。

（今の毎日は――楽しいだろう？）

「……」

不意に頭の中に響き渡ったストレンドのその言葉に――握ろうとしたその手を止める。

そして――私は秀にこう問いかけた。

ふと、頭の中に浮かんだとある疑問を――口に出してみた。

決闘？

「……ねぇ、秀？」

「ん？　どうした、ウリア」

「私って……ここに居ても、いいのかな？」

「あん？」

「私って……この家に、秀や霧歌と一緒に居ても……いいのかな？」

そして――そんな私の質問に秀はこう答えたのだった。

「お前って案外馬鹿なんだな」

私は秀の脹脛（ふくらはぎ）を蹴った。

「もう！　何よ！　秀こそ馬鹿なんじゃないの！？　私がこんなに真剣に質問しているのに……何よ、何なのよ！」

「い、いや、ゴメン……そういうつもりで言った訳じゃなかったんだよ、本当に」

私の前でその場に蹲りながら消え入りそうな声を上げる秀。

「つーか……何でそんな事、聞いて来るんだよ、お前」

「べ、別に……良いでしょ、そんな事」

私の前で周囲は痛みに体を震わせながらその場に立ち上がる。
その目の端には若干涙が浮かんでいるように見えた。
「い、良いから、早く答えてよ。こんなに真剣に私が悩んでいるんだから、しっかりと考えてから、出来るだけ早く答えてよ」
「答えてよって――そんなもの、考えるまでもねーよ」
そして――秀は平然とした表情で私にこう答えるのだった。
「居て良いに決まってるだろ」
「……ほ、本当に？」
「ていうか、この家以外にお前に行き先なんか無いんだし――それに別に気にしなくても良いんだぜ？　俺の生活費とかそういう事をお前は気にしているのかも知れないが、別に気にしなくても構わないって、お前は俺の命を護ってくれているんだから」
お前は俺にとって必要なんだから――と秀は言った。
そう言って、くれた。
私に向かって――そう言ってくれた。
それが――その秀の何気ない言葉が。
私は本当に――本当に。

「……ん？　どうかしたのか？　ウリア？」

「……ううん、何でも無い」

そう言って――私は目元を指先で拭ってから。

顔を上げると共に秀に向かって満面の笑みを見せたのだった。

「……ありがとね、秀」

いつかは壊れてしまうこの日常。

いつかは終わりを迎えてしまう――この平和な日々。

いつか遠くない未来、きっと今のようなこんな風に――秀や霧歌と笑い合えるような、そんな平和な日々は存在していないのかもしれないけれど。

――それでも。

今は、このままで良いと私は思う。

いつか終わりを迎えてしまうのなら――いつか壊れてしまうのなら。

それならば、今は――今だけは、こんな平和な日々を味わっていても多分罰は当たらないだろう。

いつかは秀に“あの事”を打ち明けなければならないだろうけれど。

それはきっと――今では、ない。

平穏な日常を壊す時はきっと今ではないから。

だから――だから私は差し出された秀の左手を握り返す。

私はこれから秀と一緒に霧歌の料理を手伝いに行く。

平穏な日々は――とても詰まらないけれど、とても楽しい。

こんな平和な日々がいつまでも続けばいいのに――なんて。

未来から来た私が言っても――何の意味も無いのだろうけど。

8月3日

8月3日――。

この日、俺はウリアや霧歌と共に図書館へと足を運んでいた。

「秀ちゃんは、お弁当の中では何が好き？」

「あん？」

俺の正面の席に座る霧歌が不意にそんな事を問いかけて来た。

俺はノートから顔を上げて正面を見る――そこに居る霧歌は先ほどからずっと読んでいる本に視線を落としたままだった。

ちなみに、俺の隣では今ウリアが何か小説を読み耽（ふけ）っている。

いつもテレビだとか、漫画だとかを観て読んだりしている――いわゆる、現代っ子の雰囲気を醸し出しているウリア。

そんなウリアには悪いけれど、小説を読み耽っているウリアというのは――何だか、違和感を覚えざるを得なかった。

まぁ、未来からやってきたウリアが現代っ子の雰囲気を醸し出しているのもどうかとは思うが。

更に余談を語っておけば、今のウリアは霧歌がチョイスした姉さんの洋服を着ていた。

理由は当然――あの戦闘服では図書館の人の目を引いてしまうからである。

でもまぁ、そのウリアの“折り畳まれた”洋服――もとい、防具の塊はちゃんと持って来てはいるので、万が一俺が命を狙われたとしても大丈夫と言えば大丈夫なのだけれど。

「……えっと、それで何て？　霧歌？」

「聞いてなかったの？　こんなに近くに居たのに？」

「いや、ちょっと心の声で状況説明をしていたら霧歌が俺に何て言ったのかを忘れちまってさ」

「さり気無くメタな発言を織り交ぜて来るよね。まぁ、別に良いけれど」

「だからね？」と霧歌は読んでいる本のページを一枚捲（めく）る。

ちなみに、今の会話を交わしている間も霧歌はずっと本に視線を落としたままであった。

「秀ちゃんは、お弁当の中では何が好き？」

「女子のお手製弁当だな」

「いや、そういう事を聞いている訳じゃなくて……」

「女子のお手製弁当は母さんのお手製弁当に匹敵する」

「いや、だからそういう事じゃなくて……ていうか、それじゃあ、秀ちゃんのお母さん立場が無いよ」

流石にその俺の言葉には顔を上げざるを得なかったようで――霧歌は俺に苦笑を見せた。

「だからね？　お弁当の中身の話だよ、中身」

「中身？　それはつまり……お弁当の中に入っているメジャーなおかずの中で何が好きだっていう事か？」

「うーん。まぁ、そういう事でもある、かな？　本当は、海苔弁当とか、唐揚弁当とか、チキン南蛮弁当とか……そういう、市販されているお弁当の中で、何か好きなのかって聞いてみたつもりだったんだけど」

「俺がお弁当のおかずで気に入っているのは……何だろう、ミートボールかな？　あれは最強だな。ちなみに、次に好きなのはソーセージだ」

「それじゃあ、市販されているお弁当の中では？」

「そうだなぁ……唐揚弁当、かな。あのレモン汁と塩コショウ、それに唐揚の肉汁が奏でるハーモニーが堪らないよ」

「……秀ちゃん、今何か良い事を言おうとして失敗したでしょ？」

「失敗!?　今失敗したのか、俺って!?」

「しーっ」

そう声を上げた俺に霧歌は唇に人差し指を当ててこちらに顔を近付けて来た。

「あ……ああ、ゴメン」

そうだった。

そういえば、ここが図書館だという事をすっかり忘れていたぜ。

「静かに、ね。秀ちゃん」

「お、おう……悪い」

「そして、一応付け加えておくけれど。さっきの秀ちゃんの言葉は絶対に失敗してたよ？」

「……ああ、俺に現実を見せ付けてくれてありがとう」

かの有名なグルメリポーター張りの上手い事を言ったつもりだったのだが……。

……。

「……そういえば、あの有名なグルメリポーターは美味いものを食べて上手い事を言っているんだな」

「なるほど。美味しいの“美味い”と上手の方の“上手い”を掛けた高度な言葉だね。流石は秀ちゃん、ちょっと見直しちゃったよ」

「霧歌、俺がさり気無く思い付いたその言葉を事細かに解析するんじゃない。何か恥ずかしいだろうが」

「えっ？　何が？」

「……いや、何でも無い」

こいつはこいつできっと悪気は無いんだろうなぁ……。

いや、悪気が無いからこそ逆に怖いのだけれど。

「……それで？　秀ちゃんはレモン汁と塩コショウ、それに加えて唐揚の肉汁のハーモニーという点から、唐揚弁当がお気に入りなんだね？」

「霧歌、お前本当は態と言っているんじゃないだろうな」

「私は……うん、角煮弁当が好きかな。豚の角煮が入っているヤツ」

「えっ？　そんな弁当あるのか？」

「うん、あると思うよ？　この前アニメでヒロインのキャラが食べている所を観たから」

「つーか、お前アニメとか観てるんだな。意外と言うか何と言うか……それに、お前の話からするとそれって深夜アニメだよな？」

「アニメを観るくらい、教養の一つだよ？」

「いや、それは教養の一つではないだろう」

「アニメ――主に、深夜アニメは日本を代表する文化の一つだよ？」

「いや……まぁ、それは否定しないけどさ。最近もとある軽音部の深夜アニメが社会現象になったばかりだし」

「第２期の最終回は泣けたよねぇ……今ここでタイトルを叫んじゃってもいいかな？」

「止めろ。物語的にも場所的にも、ここでタイトルを叫ぶのは止めろ」

閑話休題。

8月3日？

「……それで、霧歌。弁当と言えば、少し気になる事があるんだけど」

「ん？　何？」

「弁当って、メインのおかずの下にスパゲッティが敷かれているだろ？」

「うん、そうだね」

「そのスパゲッティって……何で下に敷かれているんだ？」

「うーん……えっとねぇ。確か、そのメインのおかずの油や水分で容器がふやけてしまうのを防ぐ為――だったかな？　ちゃんとした理由は解らないけれど、他にも見栄えの為だとか、お客さんにお得感を感じさせる為だとか……色々と理由はあるかな」

「ふーん、そうだったのか。いや、何か気になってさ、あのスパゲッティの存在が。メインの下にどうしてスパゲッティが入っていたのか……そうだったんだな、そんな理由があったのか」

「まぁ、私も殆ど憶測な部分もあるし、どこかでそんな理由を見掛けたような気がしたから、間違っているかも知れないけどね」

「いや、良いよ。ありがとな、霧歌。お陰で俺の中の疑問の９０パーセントが解消されたよ」

「ていうか、お弁当のスパゲッティに疑問の9割を消費させていたんだね……逆に残りの1割の疑問が何なのか気になるよ」

「残りの1割？　それなら毎日同じテーマで変わっているよ」

「そうなの？　それは一体どんな疑問なの？」

「霧歌の着ている下着の色だ」

「ふーん、そうなんだぁ……。そうだ、ちょっと広辞苑を借りて来ようかな。ねぇ、知ってる？　秀ちゃん？　広辞苑って人を殺せる鈍器にも成り得るんだよ？」

「俺が悪かった。だから殺さないでくれ、お願いだから」

俺は図書館の机に両手を着いて座った状態の土下座を霧歌に見せた。

死ぬのは嫌だ。

これはこの世で生を授かった全ての人間に当て嵌まる言葉だと思う。

……いや、今のは全体的に俺の方が悪かった訳なのだけれど。

「しかし、こういう日も中々良いものだな」

「えっ？」

「いや、だからさ。休日にこうやって皆で図書館に来て、宿題をすると言うのは――中々風情があっていいな、って」

「そうだね。図書館で皆と宿題をやるというのは、中々風情があって、趣があって、良いものだよね」

「何か、一人で図書館に来て宿題をやる分には余り詰まらないと思うけれど。皆と――友達と一緒に宿題とか、勉強とかをする分には本当に楽しく思えるな、何だか」

「友達と一緒にやる――って言うのが何だか楽しく思えちゃうんだよね。ていうか、そういう事を秀ちゃんが思えるようになったっていうのは、秀ちゃんが少なからず成長した――って事なのかな？」

「まぁな。俺を褒めるか、俺の肩を後で揉んでくれても構わないぜ？」

「褒めるのはともかく、どうして秀ちゃんは私からのマッサージを御所望なのかな？」

「女子からマッサージをされるというシチュエーションは中々、日本男児の夢と言うか、希望と言うか、希望の星と言うか」

「いや、希望の星ではないでしょう。ていうか、秀ちゃんの勝手な願望を日本男児全てが願っているように語らないで」

「日本男児と言うより、全世界の男の頭の中って大概がそういうものだぜ？　頭を開けたら、中にある脳味噌は大概がバラ色になっているものだぜ？」

「うん、解った。とりあえず、秀ちゃんの頭の中が常にバラ色だっていう事が解った」

「まぁ、俺の脳味噌は常にピンク色だけどな」

「秀ちゃん、それ自慢げに言う事じゃないから」

「そして、今日の霧歌の下着の色はピンク色だ」

「……」

「……えっ？」

「……わ、私……ちょっと、別の本取って来るね？」

「えっ？　えっ、ええっ？」

徐に椅子から立ち上がった霧歌は俺に視線を合わせないで目を伏せつつその場から立ち去ってしまった。

そして――俺は幾多にも並んだ本棚の中に消えて行く霧歌の背中を見据える俺。

「……ていうか、えっ、マジで？」

まさか……当たってしまったのだろうか？

えっ、マジで？

今日の霧歌の……その、色って、ピンクなのか？

「……」

何だか、折角的中させたのにも関わらず、嬉しい反面、複雑な気分となってしまう俺なのであった。

◆◆◆

１０分経っても、霧歌は帰って来る事は無かった。

やっぱり当たったんだろうなぁ……何だか悪い事をした。

後でジュースでも奢ってやろう。

そんな事を思いながら俺は隣のウリアの方へと視線を向ける。

ウリアは未だ何か小説を読み耽っているようだった。

普段、自堕落な生活を送っているウリアが……そこまで小説が好きでも無さそうなウリアがここまで集中するほどの小説なのか。

「……」

何を読んでいるのだろうか。

物凄く気になる。

8月3日？

「……なぁ、ウリア？」

「……うん」

「お前、それ何読んでるんだ？」

「……うん」

ウリアはその小説のページを一枚捲る。

「……いや、うん、じゃなくてさ。お前、それ何の本を読んでいるんだ？」

「……うん」

「……オイ」

どうやら、本の内容に集中し過ぎて俺の言葉が耳に届いていないようだ。

「……オイ、ウリア」

「……うん」

「お前のフルネームは何だ？」

「……うん」

「お前の好きなカップラーメンはカレーか？」

「……うん」

「今日、帰ったらお前のあの戦闘服の六角形のボタンを押してもいいか？」

「却下」

「何でそこだけ普通の返答なんだよ」

聞こえているのか聞こえていないのかどっちなんだ。

「……もう、何なのよ、さっきから」

鬱陶しそうにこちらを振り返って来るウリア。

「私は本を読んでいるのよ。今、本当に面白い所なんだから、邪魔しないで」

「あ、ああ、そうなのか……悪いな、ウリア」

「本当よ……喋って来なくなるまで態と無視していたのに」

「オイ、お前は今とんでもない事を口走りやがったな？」

「さーて、読書読書、っと」

そう言って、あからさまに俺の言葉を無視したウリアは再度小説に

視線を落とした。

「……この野郎。後で帰ったらお前の胸を揉んでやるからな」

「何を大々的に堂々とセクハラ的な発言を私に宣言しちゃっているのよ。脅しのつもり？」

「いや、マッサージのつもりだ」

「マッサージで人の胸を揉むなんて変態の思想じゃない、むしろ秀は変態じゃない」

「誰が変態だ。俺はだな、お前の胸を好意で揉もうと――いや、日頃疲れているであろうお前の為に胸を揉もうと思ってだな」

「今好意って完全に言っちゃったわよね？　ていうか、私は日頃、秀を護っていて別に疲れてなんかいないし、例え疲れていたとしても胸なんか疲れないから」

「それは解らないだろう。胸だって体の一部なんだから疲れているかも知れないじゃないか。どれ、ちょっと揉ませてみろ。凝っているかもしれないぞ？」

「何を馬鹿な事を言って――って、何を本当に揉もうとしているのよ！」

「痛ってえ！」

ウリアの奴、読んでいる本で俺が延ばした右手を挟んできやがった！

つーか、何だその高度な攻撃方法は！

高度に加えて陰湿だよ！

地味に痛かったわ！

「ほらほら二人とも？　図書館で騒いじゃ駄目だよ？」

すると、そんな声と共に霧歌が漸く俺達のもとに戻って来た。

「もう、何があったのよ。まぁ、どうせウリアちゃんと二人きりになった秀ちゃんがウリアちゃんに厭らしい事をしようとしたか、もしくは実行してしまったんだろうけど」

「……お前、もしかしてエスパーか何かなのか？」

「否定はしないんだね、秀ちゃん。それは逆に潔くて私は好きだよ？」

「えっ？　告白？」

「違う。それに、どうせ告白をするならもう少しちゃんとやるわよ」

「それはそうか……時に霧歌、お前胸とか凝っていないか？」

「秀ちゃん、マッサージと称して厭らしい事を実行しようとしないの。ていうか、今の秀ちゃんの言葉で秀ちゃんがウリアちゃんに何をしようとしたのか解ったわ」

「……お前、もしかしてエスパーか何かなのか？」

「また否定はしないんだね、秀ちゃん。それはやっぱり逆に潔くて私は好きだよ？」

「えっ？　告白――」

「だから違うってば」

「もう」と新たに本棚から取ってきた本を机の上に置きながら椅子に座る。

「秀ちゃんは本当にもう……相変わらずなんだから」

「俺はいつになっても昔と変わらない人間なのさ」

「変わらないのは良い事かも知れないけれど、そういう所だけは――そういう所だけでもいいから変わって欲しかったなぁ」

「……ところで、霧歌」

「ん？　何？」

「俺は今日来てから一時間ほどずっと宿題をやっている訳だが……霧歌、お前は宿題をやらないのか？」

「私、もう終わったから」

「マジかよ。お前、まだ夏休みが始まってから一週間しか経っていないんだが」

「前にも言ったでしょ？　夏休みの初日から一週間以内に宿題を全て終わらせてしまったら――後の休みはかなり楽に過ごせる、って」

「それは確かにそうだけど……そう言いながら、お前はまだ俺の宿題に付き合っているじゃないか」

「秀ちゃんの宿題には付き合っているけれどね、ちょっと読みたい本もあったから……今日はそのついで」

「ついで、ねぇ……ついでで俺の宿題に付き合ってくれてありがとな、霧歌」

「……本当に、秀ちゃんは鈍感だよねぇ」

「あん？　何がだよ」

「何でも無いわよ、何でも……。気にしないで」

そう言って――霧歌は新しく取ってきた本を開くとそれを読み始める。

「しかし……もう霧歌は宿題が終わったのか。本当に凄いな――いや、俺視点で言えばだけどさ」

「そう？　それほどでもないよ……本当なら、五日くらいで終わっていたし」

「お前はまだ本気を出していないと言うのか」

「本気を出したら三日で終わるわ」

「さっきのも本気じゃなかったのかよ」

大声で叫びたいのを何とか堪えながら俺は霧歌に向かってツッコミを入れる。

8月3日？

「ていうか、三日ねぇ……そこまで宿題をやる速度が速いのなら、俺の宿題もついでにやってくれたら大助かりなんだけどなぁ」

「やって上げても良いけど……」

「えっ、いいの？」

「多分、先生にバレたら大変な事になるだろうから。止めた方が良いと思うよ？」

「ああ……そういえば、俺達のクラス担当の数学教師はそういう事を絶対に許さないタイプの人間だったような」

きっと、宿題を霧歌がやった事がバレてしまったら、俺だけに限らず、霧歌までもその数学教師の餌食になってしまうだろう。

多分、夏休みに出した倍の宿題をまた一週間以内にやって来いとか——そんな罰を受けそうで怖い。

霧歌ならそんなものはそれこそ三日で終わらせてしまうのだろうが、俺には宿題だけでも大変なのに数学の宿題が倍になるなんて即死級の罰である。

つーか、死ぬわ。

冗談抜きで死んでしまうわ。

「仕方ない……それなら、宿題を霧歌にやってもらう作戦は止めておくか」

「うん、それが得策だね。それに、そんな事がバレたら学級委員長に怒られちゃうだろうし」

「ああ……それも嫌だな。あいつ、俺に対して何だかやけに口五月蠅いんだよなぁ……。つーか、俺以外のクラスメイトを怒っている姿を見た事が無い」

「そうなんだよねぇ……放課後も居残って二人きりで秀ちゃんに説教するとかなったら私も困るし……」

「そうだなぁ――って、あん？　何でお前が困るんだよ、霧歌？」

「さぁね。とにかく、架凪呀さんに怒られない為にも、ちゃんと宿題を夏休みの間に終わらせた方が良いと思うよ？　まぁ、夏休みの宿題はその期間中に終わらせるのがセオリーというものだけれど」

「そうだなぁ……。なぁ、霧歌」

「何？　宿題なら写させないからね？」

「いや、もうそれは不可能だと解ったから諦めた」

「可能だったら諦めてなかったんだ……」

「それはさて置いて……俺って、もしかして架凪呀から嫌われてるのかな？」

「えっ？　どうして？」

「いや、さっきも言ったけれど、架凪呀ってやけに俺の事を集中的に怒って来るんだよな。俺が授業で居眠りをしていた時も、俺が授業で宿題を忘れた時も……まぁ、悪い事をしているのは俺であって、怒られる事には異議は無いんだけどさ。何かこう……本当に何となくだけど、俺ばかり集中的に怒っているような、そんな感じがするんだよ」

「うーん……それはその」

「何て言えば良いのかな……」と難しい表情で腕組みをする霧歌。

その腕組みによって霧歌のただでさえ大きなその胸が強調されて――いや、何でも無い。

「何か解っているような口ぶりだな、霧歌」

「うーん、何となく、架凪呀さんの真意は解らないでも無いんだけど……それをどうやって秀ちゃんに説明したらいいのか解らないのよね。でも、少なくとも秀ちゃんは架凪呀さんから嫌われてはいないと思うよ？」

「何でそんな事が解るんだよ」

「だって、秀ちゃんと架凪呀さんって席が隣同士でしょ？　時々だけど、秀ちゃんが忘れ物した時とかも架凪呀さんは秀ちゃんと席をくっ付けて教科書を見せてくれるし、それに、架凪呀さんが忘れ物をした時だって、秀ちゃんも普通に架凪呀さんと席をくっ付けて、教科書を見せているでしょ？」

本当に嫌われているなら秀ちゃんにそんな事させないわよ――とそれが霧歌の言い分であった。

「……まぁ、確かにそう言われてみればそうなのかも知れないな」

俺は納得したように呟く。

一度、架凪呀に消しゴムを貸してやった時、彼女は何だか顔をほんのりと赤くしていた事があった。

熱でもあるのだろうかと思い、俺がその事を架凪呀に尋ねると――。

（べ、別に、赤くなってなんかいないわよ！　アンタの見間違いなんじゃないの！？）

――と、怒鳴られた事があったっけ。

あの時、どうして架凪呀はあんな事を言ったのだろうか。

未だに考えてもよく解らないな……。

「秀ちゃん、ボーっとしていないで、さっさと宿題を終わらせる」

「へいへい……解ったよ」

まぁ……何はともあれ。

夏休みが明けて早々に数学教師にも、学級委員長にも怒られなくない俺はとりあえず先ほどから手が止まりっ放しの宿題に再度手を付

け始めるのであった。

◆　◆　◆

奇跡が、起こった。

結局、昼の十二時から午後五時までずっと宿題をやっていた俺なのだが。

何と、数学の宿題を全て終わらせる事が出来たのである。

これを奇跡と呼ばずに何と呼ぼうか。

いや、五時間掛ければそれは流石に終わるだろうとか思うかもしれないけれど。

俺だぞ？

自分で言うのも何だけれど、こんな低学歴を擬人化させたようなこの俺が五時間で数学の宿題を終わらせる事が出来たんだぞ？

以前から少しずつやっていたとは言え、これはまさに奇跡に近い。

いや、ていうかもう奇跡だ。

そんな奇跡の余韻に浸りながら――俺はウリアや霧歌と共に図書館からの帰路を歩いていた。

その帰路である住宅街の通路は茜色に染まり――俺の好みである幻想的な空間へと生まれ変わっていた。

「凄いじゃない、秀ちゃん」

夕陽の光に照らされながら霧歌は俺の隣で笑顔と共にそう言ってくれた。

「まさかとは思ったけれど……本当に宿題を終わらせてしまうなんて」

「いや、本当に自分でも驚いてるよ。俺の中にまさか……こんな力が眠っていたなんて」

「そんな問題の束くらい五時間もあれば誰だって解けるでしょ」

「ウリア、お前は黙ってろ」

俺の隣に居る霧歌の更に隣で呆れ顔と共に言うウリア。

8月3日？

「ていうか、秀」

「何だよ、ウリア」

「明日も今の所に行かない？」

「今の所って――ああ、図書館の事か？　何だよ、そんなに本が読みたくなったのか？」

「うん、まぁ、そんな所、かな。今日私が読んでた本のシリーズなんだけど、全部読み切れなくて……だから、明日も行きたいなぁ、なんて」

そう思ったのよ――とウリア。

「いや、そこまで読みたい本があったなら、借りてくれれば良かったじゃないか。どうして借りて来なかったんだ？」

「えっ？　あの“としょかん”って場所、本を借りる事が出来たの？」

「……お前、次から図書館に行く時はそのシステムをちゃんと理解した上で行くようにしろよな」

俺は呆れ顔でキョトンとした表情を見せているウリアにツッコミを入れる。

その間に居る霧歌も半ば呆れたような苦笑を浮かべていた。

「……それじゃあ、私はこっちだから」

帰路の途中に存在するとある分岐点に差し掛かった所で不意に霧歌がそんな事を言った。

「おう、またな、霧歌。今日は宿題を見てくれてありがとな」

「またね、霧歌」

「うん、秀ちゃん、ウリアちゃん、またね」

そう笑顔と共にそう言って――霧歌はこちらに背を向けたまま自身の帰路を歩き出した。

「……さて、俺達も早く帰るとするか」

「そうだねぇ……早く帰って“しーふーどー”を食べないと」

「まだ時間的に早いから作らねーよ」

そして――俺とウリアもそんな会話を交わしながら家に向かって帰路を再び歩き出すのだった。

◆◆◆

「……」

夜――夕食も食べ終えて、風呂にも入り終わった俺は部屋の机に着いて、その“白い欠片”を無言のままただ呆然と見据えていた。

「……俺が今から19年後に魔術を復活させて……それで、この欠片が魔術を復活させる為の鍵、か」

「何を今更そんな事を感慨深そうに呟いているのよ」

俺のベッドで寝転んで漫画を読みながらウリアはそんな事を言ってきた。

ちなみに、格好はまさかのセーラー服である。

何やら、以前この格好で寝てからと言うもの――体中を服の隙間から風が通り抜ける涼しげな感じが気に入ったらしい。

部屋の中で高校生でも無いのにセーラー服を着るというのは些かどうかと思うが……。

まぁ、俺的には万々歳なので特に何も言っていない。

ていうか、俺この光景を誰かに見られたら絶対に勘違いされるよな……悪い意味で。

同年代の女子と同じ屋根の下で寝食を共にしているだけでも拙いのに。

“寝”の方に至っては屋根の下どころか一緒の部屋である。

……まぁ。

同年代の女子と一緒に寝られるというシチュエーションはそうそう味わえるものではないと思うので、その為ならば俺は別に勘違いされても平気だけどな！

……。

……いや、何でも無い。

俺は何も言っていない。

何が言っていたとすればそれは単なる俺の戯言だから忘れてくれると有難い。

「……何よ」

俺がそんな事を思っているとウリアが漫画からこちらに顔を向けてこう言ってきた。

「まさか、また自分が魔術を復活させた事に実感が湧かないとか――そんな事を言い始めるんじゃないでしょうね」

「いや、そういう訳じゃないけど」

「それじゃあ、どうしてそんな事を呟いてみた訳？」

「それは……何となくだよ、何となく。理由なんて無い」

「そう。それなら良いんだけど」

「……ていうか、ウリアさ。何気無く――と言うか、さり気無く俺のベッドの上に居るけど、お前にはちゃんと寝る場所があるだろ？　布団という名の」

「ああ、これ？」

そう言って――ウリアはベッドの上からそのすぐ下の床の上に敷かれている布団一式を見下ろして言う。

「これ、秀が自分で寝る為に運んできたものじゃなかったの？」

「そんな訳ないだろ。俺が厚意を以てお前の為に布団を一式運んで来てやったんだろうが。それもお前がこの家にやってきたすぐ後に」

「ゴメン、昔の事だから忘れちゃった」

「一週間前の出来事を昔とか言って誤魔化してんじゃねーよ」

「私、過去じゃなくて未来に生きる女だから、未来人だけに」

「誰が上手い事を言えと言った！」

上手い事を言った事は認めるが、得意気な顔を止めろ！

何だかイラッとする！

「ほら、漫画を読むならベッドの上じゃなくて布団の中で読め。さもないと、俺はお前を襲うぞ」

「襲ってみなさいよ――襲えるものならね。返り討ちにして上げるわ」

「言ったな、ウリア……言っておくが、俺は女子を襲う時にのみ、攻撃力が５０００ポイントアップするんだ！」

「ご、５０００ポイントですって……！　何よそれ、ゲームエンド級の上昇値じゃない！」

つーか、お前元ネタが解るのかよ。

どこでそんな知識を得ているのだろうか……一般常識は余り知らないくせに。

本当に知識が偏っている未来系魔法少女である。

8月3日？

「まぁ、そういう訳だから。一刻も早くベッドから下りないと俺は本当にお前を襲うぞ。それでも良いのなら――明日の朝、俺と一緒に同じベッドの中で目を覚ましたくないのなら早くベッドから下りろ」

言った後だから言える事だが……我ながら最悪の脅し文句だと思った。

「仕方ないわね……朝起きて最初に飛び込んでくるのが秀の顔だなんて真っ平ご免だし、ここは下りてやりますか」

「最後の最後まで上から目線だな、お前」

しかもさり気無く暴言を放って来るし。

本当に襲ってやろうか、こいつ。

俺はそんな事を思った。

いや、絶対に襲わないけれど。

……いや。

本当だってば。

◆◆◆

――漆黒の闇が、広がっている。

ここはどこなのだろう。

私は一人――闇の中に佇んだままそんな事を思った。

四方八方にはただ果てしない闇が存在している。

前にも、後ろにも、右にも、左にも、上にも、下にも――。

私の周囲は完全に闇によって取り囲まれていた。

――ここは、どこなのだろう。

黒磯の景色を見渡しながら私はそんな事を思った。

すると、不意に漆黒の空に四角い穴が空いた。

いや、正確には“空いた”――と言うよりも、不意に漆黒の空が長方形の形状に白く光ったと言った方が良いのだろうか。

突如瞬いたその光に私は目を細める。

そして――その長方形の光を見上げてみた。

それと同時に長方形の光の中に――まるで映画のスクリーンのように映像が流れ始めた。

そこに映し出されたのはとある荒廃した街並みの風景。

地面の至る所が――紅い炎で“燃えている”。

すると、荒廃した街並みの中から漆黒の巨大な戦車が現れた。

戦車は多大なる轟音と共に“こちら”に向かって砲弾を撃ち込んできた。

その直後――スクリーンの向こう側で何か紅い光を帯びた魔方陣のようなものが出現する。

その魔方陣によって滑空してきた砲弾は防がれ、爆発を起こす。

その瞬間、不意にスクリーンの映像が歪み――その歪みが収まった頃には、その映像は戦車と向かい合わせになっているものではなく、戦車を遥か上空から見下ろしているものとなっていた。

その戦車に向かって段々と映像が近付いて行く。

映像の端にオレンジ色の光の剣の刀身が映った。

映像は戦車に向かって勢い良く降下して――そして。

オレンジ色の剣を戦車に深々と突き立てる。

一瞬にして劫火に包まれる巨大な機体。

映像が戦車から離れた瞬間――その戦車は爆発を起こした。

跡形も無く吹き飛ぶ戦車。

中には人も乗っていただろう――そして、その中に居た人物は、きっと――。

――すると、今度は映像が１８０度後方へと回転する。

それは映像の後方から針のような光線の雨が降り注いできたからだった。

その光の時雨に反応したのだろう――１８０度後ろを振り返ったその先には何人もの武装した黒い軍服を着た人々がこのスクリーン目掛けて光線を連射していた。

しかし――そのスクリーンの前に現れた魔方陣によって、先ほどの戦車の砲撃と同じくその光線は防がれてしまう。

それでも、その人々は攻撃を止めない。

いや――“止める事が出来ない”と言った方が正しいのか。

何故なら、止めてしまえば――“死んでしまうから”。

しかし、止めなくても――自分達がどちらにせよ死んでしまう事など、その武装した人々は承知の上なのだろう。

だからこそ、その人々は攻撃をし続ける。

どうせ死んでしまうのなら。

味方の組織の為に――。

一矢(いっし)報いて、死にたいだろうから。

――そして。

スクリーンの下の端――どうやら地面にまた新たな紅い光を帯びた別の魔方陣が出現したようだ。

その魔方陣から空中へと昇り始める大量の劫火。

スクリーンの視点が斜め上を向く――そこには既に巨大な炎の塊が生成されていた。

それから、スクリーンの視点が先ほどの攻撃をし続けている武装した人々へと向いた――その瞬間。

不意に、スクリーンに振り下ろされた左腕が見えた。

その直後――空中に創造された炎の塊はその武装した人々目掛けて落下した。

スクリーンの全てが劫火によって紅く染まる。

耳を劈くような爆音と吹き抜ける烈風の音がスクリーンからこちらへと溢れ出してくるように私の耳に届いた。

……止めて。

いつの間にか――私は無意識にそう呟いていた。

それでも、映像は止まらない。

スクリーン上ではその映像が流れ続ける。

すると、燃え上がる劫火の中――先ほどの武装した集団の内の一人が瓦礫（がれき）の中から這（は）い出して来るのが見えた。

おそらくは、先ほどの魔術の攻撃を受けた中の生き残りだろう。

血塗れで、大火傷を負ったその人物は膝から瓦礫の上に勢い良く倒れ込んだ。

8月3日？

そして――また映像が動く。

映像はその倒れ込んだ人物の前で停止する。

その映像はその倒れ込んだ人物を覗き込むように下へと向けられた。

そこに倒れていたのは――女性だった。

どうやら、防火服のようなものを着ていたらしく――焼失した服の隙間から見えるその白い背中には火傷どころか傷一つも無かった。

黒い軍服と共に白いブラジャーは焼き切れてしまっていたが。

しかし――背中には火傷は無かったものの、先ほど語ったように、その女性の顔や首には大火傷があった。

炎の光を反射している長い茶髪も――その先端は焼け焦げて真っ黒になってしまっている。

……止めてよ。

私はまた呟く。

今度は知らず知らずの内では無く――自発的に、私は呟く。

何故なら、私はこの後の展開を“知っているから”。

だからこそ――私はそう呟く。

けれど、そのスクリーンは止まる事を知らずに――動く。

スクリーンの左端から不意に出て来た腕がその女性の頭を――髪を、掴んで、その体を引っ張り上げた。

その痛みに顔を顰める女性――微かな呻き声も聞こえてくる。

先ほどの爆発の際に頭を打ったのか――頭からは血が絶えず流れ出ていた。

そして――更にスクリーン上の映像は動きを見せる。

今度はスクリーンの右端から先ほどのオレンジ色の光を放つ剣の刀身が出て来た。

その刀身はゆっくりと持ち上げられて――同じように持ち上げられたその女性の首筋に当てられる。

それから、不意にその光の剣の刀身が映像から姿を消した。

光の剣が振り上げられたのだ。

剣は振り上げられた後に所有者によってどんな動きを見せるのか――この事の顛末を知っている私でなくともそれは解るだろう。

だから、私は剣が振り上げられると同時に殆ど反射的に目を瞑った。

今度こそ何も視えなくなった――果てしない暗闇の向こう側から。

先ほどの女性のものと思われる断末魔の叫びが聞こえて来た。

それから、一瞬にしてその叫び声は無くなり――消えて、後は炎が周囲の瓦礫を燃やす音だけが聞こえて来た。

それ以外には――何も、聞こえなくなった。

……思い出したくない。

これ以上は――見ていられなかった。

見たく、なかった。

……これ以上、思い出したく、ない……！

だって――だって、これは。

これは私の――。

私の――。

◆◆◆

「……」

俺はベッドの上で仰向けに寝転んだまま目の前に掲げたその白い欠片を――呆然と見据えていた。

ちなみに、部屋の電気は既に消されて――ベッドのすぐ下にある布団の中ではウリアが既に寝息を立てている。

ウリアは先ほどからゴソゴソと何やら寝返りを繰り返していた。

眠れないのだろうか。

何か悪い夢でも――見ているのだろうか。

「……」

そして――俺は何故こうも今日になってこの白い欠片の事がこんなにも気になるのか。

何となく――先ほど俺はウリアにはそう答えていたけれど。

まぁ、その答は強ち間違ってはいなくて――本当に理由など解らないのだ。

単にボーっとしたくて俺はこの白い欠片を眺めているのかもしれない。

本当は心の中に何か思う所があって俺はこの白い欠片を眺めているのかもしれない。

しかし――本当の理由は解らない。

どうしてだろう。

どうしてこの欠片の事が――気になってしまうのだろう。

俺がそんな事を考えていた時だった。

不意に――本当に何の前触れも無く。

俺の右手の中にあるその白い欠片が淡い光を灯したのだ。

「！」

俺はハッとしてベッドの上に上半身を咄嗟に起こす。

しかし――その時には既に欠片から光は失われていた。

「……何だったんだ、今のは」

俺は手の中にある欠片を見て言う。

『魔導獣機』がまた転送されたのか――いや、それならばこの欠片はその『魔導獣機』がこの時代から消滅するまでずっと光を放っているはずだ。

――それならば。

今の光は、一体全体何だったのか――。

「思い出したくないっ！」

「うわっ！」

そして、俺は突然訳の解らない言葉を叫びながら起き上ってきたウリアに思わず声を上げてしまった。

8月3日？

つーか、何なんだよお前。

驚かすんじゃねーよ。

「……ど、どうした、ウリア？」

俺はまだ驚愕によって高鳴る心臓の鼓動を感じながら冷や汗と共にウリアにそう問いかける。

「……」

すると――ウリアは無言のまま呆然とこちらを振り返って来て。

「……はぁ」

――と、安堵の息をついた。

「……う、ウリア？」

「何だ……夢、か」

「夢？　何か悪い夢でも見たのか？」

「えっ？　あっ、いや、その……」

「正直に言えよ。気になるだろうが、心配にもなるし。話してみろよ」

「え、えーっと……ね？」

そう言って――ウリアは苦笑と共に人差し指を立ててこう言ったのだった。

「か、カレーのカップラーメンに追い駆けられる夢を見た……」

「お前どんだけカレーを嫌ってるんだよ！」

深夜にも関わらず俺は大声でウリアにそうツッコミを入れてしまった。

いや、でも、だってさぁ。

カレーは本当に美味しいんだぜ？

本当なんだぜ？

「ていうか、秀の方こそ何でこんな時間に起きてるのよ」

「えっ？　いや、その、それは、だな……」

「何よ、気になるじゃないの。正直に言いなさいよ」

「……え、えっと」

……えっと。

「……ぜ、全世界の人間の性別が全て男子になるという悍（おぞ）ましい夢

を見てしまったんだ」

「なるほど……それは本当に色んな意味で悍ましいわね」

むさ苦しい夢だわ――と呆れ顔で言うウリア。

「ああ、本当に末恐ろしい夢だったよ。この世界に女子が居ないなんて、俺にとっては生きる目標が無くなったも同然だからな」

「ああ、なるほど、秀にとってはそっちの意味で悍ましいのね」

「何だよ、他に何か悍ましく思う理由があるとでも？」

「いや、何でも無いわよ……そうね、秀が眠れない理由がそんな事で安心したわ」

「そんな事とか言うな、俺にとっては死活問題だ。……ていうか、お前の方こそ大丈夫なのか？」

「……うん」

私は大丈夫――と俯き加減に小さな笑みを浮かべてウリアはそう言った。

「……そっか、それならいいけど」

「うん……本当に大丈夫だから」

「……」

「……」

「……それじゃあ、おやすみ、ウリア」

「うん……おやすみ、秀」

「良い夢を」

「そっちこそ、ね」

そう言って――俺とウリアは互いに布団に潜り込んで就寝する。

しかし、俺は暫しの間、眠りに就く事は出来なかった。

先ほど、白い欠片が放った――謎の淡い光。

あの光は一体全体何だったのか。

その疑念が頭の中で渦を巻いて――俺が結局眠りに就いたのは午前四時を回った後なのであった。

学級委員長

8月4日。

この日も、俺とウリアは昨日に引き続いて家から少し行った所にある図書館に赴(おもむ)いていた。

別に、ネタが無いからだとか、そんなメタな理由では当然なくて。

ウリアが昨日読んでいた小説の続きが読みたいと言って聞かなかったのである。

「何だ、そんなにハマったのか？」

「もうハマりにハマって足が抜けなくなるくらいにハマっちゃったわよ。このままだとそのまま沈んで頭の先まで埋まってしまいそうだわ」

「その比喩はどうかと思うが……お前がどれだけその本にハマっているのかが解ったよ」

「本当に面白いんだから。秀も一度読んでみた方が良いと思うわよ？」

「いや、俺は……」

「それとも、秀には文字ばかりの本なんて高難度過ぎるかしら？」

「誰もそんな事言ってねーだろ。俺だって、小説くらい読めるよ」

「本当に？」

「五ページで断念する自信があるがな」

「早っ！　ていうか、自信を持つべき所ですら無いから！」

「ていうか、その小説のタイトルとか解らないのか？　俺の知っているタイトルだったら……少しは興味が出そうな気もするんだけど」

「えーっとねぇ……」

そう言いながらウリアは図書館の本棚から取り出したその小説の表紙を見下ろして――。

「タイトルは『とある魔術の――』」

「言わんでいい。ていうか、それ以上は言うな。絶対に言うな」

「何よ、秀からタイトルを言えって私に夜這いして来たくせに」

「もうそこまで聞いた時点で解ったからそれ以上は言うな。そして、俺はお前に夜這いなんかしていない」

「あぁ……昨日は秀に身体中を弄（まさぐ）られて寝るどころじゃなかったわ」

「だから夜這いなんかしていないって言っているだろ！」

「ハイハイ、解りました……そういう事にしておきましょうか」

「お前、いい加減にしろよ。確かに日頃は常にお前をどうやって襲おうかと考えてはいるが今の所、俺はその考えを実行した事は無いんだぞ」

「考えてはいるのね」

「……」

閑話休題。

「……そ、それで？　お前はどうしてその小説にそこまで惹かれたんだ？」

「何か、物語の流れが私の居た時代と似ているなぁ、って」

「お前、まさかそれはこの物語がその作品と内容がどこかしら似ていると揶揄（やゆ）しているのか？」

「誰もそんな事は言っていないでしょ。それにパクリだとかオマージュだとかインスパイアだとか……色々言われているけれど、今の時代、多少設定が似ているなんてよく有りがちな事よ」

「まぁ、確かに……これだけ作品が世の中に溢れ返っている時代じゃ、逆にどんなものにも似ていない作品や物語を創り出す方が難しいのかもしれないな」

「問題なのは、似ている上でどれだけ他の作品や物語よりも面白いものを創れるのか否かよ」

「お前、今微妙に深い事を言わなかったか？」

いや、深いかどうかは俺の判断だったのだけれど。

「でも、お前の言う通りだよなぁ……この時代、似ている作品なんかそこら中にある訳だから、どれだけ他よりも群を抜いて面白いものを創る事が出来るかが問題になって来るよな」

「……ていうか、そろそろこの本借りて帰りたいんだけど」

「何だ？　もうお腹空いたのか？　来る前に食べたばかりだろ」

「いや、テレビで番組表観てたら観たい番組があった」

「お前、現代の生活に取り込まれ過ぎだろ」

「現代の生活に足を突っ込んでしまったら足が抜けなくなってしまったのよ」

「そしてお前は意外と何にでもハマり易いんだな」

「勘違いしないで！　私は何にでもハマるようなそんな軽い女じゃないわよ！」

「いや、今の話を総合するとどう考えてもお前は軽い女だ」

「私はそんな尻軽女じゃないわよ！」

「まぁ、尻軽女ではないだろうな」

つーか、どこで覚えたそんな言葉。

未来だろうか――いや、戦国時代の２０５６年にそんな言葉がよく使われる事があるのだろうか。

すると……テレビ？

昼ドラか何かで耳にしたのか――まぁ、半ばどうでもいいけれど。

「それで？　私はこの本を借りて早く帰りたいんだけど」

「それなら、早く本を借りてくればいいじゃんか」

「何を言っているのよ、この私が図書館で本を借りれる訳が無いじゃない」

「威張って言うな。それこそ威張って言う事じゃないから」

そういえば、こいつは図書館で本が借りれるというシステムさえも理解していなかったのか……。

「仕方ないなぁ……ほら、俺が借りて来てやるから、貸してみろ」

「秀って図書館での本の借り方を知っているの？」

「余り俺を見縊（みくび）るなよ、ウリア。幾ら俺だって本くらいは借りる事が出来るさ」

「それ以外は何も出来ないけどね」

「何て事を言いやがる！　俺の生きる意味が“図書館で本を借りる

”以外に何も無いみたいに言ってんじゃねーよ！」

「秀、図書館では静かに、だよ？」

「くっ……！」

こいつ……そういうルールだけは微妙に理解しやがって……！

「……と、とにかく、貸せよ、その本。俺が借りて来てやるから」

「うん、ありがと、秀」

そう言って――俺に微笑んでくるウリア。

笑っていれば可愛いのになぁ……まぁ、笑わなくても可愛いけれど。

……えー、ゴホン。

そんな事を思いつつ俺は図書館の受付へと足を進めるのだった。

◆◆◆

「あっ、そうだ」

図書館の入り口にてとある事を思い出した俺は立ち止まる。

「ん？　どうしたの、秀？」

そして、その隣でウリアも立ち止まって俺を振り返って来る。

「忘れてた……俺、宿題でちょっと解らない所があるからさ。参考書借りようかな、って」

「ああ、そうなの――ていうか、そもそも図書館に参考書ってあるの？」

「……いや、知らないけど」

「知らないのに借りようとしているの？」

「と、とにかく、俺はちょっと参考書を探しに行って来るからさ。お前、観たいテレビあるんだよな？」

「うん、そうだけど……」

「それなら、先に帰ってろよ。お前がこの前、戦った相手もすぐまた攻めて来るとは思えないし」

「でも、あいつは――ストレンドは味方の内の『強硬派』の人達が秀の命を狙って勝手に動き出したって」

「いいっていいって。俺の命の為にお前の生活まで制限する訳には行かないし、それに、本当に少しの間だけだし、大丈夫だって」

「制限って――ボディーガードが護るべき人の為に生活を制限されるのは当然だと思うけど。それに、テレビなんかを優先して秀の事を護れなかったらそれこそ……私、立ち直れないし、未来の秀に顔向けできないよ」

そう言って――苦笑と共に顔を伏せてしまうウリア。

まぁ、確かにウリアの言う事は一理ある。

俺だって、誰かを護るボディーガードか何かで――観たいテレビを優先してその人を護れなかったなんて、話にならない。

……けれど。

俺とウリアは決定的に違う。

何が違うかって言うと――生きている“時代”が違う。

――だから。

「……あのな、ウリア」

俺は俯いてしまったウリアの頭に静かに手を乗せた。

「俺はさ、ウリアにこの時代の事をもっと楽しんで欲しいんだよ」

「……楽しんで欲しい……？」

「お前の生きてきた時代――２０５６年ってさ、戦争ばかりの世界なんだろ？　その世界では、当然娯楽なんて殆ど無い訳で……お前がどれだけ詰まらないテレビ番組でも、それほど豪華でも何でもないカップラーメンで物凄く喜ぶのも、漫画や小説に没頭しているのも――大概の理由が、未来に娯楽が無いからなんだろ？」

娯楽が無いからこそ。

２０５６年という時代に――何も生きていて楽しいという事が無いからこそ。

生きるという事が誰かと戦うという事と同列視されている時代だからこそ。

ウリアは何気ない事で喜んだり、嬉しがったり、楽しめる事が出来るのだろう。

そんな生きていて何も楽しいとは思えない時代を生きてきたウリアの気持ちを――。

“解る”――なんて事は言わない。

ていうか、解るはずもない。

だって、俺はその時代を生きて来た訳では無いから――そんな戦うだけの日々を経験してきた訳ではないから。

少し前の戦争を生き抜いてきた人々の気持ちを――現代の人々が理解できない事と同じだ。

その気持ちを聞いて、理解する事は出来る。

しかし、その気持ちを完全に理解する事は出来ない。

何故なら――俺はその人自体じゃないから。

その気持ちを完全に知る事は出来ない。

俺はウリアじゃないから。

ウリアの気持ちを――完全に理解する事は出来ないのだ。

――だから。

「だからせめて……お前が、俺を敵から護り切って、いつか未来に帰ってしまうその日まで……お前には、出来るだけこの時代を楽しんで未来に帰って欲しいんだ」

「……な、何よ」

何なのよ――とそう呟きながらウリアは俺から顔を背けてしまった。

「何かカッコイイ事言っちゃって……普段は馬鹿みたいな事しか言わないくせに」

「さり気無く俺の事を馬鹿にするな」

「……少し、だけだからね？」

そして――ウリアは再度俺を振り仰いで言う。

「本当に、少し参考書を探して、無かったら帰って来てよ？」

「ああ、約束するよ」

「それに」と俺はズボンのポケットから白い欠片を取り出す。

「これもあるし……何か異変が起こったら、すぐにこの欠片が知らせてくれるさ」

「……解った」

俺の言葉に渋々頷いてくれたウリアは一人借りたその小説を手に図書館の入り口を潜って家に帰り始めるのだった。

「……さて、と」

そして俺も……約束してしまったからには、出来るだけ早く帰らなければならない。

ああ見えて、ウリアは心配性だからなぁ。

「……まぁ、心配性じゃなかったら、４５年後の未来から俺を助けに来ようなんて思わなかったかもしれないけれど」

そんな事を呟きつつ、俺は早速図書館の中を参考書を巡って歩き始めるのだった。

◆◆◆

参考書の捜索は難航した。

図書館の受付だとか、館内の本を探すパソコンのサービスだとか、そういうものを使えば一発なのだろうけど……。

この館内にあるのかどうかも解らないものをいちいちそんなものを使って探そうとは何だか思えなかったのである。

パソコンのサービスの方なら未だしも、受付の人には若干迷惑にな

ってしまうからな。

まぁ、実際の所、それらは俺が人に聞いたり、パソコンを使って検索したりする事を面倒がっている事に対しての建前であり、口上であるのだが。

「しかし……何でこんなに本があるんだよ」

いや、俺の今の言葉は図書館だから当たり前の言葉なのだろうけれど。

それにしても……この図書館には本当に色々な、様々な本が数多に存在する。

それこそ、星の数ほどに。

「流石は総合図書館って所か……“総合”が付くだけあって、本の多さは半端ねーな」

そして、俺がそんな事を呟きながら本棚と本棚の間に生まれた細長い道を歩いている時だった。

「あっ」

――俺は正面から歩いてきた人物に思わず声を上げてしまっていた。

「……あっ」

それから、その人物も俺に気付いて、そう声を上げて立ち止まる。

「……」

「……」

互いに無言のまま互いを見合う俺とその人物。
沈黙の時が俺達の周囲を取り囲む中――その人物の口がゆっくりと開かれた。
「……アンタ、真之乃秀――」
「スミマセン、人違いです」
「ちょっと！　待ちなさいよ！」
俺は素早く後ろを振り返って来た道を戻ろうとしたのだが――その人物に呼び止められた。
「……何でしょうか？」
「そして、何で敬語なのよ――それから、その露骨に嫌そうな顔をするのは止めなさい」
「多分、人違いをなされていますよ、あなた」
「何を言っているのよ、アンタの名前は真之乃秀でしょう？」
「俺の名前は駅須虎（えきすとら）です。そんな物珍しい名前では御座いません」
「何よ、そのある意味その辺を探せばどこにでも居そうな名前は。偽名ならもう少しちゃんと存在していそうなものにしなさいよ」
「……見抜かれたか」

「当たり前でしょ。駅須虎なんて、アンタの本名よりも更に稀有な名前じゃないの」

「……今の駅須虎はドラマとかの登場人物A的な“エキストラ”という言葉を掛け合わせて作った偽名で――」

「解っているから解説は無用よ」

……バッサリと斬り捨てやがった。

咄嗟に思い付いたにしては中々クオリティの高い偽名だと思ったのに。

「……はぁ」

俺はため息混じりに先ほどから俺の放つボケに的確にツッコミを入れて来ている人物――もとい、その女子を振り返る。

その女子の名前は架凪呀琴羽というもので、俺や霧歌が所属するクラスの学級委員長である。

昨日も一度語っているような気もするが、この琴羽という人物は俺を執拗に叱って来るのである。

いや、学級委員長という立場以前に、俺が授業で居眠りをしていたり、宿題を忘れたりする事を怒る事は当然なのだろうけれど。

何かに託けてこいつは俺を注意してくるのである。

制服のシャツがズボンから出ているとか、髪の毛に寝癖が付いているとか。

そんな事細かに俺に対して注意をしてくるのだ。

お前は俺の母親か何かなのかと、毎回こいつから注意をされるごとにそんなツッコミをしてしまうほどだ。

以上の理由から――俺は少なからずこの架凪呀琴羽という人間を苦手に思っているのである。

嫌いではない。

俺の事を叱ってくれたり、注意してくれたりしてくれる事は嬉しい事だし、有り難い事だと思うから。

……いや、俺が別にM気質を備えている変態的な人間という訳では無くて。

「ちょっと、何故ため息をついているのよ、真之乃秀」

「いや、ちょっと……お前を見ていたら思わずため息が漏れて」

「なるほどね。もしかして、私の事を遠回しに侮辱しているのかしら？」

「い、いや、そういう訳では無いから。決してそういう訳では無いから、誤解はするな」

「ふーん……まぁ、良いでしょう」

「それで？」と架凪呀は俺にこう問いかけて来た。

「真之乃秀は、どうしてこんな所に居るの？」

「どうしてって……図書館に来る理由なんて本を借りる以外にないだろ」

「……言っておくけれど、図書館には漫画本は置いていないのよ？」

「そんな事は百も承知だよ！」

何かウリアもそんな事言ってたな！

俺は普段どれだけ文字が書かれた本を嫌っていると周りから思われているんだよ！

「真之乃秀、図書館では大声を出さない――という鉄則を知っているわよね？」

「いや、お前の――お前のせいだからな、今のは」

俺は途中で声量を抑えつつ架凪呀にツッコミを入れる。

「……あっ、でも、ライトノベルは確かあったわね。真之乃秀、小説が読みたいのならそういうものから読むと良いわよ」

「だから、俺は別に小説を探しに来た訳じゃないんだよ、今日は」

「それじゃあ、何を探しに来たの？」

「……さ、参考書」

「……さ、参考書、ですって……！」

「何でそこで驚愕の表情を見せるんだよ」

そんなに俺が図書館で参考書を探す事がおかしいのか。

「あっ、ゴメンナサイ……真之乃秀が、あの真之乃秀が、学校ではあんな感じの真之乃秀が、正確に言うと単なる馬鹿の真之乃秀が……まさか、図書館にまでやって来て参考書を探しているなんて思いもしなかったし、夢にも見なかったし、そんな幻さえ見た事は無かったから、ちょっと驚いちゃって」

「それはすまなかったな、架凪呀。そして、今の言葉って後半からは単なる俺の罵倒だったよな？」

「私はただ単に普段の真之乃秀の生活風景を見た観点から正確な情報を語っただけよ」

「それは時に人の心を傷付けるという事をお前はもう少し理解した方が良いぞ」

「そうね、“言葉の暴力”って言葉もあるくらいだし……今日から気を付けるとするわ、真之乃秀」

「そうか……いや、解ってくれればいいんだ」

「それで、普段はあれだけ勉強をしているようには到底見えるはず

もない馬鹿の真之乃秀がどうして図書館で参考書なんて探している訳？」

「お前はアレか、数秒前に言った事を全て忘れてしまうほどの記憶障害でも抱えているのか！？」

「しーっ」

「くっ……こ、この……！」

駄目だ……！

図書館って大声で叫べないから何かやり辛い……！

「……ちなみに、今私が真之乃秀を罵倒する言葉を言ったのは、私が気を付けるのは“今日から”であって、その言葉が意味するのは“今日から後ろ”――つまり、“明日”であって、私が真之乃秀に罵倒を浴びせないように気を配るのは“明日以降”という事になるからよ」

「お前はそこまでして俺の事を罵倒したいのか。それから、最終的に俺の事を罵倒していたんだな、お前」

「それで話は変わるけれど」

「勝手に話題を変えてんじゃねーよ」

しかし、架凪呀が俺のそんな言葉を聞く訳も無く。

「図書館に参考書なんて置いてないわよ？」

「えっ、マジで？」

「ええ。精々あって辞書が限度ね。流石に参考書は……うん、置いてなかったと思うわ」

「そっか……無いのか、参考書」

「私の言葉が信じられないのなら、受付にでもパソコンの館内検索サービスでも何なりと使えばいいと思うわよ？」

「いや、別にそんな事はしないよ。それに、俺はお前に少なからず信頼を置いているし」

「ひぇっ！？」

「えっ？」

……何だ、今の声は。

そんな事を思う俺の前方には何やら頬を赤く染めた架凪呀の姿があった。

「どうした架凪呀――ていうか、今の声はお前か？　何と言うかその……ヒヨコみたいな声だったぞ？」

「う、五月蠅いわね！　黙りなさいよこの馬鹿！」

「しーっ」

「うっ……ご、ゴメンナサイ」

……何か、初めて架凪呀に勝った気分になった。

何故だろう。普段から間違いを指摘されまくっているからであろうか。

普段、俺に注意ばかりしてくる架凪呀を注意し返すと言うのは何というか……些か心地が良いものだな。

しかも、俺から注意を受けた架凪呀はしゅんと肩を縮めてしまって

いた。

何だろう。

何だかその架凪呀が……俺には少し可愛く見えた。

俺にはもしかしてS気質があるのだろうか――いや、そんな話は今はどうでもいいな。

「……それで、お前は今どうしてそんなヒヨコみたいな声を上げたんだ？」

「ちょ、ちょっとビックリしちゃったから……それと、次にその“ヒヨコみたいな声”って言ったら殺すからね」

こちらを睨み付けてくる架凪呀。

何だか、その視線にはマジで殺気が込められているような気がしてならなかった。

「……び、ビックリしたって……何でそんな声を出してしまうほどにお前は驚いたんだよ」

「だ、だから、その……真之乃秀が、私を信頼してくれているって、言ったから」

「何だ、そんな事に驚いたのか？　当たり前だろ、俺とお前は同じクラスメイト同士なんだし、お前はそのクラスの学級委員長なんだし、信頼を置いて当然の存在のはずだろ？」

「……」

「……か、架凪呀？」

何か、架凪呀がこちらを呆然と見つめたまま動かなくなったんだけど……。

な、何で？

俺今何か変な事言ったか？

「……お、オーイ、架凪呀～？」

俺は架凪呀に向かって手を振ってみる。

しかし、架凪呀はこちらを呆然と見つめたままビクともしない。

その架凪呀の頬は若干紅潮しているようにも見えたが――今はそんな事よりも。

「……」

少しそこにボーっと佇んでいる架凪呀を見て思考を巡らせた俺は傍にある本棚から適当に一冊の本を取り出す。

「……」

それから、俺は架凪呀の目の前まで歩いてみた。

しかし、それでも架凪呀はボーっとしたまま何のリアクションも示

さない。

「……仕方ない」

見兼ねた俺は手に取った本の表紙を架凪呀の頭にゆっくりと振り下ろした。

「目を覚ませ」

「痛っ……って、ハッ！　な、何？　今何が起こったの？　何か頭に衝撃が……」

漸く我に返った様子の架凪呀は周囲をキョロキョロと振り返り始める。

そんな彼女に俺はこう言葉を掛けてやった。

「実は、たった今お前の頭の上に寄生型のエイリアンがやって来たんだけどな」

「き、寄生型のエイリアン？」

「それを追い払おうとして、本で撃退しようとしたらお前の頭から逃げちまって……そしたら、俺の振り下ろした本がそのままお前の頭に当たっちまった訳だ」

「な、何だ、そうだったのか……真之乃秀、アンタのお陰で助かったわ」

「どうやら、奴等はお前に寄生する事によって地球を侵略しようと

していたらしいな……しかし、俺の活躍によってどうやら地球侵略の危機は去ったらしいな」

「ええ、そうね……本当にアンタは良い活躍をしたわ、真之乃秀」

礼を言うわ――と架凪呀は俺の手から本を静かに抜き取って。

「――って、そんな訳は無いでしょ」

「痛っ」

俺を呆れ顔で見上げながら頭に本を振り下ろしてきた。

「何なのよ、寄生型のエイリアンって。エイリアンにも知識はあるんだから、私よりも、もう少し寄生して得な人間を選ぶに決まっているでしょ？　それと、ここでエイリアンの撃退に成功したとしても他の人間が餌食になる可能性だって否めないんだから、それだけで地球の侵略を防いだ事にはならないわよ」

「……架凪呀、冗談めいた単なるネタ的な会話にそこまで事細かにツッコミを入れられると、言ったこっちとしても何だか恥ずかしいものがあるんだけど」

「それならそのまま死んでしまえば？」

「何て事を言うんだ」

「心配しないで、骨はあえて拾わないで上げる」

「いや、そこは拾って行ってくれよ」

「ていうか、そもそも何故アンタは私の頭を本で打ったのよ」

「だから、寄生型のエイリアンが――」

そこまで言った所で、俺は架凪呀から本でまた頭を叩かれた。

「何度そのネタを言うつもりなのよ。叩くわよ、主に本で」

「……それなら叩く前に言ってくれないだろうか？」

「次、そのネタを使ったら真之乃秀の記憶が飛ぶまで本で殴り続けるからね」

「怖い事を平気で言ってんじゃねーよ」

「それで、もう一度問うけど、どうしてアンタは私の頭を本で叩いたの？」

「それは……その、何かお前がボーっとしていたからだよ」

「私がボーっとしていた？　そんなはずはないわ」

「いや、してたんだって。本当なんだって」

「私が呆然とした無防備な状態であったなら、真之乃秀は間違いなく私の身体を触るなり何なりして襲っているはずだもの」

「襲わねーよ！　それから、お前にはまだ俺の変態性を見せた所は一度も無かったよな！？」

何でそんな周知の事実みたいに語ってるんだよ！

「真之乃秀、しーっ」

「いや、ゴメン。解ってはいたんだけど、今のは流石に叫ばざるを得なかった」

「それと、確かに私は真之乃秀の変態性を垣間見た事は無かったけれど、たった今真之乃秀が自分で自白してきたから、最終的に私は真之乃秀の変態性を知る事になってしまったわ」

「しまった……！　俺としたことが、何たるケアレスミスを……！」

「存在がケアレスミスみたいなアンタがそれを言う？」

「存在がケアレスミスって何！？　存在自体が微妙な失敗って何！？」

「真之乃秀、しーっ、ってば」

「……」

……やっぱり、俺に図書館は色々な意味で向いていないみたいだ。

「……オイ、架凪呀」

「何よ、真之乃秀」

――だから、俺は架凪呀に向かってこう提案するのだった。

「……外に出ようか」

◆
◆
◆

架凪呀と共に図書館を後にした俺はどこに行く訳でも無くそこら辺の道を歩いていた。

「そういえば、架凪呀」

「何？」

「お前、本借りなくて良かったのか？　図書館に居たって事は、俺と同じで何か本を借りる為だったんだろ？」

「ああ、うん、そうなんだけど……借りたい本が先に借りられてて。仕方なく帰ろうとして居たら、アンタと出会ったって訳よ」

「ふーん、そうだったのか」

「それで……変態性を持つ真之乃秀」

「忘れてくれ。さっきの事はどうか忘れてくれ」

「嫌よ。折角手に入れた真之乃秀の弱みだもん。こんな貴重な情報はちゃんと記憶の中に留めておかなくちゃ」

「何の為に？　お前は一体全体何の為に俺の弱みを収集しているんだ？」

「気にしないで、ただの趣味だから」

「人の弱みを収集する事が趣味なんてお前はどうにかしているぞ！」

俺はそう声を上げて架凪呀にツッコミを入れる。

ていうか、漸く大声を出す事を気に掛けないで全力でツッコミをする事が出来た。

何だかやけに気持ちが良かった。

「ていうか、真之乃秀。アンタは一体何の為に参考書を探していたの？」

「夏休みの宿題の為だ」

「ああ、夏休みの宿題、ね……アンタも偶（たま）には学問の類で行動を起こす事があるのね、見直したわ」

「それはどうも。まぁ、宿題だからな……夏休みまでに終わらせるのがセオリーってものだろ？」

「あら、いつも学校で宿題をほぼ毎回忘れている真之乃秀の言葉とは思えない言葉ね」

「うるせーな。ていうか、俺は別に“ほぼ毎回”宿題を忘れている

訳じゃないからな。“殆ど”忘れているだけだからな」

「言葉の表現が違うだけじゃないの……」

俺に向かって呆れ顔を見せてくる架凪呀。

「ていうか、どうせさっきのアンタらしくない言葉も夜華さんの請け売りなんでしょ？」

「……何故解った」

「解るわよ。そもそもアンタの言いそうな言葉じゃないし、アンタにそんな言葉を言って来そうなのはアンタの周りじゃ、夜華さんしか居ないからね」

「何だその言い方は。それじゃあ、俺の周りに霧歌以外に頭の良い奴が居ないみたいな言い方じゃないか」

「そもそも、アンタって友達居ないし」

「友達が居ないんじゃない、あえて作っていないんだ」

「それって、友達が居ない人が強がって使う典型的な言葉の一つよね？　自分は負け組じゃないみたいな、そんな感じの」

「……」

返す言葉も無かった。

「いや、ていうか、俺にはちゃんと友達くらいは居るからな？　昼

休みだってちゃんと俺は屋上で売店のパンを友達と楽しげに話しながら食べているんだぜ？」

「夜華さんとでしょ？」

「だから何故それを知っているんだ！」

そもそも、屋上で食べる奴なんか少ないし、俺と霧歌が行った時には毎回誰も居なかったはずなのに！

「私はクラスメイトの事なら何でも網羅しているからね。何せ学級委員長だし」

「それは学級委員長とは言わない。ストーカーと言うんだ」

「ストーキングなんてしていないわよ。私はただクラスメイトの後を気付かれないように気配を消しながら尾行しているだけで」

「それをストーカーって言うんだよ」

「主に真之乃秀を尾行しているだけで」

「そして、何故俺限定でストーキングしてるんだよ！」

「それはその……アンタがクラスで一番の問題児だからよ」

「理由になっていそうで理由になっていない！」

「ああ、でも、心配しないで。もうストーキングはしていないから」

「そうなのか……？」

「うん、アンタの家を特定できた所で止めたから」

「行く所まで行ってんじゃねーか！」

そして、そんな事を平然と笑顔で言うんじゃない！

「何で俺をストーキングしているんだよ。何で俺の家の特定にまで至っているんだよ……ていうか、架凪呀が俺をストーキングして本当に何のメリットがあるんだよ」

「秘密よ。アンタに教える訳が無いじゃない」

「ああそう……」

知りたかったけれど、実際の所は何か怖くてその理由を聞きたくないのが本心だ。

「……それでさぁ、真之乃秀」

「……何だよ」

「参考書、欲しいんでしょ？」

「ああ、欲しいけど……何だ、お前まさか違法染みた値段で俺に参考書を売りつける訳では無いだろうな」

「そんな訳無いでしょ。私がそんな事をする人間に見える？」

「見える」

そして、俺は架凪呀から腹部に拳を食らった。

「ぐ、おお、お……！」

俺は殴られた腹を押さえてその場に蹲る。

「アンタが私に失礼極まりない発言をするからよ」

「俺は本当の事を言っただけだ……」

「今度は蹴りを食らいたいようね？」

「ゴメン！　悪かった！　だから蹴りだけは勘弁して下さい！」

素早くその場に立ち上がりながら俺は架凪呀に謝罪をした。

ていうか、どうして俺は架凪呀に謝罪をしているのだろうか。

どう見たって悪いのは架凪呀の方なのだが……。

「……それで？　参考書がどうかしたのかよ」

「だから、そんなに欲しいのなら私の参考書を貸して上げましょうか？」

「……何だって？」

「だから、私がアンタに参考書を貸して上げましょうかって言ったのよ」

「お、お前が俺に参考書を貸す、だって？　何だ、今日は空から槍でも降って来るのか？」

「真之乃秀」

「ハイ、どうも申し訳ありませんでした」

架凪呀がまた拳を握り始めたので俺は素直にまた謝罪をした。

どう見たって今のは俺の方が悪かったから。

「えっ？　本当に？　本当に貸してくれるのか？　参考書」

「何でそこまで私は疑われているのよ……本当よ。参考書、必要なんでしょ？」

「ああ、うん。宿題でちょっと解らない事があるから」

「ていうか、宿題で解らない事があるなら、それこそ夜華さんに聞けばいいのに」

「いや、ほら、確かに霧歌は頭が良いけれど、さ。そこまで霧歌に毎回聞くのも悪いし……ていうか、夏休み中は今までずっと殆ど毎日宿題を見て貰っているし」

「……ふ、ふーん」

すると、架凪呀はどこか不機嫌そうに頬をぷうっと膨らませて。

「そ、そうなんだ……ていうか、毎日って。幼馴染って立場は本当に羨ましいわね……」

「えっ？　何だって？」

「い、いや、何でも無い。何でも無いから……気にしないで」

「そ、そうか？　それならいいけど……」

「そ、それじゃあ……今から私の家に行きましょうか？」

「えっ？」

「何よ、その反応は……何か不満？」

「い、いや、そういう訳じゃないんだけど……」

何だろう……何なのだろう、この気持ちは。

何か怖いんだけど。

そもそも、俺は架凪呀に対して少なからず苦手なイメージを持っていた事もあるのだろうけど。

先ほどの架凪呀の堂々たるストーカー宣言で何か架凪呀の家に行くのが本当に怖くなってきたのである。

「……お前、俺を家に連れ込んで俺を取って食うつもりじゃないだろうな」

「私は妖怪か！」

「えっ？　お前の主食は人肉だよな？」

「だから、私は妖怪かって！　本当に侮辱罪で訴えるわよ！」

「それが出来るのなら俺だってお前の暴言を侮辱罪として告訴しているよ」

しかも、何度もな。

「そっか……お前に俺を取って食うつもりが無いのなら」

「だから無いって言ってるでしょ」

「お前の好意に肖って参考書を借りる事にするかな」

「えっ？　という事は、アンタは今から私の家に来る訳？」

「まぁ、そうしないと参考書を借りる事が出来ないと言うか、そもそも、お前から俺を家に誘って来たんだよな？」

「うーん……それはそうなんだけど、うーん……本当に来る？」

「だから、お前が俺を誘ったんだよな！？」

「いや、その、いざアンタが家に来るとなると何だか緊張しちゃって……」

「誘う前は緊張しなかったのに誘った後に緊張するってどういう事だよ」

緊張するタイミングがおかしくないか？

「まぁ、いっか……私から言い出した事だしね。それじゃあ、私の家に案内して上げるから、付いて来なさい――」

――そう言い掛けて、架凪呀は不意に立ち止まった。

それに釣られて俺も思わず立ち止まって架凪呀を振り返る。

「……架凪呀？」

架凪呀の雰囲気に異変を感じた俺はそう架凪呀に問いかけてみる。

しかし――架凪呀はこちらを振り返りもせず、何の言葉も返そうとしない。

ただ――空の辺りを仰いだままじっとその青の一点を見つめている。

「……か、架凪呀――」

そして、俺が再度架凪呀に声を掛けようとした時だった。

不意に俺のズボンのポケットの中で白い光が発光したのである。

「！」

その光に気付いた俺は咄嗟にポケットからその白い欠片を取り出す。

すると、白い欠片はやはり眩く白い光を周囲に解き放っていた。

「……これは……！」

それから、俺は素早く架凪呀を振り返る。

「……真之乃秀、それは……？」

俺の手の中で光っている欠片を指差しながら架凪呀はそんな疑問の声を上げていた。

それは当然の反応なのだろう。

だって、架凪呀は俺やウリアとは何の関係も無い――魔術とも科学とも関係の無い単なる一般人なのだから。

そして、そんな一般人である架凪呀の傍に今俺が居ては――おそら

く架凪呀を巻き込んでしまうだろう。

――それならば。

「ゴメン、架凪呀。参考書はまた今度借りる事にする！」

「あっ、ちょっと、真之乃秀！？」

後ろから架凪呀の声が聞こえて来たが、俺はそれを振り切るようにしてその場から走り出した。

◆◆◆

俺は住宅街の通路を縦横無尽に駆け抜ける。

出来るだけ、架凪呀の傍から離れる事が目的だったからだ。

だから、その為には場所を選んでいる場合では無かったのである。

本当ならば俺の家に向かえば良かったのだろうけれど――残念ながら、この時の俺はそこまで知恵が回る状態では無かった。

――そして。

「なっ……！」

不意に“進行方向の先”に現れた空間の歪みに俺は足を止める。

空間の歪みはどんどんその激しさを増して行き――最後には渦を巻いて空間に漆黒の穴を空けた。

「オイオイ……マジでこんな昼間から、しかもこんな場所に転送させるつもりかよ……！」

そして――俺が恐る恐るそんな事を呟いた瞬間。

漆黒の穴の中から――『魔導獣機』が飛び出して来た。

アスファルトを砕きながら、その――おそらく、狼をモチーフとした『魔導獣機』は漆黒の穴の前に着地する。

その『魔導獣機』は普段見慣れている機体よりも比較的小さいものだった。

しかし、モチーフとされている狼の大きさとは掛け離れているような気もするが。

景色から漆黒の穴が渦を巻きながら消えて行く。

その直後――。

『魔導獣機』が吠えた。

咆哮する『魔導獣機』――轟くその雄叫びが周囲の住宅の窓ガラスを震わせ、粉砕していく。

「くっ……！」

俺は咄嗟に両耳を塞いで自身の鼓膜を条件反射で護る。

そして、咆哮を終えた『魔導獣機』は俺に向かって――跳躍した。

『魔導獣機』が蹴り上げた地面が爆発する。

狼型の機械の獣は俺との距離を一気に詰めると――その鋭い鉤爪(かぎづめ)を俺目掛けて振り下ろして来た。

その斬撃に合わせて俺は膝を曲げてその場にしゃがみ込む。

俺の頭上をその巨大な鉤爪が空を切る音が聞こえて来た。

俺はそのまま前に転がるようにして跳んだ――それによって、俺は『魔導獣機』の巨体の下を掻(か)い潜(くぐ)って、その機体の後方の位置を取る。

それから、俺はその場に素早く立ち上がって後ろを振り返る。

それと同時に『魔導獣機』は地面を削りながら地面に着地して――こちらを振り返って来る。

弾け飛んで行く地面のアスファルト。

『魔導獣機』はその大きな口を開けると――そこに収束させた光を弾(たま)に変化させて、それをこちらに目掛けて発射してきた。

「く――う――っ！」

俺は前に倒れ込むようにして文字通り光の速度で飛んできたその攻

撃を躱す。

俺の後方に飛んで行った光の弾は地面に着弾して――大爆発を起こした。

「――――っ！」

俺は声を発する事も出来ないままその爆風に体を吹き飛ばされて、地面の上を何度か転がる。

吹き荒れる突風と砂塵の中――俺は目を薄く開いて周囲を確認する。

すると、こちらに向かって既に跳躍した『魔導獣機』の姿を俺は捉えた。

声を上げる間も無いまま俺は体を反射的に右に回転させる。

その直後、俺が先ほどまで倒れていた場所が『魔導獣機』の鉤爪によってバラバラに砕け散った。

それによってまた俺はボロボロになったアスファルトの上を転がる事になったのだが、先ほどの爆発よりかは衝撃が少なかったので、比較的すぐに立ち上がる事が出来た。

それから、俺は『魔導獣機』が次の手に転じる前にその場から駆け出した。

無論、逃げる為である。

行き先は勿論、俺の家だ。

ウリアの居る――俺の家だ。

端から見れば些か滑稽な話かもしれないが――しかし、俺は何も出来ない、ただの一般人だ。

確かに俺は“この問題”に関わっている――深く関わっている重要な人間だ。

けれど、俺はその割に途轍もなく無力な人間なのである。

果てしなく無力な人間で――嫌になるほどに無力な人間なのだ。

だから、今の俺には逃げる以外の選択肢は無い。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……！」

俺は息を切らして走りつつ首だけを後ろに向ける。

『魔導獣機』は俺とは比べものにならない速度で住宅街の通路を駆けていた。

陸上選手ならともかく――俺の脚力と比べられても『魔導獣機』は不快に感じるだけなのだろうが。

ていうか、それ以前に陸上選手でもあの『魔導獣機』の速度に勝る事は不可能だろう。

だから――陸上選手ですらない俺は少なからず『魔導獣機』に追い付かれないように何か策を取らなければならない。

住宅街の通路は入り乱れた迷路のようになっている。

俺はその地形を利用して、住宅街の通路の曲がり道を連続で次々と曲がり続けた。

これで『魔導獣機』を錯乱させて、撒(ま)けるなど思っていない。

ただ、こうやって曲がり角を連続で曲がる事で少しでも追い付かれるまでの時間を稼ごうと思ったのだ。

そして、それはどうやら地味に効力があったようで。

先ほどから五分ほど『魔導獣機』との鬼ごっこが繰り広げられているが――俺はまだ一向に追い付かれる様子は無い。

これなら逃げ切れる。

逃げ切れなくとも――何とか時間を稼ぐ事が出来るはずだ。

俺は走りながらそんな事を思った。

――けれど。

どうやら、その考えは甘かったようだ。

俺がまた曲がり角を曲がった所で――先ほどまで走っていた道の方から何か爆発に似た音が聞こえて来た。

何の音なのだろうか――そんな事を思いながら俺は後ろを振り返る。

そこには――何と、地面を蹴って家の屋根の上を跳び越えてショートカットをしてきた『魔導獣機』の姿があった。

そして、俺がその『魔導獣機』に気付いた瞬間――その巨大な鉤爪がまた俺の頭目掛けて振るわれた。

俺は腰を曲げて何とかその斬撃を避ける。

かなりギリギリだったから髪の毛の数本でも持って行かれたかも知れない。

それから、その俺の避け方がいけなかったのだろう――俺はそのままバランスを崩して前のめりに転んだ。

「うっ――く――っ！」

転んだ衝撃に顔を顰めて呻き声を漏らしながら俺はまたアスファルトの上に体を転がす。

回転する景色。

そして、その景色が漸く止まったと思った時には――目の前に『魔導獣機』の巨体があった。

「……」

もう、動く気力も体力も何も俺の体には残ってなどいなかった。

転んだ事で体の至る所に擦り傷や切り傷を負ってしまっている。

服も所々が破けてしまっていた。

最早立ち上がる事すら、出来ない。

すると、『魔導獣機』が俺を見下ろしたままその口を開ける。

そこに光が集約され始めた――俺に向かってあの光の弾を放つつもりのようだ。

そちらの方が良い。

俺はそんな事を思った。

鉤爪で首を刎ねられるよりも――光の弾で顔を一瞬にして吹き飛ばされた方が痛みを感じずに済むだろう。

俺は覚悟を決めた。

俺は死ぬ覚悟を決めた。

どうせ死ぬのなら――痛みを感じずに一瞬で死にたい。

そんな俺の下に天からの遣いがやって来たのだろうか。

晴れ渡る青空の果てから――紅い光の翼を携えた天使が舞い降りた。

オレンジ色の光の剣の刀身が『魔導獣機』の頭を貫く。

その機体の苦しげな咆哮が周囲に響き渡った。

その咆哮が五月蠅いとでも言うように光の剣が突き刺さったまま捻り上げられる。

それによって咆哮が聞こえなくなった――しかし、それで『魔導獣機』が絶命した訳では無い。

『魔導獣機』はその機体の中にある『核（コア）』と呼ばれる箇所を破壊しないと、その機体は動作を停止しない。

不意に光の剣が振り上げられて――『魔導獣機』の頭部が刎ね飛ばされた。

空中に飛んで行くその頭部――重力に従って落下してくるそれに当たらないように俺は素早く起き上がると道の端に体を移動させた。

そして――その頭部を失った『魔導獣機』の機体の上に仁王立ちしている炎の天使。

ウリアの姿を――俺は見据えた。

「……う、ウリア」

「……だから、言ったでしょ？」

ウリアは俺の方を見ずに――『魔導獣機』の機体を見下ろしたままこう言った。

「テレビなんかに感けていて、秀の命を護れなかったら――私の立つ瀬が無いって」

「ああ……悪かったよ、ウリア」

「フンッ……謝ったって、許して上げないんだから」

すると、『魔導獣機』の方で動きがあった。

その巨体を震わせた『魔導獣機』はウリアを無理矢理自身の体の上から振り落とそうとする。

しかし、ウリアは勿論振り下ろされる事は無く――背中から生えた光の帯びた翼を羽ばたかせて空中へと飛翔する。

顔を失ってもセンサーか何かでウリアを感知しているのだろうか――狼型の『魔導獣機』は地面を吹き飛ばすほどの脚力で空中のウリア目掛けて跳躍した。

ウリアもそれに臆する事無く――突進してくる『魔導獣機』目掛けて飛翔する。

迫り来る機械の獣。

その巨体目掛けてウリアは光の剣を振るった。

両断される『魔導獣機』――勝負はやはり一瞬にして着いた。

空中で爆発する二つに分かれたその巨体。

「くっ……！」

俺はその爆発によって巻き起こった爆風と衝撃波に目を細めながら両腕を顔の前に持って来てそれらに耐え切った。

通路に充満する爆煙の中にウリアはゆっくりと降り立つ。

「……う、ウリア――」

俺はその時ウリアにお礼を言おうとしたのだが。

ウリアによって右手を強く掴まれたのでその言葉は途切れてしまった。

「えっ？　何？」

「逃げるわよ」

「えっ？　何から？」

「早くここから立ち去らないとこの騒ぎで人が集まって来るでしょ」

「ああ……そういう事ね――」

そして、俺がそう言い切る前にウリアは猛スピードで空中に飛び上がっていた。

ある程度まで上昇したウリアは一度空中で停止すると――再度、速度を上げて俺の家に向かって一直線に飛翔した。

凄まじい高速によって歪んでいく景色を眺めながら――俺はこんな事を思った。

架凪呀は……大丈夫だっただろうか。

◆◆◆

ウリアの手によって家に何とか帰り着く事が出来た俺は、ウリアの手によって家の中まで運ばれた。

何とも情けない話だけど……少し俺の言い分も聞いて欲しい。

いや、本当に体が動かなかったんだって。

あれだけ住宅街の中を全力疾走して、体中に怪我を負って、死にそうな場面に何度も遭遇して。

それでまだ動ける奴が居たら俺はそいつとメールアドレスを交換したい。

ついでに電話番号も。

女子ならお近付きになりたい。

……とまぁ。

それくらいに、俺の体は全然全くこれっぽっちも少しも動かなかったのである。

だから、俺はウリアに担がれたまま部屋まで運ばれて今はベッドの

上に座らせられている状態だ。

ウリアは俺を部屋に置くと（実際、全く動かない俺は物同然なので、そんな扱いをされても仕方が無い）救急箱を取りに行く為に俺の部屋を出て行った。

ちなみに、救急箱は確か母さんの部屋にある――と思う。

もし、母さんの部屋で救急箱が見付からなかったら、それはウリアの探し方が下手か、俺の記憶が間違っているかのどちらかだ。

「……」

俺は無言のまま（と言うか、そもそも言葉を発する力も余り残っていない）ベッドに横向きに倒れ込んだ。

そして、先ほど俺の命を奪おうと襲い掛かってきた狼型の『魔導獣機』の事を思い出す。

あの『魔導獣機』は昼間にも関わらず俺を襲って来た。

今までは俺を襲う時間は決まって夕方や夜だったはずなのに――。

いや、俺の命を狙っている相手がそんな決まった時間に襲って来るなんて思い込んでいる俺も俺で安易な考えなのだろうけれど。

それでも――本当に昼間に、真昼間にあの『魔導獣機』は俺に襲い掛かって来た。

夕方や夜では無く、人目に付く真昼間に。

今まではそんな襲い方を敵はしてこなかった。

――と言う事は。

「……これが、ウリアが――ストレンドが言っていた、いわゆる『強硬派』って奴等の仕業なのか？」

俺が誰にでも無くそんな問いかけを呟いた時だった。

不意に、部屋の扉が勢い良く開かれて救急箱を抱えたウリアがやってきた。

どうやら、俺の記憶に間違いは無かったようである。

「お、おう、ウリア……ありがとな、救急箱」

「礼なんて要らないわよ、これくらい」

「ていうか……お前、そもそも治療とか出来るのか？」

「当たり前でしょ。２０５６年は誰でも応急処置が出来る時代なのよ。ていうか、それ以前に秀の怪我って擦り傷とか切り傷ばかりだし、絆創膏とかガーゼで済むでしょ」

そう言いながらウリアはピンセットで取り出した綿（わた）に消毒液を染み込ませて――。

俺の腕の傷口にそれを勢い良く押し当てて来た。

「痛ってえ！」

「ほら、男の子なんだから、これくらい我慢しなさい」

「お前は俺のお母さんか！　いや、消毒液が染みるんじゃなくて、ピンセットが突き刺さったんだよ！」

「大丈夫よ、実際に突き刺さっている訳では無いみたいだし、そもそも手加減したし」

「手加減って何だよ！　ていうか、それってお前態とやったんじゃねーか！」

「調子に乗って私を図書館から先に帰した罰よ」

仕返しと言ってもいいわね――とウリアは言う。

「図に乗って、私を先に帰したりするから、命の危機に晒されるのよ。ああもう、本当に滑稽よね、秀って。清々したわ」

「……」

……もしかして。

「ウリア……お前、俺の事心配してくれたのか？」

「……」

そして、ウリアは更にピンセットを俺の腕に捻じ込んで来た。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

「……当たり前じゃない。心配したに決まってるでしょ。でなきゃ、あんなに急いで駆け付けて、こうして秀を治療したりはしないわよ」

「いや、治療と言うかこれは拷問なんじゃ――」

「おーっと、手が滑った」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

――その後も、拷問という名のウリアによる治療は続けられた。

いや、治療は無事に完遂されたのだが……うん。

治療されているはずなのに、冗談抜きで死ぬかと思いました。

幼馴染

8月4日。

私こと、夜華霧歌は部屋で洋服を選んでいた。

「うーん……どれがいいかなぁ」

私の部屋の床やベッドの上や机の上――の至る所には今、所狭しと私がクローゼットから取り出した洋服が置かれていた。

足の踏み場も無い状態である。

そして、私が部屋をそんな状態にしてから既に一時間が経過しようとしていた。

朝七時には起きたんだけどなぁ……既に八時ですよ、いつの間にか。

どれだけ洋服を選んでいるのかってツッコまれてしまいそうな感じである。

でもまぁ……これは仕方の無い事なのだ。

何せ、今日は秀ちゃんの家を訪れようとしているのだから。

秀ちゃんとは私の幼馴染で――って、もうこの説明は要らないのかな？

ていうか……いけないいけない。

またメタな発言をしてしまった。

秀ちゃんから最近は何度も指摘されているからなぁ……気を付けないと。

さて、立て直し立て直し。

それで、私はこれから秀ちゃんの家を訪れようとしているのだけれど。

着て行く洋服を選ぼうと朝七時からクローゼットを引っ繰り返していたら……。

一時間も経ってしまった訳なのである。

いや、別にそれは私に気が多いだとか、そういう訳では無くて。

決断力が無い訳でも無くて。

だから……ね？

何とか解って貰えないかな？

私と同じ女の子だったら解って貰えるかもしれないけど……多分、解って貰えないよね。

えーっと。

尤（もっと）もらしい理由を挙げておくと、えー……うん、そうだね。

ほら、女の子が男の子の家に行く時って最低でも何かしらお化粧だとか、そういうものをしていくものじゃない？

例えその男の子が自分の彼氏じゃなくて、単なる友達だったとしても、ね？

まぁ、私はまだ高校生だから、お化粧とかは流石にしないけれど。

最低でも、す――ん、ゴホン、昔からの幼馴染である男の子の前ではちゃんとした洋服を着て行かないとね。

これが、私が一時間も洋服を選んで、悩んで、選んで、悩んで――を繰り返している理由です。

理由になったかな？

その辺が不安だけれど……うんまぁ、話が進まないから。

もうそれは理解して貰えたって事で。

話を進めさせて頂きます、ハイ。

……えーっと。

どこまで話したかな？

私が洋服を選んでいる所から話し始めて――ああ、まだ何も話が進んでいないのか。

拙い拙い。

ヤバいヤバい。

早く話を進めないと。

「うーん……それじゃあ、もうこれにしようかなぁ」

このまま洋服を選び続けていては色々な意味で埒が明かないような気がするので。

私は散らかした洋服の中から適当に組み合わせたその一組を拾い上げた。

ていうか、こんな事をするなら最初から適当に選んでおけば良かったかな……。

今までの一時間は何だったのだろう。

何か損した気分。

まぁ、自分で選んだ結果なのだから、文句の言いようも無いのだけれど

「さぁてと、早く着替えて秀ちゃんの家に行かないとね」

そう言いながら、私は上着を着て、スカートを腰に当てると、そのジッパーを上げ始めて――。

「……」

――ジッパーを上げ始めて。

「……あ、あれ？」

じ、ジッパーを……。

あれ？

「……」

……え、えっと。

どうやら、スカートのジッパーが壊れてしまっているようなので。

あー……他のスカートを穿く事にします。

「……」

……しかし。

「それにしても、良かったなぁ……秀ちゃん達と一緒にこの間、海に行かなくて。台風さん、本当にありがとう」

台風様さまである。

……。

……ゴメン、本当に申し訳無いのだけれど。

今の発言は、無しの方向で。

◆
◆
◆

結局、スカートを選び直していたらまた一時間ほど経過してしまったので。

本当は秀ちゃんの家で朝ご飯を作って一緒に食べるつもりだったんだけど……。

これでは辿り着く頃にはお昼になってしまうので。

仕方なく、私は家で朝食を食べてから秀ちゃんの家に向かう事にした。

「……よし、ごちそうさま、っと」

両手を合わせて私の栄養の糧となって下さった食材に宿る神様達に私は拝んでから、食器を片付けた私は今度こそ秀ちゃんの家に出掛けるべく、鞄を持って玄関に向かう。

踵までちゃんと靴の中に足を収めた私は家の中を振り返る。

「それじゃあ、行って来ます」

本当は――私以外の唯一の家族であるお母さんは既に仕事に出掛けていて家にはもう居ないのだけれど。

やはり、家を出る時にはこう言うのがセオリーだと思ったので。

「……行って来ます」

私はもう一度小さくそう呟いてから、家の玄関扉を閉じて、秀ちゃんの家に出発した。

◆◆◆

家の外には果てしない澄み渡った青空が広がっていた。

暑いけれど、太陽も燦々と輝かしい光を地上に送ってくれている。

麦わら帽子でも被ってくれば良かったかな。

雰囲気も出たし、秀ちゃんも多分喜んだと思う。

……多分だけど。

ていうか、何を言っているんだ、私は。

何はともあれ、青天広がる今日8月4日は誰が何と言おうとお出掛け日和だった。

誰かが違うと言っても私がそれを言わせない。

……って、私は一体全体誰と張り合っているのだろう。

とか何とか、ノリツッコミをしてみたり。

「……あっ」

私はとある建物を見付けてその場に立ち止まる。

私の視線の先には昨日秀ちゃん達と一緒に行った図書館があった。

実を言うと、私の家は図書館の近くにあるのである。

「そういえば……昨日、ウリアちゃんが読んでた小説をもう一度読みたいとか言っていたっけ」

もしかしたら、その小説を借りる為にここに居るかも知れないなぁ

……。

行って……見よう、かな。

「……いや、秀ちゃんの家に一旦行ってからでもいいよね」

私はそうして図書館の前から歩き出す。

――しかし。

その後すぐに、私はまた立ち止まる事となった。

それは、どこか住宅街の奥の方から何かが爆発したような音が聞こえて来たからだ。

◆
◆
◆

「な、何……？」

私はその場に立ち止まって、周囲を見渡す。

すると、また何かが爆発したような――そんな音が聞こえて来た。

私は空を振り仰ぐ。

けれど、秀ちゃんやウリアちゃんが言っていた――『魔導獣機』がこの時代に転送される際に出現する漆黒の穴はどこにも見えない。

空のどこにも、存在していない。

でも、あんな爆発のような――と言うか、確実に何かが爆発している音なんて日常茶飯事で聞こえて来るようなものではない事は私も重々承知している。

それならば――まさかあの漆黒の穴は空だけに出現するという訳では無いのだろうか？

しかし、そんな疑問は、今はどうでも良かった。

その事を考えるのなら後にいつでも出来る。

今、私が考えるべきなのは――全く以て別の事だ。

もしも、あの爆発音が『魔導獣機』によるものなら。

それは必然的に――秀ちゃんやウリアちゃんが襲われている事と繋がるのだから。

「……」

――例え、本当に『魔導獣機』が秀ちゃんやウリアちゃんを襲いにまたこの時代に転送されて来ていたとしても。

私には何も出来ない。

それは勿論理解している。

秀ちゃんからはエリートとか言われている私だけれど。

それは、普通の人よりも、私が幾分だけ頭が良いだけの話であって――知識量が多いというだけの話であって。

私は途轍もなく無力な人間なのだ。

果てしなく無力な人間で――嫌になるほどに無力な人間だ。

あの謎の音が頻発している場所に私が駆け付けたとしても――私には、どうする事も出来ない。

精々、私には秀ちゃん達の戦いを少し離れた所で見守る事くらいしか出来ないだろう。

――それでも。

例えそれが、私の限界だったとしても。

友達が命の危機に晒されているかも知れないのに。

親友が――幼馴染が死にそうになっているのかも知れないのに。

そんな状況で、動き出さないでいる事など今の私には到底不可能だった。

「秀ちゃん、ウリアちゃん……！」

そして、私は駆け出した。

今も絶えず聞こえてくるその爆発音を頼りに住宅街を走り始めた私

は――。

「あっ」

三度ほど曲がり角を曲がった所で、私はとある人物とバッタリ鉢合わせしてしまった。

その人物は――。

「……か、架凪呀さん」

「……そう言うそちらは、夜華さんじゃない」

架凪呀さんの方も私と鉢合わせして少し驚いたのだろう――少し唖然とした表情のまま私に向かってそう言ってきた。

幼馴染？

架凪呀琴羽さん――黒髪の首の辺りまで垂れたポニーテールが特徴のこの彼女は私のクラスの学級委員長だ。

ちなみに、秀ちゃんは何か昨日この架凪呀さんの事を少し悪く言っていたけれど。

実際の所は、架凪呀さんはそこまで悪い人では無い。

ていうか、むしろ良い人だ。

秀ちゃんだって、いつも架凪呀さんから怒られたり、叱られたりしなかったら――良いイメージを持っていた事だろう。

まぁ、架凪呀さんが秀ちゃんにきつく当たっているのは……何となく予想が着いているのだけれど。

そして、これは余談だけど、架凪呀さんからは私はどうやらライバル視されているらしい。

それは架凪呀さんの学年順位が私に続いていつも二位だから――らしい。

どう考えてもそれ以外の事でライバル視されているように思えないでも無いのだが。

今は気付いていないフリをしている。

嘘も方便。

時にはそういう嘘も必要なのだ。

「どうしたの？　何か急いでいるみたいだけど……もしかして、さっきから聞こえてくる爆発音と何か関係しているの？」

「……」

……鋭い。

流石は学級委員長。

ここで“流石”と“学級委員長”という言葉をセットにして使っていいのかは――解らないけれど。

「……う、うん、まぁね。何か近くで爆発が起きているみたいだから、早く逃げなきゃって、そう思って」

「でも、夜華さんの家ってここから逆方向よね？　それなら、むしろ私の目には夜華さんが謎の爆発が起きている渦中に巻き込まれに行っているようにしか見えないんだけど」

……。

「……ねぇ、架凪呀さん」

「何？　夜華さん」

「こんな時に質問するべきがどうか悩んだのだけれど……気になる

から、聞くね？」

「ええ、どうぞ？」

「どうして、架凪呀さんは私の家の場所を知っているのかな？」

確か架凪呀さんには家の場所を教えていなかったはず……。

「簡単な事よ。私が学級委員長だから」

「うん、それは理由になっていそうで理由になっていない微妙な理由だね、架凪呀さん」

「それは冗談で」

「冗談なんだ」

「私が夜華さんをストーキングしたからよ」

「そっちが冗談であって欲しかったなぁ！」

得意気に言う彼女に私は思わずそう声を上げてしまっていた。

これがいわゆるツッコミというヤツなのだろう。

私も時々秀ちゃんにツッコミを入れるけれど……ここまで大声を上げた事は無い。

そっか。

秀ちゃんはいつもこんな感覚を味わっているのか……なるほど。

何だかスカッとした清々しい気分になった。

……って。

今はそんな事はどうでもよくて。

「あら、夜華さんがそんな声を上げるなんて珍しい事もあるものね。今日は空から槍でも降って来るのかしら？」

「まぁ、今のは流石に声を上げざるを得ない状況だったからね……」

「……真之乃秀と同じ事を言ってる」

「えっ？」

「あっ、いや……何でも無いの。独り言だから、気にしないで」

「そ、そう？」

何か秀ちゃんの名前が聞こえたような気がしたのだけれど……。

気のせいだったか。

「……それで？」

「えっ？　何？」

「夜華さんはどうしてこちら側に向かっているの？　何度も言うけ

ど、夜華さんの家はここから逆方向よね？」

「ていうか、私をストーキングした話は否定しないんだね」

「仕方ないじゃない。紛れも無い真実や事実を否定するほど私は馬鹿じゃないわよ」

「うーん、でも、私は流石に一度でいいからその事実だけは否定して欲しかったなぁ……」

苦笑を見せる私。

出来れば嘘であって欲しかった。

だって、架凪呀さんは私のクラスメイトで、学級委員長だったから。

「まぁ、私は夜華さんのクラスの学級委員長だからね。クラスメイトをストーキングして、家の住所とかを調べるくらい、やって当然の事よ」

「架凪呀さん、多分夜華さん以外の世界中の学級委員長はそんな事をしていないと思うよ？」

まぁ、解らないけれど。

そうであって欲しい――今の言葉は半分私の願望でもあった。

「心配しないで、夜華さん」

「何？　実は今の話は全て嘘だったとか？」

「そう、嘘よ。夜華さんと真之乃秀をストーキングした以外の話は全て嘘」

「……出来れば、嘘でもいいから、私と秀ちゃんをストーキングしたという話も嘘だって言ってくれないかな？」

「却下するわ」

「やっぱりね……うん、解ってはいたけれど」

私は苦笑した。

と言うか、最早苦笑しか浮かべる事が出来なかった。

「それで……話がいつの間にか結構ずれていたけど。夜華さんはどうして今、この状況で家とは反対の方向に向かっているの？」

「それは――」

と、私がそう言い掛けた瞬間、今までよりも遥かに大きな爆発音が住宅街に轟いた。

私はその爆発音が聞こえて来た方を振り向く。

そして、私はその方向に空へと延びる煙の柱を発見した。

それによって、先ほどから聞こえてくる音が爆発によるものだと私は確信する。

「……」

私は今すぐにでもここから駆け出したかった。

駆け出して――秀ちゃんやウリアちゃんの下へと駆け付けたかった。

でも……今目の前に居る架凪呀さんを無視する訳には行かない。

「……どうすれば」

空に向かって延びるその煙の柱を見据えながら私がそう呟いた時だった。

青空の下――私はそこにほんの一瞬だけ星のように煌(きらめ)いた赤い光を捉えた。

「……あれは」

そして――その光の正体に辿り着いた私は安堵の笑みと息を吐く。

すると、架凪呀さんがこちらを振り返ってきた。

「どうしたの？　何か安心しているみたいだけど……」

「あ、ああ、ううん。別に何でも無いのよ、何でも……」

「……ふーん」

怪しげにこちらを見据えてくる架凪呀さん。

まぁ、疑われるのも当然の事だ。

さっきから私の行動は謎の部分が多過ぎる。

それこそ、自分でも解ってしまうくらいに。

「……まぁ、いいけど。それじゃあ、私は今から家に帰るから」

「えっ？　帰っちゃうの？」

「ええ。こんな所に居たら私まであの謎の爆発に巻き込まれるかもしれないし……ちょっと、友達に参考書を貸す約束をしているから」

「ああ、そうなんだ」

「ええ、そうなのよ」

それじゃあ、また今度ね――と架凪呀さんは私に小さく手を振ってその場から走り去ってしまった。

「……そういえば」

そういえば、架凪呀さんの方こそ、どうしてこんな所に居たのだろう。

いや、今は夏休み中だから――別に架凪呀さんがどこに居ようとそれは自由なのだろうけれど。

図書館に用でもあったのだろうか？

そんな事が気になったけど――今は、何より。

「……そうだ、秀ちゃん……！」

先ほどの赤い光――あれはきっとウリアちゃんだ。

ウリアちゃんが駆け付けたなら、もう秀ちゃんは助かっている頃だろう。

そして、その私の予想はどうやら的中していたようで。

私が先ほど煙の柱が上がっていた場所を振り返ると同時にまた大き

な爆発音が聞こえて来た。

その直後――その爆発が起こった辺りから再度赤い光が空中に飛びだして。

そのまま秀ちゃんの家の方角へと飛んで行った。

「良かった……ウリアちゃん、『魔導獣機』を倒したんだ」

そう呟いた私は駆け足で秀ちゃんの家へと向かい始める。

怪我はしていないだろうか。

血は出ていないだろうか。

頭を打って気絶でもしていないだろうか。

そんな色々と――本当に色々と秀ちゃんの事を気に懸けながら。

私は住宅街の通路をその人の家に向かって急ぐのだった。

◆◆◆

秀ちゃんの家の玄関の前に立った所で私はハッとして立ち止まる。

それから、鞄の中から私は手鏡を取り出した。

それで、私は今の前髪の調子を確認する。

いや、前髪に調子の何も無いのだろうけれど。

私の言う“調子”というのは、その――前髪の“状態”という事である。

……それなら、前髪の“状態”って言った方が早いよね。

うん。

よし、今度から前髪の状態で統一しよう。

――それで、私は秀ちゃんの家の前で前髪の状態を確認する。

走って来たので、前髪どころか髪全体が微妙に崩れていた。

折角出る前に丁寧に整えて来たのに……。

ていうか、走って来たから、微妙に洋服とかも歪んでしまっている。

髪や洋服と――それらを全て直すのに私は五分ほどの時間を要してしまった。

「前髪良し、髪全体良し、洋服良し……よし！」

私は手鏡をパタンと閉じる。

これで私の身嗜(みだしな)みは完璧になった――はず。

ミッションコンプリートである。

そんな訳で、私は秀ちゃんの家のインターホンを押した。

それから、私は腕時計で現在の時刻を確認する。

現在の時刻は――午前１１時３８分。

うん、中々丁度良い時間だ。

今日も命を永らえる事が出来た秀ちゃんの為に私が腕を揮って手料理をご馳走してやろう。

「……秀ちゃん、喜んでくれるかな」

そして、私がそう呟いた時だった。

「ハーイ、今開けまーす」

玄関扉の向こう側から聞こえてくる秀ちゃんのいつものほんの少しだけ気の抜けた声。

その気の抜けた声を聞くと私も気が抜けてしまう反面――何だか、最近は安心してしまう。

今日も秀ちゃんが家に居てくれた――みたいな。

そんな安堵感。

幼馴染？

玄関扉のロックを解除する音が聞こえて来て、その扉がこちら側に開かれた。

ちなみに、これは余談だけれど、秀ちゃんの家を訪ねる時は玄関扉の開き方に注意をしておかなければならない。

インターホンを押してそのままの場所に居ると、開けられた玄関扉で顔を打ってしまうからだ。

無論、秀ちゃんの幼馴染である私はそんな失敗はしない。

開けられた玄関扉の向こう側には勿論秀ちゃんの姿があって。

「……って、おう、霧歌か。今日は何か色々と知り合いに会う日だな」

――そう言ってきた秀ちゃんの体の至る所には包帯や絆創膏やガーゼが貼られていた。

「それで？　どうした霧歌――」

「秀ちゃ――――んっ！」

「うおあっ！？」

何か秀ちゃんが言ったような気がしたけれど、私はいつの間にか我を忘れて秀ちゃんに抱き着いていた。

いや、跳び掛かっていたと言った方が良いのかもしれない。

「ちょっ！？　霧歌！？　霧歌さん！？」

「な、何でこんなに傷だらけなの！？　いつもなら戦闘に巻き込まれても傷一つ無しで帰って来るのにぃ！」

「い、いや、それはそうだけど！　そうなんだけど！　とりあえず俺から離れろ！　いや、本当は離れて欲しくないけれど、何かいつものお前らしくないから、とりあえず離れ――」

「ああ――――っ！」

すると、その秀ちゃんの声を遮ってまた別の声が私の耳に届いた。

私は顔を上げる――そこには二階に続く階段の前でこちらを指差しているウリアちゃんの姿があった。

何やら、ウリアちゃんは口をあんぐりと開けていて――こちらを指差すその人差し指はワナワナと震えている。

「しゅ、秀と霧歌……な、ななっ、何を二人で、な、何をそんな所で、な、ななっ、何をそんな……ふ、ふしだら、な……！」

「……ふしだら？」

「……ふしだら？」

私と秀ちゃんの声が重なる。

それから、私達は互いを見合って――おそらく、秀も私と同じ事を感じ取ったのだろう。

「ちっ、違う！」

「これは違うのよ、ウリアちゃん！」

互いに頬を赤らめた私と秀ちゃんは素早く玄関に立ち上がった。

「ち、違うんだよ、ウリア！　これは違うんだ！」

「そ、そうよ！？　私達は別にふしだらな事も疾(やま)しい事もしていないわよ！？」

「何かさぁ！　玄関を開けたら急に霧歌が俺に襲い掛かって来てさぁ！」

「そうそう、私が秀ちゃんを襲って――って秀ちゃん！」

「いや、だって、実際そうだったじゃん！」

そうだった……。

私とした事が、我を忘れて傷だらけの秀ちゃんを見て思わず跳び掛かってしまったのだ。

「いや、その、ゴメン……傷だらけの秀ちゃんを見たら、居ても立ってもいられなくて、つい……」

「……霧歌、お前――」

「なーんだ。私はまたてっきり秀が欲望を抑え切れずに霧歌に襲い掛かったんだと思ったわ」

「何か勝手に濡れ衣を着せられている!?　ていうか、“また”って言うなよ！　俺はまだ霧歌に襲い掛かった事は無い！」

「という事は、秀はこれから先の未来のどこかで少なからず霧歌に襲い掛かろうとしているのね？」

「当たり前だろ！」

「秀ちゃん、そこは肯定しちゃ駄目よ」

とりあえず、私は秀ちゃんにツッコんでおいた。

ていうか、流石に今のはツッコまざるを得なかった。

それ以前に、秀ちゃんは少なからず私の事を常に狙っているのか…

…これは気を付けなければ。

まぁ、正当な手段を踏めば許可はして上げるつもりだけど。

……ううん、何でも無い。

出来れば、今の私の発言はすぐにでも忘却して欲しい。

ていうか、忘れて下さい。

お願いします。

◆◆◆

色々とゴタゴタはあったけれど、私は当初の計画通り、秀ちゃんとウリアちゃんに昼食を作って上げる事にした。

秀ちゃんの家には基本食材が無いけれど、この前作った食材の余りが冷蔵庫に残っていた事を私は覚えていた。

この前はオムライスを作ったから……ソーセージや玉ねぎ、それからコーンやピーマンも残っている。

ていうか、秀ちゃんに料理を作るって意気込んで来たのは良かったけれど――私はそれしか食材が残っていない事に今更ながら気付いた。

仕方が無い。

少し簡素なものになってしまうけれど……ソーセージと野菜で擬似肉野菜炒めでも作るか。

そして、そんな大雑把（おおざっぱ）な計画の下（もと）、私は今昼食を作っているという訳である。

隣では秀ちゃんが野菜を切ってくれていた。

「野菜くらい、普段料理をしない俺でも切れるよ」

——と言うのが秀ちゃんの言い分だったのだが。

先ほどから横目で一瞥を繰り返している限り、その言い分とは反対に秀ちゃんはどうやら野菜を切り慣れていないようだった。

ていうか、むしろ下手だ。

見ているだけでハラハラする。

料理を終える頃にはまた一つ絆創膏が増えているのではないだろうか。

そんな不安さえも感じてしまうほどの手付きの悪さだった。

「……あ、あの、秀ちゃん？」

「霧歌。今の俺に話し掛けるな。俺の今の気を散らしてしまうと俺は自分の指を間違えて切り落としてしまいそうだ」

「そ、そっか……それならうん、仕方ないね」

苦笑と共に食い下がる私。

本当は秀ちゃんと野菜を切る担当を変わって上げたかったのだけれど……。

指を切り落とされるよりかは絆創膏が一つ増えた方がどう考えてもマシだ。

私はフライパンに油を敷きながらそんな事を思った。

ちなみに、ウリアちゃんはリビングでテレビを観ている。

何を観ているのかとキッチンとリビングを隔てている壁に空いた長方形の穴から私はウリアちゃんの様子を覗いてみた。

ウリアちゃんはテレビを観ているにも関わらず退屈そうにテーブルに頬杖を着いてチャンネルを一定のテンポで変え続けていた。

おそらくは観たい番組が無いのだろう。

まぁ、今は丁度午後12時くらいだし……この時間帯には余り面白い番組はやっていないのが逆に普通だから仕方ない。

そして、私は明らかに暇そうなウリアちゃんに苦笑を見せるとキッチンへと顔を引っ込める。

「よし、切り終えた！」

それと同時に秀ちゃんのそんな声が聞こえて来たので私はそちらを振り返った。

かなり歪な形になっていたけれど――秀ちゃんはちゃんとピーマンを切り終える事が確かに出来ているようだった。

歪な形だったけれど。

大事な事なので二回言いました。

「フッ、俺に掛かればピーマンを解体するなんて朝飯前だぜ」

「もうお昼だけどね。ていうか、解体って……そこまで大袈裟に言わなくても」

たかが“ピーマンを切る”如きで得意気になっている事にはツッコまないでおいた。

何と言うか――秀ちゃんにも、プライドはあるだろうから。

「でも、霧歌。もう俺は限界だ、精神的に……ちょっと休んだら、体力的には回復したんだけど、最早精神的に俺はもうこれ以上の行

動は無理のようだ」

「ああ、うん、解った……後は私がやるから。秀ちゃんは、ウリアちゃんと一緒にテレビでも観てて？」

「ああ、そうさせて貰うよ。後は任せた、霧歌」

「うん、後は任されたよ、秀ちゃん」

そして——ふら付いた千鳥足でキッチンを後にする秀ちゃんを見ながら私は苦笑を浮かべて。

「……さて、始めますか」

私は料理を開始する。

私の手料理を食べて美味しいと笑ってくれるその顔を——連想しながら。

◆◆◆

ソーセージの擬似肉野菜炒めを完成させた私はそれをリビングで待つ秀ちゃんとウリアちゃんのもとに持って行った。

「ハイ、出来ましたよー」

「おっ、出来たか！」

逸早く私の手料理に食い付いて来てくれたのは秀ちゃんだった。

「オイオイ、香りも見た目も美味い料理じゃねーか」

「……秀ちゃん、“美味い”ってまだ食べていないよね？」

「霧歌の料理は食べなくても美味いと解るくらいに美味いものだから、別に先に美味いと言っても罰は当たらないんだよ」

「そ、そうなんだ」

何か知らない間に私の料理は過大評価されているようだった……。

何だろう。

何か嬉しい反面、恥ずかしいなぁ。

「でも、今更だけど、流石にご飯は余っていなかったんだよねぇ……どうしよっか？」

「それなら心配するな、主食は俺が用意するよ」

「主食って？」

「カップラーメン」

「ああ……」

確かに麺類は炭水化物だからご飯の代わりにはなるだろうけど……。

例え“擬似”であっても、肉野菜炒めにカップラーメンって何だかカロリーが高い組み合わせじゃないだろうか。

またスカートのジッパーが上がらなくなったらどうしよう……。

「それじゃあ、秀。ちゃっちゃと作って来てねー」

「……お前、本当にいい加減にもうそろそろカップラーメンの作り方くらい覚えろよ」

「あら、それが今日秀の命を救った恩人に対する言葉遣いかしら？」

「へいへい、悪う御座いましたよ」

「秀」

「……何だよ」

「“ウリアお嬢様”が抜けているわよ――って痛っ！」

そう言い切る前に秀ちゃんから頭にチョップを食らうウリアちゃん。

「な、何をするのよ！」

「お前が調子に乗って来たからだ。出る杭は打たれると言うだろう」

「な、何よぉ！　助けて上げたんだから私の事をそうやって呼んでくれてもいいじゃない！」

「それなら、毎日お前に朝・昼・夜の三食を提供している俺はお前

の胸を揉んでいいくらいの権利はあるはずだ」

「無いわよ！　そんな権利！」

……。

そんな二人の遣り取りに――苦笑する私。

ていうか、何か私さっきから苦笑しかしていないような気がする。

「……」

それにしても……この二人は毎日この家でこんな会話を交わしているのか。

何だろう。

何だか、羨ましい。

……いや、別にウリアちゃんが秀ちゃんからセクハラ的な発言を受けているのが羨ましい訳では無くて。

何だろう……何かこう、一つ屋根の下で仲睦まじくしている感じ？

それが何だか私には羨ましかった。

いつか私にも……こんな日が訪れてくれるのだろうか。

そんな事を思ってみたり。

「それじゃあ、俺はカップラーメンを作って来るから。それまで待っててくれ」

「ハーイ」

「うん、解ったわ、秀ちゃん」

私はウリアちゃんと共に秀ちゃんの背中を見送って――それから、ウリアちゃんの“服装”を今一度見た。

実は、先ほどからずっと気になっていたのだけれど……。

その話題に触れるタイミングが解らなくてずっと放置していたのだ。

触れるのなら、きっとそれは今だろう。

「……ねぇ、ウリアちゃん？」

「ん？　何、霧歌？」

「その……どうして、ウリアちゃんはそんな格好をしているのかな？」

ウリアちゃんの格好――それは私が以前この家に泊まりに来た時にウリアちゃんが着ていたもの。

セーラー服だった。

「ああ、これ？」

そう言って――ウリアちゃんは自身の格好を見下ろして。

「実は……秀からこれを着るように最近は強要されていて――」

「聞こえているからな」

キッチンから飛んで来るその声。

振り返ってみると、キッチンとリビングを隔てる壁に空いた長方形の穴からこちらを――主に、ウリアちゃんの方を睨み付けている秀ちゃんの姿があった。

「……と、言うのは冗談で」

そして、苦笑と共に話を続行するウリアちゃん。

「私、この前霧歌が泊まりに来た日からこの……何だろう、スースーした感じ？　この洋服って着ていると涼しいから……何か病み付きになっちゃって」

「ふーん……そうなんだ」

確かに……涼しい事は涼しいだろうけど。

何か……心配になってくる。

勿論、秀ちゃんがこのウリアちゃんの格好に食い付かない訳が無い訳で。

秀ちゃん、こういう格好をしている女子とか好きそうだからなぁ……。

それで、ウリアちゃんはこれを天然でやっていると来ている。

「……あざとい」

「えっ？　何て？」

「う、ううん、何でも無いの、何でも」

しまった。

ついつい本音が口を衝いて出てしまった。

「そういえば……ウリアちゃんの服装と言えば、家の中では――髪型もそうだけど、あの戦闘服は着ていないのね」

「ああうん。髪型もずっとツインテールじゃ疲れるし……洋服も右に同じよ」

「ふーん……ねぇ、ウリアちゃん」

「何？」

「あの戦闘服って、誰でも着れるの？」

「……誰でも、って？」

「いや、だから、その……ボタン一つで着る事が出来るのなら、誰の体にもフィットするのかなぁ、って」

「ああ、そういう事ね。確かに、霧歌の言う通り、あの戦闘服は誰の体にもフィットするように作られているわ。ボタンを押した人の指先から、その人の体のサイズを計測して、その大きさに合うように自動的に伸縮するようになっているから」

「ふ、ふーん……そうなんだ」

「……それで、何でそんな事聞くの？　まさかとは思うけれど、霧歌あの戦闘服着たいの？」

「ええっ？　い、いや……それはどう、かな？」

誰でも――誰のサイズにも自動的にフィットする点には正直惹かれるけれど。

ウリアちゃんが着ているあのレオタードのような戦闘服を着た私――。

……。

いや、駄目だ。

無理無理。

色んな意味で何かもう駄目な気がする。

「……うーん、やっぱり私にはあの戦闘服は無理かも――」

「何っ！？　霧歌があの戦闘服を着るだって！？」

「秀、霧歌も誰もまだそんな事は言っていないから」

キッチンからカップラーメンの容器を片手にそんな声を上げながら秀ちゃんが顔を出してきた。

そして、そんな秀ちゃんに冷静なツッコミを入れるウリアちゃん。

何かもう……手慣れている感じだった。

それほど、この家では今のような発言が日常茶飯事という事なのだろうか。

コミュニケーションを築くのは大切だろうけれど……何かそれは色々と駄目なような気がする。

私があの戦闘服を着るのと同じように。

幼馴染？

「何だ、着ないのか……まぁ、今のタイミングで霧歌があの戦闘服を着たとしてもカメラが無いから意味が無いけどな……」

「秀ちゃん、そのカメラで一体全体何を撮るつもりだったのかな？」

「まぁ、最低でも心のアルバムに収納すれば大丈夫だけど……」

「……」

どうやら、秀ちゃんの中には“心のアルバム”と呼ばれる記憶機関が存在するらしい。

それならば、当然私がその中身を確認する術は皆無なのだけれど――何と言うか、如何わしい思い出ばかりが詰まったアルバムのような気がする。

気がするだけだけど。

「時にウリア。人の記憶を写真や紙に印刷する術は２０５６年の未来の技術には存在しないのか？」

「えーっと……多分あったと思う」

「そうか……いや、それだけ聞ければもう充分だ。そうだな、それなら俺は絶対に２０５６年の未来まで死ぬ訳には行かないな」

「秀ちゃん、そんな不真面目な理由で未来への生存を志（こころざ）さないで」

ていうか、２０５６年にはそんな如何わしい――いや、素晴らしい機械が発明されているのか。

これは拙い。

絶対に秀ちゃんだけには購入させないようにしないと。

「ていうか、秀。早くカップラーメン作ってよ」

「ああ、悪い悪い。今作るから」

「早くしてよ。でないと折角霧歌が作ってくれた料理が冷めちゃうじゃない」

キッチンに戻って行く秀ちゃんに追い打ちを掛けるようにウリアちゃんは言った。

「ゴメンね、ウリアちゃん。秀ちゃんっていつもあんな感じだから……一緒に住んでて、色々と気苦労があるでしょ？」

「まぁね……秀はいつもあんな感じだから、毎日毎日私の貞操の危機を感じざるを得ないし」

「て、貞操って……」

まぁ、その言葉を否定はしないけれど。

「でもまぁ……逆に言えば、秀のあの性格でこっちは退屈しないかな。秀は変態だし、セクハラばかりしてくるけれど……でも、一緒

に居て面白いし、楽しいし、何よりこっちまで明るくなれるから」

「……」

そのウリアちゃんの言葉と――その嬉しげに語る表情に私はハッとする。

そうか。

ウリアちゃんは……その秀ちゃんの内面に気付く事が出来たのだ。

秀ちゃんは確かに――言っては悪い気がするけれど、変態で、セクハラ行為や発言ばかりしてくる人だ。

でも、秀ちゃんはとても良い人だ。

それは、秀ちゃんの親友であり、その姿をずっと隣で見て来た幼馴染である私だからこそ――言える言葉で。

秀ちゃんはいつも明るくて、一緒に居たらこっちまで明るく元気になって。

一緒に居たら楽しい――秀ちゃんはそんな人だ。

だからこそ、その内面に気付けた人は秀ちゃんの周りに自然と集まるようになる。

それは私であり、ウリアちゃんであり。

そして多分――今日偶然出会った、あの人も。

「……ねぇ、ウリアちゃん」

「ん？　何？」

「これからも多分……秀ちゃんと一緒に暮らしたり、秀ちゃんの事を護ったりして、色々とまだまだ気苦労すると思うけれど」

そして――私はウリアちゃんに向かってこう言った。

「秀ちゃんの事、宜しくね？　ウリアちゃん」

「それは……まぁ、勿論そう思っているけど。何で？　何で急にそんな事言ってきたの？」

「うーん……何でだろうねぇ？」

私はそう言って苦笑する。

本当に何で私はそんな事を言ってしまったのだろう。

「何よそれ……変な霧歌」

「……本当にね」

本当だ。

今日の私は――と言うよりも。

最近の私は色々と変だ。

自分でも――そう思ってしまうくらいに。

◆　◆　◆

「なぁ、ウリア」

昼食の席にて、秀ちゃんがカップラーメンの蓋を開けながらウリアちゃんにそう問いかけた。

ちなみに、秀ちゃんのカップラーメンはカレー。

私がスタンダードで、ウリアちゃんがシーフードである。

「今日俺を襲った『魔導獣機』……あれ、空から出て来なくて、道のど真ん中から急に出て来たんだけどさ。ああいうのも有りなのか？」

「まぁ、別に『異空繋門（ワームホール）』は空に出現させる義務は無いからね。それはまぁ、名前に“空”って付いているくらいだから空に出現させる方が手軽なのよ？　空には殆ど障害物が無いし、地上には建物がいっぱいあるから――その分、空間の質量が圧迫されていて、『異空繋門』が出現させ難いのよ」

「でも、今日の『魔導獣機』は難なく出て来たぞ？」

「それについては――考えられる原因は2つ。一つは、今日倒した『魔導獣機』がいつも転送されてくる機体よりも比較的サイズが小

さかったから。その分、空間を圧迫しなかったのね――そして、もう一つは、その『魔導獣機』を転送した人間がかなりの実力を持った人物だったか」

「えっ？　転送するのに実力云々が関係あるのか？」

「一応、ね。未来から転送する訳だから――勿論、過去の建物の位置とかは未来とは断然変わってくる。だから、未来で座標を計算して、建物も何も無い場所に『異空繋門』を出現させないと、もし建物がある場所に『魔導獣機』を転送させたら、その建物の『魔導獣機』が時空上で融合してしまうのよ」

「……ちなみに、融合するとどうなるんだ？」

「建物の壁がその機体の一部を押し退けて減り込んだり、その機体の一部が建物の壁一部を押し退けて減り込んだりするわ。そうね、それでもまだ解らないのなら、人間で例えると――」

「いや、例えなくていい。例えなくていいから」

その秀ちゃんのツッコミはまさにファインプレーだった。

内容は解らないけれど、食事中にする話では無い事だけは直感で解ったから。

「まぁ、何にしても、『異空繋門』が出現するのは空だけじゃないって事よ。そして、地上に出現させるのは座標軸の計算を一瞬で出来る実力も伴われる――まぁ、今日転送された『魔導獣機』が小さかったから、そこまでの実力は要らないのかも知れないけどね」

「そうだったのか……今度から注意しないとな」

「ていうか、そもそも今回の一件は秀が悪いんだからね？　ちゃんと約束したのに……早く帰って来るって」

「ああ、いや、その……ちょっと図書館で友達に会っちゃってさ」

「友達？　何をまたそんな言い訳を言っているのよ、秀は」

「いや、言い訳じゃないって。本当に会ったんだからさ」

「だって、秀に友達が居る訳ないじゃない」

「そこかよ！　有りもしない理由で俺の話を真っ向から否定するな！」

「そうよ」とここで秀ちゃんに加勢するのは他でも無い私である。

「秀ちゃんにだってちゃんと友達は居るわよ」

「そうだそうだ！　言ってやれ、霧歌！」

「秀ちゃんは確かに、授業の合間の休み時間も一人で机に突っ伏して昼寝をしていて、昼休みは毎日私と一緒に屋上でお昼を食べていて、放課後に帰る時はいつも私と一緒に帰っているけれど、ちゃんと友達は居るわよ！」

「お前は一体全体どっちの味方なんだよ！」

えっ？

「えっ？　何が？」

「“何が？”じゃねーよ！　お前は遠回しにだけど確実に俺を追い込んでいるだけじゃねーか！　単に俺の心の傷を抉っているだけじゃねーか！」

「いや、私はウリアちゃんにありのままの秀ちゃんを知って貰って、それから秀ちゃんに友達がちゃんと居る事を知って貰おうと」

「ありのままを話しちゃ駄目じゃん！　少しは嘘を交えて話して貰わないと！」

「駄目だよ、秀ちゃん。真実を相手に知って欲しいのなら、ありのままの自分を相手に語らないと」

「いや、そうなんだけど……！　それはそうなんだけど……！」

何やら苦しそうにテーブルに突っ伏す秀ちゃんなのであった。

どうしたのだろう。

お腹でも痛いのだろうか？

◆　◆　◆

結局、秀ちゃんとウリアちゃんの夕飯は私が作る事になった。

まぁ、私から言い出した事だったので……と言うか、私も秀ちゃん達に料理を作れてうれしいので。

それはそれで良いのだけれど。

「本当に良いのか？　霧歌」

玄関先で靴を履く私に秀ちゃんは心配そうに後ろからそう声を掛けてくれた。

「夕飯まで作って貰って……材料代とかはまた霧歌が払うんだしさ。俺達にはカップラーメンがあるから、それはそれで別に良いんだけど……」

「良いのよ。気にしないで」

そう言って私は玄関に立ち上がる。

「私の分も作るんだから、食材のお金の事は大丈夫だし、私が作りたくて作るんだから……そういう事は、言いっこ無しだよ？　秀ちゃん」

「そ、そうか？　それなら良いけど――いや、良くはないんだけど。何かもう本当に……悪いな、霧歌。最近は特に色々と」

「良いのよ。それも気にしないで」

そう言って――私は後ろを振り返って秀ちゃんと向き合った。

「秀ちゃんにお節介を焼いているのも私の勝手だし。秀ちゃんにお節介を焼かされるのはもう慣れているし……それに、私が秀ちゃんにお節介を焼いているのは、今までのお礼のつもりだから」

「お礼？　俺何かお前にお礼を言われるような事をしたっけ？」

「さぁ……私が抱いているこの気持ちは、秀ちゃんから見たらお礼を言われるのに値しない事なのかも知れない。ていうか、多分秀ちゃんはその事を覚えていないと思う……何しろ、何年も前の事だから」

――それでも。

私はこれからも秀ちゃんに感謝し続けるだろう。

あの日――幼稚園の砂場で遊んでいる私に秀ちゃんが話しかけてくれなかったら。

今の私は、存在しないのだから。

「何だ、そんなに昔の事なのか？　それなら……多分、本当に覚えていないかも知れないな」

「だから良いって。それなら、私が勝手に秀ちゃんに感謝し続けるだけの話だから」

「それも何だかなぁ……俺が覚えていないのに、お前から感謝されるというのも何だか駄目なような気がする」

「うーん」とそして秀ちゃんは何やら腕を組んで悩むと。

「……そうだ、霧歌」

「何？　秀ちゃん？」

「宿題とか、夕飯とか、色々と俺にしてくれるお前に……俺から何かしらのお礼をしたいと思う」

「お礼？」

「今度、遊園地にでも、行くか？」

「……」

――その秀ちゃんの問いかけに。

私は思わず言葉を失ってしまった。

声が、出なかった。

その突然の――秀ちゃんの、問いかけに。

「……えっ？　ええっ？」

「だ、駄目か？　やっぱり、遊園地とか……今更、子供っぽいかな？」

「う、ううん、そういう訳じゃ、ないの……そういう訳じゃ、ないの。ただちょっと……ちょっと、その、嬉しくて」

「そ、そうか？」

「うん。涙が出てしまいそうなくらい」

「それは……大袈裟じゃ、ないか？」

そう言って苦笑する秀ちゃん。

その苦笑に私も思わず苦笑する。

「……でも、あれだよね、秀ちゃん？」

「えっ？　何がだ？」

「ウリアちゃんもどうせ……一緒なんでしょ？」

「いや、俺は別に二人きりでも良いけど？」

「……二人、きり」

確かにそれは嬉しいけれど――それは駄目だ。

今日みたいな事が――秀ちゃんの身にいつ降り掛かるか解らない内

は。

秀ちゃんの傍にはウリアちゃんが居ないと。

……少し、勿体無いけれど。

「……ううん、どうせ行くなら、ウリアちゃんも一緒に行こうよ。その方が楽しいだろうし、秀ちゃんの身を護る為にもその方が良いだろうし」

「そうか……それじゃあ、今度、ウリアも一緒に三人で遊園地に行くとするか」

「うん、そうしようよ。大体、海にも行っていないんだから、その埋め合わせも兼ねて、絶対に行かないとね」

「そう言えばそうだったか……それじゃあ、海にも行かないとな。霧歌やウリアの水着姿も拝みたいし」

「ん？　何か戯言を言ったかな？　秀ちゃん」

「いや、確かに戯言は言ったけれど他には何も言っていない。ていうか、戯言だから無視して貰っても構わない」

「仕方ない、今回ばかりは無視して上げよう」

「恩に着るよ、霧歌」

「その代わり、遊園地に連れて行かなかったら絶対に許さないからね？」

「解ってるって。俺が今まで約束を破った事があるか？」

「うーん……秀ちゃんの割には意外と少ないかも知れないねぇ」

「オイ」

「アハハ。冗談だよ、冗談」

「それじゃあ」と私は玄関扉を押し開ける。

「夕飯の買い出し、行って来るね」

「おう、いってらっしゃい、霧歌」

「……」

「……何だよ」

「い、いや、別に……」

何だか夫婦同士のお見送りみたい――とは口が裂けても言えなかった。

「そ、それじゃあ、行って来るね」

「ああ、宜しく頼む」

「うん、宜しく頼まれた」

そう言って――私は玄関扉を閉めて茜色に染まった地上の世界を歩き出す。

そして――私は地上と同じく茜色に染まった天空の世界を仰いだ。

「……」

――何だろう。

そんな空を見上げていたら、何だか心の中が清々しい気持ちで溢れた。

そんな気持ちのまま私は静かに笑みを浮かべて住宅街の通路を歩き出す。

大好きな友達と、大好きな親友の為にまた手料理を振る舞うべく。

私は、近くのスーパーに向かって歩き出した。

8月5日

8月5日。

「い、痛てて……」

この日――俺は筋肉痛によって目を覚ました。

「あっ、ヤバい、体全体が痛い……」

それはおそらく――と言うか、確実に昨日の出来事が原因だな。

あれだけ『魔導獣機』から逃げる為に住宅街の中を駆け回ったら……それは、ねぇ？

筋肉痛になっても致し方が無いと俺は思うんだよ、うん。

まぁ、多分それは年頃の高校二年生の男子が言う台詞じゃないんだろうけど……。

運動しようかなぁ。

腕立て伏せとか、腹筋とか。

三日坊主で終わらせてしまう自信があるが。

「う、ウリア……悪いけど、ちょっと体を起こすの手伝ってくれないか――」

――と。

俺はそこで口を噤む。

先に言っておけば、ウリアはまだ起きていなかった。

極度の疲労からウリアが夜更かししている間に俺が就寝してしまった事もあるのだろう。

だから、まだ時計を見ていないけれど……多分、時刻は早朝辺りに違いない。

ベランダに続く大窓――そこで閉め切られたカーテンの隙間から射し込んでいる太陽の光の強さを見てもそれが伺える。

そして、これは余談なのだが、ウリアは俺よりもいつも早く起床している。

本人に聞く所によると、夜更かししているのは俺と一緒なのだが――何やら空腹で目が覚めるらしい。

全く、俺よりも小柄なくせにその小さな体のどこに栄養が吸収されているのか。

胸に吸収されているのだろうか？

それにしてはやけに小さいような気がする――って、それは今はどうでもよくて。

いや、実際の所、どうでもいい事は無いのだけれど。

「……」

もう一度言うけれど……俺は今日、ウリアよりも早く起きた。

いや、そこに問題は無い――問題はそこでは無いのだ。

問題、なのは。

「……」

ウリアは霧歌が先日この家に泊まりに来た時から寝間着にセーラー服を使用している。

だから、今俺の目の前にはまだ起床していないセーラー服を着たウリアの姿があって。

その寝格好はセーラー服を着ているからなのだろう……スカートとか上着だとか、もう色々な所が大胆にも肌蹴(はだけ)てしまっていて。

ウリアの白い太腿(ふともも)だとか、白いお腹やおへそだとか。

その辺の所も……色々と、垣間見えてしまっていて。

いや、垣間見えてはいないな。

どちらかと言うと、垣間無く隙間無く色々と見えてしまっている。

「……」

うわ、どうしよう。

本当は今すぐにでも体を起こしたいのだけれど――今、体を起こしてしまったらこの至福の時が消え失せてしまいそうな気がする。

そんな事を思っていた時、不意にウリアが寝返りを打った。

その際、ウリアの真っ白な肌を持つ両脚が動いて――そして。

その黒いスカートの中にある何かピンク色のものが垣間見えた。

「……」

外から小鳥の囀る声が聞こえて来た。

俺は部屋の時計を振り仰ぐ。

時計の針は午前7時28分を指していた。

ちなみに、俺の携帯のアラームが作動するのは午前9時半である。

「……」

俺は、筋肉痛で痛む体を何とか動かして――寝返りを打って、顔を“ウリアの方に向けて”二度寝をする事にした。

よもや、こんな朝からこんな至福な時を過ごす事が出来ようとは。

思っても見なかったと言うか、夢にも思わなかったと言うか。

何と言うか……ね？

……ん、ゴホン。

いかんいかん……朝だというのに何やらテンションが上がって来た。

直ちに二度寝をしなければ。

そんな訳で完全に目が覚めてしまった俺であったが、その瞼が重くなってくるまで目を開けておく事にした。

そういえば……２０５６年の未来には人の記憶を写真に起こす機械が発明されているんだっけ。

早く発明されないかなぁ。

ていうか、発明されて購入したとしても絶対にウリアや霧歌には見せられないな。

見せたら殺されてしまいそうな気がする。

いや、絶対に殺されるな。

命を懸けてもいい。

まぁ、“絶対に殺される”という予想に自分の命を懸けるというのは――些かおかしなものなのかも知れないけれど。

◆◆◆

薄暗い部屋に携帯アラームの音が鳴り響く。

時刻が9時半に達したのだ。

ていうか……結局、起きてから一睡も出来なかったな。

俺は鳴り響くアラームを止める。

それと同時に、ウリアがもぞもぞとその場に上半身を起こした。

8月5日？

「んっ……ふわぁ」

ウリアはその場に座ったまま背伸びをして――口の前に手を持って行きながら大きな欠伸をする。

その目の端に浮かぶ涙。

ボサボサに乱れた金色の長髪。

もう見慣れたつもりだったけれど――先ほどのピンク色の“アレ”を見てしまったからなのか、何だか緊張してしまう。

「……」

そして――俺は偶然と装って起床する事にした。

「んっ……おっ、ウリア。起きたのか」

「ふわぁ……ああ、お早う、秀。早いわね」

「ああ、何か今日は早く目が覚めちゃって……ていうか、お前いつもこんな朝早くから起きてるのか。随分と早いな」

「前にも言ったじゃない……お腹が空くと、私は自動的に起床するようにプログラムされているのよ」

「お前はロボットか」

プログラムされているって何だよ。

意味が解らん。

「あっ、間違えた……インプットされているのよ」

「どっちもそこまで変わらねーよ」

「という訳で、お腹が空いたわ、秀。カップラーメンを作ってよ」

「お前……よく起きてすぐにカップラーメンを食べたいとか思えるよな。起きてすぐにカップラーメンを食べられるとか考えられねーよ」

「そう？　そうでもないと思うけど？」

「いやいや、そうでもあるよ。起床したのちにすぐカップラーメンなんて、太っても知らねーぞ」

「余計なお世話よ。この馬鹿秀」

「でも、お前ってそこまで大食らいにしてはそこまで太らないよな」

「えっ？　そう？　太ってない？」

「ああ、太ってねーよ。全く、その栄養はどこに向かっているのか……。胸？　胸なのか？　いや、それは有り得ないか。だってウリアの胸はそこまで大きくないし」

「秀。聞こえているからね」

「おや、聞こえていたか」

「白々しいにも程があるわよ。ちなみに、私のバストサイズはZカップだから」

「Zカップって何だよ！　どんだけデカいんだよ！　つーか、有り得るかそんなバストサイズなんて！」

「ほら、どう見たってZカップでしょう？」

そう言ってウリアは背中を反らせて何やら胸を強調し始めた。

「どう？　あなたにも、目を凝らせば見えてくるはずよ。この私の素晴らしき豊満な胸が」

「うーん……どう目を凝らしてもどの角度から見ても俺の目には地平線しか映らないな」

「地平線？　今地平線って言った！？」

「いや、違う。俺はそんな事は言っていない。多分、断崖絶壁の聞き間違いだ」

「もっと酷くなってるじゃないの！」

「最大限に譲歩して……俎板（まないた）にしか見えない」

「一緒じゃないのよ！」

「俺の目ではどうやっても解らないな……仕方ない、俺が計測してやるから、ちょっと揉ませてみろ」

「なるほど、それは良い考えね――って揉ませて堪るか」

ちっ。

自然な流れでウリアの胸を揉もうと思っていたのだが……。

世の中、余り上手く行かないなぁ。

世知辛い世の中である。

「まぁ、とりあえず、俺の目にはお前の胸がZカップになんて映らないよ。むしろマイナスZカップにしか見えない」

「マイナスZカップ――ってまさかそれ、一番小さいAカップよりも私の胸が小さいって言いたいの!?」

「洒落の利いた上手い言い方だろ?」

「だーまーれっ！　ていうか、その秀の言い方だったら私の胸って凹んでいる事になるんだけど!」

「えっ？　違うのか?」

「久々に言わせて貰うわ。殺すわよ、この馬鹿秀!」

顔を真っ赤にして涙目でこちらに声を荒げてくるウリア。

どうやら、こちらとしても少し言い過ぎてしまったようだ。

「わ、悪かったよ……カップラーメン二個作ってやるから、な？」

「何よ。私の機嫌がカップラーメン如きで直るとでも思っている訳？」

「いや、そんな事は思っていないけど……」

「まぁ、食べるけどね」

「食べるのかよ」

しかも二個きっちり食べてしまうのかよ。

朝からどんだけ食うんだよ、お前。

◆◆◆

結局、朝から俺はウリアの為にカップラーメンを作る事になった。

勿論、二つ。

味は――シーフードが一つしか無かったので、もう片方はスタンダードで勘弁してもらう事になった。

ちなみに、俺の朝食は昨日霧歌が作ってくれた卵焼きやハンバーグ、

それからソーセージ――もとい、片方の端を何又（なんまた）にも切られた、いわゆる“タコさんウインナー”であった。

そんな朝食――と言うよりも、どちらかと言えばお昼のお弁当に入っているような、そんなおかずを霧歌は昨日態々作り置きをしてくれたのである。

8月5日？

将来は良い奥さんになりそうだ。

いや、俺が霧歌と結婚したいとか、そういう訳では無くて。

しかし、その作り置きは有り難いのだけれど、おかずだけでは流石に何だか物足りないので――。

俺は俺自身の為にもう一つカップラーメンを作る事にした。

いや、だって、ご飯が無いから仕方ないんだよ、これが。

カップラーメンだって立派な炭水化物です。

異論は認めません。

「ほら、出来たぞ」

カップラーメン三つが乗ったトレイを左手に、電子レンジで温めた霧歌特製おかずの詰め合わせを右手に持って俺はリビングへと向かう。

「ご苦労、下僕」

「誰が下僕だ」

そうツッコミを入れながら俺はウリアの前に湯気を上げるカップラーメンを二つ置いて行く。

それから、俺の席の前にカレーのカップラーメンとおかずの詰め合わせを置いて――俺は席に着く。

「しかし……昨日の今日だから、流石に筋肉痛が酷いぜ」

「普段運動をしないからでしょ。秀の事は私が責任を持って護るけれど、少なからず自分の事は自分で護って貰わないと流石の私も困るわ」

「いや、それは解っているけど――ていうか、“責任を持って護る”って、さっき俺に久々の殺人予告をしていたお前の言う台詞とは思えないな」

「だから、今日からでも少しずつ運動を始めたら？　私に出来る事があったら手伝って上げるから」

「そうだなぁ……それじゃあ、とりあえず握力の向上の為にお前の胸を揉んでおくか」

「そうね、握力の向上の為に――って、だから揉ませるかって」

「お前、最近ノリツッコミが多いよな」

ウリアのツッコミの能力が向上しているような気がする。

いかんいかん。

ツッコミ担当として気が抜けなくなってきた。

「あ、握力以外にも何か他に鍛えなくちゃならない所があるでしょ。ていうか、筋肉痛って……どこが痛いのよ」

「うーん……主に足、かな」

「足が痛いのなら、とりあえずスクワットを５０００回やって」

「殺す気か。筋肉痛で傷んでいる俺の足に更に追い打ちを掛けるつもりか」

足が壊れるわ。

「もう、折角アドバイスして上げているのに……いちいち五月蠅いわね」

「それは悪かったな。そのアドバイスがもう少し常識的なものだったら俺も聞く耳を持てるんだが」

「何を言っているの。私はあくまで常識的よ？　ていうか、むしろ私の体の９０パーセントは常識で構成されているんだから。その辺の所をよく理解して頂かないと困るわね」

「そうか。とりあえず、お前が実は人間でないという事が解った」

体の９０パーセントが常識で構成されているって。

人として必要な色々なものが欠如しまくってるじゃねーか。

その点についてはお前は逆に人として非常識な存在だよ。

◆◆◆

俺とウリアが少し量の多いような朝食を食べ終えた所で家の中にインターホンが鳴り響いた。

「誰だ？　こんなに朝早くから」

「霧歌じゃないの？」

「霧歌って――まぁ、有り得ない話じゃないけれど。昨日の今日だぞ？」

「霧歌なら来てもおかしくないわよ……ていうか、早く出ないと」

「解ってるって」

そう言って俺は玄関へと向かう。

玄関に辿り着いた俺はその扉のロックを解除して、玄関扉を外側へと押し開く――。

「痛っ！」

――と、その扉が何かにぶつかった感触と音がしたと思ったら、外から何やら小さな悲鳴が聞こえて来た。

「おっ？」

俺は唖然として扉をゆっくりと更に押し開いてみる。

そこには――鼻の辺りを押さえて頬を赤らめたまま涙目となっている我がクラスの学級委員長、架凪呀琴羽の姿があった。

「架凪呀じゃないか。どうした、鼻を押さえて顔を赤くして涙目になって……花粉症か？」

「ち、違う！　たった今アンタが開けたで鼻を打ったのよ！」

「そうか。まぁ、解ってはいたけどな」

「アンタ、私に喧嘩を売っているの？」

「架凪呀、お前に一つ忠告しておくけれどな。俺の家の扉は外に開くタイプだから、玄関扉の目の前で待っていると顔を打つ羽目になるんだぞ？」

「今更そんな事を忠告されても遅いわよ！　何！？　本当に私に喧嘩を売っている訳！？」

「ていうか、お前俺の事をストーキングしてこの家の場所を突き止めたんだろ？　それなら、扉がどちらに開くのかその辺の事も調査済みなんじゃねーのかよ」

「フンッ、私を見縊らないで欲しいわね！」

「いや、見縊ってはいないが」

「幾ら私でも、ちゃんとその辺りの事は線引きしているのよ。クラ

スメイトの家の場所を知る以上の事はしない――それ以上の境界線は越えない、それが私が自分に科しているルールなの」

「まぁ、クラスメイトをストーキングしている時点である程度の境界線は越えてしまっていると思うけどな」

ていうか、そんなルールを科す前に越えてはならない一線が存在したと俺は思うのだが……まぁ、今更言っても後の祭りか。

8月5日？

「それで、架凪呀ストーカーさん」

「誰が架凪呀ストーカーさんよ。ちゃんとした名前で呼びなさいよ。架凪呀様って」

「さり気無く自分の事を様付けで呼ばせようとするな。俺をストーキングしたお前なんか架凪呀ストーカーで十分だろ」

「何が十分よ。十分どころか、九分にも八分にも七分にもなりはしないわ」

という事は六分以下にはなるという事なのか……。

まぁ、そもそもこの“分”というものが何かの単位であるか自体解らないのだけれど。

「……それで、架凪呀。お前はここに一体何をしに来た」

「あら、理由が無いと友達であるアンタに会いに来ちゃいけない訳？」

「俺達は友達と言うか何と言うか……一種のただならぬ関係だからな？」

「た、ただならぬ関係だなんて……そ、そんな」

「照れるな！　頬を赤らめて俺から顔を背けるな！」

「いや、だって……ねぇ？　もう、真之乃秀のエッチ！」

「うるせーよ！　俺は全く以てそんな意味を込めて言ったつもりは無い！　お前は俺をストーキングしたんだから、ある意味ではただならぬ関係だろうが！」

「何だ、そういう事か。全くもう、まどろっこしい言い方しないでよね！」

「お前が勝手に勘違いしたんだろ！」

「べ、別に、勘違いした訳じゃないんだからね！」

「いや、お前は完全に良からぬ事と勘違いしていただろ！」

「本当なんだからねっ！」

「だから勘違いしてただろって！　ていうか、しつこいわ！」

そして、さっきから話が全然前に進まないんだが。

むしろ後退し続けているんだが。

「ていうか、架凪呀。お前は一体全体ここに何をしに来た。俺とこんな談笑を繰り広げに来たのか？」

「違うに決まっているでしょ。アンタと談笑を繰り広げるくらいなら壁に向かってずっと独り言を呟いていた方がマシよ」

「俺は壁以下の存在だと言うのか！」

「失礼。口が危うく滑りそうになったわ」

「いや、もう完全に滑っちゃってるから！　お前の口は滑り切ってしまっているから！」

「それで、今日アンタを訪ねてきた目的だけど」

「やっと話に入ってくれるのか……」

漸く、本当に漸く話的にも物語的にも進展してくれる……。

ていうか、ここに到達するまでで何か物凄く疲れた……。

話は始まっているようでまだ始まってすらいないのに。

どういう事だ、これは。

「昨日、アンタ途中で急に帰っちゃったからさぁ」

「あ、ああ、昨日の事は、その……悪かったな。ちょっと急用を思い出して」

「良いのよ、急用なら仕方ないわ。私もアンタの事をそこまで束縛するつもりは無いし。アンタを束縛して家に監禁するつもりならあったけれど」

「あったのかよ」

「冗談よ。それでさぁ」

そう言って――架凪呀は持っていた鞄の中から一冊の本を取り出す。

「ハイ、これ」

そして、それを俺に手渡してきた。

「……これは」

架凪呀が俺に手渡してきたもの――それは数学の参考書だった。

「参考書？」

「ほら、昨日アンタ元々私から参考書を借りる手筈（てはず）だったでしょ？　それで昨日はアンタが――急用だっけ？　それで急に帰っちゃったから、忘れない内にアンタに渡しておこうと思って」

「……えっと、架凪呀。態々参考書を俺に貸す為だけに家を訪ねて来てくれた事は嬉しいんだけど」

「だけど？」

「その、言い難いんだけど……俺、もう数学の宿題は全部片付けちゃったんだよな。だから、その、この数学の参考書は……」

「ああ、良いのよ、気にしないで。ていうか、私がその可能性を考えていなかったと思う？」

「えっ？　どういう事だ？」

「こういう事よ」と架凪呀は再度鞄の中に手を突っ込むとそこから二冊の参考書を取り出しては俺に手渡してきた。

「国語とか社会関係の教科は教科書を見れば大体解るだろうから…物理と化学の参考書を選んで持って来て上げたわ。どうせ、その二教科はまだ終わっていないんでしょ？」

「あ、ああ……よく解ったな」

「当然よ。ちなみに、アンタの夏休み前の期末テストの物理と化学の点数が両方とも３９点だった事も知っているわ」

「お前、何でその事実を知っているんだ！」

ちなみに、俺が通っている高校の赤点は４０点未満である。

いや、本当に１点足りなかっただけなんだよなぁ……。

まぁ、赤点である事に変わりは無いのだけれど。

「知っていて当然じゃない。アンタと私の席は隣同士なのよ？」

「だからって、俺はお前にテストの点数を見せた覚えは無いぞ」

「覚えが無くて当然でしょうね。アンタが夜華さんと昼休みにお弁当タイムを取っている隙を見て私がアンタの鞄の中から勝手に取り出して見たんだから」

「お前、俺のプライバシーをさり気無く侵害してんじゃねーよ！

一応個人情報だぞ！」

「だったら、セキュリティソフトでもインストールする事ね」

「学校の鞄にセキュリティソフトも何もあるか！　ていうか、俺の点数を知っているのなら、お前も点数を俺に開示しろよ！」

「……知りたい？　本当に知りたい？　真之乃秀がそこまで知りたいと言うのなら私の物理と化学の点数を教えて上げるけれど……本当に？　本当に知りたい？」

「いや、もういいや……知らなくていい。ていうか、むしろ知りたくなくなった」

どうせ知っても更に絶望感が増えるだけだ。

絶望感が、募るだけだ。

「はぁ、全く……これだから頭の良い奴は嫌なんだ。こっちなんかテストの点数で自慢した経験すら無いと言うのに」

「いや、それは私のせいじゃなくてアンタのせいだからね？」

「言っておくけれど、俺は中学までは頭が良かったんだからな」

「それ、高校に進学できた人が言う常套句（じょうとうく）よね」

8月5日？

「確かに常套句かもしれないけれど、中学時代に頭が良かったのは本当だからな？」

「それじゃあ、1足す1は？」

「……いや、考える間も無く2だと思うけど」

「おおーっ」

「喧しいわ！　どこまで俺を馬鹿にすれば気が済むんだよ！　それからその拍手を止めろ！」

俺は打ち鳴らされるその拍手を止める為に架凪呀の両手を引っ掴む。

「ひゃっ！　だ、駄目よ、真之乃秀！　アンタはクラスメイトで、私は学級委員長なんだから！」

「だからどうした！　ていうか、お前は一体全体何を言っているんだ！」

そして、そう声を上げながら俺は架凪呀の両手を振り払うように離した。

「……ていうか、話は変わるけどさ、真之乃秀」

「今度はどうした」

「よくよく……よーく見ると、アンタ怪我をしているわね」

「そんなによく目を凝らさなくても解るだろ。ちょっと昨日色々あってな」

「もしかして……昨日の謎の爆発に関係あるの？」

「……」

鋭い。

流石は学級委員長。

まぁ、今の言葉の遣い方には多少の語弊があるかも知れないけれど。

「ま、まぁな。俺のこの傷はその爆発に原因が有るかも知れないし無いかも知れない」

「どっちなのよ。ていうか、本当にあの爆発に巻き込まれたのならテレビ局にその事を話せばお金か何か貰えるかもね。ニュースでも、朝から原因不明の爆発が起こったって大騒ぎしているから」

「あ、ああ、機会があったらな」

「えっ？　という事は昨日何が起きたのか多少は知っているの？」

「あっ、いや……その」

鋭い。

本当に鋭いな、こいつ。

学級委員長という立場を差し引いても鋭いかも知れない。

いや、別に学級委員長が雰囲気を察する速度においてトップクラスの階級みたいな――そういうものではないのだが。

しかし……本当に鋭い。

素直に全てを話す訳にも行かないし……いかんな。

何か別の事を言って誤魔化さなければ。

「……き、聞いてくれるか、架凪呀」

「昨日起こった事を？　良いわよ、話してみなさい」

「聞いても、驚かないか？」

「当たり前でしょ。何せ、私は学級委員長なのよ？」

架凪呀の中ではどうやら学級委員長は色々な立場において相当物凄い人の代名詞らしかった。

まぁ、確かに誰でもなれるものではないが。

「……それじゃあ、話すぞ？　架凪呀」

「ええ、良いわよ。ドーンと来なさい」

「実は……昨日、空を仰いだら、突然俺の前にＵＦＯが現れて――」

「ハイ嘘～」

「決め付けるの早いな！　もう少し俺の話を聞いてからでも良いだろ！」

「どう聞いたって嘘です。本当にありがとうございました」

「……お前の脳内にはそっち方面の知識も存在するのか？」

「当たり前でしょ。何たって私は――」

「学級委員長だからだろ。本当に学級委員長である架凪呀は万能で凄いな」

しかし、それでもまだ霧歌の方がこの学級委員長である架凪呀よりも上の存在なのである。

架凪呀が学級委員長なら、それより上のランクに君臨する霧歌は一体全体何なのだろうか。

神、かな。

いや、それだと学級委員長が神の一つ下のランクという事になって、学級委員長という役職が最早訳の解らないものになってしまうな。

うーん。

後でゆっくりと考えよう。

架凪呀が帰ってからでも遅くは無いはずだ。

「しかし、本当に否定の速度が半端無かったな……聞く耳を持たないとはこういう事か」

「あら、アンタでもそう言った慣用句ぐらいは知っているものなのね」

「当たり前だろ。流石の俺だってこれくらいの慣用句は知っているよ」

「感心したわ。真之乃秀には記憶能力があったのね」

「当たり前だろ！　流石の俺にだって記憶能力くらいはあるよ！」

ていうか、人間である以上誰にだってあるよ！

「真之乃秀には記憶能力が存在していた――これは世紀の大発見ね、もしかしたら明日の新聞の一面を飾るかも知れないわよ」

「飾られて堪るか！　ていうか、普段俺は周りからどれだけ記憶能力が無いと思われているんだよ！」

「そして、真之乃秀は新聞の一面から、雑誌のインタビュー、そしてテレビへ――絵に描いたようなシンデレラストーリーじゃない。良かったわね」

「良くねーよ！　今のお前の言葉だけを聞いたらちょっと良く聞こえるけれど、全然良くないから！」

それ以前に、そんな内容でテレビに出られたとしても俺は全然嬉しくなんかない！

むしろ恥ずかしいよ！

「それから、真之乃秀は歌手としてもデビューを――ああ、これは駄目ね。真之乃秀に生き恥を掻かせてしまうわ」

「既に記憶能力の有無でテレビ出演している時点で生き恥を掻いているとは思うんだけど……一応聞く。それは一体全体どうして俺が歌手デビューをしたら生き恥を掻く事になるんだ？」

「だって、真之乃秀って音痴よね？」

「フッ……勝手に決めつけられては困るな、架凪呀」

「えっ？　まさか、アンタって歌が――」

「そう思ったか？　だがしかし、実は違う――何故なら、俺は音痴か否か以前に、友達と一緒にカラオケに行った事が無いんだよ！」

「真之乃秀、それは決して堂々と言い放つ言葉ではないわよ」

「どうだ、参ったか！」

「そうね……ええ、参ったわ。アンタには色々な意味で頭が上がらないわよ」

そんな事を呆れ顔で言って来る架凪呀。

しかし、今の俺の言葉は架凪呀の予想を上回った良い言い回しであったと思う。

霧歌であれ、架凪呀であれ、誰であれ――頭の良い奴を何かをやって出し抜く事が出来た時には何だか猛烈に嬉しく感じる。

その代わり、俺の心の傷が更に深くなった気がしてならないのだが。

8月5日？

「さて、と……参考書も貸した事だし、真之乃秀も十分に罵った事だし、私はもう帰るわね」

「待て。今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだけど……気のせいか？」

「気のせいよ。空耳じゃない？」

「そうか、それなら良いんだけど。ていうか、もう帰るのか？　それじゃあ、俺の家に態々参考書を届けに来ただけになるじゃんか」

「だって、私の元々の目的はそれだったからね。それに、この後ちょっと用事があるから」

「そうなのか……それなら仕方ないな」

「何よ。もしかして、私にお茶でもいっぱい御馳走してくれるつもりだったの？」

「まぁ、そういうつもりだったんだが……用があるなら仕方ないな」

ていうか、そもそもお前を家に上げてしまったらウリアと鉢合わせしてしまうし。

俺があんな金髪碧眼の少女と一緒に住んでいる事がこいつに知れると思うだけで……何だか寒気が走る。

絶対に軽蔑されるよなぁ。

ただでさえ、普段余り良いイメージを持たれていないのに。

「ふーん、そっか……それじゃあ、また今度お茶を御馳走して貰いに改めて馳せ参じるわね」

「ああ。また日を改めて馳せ参じてくれよ」

「ええ、そうさせてもらうわ。それじゃあ、またね、真之乃秀」

「おう、またな」

そして、架凪呀は俺に踵を返すと玄関を再度潜って外へと歩き出して――。

「あっ、それから、真之乃秀」

不意に立ち止まったかと思うと俺を振り返ってこう言ったのだった。

「……気を付けてね」

「……は？」

その余りにも――余りにも唐突に言い放たれた言葉に俺は架凪呀にそれ以上の追究の言葉を発する事が出来なかった。

架凪呀は俺に背を向けると家の外に出ながら玄関扉を軽く押した。

架凪呀の言葉の意味が解らず――呆然とする俺の視線の先で。

玄関扉が閉じて――俺の視界から架凪呀の姿を掻き消した。

◆　◆　◆

俺は首を傾げながらリビングに戻る。

すると、ウリアは依然としてテーブルに頬杖を着いたままテレビを観ていた。

テレビ画面では――おそらく、刑事ドラマが流れている。

ウリアが刑事ドラマにそこまで関心があるとは思えないのだが……。

まぁ、この時間帯は何もテレビはあっていないからな。

惰性で観ているのだろう。

「誰だった？」

そして、こちらを振り向きもしないままテレビ画面を見据えて俺にそう問いかけてくるウリア。

「霧歌？」

「いや、違った。お前の知らない……俺の友達だ」

「えっ？」とウリアは唖然とした声を上げて俺を振り返って来て―

―。

「秀って――」

「残念ながら霧歌以外にも友達が居るよ」

「……何よ。私の言葉の行き先に先回りしないでくれる？」

「ていうか、本当にそう言うつもりだったのかよ。まぁ、たった今そいつから今みたいな事を言われたばかりだったからな……何となく予想が着いたんだよ」

「そっかぁ……秀って、数少ない友達からも友達が居ないって思われているよね。もしかして、秀の友達ってあなたに同情して友達になって上げているんじゃないの？」

「滅多な事を言うな！　本当にそうだったらどうするんだ！」

いや、そんな事は有り得ないだろうけれど。

絶対に有り得ない事だろうけれど……もしも。

もしも、それが本当だったら……うーん。

どうしようか。

ショックで死んでしまうかも知れない。

いや、割とマジで。

「同情の友情か……二つの言葉が微妙に掛かっていていいじゃない。私はこの言い回し好きよ？」

「言葉のニュアンスが似ていて、言葉の響きが良かったとしても、意味的には最悪だからな。特に俺にとっては」

「それで？　秀はどうして首を傾げて戻って来た訳？」

「いや……どうしてだろうな？」

「は？」

「いや、ゴメン。気にしないでくれ……俺にもよく解っていないんだ」

「訳の解らないままに首を傾げた――ああ、なるほど。秀は自分の存在している意義が解らなくて首を傾げた訳ね」

「何て解釈をしやがるんだお前は！　どうして自分自身の存在意義に関して疑問に思わなくちゃならないんだよ！」

「どうして自分はこんなに変態なんだろう――みたいな？」

「誰が変態だ！　俺は断じて変態じゃない！　ウリア、お前いい加減にしないとセーラー服の中に手を突っ込んでその胸を揉むぞ！」

「そういう所が変態だって言っているのよこの変態！」

「何を言っているんだ！　胸を揉む事は決して変態的な行為では無い！」

「何か堂々と変態的な行為を肯定し始めた！？」

「それじゃあ、聞くがな、ウリア。お前は男子から握手を求められたらどうする？」

「どうするって――そんなもの、それに応じて、手を差し出すに決まっているじゃない。握手なんだから」

「そうだろう？　握手というのはお互いの肌と肌――“手”というお互いの体の一部分を重ね合わせるものだろう？」

「そうだけど……それが？」

「だったら、男が女の胸を揉む事だって一緒の事だろう！　ただ単に互いの肌と肌を触れ合わせて、体の部位を重ね合わせているだけなのだから！」

「単なる屁理屈じゃないのよ！　大体、女子の胸を揉む事をそんな風に思っている時点であなたは変態よ！」

「何だと！？」

「大体、男子から握手を求められたら私はそれに応じるけれど、秀から握手を求められても残念ながら私はそれに応じないから」

「平然とそんな酷い事を発言するんじゃねえ！」

8月5日？

……しかし。

（……気を付けてね）

「……」

俺は無言のまま先ほどの架凪呀の言葉を思い出す。

何を――何に対して気を付けろと言うのだろうか。

もしかして、この俺の傷を見て言ったのだろうか。

今度からはそんな怪我を負わないように気を付けろ、と。

架凪呀はそう言いたかったのだろうか。

……まぁ、そんな事なのだろう。

それ以外にこれと言って言葉の真意も浮かばないし。

ていうか、もしそうなら、あいつは少なからず俺の事を心配してくれた事になるのか。

珍しい事もあるものである。

あいつが――架凪呀が俺の事を心配してくれるなんて。

今日は空から雪でも槍でも何か降って来るのではないだろうか？

そんな天変地異を恐れてしまうほどに――架凪呀の気遣いは珍しいものなのである。

稀有なものなのである。

例えるならば、天然記念物であるツチノコと遭遇してしまうほどに。

あいつの気遣いはツチノコレベルなのだ。

そんな事を思いながら――俺はウリアの正面の席に座る。

「……」

それから、俺は正面に居るウリアを見据えた。

ウリアは相変わらずテレビの方を観ている。

惰性の刑事ドラマの視聴を継続させている。

すると、不意に“今朝の事”が脳裏を過ぎった。

黒いスカートの中に垣間見えたピンク色――その風景を思い出した俺は思わずウリアから視線を逸らした。

そして、ウリアはそんな俺の行動にどうやら気付いたようで。

「どうしたの？」

――という質問を俺に投げ掛けて来た。

「い、いや、別に何も……面白いな、この番組」

「面白いって――今ＣＭだけど」

「……そう、だな」

いつの間にかテレビ画面には刑事ドラマでは無く、とある化粧品のＣＭが流れていた。

何というバッドタイミングだ。

作為的な何かを感じざるを得ない。

「何？　秀って化粧品のＣＭで面白さを感じる訳？」

「い、いや、そういう訳では……ないんだけど」

「まぁ、そうでしょうね。逆にそれで面白さを感じていたら秀に引いていたもの。引くどころか軽蔑していたわ。毎日蔑んだ視線を送ってやろうかとも思っていたし」

「どれだけ俺を蔑んでるんだよ」

何故化粧品のＣＭを面白いと感じたくらいでそこまでの仕打ちを受けなければならないんだ。

いや、断じて化粧品のＣＭを面白いと感じた訳では無いが。

「ていうか、話は変わるけれど。最近テレビを観た限りでは――その、化粧品？　そういう商品に使われている容器って何かこう……柔らかい色のものが多いわよね」

「柔らかい色？　ああ、肌色とか、桃色とか……そういう事を言いたいのか？」

「うん、そう。何であんな色ばかりを使っているのかしら？」

「それは……多分、イメージ的なものがあるんじゃないか？　人が――特に女性が使うものなんだし。ほら、人としても女性としても肌色、もしくは桃色みたいな、そんな感じの――お前が言う“柔らかい色”がイメージ的にはピッタリだろ？」

「まぁ、そうね。そう言う私もこんな柔らかい色って好きだし」

「ああ、だから今日のお前のパンツの色はピンクだったのか」

――その瞬間。

俺は、リビングの、時が、止まるのを、感じ取った。

失言、した。

失言をしてしまった。

あっ、ヤバい。

思わず……口が滑った。

滑って、しまった。

そして――俺がそう感じた時にはどうやら既に遅かったようで。

俺がそれに気付いた時には既に手遅れだったようで。

「なっ……ななっ、なっ……！」

俺の視線の先――そこではウリアが漸く惰性で観ていたテレビ画面から視線を逸らしてその代わりに俺の方を観ていた。

頬を赤らめた状態で――先ほどまで頬杖を着いていたその右手はその頬から離れてワナワナとその体と共に震えている。

「なっ、何で……何で、秀、あなた……私の下着の色を、知って……！」

「か、勘違いするな！　別に着替えを覗いたとか、そういう訳じゃないんだ！　何と言うか、その、今日朝起きたら、偶然見てしまったというか、その」

「なっ、何なのよその理由は！　そんな事言って、どうせ私が寝ているのを良い事に私のスカートの中を覗いたんじゃないの！？」

「ば、馬鹿！　流石の俺でもそんな事はしない！　普段はセクハラ行為をし続ける俺が言っても説得力が無いかも知れないが！　俺は言葉でセクハラ行為を言うだけであって、そのセクハラ行為を実際に実行する訳では無いから！　本当だから！」

「な、何よそれ！　言い訳になっているようでなっていないわよ！」

そして、ウリアはそう声を上げながら椅子から立ち上がる。

「くっ……！」

俺はそのウリアの行動を見て反射的に目を瞑った。

ウリアの拳――もしくは、蹴りが飛んで来ると思ったからだ。

ていうか、今までのこんな展開の結末からしてそれはほぼ確定であった。

確定であった――はずなのだが。

「……えっ？」

いつまでも飛んで来ないウリアからの攻撃に俺は違和感を覚えて閉じていた目を開ける。

8月5日？

ウリアは先ほどと同じように椅子から立ち上がっていた――立ち上がってはいた。

立ち上がって、頬を赤らめて、こちらを見下ろしてはいた。

――しかし。

それ以上の事は何もして来なかった。

「……う、ウリア？」

俺がそう恐る恐る問いかけるとウリアは何も言わず両手を太腿の上に置いて顔を伏せる形で椅子にストンと腰を下ろした。

それから、何やらボソボソと何かを言い始める。

「……のね？」

「えっ？」

「だから、見た――のよね？　その、私の……下着」

「あ、ああ……でも、それは不可抗力であって、決して俺が覗こうとして覗いた訳では――」

「良いの」

俺の言葉を途中で遮って――ウリアは言う。

「不可抗力なら……それで良いの」

「良いのって――お前、信じるのか？」

「あ、当たり前じゃない。それとも、本当は違う訳？」

「ち、違くない！　違くないから！　いや、何か簡単に信じてもらえて、逆に意外だったと言うか何と言うか！」

「でも……覗いた事は、本当なのよね？」

「……あ、ああ」

「ふーん……そうなんだ」

――そして。

「……それで？」

「えっ？」

「いや、だから……その。私の下着を見て……秀はどう思った？」

「……」

は？

「いや、ゴメン……お前の下着を見てしまった立場にも関わらず上

から目線で言わせてもらうけど――何言ってんだお前？」

「い、良いから！」

「答えてよ！」と顔を真っ赤にしてそう声を荒げてくるウリア。

「い、いや、答えるも何も……大体、どうしてそんな質問を俺にしてくるんだよ」

「だ、だって……」

それは――と再度俯き加減を見せるウリア。

「わ、私ってほら……ここに――この時代に来るまでは、あの戦闘服をいつも来ていた訳じゃない？」

「あ、ああ」

「あの戦闘服って、下着を着なくて良いものだから――ていうか、下着があるとちゃんと体にフィットしなくて逆に戦い辛くなるものだから。だから私……２０５６年の未来では、余り下着を穿いていた経験が無いの」

ウリアは言う。

「それで、この時代に来て……少しずつだけど、下着とか、洋服とかを着るようになって。最近では、霧歌から洋服の組み合わせとかも教えてもらって……何だか、洋服を着るというのが、楽しく思えて来て」

本当はそんなものに感けている余裕は無いんだけど――と苦笑を見せるウリア。

「でも、それは、私にとって余り慣れない経験と言うか――殆ど初めての経験だから。だから、その……最近では自分で選んでいるけれど、余りその下着や洋服が私に似合っているのか……解らなくて」

「だから、秀に聞いたの」とウリアはほんの少し頬を上気させながらも俺に向かってこう言った。

「わ、私から……その、穿いている下着を見せて上げる訳には行かないから。だから、事故とは言え、私の下着を見てしまった秀に……聞いているのよ」

私の下着が似合っているのか否か。

ウリアは依然として恥ずかしそうに頬を赤らめて――しかし、真剣な眼差しと共に俺にそう問いかけて来た。

「……何だ、そういう事だったのか」

「そ、そういう事って言わないでよ――私にとっては死活問題なんだから」

「良いんじゃねーか？　俺は似合っていると思うぜ？」

「えっ……ほ、本当？」

俺が選んだその言葉はどうやら正解だったようだ。

だってそれは――ウリアの顔がパァッと明るく笑顔で輝いたから。

「ああ、本当だよ。この前図書館に着て行った洋服だってかなり似合ってたし――それから、えっと、言い難いけれど……下着も似合っていたと、俺は思うぜ？」

「そ、そっかぁ……うん、解った。ありがとね、秀」

「礼なんか要らねーよ。お礼はお前の下着を拝めた事で既に清算されているからな」

「また秀はそんなセクハラ発言を言って……」

仕方ないんだから――とその言葉の通り、仕方無さそうな笑みを零すウリア。

「……ねぇ、秀」

「ん？　どうした？」

「可愛い？」

「は？」

「だから、私の私服姿は可愛いかって聞いているのよ」

「あ、ああ……可愛いんじゃないか？」

「語尾疑問形は止めて欲しいなぁ……それじゃあ、“ウリアの私服姿は可愛い”って言ってよ」

「う……“ウリアの私服姿は可愛い”――で、良いのか？」

「うん！」と元気よくそう声を上げたウリアの顔には本当に心底嬉しそうな笑顔が浮かんでいた。

8月5日？

「良いのよ、それで。秀が私の事を褒めてくれた事には変わりないんだから」

「ていうか、今のってお前に言わされただけだよな？」

「だーかーらっ、それでも良いって言っているのよ、私は。折角、秀が私の下着を見た事を白紙にして上げようとしているのに――それ以上食い下がるのなら、この事を霧歌に報告するわよ？」

「いや、それだけは勘弁してくれ」

でないと、俺が霧歌に殺されてしまう。

「だったら、これ以上は言わない事ね」

「解ったよ……これ以上は何も言わない。これで良いのか？」

「うん、良いわ」

そう言って――また笑うウリア。

何だかよく解らないけれど……どうやら、俺はウリアから今回は何も制裁を受けずに済むらしい。

良かった。

よく解らないけれど、何も制裁を受ける事が無くて良かったと本当

に思う。

俺の前ではウリアが既にテーブルに頬杖を着いてテレビ画面の中で流れている刑事ドラマを観ていた。

おそらくは、また惰性なのだろう。

先ほどと変わらない光景――変わった所と言えば、ウリアの顔に笑みが浮かんだままだという事か。

「……」

そんなウリアを見て微笑みながら――俺も何気なくテレビの方へと視線を向ける。

崖の傍に追い詰められた犯人のような登場人物――その犯人を追い詰めた刑事のような登場人物。

在り来たりなその場面から察するにどうやらこの刑事ドラマはクライマックスに突入したらしい。

平和、だった。

昨日の切羽詰った――流石に命の危機を感じざるを得なかったあの出来事がまるで嘘のように。

平和だった。

この束の間の休息が――いつまでも続けばいいと俺は思った。

こうやって、ウリアと一緒にカップラーメンを食べて。

こうやって、ウリアと一緒にテレビを観て。

時には霧歌と一緒に時間を過ごして。

時には架凪呀のような不意な来客の対応をして。

時には――今朝のような事故もあったりなんかして。

そんな――そんな平和な日々がいつまでも続けばいいって。

俺はそんな事を思った。

――だけど。

ウリアがこの時代を訪れてきたように。

『魔導獣機』が絶えず俺の事を襲ってくるように。

２０５６年の未来には否が応でも戦争が起こっているように。

平和な日々はいつまでも続かない。

平穏な日常は永遠に継続していかない。

それがこの世で生きていく上での理（ことわり）であり、宿命であり、定めであり――運命である。

ルールと言ってもいい。

平和な日々など決して存在せず、平穏な日常は単なる幻想でしかない。

この世で生きていく俺達は――そのルールに従う事しか出来ないのだ。

ずっと昔から俺達生きとし生ける者に科されて来たそのルールを――その輪廻を。

俺達は断ち切る事は出来ない。

しかし、だからこそ。

俺達はその運命に抗わなければならない。

俺達はその輪廻を断ち切ろうともがかなければならない。

幾ら抗おうと、決してその運命に手が届く事は無く。

幾らもがこうと、決してその輪廻を断ち切る事は叶わないのだろうけれど。

それでも、その上で、その余りにも理不尽過ぎるルールの上で、俺達は今日も生きて行かなければならない。

嫌だとも思う。

どうして、俺達がそんな勝手に決められたルールの中で生きて行かなければならないのか。

そんな事も、思う。

――けれど。

それは既に“そうなってしまった事”なのだから――そう思った所で仕方が無い。

平和な日々は突如音を立てて崩れ去り。

平穏な日常は不意に――気付いた時には消失してしまっている。

俺達の生きる世界はそんなものなのだ。

――晴れ渡る空の下。

どこまでも果てしなく続いていそうな――雲一つ無いそんな青天の中に。

音も無く――本当に何の前触れも無く。

突如、そこに巨大な漆黒の穴が出現した。

白い欠片

その漆黒の穴の出現に逸早く気付いたのはウリアだった。

とは言っても、それ以前にその事に逸早く気付けるのはこの場にウリアしか居なかった。

俺が漆黒の穴に気付く事が出来るのは――あの白い欠片が光を放った後だからだ。

しかし、その欠片は今俺の手の内に無かった。

今、あの白い欠片は俺の部屋――即ち、この家の二階に置きっ放しなのである。

昨日の今日だから、『魔導獣機』は現れないと高を括っていた事もある。

けれど、それ以前に――あの白い欠片は空間に空く漆黒の穴を察知する機能しか備わっていないからである。

そんな殆ど無意味なものを携帯していては――日常生活的にも、戦闘的にも邪魔なので。

俺はあの白い欠片を部屋に置きっ放しにして来たという訳なのだ。

そして――漆黒の穴の出現に逸早く気付いたウリアは咄嗟に椅子から立ち上がる。

その行動に俺はハッとしてウリアを振り仰いだ。

「う、ウリア！？」

「『魔導獣機』よ！　秀！」

そう声を上げてウリアは俺に右手を差し出して来る。

その右手を俺は咄嗟に引っ掴んだ。

俺はウリアから椅子から腕を引かれて――強制的に立ち上がらされる。

「外に出るわよ、秀！」

「了解！」

俺はウリアからその手を離されると同時に玄関に向かって駆け出した。

リビングの入り口へと向かう俺とウリア。

俺はウリアを追い抜くと、その入り口にある扉を引き開ける。

その瞬間、扉の奥から解き放たれた眩い白光（はっこう）に俺は目を細めた。

「えっ……？」

その光に――その光の色に俺は見覚えがあった。

ていうか、それはある意味当然の事であった。

何故ならその光は――俺が約一週間前に偶然拾ったあの白い欠片の光だったのだから。

あの欠片は漆黒の穴が出現すると光り出す。

だから、別に漆黒の穴が空に現れている今はその欠片は光っていて当然なのだろうけれど。

――今、問題なのは。

「何？　秀、あなたあの欠片、階段の所に落としたの？」

後ろからそんなウリアの声が聞こえてくる。

そう――そうなのだ。

確かに、二階の俺の部屋に置いてきたはずの白い欠片が。

二階に続く階段の下に落ちて――白い光を放っていたのである。

「ていうか、今はそんな事はどうでもいいわね……ほら、秀！　早く家の外に出るわよ！」

「早くしないと『魔導獣機』が転送されちゃう！」とウリアは俺の隣を通って玄関へと駆け出して外へと姿を消す。

「……」

俺は無言のまま――呆然としたまま階段の下に落ちて光り続けているその欠片を拾い上げる。

どうして、こんな所にこの白い欠片が落ちているのか。

どうして、確かに二階に置いてきたはずのこの欠片がここに落ちているのか。

その事が気になったけれど――今はそれよりも考えるべき事がある。

俺はその白い欠片を強く握り締めて、それをズボンのポケットに入れてウリアに続いて家の外に飛び出した。

◆◆◆

家の外に出ると、まだ漆黒の穴からどうやら『魔導獣機』は転送されていないようだった。

「って、あれ、ウリアは……？」

姿の見えないウリアに俺は周囲を見渡す。

家の周りにも空にもウリアの姿は見えない。

どこに行ったのだろうか。

俺がそんな事を思っていると――既に頭の上に淡い深紅の光を放つ天使の輪と背中から同じ光を放つ翼を生やして天使化したウリアが

目の前に舞い降りた。

「ウリア、お前今までどこに――」

「着替えに行っていたのよ。緊張感が無いかも知れないけれど、セーラー服で戦う方が緊張感が無いと思って」

確かに、ウリアはセーラー服からいつもの全身タイツのような戦闘服に着替えていて――髪型もツインテールになっていた。

ていうか、セーラー服で戦う事が緊張感に欠けるって。

それは何か昔あったとあるドラマを全否定しているようにも思えるのだが……まぁ、それも今考える事ではないか。

そして、俺がそんな事を考えていると空に空いた漆黒の穴からゆっくりと――その巨体が現れ始める。

その穴の闇の奥から現れたのは――以前にも見た事がある龍の形をした『魔導獣機』だった。

巨大な顔を穴の中からゆっくりと突き出したその機体は空を這うように闇の奥から体全体を引き摺り出す。

龍の目が黄色く光る。

その直後――龍が咆哮を放った。

周囲の窓ガラスが次々と音を立てて弾け飛んで行く。

それは無論、俺の背後にある自宅も例外では無かった。

俺は両耳を押さえながら頭上から降り注いで来る窓ガラスの欠片を避ける為に前へと駆け出す。

そして――段々とその咆哮が止んでいく。

すると、その止んでいく咆哮に反比例して周囲の家々からその住人が次々と外に飛び出して来た。

悲鳴を上げる人、空に浮かぶその巨大な機体を見上げたまま呆然とその場に立ち尽くす人。

様々な人が居たが――どちらにしても、『魔導獣機』をその人達が視認してしまった事には変わりなかった。

白い欠片？

敵の事を信じる訳では無いけれど、あいつならば――ストレンドならば、こんな目立つような真似はしないだろう。

――という事は。

「……これは」

「そうね。昨日の事と言い、今日の事と言い……多分、ストレンドが言っていた『強硬派』の連中の仕業ね」

「昨日は比較的機体の大きさが小さかったから良かったものの……あれだけデカいと、もう色々と誤魔化すのは無理そうだな」

「ていうか、既に周りの人の目に付いちゃっているからね……少なからず、あの『魔導獣機』を写真や動画で撮っている人も居るでしょうし」

「ウリア……お前大丈夫なのか？」

「それはどちらを心配してくれているのかしら？　私の安否？　それとも、私の戦闘シーンが報道される事？」

「どっちもだよ。……行けるのか？」

「当たり前でしょ。私を誰だと思っているの？　あんな『魔導獣機』を一瞬で倒して、写真にも動画にも映らない事くらい私に掛かれば赤子の手を捻るくらいに簡単な事よ」

そう言って――俺に不敵な笑みを見せるウリア。

「それじゃあ、行って来るわね、秀」

「ああ。あんなもの、すぐに蹴散らして戻って来い」

「うん、勿論よ」

そして――ウリアは地面を静かに蹴って、跳躍する。

ウリアは跳んで――その淡い深紅の光を放つ翼を羽ばたかせて飛翔した。

目にも止まらぬ速さで龍の形をした『魔導獣機』へと飛んで行くウリア。

段々と小さくなって――紅く光る星のようになっていくウリアの姿を見ながら俺は家の中から飛び出してきた住宅街の住民の中に混じってその戦闘の様子を見守る事にした。

大丈夫。

ウリアなら、あんな怪物でもすぐに倒して戻って来てくれるはず。

俺はそう思っていた。

その時の俺は――そう思っていた。

――しかし。

◆◆◆

風を切る音が私の耳に絶えず聞こえてくる。

私は前方に見える巨大な龍の形をした『魔導獣機』に向かって飛翔していく。

背中の淡い紅い光を放つ翼を羽ばたかせて――飛んで行く。

飛んで行く最中、私は右手に魔力を集中させる。

その魔力は光へと変化し、私の右手に集約された光はオレンジ色の剣へと姿を変える。

そして、『魔導獣機』と同じくらいの高さに到達した時点で私は上昇を止める。

下界に居る人々の目に止まるかも知れないが――この高さだ。

余程目が良い人ではないと空中に浮かぶ私の姿を捉えられる人は居ないだろう。

すると、不意に私の前方で『魔導獣機』が動きを見せた。

『魔導獣機』はその体をくねくねと蠢(うごめ)かせて――その体に引けを取らない巨大な口を開ける。

その龍の口の中に集約される光――『魔導獣機』は私目掛けて光の弾を解き放った。

光速で迫り来る光の弾。

その光弾の迫る速度に合わせて私は光の剣を振り上げた。

私の放った斬撃によって両断される光弾。

二つに分かれた光の弾は私の後方に飛んで行き――大爆発を起こした。

私の背後から流れ出してくる爆煙。

衝撃波と突風が私のツインテールを前方に靡かせた。

そして――更なる動きを見せる機械の龍。

左方へと移動を開始した『魔導獣機』はその巨体を靡かせて猛スピードで飛んで行く。

その動きを目で追いながら私は光の剣に魔力を手中させ始める。

ある程度、私と距離を取った『魔導獣機』は旋回して再度こちらに向かって来た。

咆哮を周囲に発しながら私目掛けて突進してくる機体。

集約された魔力を解き放つべく――私は『魔導獣機』目掛けて剣を振り上げた。

「――≪太陽の斬閃（ソーラーレイ）≫」

振り上げられた光の剣から解き放たれるオレンジ色の太陽の閃光。

しかし――忘れてはならない事実だが、『魔導獣機』には人工知能が搭載されている。

その事もあってか、私の放った閃光を機械の龍は体をくねらせて回避した。

よって、『魔導獣機』の突進は続行される。

私はその場から飛翔し――『魔導獣機』の突進を躱す。

「――≪武装変形（アームズリセット）≫」

それから、右手にある光の剣の形状を私は一度解いた。

形状の指定を解除された光の剣は魔力の粒子となって私の右手の周囲を取り巻く。

そして、その魔力の粒子は私の思い描いた通りの形状へと変貌する。

私の右手に再度集約された魔力の粒子は――オレンジ色の光の弓へと形を変えた。

その弓を右手から左手に持ち替える私。

機械の龍はと言えば、私の突進に失敗した後――空の彼方へと飛ん

だ後、再度私へと突進をするべく旋回を開始した。

対する私は『魔導獣機』と同じように翼を羽ばたかせて飛翔しながら弓を構える。

私の右手に集約される魔力――それは光の矢へと姿を変えた。

私はその矢を弓にセットすると、その弦を引く。

――そして。

「――≪流星の焔矢（メテオダーツ）≫」

私は矢を掴んでいる右手を開く。

その瞬間、オレンジ色の光の矢が『魔導獣機』目掛けて――文字通り、光速で解き放たれた。

先ほど私が放った≪太陽の斬閃（ソーラーレイ）≫と同じく、この≪流星の焔矢（メテオダーツ）≫も同じ光の塊には変わりないのだけれど……ほんの少しだけ、その性質は違う。

何が違うかと言えば、それはその魔術に凝縮された魔力の量だ。

大量の魔力が凝縮された≪太陽の斬閃（ソーラーレイ）≫とは違って、≪流星の焔矢（メテオダーツ）≫は比較的凝縮された魔力の量が少ない。

だから、同じ光の塊でも、その速度はかなり違ってくる。

無論、より速いのは凝縮された魔力の少ない≪流星の焔矢（メテオダーツ）≫の方だ。

白い欠片？

だからこそ――完全には避けられなかったのだろう。

私の解き放った光の矢は一瞬にして光の一線となり、空の彼方へと消え失せる。

そして、その消え失せる過程の軌道上で光の矢はその機械の龍の尾の部分を丸々焼失させた。

咆哮を上げる『魔導獣機』。

それは苦しげな悲鳴にも聞こえた――まぁ、幾ら人工知能を搭載しているとは言っても『魔導獣機』が機械である事には変わりないのだけれど。

だから、痛覚も無いはずなのだ。

それ故に、悲鳴も何も上げる事は無いはずなのだが――その辺りのリアルな行動は人工知能による指令なのだろう。

しかし、何にしてもその咆哮によってその機械の龍に隙が出来た事には違いなかった。

「――≪武装変形（アームズリセット）≫」

私は左手の光の弓の形状を解除して、ばらけた魔力の粒子を剣の形へと変換させる。

左手にある光の剣を私は右手に持ち替えた。

それと同時に私はその剣に魔力を集約させ始める――集約された魔力は光へと変化し、オレンジ色の刀身が輝かしい光を放った。

私はその光の剣を振り上げて――そして。

「――≪太陽の斬閃（ソーラーレイ）≫」

私は一気に光の剣を振り下ろし、前方にオレンジ色の光の閃光を解き放った。

その閃光に呑み込まれる『魔導獣機』。

その巨体を呑み込んだオレンジ色の閃光は段々と薄れて行き――呑み込んだその機体と共に空中から姿を消した。

「……ふう」

私は一つ息を吐（つ）く。

これで終わった。

未来から転送された『魔導獣機』は破壊された。

だから、もう終わったはずだ。

私はそう思っていた。

――だけど。

その考えは不意に下界から上がった女性の悲鳴によって一瞬にして掻き消された。

「！」

私はその悲鳴にハッとしてすぐさま地上を見下ろす。

秀の家の前の左右に延びる住宅街の通路。

その右側の通路の奥には――いつの間にか道の幅ほどの漆黒の穴が出現していて。

その穴の前には一角獣（ユニコーン）の形をした『魔導獣機』の姿があった。

◆◆◆

ウリアの放ったオレンジ色の光線が龍の形をした巨大な『魔導獣機』を一瞬にして焼失させた。

流石はウリアだ。

あんな強敵でも――ウリアに掛かればこうも簡単に倒されてしまう。

そして、これでもう『魔導獣機』は倒されて、終わった。

戦闘は終了した。

後は、ウリアにシーフードのカップラーメンを用意してやるだけだ。

――そうだ。

俺がそんな事を考えてしまったのは、ウリアがあの『魔導獣機』を倒した事で全てが終わってしまったと思い込んでしまった事だ。

しかし、まだ全ては終わっていなかった。

むしろ、始まってすらいなかったのだろう。

今のウリアと『魔導獣機』との戦闘は単なる序章に過ぎなかった。

そして――その序章は今終結を迎えて。

とある女性の悲鳴と共に物語は漸く開始される。

「！」

俺はハッとしてその叫び声が聞こえて来た方を振り向く。

すると、全員の視線が――とある一点に向けられていた。

俺の視線も同じくその一点へと向く事になる。

俺の家の前から左右に延びる住宅街の通路。

その右側に延びた通路の奥にいつの間にか出現していた――漆黒の穴。

そして。

その前には――頭から鋭い角を生やした馬の形をした機械の獣。

一角獣の『魔導獣機』の姿がそこにはあった。

「なっ……！」

俺は驚愕する。

それは、俺が勝手に“戦いは終わった”と思い込んでいたからだった。

一体の『魔導獣機』が破壊された矢先に出現した機械の一角獣。

その背後で漆黒の穴が渦を巻いて閉じて行く。

そして――その漆黒の穴が景色の上から完全に消え去った瞬間。

一角獣の目が黄色い光を放って。

不意にその機体は俺目掛けて突進を仕掛けてきた。

◆　◆　◆

それは突進と言うよりも――実際には跳躍、もしくは、滑空したと言った方が正しいのだろう。

俺が立っていた位置から１００メートルほど前方に突如現れた機械の一角獣はたった一度アスファルトを蹴るだけでまるでミサイルの如く俺に襲い掛かって来たのだから。

「――――っ！」

声を上げる間も無く俺はその場から前に転がるようにして跳ぶ。

鋭い角を前方に向けて飛んで来た機械の一角獣は――俺が先ほどまで立っていた場所に着弾した瞬間、まさにミサイルの如く地面を爆発させた。

いや、実際には爆発したのではなく、地面がその機械の一角獣の突進によって丸ごと吹き飛ばされたと言った方が正しいのだろうが。

その光景を目の前で見た俺でもそう見えてしまうほどに――その突進の威力は凄まじかった。

「くっ……！」

前に跳んだ勢いも余って、その機械の一角獣の突進によって起こった衝撃波で俺は更に前へと吹き飛ばされる。

回転する景色。

その光景に俺は昨日の出来事を思い出した。

機械の狼に襲われる自分――何だか、その事が遠い昔のように思えた。

確かにその出来事は昨日の事のはずなのに。

白い欠片？

そんな事を思いつつ、地面を勢いが尽きるまで転がり終えた俺は軽くふら付きながらもその場に立ち上がる。

俺の視界には機械の一角獣が突っ込んだ場所から立ち昇る砂煙と家から外に出て来た住民達が悲鳴を上げながらどこかへ逃げて行く様子が映っていた。

それでいい――俺はそんな事を思った。

『魔導獣機』の姿をこの町の人々が視認してしまった事は既に仕方が無いが――だからと言って、これ以上あの人達がこの一件に関わる事は無いだろう。

――そして。

そんな状況分析をしていたからなのだろうか。

それとも、地面を転がった事によって少なからず意識が朦朧としていたからなのだろうか。

気付けば、一瞬にして吹き飛ばされた砂煙の中から飛び出して来た機械の一角獣のその鋭い角が――目の前にあった。

「あ――――」

俺は何か言葉を発そうとした。

どんな言葉を発しようとしたのか、何を言おうとしたのか。

それは俺自身も解ってすらいなかった。

ただ、迫り来るその角に――俺は何かしらのリアクションを取ろうとしたのだと思う。

しかし、その試みは失敗に終わった。

何故なら。

俺の目の前に――昨日と同じように。

紅い光を帯びた翼を生やした天使が舞い降りたからだ。

その天使は――ウリアは迫り来る機械の一角獣と対峙したまま俺の左肩に手を置く。

そして、俺の体をそのまま右方へと投げ飛ばした。

俺はアスファルトの上に尻餅を着く。

そして――それと同時に。

光の剣と一角獣の角が衝突し合う凄まじい金属音と共に。

『魔導獣機』の突進を真正面から受けたウリアの姿が俺の視界の左方へと消えた。

◆◆◆

私は秀とその機械の一角獣との仲裁に――殆ど何も考えないまま突入した。

本当に、あの時の私は何も考えていなかったと思う。

ただ――秀がピンチだったから。

秀を救おうと必死だったから――何も考えていないと言うか、何も考えられなかったのだ。

何も考えずに、ただ我武者羅（がむしゃら）に。

私は空中から一気に急降下して、一角獣の角から秀を護る事に成功した。

しかし、その機械の一角獣の突進は余りにも――予想していたよりも遥かに強力だった。

ある程度の衝撃は予測して仲裁に入ったのにも関わらず――その突進を真正面から剣で受け止めた私はそのままその勢いを殺し切れずに後方へと強制的に押されてしまった。

秀を私の後ろから強制的に撤退させたのは正解だったという事か。

何も考えていなかったにしては上出来な判断だったと思う。

やはり、人間には生まれながらの本能というものが存在するらしい。

第六感と言っても良いだろう。

「くっ……！」

そして、私は剣で受け止めたのにも関わらず一向に死なないその勢いに歯噛みして足に力を込める。

魔力を使用して戦う場合、その術者はその体自体にも魔力を取り込んで自身の体を少なからず強化する。

それによってある程度の衝撃に体が耐えられるようにするのだ。

自身の体を強化する事には様々なメリットがある。

例えば、常人ならば火傷をするような炎の中にも入る事が出来るし。

例えば、常人ならば死んでしまうような衝撃にも耐える事が出来るし。

例えば、常人よりも遥かに強い膂力（りょりょく）を得る事が出来る。

しかし――その能力の強化によるメリットは全て常人よりも上のランクにしか行けないというデメリットも存在する。

先ほど挙げた三つの例にも、魔術師同士の戦いとなれば余り関係が無くなってくる。

魔術師同士の戦いではそのメリットも全て零（ゼロ）になってしまうのだ。

例えるならば、魔術師の放つ炎には幾ら魔力で体を強化していても耐える事は出来ない――と言った所だろうか。

――そして。

今も――今のこの状況もそのメリットの恩恵は余り受ける事が出来ないと思っていて良いだろう。

そもそも、『魔導獣機』は常人では無いという事以前に――人間ですら無い。

人間では無い、単なる機械だ。

人を殺す為に、常人よりも遥かに強い力を発揮する事が出来る――兵器だ。

そんなものを相手にして、魔力を体に取り込んだ際に受ける事が出来るメリットを当てにする事は――死に直結する。

ちょっとした油断が死を招く――それが戦いだ。

それは解っている。

解っているのだけれど――それでも。

それを解った上でも、この機械の一角獣の突進は凄まじい威力を持った一撃であった。

「――――っ！」

私は幾ら待っても止む事を知らないその勢いに耐え兼ねて――地面を蹴って上に跳躍しようとする。

しかし、私の跳躍するという上向きのベクトルよりも、一角獣の突進するという横向きのベクトルの力の方が勝っていたらしく。

上に跳んだ瞬間、私は機械の一角獣によって予想外の方向へと弾き飛ばされてしまった。

「くっ……！」

私は体を空中で回転させて、何とか体勢を整えると、光を纏ったその翼を羽ばたかせて空中へと飛翔した。

地上では勢いを殺す為に機械の一角獣が地面を削り取りながら荒い急ブレーキを掛けている所だった。

地面で停止した一角獣はその黄色く光る両の目を私に向けてくる。

どうやら、秀から標的を私に変更させる事には成功したようだ。

空を飛んでしまえばこちらのものである。

少し汚い戦い方かも知れないが――私が生き残る為には、何よりも、秀を護る為には少しくらい狡い戦い方をしなければならないだろう。

綺麗な戦い方を求めていて命を落としたり、護るべきものを護れなかったりしたら、意味が無いと私は思うから。

――だから。

「――≪武装変形（アームズリセット）≫」

だから、私はオレンジ色の剣の形状を解いて、そこから溢れ出した魔力を更に光の弓へと変換させる。

白い欠片？

あの『魔導獣機』が突進をしてくるだけの攻撃しかして来ないのならば、空から遠距離攻撃をすればいいだけの話だ。

私は右手に魔力を集中させる――そして、その魔力は光となり、更にそこから光の矢へと変化を遂げた。

私はその矢を弓で構えて、光の弦を引く。

弦がギシッと軋む音が聞こえて来た。

私は矢の先を地上に佇む機械の一角獣へと向けて――そして。

機械の一角獣が不意にアスファルトを爆発させるほどの勢いで跳躍して私に突進を仕掛けてきた。

「なっ……！」

その突然の事態に私は驚き、反射的に光の矢を射る。

その時には既に機械の一角獣は私の前方3メートルほどまで迫っていた。

光の矢はその『魔導獣機』の角の先端に命中した。

弾かれる光の矢。

しかし、それによって光の矢と機械の一角獣の突進の両方の軌道が

逸れる。

私の放った光の矢は本来の軌道から大きく逸れて――遠くに見えていた山の頂上付近を纏めて吹き飛ばした。

対する機械の一角獣も私の左側擦れ擦れを猛スピードで通り過ぎる。

その際、左の頬に何か熱いものを感じた。

私は後ろを振り返って機械の一角獣の姿を目で追いながら左の頬に触れてみる。

その頬に触れた左手を見てみると――血が、付着していた。

どうやら、先ほどの突進が左の頬を掠ったらしい。

しかし――そんな怪我は別に大事に至るほどの事でも無い。

と言うよりも、そんな事を気にしている以前に既に決着は着いたも同然だった。

結局、機械の一角獣は地上を駆ける事しか出来ない。

幾ら突進の威力が凄まじかろうとそれは地面の存在があってこその威力だ。

そして――今は空中。

その必要不可欠な地面はどこにも存在しない。

だから、後は地上に落下していく『魔導獣機』を矢で射れば終わりのはずだった。

私がそんな事を――思っていた時だった。

『魔導獣機』が――その機械の一角獣がさも当然と言った様子で空中に着地したのだ。

「えっ？」

私は思わずそんな唖然とした声を漏らす。

それと同時に『魔導獣機』の背中から光の翼が飛び出して来た。

その翼は空中に一筆書きで描かれたような――そんな光の外枠だけで構成された翼だった。

――そして。

私はその機械の一角獣の姿に確信する。

どうやら、この『魔導獣機』の型（タイプ）は“一角獣”では無かったらしい。

そう――その型（タイプ）は空想上生物で馬から派生した生物の中では“一角獣（ユニコーン）”と並んで有名な生物。

――それは。

「“天馬（ペガサス）”……！」

私がその固有名詞を口にした瞬間、機械の一角獣――もとい、天馬が大きく嘶(いなな)いた。

先ほどの機械の龍ほどの声量では無かったのでこの嘶きによってガラスが割れたり、鼓膜がおかしくなってしまったりする事は無いのだろうけれど。

「……」

私はその嘶いた機械の天馬の次の行動に対応しようと腰を低くして身構える。

すると、その天馬の角の先に光が集中し始めた。

急速に集約されたその光は――輝かしい光を解き放って。

光線となって私に襲い掛かった。

解き放たれた光線を私は難なく回避する。

それから、私は淡く紅い光を帯びた翼を羽ばたかせて飛行を開始した。

「≪流星(メテオダーツ)の焔矢≫！」

機械の天馬と出来るだけ距離を取りながら私は光の矢を放つ――しかし、距離を取ってしまったからなのか、その攻撃はいとも容易くその『魔導獣機』には避けられてしまった。

距離を取ってしまったから今の攻撃を躱された。

しかし、距離を取らない事には矢を射る事は出来ない。

――それならば。

「≪武装変形（アームズリセット）≫！」

私は飛行を続けながらそう声を上げる――私の左手の中で光の弓が魔力へと分解されて、それは光の剣へと形状を変化させた。

改めて創造された光の剣の柄を私は両手で握り締める。

周囲の景色が高速で後ろへと流れて行く中で――私はその刀身に魔力を集中させた。

「≪太陽の斬閃（ソーラーレイ）≫！」

私は光を放つオレンジ色の剣を振り上げる。

その刀身から解き放たれた魔力は巨大な光の閃光となって遠くに見える機械の天馬に襲い掛かった。

しかし――その全てを焼き尽くす太陽の閃光を機械の天馬は突進による急加速で躱して見せた。

けれど、それで良かった。

先ほどから私の放つ攻撃の全てを躱しているあの『魔導獣機』に――今の攻撃が当たるとは最初から思っていなかった。

私は飛行を止めて空中で停止する。

前方では急加速した一度その速度を緩めて――機械の天馬が旋回を開始していた。

旋回をして、私の正面にその機体を位置付けた『魔導獣機』は再度急加速をする。

撃ち放たれた弾丸の如く高速で迫り来る機械の天馬。

しかし――私はまだ動かない。

迫り来るその機体を見据えながら私は光の剣の柄を握り締める。

段々と縮まって行く私と『魔導獣機』の距離。

１００メートル、９０メートル、８０メートル、７０メートル、６０メートル――。

５０メートル。

今だ。

そう思い立った瞬間、私は光の剣に魔力を集中させた。

白い欠片？

とは言っても、そこまで膨大な量は集中させていない。

≪太陽の斬閃（ソーラーレイ）≫を撃つ為には最低でも3秒の時間が必要だ。

しかし、今はそこまでの時間は無い。

だから、私は1秒で必要な分の魔力を周囲の大気から収集して――

そして。

「≪太陽の一閃（ソーラーブレード）≫！」

私は光の剣を前方――既に残り２０メートルほどまで迫った『魔導獣機』目掛けて振り上げた。

延長される光の剣の刀身。

１００メートルほどに延長されたその光の剣は高速で迫り来る機械の天馬の機体を両断した。

真っ二つに分かれたその機体は――その突進の勢いも余って私の左右を猛スピードで通り過ぎる。

そして、私の後方で大爆発を起こした。

背中に爆風と衝撃波を感じながら――私は延長された剣を軽く振るう。

それと同時に延長されていた刀身が一瞬で元の長さに戻った。

延長された刀身の魔力が分解されたのだ――分解されたその刀身は魔力の粒子となって周囲に霧散していく。

「ハァ……ハァ……」

私は少し荒くなっている自分の呼吸を感じながら――こう思った。

今日の襲撃は何かがおかしい、と。

いや、そもそも今までの襲撃に使用された『魔導獣機』の数が一体：：だけだった方がおかしいのかもしれない。

本当に秀の命の狙うのならば……こうして、数で攻めた方が確実に効率が良いだろうから。

しかし、でも、その今までの事があったからこそ――今日の襲撃は何かがおかしかった。

何か――違和感を、覚えた。

だから、私は機械の天馬を倒した後でも心から完全に不安を拭い去る事が出来なかった。

私の心の中ではまだ悪い予感が継続されていたから。

――そして。

どうやら、その私の悪い予感は的中してしまったらしく。

これまでと同じように何の前触れも前振りも前兆も無く。

私の背後に――漆黒の穴が出現した。

「……！」

その漆黒の穴の出現に私は驚愕して――ゆっくりと、後ろを振り返る。

そこには何と三つの漆黒の穴が出現していた。

そして――私がその漆黒の穴の数を認知した瞬間。

漆黒の穴の中から何かが猛スピードで飛び出して来た。

「ぐっ……あっ……！」

私は――その穴の中から、主に正面の漆黒の穴から飛び出して来た機体を避け切る事が出来なかった。

左肩に感じる、灼熱。

その焼かれたような激しい痛みに――私は肩を斬られたと確信する。

それから、私の体は地上へと落下を開始した。

「くっ……うっ……！」

背中に感じる突き上げるような突風。

私は痛みに歯を食い縛りながら剣を左手に持ち替えて右手で左肩を押さえる。

上空ではおそらくあの三つの漆黒の穴から飛び出した三体の『魔導獣機』――以前にもこの現代に転送された鳥型――どちらかと言えば戦闘機に近い形状をした機体の姿があった。

三体で空中をクルクルと旋回している機械の鳥達。

私の左肩から溢れ出した真っ赤な血が空中へと昇って行く。

「……っ！」

私は何とか痛みに耐えながらも翼を羽ばたかせて落下する体を空中に留めた。

それと同時に先ほどまで上空に居た三体の『魔導獣機』が私の周囲にやってきた。

「！」

私はそれにハッとして光の剣を構える――しかし、『魔導獣機』達は私の周りをグルグルと旋回しているだけで攻撃を仕掛けて来なかった。

「……何？」

私が眉を顰めてそう怪訝に呟いた瞬間だった。

（――こんにちは）

周囲を旋回する三体の『魔導獣機』から――男の声が聞こえて来たのだ。

（ウリアール＝ブレイザー君）

◆◆◆

「やった！」

地上でウリアの戦闘を仰いでいた俺は機械の一角獣が一刀両断された瞬間に思わずそう声を上げてしまっていた。

我ながらヒーローの戦いを外野で見ていた単なるエキストラみたいな。

脇役っぽい台詞だったなぁ……なんて、思ってしまったのだけれど。

まぁ、それは仕方の無い事なのだろう。

だって、俺は脇役以外の何物でもないのだから。

この俺が巻き込まれている事柄について、俺自身はかなりの重要人物みたいだけれど。

それは単なる重要人物であるだけであって――主人公では無い。

主人公よりも重要な脇役なんて物語的にはそう珍しくも無い事だ。

世界を救う為の鍵の役を担う脇役だとか、主人公のバックアップをする為の脇役だとか。

それは確かに重要な役所なのだけれど、それと同時にそれの役所は脇役でしかないのである。

俺は重要人物であり、それと同時に脇役。

主人公はどちらかと言えばウリアの方だ。

まぁ、別に主人公になりたいとは別に思わないので――それはそれで構わないのだけれど。

「何にしても……これで終わり――なのか？」

ついつい言葉が語尾疑問形になってしまう。

それは、今の機械の一角獣――もとい、天馬の事があったからなのだろう。

あの機械の天馬はウリアが機械の龍を倒した後に――突如、この現代に転送された。

だから、ウリアが機械の天馬を倒した後も俺は何だか不安を拭い切る事が出来なかったのである。

悪い予感がしてならなかった――とも言っていい。

これで本当に終わりなのだろうか？

何となく思ったその疑問――そして、俺のその疑問に答えるかの如く。

ウリアの背後に突如三つの漆黒の穴が出現した。

白い欠片？

「ウリア！」

俺がそう叫んだ時には既に遅かった。

漆黒の穴から飛び出す三体の『魔導獣機』。

その内の一体に体当たりを食らったのか――ウリアの体が後方に飛ばされて地上に落下を開始した。

「くそっ……！」

俺は悪態を吐いてから駆け出した。

落ちてくるウリアを受け止めようと思ったのだ。

まぁ、幾らウリアが小柄だとは言ってもあんな高い位置から落下してくる人間を受け止めるには少々無理があるかも知れないけれど。

「……あっ」

すると、ウリアはある程度落下した所で――自身の背中から生えている翼で何とか空中で体勢を整えた。

「……よ、良かった……そこまで大怪我はしていないみたいだな」

しかし、安心したのも束の間――先ほど漆黒の穴から飛び出して来た三体の『魔導獣機』がウリアの周囲を取り囲んだのだ。

その三体の『魔導獣機』は集団で獲物を襲うハイエナの如く、ウリアの周囲をグルグルと旋回しながら――。

「……えっ？」

俺はその『魔導獣機』の行動に思わず唖然とした声を漏らしていた。

何故なら、その三体の『魔導獣機』はウリアを取り囲むだけでそれ以上の事をしなかったからだ。

「……一体、あいつ等は何を――」

「（こんにちは）」

――その俺の言葉は。

「（ウリアール＝ブレイザー君）」

不意に聞こえて来たその男の声に掻き消された。

上空と――それから、左側から聞こえて来たその男の声。

すると、その声に続いて何者かの足音が左側から聞こえて来た。

その足音に俺は左方を振り返る。

住宅街の通路の奥――そこからこちらに歩いてくる一人の金髪の男。

前髪を掻き上げてオールバックにしているその男は赤いハーフフレ

ームの眼鏡を掛けていた。

そして――服装はどこかで見たような上から下まで真っ黒な軍服。

それは以前ストレンドと出会った際に、あいつが着ていた軍服と同じだった。

――と、いう事は。

「お前……未来人か」

「如何にも」

男は耳の方に手を持って行きながら俺の問いに答える。

よくよく見れば、その男の耳からは小さなマイクのようなものが延びていた。

どうやら、頭上から声が聞こえて来たのはその辺りにトリックがあるようだ。

おそらく、上空の『魔導獣機』にスピーカーでも取り付けているのだろう。

「そう言う君は――真之乃秀、だな？　私はオッド・サスペクター――２０５６年の未来において、私が所属する組織は――まぁ、言わなくても解るかな？」

「『科学発展側』――だろ？」

「如何にも、その通りだ」

「こっちからも……一つ質問いいか？」

「ああ、構わないよ。真之乃秀」

「お前は……ストレンドが言っていた、いわゆる『科学発展側』の中の『強硬派』に属する人間なのか？」

「……フッ」

すると、俺の問いかけにこの男――もとい、オッド・サスペクターはどこか呆れたように笑った。

「ストレンドの奴め……悠長な男だ。私達の属する組織の事を明かすほどの時間を消費しながら、今の今までこいつ等を倒し損ねているとはな」

「……って、事は」

「ああ、如何にも。私はそのストレンドの言う所の――『強硬派』に属するメンバーの一人だ」

「それじゃあ、最近の襲撃の殆どはお前等の仕業だったのか……」

「如何にも、そうだ。大体、今までの我が組織のやり方が温(ぬる)かったのだよ。歴史が変わる事を恐れて、決まった時間だけの襲撃を繰り返していては――殺せる目標も殺せないのは当たり前だ。上層部の連中はその辺りの事を全く解っていない」

だが、我々は違う――とオッドは不敵な笑みと共に言う。

「我々は歴史の変化など恐れない。例え、我々の行動によって世界線が変動し、新たな平行世界が創造される事になるとしても――それが一体全体どうしたと言うのだ？　どちらにしても、２０５６年の未来に戦争は起こるのだ。それならば、歴史の変化を恐れる事は実に無意味な事だ」

例え世界が変わろうと戦争は確実に起きる。

それならば、例え世界線を変動させようと君を殺す事に全力を注いだ方が良いだろう――とオッドは依然としてニヤリと笑みを浮かべたままそう言った。

「君は２０３０年の未来で魔力を復活させる重要な人物なのだからね――君さえ消してしまえば、例え世界の構造が変わろうとも、我ら『科学発展側』の勝利は確定したも同然なのだから」

「なるほど……命を狙われている側の俺が言う台詞じゃないかもしれないけれど、お前の言いたい事は何となく解るよ」

「解ってくれるのかね、真之乃秀よ。だがまぁ、それで君の命を狙う事を止めるなどとは思わないでくれ給えよ」

同意してくれた所で君に情など湧く事は無いのだからね――とオッドはどこか気取った口調のまま言う。

「そんな事は解っているさ。俺の命を今の今までずっと狙って来たお前等だ――そんなお人好しな連中じゃない事くらい、解っているさ」

「その理解はこちらとしても好都合だ。しかしまぁ――安心し給え、真之乃秀よ。君をただ殺すつもりはこちらとしても毛頭無い」

「……どういう事だ？」

「最近、我々はとある新型の『魔導獣機』の開発に成功してね。その試運転も兼ねて――君を殺す事にしたのだよ」

「それはそれは……そんな何かの為になって死ねるなんてとても光栄だよ、俺は」

「ほう、皮肉も言えるほどに今の君は余裕を持っているのかね。君は、それほどまでにあの――ウリアール＝ブレイザーを信じているという事なのかな？」

そう言ってオッドは空を振り仰ぐ。

俺も顔を少しだけ上げて――オッドの咄嗟の行動に反応できるようにしながら空を仰いだ。

そこには、三体の『魔導獣機』に囲まれたままのウリアの姿があった。

すると、オッドが不意に動きを見せた。

俺は咄嗟に視線をオッドの方に戻す――オッドは右手を上げるとそれを右耳に持って行く。

正確にはマイクが延びている右耳へとオッドは右手を持って行った。

「（えらく信用されているな、ウリアール＝ブレイザーよ）」

再度オッドがその口から言葉を発した際、また俺の耳にはその声が二重に聞こえた。

白い欠片？

そのオッド自身の声帯から発せられた声と空を飛ぶ『魔導獣機』に搭載されたスピーカーから聞こえてくる声なのだろう。

そして、オッドは更にウリアに向かって続ける。

ウリアからの返答は無い――と言うよりも、それ以前にあの高さではウリアが全力で声を上げた所でこちらには何も聞こえやしないだろう。

「（しかし、自惚れるなよ、ウリアール＝ブレイザー。お前には何かを救う事など出来やしない。何かを助ける事も、また同じだ）」

お前には何かを壊す事しか出来やしない――とオッドは言う。

そのオッドの言葉を聞いている俺にはその言葉の内容がさっぱり解らなかった。

ウリアは何に対して自惚れているというのだろうか。

ウリアが何かを壊す事しか出来ないというのは一体全体どういう事なのだろうか。

そんな疑問が俺の頭の中で渦巻いたが――その疑問は消化されるよりも先にオッドはウリアに向かってこう続けた。

「（そして、どうやら君はこの真之乃秀に全てを話していないようだね――まぁ、良いだろう。話辛いのならば、今この私が君の全て

を真之乃秀に全てを話してやってもいいが……どうするかね？　ウリアール＝ブレイザー？）」

オッドはウリアにそう問いかけた。

しかし――どちらにしてもウリアからの返答はあったとしてもここまで聞こえて来ない。

けれど、今回はウリアからの返答はあった。

その返答の手段は声では無かった。

不意に――ウリアの足元に魔方陣が出現したかと思うと、その直後にその周囲を飛んでいた『魔導獣機』を纏めて巻き込む形で深紅の炎がその魔方陣から湧き上った。

爆発にも似た勢いで溢れ出したその炎。

何事だろうか――と俺がそう思っていると溢れ出した炎の中から何かが猛スピードで地上に落下してきた。

それは炎の塊だった。

いや、正確には――地上に落下してきたそれは大量の炎をその身に纏ったウリアだった。

ウリアがその場に立ち上がる――それと同時にその身に纏われていた炎が一瞬にして消滅した。

――そして。

「……えっ？」

俺は思わず――そんな唖然とした声を漏らしていた。

今、ウリアの頭の上にある天使の輪が歪な形に見えたからだ。

しかし、それはきっと気のせいだったのだろう。

ウリアが立ち上がり切った時には――天使の輪はいつもと同じように綺麗な円を描いていたのだから。

「……まぁ、良いだろう」

オッドは右耳から右手を離すとやはりどこか気取った口調で俺の前に立つウリアに向かって不敵な笑みを見せた。

そのオッドの表情は見て取れたが、こちらに背を向けているウリアの表情は見えない。

今、ウリアは一体全体どんな表情をしているのか。

何だか――俺は今それが途轍もなく気になった。

「その事実を知らないままに死んで行くのが――真之乃秀にとっても、ウリアール＝ブレイザーにとっても、良い事なのだろう。私の口からは話さないでおこう。これは、君達の命を狙う我々からの――最大限の譲歩だよ。感謝し給え」

「……何を言っているのか、さっぱり解らないわね」

すると、ここで漸くウリアが言葉を発した。

しかし――依然としてそのウリアの表情は見えない。

「ここで死ぬのは――あなたの方でしょう？」

「言ってくれるじゃないか、ウリアール＝ブレイザー。さて……それでは、これと戦った後でもそんな言葉を君は言う事が出来るかな？」

そう言って不敵な笑みを浮かべたオッドは――何やら懐から携帯電話のようなものを取り出した。

見た目的には確実に携帯電話なのだが、こんな場面でオッドが誰かに電話をするとは思えない。

という事は――それは携帯電話の形状をした他の何かなのだろう。

オッドはその携帯電話のようなものを開くと素早く番号をプッシュし始める。

ピポパポという携帯電話独特のプッシュ音が鳴り響いて――そして。

「――転送」

そのオッドの言葉の直後、彼の背後に空間の歪みが生じた。

どうやら、あの携帯電話のような装置は未来から過去へと物体を送る為の転送装置だったらしい。

オッドの背後に生じた歪みは渦を巻きながら一点に集中して――そして。

漆黒の穴へとその姿を変化させる。

「……さて、それではウリアール＝ブレイザー」

その転送装置を閉じて、その機械を懐に仕舞ったオッドは漆黒の穴の前から左側へと移動した。

「君がどこまで出来るか――お手並み拝見と行こうじゃないか」

依然として不敵な笑みを浮かべたままのオッド。

そんな彼が出現させた漆黒の穴から出て来たもの。

――それは。

人の形をした、『魔導獣機』だった。

輪廻終焉

景色に空けられた漆黒の穴から出て来たのは――人の形をした『魔導獣機』だった。

正確な容姿を述べるのならば、それは西洋甲冑を装着した人のようなものだった。

初見ならば、中に人が入ってその鎧を着たまま動いているとしか絶対に見えないだろう。

しかし――今、俺の目の前に居るのは『魔導獣機』だ。

単なる、機械だ。

人と見間違うほどにリアルに作られた――単なる機械だ。

「……さて、『人型（ヒューマンタイプ）』よ」

そして――オッドは言う。

不敵な笑みと共にオッドは――命じる。

その『魔導獣機』に命じる。

「お前に命令を下す。ウリアール＝ブレイザーを――殺せ」

オッドがそう言った瞬間――西洋甲冑の兜（かぶと）の奥で二つの目が黄色い光を放つ。

人の形をした機械は滑らかな自然な動作で右手を肩の高さまでゆっくりと上げる。

その直後、上げられた右手の周囲の景色が歪みを帯びた。

その歪みの奥から現れる――刀身の無い鍔（つば）と柄だけの剣。

『魔導獣機』はその剣を掴む。

それと同時に――その剣に光の刀身が出現した。

刀身を得た剣の振り心地を確かめるように、『魔導獣機』は何も無い所で剣を一度振るった。

――そして。

気付いた時には、『魔導獣機』の姿がウリアの目の前にあった。

「！」

俺はハッとして目を見開く――その俺の動作と『魔導獣機』が剣を振り上げる動作はほぼ同時だった。

凄まじい金属音が鳴り響く。

俺の視界からウリアの姿が消えてその代わりに『魔導獣機』の姿が現れる――ウリアがその一撃によって空中へと弾き飛ばされたのだ。

『魔導獣機』はウリアの体が飛んで行った上空を振り仰ぐと、すぐ

さま両足を曲げる。

それから――『魔導獣機』はその場で跳躍した。

その機体の途轍もない脚力によって爆発し――吹き飛ばされるアスファルト。

まるで小さな隕石でも落下したかのようなクレーターを残して『魔導獣機』は俺の前からウリアを追って空へと跳んで行った。

「……」

そして――俺はたった今目の前で起こったその一連の出来事に唖然とする。

全てが速過ぎて、意識の殆どが付いて行かなかった。

気付けば、ウリアとあの人の形をした機械は既に衝突していて――戦闘が始まっていた。

一瞬、だった。

瞬き（まばた）をする余裕さえも無かった。

「……」

何だろう。

何なのだろう……この、感じは。

この嫌な感じは、何だ。

あの『魔導獣機』――今までの機体とは全然格が違う。

「試作品にしては中々のものだろう？」

すると、不意にオッドが空を仰いだまま俺にそう問いかけて来た。

「私も初めてあれが戦う所を観るが……いや、実に素晴らしい。あの機体が装着している鎧は以前西洋で使用されていたプレートアーマーと呼ばれるものらしいが――まぁ、何故あの機体があんな格好をしているのかは知らないがね。おそらくは製作者の趣味だろうが」

「さて……」とオッドは空を仰ぎ見たまま腕組みをして片方の手で顎（あご）の辺りに触れながら言う。

「ウリアール＝ブレイザーがあの機体相手にどれだけ粘る事が出来るか……見物（みもの）だね」

「……」

――確かに。

今回の『魔導獣機』は……今までの機体とは格が違う。

それは端から見ていただけでも解った。

直接対決を強いられているウリアには……尚更、嫌でも解ってしまう事だろう。

……でも。

俺はウリアを信じている。

と言うよりも、何が何でも信じなければならない。

ウリアは勝つと。

ウリアは絶対に勝ってくれると。

ただウリアに護られて、ウリアの帰りをいつも待っている俺には。

それくらいしか――出来る事が無いのだから。

◆◆◆

――気付けば。

私の体は空中へと吹き飛ばされていた。

段々と遠ざかって行く地上の世界。

反射的に剣を出すという行動が――どうやら功を成したようだ。

でなければ――おそらく。

あの『魔導獣機』の一撃をまともに食らって私は絶命していただろう。

「くっ……！」

私は背中の翼を羽ばたかせて、あの機械の人形から受けた衝撃を無くそうと試みた。

試みようと――した。

しかし。

「！」

その試みは失敗に終わった。

何故なら――地上から跳躍してきた『魔導獣機』が一直線に私目掛けて飛んで来たからだ。

輪廻終焉？

私と同じ高度に達した瞬間――その人型の機体は光の刀身を携えたその剣を振り下ろしてきた。

私はその斬撃を受け止める。

先ほどと同じく、光の剣を通して凄まじい衝撃が私の体全体を駆け巡った。

「……！」

私は歯を食い縛って必死に『魔導獣機』の剣を受け止める。

そんな感じで剣ばかりに意識を向けていたからなのだろう。

私は『魔導獣機』の放った蹴りに気付く事が出来ず――その蹴りを腹部にまともに食らってしまった。

「ぐっ――がっ――！」

私の腹部に減り込む『魔導獣機』の右足。

その蹴りの衝撃によって私は後方へと吹き飛ばされる。

『魔導獣機』との距離が一瞬にして遠ざかった。

私はまた翼を使って空中で何とか停止する。

「うっ……！」

その際、私は思わず胃の中のものを戻しそうになった。

あれだけ強い蹴りを腹部に食らっては――それは仕方の無い事だった。

猛烈な吐き気を堪えつつ、口の中に何か酸っぱいものを感じながら私はゆっくりと顔を上げる。

その瞬間、何かが太陽の光を遮って私の体に影が差した。

いつの間にか私の前に居た『魔導獣機』は体を回転させて――私の頭目掛けて踵落(かかと)としを繰り出してきた。

振り下ろされた鋼鉄の踵を私は何とか体を反らして回避する。

そして、その一撃を回避する事に成功した私は飛翔してその場から咄嗟に離脱した。

『魔導獣機』との距離を取った私は光の剣に魔力を集約させる。

光を放つ剣の刀身――それは魔力が十分に取り込まれた事の印だった。

「《太陽の斬閃(ソーラーレイ)》！」

私は飛行しながら光の剣を右薙ぎに振るう。

その剣から解き放たれたオレンジ色の巨大な閃光は――文字通り、

光速で『魔導獣機』へと襲い掛かった。

『魔導獣機』の機体はその閃光に遮られて見えなくなる。

閃光に呑み込まれた――と思ったのも束の間。

不意にオレンジ色の閃光が二つに割れて――その奥から剣を振り上げた状態で空中に佇む『魔導獣機』の姿があった。

「そんな……！」

私は驚愕する。

《太陽の斬閃（ソーラーレイ）》が……あんなに容易く破られるなんて。

「あ、《武装変形（アームズリセット）》！」

私は咄嗟にそう声を上げる。

光の剣が解かれて――それは魔力の粒子へと変換される。

そして、その魔力の粒子は新たに光の弓へとその形を変化させた。

その弓を左手に持ち替えた私は右手に魔力によって創造した光の矢を構える。

光の弦が――軋んだ音を立てた。

「《流星の焔矢（メテオダーツ）》！」

私は矢尻を掴んでいた右手を開き、光の矢を『魔導獣機』目掛けて撃ち放った。

空中を劈くように光の一線となって突き進んだ――その光の矢を。

その軌道上に立っていた『魔導獣機』は難なく左手で掴んだ。

「……えっ？」

思わず――唖然とした声が、漏れた。

今――たった今、目の前で起こった出来事に私はそんな声を漏らしてしまった。

掴んだ？

光の速度で――いや、光の速度よりも速い矢を。

ましてや、魔術であるその一撃を。

素手で、掴んだ？

相手が『魔導獣機』で、人では無く機械という存在だったとしても――。

その行動は――矢を素手で掴むという行動は。

途轍もなく、有り得ないものだった。

確かに目の前で起こった事にも関わらず、それでも否定したくなる

ような。

それほどまでに、有り得ない事だった。

そして、私の放った矢を難無く使った『魔導獣機』は左手を握り締めると共にその矢を真っ二つに折った。

折られた光の矢は魔力の粒子となって霧散し、周囲の大気に取り込まれていく。

「……そん、な……」

そう呟きながら私は思わず後ろに後ずさりを見せていた。

いや、後ずさりと言っても私の足では空中に立つ事は出来ないので——浮遊しながら、だけど。

恐怖——していた。

私は恐怖していたのだ。

前方に佇む——その人の形をした機械に対して。

私の放つ全ての攻撃を無に帰すその存在に対して。

「……っ！」

けれど、私はそこに留まる。

後ずさりを止めて——再度そこに居る『魔導獣機』と対峙する。

輪廻終焉？

逃げた所で、どうにもなりはしない。

そもそも、私が逃げたら地上で私の帰りを待つ秀はどうなると言うのだ。

秀が死ぬという事――それはきっと私がこの世で一番起きて欲しくない現象だ。

何故だろう。

何故そう思うのか――私には解らない。

解らないけれど。

絶対に、秀を死なせたくない。

例え、私の命がここで尽きるとしても。

秀だけは――絶対に助けて見せる。

私が死んでしまったとしても、秀が生きていてくれるのなら。

私はそれで、構わない。

「……ふう」

私は一つ息を吐いた。

そして――足元に深紅の光を放つ魔方陣を出現させる。

その魔方陣から溢れ出す大量の炎。

それは渦を巻きながら――私の頭上に一つの塊として集まり始める。

一つに集約された大量の炎は巨大な球体と化した。

「――《破滅の業火（プロメテウス）》」

私は左手を『魔導獣機』に向けて振り下ろす。

その瞬間、上空で停滞していた巨大な炎の塊が猛スピードでそこに佇む『魔導獣機』目掛けて落下を開始した。

迫り来る炎の塊を見上げていた『魔導獣機』は空中を蹴って跳躍する。

自ら業火の球体に立ち向かった『魔導獣機』は剣を振り上げた。

真っ二つに両断される炎の塊。

しかし――それは私にとって想定内の事だった。

私が言うのも何だけれど、《流星の焔矢（メテオダーツ）》を素手で掴んで破壊した『魔導獣機』にこの魔術が効くとは思っていなかった。

――だから。

二つに割れた炎の塊の奥に予め先回りしていた私は――延長させた光の剣を『魔導獣機』目掛けて振り下ろす。

「《太陽の一閃（ソーラーブレード）》！」

１００メートルほどに延長された光の刀身が『魔導獣機』に襲い掛かる。

そして、流石の『魔導獣機』もこの一撃には面食らったようで。

剣と剣がぶつかり合うそんな凄まじい金属音と共に――『魔導獣機』は私の放った斬撃を頭上で受け止めた。

「くっ……うう、う……っ！」

私は柄を握り締める両手に更に力を込めて『魔導獣機』を両断しようと剣を振り下ろし続ける。

すると、私の見下ろす先で『魔導獣機』がまた驚くべき行動を見せた。

延長された光の刀身をまた素手で掴んだのだ。

『魔導獣機』はその掴んだ刀身を無理矢理自身の腰の高さまで押し下げると――自らが携える剣で延長された刀身を断ち斬った。

ガラスが割れるような音を立ててバラバラに砕け散る光の刀身。

武器として機能しなくなったその光の剣を修繕しようと私は咄嗟に魔力を集約しようとする。

「あ、アームズ――」

しかし、私のその言葉は最後まで紡がれる事は無かった。

私の目前まで一気に距離を詰めて来た『魔導獣機』の拳が――私の胸部に炸裂したからだ。

「っ――――ぁ！」

最早声にならない叫び。

肺の酸素が全て口から強制的に抜け出していくような感覚に襲われながら――私の体はまた後方へと吹き飛ばされる。

この時、私が口の中に感じたのは吐き気でも酸っぱいものでもなく――血の味だった。

私は宙返りをして飛んで行く勢いを殺しながら空中で停止する。

「っ――ゲホッゲホッゴホッ！」

それから、私は思わずその場で咳き込んだ。

「ゲホッ、ケホケホッ、ケホッ――」

呼吸をする事もままならなかった。

咳き込み過ぎて口から少量の血が飛び出すのを私は視界に捉えた。

「ケホッ――ハァ、ハァ、ハァ……！」

私は荒い呼吸を繰り返しながら――ゆっくりと顔を上げる。

そして、前方からこちらに迫ってくる『魔導獣機』の姿を私はその目に捉えた。

その時――その機体の動きだけでは無く、周囲の風景が全て私の目にはスローモーションに映った。

ゆっくりと流れて行く周囲の景色。

その景色が次第に朱く染まって行く。

――駄目だ。

それは、駄目だ。

しかし、私のその思いは――届く事を、知らず。

私は、頭上で天使の輪が歪な形に歪むのを感じた。

私は、背中で天使の翼が逆立つのを感じた。

完全に朱色に染まってしまった私の視界。

砕けたはずの剣の刀身が一瞬にして創造される。

――そして。

不意に、景色が、動いた。

私の視界は一気に――『魔導獣機』との距離を詰める。

誰かの咆哮が聞こえた。

獣のような――咆哮が聞こえた。

輪廻終焉？

誰の咆哮だろう。

この『魔導獣機』のものだろうか。

そんな事を私が考えていたら――不意に視界の向こう側で剣が振り上げられた。

『魔導獣機』のものではなく、それは先ほどまで私が携えていた光の剣だった。

誰がこの剣を使っているのだろう。

それ以前に、いつの間にあの剣は私の手を離れてしまったのだろう。

光の剣の斬撃を受けた『魔導獣機』の左腕が宙を舞った。

クルクルと弧を描きながらどこかに飛んで行く鋼鉄の腕。

視界が左方へと移動する。

再度放たれた光の剣の斬撃が――今度は『魔導獣機』の首を刎ねようとその機体に襲い掛かった。

しかし――その斬撃は届く事は無かった。

突如、空中で体を捻った『魔導獣機』がその体の回転を利用して蹴りを放って来たからだ。

『私』は脇腹の辺りに凄まじい激痛を感じた。

――って、あれ？

どうして、『私』がこんな激痛を感じているのだろうか。

今、『魔導獣機』と戦っているのは『私』じゃないはずなのに。

『私』では、ない、はずなのに。

どうして――どうして、どうして、どうして、どうして、どうして。

どうして――。

――と、そこまで『私』が考えた所で不意に視界が黒一色に染まる。

テレビの電源を落とした時のように、ブツッと。

その脇腹を襲った激痛に――『私』は遂に意識を失ってしまった。

◆◆◆

ウリアが地上に落ちて来た。

それは勿論、鳥の羽根がふわりふわりと風に流されながら落ちて来るような――そんなものではなく。

ウリアの体は隕石の如く地面に着いた瞬間、アスファルトを破壊して周囲に轟音と突風――そして、大量の砂煙を齎した。

「……！」

俺の視界を遮る砂煙の壁――そのウリアの落下の仕方に俺は驚愕の表情を浮かべた。

偶然にも、ウリアは先ほど飛翔する――と言うよりも、『魔導獣機』によって上空へと吹き飛ばされる直前まで立っていた場所に落下してきた。

徐々に晴れて行く砂煙の壁。

砂煙の向こう側から現れたのは――小さなクレーターの中に仰向けに横たわるウリアの姿だった。

ウリアの体を少なからず保護しているはずの戦闘服は所々が破けてしまっていた。

半開きになってしまっている口の端からは漏れ出した真っ赤な血が頬を伝って地面へと流れ出ている。

ウリアは目を閉じたまま動かない――気を失って、いるのだろうか。

本当にそれだけなのだろうか。

それとも――。

「……う、ウリ――」

俺はウリアに駆け寄ろうとしたがその行動と俺が口にしようとしたその名前は上空から舞い降りてきた『魔導獣機』によって遮られる。

正確には――その着地音によって遮られてしまった。

ウリアが落下して来た時と同じように――その人の形をした機械はアスファルトを破壊しながら地上へと降り立って来た。

砕け散る地面、吹き荒れる突風、舞い上がる砂煙。

その砂煙の奥に西洋甲冑のシルエットが浮かび上がり――二つの目が黄色い光を放った。

砂煙の壁を突き抜けてゆっくりとウリアの傍まで歩み寄る『魔導獣機』。

戦いの中で失ったのだろうか――『魔導獣機』の左腕は肩から下がどこかに消えてしまっていた。

ガシャッガシャッという鎧特有の音を発しながらクレーターの坂を下ってウリアの頭の上まで歩いたその機体は――その金色の髪を掴んでウリアの体を持ち上げる。

気付けば、ウリアの髪型はツインテールから単なる長髪へと戻ってしまっていた。

闘っている最中に髪を束ねているゴムが切れてしまったのだろう。

「う……」

気絶しているウリアの口から苦しげな声が漏れる。

すると――何かを思い立ったように『魔導獣機』の首が右に向いた。

その先にはとある住宅の周囲を取り囲む背の高い塀があった。

そして、俺は今から一体『魔導獣機』が何をしようとしているのか――その思惑に気付く。

「……止めろ」

俺は小声でそう呟く。

それと同時に『魔導獣機』はウリアの体をまるで野球のボールを投げるように振り上げて。

「止めろ！」

俺の言葉を聞く事も無く『魔導獣機』はウリアの体を目の前の塀へと投げ付けた。

爆発にも似た音と共に崩壊する背の高い塀。

ウリアの姿はその崩壊によって発生した砂煙に呑み込まれて見えなくなった。

「……ウリ、ア……」

俺は――その名前を呼ぶ。

余りにも情けない声で、呟く。

どうして――俺はここに立っているのか。

どうして、俺は今ここに居るのか。

ウリアが戦っているのに――ウリアが今にも殺されてしまいそうなのに。

どうして――俺は。

俺はこんなにも――無力なのか。

そして、『魔導獣機』は右手に携えた剣で目の前に立ち込めている砂煙の塊を右薙ぎに斬った。

その斬撃によってそこに立ち込めていた砂煙が纏めて吹き飛ばされる。

砂煙の奥からは――崩壊した塀の瓦礫に埋もれているウリアの姿があった。

塀に叩き付けられた事で頭を打ったのだろうか。

ウリアの額からは真っ赤な血が流れ出していた。

輪廻終焉？

『魔導獣機』はそんな彼女の姿を見下ろしながら――ウリアの傍へと再度歩み寄った。

それから、再度ウリアの金色の長髪を掴もうと手を延ばす。

「止めろぉおおおおおおおおおおおっ！」

――その叫び声が突如周囲に木霊した。

誰の叫び声なのかと俺は疑問に思う――そして、その雄叫びは俺のものだと直後に気付いた。

気付けば、俺はそんな雄叫びを上げながら『魔導獣機』に向かって駆け出していた。

ウリアの落下によって造り出されたクレーターを駆け抜けて、俺は『魔導獣機』に向かって突き進む。

後先の事など考えてはいなかった。

筋肉痛の事など意識の外へと疎外されていた。

ただ――俺はウリアを助けたかった。

とりあえず、とにかく、何はともあれ、何が何でも。

ただ――その一心の為に。

俺はウリアを助ける為に。

強く握り締めた拳を――『魔導獣機』目掛けて突き出した。

――しかし。

俺の拳に痛みが走る。

それは俺が思い切り金属を殴り付けたからだった。

人がグローブも何もせずに金属を殴り付ければ痛いのは当然の事――なのだが。

俺の拳は『魔導獣機』の体を捉えた訳では無かった。

俺の拳は――『魔導獣機』の右手によって受け止められていた。

しかも、俺の拳を受け止める際、『魔導獣機』はこちらを見てすらいなかった。

見向きもされなかった。

それは――俺がそれだけ弱者だという事なのだろうか。

この戦闘に参加する資格すら無いみたいな。

参加した所で戦う事も殺される事も無い――ただ単にそこに居るだけの存在みたいな。

そういう、事なのだろうか。

「くっ……そっ……！」

そんな事を考えていたら何だか無性に怒りが湧き上って来た。

最初から無視をしていて、俺の存在を蚊帳の外のしているこの人の形をした機械と――その無視されている俺自身に俺は腹が立ったのだ。

「無視してんじゃねーよ！」

俺は続いて左の拳を振り上げる。

それと同時に――何の前触れも無く『魔導獣機』の首がこちらを向いた。

「！」

ハッとその動作に気付いて左の拳を止める俺――その直後には俺の体は『魔導獣機』によって振り上げられていた。

「う――わ――っ！」

俺の右腕を利用してその体を振り上げた『魔導獣機』は――そのまま俺を前方へと放り投げた。

「くっ……あああああああああああああっ！」

俺の体は地面擦れ擦れを滑空した。

俺は何とか頭を打たないように受け身を取りながら――地面の上を転がる。

回転する景色。

こんな景色を見るのはもう――何度目の事だろうか。

昨日からずっと、見ている景色だった。

俺が無力だから、見ている景色だ。

「ぐっ……ハァ、ハァ……！」

地面を転がり終えた俺はその場に座る形で体を起こす。

地面に着いている腕は震えていた。

体中に痛みを感じる――左の頬に触れてみるとその指先には血が付着していた。

おそらく、地面を転がっている最中にどこかで切ったのだろう。

「ウリ……ア……！」

それでも――俺はその名前を呼び続ける。

しかし、その声は無常にも届かない。

『魔導獣機』は依然として気を失ったままのウリアの髪を掴もうと

右手を伸ばして――。

「もういい。止めろ、『人型』」

そのオッドの命令にその動きを止めた。

ウリアに伸ばし掛けた右手を引っ込めて『魔導獣機』はその場に立ち上がる。

「そのままでは本当にウリアール＝ブレイザーが死んでしまう――まぁ、殺せと命じたのは私だがな」

「……どう、して」

俺はその場に立ち上がりながらオッドに問いかける。

視界が揺れる。

両脚はガクガクと震えていた。

立ち上がるだけでもう――精一杯だった。

「どうして……攻撃を、止めさせるんだ」

「何だ、もっと攻撃を続けて欲しかったのか？」

「……そういう訳じゃ……ないが」

「簡単な事だよ、少し考えれば解る事だ」

そう言って――オッドはやはり不敵な笑みを浮かべて言う。

「真之乃秀――君は確かに殺す以外の利用価値は存在しないが、このウリアール＝ブレイザーは違う。今後の調教次第ではこちらの兵器として――使う事も出来るからね」

「……調教、だと？」

「そう、調教だよ、調教。薬漬けにしたり、脳内に機械を埋め込んだり――ウリアール＝ブレイザーの性別が女だという事を利用して、更に調教してもいいね」

ニヤリと――妖しげな笑みを見せるオッド。

そのオッドの笑みに俺の苛立ちが更に募って行く。

「……させるかよ」

そんな事――。

絶対にさせて、なるものか。

「そんな事は……絶対に、させない……！」

「中々格好の良い台詞だね、真之乃秀。その君のウリアール＝ブレイザーを護りたいという気持ちは尊重しよう――だが、君に何が出来る？」

依然として不敵に笑うオッド。

そのオッドの俺の間に――『魔導獣機』が立ちはだかる。

「今から君は――この『魔導獣機』によって殺されると言うのに」

「そんな大口を叩くのなら……ストレンドみたいに、自分で戦ったらどうだ……！」

「……何だと？」

オッドの眉がピクリと動き、彼の表情が微かに曇る。

輪廻終焉？

「ストレンドは言ってたぜ……『魔導獣機』を使う奴は、自分で戦う事の出来ない単なる腰抜けだってな」

「ストレンドに何を吹き込まれたのかは知らないが……そんなものは、才能有る者が才能の無い者を見下す際に使用する差別的な言葉に過ぎないよ、真之乃秀」

「……どういう、事だ」

「確かに、未来から兵器を転送する際に才能は不必要だ。しかし、転送された兵器を使用する際に――才能の有無が問われるのだよ」

オッドは不敵な笑みでは無く――どことなく不愉快な表情で言う。

「普通の兵器ならば問題は無い。例えば拳銃であれ、ガトリング砲であれ、ロケットランチャーであれ……その点については知識と技量さえあれば難無く使いこなす事が出来る――しかし、『混合兵器（デュアルウェポン）』は違う」

「……デュアル、ウェポン？」

「魔術と科学を合わせて造り出された兵器の事だ。科学によって造り出された兵器は『努力』によって使用する事が可能になるが――魔力によって造り出された兵器は違う。魔術によって造り出された兵器を使いこなすには、それなりの『才能』が必要なのだよ。魔術と科学を混同させて造り出された兵器には当然『才能』が必要となる――『科学発展側』にも、ストレンドのような魔術の才能がある

輩（やから）は居るようだからね」

普通の兵器を使った所でウリアール＝ブレイザーには勝てない。

だから、才能の無い私達は『魔導獣機』を使うのだ――と、オッドは言う。

「『魔導獣機』を使う私達は確かに才能が無い――魔術を扱う才能がね。しかし、それを“戦う力が無い”だの、“腰抜け”だのと罵るのは些か間違っているのだよ、真之乃秀」

「まぁ」とオッドは地面に横たわっているウリアを見据えて言う。

「このウリアール＝ブレイザーは魔術を扱う才能がどうとか――それとは別次元の才能を持ち合わせているようだがね」

「……それって、一体どういう――」

「さて、もういいだろう、真之乃秀」

オッドは俺にそれ以上の追究を許さなかった。

「私との会話でここまで延命する事が出来たのだ――もういいだろう。それに、これ以上の会話は最早無意味だよ。何故なら君は……これから死ぬのだからね」

オッドの顔に再度不敵な笑みが宿る。

「――さらばだ、真之乃秀」

そして――オッドはその不敵な笑みを浮かべたまま俺に最期の手向けの言葉を言い放った。

「君の死によって世界の構造は改変され――我々、『科学発展側』の勝利は今ここに……確定する！」

オッドは高らかに声を上げる。

その声に呼応するように――『魔導獣機』の目が再度黄色い光を放った。

周囲に響き渡るそのオッドの叫び。

その命令を聞き入ったのだろう――『魔導獣機』は両膝を曲げて、地面を爆発させるほどの脚力で俺目掛けて突進してきた。

アスファルトの上を滑空する『魔導獣機』。

宙に浮いたまま俺の目の前まで到達した人の形をした機械は――その右手に携えている剣を振り上げた。

俺はその『魔導獣機』の姿を見上げる。

その際、二つの黄色い目と俺の目が合った。

俺はその場から動かない――と言うよりも、動く事が出来なかった。

まるで金縛りにあったかのような――そんな感覚を俺は感じ取る。

――そして。

光の刀身――もとい、死の刃俺目掛けて遂に振り下ろされる。

俺に防ぐ術は無い。

避けようにも足が上手く動かない。

「――――っ！」

迫り来る刃に俺は反射的に目を瞑る。

そして――そして、そして。

俺は、死んだ。

◆◆◆

『死』というものは一体全体どういったものなのだろうか。

人ならば誰でもそんな事を一度は考えた経験があるだろう。

そして、勿論俺もそんな事を考えた一人だ。

『死』を経験した後、人は一体どこに行くのか。

天国に行くのか、地獄に行くのか。

そもそも、天国も地獄も本当に存在するのか。

解らない――解らないけれど。

そんな事はどうでもいいと――最近はそう思うようになった。

だって、そうだろう？

『死』を経験した後は――無論、その人は死んでしまっている訳で。

絶命してしまっている訳で。

体には既に魂が宿っていない訳で。

死した後の事など、幾ら考えても無駄な事だ。

何故なら――死した後の事は死した後の事であって。

それよりも前、つまり、生前の俺達には幾ら考えてもどうしようも無いからだ。

今この時代を生きている人々が死した後の事を考えるなんて。

今思えば、それは何て矛盾した思考なのだろう。

しかし――俺だけはその矛盾した思考を考える事が出来る。

何故なら、俺は今から『死』というものを経験するからだ。

生きとし生ける者ならば『生』と同じように必ず人生で一度は経験する『死』という出来事。

死した後の世界の事は――実際に死んでから考えればいい。

輪廻終焉？

そして、俺は今から死ぬ。

『魔導獣機』の放った斬撃によって――体を斬り裂かれて。

絶命する――はずだったのだが。

「……」

幾ら待っても、『魔導獣機』からの斬撃は来なかった。

俺を死へと導くその斬撃は襲い掛かって来なかった。

どうしたのだろう。

何が起こったと言うのか。

「……」

俺は薄らと目を開けて――すぐにまた閉じた。

それは、瞼を開けた向こう側に眩い白い光が見えたからだった。

その光の眩しさを何とか堪えながら――俺は再度目を開ける。

そこには、やはり白い光があった。

景色をそのまま消し飛ばしてしまいそうな強烈な眩い光が――そこ

には、あった。

「何、だ……？」

俺は唖然とそんな声を漏らす。

その光の向こう側には剣を振り下ろした状態で固まっている『魔導獣機』の姿があった。

いや、正確には固まってはいなかった――剣を振り下ろしているのだが、その光によって斬撃が阻害されているのだ。

無論、それは『魔導獣機』が放った光ではないだろう。

それならば、この光はウリアの仕業だろうか――いや、ウリアはおそらくまだ気絶したままだろう。

それでは――この光は一体何が原因で起こった現象なのか。

俺は光の中心へと視線を持って行く。

――そこには。

「……あれは」

そこには、俺が約一週間前に拾ったあの白い欠片があった。

白い欠片が――光を放って、俺の身を護っている？

「そんな事って……」

そして、俺がそう呟いた瞬間。

欠片から放たれる光が更にその輝きを増す――その光に押し出されるように『魔導獣機』が前方へと吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた『魔導獣機』はアスファルトを削りながら地面に着地する。

それから、俺の目の前で放たれていた光が――その中心にある白い欠片に吸い込まれるようにして消えた。

「……」

俺は宙に浮いているその白い欠片を呆然と見据える。

すると、その白い欠片はふわふわとまるで風に流される風船の如く俺の手元に漂ってきた。

俺はその欠片を掴んで――握り締める。

白い欠片は俺の手の中でまだ淡い光を灯していた。

「……今のは、一体」

そして――俺がそう呟いた瞬間だった。

ピシッという音を立てて不意に白い欠片に亀裂が走ったのだ。

「えっ――」

その後は言葉を発する間も無かった。

俺の手の中でバラバラに砕け散るペンのような形状をした細長い白い欠片。

その欠片の内から凄まじい量の白光が解き放たれる。

そこから解き放たれた光は俺の視界を埋め尽くして、周囲の景色を埋め尽くして――そして。

俺の周りに広がる世界はその光に呑み込まれて白く、染まった。

◇　◇　◇

「……」

俺は――閉じていた瞼を、静かに、ゆっくりと、開ける。

「……は？」

それから、視界の内に広がったその景色に俺は思わずそんな気の抜けた声を漏らしていた。

俺の視界に広がったその景色には――何も無かった。

何も存在していなかった。

家も、壁も、電柱も、人も、空も――強いて言うならば地面も無いように見える。

何故なら、俺はいつの間にか何も無い真っ白な世界へと移動していたからである。

オッドも、人型の『魔導獣機』も――ウリアの姿さえも、そこには無い。

俺以外には何も――見えない。

地平線すらも、俺が今居る世界は存在していない。

どこまでも、果てしなく、ずっとただ白い空間が続いている。

地面さえも無いように見えたのはその為だ。

全てが白で染まっている為――俺は白い空間の中で浮いているように錯覚してしまったのである。

しかし、今俺が両の足の裏に何かしらの堅い感覚を感じ取っているので、おそらく地面は存在しているのだろう。

だとしても――やはり、おかしな感じは拭い去る事が出来なかった。

俺の足元には影すらも存在していない。

まるで、影すらも白く染め上げられてしまったようだ。

そして――そして。

こんな場合に、確実に言ってしまう言葉が――いや、言わなければならない言葉が存在する。

――それは。

「……ここは、どこだ……？」

俺は呆然と、唖然と、何が何だか訳の解らないまま、その白い世界の中でそう呟いた。

「いや、本当に……ここってどこなんだよ。何なんだよ、ここは」

白昼夢、じゃないよな、流石に。

あんな切羽詰った状況で流石に俺でも白昼夢を見るとは思えない。

幾ら現実逃避が得意な俺でもここまで大掛かりな現実逃避はしないだろう。

だとすれば――ここは本当にどんな所なのだろうか。

ここは本当に――何なの、だろうか。

輪廻終焉？

「……大体、俺ってさっきまで『魔導獣機』と――」

（真之乃秀よ）

「うわっ！」

不意に空から（いや、どこが空なのか正確には解らないのだけれど）降って来たその声に俺は驚愕してその場から後ずさりを見せた。

「だ、誰だ！」

俺は白い空に向かってそう声を上げる。

しかし――その声の主は俺の問いを無視して更にこう続けた。

（お前がこの空間に居て、俺の声を聞いているという事は……そうか、来たるべき時が来たんだな）

「……は？　お前、何を言って――」

（初めに言っておくが、真之乃秀）

「って、俺の発言は全て無視かよ。少しくらいは聞いてくれたって――」

（この俺の声は予め記録してあるものだ。来たるべき時が到来した際に、自動で再生するように俺がそう設定していたものだから、こ

の俺の声に対して何を言っても、俺はお前の言葉を無視する事になってしまうから、その辺りの事は注意して欲しい）

「……」

そんな設定があるなら最初から言ってくれ。

何だか無性に恥ずかしくなってしまっただろうが。

（さて、初めに言っておく――お前が７月２７日に拾ったペンのような形をしたあの白い欠片は俺があの時代に転送したものだ）

「は？」

（２０５６年――この時代がどんな時代なのか、今のお前なら知っているな？）

２０５６年――それはいわゆる、『魔術発展側』と『科学発展側』の二つの組織が互いに抗争を繰り広げている戦国時代だ。

（そう、２０５６年はいわゆる戦国時代だ。まぁ、戦国時代とは言っても、かつて日本の歴史に刻まれた戦国時代とは規模がまるで違うけどな。『魔術発展側』と『科学発展側』の二つの組織が互いに抗争を繰り広げている――そう、今お前が居る時代から４５年後の世界はそんな状態に陥ってしまっている）

「……」

どうでもいいけれど、何か俺と同じ思考を持った奴だな、この声の男は。

本当にこれは録音された音声なのだろうか。

どこかで見ているのではないかと思うくらいに思考がシンクロしている。

（だからこそ、俺はあの白い欠片を――真之乃秀、お前のもとへと転送した。２０５６年の未来から、２０１１年の過去へと転送したんだ）

「……一体、何の為に」

この欠片が俺の手元に渡ったせいで、俺は未来で魔術という古代文明を復活させて、未来の変な組織から狙われる羽目になっているというのに。

返答次第では殴り掛かってしまいそうだ。

まぁ、どちらにしても殴り掛かる事など出来そうにないが。

（俺がお前のもとにあの白い欠片を転送した目的――それは、お前に未来を変えて欲しかったからだ）

「……はぁ？」

訳が、解らなかった。

一体全体、この声の男は何を言った？

今この男は、俺に向かって何を言った？

（俺がお前の居る時代に送ったあの白い欠片は、俺が遥か昔に滅びた古代文明の遺跡を偶然見つけた際に、その遺跡と一緒に発見した魔術的な兵器だ。そして、元々起こっていた戦争は、俺がその兵器を見つけた事で更に激化の一途を辿ってしまったんだ）

「……」

どこかで聞いたような――話だと思った。

俺はそんな事を思った。

これに似た話を聞いたのはいつだっただろう。

確か――約一週間前の事だったような気がする。

そして――その話を俺にしてくれたのは、確か。

（だからこそ、俺はあの白い欠片を――魔術的な兵器を、その時代のお前に転送した。本当はお前の手元にすぐに届ける事が出来れば良かったんだが……それは２０５６年までに起こった戦争や自然災害によって、過去の資料は全て消失していた為に、不可能だった）

「……どうして、俺なんだよ」

どうしてそんな兵器を俺の手元に送ろうと考えたのか。

決してその質問は届かないだろうけれど、俺はそう言わざるを得なかった。

すると、奇跡的にも――俺とその声の会話が成立した。

（お前は、どうしてそんな兵器を俺が転送したのかと思っているのだろう――しかし、それは仕方の無い事だった。あの魔術的な兵器は……お前しか扱う事の出来ない代物だったからだ）

「……俺にしか、扱う事が出来ない？」

どうして、そんな事が解るのか。

昔の資料から適性検査をするとしてもその資料は２０５６年の未来には全て無くなっているはずだ。

さっきだって、この男自身もそう言っていた。

それならば――どうして、そんな事が解るのか。

俺自身の事は、俺自身にしか解らないはずなのに。

一体、どうして。

（他にも色々とお前に言いたい事があるのだが……この記録にも限度――つまり、容量があってな。余り大量の言葉を記録する事が出来ないんだ。だから、最後に、俺はお前に礼を言う事にしよう、真之乃秀）

果てしない白い空の向こう側で声は言う。

（正確には、その世界線のお前に、だな。その白い欠片を拾ってくれて――本当にありがとう、真之乃秀。お前があの白い欠片を拾っ

てくれたお陰で、世界線は変動し、新たなる平行世界が創造され――少なからず、世界が救われるのかも知れないのだから）

しかし、色々な意味でお前に礼を言うのは、実は時期尚早だ――とその男は言う。

（何故なら、この時点で世界を救済していないお前に対して言うのもおかしいのだが、お前はまだ選んでいない――世界を救うか否かを、お前はまだ選択していないからだ）

（選べ）と。

その男の声の直後――俺の正面で何やら白い光がどこからともなく一点に集まり始めた。

キラキラと輝く星のような光は集まる事によって形を変えて――ペンの形をしたあの白い欠片へと姿となった。

（お前には選択権が存在する。世界を救う為に力を得るか、否か――その選択権がある。何も、俺はお前に強制的に世界を救えるような勇者になれとは言わない。まぁ、それ以前に、その力を得た事で絶対に世界を救えるとも言えないのだから……その辺りの事も考慮して、お前にはどちらかを選んで欲しい）

だが、思い出せ――とその声の主は続ける。

（お前が、7月27日から、今の今までどんな思いで居たのか、それを思い出せ。お前は一体全体――どんな思いを抱いた？）

「……」

その声の問いかけに――俺は目の前で宙に漂っている白光を放っているペンの形をした欠片を見据えたまま今までの事を思い出す。

輪廻終焉？

7月27日――俺はウリアと出会い、未来の事を聞かされて、正直胡散臭(うさんくさ)いと思った。

けれど、その直後に初めて俺を襲った『魔導獣機』の存在で、俺は未来の事を信じざるを得なくなった。

7月28日――2度目の『魔導獣機』の襲来の際に、俺はウリアの更なる力を目の当たりにした。

正直、あんな怪物を一瞬で倒してしまうウリアを俺は凄いと感じた。

7月29日――色々あって『幼馴染』という関係が破綻し掛けていた霧歌と仲直りして、その後に、俺の現状を全て話した。

その俺の話を全て信じてくれた霧歌に感謝しつつ、結果的に巻き込んでしまう事に俺は申し訳なく思った。

7月30日――この日は、海水浴に行くはずだったその予定を台風によって潰されてしまった。

前日の水着を買った一連の出来事を思い出しながら、ウリアも一人の女の子なんだなって、そう思った。

7月31日――俺はこの日、初めてストレンドに出会った。

あの時、ウリアが仲介に入ってくれなければ――きっと、俺は死んでいた。

8月1日――二体の『魔導獣機』による強襲が起こった。

この時も俺はまたウリアに助けられたのだけれど……それと同時に、自分はかなりの足手纏いだとも思った。

8月2日――俺は直接戦った所を観た訳では無いけれど、ウリアとストレンドが戦闘を行ったらしい。

俺の知らない所でボロボロになりながらも戦ってくれたウリアに、俺は微かな無力感を覚えた。

8月3日――この日は、これと言って何も無い一日だった。

あの白い欠片が謎の白光を起こした以外には、特に何も無い平和な――本当に平和な一日だった。

8月4日――俺はこの日、初めて『死』というものを身近に感じる事となった。

ウリアが傍に居ない中で『魔導獣機』の強襲を受けて、俺は完全に己の無力さを知った。

そして――今日。

8月5日。

ウリアが誰にでも何にでも勝利を収めてしまうような――そんな存在では無い事を知った。

それから、どうして、自分はこんなにも無力なのか。

自分の無力さを呪って、恥じて、呆れもした。

目の前でウリアが傷付いている――それにも関わらず、俺は何もする事が出来なかった。

『魔導獣機』には傷一つ付けられないどころか拳の一発も与えられない始末。

それ以前に、相手にすらされていなかった。

倒したい――『魔導獣機』を倒して、ウリアを救いたいって。

俺はそう思った。

力が欲しいって。

『魔導獣機』を倒して、ウリアを救う為の力が欲しいって。

今日の俺は、そう思った。

「……」

その事を思い出した上で――俺は再度正面に浮かんでいる白い欠片を見据える。

声の主は、俺に選べと言った。

世界を救済する為の力を得るか否か――そのどちらかを選べと。

俺にそう言ってきた。

「……正直、俺には未来の事なんてよく解らない」

そもそも、現代を生きている俺に未来の事など本来ならば解るはずの無い事だ。

決して解る事の無い未来の出来事――現代に生きている限り、決して知る事の無い遥か遠い未来の出来事。

いや、流石の俺もそこまで馬鹿ではないから、２０５６年の未来にどんな事が起きているのか――それくらいは解っているはずだ。

だから、俺が解らないのは、そこではなくて。

「俺には未来の事――俺が未来を救済するなんて、その為の人物に選ばれた事が、よく解らないんだ」

俺は単なる高校二年生で、部活にも所属していなくて、成績も平均クラスで――色々と平凡で、普通な一般人だ。

だからこそ、解らないのだ。

俺が救世主の候補に――選ばれる事が。

「だから……俺が今から下す選択は、多分未来の為じゃない。お前には悪いけれど、俺は未来の為には動かない」

俺には遠い先の未来の事なんて解らない。

精々解るのは俺が今生きている――歩みを進めているこの現代だけだ。

だから――だからこそ。

俺はこう決断を下す。

俺はこう選択する。

「だから……俺は未来の為じゃなく、身の回りの誰かを護る為に、この力を得る事にする」

俺は宙を歩くような感覚で足を一歩前に出す。

白くて有るようで無いようなその地面を踏み締めながら――俺はその白い欠片の前々で歩みを進めた。

「俺はウリアを助ける為に、霧歌を護る為に――未来から、この時代を救済する為に、この力を得ようと思う」

「それが俺の選択だ」と俺は白い欠片へと手を延ばした。

「お前には……少し悪いような気がするけどな」

そう言って俺はその白い欠片を掴む。

それと同時に――俺の拳の中で白い欠片が発光した。

その光は白い世界でも十分に光っている事が解るほどに白く、激し

い光だった。

すると、俺が欠片を掴む事でまた音声が再生されるようにでも設定されていたのだろうか。

（……やっぱり、お前だな）

空から再度あの男の声が降って来た。

（お前ならば、その選択をすると思っていたぞ、真之乃秀よ。理由は何であれ、お前はその力を得る事を選んだ――強い力を得た者は、結局何かを助け、何かを護り、何かを救わなければならない。無論、自分の身も護る事になるだろう――その道は決して平坦では無いが、それでもいいんだな？）

「……望む所だ」

俺はその問いかけに――多分、オッドのような不敵な笑みを浮かべてそう答えたと思う。

その白い欠片を握る俺には何故か自信が満ち溢れていた。

助けてやる。

護ってやる。

救ってやる。

傍観者から当事者になるのは決して容易ではないのだろうけれど。

けれど――もう傍観者である自分は嫌だ。

誰かが傷付いている様を、指を銜えて観ているだけの自分は嫌だから。

だから俺は、この力を得る。

当事者となる。

誰かを助けて、護って、救う為に。

俺はこの力を得るのだ。

輪廻終焉？

（突然だが……その兵器の名前をお前に教えておく。その兵器を発見した遺跡の文字を翻訳した際に出て来たものだが、おそらくは間違っていないだろう。そこは２０３０年の時点での科学力を信じてくれ）

（遺跡にはこう記されていた）と男はこう言った。

（『終焉の運命』――と）

「……終焉の、運命」

（だが、こんな名前ではきっとお前は気に入らないと思った。だから、俺は発見者である地位を活かして、この兵器に新たな名前を付ける事にした）

「発見者という地位を横暴してんじゃねーよ」

俺は思わずツッコミを入れてしまっていた。

今は決してそんな場面ではないと思うのだが。

（俺が新たにその兵器に与えた名前は――ラグナロク。漢字表記では、『輪廻終焉』と書いて、『輪廻終焉（ラグナロク）』と読む）

「……『輪廻終焉（ラグナロク）』」

（運命とは、定め、理（ことわり）、そして、輪廻とも取る事が出来るからな。

気に入ってくれたかどうかはこの記録をしている俺には解らないが――まぁ、お前ならば、きっと気に入るだろう）

（さて、これで本当に最後だ）と白い空の向こう側で男は更に続ける。

（お前がその『輪廻終焉（ラグナロク）』を拾った時点で、俺の居た世界線から今お前が居る世界線は変動して、新たな平行世界が生み出されている事だろう。だから、今ここに居る俺がお前の行く末を見守る事が出来ないのが非常に残念で仕方が無い）

「変にハードル上げられても困るんだけどなぁ……それに、まだ俺が確実に世界を救済すると決まった訳でも無いのに――って、あれ？」

そこで俺は疑問に思った。

本当に世界線が変動して――この声の主である男が俺の居る世界線とは別の世界線によって創造された平行世界に居るとしたら。

どうして、このメッセージは俺のもとに届いたのか。

世界線の移動によって未来が変化するのならば――このメッセージも世界線と共に移動して消えてしまうのではないのか。

すると、そんな俺の心中を察したのか天から俺に再度男はこう語り掛けてきた。

（今の俺の言葉で気付けたか？　確かに、世界線の変動によって新たに創り出された平行世界に存在する同一人物には、世界線が変動

するよりも以前の記憶は引き継がれない。それは、今俺がここで録音しているようなメッセージにも同じ事が言える）

しかし、この兵器だけは例外だ――と男は言う。

（この兵器の名前は『輪廻終焉（ラグナロク）』だ。俺がこの兵器にこんな名前を付けたのは、決して地位の横暴などでは無く、この兵器の特殊能力も考慮した名前だから、その辺りの事は勘違いするなよ、真之乃秀）

「……」

さっきの俺のツッコミを丸々復唱する男。

最早、単なる偶然とは思えないレベルのシンクロだった。

いや――おそらく、単なる偶然などでは無いのだろう。

何故なら、きっとこの男の正体は。

（その兵器の特殊能力は――輪廻を断絶する事、だ。循環する輪廻を断ち切る――つまり、世界線の変動によって起きる“情報の上書き”という理を断絶するんだ。だから、このメッセージは今お前のもとへと届いているし、例えば、お前がその兵器を持ったまま世界線が変動した場合――お前は変動する以前の世界線の記憶を保ったまま、新たな平行世界へと赴く事となる）

「……」

……そうだったのか。

そんな途轍もない力がこの兵器には存在しているのかよ。

誰かを救うとか豪語した後で何だか格好悪いような気がするけれど……。

俺なんかが使って本当に大丈夫なのか、この兵器。

何だか心配になってきた。

（さて……そろそろ本当にお別れだ、真之乃秀）

「本当にお別れなんだろうな」

さっきからその台詞を何回言ってるんだよ、お前は。

（健闘を祈るぞ、真之乃秀――お前がどんな選択をしてその力を得たのかは知らない。だから、お前はお前の護りたいものを護れ。誰かが傷付き、倒れるのを見たくないと言うのなら――その誰かを傷付けた相手を倒す覚悟を決めろ）

「……覚悟」

俺はその覚悟を決める事が出来るだろうか。

だって、その覚悟とは――。

「……いや」

俺は一体何を言っているのだろうか。

ウリアだけにそんな覚悟を決めさせて、ウリアの手だけを汚すなんて。

それは虫が良過ぎるよなぁ、俺。

（……それでは、さらばだ、真之乃秀よ。お前がどういった手段で世界を救済するのか――楽しみだ）

それきり、その男の声は空から降って来なくなった。

そして、その代わりに――俺の手の中で白い欠片、もとい、魔術的な兵器である『輪廻終焉（ラグナロク）』が更なる発光を開始した。

徐々に強くなっていく白い光――それは俺がこの真っ白な世界に来る直前の事を彷彿（ほうふつ）とさせた。

どうやら、元の世界に――現代へと戻る時が来たようだ。

いや、それ以前にこの真っ白な世界が未来かどうかも今の俺には解らないのだけれど。

「……しかし」

苦笑と共に俺は先ほどまで男の声が降って来ていた真っ白な空を仰ぐ。

「こんな場面だからなのか、それとも本当にあんな口調なのか……。でも、絶対に作ってたよなぁ、あの言葉遣いとか、喋り方とか……微妙にぎこちなかったし」

そう言っている間にも『輪廻終焉（ラグナロク）』の放つ光は強さを増して行く。

「“健闘を祈る”、ね……全く、好き勝手言いやがって。お前も解っているとは思うけれど、俺はそこまで出来る人間じゃないからな」

『輪廻終焉（ラグナロク）』から放たれる光が俺の体を包み込み始める。

「……さて、と」

俺はその魔術的な兵器を握り締めた右の拳を天に向ける。

「それじゃあ……ちょっと、世界を救済する為に敵を倒して来るからさ。どこか遠くで俺の活躍を拝見していてくれよ――世界を救済する為の第一歩を、さ」

そして――白い光が俺の全てを包み込んだのが解った。

――だから。

「……だから」

俺は光の向こう側に未だ広がっているであろう真っ白な空に向かって――あの声の主に向かって。

こう言った。

「見ててくれよ――未来の、俺」

覚悟

白い光が俺を包み込み――気付けば、俺は元の世界へと帰還を果たしていた。

それは一瞬の出来事だった。

そして、こちらの世界でも俺が今経験した摩訶不思議な体験は一瞬の出来事だったのだろう。

何故なら――俺が白い光に導かれてあの白い世界に赴く前と景色がまるで変わっていなかったからだ。

俺の前方には人の形をした『魔導獣機』が佇んでいて――その後方にはオッドの姿も見えた。

それから、その『魔導獣機』の右方には塀の瓦礫に埋もれたまま気を失っているウリアの姿。

何も変わっていないように見える景色。

しかし、ただ一つだけが違っている。

それは、俺が力を――『輪廻終焉（ラグナロク）』を手に入れたという事だ。

誰かを護る事が出来る力を――手中に収めたという事だ。

「……待ってろ、ウリア」

俺は気を失ったままのウリアに向かって言う。

「すぐに――終わらせるから」

その直後、俺の足元に白い光を放つ魔方陣が出現した。

神々しい程に白く輝くその光はまた周囲の景色を呑み込まんばかりの勢いで発光する。

そして、俺はその光の中で右手を前に出した。

それは白い欠片を――『輪廻終焉（ラグナロク）』を握っている方の手だ。

俺の拳の中で淡く白い光を放つその欠片。

魔方陣から溢れ出す何かが俺の衣服や髪をはためかせ、靡（なび）かせる。

これが魔力というものなのだろうか。

始めて感じたその感覚を噛み締めながら――俺はその言葉を口にする。

その兵器の名前を口にする。

「――『輪廻終焉（ラグナロク）』！」

俺のその叫びに呼応するように――その右の拳の中で白い欠片が音を立てて砕け散った。

宙を舞うその無数の欠片は白い輝きを発しながら一度ゆっくりと空

中を漂うと、渦潮のように回転しながら俺の右手に集まって来た。

それから、その欠片達はとある形状を象り始めた。

渦を巻きながら白い欠片によってその場に創造されるそれ（・・）。

輝きを放つ白い欠片達は一つに集約されて――俺の身の丈以上の長さを誇る細長い一本の白銀の剣へと変化した。

いや、両刃では無く片方の側にしか刃が付いていないから――剣と言うよりも刀と言った方が良いのかもしれない。

そして、その刀は本当に一刀と呼んでいいのか解らない（・・・・・・・・・・）形状をしていた。

何故なら、その刀には本来ならば存在しているはずの鍔が無かったからだ。

刀身と柄の境界線が存在しないその白銀の刀は――古代兵器だからなのか、刀身と柄を無理矢理結合させたみたいな、実にそんな雑な形状をしていた。

だから、俺は今、刀と握っていると言うよりも――“刀身”をそのまま握っているような、そんな感覚に陥っていた。

「本当にこれ使えるんだろうな――って、ん？」

そう呆れ顔を見せていると――俺は不意に右手に違和感を覚える。

右手を見下ろして見る。

すると、右の手の甲に黒い複雑な幾何学模様（きかがくもよう）の紋章が刻み込まれていくのが見えた。

「……何だこれ――」

と、そこで俺は言葉を切って顔を上げる。

その視線の先で『魔導獣機』がこちらに駆け出して来るのが見えた。

俺は咄嗟にその白銀の刀の柄を両手で握り締める。

その瞬間、『魔導獣機』の凄まじい斬撃が俺に襲い掛かった。

剣と刀の刀身がぶつかり合って――それは衝撃と轟音を生む。

「くっ……！」

俺は歯を食い縛りながら刀を両手で構えた体勢のまま後方へと強制的に押しやられた。

地面を削りながら俺はその場に立ち止まる。

――そして。

「……あれ？」

そこで俺はまた違和感を覚えた。

それから、その違和感はとある疑問へと変換される。

どうして――俺は今『魔導獣機』の斬撃を受け止める事が出来たのか。

いや、それ以前に、どうして俺は今『魔導獣機』の動きを目で捉える事が出来たのか。

ウリアですら全く歯が立たなかったような、そんな強敵に対して。

どうして俺が、今もこうして地面に立つ事が出来ているのか。

「……もしかして」

その疑念の答について俺がとある可能性に辿り着いた瞬間――再度、『魔導獣機』が俺に襲撃を仕掛けてきた。

その機体の動きに俺は咄嗟に反応して剣を構え直すが――狼狽えはしなかった。

臆する事も無かった。

何故なら――俺には見えていたからだ。

……

『魔導獣機』の動きを俺は完全に把握する事が出来た。

地面を蹴ってこちらに滑空してくるその人の形をした機械。

地面擦れ擦れを飛びながら俺の目の前までその機体は到達する。

『魔導獣機』の踏み締めた左足がアスファルトを破壊する。

周囲に飛び散るアスファルトの欠片。

『魔導獣機』はここまで飛んで来たその勢いを利用して右手に携えている剣を振り上げた。

それから、その光の刀身は振り下ろされ始めた。

その斬撃の軌道から察するに――左上から右下へと延びるものだろう。

――だから。

俺はその斬撃とは正反対の一撃を放つ為に、白銀の刀を右下から左上へと薙いだ。

覚悟？

俺の放った斬撃と『魔導獣機』の放った斬撃が衝突し合って――激しい金属音が響き渡った。

「――――っ！」

俺は手に刀から伝わってきた衝撃や振動を感じながら――足でアスファルトを踏み締めて、そこから更なる斬撃を『魔導獣機』に繰り出した。

俺が振り下ろした白銀の刀を難無く弾く『魔導獣機』。

三度（みたび）、俺は白銀の刀を振るう――すると、『魔導獣機』が地面を蹴って上空へと跳び上がった。

青い空へと吸い込まれるようにして上昇していくその機体。

俺はただその機体を見上げる事しか出来ない。

何故なら、俺は跳び上がる事は出来ても、空を歩く事は出来ないから。

それ以前に、あんな高さまで跳ぶ事なんて出来る訳が無い。

「あんな高いジャンプなんか反則だろ……」

そして、俺がそう呟いた時だった。

ふと、俺の視界の下で何かが白い光を放ったのだ。

俺は素早く足元を見下ろす。

そこには先ほどと同じようにアスファルトの上に出現した魔方陣があった。

しかし――その魔方陣は先ほどとものと少しだけ違っていた。

新たに出現したその魔方陣は俺の両足の下にそれぞれ二つあったからだ。

左足と右足――その下に一つずつ現れた白い光を放つ魔方陣。

「……まさか」

その魔方陣に――その魔方陣の現れ方に俺はある事を思い立つ。

いや、それは完全に俺の推測だったのだけれど。

けれど……俺はまだこの『輪廻終焉（ラグナロク）』の力の全てを知らない。

知っている力もあるが――それでも、知らない力の方が多いだろう。

――それならば。

賭けてみる価値は――十分に、ある。

「……」

――そして。

俺は両膝を曲げると、そのまま上に跳んだ。

それから、更に俺は空中に向かって足を突き出す。

すると、賭けてみた甲斐があったのか、俺の予想通り――俺の足は何も無い空中を蹴った。

俺が突き出した空中にあの白く小さな魔方陣が出現して踏み台となったのだ。

「よし……行ける！」

俺は更に空中に出現する魔方陣を蹴り上げながら上空へと侵攻する。

段々と離れていく地上の世界。

段々と近付いてくる天空の世界。

そして、その天空の世界から――『魔導獣機』が到来した。

飛んで来る、と言うよりも俺に向かって青空の彼方から落ちて来た（・・・・・）『魔導獣機』はその落下の勢いを利用して剣を振り下ろす。

その斬撃を俺は受け止めず、左に跳んで回避した。

空を切る『魔導獣機』の斬撃――俺はそれによって隙の出来た機体目掛けて白銀の剣を振り下ろす。

「おおおおおおおおおおおっ！」

空中に木霊する俺の雄叫び。

俺の放った斬撃は『魔導獣機』の機体を弾き飛ばした。

正確には、俺の振り下ろした刀が『魔導獣機』の剣によって受け止められたのだが――まぁ、それでも命中した事には変わりないだろう。

弾き飛ばされた『魔導獣機』は地上に向かって落下していく。

俺は空中に出現した魔方陣を蹴ってその機体目掛けて跳躍した。

その瞬間、顔に突風が吹き付けた――耳元をその風が吹き抜ける音が聞こえてくる。

『魔導獣機』の機体が目の前に迫る。

すると、『魔導獣機』は俺目掛けて――正確には、俺の頭に向かって光の刀身を突き出してきた。

「！」

目の前に迫ってきた切先（きっさき）に俺はハッとして顔を咄嗟に右に逸らす。

左の頬に何か熱いものを感じた。

おそらく、頬がその刀身を掠めてほんの僅（わず）かに斬られてしまったの

だろう。

俺は微かに感じたその痛みに目を細めながら――空中に出現した小さな白い魔方陣を左足で踏み込んだ。

そして、白銀の刀を俺は振り上げる。

放たれたその斬撃は『魔導獣機』の右肩辺りを捉えた。

それによってその機体の右腕は宙を舞った。

弧を描きながら剣を握り締めたまま上空へと飛んで行く機械の腕――これで『魔導獣機』の両腕は失われた。

それから――俺は白銀の刀を振り上げる。

この戦いに終止符を打つ為に、俺はその刀を振り上げる。

白銀の刀身が太陽の光を受けて光を放った。

「あああああああああああああっ！」

俺は再度雄叫びを上げながら――目の前の『魔導獣機』に向かって全力で剣を振り下ろした。

両断される人の形をした機械の体。

その斬撃を浴びせた際――思ったよりも、刀を通して俺の手には何の衝撃も来なかった。

驚くほどにすんなりと白銀の刀はまるで豆腐を斬るかの如く『魔導獣機』の機体を両断したのである。

そして――落下を開始した二つに分かれた『魔導獣機』の機体はある程度落下した所で大爆発を起こした。

空中に一瞬にして立ち込める爆煙。

爆発による爆風と衝撃波が俺を襲う。

覚悟？

「……はぁ」

俺は段々と晴れて行く爆煙の塊を見下ろしながらため息にも似た安堵の息を吐く。

しかし――まだ完全に安堵する事は出来ない。

何故なら、まだ戦いは完全に終わっていないからだ。

だから、俺は空中に出現した魔方陣を足場に地上へと跳躍する。

地上に居るウリアのもとへと――向かう。

◆◆◆

ウリアのもとへは比較的楽に行き着く事が出来た。

縦横無尽に空中を駆け回って戦闘を繰り広げたから捜すのは一苦労だと思っていたのだが――。

何か、ウリアがそこに居るような――そんな感じがしたのである。

地上に居るウリアの気配を感じ取る事が出来たみたいな。

そんな感じだった――自分でもよく解らないけれど。

兎にも角にも、ウリアの居場所を感知した俺は先ほどまで『魔導獣機』との戦闘が繰り広げられていた住宅街の通路に降り立つ。

そこには俺の感じた通り、未だ気を失ったままのウリアと――。

オッドの姿があった。

オッドは俺に対して少なからず恐怖を抱いているようだった。

俺があの人型の『魔導獣機』を破壊した事も影響しているのだろう――オッドは俺が地上に降り立った瞬間に引き攣った表情で後ろに一歩後ずさりを見せた。

「……ば、莫迦な」

そして、オッドは更に後ずさりをしつつ――俺に向かって言う。

「こんな――このタイミングで、お前の力が覚醒する、だと？　こんな莫迦な話があって堪るか……これが、時代の選択だと言うのか。予め決まっていた運命だとでも言うのか。認めん……私は絶対に、認めない」

「認めんぞ！」とそう声を上げたオッドはあの携帯電話のような転送装置を操作して空間に再度漆黒の穴を生み出す。

その穴の中から現れたのは――先日、俺を襲った機体と同じ狼の形をした『魔導獣機』だった。

「行け、『狼型』よ！　奴を――真之乃秀を殺せ！」

オッドはかなり切羽詰った様子でそう叫ぶ――その命令に『魔導獣機』は四本の足を使って跳躍すると俺目掛けて襲い掛かって来た。

『魔導獣機』の巨大な口が開き、その中に仕舞われていた大量の金属の鋭い牙が露となった。

しかし、俺は当然その牙に噛み殺されるつもりは無かった。

俺は今立っている位置から左へとほんの少しだけ移動する。

そして――迫り来る『魔導獣機』に向かって白銀の刀の斬撃を左側から放った。

白銀の刀身は『魔導獣機』の両顎（りょうあご）の繋ぎ目に命中する。

俺の放った斬撃とその機体の突進による勢いによって――『魔導獣機』は横に両断されてしまった。

先ほどの人型と同じように、その狼の形をした機械は二つに分かれながら俺の後方へと空中を流れて――爆発した。

後方から爆風と衝撃波が俺の背中にぶつかって来たが――それを気にせずに、俺は歩き出す。

前方へと、オッドに向かって歩き出す。

「くっ……！」

その俺の行動にオッドは再度後ずさりを見せた。

「来るな……来るんじゃ、ない」

オッドは大量の汗を流しながら俺に向かってそう命じて来た。

しかし、俺にはその命令に従う義理は無い。

その言葉に構わず――俺はアスファルトの地上を踏み締めてゆっくりとオッドとの距離を縮めて行く。

「来るな……来るな……！」

――そして。

「来るなぁあああああああああああっ！」

オッドは最後にそう声を上げると再び『魔導獣機』を転送すべく、あの携帯電話の形をした転送装置を持ち出す。

その瞬間、俺は地面を蹴ってオッドとの距離をその目の前にまで縮めていた。

オッドが再度あの転送装置を使う事は目に見えていた。

だから――オッドとの距離を完全に縮めた俺は白銀の刀を振るう。

それと共にオッドの手の内にあった転送装置――携帯電話で言えば液晶画面側の部分を俺は刎ね飛ばした。

クルクルと弧を描きながら放物線上に飛んで行くその転送装置の一

部分。

オッドはその場に尻餅を着く。

その直後、そのオッドの後方で宙を舞った転送装置の一部分が音を立てて地面に落下した。

「ひっ！」

オッドが恐怖に満ちた――そんな声を上げる。

それは、俺が白銀の切先をオッドの眼前に突き付けたからだった。

「……」

俺は目の前で恐怖に打ちひしがれているオッドを見据える。

オッドの顔には恐怖の感情が刻み込まれていた。

むしろ、それ以外の感情は今の彼の中には存在していないようだった。

そして――他ならぬ、俺も恐怖していた。

何故なら、今から俺が行おうとしている事は――人の命を奪うという事なのだから。

例え、オッドが悪人であったとしても。

例え、この人物が俺の命を狙う悪い奴だったとしても。

それを差し引けば――単なる俺と同じ人間には変わりないのだ。

この世に生を受けた、人間。

２０５６年の未来はどうなのか知らないけれど、今の時代は――２０１１年の現代においては。

悪人であれどうであれ、人を殺すという事は――罪だ。

犯罪であり、大罪。

一生消える事の無い、一生背負わなければならない――罪だ。

人を殺すという事は、そういう事なのだ。

覚悟？

それは十分に理解している。

理解している、つもりだ。

――けれど。

これは、戦いだ。

やらなければ逆にこちらが殺されてしまう――それが戦いだ。

別に、そんな理由を建前に人を殺す事を正当化しようとは思っていない。

そんな理由で――殺人が許されるとは毛頭思っていない。

思ってすら、いない。

しかし――これは、戦い、なのだ。

どう考えても、どう足掻いても、どう思っても――これは戦いなのだ。

その事実は変わらない。

その現実は――変わって、くれない。

相手を倒さなければ、自分が倒されてしまう。

俺は――相手を殺さずに、その代わりに自分の命を投げ出せるほど。

お人好しには、なれないから。

だから――だから。

俺は覚悟を、決める。

誰かを救済する覚悟を――その為に、誰かを殺す、覚悟を。

決める。

「……っ！」

俺はオッドの眼前に突き付けていた白銀の刀を振り上げた。

目の前にはまだ怯えた――怯え切ったオッドの姿がある。

体の震えからなのか、彼の掛けている赤いハーフフレームの眼鏡はずれてしまっていた。

そんな如何にも滑稽であり、情けない――今までの強気な姿勢がまるで嘘偽りのようにも思えてくるオッド。

そんな彼は俺が今から刀を振り下ろすだけで絶命する。

「……！」

――俺は。

覚悟を、決めたはずだ。

誰かを護る為に、誰かを殺す為の――その覚悟を。

決めたはずだ。

なぁ、そうだろう？

俺。

「っ――あああああああああああああっ！」

俺は雄叫びを上げる。

目の前の光景を――今から俺が起こすであろうその現実を振り払うかのように俺は声を上げる。

そして、俺は白銀の刀の柄を力強く握り締めて――。

「！」

ふと、俺は右方に何かの気配を感じ取った。

俺は咄嗟に右方を振り向く――その瞬間、俺目掛けて光の塊が猛スピードで迫ってきた。

突如、飛んで来たその光に俺は地面を蹴って後ろに跳ぶ。

光の塊は俺がたった今立っていた場所に着弾して――地面を破壊し

た。

巻き起こる突風と衝撃波――多大なる量の砂煙が通路に充満する。

それによって、俺の視界からオッドの姿は見えなくなった。

「……これは一体――」

と、そこで俺は口を噤む。

何故なら、砂煙の塊の向こう側――そこで立ち上がる人影を俺は捉えたからだ。

その人影は砂煙の奥へと駆け出して、そのまま姿を消した。

そして、通路に充満していた砂煙が晴れる。

そこには既にオッドの姿は無かった。

きっと、あの逃走する人影はオッドだったのだろう。

「……」

一人通路に立つ俺は――何の前触れも無く俺を襲撃したあの光の塊の事も気になってはいたのだけれど。

オッドを殺す事が出来なくて――俺は逆に安堵していた。

今ここで倒さなければならない――殺さなければならない存在であったはずなのに。

俺はオッドを取り逃がした事で安堵感を覚えていた。

「……くそっ」

俺は悪態を吐く。

自分自身に――悪態を吐く。

どうして、そんな事を思っているんだ。

俺は覚悟を――覚悟を決めたはずなのに。

どうして。

◆◆◆

オッドの姿が消えた事で、白銀の刀が――『輪廻終焉（ラグナロク）』の方から戦いは終わったと感じたのだろうか。

俺の右手の中でその大きく細長い白銀の刀がまた白い欠片へと分解を開始したのである。

欠片――と言うよりも、粒子へと変換された『輪廻終焉（ラグナロク）』は俺の目の前へと集まり始める。

そして――その形状をまたあのペンのような形をした白い欠片に留めた。

俺は、その白い欠片を掴むと――。

「……そうだ、ウリア」

ハッとしてその欠片をポケットに仕舞いながら俺はウリアのもとへと向かった。

俺はウリアの上に乗っかっている瓦礫や砂塵の山を押し退けるとその体を揺さ振った。

「オイ、ウリア！　ウリア！」

何度呼び掛けてもウリアの返答は無く――意識は戻らなかった。

あくまでも苦しげに呼吸はしているので……ただ単に意識を失っているだけのようだが。

「……ウリア」

それにしても、改めて見てみればウリアの体はかなり痛め付けられているようだった。

あの赤い戦闘服は所々が破けていて――その下にある白い肌を微かに露出させている。

口の端からは血が垂れていて、額からも真っ赤な血が流れていた。

この分では体の内部もかなり酷いかも知れない。

覚悟？

「……とりあえず、ここで長居をする訳には行かないな」

先ほどまで戦っていて少し忘れ掛けていたのだけれど、ここは住宅街のど真ん中なのだ。

あの龍の形をした『魔導獣機』の出現によってこの辺りの住民は粗方遠くまで非難しただろうけれど……。

それでも、侮る事は出来ない。

人が集まって来る前に何とか家に戻らなければならない。

「よし……待ってろよ、ウリア」

俺はそうウリアに呼び掛けながらその体を抱き抱える。

「すぐに……家に連れ帰ってやるからな」

その後も、俺はウリアに語り掛けながら――数々の戦闘によって荒れ果てた通路を通って自宅へと戻ったのだった。

◆◆◆

自宅へと戻った俺は……とりあえず、リビングのソファーにウリアを寝かせた。

「……」

そして――俺はそのウリアの前に立ち尽くす。

どうすれば、良いのだろうか。

ウリアが――怪我をしたウリアが今俺の前に居る。

しかし、それで俺は一体全体何をしたらいいのだろうか。

「……そうだ、病院――」

俺はそう言い掛けて――家の中の備え付けの受話器のもとに向かおうとしてその足を止める。

それはこの時代の病院がウリアを手術してくれるのか否かが解らなかったからだった。

いや、病院ならば１１９番に連絡をすればこの家の前まで救急車を派遣してくれるのだろうけれど。

問題なのは――ウリアがこの時代の人間では無いという事だ。

この時代に存在しないはずの彼女を病院が受け入れてくれるのか否かが――俺は心配になった。

手術はしてくれるとしても、その後の事がどうしても気になってしまう。

でも、一刻も早くウリアを病院に収納しなければ――拙いかも、知れない。

――どうする。

俺は一体、どうすれば。

「秀ちゃん！」

リビングに響いたその声に俺はハッとしてその声がした方を振り向く。

そこにはリビングの入り口で息を切らしている霧歌の姿があった。

いつも丁寧に整えられている髪や洋服等の身嗜（みだしな）みは完全に乱れてしまっている。

それほどこの家まで急いで駆け付けたという事なのだろうか。

「……きり、か」

「良かった……秀ちゃん、無事だったのね――」

と、そこで霧歌は口を噤む。

そして、俺は霧歌の視線が俺からソファーへと――ウリアへと移動するのを見た。

「ウリアちゃん！」

血相を変えてその場から駆け出した霧歌は俺の隣に――ウリアが横たわっているソファーの傍にしゃがみ込む。

「どうして……一体、何が」

「それが……今回、ウリアが戦った『魔導獣機』が予想以上に強い相手だったんだ。その『魔導獣機』は――もう破壊されたけど」

「そんな……こんな――酷い」

霧歌はそう呟きつつウリアの頬を優しく撫でる。

「ウリアは気絶しているだけみたいだけど……でも、もしかしたらかなり酷い怪我を負っているかも知れない」

「そう……うん、解った」

「それじゃあ」とそう言って霧歌は立ち上がると徐にポケットの中から携帯を取り出した。

「今すぐにでも……病院に連れて行かないといけないわね」

「それはそうなんだけど――でも、それって大丈夫なのか？」

「何が？」

「いや、だって、ウリアはこの時代の人間じゃないんだぞ？　手術はしてくれるかも知れないけれど……でも、その後に色々とウリアの事を聞かれでもしたら――」

「秀ちゃん」

俺のその言葉は霧歌の言葉によって遮られてしまった。

「秀ちゃんは……一体全体何を言っているのかな？」

「何って――だって、それは」

「そんな『後』の事を考えるよりも、優先すべき『今』があるでしょう？　ウリアちゃんの事が本当に心配なら――そんな後の事は、それこそ後回しにして、今優先すべき事柄を優先しなくちゃ駄目じゃない」

駄目だった時は、その時に考えればいい。

失敗した時は、その時に善後策を講じればいい。

迷っていて救える命を救えない方が駄目よ――と霧歌は言う。

「……そう、だな」

その霧歌の言葉に俺は考えを改め直さざるを得なかった。

ていうか、霧歌の言う通りだった。

後で俺達がどうなるとか――そんな事はどうでもいい。

今、最も優先すべきなのは、一番考えるべきなのは。

ウリアの、命だ。

「ゴメン、霧歌。俺ちょっと……どうか、してた」

「そんな、謝らなくてもいいよ、秀ちゃん。秀ちゃんの考えも、ある意味正しいからね。でも……こういう時にこそ冷静に、ね？」

そう言って霧歌は俺に向かって微笑んでくれた。

優しく――俺を安心させるかのように微笑んでくれた。

覚悟？

「それに……今、秀ちゃんが言った事は、多分気にしないで良いと思うよ？」

「えっ？」

「忘れたの？」と再度微笑ながら霧歌は俺に自分の携帯を見せて来た。

「私のお母さん、病院の理事長なんだよ？」

◆◆◆

忘れていた。

完全に、忘れていた。

そうなのだ――霧歌の母親は俺の家の近くにある病院の理事長だったのだ。

最近色々な事があって忘れていた――と言うか、最近は病院に余りお世話になった事が無かったので忘れていた。

まぁ、病院なんて日常的に通う所じゃないからなぁ……。

こうして頻繁（ひんぱん）では無いにしても、病院に赴かなければならなくなる

という事態に陥っているという事は。

それだけ――俺が今居る世界は非日常的なものになっているという事なのだろう。

そして、そんな霧歌の計らい――と言うよりも、霧歌の母親の計らいによってウリアは手術をして貰える事になった。

今は、手術室の前で霧歌と共にベンチで二人揃ってウリアの手術の終了を待つというまるでドラマのワンシーンのような、そんな感じで俺は座っていた。

「本当に……助かったよ、霧歌」

「礼には及ばないよ。私にとってはそこまで大それた事をした感じじゃないし。私は私のお母さんに電話をしただけなんだから」

「それでも、礼を言わせてくれよ。お前の電話のお陰で、こうしてウリアは手術を受けられているんだからさ」

「そこまで言ってくれるのなら、そのお礼の言葉は受け取っておこうかな。あと、ウリアちゃんは秀ちゃんの遠い遠い親戚だって事にしておいたから」

「オイオイ、ウリアは金髪碧眼で、どう見たって外国人だぞ。そんな嘘が通用したのか？」

「勿論、通用するはずが無いよ。それを話したのは私のお母さんだったから――まぁ、お母さんも流石に信じていなかったみたいだけれど、少なからずウリアちゃんが秀ちゃんの知り合いだって思った

みたいで、快く手術を引き受けてくれたよ」

「そうか――えっ？　ウリアが俺の知り合いだって解って手術を引き受けてくれたのか？」

「そうだよ？　だって、秀ちゃんは私の恩人なんだから」

「また恩人って――何度も言うが、俺はお前にそこまで良い事をした覚えは無いからな？」

「良いんだよ。私とお母さんが勝手にそう思い込んでいるだけなんだから」

「……なぁ、ここまで来たら物凄く気になって来るんだけど。俺、お前に何かしたのか？」

「うーん……秘密」

「何だよそれ」

「それから、お母さんが今回の手術代はタダにしてくれるって」

「それはもう……何と言うか、本当に有り難い話だな」

俺は思わずその良い――と言うか、良過ぎる待遇に苦笑を漏らしていた。

本当にそれで良いのかと思ってしまうほどに。

「そういえば……少し気になった事があるんだけど」

「何？　秀ちゃん」

「お前さっき、何か知らないけどいつの間にかリビングの入り口に居たよな。どうしてなんだ？」

「だって、秀ちゃんの家、私が来た時、鍵が開いてたもん」

「えっ？　マジで？」

「本当だよ。駄目だよ、秀ちゃん。緊急事態とは言え、ちゃんと鍵は掛けないと」

「あ、ああ、悪い……ウリアを運ぶのに精一杯だったからさ」

「もう、秀ちゃんったら忘れっぽいんだから。これはもう、秀ちゃんの家の玄関にオートロック機能を付与する他に手段は無いね」

「いや、家にオートロック機能はどうなんだよ」

確かに便利かも知れないが、どう考えてもミスマッチのように思えてならない。

「ていうか、俺は別にそこまで忘れっぽくはねーよ」

「あら、いつも宿題を忘れている秀ちゃんの台詞とは思えないわねー」

「あれは忘れている訳じゃない。記憶の中にありながらも、態とやるのを忘れているだけだ」

「なるほどね……うん、解った。秀ちゃん、後でお説教だからね」

「……」

しまった。

思わず口が滑ってしまった。

「しくじった……霧歌の誘導尋問に引っ掛かってしまったぜ」

「いや、別に私は秀ちゃんに対して誘導尋問を行ったつもりは毛頭無いからね？」

「自然と誘導尋問を行っていただと！？　莫迦な……霧歌にはそんな特殊能力があったと言うのか！」

「……秀ちゃん」

「……ハイ」

「病院では静かにね」

「ツッコむ所はそこですか！？」

出来れば他の所をツッコんで欲しかったのだが……。

まぁ、そこは霧歌の状況判断の結果という事で。

「それから、私にはそんな特殊能力は備わっていないから」

「ああ、今それをツッコんでくれるんだ……」

「そして、私が欲しい特殊能力を一つ挙げるとすれば、それは空を飛ぶ能力だよ」

「えっ？　そうなのか？」

「そうだよ。だって、空を飛べれば電車代とか飛行機代とかも掛からないんだよ？」

「……お前の考えは、色々な意味でいつも現実的だよな」

「当たり前だよ。現実は現実的に生きてこそ現実なんだから。例え特殊能力を得たとしても、火を出せるだとか、電気を発生させる事が出来るだとか、そんなものは日常生活では余り役に立たないでしょ？」

「そうか……？　火を出せたり、電気を出せたり出来たら、それはそれで中々日常生活で役に立つと思うけどな。ガス代とか電気代とか安くなるような気がする」

ていうか、その霧歌の言葉は色々とファンタジーの世界に生きるキャラの存在を根本から否定しているように思えてならないのだが。

覚悟？

「駄目だよ、秀ちゃん。それは今ある機械で十分に賄う事が出来るでしょ？　それに対して、人が空を飛ぶ事は今ある機械で賄う事は出来ないじゃない」

「霧歌、この世界には飛行機と呼ばれる素晴らしい発明がある事を知らない訳じゃないよな？」

「それは確かにそうだけれど、今の所は人一人で飛ぶ事は出来ないじゃない？　飛行機に乗るとお金も掛かるし」

「ていうか、霧歌。それなら、空を飛ぶんじゃなくて、どこか行きたい場所に瞬間移動する能力とかじゃ駄目なのか？」

「それも良いと思ったんだけどねー。瞬間移動した先で建物だとか、人だとかに減り込んだりしたら怖いじゃない？」

「なるほどな。やっぱり、お前の考えはいつも現実的だという事が解ったよ」

――そして。

霧歌とそんな会話を交わしている内に、不意に手術室の入り口の上で『手術中』という赤いランプの光が消えた。

◆◆◆

ウリアは霧歌の母親が臨時で用意してくれた個別の病室に運ばれる事となった。

手術を行った霧歌の母親によれば、ウリアはそこまで酷い怪我は負っていなかったらしい。

一番大きな怪我と言えば、右腕の骨にひびが入っていたくらいらしい。

どうして、あれだけの戦闘を行ってそんな怪我で済んだのかと俺は一瞬疑問に思ったのだが――。

まぁ、色々と何か理由があるのだろう。

魔力の有無がどうだとか、あの戦闘服によって衝撃が緩和されていたとか。

そんな事なのだろう。

そう理解する事にする。

ちなみに、俺は今霧歌と共にウリアの病室に居る。

俺と霧歌の前には――ベッドで仰向けに横たわっているウリアが居た。

頭や腕と体中に包帯を巻かれた彼女は、未だ目を覚まさない。

「霧歌までここに居なくてもいいんだぞ？　俺は病院が閉まるまで

ウリアの看病をするつもりだから」

「何を言っているのよ、秀ちゃん。水臭いじゃない。私だって、ウリアちゃんとは友達という関係を持っているんだよ？」

「そうは言ってもだな……」

「それに、意識の無いウリアちゃんと二人きりになったら秀ちゃん何を仕出かすか解ったものじゃないし」

「……霧歌の中での俺の信頼って、どうやら既に地に着いているみたいだな」

「地には着いてないよ、ギリギリ」

「それならもう、いっその事、地に着けてくれ。そのまま地に着けてもらった方が逆に清々しいような感じがする」

「駄目だよ、それは。いざと言う時の為にギリギリの高さを保っておかないと……でないと、秀ちゃんの信頼は地に埋まっちゃうよ？」

「いざと言う時って……何だよ」

「そうねぇ……一つ屋根の下、秀ちゃんに私が乱暴されそうになった時とか？」

「それ、既に俺の信頼は地に落ちているようなものじゃねーか」

それこそ埋まってしまっているようなものじゃねーか。

「いや、そうでも無いよ？　だって、それは秀ちゃんが絶対にそんな事をしないって思っているからこそ言える言葉であって、と言う事は少なからず私は秀ちゃんに対して信頼を置いているって事でしょう？」

「……そういうものなのか？」

「そういうものなんだよ。逆に、私はそれだけ秀ちゃんの事を信頼して、信用して、信じている訳だから――それこそ、秀ちゃんは私のその想いを裏切ったりしちゃいけないんだからね？」

「前言撤回だ。何か物凄く信頼されていて逆に怖く感じる」

「怖い？」

「プレッシャーって事だよ。俺はそこまで信頼を置けたり、期待をされたりするような、凄い人間じゃないからな？」

「だからこそ、私の中での秀ちゃんの信頼は地面ギリギリなんだよ？」

「……」

なるほど。

霧歌のその言葉はやけに納得する事が出来た。

いや、納得したくは無かったのだが。

「……そうだ。話は変わるけれど――ていうか、今更だけど、霧歌

は大丈夫だったのか？」

「うん、大丈夫だった。傷一つも負っていないよ、私は」

「そっか……いや、それなら良いんだ。安心した」

「でも……今回の一件で、色々と変わるよね。あれだけ大きな事が起こってしまった訳だし」

「そうだなぁ……。もう、この未来との抗争は俺達だけが抱える問題じゃなくなってしまったよな、絶対に」

「さっき、携帯で色々とニュースを観て回ったけれど……やっぱり、色々と騒がれているみたいだよ。『●●町の空に突如謎の龍が出現！』――みたいな感じで」

「ウリアの事は……書かれていなかったか？」

「うん、それは大丈夫みたい。龍が暴れている動画やウリアちゃんとの戦闘シーンも撮られていたみたいだけど……その龍と戦っている人物をウリアちゃんと特定できるものは、私が観た限りでは多分無かったと、思う」

「そっか……ありがとな、霧歌」

「それにもお礼は要らないよ。ニュースを観るのは私の日課だから。秀ちゃんと違って」

「最後の一言は余計だったからな」

それにしても――その霧歌の言葉のお陰で俺が一番懸念していた事は解消された。

まぁ、この先の戦いの事よりもその事を気にしていたなんて……何だか不謹慎かも知れないけれど。

でも、この先の事を考えているからこそ――そういう映像にウリアが映っていては困る。

ウリアの戦う姿が映像に捉えられていたならば、少なからずウリアの今後の生活は困難となってしまうだろう。

それは――駄目だ。

ウリアの存在が世間に知られれば、ウリアを良く思う人も現れれば――その逆の考えを持つ人も現れるだろう。

きっと、ウリアを良く思わない人も現れる。

ウリアが今まで生きてきた２０５６年――その未来の時代でさえ敵ばかりの空間で戦いながら過ごして来たというのに。

態々過去にやって来てまで――そんな敵を作る必要は、無い。

覚悟？

そんな事を思う俺の隣で霧歌が椅子に座ったまま背伸びをした。

ベッドの方からウリアの微かな寝息が聞こえてくる。

時間だけが――過ぎて行く。

「……ねぇ、秀ちゃん」

「何だ？」

「喉（のど）、渇かない？」

「ああ……そういえば、今日は朝から殆ど何も水分を口にしていないような気がする」

「今日は色々と大変だったもんね、仕方ないよ」

「それじゃあ」と霧歌は椅子から立ち上がると病室の入り口に向かって歩き出した。

「私、ちょっと飲み物買って来るね」

「それってまさか……俺の分もか？」

「うん、そうだよ？」

「そっか……ありがとな、霧歌。後でちゃんとお金は払うから」

「良いよ、ジュースの一本や二本くらい。今日は秀ちゃんも色々と頑張ったみたいだから、そのご褒美で私が特別に奢って上げるよ」

それじゃあ、ちょっと待っててね――と霧歌は病室を出て行った。

この病院の事と言い、日頃の事と言い、霧歌には本当に色々とお世話になってしまっているなぁ……。

後で必ず何かお返しをしよう。

そうでないと、何かしらの罰が当たりそうな気がする。

全く人の事を疑わない純粋無垢な人間に対して平気で嘘を吐いているような――今の俺はそんな罰の悪さを感じていた。

そして、俺はその感覚に苦笑を漏らしつつ再度ベッドの方へと向き直って――。

「『魔導獣機』はっ！？」

「おわぁっ！」

突如、ベッドから飛び起きてそんな大声を上げたウリアに驚いて椅子ごと引っ繰り返った。

四本足の椅子が音を立てて床の上を転がる。

引っ繰り返った際、俺は背中を打った。

地味に痛かった……。

「……って、あれ？　ここは……？」

と、そんな怪訝な声が頭上から聞こえてくる。

「痛たたた……」

俺は打った背中を擦りながら傍に転がっていた椅子を起こしつつ立ち上がった。

「……漸く目が覚めたか、ウリア」

「あっ、秀、居たんだ。椅子から引っ繰り返っているからドジで鈍間なのび太君かと思ったじゃない」

「誰がのび太君だ。それから、起きて早々メタな発言を飛ばすのは止めろ」

「メタな発言じゃないわよ。この広い世界の中で血眼になって捜せばのび太っていう名前くらいすぐに見付かるわよ」

「まぁ、世界と言っても、日本の中にしかそんな名前は存在しないだろうけどな」

ていうか、そんな日本の中にさえも存在しなさそうな名前を血眼になってまで捜そうとは思わない――って、そんな事はどうでもよくて。

すっかり、話を切り出すタイミングを失ってしまったが……まぁ、

気を取り直して。

「それでそのウリア……大丈夫なのか？」

「失礼ね。幾ら起きて早々メタ発言を飛ばしてしまったとしても私の頭は正常よ」

「いや、そっちじゃなくて。中身の問題じゃなく外の問題だよ、怪我の話をしているんだ、俺は」

「……怪我」

そこまで呟いたウリアは不意にハッとした表情を見せた。

「そうだ！　ねぇ、あの人型の『魔導獣機』はどうしたの！？」

「それはまぁ……その、後で追々話すよ」

今話してもきっと何の問題も無いのだろうけれど……まぁ、その、何だ。

今の状況では、俺は多分あの『魔導獣機』を倒すまでの経緯（いきさつ）を綺麗に述べる事は出来ないだろう。

ただでさえ色々とややこしい話なのに、この口下手な俺が話せば残念な結果に終わるに違いない。

語り部である俺が自分を口下手と言うのもどうかと思うが。

「何よ、その勿体ぶった感じは……でも、とにかく、あの『魔導獣

機』はもうここには居ないのよね？」

「ああ、それは保障するよ」

「そっかぁ……良かったぁ」

安堵の息を吐きながら微笑むウリア――と、その表情は再度怪訝なものにすぐに変化した。

「あれ？　ねぇ、私の戦闘服は？」

ウリアは自身が身に纏っている病衣（びょうい）を見下ろしながら俺にそう問いかけて来た。

「ああ、それならお前が手術室に運ばれる前に霧歌が脱がせたらしい。その証拠に、その戦闘服はここにちゃんとあるし」

俺はベッドの傍にある棚を指差す。

本来ならば、そこはお見舞いの品や花瓶を置く所なのだろうが――まぁ、別に構いはしないだろう。

「そうなんだ、それなら良いんだけど……って、秀？」

「何だよ」

「本当に……私の戦闘服は霧歌が脱がせたの？」

「それは一体全体どういう意味だ」

「私が怪我をして気を失っているのに乗じて、秀が私の戦闘服を脱がしたのかなって」

「濡れ衣にも程があると俺は思うんだが」

「そして、私に……わ、猥褻な行為を行ったのかな、って」

「だから、濡れ衣にも程があると俺は思うんだが！　つーか、自分で言って顔が赤くなるくらい恥ずかしがってんじゃねーよ！」

「も、もう、何を言わせるのよ！　秀のエッチ！」

「お前が勝手に言ったんだろ！？」

そんな――ウリアと交わす会話。

いやまぁ、会話と言ってもただ単に俺が一方的に罵倒されているだけなのだが。

それでも……それは、いつもの会話だった。

毎日交わす会話の中に出て来る――何気ない日常の一コマだった。

そして、その一コマに俺はもうウリアが本当に大丈夫な事を理解する。

覚悟？

「……って、何をにやけているのよ、秀？」

「いや……別に、何も」

「……何よ、変な秀――間違えた、変態な秀」

俺はウリアの頭を比較的強く叩いた。

「な、何をしてくれるのよ！　これでも私は一応病人なのよ！？」

「喧しい。病人なら病人らしく黙って寝てろ。それ以上騒ぎ立てるのならお前の胸を揉むぞ」

「何か最後の方が単なる脅し文句になっている！？　わ、私にそんな脅しが効くと思わない事ね、この公然猥褻罪！」

「お前、人をそんな犯罪の名称で呼ぶな！　ある意味変態よりも酷い呼ばれ方だぞ、それ！」

「うるさい！　この公然猥褻罪！」

「くっ、この……！　もう怒ったぞ！」

「えっ、何、ちょっ……キャ――――ッ！」

「もう頭に来た！　俺は今日お前の胸を揉む！　揉みしだく！」

「ちょっ、止めて！　止めてなさいよ、この変態！」

「フッハッハッハッハ！　俺を怒らせた事を後悔するんだな！　さぁ、堪忍しろ！　堪忍してシーツの中から姿を現せ！」

「あっ、ちょっ、やめっ……止めて！　キャ――――――――ッ！」

◆◆◆

「とまぁ、そんな感じで。この前はそんな夢を見てしまってだな」

「夢オチで終わらせようとするなっ！」

シーツで体を隠しながらウリアが涙目でこちらを睨み付けつつそう声を上げた。

いやもう、本当に……ね？

霧歌が戻って来る前に正気に戻れて良かった。

あの時、霧歌が戻って来ていたら色々な意味で終わってしまう所だった。

ハイ、という訳で、ね。

夢オチじゃないけれど、何も起こっていません。

本当だよ？

本当だからね？

「なぁ、ウリア。俺は結果的には、お前に何も危害を加えていないよな？」

「……貞操を奪われた」

「お前！　今度は俺に何て濡れ衣を着せようとしてるんだよ！」

「貞操を奪われたぁ～！　私の初めてはちゃんと心に決めた人とするつもりだったのにぃ～！」

「……改心した。やっぱりお前の胸を揉む事にする」

「ゴメンナサイ！　本当にゴメンナサイ！」

頬を赤らめたウリアは自身の胸を両手で覆い隠しながらベッドの上で身を捩った。

「本当に勘弁して下さい。胸だけは完全して下さい。どうせ揉むのなら私の肩にして下さい」

「何をさり気無く人にマッサージをさせようとしているんだよ」

意外とあざといな、お前。

「はぁ、最近やけに肩が凝るわねぇ……秀、１００円払ってちょっと私の肩を揉んでよ」

「いや、その場合、普通金を払うのはお前の方だよな？」

「何を言っているのよ。私の体に触らせて上げるって言っているんだから、逆に秀がお金を払うべきでしょう？」

「ああ、なるほど……それじゃあ、１０００円出すからお前の胸を揉んでいいか？」

「秀、あなたどれだけ私の胸を揉む事に執着心を持っているの？」

「頼むよ。１０分で良いから」

「却下に決まっているでしょうが」

俺がウリアとそんな遣り取りを行っていると、不意に霧歌が病室に戻って来た。

「ただいま――って、あっ。やっぱりウリアちゃん、目が覚めたんだ」

俺はこの時、その霧歌の言う“やっぱり”という言葉が気になったが――話の展開に差支(さしつか)えを起こしそうなのであえてスルーする事にした。

「あっ、霧歌。どこに行ってたのよ、私たった今秀から――むぐっ！」

「あーっと、いけない、手が滑ったーっ！」

俺は全力でウリアの口を塞ぎに掛かっていた。

「むぐぅーっ！　むぐっ、むぐむぐーっ！」

「ほらほら、ウリア。お前は怪我人なんだから大人しく寝てやがれコノヤローが！」

我ながら丁寧語と命令文の混ざったかなりおかしな言葉遣いになっていたような気がするのだが……。

まぁ、何にせよ。

ウリアをベッドの中に押し込める事には成功したのでそれはそれで良しとしておく。

結果オーライだ。

「もう、秀ちゃんったら何を遊んでいるのよ。ウリアちゃんが目を覚まして嬉しいのは解るけれど、じゃれ付くのはもう少し後にしなさい」

「あ、ああ、そうだな……ゴメンな、ウリア」

「本当よ……大体、さっきだって――って、わっ、ちょっ、ちょっと！」

俺は光の速度でウリアにシーツを頭から被せた。

「そ、それで、霧歌……飲み物買って来てくれたんだろ？　ありがとな」

「だから、お礼は要らないって。それじゃあ、まずは病み上がりのウリアちゃんから。ハイ、どうぞ」

「んっ……あ、ありがとう、霧歌」

ウリアはシーツの中からもぞもぞと体を脱出させると霧歌から缶ジュースを受け取った。

「それから、秀ちゃんにはこれね」

「あ、ああ、ありが――」

――と、俺はそこで口を噤む。

ていうか、言葉を失った。

だって、霧歌から手渡されたのは――何故かおでん缶だったからだ。

覚悟？

そもそも、“おでん缶”と言って、それがどのようなものか万人に伝わるだろうか？

あの秋葉原の名物の缶ジュース版のおでんである。

要するに缶ジュースの容器の中に代わりにおでんが入っているみたいな――そんな感じの代物なのだ。

まぁ、今は秋葉原からおでん缶の自動販売機は全国展開しているからそこまで知名度は低くないだろう。

……って、いやいや。

今はそんな事はどうでもよくて。

何故におでん缶？

ていうか、どうしてこの季節におでん缶が存在しているんだ？

「……あ、あの、霧歌さん？」

「ん？」と霧歌は満面の笑みでこちらを振り返って来た。

「何かな？　秀ちゃん？」

「あの、これ……おでん缶、なんだけど」

「うん、そうだよ？　おでん缶だよ？」

「あの、これ……熱々なんだけど。物凄く熱いんだけど。今は夏で……暑くて、おでん缶も熱くて、多分これじゃあ喉が潤わないんだけど」

つーか、確実に潤わないと俺は思う。

すると、霧歌はその顔に満面の笑みを浮かべたままこう言った。

「秀ちゃん、駄目だよ？　好き嫌いなんかしちゃ」

「いや、あの……これは好き嫌いと言うか何と言うか、季節的にミスマッチと言うか」

「それとも何？　私が買って来たそのおでん缶をまさか飲めないと言うの？」

「い、いや、飲むよ？　それは有り難く飲ませて頂きますよ？　いや、でも、ほら……何か、おかしくないか？」

「そうかなぁ？　何がおかしくて、変で、変わっているのか私にはさっぱり理解出来ないなぁ」

「いや、確実におかしいだろって。常識的に考えて――ていうか、霧歌がそんな単純なミスをする訳ないだろ」

「それはそうだよ。私はミスなんかしていないよ？　だって、それを秀ちゃんに買って来たのは態とだし」

「態と!?　何で!?　イジメ!?」

「それじゃあ」と相も変わらず霧歌は満面の笑みを浮かべたまま人差し指を立てて言う。

「秀ちゃんに、私が何故そんな事をしたのかヒントを上げましょう」

「ひ、ヒント？」

「ヒント――と言うか、ヒントという名の質問、かな。質問、秀ちゃんに聞くけれど、この病室は何階にあるか知ってる？」

「そ、それは……二階、だろ？」

「ピンポーン、正解、大正解。それじゃあ、更にもう一問――私は今、一体全体何の為に病室を出て行っていたでしょうか？」

「それは……俺達にジュースを買う為――」

――って、あれ？

待てよ。

どうして霧歌は……ウリアの分のジュースを買って来てたんだ？

霧歌は俺と自分自身の為にジュースを買いに行ったはずだ。

霧歌がこの病室を出て行く時には勿論ウリアは目覚めていなかった、はずなのに。

そもそも、霧歌がこの病室に戻って来た時に言ったあの言葉も――何かがおかしかった。

（ただいま――って、あっ。やっぱりウリアちゃん、目が覚めたんだ）

「……」

その霧歌の言葉を思い出した所で俺は何か悪い予感を覚えて額に冷や汗を流す。

すると、霧歌が依然として満面の笑みを浮かべたままこう続けた。

「……それじゃあ、秀ちゃんに質問じゃなくてヒントを上げようか」

そう言って、霧歌は続ける。

淡々と、続ける。

「実は、この病室の窓の下にすぐ自動販売機があるんだよねぇ……それで、この病室が位置する階は二階――ここまで言えば、私が何を言いたいのか、解ってくれるよね？　秀ちゃん？」

「……！」

引き攣った笑みが浮かぶ俺の顔を大量の冷や汗が止め処無く流れて行く。

ああ、なるほど。

そういう事か。

「……と、いう訳で、秀ちゃん」

霧歌はやはり満面の笑みを浮かべたままで――って、さっきからこいつ満面の笑みしか浮かべていないな。

怖いんだけど。

冗談抜きで怖いんだけど。

「……お仕置きだね♪」

霧歌は小首を傾げるという途轍もなく可愛らしい仕草と共にそう言ってきた。

いや――それはあくまで仕草が可愛らしく思えただけで。

その動作と共に紡がれた言葉は途轍もなく可愛らしいとは似つかわしくない残酷な言葉だったのだが。

「……あ、あの、霧歌、さん」

「なぁに？　秀ちゃん？」

「……釈明の余地は――」

「あると思う？」

「……で、ですよねー」

――この日、８月５日は。

色々と――本当に語り尽くせないほどの色々な事が起こった。

悪い意味だが、ここまで充実した一日を過ごす事が出来たのは生まれて初めてなのではないかと思ってしまうほどに。

「いや、その、霧歌さん、待って下さい……あれには色々と深い訳があって――な、なぁ、ウリア？」

「霧歌ぁ。私ね？　今日秀から貞操を奪われそうになっちゃったのぉ～」

「ウリアてめえ！　後で覚えてろ――って、ちょっと待て。今のは本当に誤解だから。本当に今のはウリアの単なる悪ふざけ……ギャ――――――――っ！」

……いや、もう、本当に。

今日この日、８月５日は……本当に、語り尽くせないほどの出来事が起こった。

まぁ、本当は語りたくないだけなのだが……そこはご了承頂いて。

本当に、今日は充実した一日となった。

……それこそ、嫌になるほどに。

8月6日

8月6日。

昨日、あれだけの事があっておいて、何だか気が抜けた感じが否めない気もするのだが。

本日、ウリアは晴れて病院から退院する事となった。

まぁ、実際の所、ウリアの怪我は見た目ほどそこまで酷くは無かったから……そこは当たり前なのだろうけれど。

“病院から退院した”という事実は素直に喜ぶべき事なのだろうけれど。

何と言うか……なぁ。

気が抜けたと言うか、拍子抜けしたと言うか。

ちなみに、俺は霧歌とその母親、及び、病院の理事長に何度も——本当に何度も頭を下げた。

霧歌には昨日何度も頭を下げたけれど——いや、この話は俺のトラウマが蘇りそうだからまた今度語るとする。

本当に……本当に、言葉では言い尽くせないほどの御恩を俺は夜華一家から受け取った。

霧歌や、その母親はお返しなどは要らないと言ってくれた。

という事は、おそらくだけれど、俺がその言葉に反して何かお返しを持って行ったとしても――逆に、その気遣いを踏み躙ってしまうだけだろう。

だから、俺は何度も何度も――何度も、霧歌やその母親に頭を下げたのだった。

何度もお礼の言葉を述べ続けた俺は、今はウリアと共に自宅へと帰路に着こうとしていた――の、だが。

「……工事中？」

自宅に行き着くのに比較的一番近い道は現在絶賛工事中で、どうやら通り抜ける事は不可能のようだった。

「仕方ないわよ。あれだけの規模の戦闘があった後じゃ」

「……そうだな」

隣でそんな事を言うウリアの言葉に俺は頷く。

ちなみに、ウリアは退院こそはしたものの、右腕の骨のひびは勿論完治した訳では無い。

よって、現在彼女は腕を包帯や何やらでグルグル巻きにされていて、その腕を肩から首に通した布で釣っていた。

「仕方ない……それじゃあ、他の道を通って帰るか。少し遠回りになるけど」

「うん、そうしましょうか――」

そのウリアの言葉の先は不意に頭上から聞こえて来た轟音によって遮られた。

俺とウリアは頭上を振り仰ぐ。

青く晴れ渡った夏の空には――普段の日常には決して似つかわしくないものが飛んでいた。

――それは。

「……戦闘機、か」

現在、この●●町はかなりの警戒態勢を強いられていた。

いや、あんな巨大な機械の龍が突然現れた事を考えれば――それは仕方の無い事なのだろう。

霧歌から聞いたニュース（携帯）の内容によれば、日本政府はどうやらこの●●町に自衛隊を派遣する事にしたらしい。

だから、空を見上げれば戦闘機が普通に空を飛んでいて――多分、このまま適当に道を歩いていれば戦車や軍人さんにも会い見える事が出来るだろう。

それから、この●●町に住んでいる住民に対して、外出を出来るだけ控えるように自衛隊の方から命令があったらしい。

まぁ、それも――昨日の事を考えれば、当然の事なのだろう。

「しかし、こんな真夏日が続く中で家の中にじっとしていろだなんて……自衛隊の人達も鬼だな。熱射病で誰かが倒れたらどうするんだよ」

「本当よねぇ……ああ、暑いわ」

「よし、解った。俺が今すぐその六角形のボタンを押して上げよう」

「押させるかこの変態！」

「まぁ、というのは冗談で。むしろ、いつものアメリカンジョークで」

「どこが冗談なのよ、どこがアメリカンジョークなのよ。秀はアメリカンと言うよりもコメディアンでしょ」

「誰がコメディアンだ」

誰が芸人だよ。

「ていうか、本当に暑いわね……これは帰ったら、すぐにセーラー服に着替えないと」

「セーラー服じゃなくてこの前買った水着なんてどうだ？」

「ああ、なるほどね。水着ならセーラー服よりも露出度が高くて涼しい――って馬鹿。そんな口車に私が乗る訳ないでしょ」

「お前、何か最近本当にノリツッコミが増えて来たよな」

むしろ、ウリアの方から積極的にノリツッコミを狙っているような気さえする。

「大体、水着は海に行く時まで取っておくんだから。それまでは、私は絶対に着ないわよ」

「それじゃあ、間を取って俺が着る事にしよう」

「……」

「……いや、冗談だから。冗談だって。だから、その本気で引いた表情を止めろ」

「……ま、まぁ、条件によっては別に着てもいいけど」

「えっ、マジで？」

「うん、マジで。秀がそのビキニを着た画像をネット上にモザイク等の加工無しでアップロードしていいのなら着てもいいわよ？」

「そんな条件で着る訳ないだろ」

「それじゃあ、もっと良い条件だったら着ていたのね……」

「当たり前だろ。特に、お前が着用した直後だとか――だから冗談だって、本気で引くなよ」

遣り辛いなぁ……。

いや、その“遣り辛さ”の根幹は俺なのか。

「えっ、いや、あの……さっき私から条件を出しておいて何だけど、本当に着るって言われても流石に貸せないわよ？」

「だから、冗談だって言ってるだろうが！　誰がお前の水着着たさに社会的な死を選ぶか！　それなら、霧歌の水着を着て社会的に死んだ方が遥かにマシだ！」

「なっ、何よそれ！　それはそれで何かムカつくんだけど！　何よ、私の水着じゃ不満なの！？」

「当たり前だろうが！　俺と同じ歳で、しかも外国人っぽい外見しているくせに、体格はまだ中学生レベルじゃねーか！」

「な、何よぉ！　私だって日々ちゃんと成長しているんだから！」

8月6日？

「体重が、だろ？」

「う、うるさっ……！　ちゃ、ちゃんと成長してるもん！　特に胸とか最近はちょっと大きくなったもん！」

「なるほど、解った。それじゃあ、ちょっと揉ませて見ろよ。それでお前の胸囲を計ってやるから」

「うん、良いわよ――ってハッ！　秀の言葉巧みな罠に引っ掛かってしまう所だった！」

俺にその胸を差し出す前に我に返るウリア。

ちっ。

あともう少しだったのに。

ていうか、今更だけど今のも少なからずノリツッコミだったな……。

「あ、危ない危ない……ていうか、秀も意外と策士だったのね。ちょっと見直したわ」

「おっ、お前にしては俺を見直すなんて中々珍しい事もあるじゃないか」

「敬意を表して、秀の事は今度から“変態”じゃなくて“露出狂”って呼んで上げる」

「確かに呼び方は変わったがその真意は余り変わっていないじゃねーか！　ていうか、俺はそんな“露出狂”と呼ばれるほどの所業を遣って退けた覚えは無いぞ！」

「この前、私のお風呂を覗きに来たじゃん」

「だからあれは事故だって！　何回言わせるんだよ、何回そのネタで引っ張るつもりだ！」

ていうか、それは多分“露出狂”と呼ばれる由来にはならないと思う。

どちらかと言うと“覗き魔”だ。

いや、別に“露出狂”よりも“覗き魔”と呼ばれたい訳では無いが。

「全く……お前という奴は、退院したばかりだというのに元気が有り余っているな」

「まぁね。私は元気が取り得の女の子だから」

「まぁ、確かに。お前から元気を差し引いたらただの馬鹿しか残らなさそうだもんな」

「ちょっと！　それは一体全体どういう意味よ！」

「元気足す馬鹿はウリア」

「そんな方程式は成立しない！　それ以前にそんな方程式はこの世

に存在しないから！」

「だって本当の事だし」

「何が本当の事よ。ていうか、それを言うなら秀は素数よね」

「は？　素数？　どういう意味だよ」

「一と変態でしか割り切れない数だから」

「お前、それは俺の存在自体が変態だと言いたいのか！」

「だって本当の事だし」

「何が本当の事だ！　もっと霧歌並みのバストサイズを手に入れてから言え！」

「なっ……い、今は私の胸の大きさは関係無いでしょ！？」

「いや、ある、大いに関係ある。何故なら、ウリアのバストサイズが増量された時、俺の両腕の封印が解かれて、俺は正式に変態へとランクアップするからだ」

「秀、それってあなた自身が変態になっちゃってるけど良いの！？
ていうか、変態になる事を“ランクアップ”って言っちゃってる秀もどうなの！？」

「そういえば、胸は揉めば揉むほど大きくなるという話をどこかで聞いた事があるな――よし、ウリア、という訳で俺がバストアップに貢献してやるよ」

「そんな迷信染みた話を建前に偽善という名の変態行為を行使しようとするな。ていうか、もしその話が本当でも秀の手は借りないわよ。自分で揉むから」

「……」

「……な、何よ」

「いや、ウリアが自分で自分の胸を揉むというシチュエーションも中々だなって」

「ああもう！　あなたは本当にもうどこに向かっているのよ！」

俺はどこに向かっているのだろうか。

解らない。

ていうかむしろ、俺がそれを聞きたいくらいである。

◆◆◆

「いやー」

家に着いて早々、ウリアはリビングのソファーに倒れ込んだ。

「やっぱり、我が家は落ち着くわー」

「正確にはお前の我が家じゃないけどな。お前の我が家は２０５６年だろ」

「……」

「ん？　どうした？」

「い、いや、何でも無い……あっ、そうだ」

「ねぇ、秀」とソファーに体を起こすウリア。

「久しぶりにカップラーメンが食べたいな」

「そう言うと思って、昨日一度帰った時にスーパーでシーフードを補充してきた」

「おおっ、秀のくせに中々気が利くじゃない。もしかして、あなた別人？」

「作ってやらねーぞ」

「冗談よ、冗談」

そう言って笑みを零すウリア。

そんなウリアの笑顔に俺も思わず微笑を零して――キッチンへと向かう。

俺はカップラーメンの山の中を漁り出す。

そういえば、今までもそうだったけれど、昨日買って来てからこの中に放り込んだんだっけ。

整理の必要があるかな……目当てのカップラーメンを探している間にウリアを待たせてしまうし。

そして、そんな事を考えているとリビングの方からウリアの声が聞こえて来た。

「あっ、ねぇねぇ、秀」

「どうした？」

「霧歌から聞いたんだけどさ。秀、昨日このソファーで気絶している私を見てかなり狼狽えていたらしいじゃない」

「……」

俺はそのカップラーメンの山の中から取り出した容器を取り落とした。

8月6日？

それから、俺は後ろを振り返る。

キッチンとリビングを隔てる壁――そこに空いた長方形の穴からはウリアがニヤニヤとした表情でこちらを見据えていた。

「……な、何故、お前がそれを……」

「だから、霧歌から聞いたって言ったじゃん」

「い、いつ聞いた？　確かに、昨日は霧歌も一緒に居たし、今日だってそうだったけれど、お前と霧歌がそんな話をしていた所なんて見なかったぞ」

「それはそうよ。だって、秀がナースさん達の着替えを覗きに行っている最中に話したんだから」

「そうか、なるほど……それは俺が知らない訳だ――ってオイコラ」

「冗談よ、冗談。昨日秀がトイレに行っている間に、霧歌が私に話してくれたの」

「……」

き、霧歌の奴め。

態々張本人に話さなくてもいいだろうに。

「……ねぇ、秀？」

「な、何だよ」

「狼狽えていたって……そこまで私の事を心配してくれていたの？」

相変わらずニヤニヤとそう俺に問いかけてくるウリア。

「あ、当たり前だろ、悪いかよ。お前は俺にとって大切な――そう、大切な存在だからな。お前に居なくなられたら困るんだよ」

「た、大切な存在……ていうか、困るって？」

「お前に死なれたら……その、悲しいだろうが」

「……か、悲しい？」

「ああ、悲しい。もし、ウリアがそんな事になってしまったら、俺は途轍もなく悲しいし、物凄く寂しいし――マジで、俺は泣き叫ぶと思うし」

「……」

「……ん？」

急に返って来なくなったウリアの言葉に怪訝に思って俺は後ろを振り返る。

先ほどまで、そこに空いている穴からこちらを覗き込んでいたウリアは――いつの間にかこちらに背を向けていた。

「……ウリア？」

「……る」

「は？」

「て、テレビ観てくるって言ったのよ！」

そう声を上げたウリアは足早にその穴から見える四角い景色の中から姿を消した。

「……何なんだよ」

そのウリアの行動や言動に疑念を感じた俺だったが――とりあえず、今はシーフードのカップラーメンの発掘作業に全力を注ぐ事にした。

◆◆◆

二つのカップラーメン（勿論俺がカレーで、ウリアがシーフードである）を作り終えた俺はリビングにそれらを持って行った。

ウリア側の席にシーフードを、俺側の席にカレーのカップラーメンの容器を置く。

それから、俺は自分がいつも使っているテーブルの席に着いて手を合わせた。

「いただきます」

そう言って俺はカップラーメンの蓋を引き剥がす。

箸を手に取った俺はカレースープに浸っている麺を掴もうとして――ふと、ウリアの方に視線をやる。

そこには、カップラーメンを食べるどころか、その蓋さえも開けずにじっとその容器を見下ろしているウリアの姿があった。

「どうした、ウリア。食べないのか？」

「いや、食べたいんだけど……食べられないと言うか、何と言うか」

「どういう事だよ」

「ほら、だから……」

そう言って――ウリアは包帯でグルグル巻きになっている右腕を俺に見せて来た。

ああ、なるほど。

そういう事ね。

「そうか……そういえば、お前の利き手は右だったな」

「うん……だから、さ」

「だから？」

「……食べさせてくれると嬉しいな、って」

俺は危うく箸を取り落としそうになった。

「……な、何だって？」

「だから、このままじゃ“しーふーどー”を食べられないから、秀が私に“しーふーどー”を食べさせてくれると嬉しいかなって」

「そ、それは良いけど――って、良いのか？　これって本当に良いのか？」

「い、良いに決まっているでしょ。食べさせて貰う私が良いって言っているんだから、後は……その、秀の判断だけよ」

「……俺は」

俺は――どうなのだろうか。

女子にカップラーメンを食べさせる。

……改めて思うと色々な意味でどんなシチュエーションだと呆れてしまうのだが。

逆に言えば、そのシチュエーションはそう易々と体験できるようなものである事は確かだ。

――だから。

俺の答は、既に決まっている。

「よ、よし……仕方ないな。ウリアがそこまで言うのなら……食べさせてやろうかな」

「……秀」

「な、何だ？」

「顔、にやけ過ぎ」

「そ、そんな事は無いぞ？　俺の顔は大体いつもこんな感じだ。いや、むしろ生まれ付きこんな感じだ」

「秀、生まれ付きそんな表情だったら、間違いなくそこら辺を歩いているだけで警察に通報されちゃうわよ？」

そうなのかよ。

今の俺は一体全体どんな顔をしていると言うんだ。

歩くだけで１１０番通報って。

8月6日？

「それじゃあ……ほら」

俺はウリアから箸を受け取ると、カップラーメンの容器の中から数本の麺を摘み上げる。

「熱いからな、気を付けろよ」

「解ってるわよ」と口を摘み上げられた麺へと持って行くウリア。

「ふーっ……ふーっ……いただきます」

それから、麺を冷ます為に何度か息を吹き掛けたウリアはそう言って麺を口に含み、それをズルズルと啜った。

「もぐもぐ……うん、やっぱり“しーふーどー”は美味しいわね。久々に食べる事もあって、更に美味しさが倍増されているような気がするわ」

「いや、久々に食べるって、お前昨日も食べていたよな？」

「何を言っているのよ。昨日の夜は“しーふーどー”を食べていないでしょ？」

「お前、シーフードに執着心が有り過ぎだろ」

「……ってほら、秀。早く」

「ハイハイ……ほら」

俺はもう一度麺を容器の中から摘み上げてやる。

「ふーっ、ふーっ……あむ」

そして、ウリアはその摘み上げられた麺を冷まして、それらを口に含むとズルズルと音を立てて啜り上げた。

「もぐもぐ……うん、こういう食べ方も中々悪くないわね。今度からはずっと秀に食べさせて貰おうかしら」

「却下させて貰おうか」

「えーっ、何でよ。奴隷気質のある秀には持って来いの仕事でしょ？」

「俺の中には奴隷気質なんてものは存在しない」

「素直になりなさいよ、秀……あなたが奴隷気質のある変態だって事は初めて出会った時から私は見抜いて――って熱っ！」

俺は再度摘み上げた麺をウリアの頬に押し付けた。

「ちょっ、な、何をしてくれるのよ！　本当に熱かったんだから！」

「ゴメン、ちょっと手が滑った」

「いや、あからさまに態とだったわよね！？　秀が思っているよりも熱いんだから、次からは絶対にそんな事はしないでよ！　絶対だ

からね！」

「えっ？　それは逆に“やってくれ”という事か？」

「そんなボケは誘っていないから！」

つーか、今の遣り取りが通じたよ……。

やはり、最早有名を通り越して伝説と化したギャグは全ての歴史が失われた４５年先の未来にも生き残っているものなのだろうか。

――とまぁ、そんな事を思いながら。

この後も、俺はウリアにカップラーメンを食べさせ続けたのだった。

俺にとっては、女子に食べ物を食べさせるという中々の至福の時を過ごす事が出来た。

ただ……その代償として、俺のカレーのカップラーメンが気付いた時にはでろでろに伸び切ってしまっていたのだが。

◆　◆　◆

「それで？」

俺が涙目で伸び切ったそのカップラーメンを啜っているとウリアがそう問いかけて来た。

「実際の所、昨日は私が気絶している間に一体全体何があったの？」

「ああ……えっと、それは」

その問いに俺は口に含んだ麺を飲み込むと――ポケットから白い欠片、もとい、『輪廻終焉（ラグナロク）』を取り出す。

「それはその……これ、なんだ」

「それは――あの白い欠片、よね？　秀が２０３０年に古代文明である魔術を復活させる為の鍵――それがどうかしたの？」

「……実は、さ」

――そして。

俺は昨日起こった事の全てをウリアに話した。

『魔導獣機』の一撃からこの白い欠片が俺を護ってくれた事。

その後、俺は白い変な空間へと誘（いざな）われた事。

そこで俺は『未来の俺』の声を聞いた事。

この白い欠片は古代文明の遺跡から発掘された『輪廻終焉（ラグナロク）』という古代兵器である事。

この古代兵器は『未来の俺』がこの時代の俺に託（たく）したという事。

そして――『未来の俺』は俺にその古代兵器を使って未来を救えと

言って来た事。

俺はその全てを話した。

その全てを聞いたウリアは特に驚く様子も無く――逆に納得したような面持ちでこう言った。

「なるほど……それなら、未来の秀がどうしてこの時代に私を送ったのかが解って来るわね」

「……どういう事だ？」

「ほら、前にも秀は言っていたじゃない？　どうして私や『科学発展側』の人間はこの時代の秀を対象に未来からやって来るのか――幼少時代の秀の方が対象とするにはどちらかと言うと容易いんじゃないのか、って」

「ああ……そう言えばそんな事も言っていたな、俺」

「それはね、この時代に送っているんじゃなくて、正確にはこの時代にしか送れないのよ」

更に正確に言えば２０１１年の７月２７日まで、ね――とウリアは言う。

しかし、俺にはまだそのウリアの言葉の真意が解らない。

「えっと……それは、つまり？」

「私が話した世界線やそれによって生じる平行世界の話は――勿論、

覚えているわよね？」

「ああ、勿論」

「つまり、ね？　この世界線の未来――もとい、２０１１年の７月２７日以降の未来からやって来る人達は、２０１１年の７月２７日より過去には行く事が出来ないの」

「何故なら」とウリアは人差し指を立ててこう言った。

「この時代、２０１１年の７月２７日より過去の世界は――存在していないから」

「……存在して、いない？」

「秀から聞いた話によれば、未来の秀も言っていたじゃない。秀がその古代兵器――『輪廻終焉（ラグナロク）』を拾う世界線と拾わない世界線が存在するって」

今から約一週間前の７月２７日。

その日、秀がその古代兵器を拾う事によって世界線が分岐した――とウリアは言う。

「もしも、秀がその古代兵器を拾わなかったら、世界の構造は変わらなかったと思うわ。２０３０年に魔術は復活せずに、この世界線で言う『科学発展側』が未来の戦争において勝利を収めていたでしょうね」

でも、秀がその古代兵器を拾って世界線は大きく変動した――とウ

リアは続ける。

「今、私達が居る世界線は秀がその古代兵器を拾った世界線――つまり、未来に魔術が復活する世界線って事ね。世界の運命や理（ことわり）が左右されるほどの大きな世界線の変動――そんな通常よりも大きな世界線の変動で、今私達が居るこの世界線はずっと昔から続いてきた世界線から断ち切られてしまったのね。勿論、２０１１年の７月２７日の時点から」

8月6日？

「なるほど……つまり、余りにも大きく世界線が変動してしまったから２０１１年の７月２７日よりも過去の歴史が無くなって――」

……って、あれ？

待てよ。

もしそうならば、その話は少しばかりおかしい。

「ちょっと待て。それじゃあ、どうして俺の中には記憶がまだ存在しているんだ？　過去の歴史が無くなってしまったのなら、今ここに居る俺が昔の――子供の頃の記憶を持っているのはおかしいだろ」

「秀、未来のあなたが言っていたその古代兵器の能力は何？」

「それは――って、ああ、なるほど」

そういう、事か。

「そうか……『輪廻終焉（ラグナロク）』には世界線の変動の後でも、その変動する以前の世界線での記憶を保つ事が出来る能力があるのか」

世界の法則や理――即ち、輪廻を断ち切る。

輪廻を終焉させる力。

故に――輪廻終焉。

「そういう事よ。世界線が変動したのは、秀がその古代兵器を拾った後の事だから、世界線が変動した瞬間に、既に秀の手の内にあったその『輪廻終焉（ラグナロク）』の力が働いたんでしょ」

「なるほど、だから俺の中にはまだ子供の頃の記憶が残っているって訳か。でも、それなら、霧歌の中に俺と幼馴染であるという事実が残っているのはどうしてなんだ？　俺の子供の頃の歴史が消えてしまったのなら、霧歌の記憶の中にも残っていないはずだろ」

「ああ、それなら別におかしい事じゃないわ。世界線が変動して、平行世界が創造される際には、確かに歴史は変わるかも知れないけれど――それと同時に人々の過去もまた再構築されるから」

「その再構築された結果が……元々あった記憶になる事もあるのか？」

「当然よ。まぁ、少なからず改変された記憶もあるかも知れないけれどね。そもそも、今回の世界線の変動は未来に影響するものであって、過去に影響するものではないから、そこまで過去は――霧歌や皆の記憶は変わっていないと思うわよ？」

秀だって記憶が残っただけで新しい記憶が付加されているかも知れないし――とウリアはそう付け加えた。

「そうか……なるほど、それなら色々と辻褄が合うな」

「でしょう？」

「ああ、良かったよ」

「良かったって――いや、良くはないでしょ。秀は未来の秀のせいで、今こうして命を狙われている訳なんだし」

「まぁ、確かにそれは悪い事で、決して良いとは言えないけれど……」

それでも、今の俺は胸を張って良かったと言える事がある。

『未来の俺』の勝手な押し付けのせいで今の俺は未来に蔓延(はびこ)っている訳の解らない組織から命を狙われている。

全く、傍迷惑(はためいわく)な話だ。

勝手に世界を救えと言われて、その押し付けによって勝手に命を狙われて。

本当に迷惑以外の言葉が浮かばない。

――けれど。

それでも――今ではその状況を良かったと俺は言える。

そう言う事が出来る。

そう思う事が出来る。

『未来の俺』が言う所の『輪廻終焉(ラグナロク)』を拾う世界線と拾わなかった世界線。

俺がもしもこの古代兵器を拾わなければ――俺はきっと以前と同じ生活を繰り返していただろう。

以前と同じ自堕落で何もしなかった――そんな日々を。

――でも。

俺は今その世界線には居ない。

俺は古代兵器を拾ってしまった。

故に世界線は変動して、俺は今新たに創造された平行世界の上に立っている。

世界の構造は再構築されて、俺は以前とは別の運命の上に立っている。

それによって、俺は少なからず――と言うか、確実に面倒事が増えた。

それでも、その面倒事は以前居た世界線では決して味わう事の出来ない経験だ。

確かに、こちらの平行世界に移動した事によって俺は『科学発展側』から命を狙われる事になった。

――けれど。

それによって、経験できた貴重な体験があった。

それによって、手に入れる事が出来た少し危険でとても面白い日々があった。

――そして。

それによって――出会う事が出来た人が居る。

前に居た世界線では絶対に出会う事の無かった存在が――今俺の目の前にはある。

だから。

だからこそ。

今の俺は――この状況を良いと言える。

胸を張ってこの一件に巻き込まれた事を良かったと言えるのだ。

「……でもさ」

だから、俺はウリアに向かってこう言った。

「もしも、未来の俺がこの時代に『輪廻終焉（ラグナロク）』を送らなかったら……ウリアにも、会えていなかった訳だし」

「……えっ？」

「この世界線に移動して、確かに色々と大変になったけど……でもまぁ、この世界線に移動しなかったら、ウリアとも会えなかった訳だからな。それなら別に、命を狙われるようになったとしても――

うん、良かったって言えるかな、って俺はそう思うんだよ」

「……えっ」

「ええっ!?」と顔を真っ赤にして不意にそう声を上げながらウリアは椅子から立ち上がった。

「い、今……な、ななっ、なん、て……!」

「いや、だから――」

「いや、いい！　やっぱり言わなくていい！　ていうか、もう言わないで！」

「は？」

「あ、あの、私……せ、セーラー服に着替えて来るね！」

そうやって噛みながらも早口で言い切ったウリアはその頬を上気させたまま猛スピードでリビングから出て行くのだった。

8月6日？

「何か……今日のあいつ、変だな」

そして、俺はそう感想を述べながら容器の中の麺を箸で摘み上げて――。

……って、ああ。

そういえば、伸び切っていたんだっけ、麺。

◆◆◆

俺が伸び切った途轍もなく残念なカップラーメンを食べきった頃、ウリアが漸く着替えを終えてリビングに戻って来た。

「おう、ウリア。遅かったな――」

――と、そこで俺は口を噤んだ。

思わず、口を噤んでしまった。

何故なら……リビングに戻って来たウリアはセーラー服では無く、最近は図書館等の外出の際には必ず着ている私服を着ていたからだ。

いや、別にウリアが私服を着ている所だとか、家の中で私服を着ている所がおかしいだとか――そういう所に驚いた訳では無くて。

何だろう。

何か解らないけど……俺は思わず口を噤んでしまったのである。

「……な、何よ」

そして、気付けばウリアは若干頬を赤らめてリビングの入り口付近でこちらを見据えていた。

「何よ。何か言いたそうな顔をしているわね」

「い、いや、何と言うか……何故に、私服？」

「な、何？　私服を着ていたら何かおかしいの？」

「いやえっと、そういう訳では断じてないんだけど……セーラー服じゃなかったのか？」

「べ、別に良いじゃない。それとも、秀は私のセーラー服姿を何が何でも見たいような変態な訳？」

「そういう訳じゃないんだけど……」

「べ、別に……秀にさっきあんな事を言われた訳じゃないんだから……」

「えっ？　何か言ったか？」

「な、何でも無い！」

そう声を上げてズカズカとリビングを歩いて一気にソファーに向かうと、そこに座り込んでテレビの電源を付けた。

よくよく見れば、髪型も普段家の中でしているストレートではなく、ポニーテールになっている。

何だろう。

何かのアピールなのだろうか。

俺は何か感想を述べた方が良いのだろうか。

「……えっと、ウリア？」

「……何？」

俺はウリアに話しかける。

しかし、ウリアはテレビの方を向いたままこちらを振り向きもしない。

「その……何だ」

「何よ。言いたい事があるのならハッキリと言いなさいよ」

「えっと……洋服も髪型も、似合ってるぞ？」

その瞬間、ウリアの体がピクッと小さく跳ねて。

「……あ、ありが、とう」

「……どういたしまして」

……何だか変な雰囲気になってしまった。

間違った事を言ってしまったのだろうか。

今更ながら小さな後悔をする俺。

「……」

うーん。

この雰囲気を打開するには……そうだな。

「……なぁ、ウリア」

「……今度は何よ」

「折角着替えたんだし……図書館にでも行くか？　昨日病院に持って行った図書館の本、読み終えたんだろ？」

「……今度は誉め言葉じゃないのね」

「えっ？」

「な、何でも無い……うん、そうね。秀も勿論、付いて行ってくれるのよね？」

「ああ、うん。今日は図書館で宿題でもやろうかと思っていたから……その間、ウリアはどうする？」

「待ってる。秀の隣でまた本読んでる」

「そっか。よし、それじゃあ行くとするか」

「うん」

そう言ってウリアは立ち上がる。

良かった、何だか解らないけれどあの変な雰囲気は打開する事が出来たらしい。

そうと決まれば俺も私服に着替えて宿題等の教材の準備をしなければ。

◆◆◆

外は快晴――とは言えない天気だった。

いや、晴れには変わりないのだけれど。

今日の空は雲が多かったのである。

まぁ、太陽の日光が厳しい夏の空に雲が沢山（たくさん）浮いているのはかなり助かるのだけれど。

確か、ニュースで近々雨が降るとか何とか言っていたっけ。

「そういえばさ、ウリア」

「ん？　何？」

「お前の読んでた小説、かなり巻数が多いシリーズだったみたいだけど、全部読み終わったのか？」

「ああ、この――」

「タイトルは言わなくていいからな」

その小説を見せ付けて来たウリアに俺はそのタイトルを一文字も言う前にその言葉を遮った。

もう言わせない。

絶対に言わせない。

「いや、まだ読み終わっていないわ。この前は全部借りる事が出来なかったし……今回読み終わる事が出来たのは第五巻までね」

「へーっ、もうそこまで読んだのか。面白かったか？」

「かなり面白かったわね。どこが面白かったかと言うと――」

「内容も語らなくていいからな」

タイトルなら未だしも、内容まで話されてはメタな発言を通り越し

てしまう。

それだけは言わせない。

絶対に言わせない。

8月6日？

そして、そんな会話を繰り返している内に俺とウリアは目的地である図書館に到着した。

既に時刻は昼頃であり、図書館には比較的多い人数が居たが――公共のいわゆる“勉強スペース”の机はまだ幾つか空いていた。

何人かの人が各々（おのおの）それぞれの勉強をしている。

幾つもの新聞を開いてルーズリーフに何かを書き込んでいる人や、分厚い本を何冊も机の上に重ねて読書に励んでいる人も居た。

見た所、俺のように宿題をやりに来た人は居ないようだ。

「まさか、霧歌の言う“皆夏休みの前半に宿題を終わらせている”という都市伝説は本当だったのか……？」

いや、まぁ都市伝説では無いのだけれど。

何だか俺だけ取り残されている気分がして……嫌な予感がした。

俺はここまで背負ってきたリュックを机の上に下ろす。

本当は学校の鞄でも良かったのだが――架凪呀から折角借りた参考書を使うべく、俺はリュックを持って行く事にしたのだ。

「……って、そういえば」

そういえば、架凪呀は大丈夫だろうか。

以前、この図書館を訪れた後に俺が『魔導獣機』に襲われて以来会っていないけど……。

昨日の騒ぎの事もあるしなぁ……。

心配だ。

「参考書を返しに行くついでに確かめに行くか――って、俺架凪呀の家がどこにあるのか知らないんだよな」

「さっきから何をブツブツと呟いているのよ」

すると、俺の隣に居るウリアがそう怪訝な声を掛けてくる。

「あっ、いや、悪い……何でも無い」

俺はウリアに苦笑を見せて席に着いた。

「ねぇ、秀。この本って、この前と同じ所に行けば返した事になるのよね？」

「ああ、そうだ。受付の人に言ったら、多分その本の続きがある場所に案内して貰えると思うから、聞いてみろよ」

「うん、解った」

笑みと共にそう頷いたウリアは五冊の本を手に受付の方へと小走りで駆け出した。

その姿を目で追って――俺は再度図書館の中を見渡す。

先ほども語ったように、広大な図書館の中には割と人が居た。

自衛隊からは出来るだけ外出を控えるように言われているはずなのだけれど……。

案外、外出している人って多いんだな。

受付の人も変わらず仕事していたし……まぁ、自衛隊が来ているから、割と安心感を抱いているのかも知れないけれど。

――でも。

多分だけど、自衛隊じゃ『魔導獣機』には勝てない。

と言うか、この時代の兵器では未来の兵器に勝てる訳が無い。

――だとしたら。

次に『魔導獣機』が襲って来た時に――この町の人を護る事が出来るのは。

俺とウリアの二人だけだ。

「……」

そんな事を思いながら俺はズボンの右のポケットへと手を延ばす。

ズボンの生地の上からその感触を確かめた。

大丈夫。

確かに――ポケットの中に『輪廻終焉（ラグナロク）』は入っている。

ズボンのポケットの中に魔力的な古代兵器が入れられているというのも何やら滑稽な話かも知れないが。

「……ん？」

そして――俺はその姿を視界に捉えた。

図書館の外の景色を映し出す窓の向こう側。

この建物の前の道を歩く架凪呀の姿を――俺はその目に捉えた。

「架凪呀……」

その姿を捉えた瞬間、俺は思わず駆け出していた。

何故そんな反射的に駆け出してしまったのかは解らないけれど。

とりあえず、俺は架凪呀に会う為に図書館を飛び出した。

◆◆◆

図書館から飛び出した直後に、俺は架凪呀と鉢合わせする形で出会

う事が出来た。

まぁ、こちらから会いに行っている訳で……鉢合わせも何も無いのだが。

「あら、真之乃秀じゃない。どうかしたの？　何か少し息が切れているようだけれど」

「いや、その……図書館に居たら、窓からお前の姿が見えたからさ」

「……えっと、それはつまり、真之乃秀は私に会いに来たと理解してもいいのかしら？」

「ああ、勿論だ」

「私の姿を目に捉えた瞬間、息が切れるほどの勢いで駆け出す――真之乃秀、アンタはどれだけ女性という生き物に飢えているの？」

「別にそんなつもりは毛頭もねーよ」

「それで？　真之乃秀は一体全体こんな所で何をしているの？　私にそんな勢いで会いに来た事から察するに――強姦（ごうかん）ごっこ？」

「強姦ごっこって何だ！　そんな遊びはこの世に存在しない！」

ていうか、そんなものは実行してしまった時点で“ごっこ”じゃなくなってしまうだろ。

遊びでも何でもやってしまった時点でそれは列記とした犯罪である。

「いや、あの、こんな真昼間の道路のど真ん中でアンタの変態性をフルに発揮されても困るんだけど……」

「だから、そんなつもりは毛頭無いと言っているだろうが！　その微妙に引いた顔を止めろ！」

勝手に濡れ衣を着せられて、勝手に引かれるって何だ。

何なんだ、この状況は。

8月6日？

「時に、百円硬貨」

「誰が百円硬貨だ、誰が」

「あら、反応したという事は、自分が“百円硬貨である”自覚があるという事なのね……悲しいわ」

「そうだな、確かに悲しい事だな。お前さえそんな事を言い出さなければ俺もお前もそんな悲しい思いはしなくて済んだのにな」

「まぁ、私の悲しい思いは偽りだけど」

「偽りなのかよ！　そこはせめて嘘でも悲しいって言っておけよ！」

「嫌よ。何故なら、私は嘘を吐くのが嫌だから」

「いや、たった今嘘を吐いていたお前の言う台詞じゃないからな？」

「それでまぁ、話を戻すけれど……十円硬貨」

「さり気無く価値が下がった！？」

そんな俺のツッコミをスルーして架凪呀は続ける。

「知ってる？　真之乃秀」

「……何がだよ」

「日本の硬貨ってね、絵が描かれている方が表なのよ？」

「えっ、そうなのか？」

「やっぱり知らなかったのね……真之乃秀は本当に無知だわ」

「俺の事を貶す前にさっさと話を進めたらどうだ」

「ハイハイ。それでえっと……どこまで話したっけ？　私の記憶が正しければ、真之乃秀は途轍もない変態で――」

「そんな話は少したりともしていない！」

隙あらば俺を変態扱いしようとしやがって！

何なんだお前！

本当に何なんだお前！

「ああ、ゴメンナサイ、口が滑ったわ」

「いや、今のは口が滑ったどころの騒ぎじゃなかったからな？」

「それでその……日本の硬貨は絵の描かれている方が表なの。これって、知られているようで余り知られていない事なのよね」

「確かになぁ……俺も知らなかったし」

「心配しなくても、真之乃秀がこれくらいの一般教養を知らないの

は当たり前だから、気にしない方が身の為よ？」

「俺を気遣っているのか、それとも俺の事を遠回しに“無知”と言っているのか、どっちなんだ」

「両方よ」

「両方なのか……」

まぁ、両方ならばそれはそれで悪くない――。

「一対九の割合でね」

「殆ど俺の事を貶しているだけじゃねーか！」

しかも、九割方俺を“無知”と思っていると来た。

しまった……“両方”だと言われて少し嬉しがってしまった数秒前の俺を呪いたい。

「そして、唐突ですがここで問題です」

「本当に唐突だなぁ……」

「五百円硬貨の表に描かれている絵は何でしょうか？」

「そして唐突に聞いた割にはかなりの難問じゃねーか」

「難問じゃないわ。一般教養の類よ」

「それを一般教養の類とか言う奴はお前とか霧歌くらいだよ」

本当に霧歌辺りならこういう雑学はすぐに答えてしまうのだろうが……。

まぁ、日常的な学問さえ熟(こな)していない俺には到底無理な訳で。

「……まぁ、解る訳無いよな」

「諦めちゃうの？　この問題に答える事が出来たら、真之乃秀の価値が百円硬貨から五百円硬貨にランプアックするのよ？」

「別に嬉しくねーよ」

ていうか、俺の存在価値が１００円だとさり気無くいつの間にか決定されていた……。

「仕方ないわねぇ……真之乃秀は。正解は桐よ、覚えておきなさい」

「ああ、覚えておくよ」

「そして、今の問題に答えられなかった真之乃秀の存在価値はペナルティとして十円硬貨にランクダウンします」

「ちょっと待て！　聞いてないぞ、そんなペナルティ！　司会を務めるのならその辺りのルールもちゃんと説明しておけよ！」

「だって、聞かれなかったしー」

「最低の言い訳じゃねーか！」

「それで、十円硬貨」

「ランクダウンは決定事項ですか！？」

ていうか、そもそも俺は百円硬貨でも十円硬貨でも無いし。

その場のノリで何だかツッコんだりしてしまったけれど。

「話を戻すけれど、私に急いで会いに来たって事は――何か私に用でもあったの？」

「ていうか、漸くそこに戻って来てくれるんだな……」

会話を開始した瞬間に話が迷走して原点に戻って来るまでかなり掛かったような気がする。

何だか疲れた。

いや、話したい事を話す前に疲労を感じているというのもおかしな話なのだが。

「まぁ、その、何だ……特に用って訳じゃないんだが。お前、最近は大丈夫だったのか？」

「最近って？」

「ほら、昨日もそうだったけれど、あの魔導――いや、あの変な龍が空に現れただろ？」

うっかり、『魔導獣機』と言いそうになって――俺は咄嗟に言い直す。

俺は普段使い慣れているから当たり前のようにその言葉を使用していたが……。

思えば、それは俺やウリア、霧歌が特別なだけであって。

架凪呀のような一般人は知らない情報なんだよな……。

今後から気を付けなければ。

8月6日？

「だから、その……架凪呀がそれに巻き込まれたんじゃないかって、心配でさ」

「……まさかアンタ。私の事が心配で、態々ここを通り掛かった私に会いに来た訳？」

「あ、ああ、そうだよ……悪いかよ」

「……いや、別に悪くは無いけれど……ふーん」

「そうなんだ」と俺から視線を逸らす架凪呀。

その時の架凪呀の頬は――ほんの少しだけ上気しているように見えた。

「それなら、別に心配は要らないわ。こうして、私はピンピンしている訳だし――悪かったわね、無駄な心配を掛けて」

「別に無駄な心配じゃないだろ。友達の安否を心配するのは当たり前の事なんだし」

「……友達、か」

「架凪呀？」

「ううん、何でも無い」

こっちの話――と架凪呀は小さく俺に笑みを見せて来た。

「……最近は、さぁ」

そう言って――架凪呀は空を見上げる。

その動作に釣られて俺も天を仰ぐ。

すると、それと同時に甲高い音が俺の耳に伝わって――視界に映った青い空を戦闘機が横切って行くのが見えた。

「色々と……物騒になって来たわよね。昨日の事と言い、この前アンタと図書館で会った日の事と言い……何なのかしらね、本当に」

「……さぁな」

その架凪呀の言葉に俺はそう答える事しか出来なかった。

ていうか、それ以外に言える言葉が無かったのである。

何しろ、今回の一件の全ての原因は俺なのだから。

まぁ、そんな事を架凪呀に言えるはずも無いので――結果的に曖昧な返事をする事しか俺には出来なかったのである。

「警察は何かテロリストの仕業だとか言っているけれど――それも何だか疑わしいものよね。まぁ、推測を疑う事自体が間違っているのかも知れないけれど、こんなどこにでもあるような辺鄙（へんぴ）な町を態々テロリストが狙うものですか」

「確かにそれはそうだが……辺鄙って」

いや、まぁ確かにここは都会から遠く離れた辺鄙な町なのだろうが。

自分の住んでいる町をそこまで悪く言えるか、普通。

「ああ、失礼。少し言葉が過ぎたわね……ゴメンナサイ、真之乃秀の前だったら言葉に歯止めが利かなくて」

「……」

どうやら、俺の前に居るという理由でついつい毒舌が出てしまったようだった。

という事は俺の前では歯止めを利かせずに本気で毒舌を披露しているという事なんだな。

何て奴だ。

侮辱罪で訴えられればいいのに。

「何か不愉快な事を思われた気がするんだけど気のせいかしら？」

「……気のせいなんじゃないか？」

こちらを横目で見据えて来た架凪呀から視線を逸らす俺。

何だこいつ。

本当に何なんだこいつ。

こいつには人の心を読む力でもあるのだろうか……だとしたら拙いな。

架凪呀の前では下手に口を滑らせるどころか言葉を思う事も出来ないじゃないか。

「……とまぁ、何はともあれ。こんな辺鄙な町にも自衛隊が来るような世の中になったのは事実。近々戦争でも起こるのかしらね、これはその戦争の前兆なのかしら？」

「物騒な事を言うなよ」

「人間というのは本当に愚かな生き物よね。作って、戦って、壊して、また作って、また戦って、また壊して――それの繰り返しじゃない。もう少し利口に生きて行けないものなのかしら」

「それは仕方ないんじゃないのか？　人間って生き物はそういうものなんだから」

「真之乃秀は楽観的で良いわね。人間という生き物の性質を仕方ないで片付けられるなんて――本当に、羨ましいわ」

「でも、実際問題そう割り切るしかもう他に道は無いと思うぞ？　幾ら人間の性質について語った所で、人間に心がある限り、争いは起こり続けるんだから。だから、本当にこの世から戦争――そうだな、極々普通の日常で頻繁に起こっている喧嘩さえも抹消したいのなら、人間の中から心が無くなれば、多分この世から争いは一切無くなると俺は思うな」

「……心を無くす、か」

「そうね」と架凪呀は再度空を仰ぐ。

「せめて人間に心が無ければ――こんな想いは抱かずに済んだのかもね」

「……架凪呀？」

架凪呀は今何か意味深な事を言った気がする。

しかし――その言葉の真意を俺は理解する事が出来ない。

すると、俺がそんな思考を巡らせている内に架凪呀は小さな笑みを浮かべてこちらを振り返って来た。

「それじゃあね、真之乃秀。また今度会いましょう」

そう言って――架凪呀は俺の隣を通り過ぎる。

俺は後ろを振り返る。

それから、架凪呀の背中に向かってこう言った。

「あ、ああ……またな、架凪呀」

俺のその言葉に架凪呀はこちらに背を向けたまま手だけを挙げる。

そして、彼女の姿はそのまま通路の先の曲がり角を曲がって見えなくなってしまった。

8月6日？

架凪呀の姿が見えなくなるまでその場に立ち尽くしていた俺は――図書館に戻ろうとして足を止める。

何故なら、図書館の入り口からウリアが出て来るのが見えたからだ。

ウリアは図書館の入り口前で右方を振り返って――次に左方、もとい、俺の方を振り返って。

「あっ！」

という声を上げたかと思うと、猛スピードで俺の前に駆け出して来た。

「もう、秀！　どこに行っていたのよ、心配したでしょ！」

「あ、ああ、悪いな、ウリア。窓から友達の姿が見えたからさ、ちょっと声を掛けてたんだよ」

「もう、秀に友達が居る設定なんかどうでもいいから！」

「設定じゃねーよ！　俺にだって少なからず友達は居るっつーの！」

少なからずな、少なからず。

大事な事なので二回言わせて頂きました。

「とりあえず、今度から急に私の前から居なくならないでよね！

私だって心配するんだから！」

「あ、ああ……悪い」

「全くもう……秀ったら」

「ほら」と不意にウリアは俺の右手を掴んできた。

「行くわよ、秀。図書館に戻ってあなたは勉強、私は読書をしないと」

そして、そう言って歩き出すウリア。

勿論、ウリアの左手と俺の右手は繋がったままだ。

「そ、それは解ってるけど……あの、ウリア？　別に手は繋がなくてもいいと俺は思うんだが……」

「駄目よ。秀は少し目を離したらすぐにどこかに行っちゃうんだから」

「俺は飼い始めたばかりのペットか何かか。いや、あの、このまま図書館に入るとなると俺としても流石に恥ずかしいと言うか何と言うか」

「そんなもの、少し我慢すれば平気よ」

「そんな無茶な……」

「我慢しろ」

「まさかの命令形！？」

とまぁ、そんな会話を交わし合いながら――俺とウリアは図書館へと手を繋いだまま歩いて行く。

少しだけ雲に覆われた夏の青空。

甲高い音を響かせながらそんな空の中を自衛隊の戦闘機が飛んで行く。

それと同時に思い出したのは昔授業で習ったりドラマで観たりした戦争の情景と――先ほどの架凪呀の言葉。

（近々戦争でも起こるのかしらね、これはその戦争の前兆なのかしら？）

強ち、架凪呀の言葉は間違っていなかったのかも知れない――俺はそんな事を思った。

確かに、まだ戦争は起こっていないけれど。

自衛隊が派遣されて、天空を戦闘機が飛び、地上を戦車が蔓延っている時点で。

この町は戦争に巻き込まれている状態と殆ど同じに思えたからである。

――そして。

その戦争を食い止める事が出来るのは。

その戦争から――人々を護る事が出来るのは。

俺とウリア――この二人だけだ。

「……」

俺は再度右手でズボンの右ポケットに触れて――その存在を再確認する。

右ポケットに収められているのはとある古代兵器。

俺の力の――全てだ。

誰かを助け、護り、救済する為に手に入れた力の全てがここにある。

霧歌、架凪呀――そして、ウリア。

ウリアに引っ張られながら俺はその三人の顔を思い出す。

それから、周囲の風景を見渡した。

俺の目には当たり前だが――図書館の周りに広がる住宅街が映る。

そして、こちらも当たり前だがその住宅の中にはちゃんと住民が居る。

老人から赤ん坊まで――様々な世代の人々が生活している。

平和な日々を過ごしている。

平穏な日常を暮している。

「……」

護らなくては、ならない。

それらは決して崩壊させてはならないものなのだから。

人々を助ける。

町を護る。

あらゆる脅威から平穏な日常を救済して見せる。

俺はそう誓う。

俺は力を手に入れた。

手に入れて――しまった。

だとすれば、護らなければならない。

今までのように逃げ回っているだけでは済まされない。

力を手に入れたものは必然的に何かを壊すか、何かを護らなければならないのだ。

無論、俺は後者の人間だが。

――しかし。

それを苦には思わない。

だって、この力は――この古代兵器は。

元々それを承知で手に入れたものなのだから。

誰かを助け、護り、救済する為に。

手に入れた力なのだから。

奇奇怪怪

8月7日。

「秀。ちょっと秀」

この日、俺はウリアから体を揺り動かされる形で起床した。

半分寝惚けたまま携帯を手に取って時間を確認してみる。

何と、まだ朝の9時だった。

「オイオイ、ウリア……まだ朝の9時じゃねーか。早朝じゃねーか」

「何が早朝よ。午前9時は早朝じゃないから」

「何を言っているんだ……知らないのか？　夏休み中には、早朝の期間が午前10時にまで延びるんだぞ？」

「そんな決まりは存在しないわよ」

「それは違うな。お前がこの時代の法律に詳しくないだけだ」

「幾ら私でもこの時代にそんな馬鹿げた法律が無い事くらい解るから」

「それでウリア……お前は一体全体こんな早朝に何をしに来たんだよ」

「……あくまで早朝と言い張るのね」

「何だ、俺に添い寝をしに来たのか？　仕方ないな、ほら、ベッドの中に入れ――ぐっ！」

俺が体をずらしてウリアの寝られるスペースを作っている最中に脇腹を蹴られた。

無論、犯人は彼女である。

「お、お前……俺からの厚意を無下（むげ）にしやがって……！」

「今の言葉を秀が“厚意”と言い張るのなら、あなたはその二字熟語の意味をもう一度辞書で調べ直した方が良いと思うわ」

「全く……それで？」

俺は蹴られた脇腹を擦りながらベッドの上に体を起こした。

「実際の所、俺に何の用だ？」

「お腹空いた」

「そうか。それじゃあ俺は二度寝させて貰うな」

「何でよ！」

ベッドに倒れ込んだ瞬間、ウリアの声が上から降って来た。

「いや、だって、予想以上にどうでもいい理由で起こされたもんだ

から」

「どうでもいいって何よ。私にとっては死活問題なのよ、空腹というものは。『死』の次に怖いものだと私は自負しているわ」

「自負するな。ていうか、お前の中で『空腹』がどれだけ過大評価されているんだよ」

まぁ、確かに空腹は怖いものではあるが……。

「何だよ……下に行って勝手にカップラーメンでも作ればいいだろ」

「秀こそ何を言っているのよ。私がカップラーメンの作り方を会得していると思う？」

「威張って言うな。それから早く作り方を会得してくれ、いい加減に、お願いだから」

「ていうか、例え作り方を知っていたとしても、この腕じゃ上手く作れないわよ」

……そうだった。

そう言えばそうだった。

ウリアの右腕は今使う事が出来ないのだ。

「……解ったよ」

そう言いながら俺は渋々ベッドから再度起き上がる。

薄暗い部屋の中――締め切られたカーテンの隙間からは太陽の光が射し込んでいた。

それから、俺は口に手を当てて大きな欠伸をする。

眠かった。

想像以上にまだ眠気が俺の体の中に滞在していた。

「……眠い」

「だらしないわねぇ、どうしてそこまで眠そうにしているのよ」

「それじゃあ逆に聞くが、どうしてお前は全然眠たそうじゃないんだよ。昨日は俺と一緒に夜更かしをしていたくせに」

そうなのだ。

ウリアは昨日俺の部屋で図書館から借りて来た小説の続きをずっと読んでいたのである。

右腕が仕えないのにも関わらず、何やら片方のページを足で押さえたりして器用に読み熟(こな)していたのを覚えている。

そして、そのウリアが寝たのも俺と一緒の時刻だった。

殆ど同じ事をやっているのに……一体全体何が原因でここまで朝の眠気の度合いに差が開いてしまうのか。

「基礎体力の違いじゃないの？　体力がある人とない人では、朝きちんと起きれる度合いが変わって来ると言うわよ」

「なるほど……基礎体力の違いか」

数多の戦場を駆け抜けてきた少女と平和すぎる日常を歩いてきた少年とでは……まぁ、基礎体力の違いは歴然としているのだろう。

決して認めたくは無いが。

まぁ、認めざるを得ないのが現実なのだけれど。

「確かに、それは納得せざるを得ない説明だな。ウリアにしては中々良い説明をするじゃないか」

「まぁね。語り部にしては口下手な秀に比べたら凄いものでしょ？」

「朝からメタな発言をしてんじゃねーよ」

「秀だって、結構メタな発言をするじゃない」

「それはまぁ……そうだけど」

「それで、メタボリックな真之乃秀さん」

「誰がメタボリックだ！」

それ以前に、メタな発言の“メタ”はメタボリックの略称じゃないからな！

「しかし……基礎体力云々（うんぬん）が関係している事が解ったけれど、何にしてもまだ眠いな」

「どれだけ眠いのよ……堕落して、荒廃して、崩壊した普段の秀の日常が手に取るように解ってしまいそうだわ」

「確かに堕落している事は認めるが、流石に俺の日常であっても荒廃や崩壊レベルにまで至っていないからな？」

「でも、秀の存在自体は既に荒廃して崩壊しているわよね？」

「オイ、それは一体全体どういう意味だ」

「ていうか、お腹空いたんだって。ねぇ、秀」

「解ったよ……下に降りてろ、着替えて来るから」

そう言いながら俺はベッドを下りる。

面倒だが……まぁ、ウリアの為なら行動する事が出来る。

……って、あれ？

そういえば、俺はウリアに対していつからそう思えるようになったのだろうか。

最初はウリアにカップラーメンを作る事だけでも億劫（おっくう）に思えていたのだけれど……。

うーん。

まぁいいか。

そこまで深く考える事でも無いだろう。

◆◆◆

例の如く、カップラーメンを作った俺はリビングで待つウリアにそれを持って行く。

ちなみに、俺の分は作らなかった。

眠くて面倒だった事もあるが……何分（なにぶん）、俺は普段朝食を食べないタイプなのである。

その辺も俺の基礎体力に関係しているのかも知れないなぁ……よく考えないと。

「秀、あーん」

「ハイハイ……ほら」

俺はウリアに渡したカップラーメン（勿論種類はシーフードである）の容器から麺を摘み上げる。

「何度も言うけど熱いからな、気を付けろよ」

「ハーイ……あむ」

「美味いか？」

「うん、美味しい」

「そうか、それは良かった」

「秀が原材料から作った訳じゃないけれどね」

「うるせえ。ていうか、それを言うならお前もカップラーメンを作ってからにしろ」

「解ったわよ。今度から努力するから」

「本当だろうな……」

今までの事を考えるに努力するとは思えないのだが。

「ていうか、そんな事はどうでもいいから、早く食べさせてよ」

「それ以前に、この状況も本当に何なんだろうな、一体」

「何が？」

「俺がお前にカップラーメンを食べさせているという状況だよ」

色々と何か違和感を覚えざるを得ないのだが。

「別に、何もおかしくはないでしょ。怪我人を介護していると思えば、これくらい普通だと思うけど？」

「いや……まぁ、それはそうなんだが」

何と言うか……そういう事を言いたいんじゃなくて。

「ねぇ、秀」

「……まぁ、いっか」

考えても何も変わらなかったので俺はとりあえず勝手に納得する事にした。

違和感を覚えざるを得ない常識が存在するとするならば、それに順応していくしか他に道は無いのである。

◆◆◆

俺の手を借りながらカップラーメンを食べ終えたウリアは――眠ってしまっていた。

いや、食べた直後にすぐ倒れてしまった訳では無いのだけれど。

ウリアはカップラーメンを食べ終えてリビングのソファーで昨日借りて来た小説の続きを読んでいたのだが……。

気付けば、ウリアはソファーで寝息を立てていた。

昨日の夜更かしがやはり響いていたのか、それとも今までの様々な疲労が堪っていたのか……。

まぁ、何にしてもウリアが昼寝をしているのは意外と珍しいもので。

いつもは起きてテレビを観ているだけだからなぁ。

こうしたウリアの昼寝姿は地味に珍しかったりする。

「……」

そして、そんな稀有なウリアの寝姿を目の当たりにした俺は徐にポケットに手を突っ込むと携帯を取り出してカメラ機能を作動させて――。

「っていやいやいや、待て。何をやっているんだ、俺は」

危ない危ない……危うく盗撮を決行してしまう所だったぜ。

ていうか、そもそも一緒に住んでいる家族を勝手に撮影するのは盗撮になるのだろうか？

まぁ、正確に言えばウリアは家族じゃないからなぁ……。

そう言えば、ウリアには家族が居るのだろうか。

俺は何となくそんな事を思った。

「しかし……えらく無防備な寝姿だな」

人の事を普段変態扱いしている割には本当に無防備な寝姿である。

スカートも少し捲り上がっているし、制服の裾からお腹見えてしまっているし。

いつぞやのあのピンク色を思い出す――っていやいや、何でも無い。

「ていうか、前にもあんな事があっておいて少しは気を遣えばいいのになぁ、こいつも。全く、こいつは本当に馬鹿――」

パシャッ。

……おや。

何やら今変な音が聞こえたような気がしたんだが。

何かカメラのシャッター音のような……気のせいだろうか。

そんな事を思いながら俺は携帯へと視線をやる。

そこにはいつの間にか撮影されたウリアの寝姿の画像があった。

「……」

どうやら、馬鹿なのは俺の方だったらしい。

俺は何て馬鹿なんだ。

これじゃあ、ウリアや霧歌や架凪呀辺りから変態扱いされても何も言えないじゃないか。

全くもう……。

「……」

……プライベートフォルダに保存しておけばバレないか。

その考えに至った俺はプライベートフォルダにその画像を保存すると厳重にパスワードを掛ける。

馬鹿とでも変態とでも何とでも言うがいい。

そんな事を恐れて目の前のチャンスを逃すよりかは幾分マシだ。

俺はそう思う。

……多分、だけど。

そして。

俺が画像を保存し終えると同時にインターホンが鳴り響いた。

「ハーイ」

そのインターホンに声を返しながら俺は携帯をポケットに仕舞うとリビングを出た。

玄関に着いた俺は玄関扉の鍵を開けてその扉を押し開ける。

扉の向こう側に居たのは――霧歌だった。

◆◆◆

「ウリアちゃん、寝てるんだ」

リビングに入って霧歌が発した第一声はそれだった。

「ああ、何か小説読んでたら眠くなったらしくてさ。気付いたら寝てたよ」

「……秀ちゃん」

「何だ？」

「ウリアちゃんが寝ている事に託(かこつ)けて何か変な事をしていないよね？」

「……し、してないよ？　ていうか、変な事って一体全体何だよ」

「そうだねぇ。例えば、寝ている間に体を触るとか、寝ている間に胸を揉むとか、寝ている間に――盗撮するとか」

「し、してない、してないって、そんな事。流石の俺でもそんな事はするはずないだろ」

「そう？　それならいいんだけど」

そう俺に笑みを見せた霧歌はウリアが寝ているソファーの方へと歩き出す。

そして、そんな霧歌に気付かれないように俺は安堵の息を吐いた。

危なかった……。

マジであいつは読心術を持っているのではないだろうな。

俺の心の中を読んでいるかのような喋り方をするよなぁ、霧歌って。

まぁ、それだけ俺の事を理解してくれているって事なんだろうけれど。

……しかし。

よく頑張った、俺。

よく最後まで隠し抜いた、俺。

バレたら死ぬぞ、俺。

「秀ちゃん」

「は、ハイッ！」

急に霧歌に呼ばれたものだから、思わず声が裏返ってしまった。

何をやっているんだ、俺。

それじゃあ逆に怪しまれてしまうだろうが。

「な、何だ？」

「お昼、食べた？　もうそろそろ正午だけど」

「い、いや、まだだな」

「そっか。それなら、私と一緒にお昼食べない？　材料買って来たから」

「ああ……いつも悪いな、霧歌」

「だから気にしないでって。私が好きでやっている事なんだから」

「お母さんはいつも仕事で居ないし」と霧歌は早速キッチンへと向かい出す。

「一人でご飯を食べると言うのは――中々寂しいものなんだよ。少し前の秀ちゃんなら、私の気持ち、解ってくれたんじゃないのかな

？」

「まぁ……そうだな。確かにそこまで深く考えた事は無くて、今はウリアが一緒に住んでいるから比較的大丈夫だけど――時々、誰も居なくて寂しいって思う時があったな、昔は」

「その点については本当に秀ちゃんが羨ましいよ。良いなぁ、秀ちゃんは。ウリアちゃんと一緒に住む事が出来て」

「そうか？　一緒に住んでみたら、何もしなくてただ自堕落にしているだけで、未来少女と魔法少女という事を引いたら何も残らないような奴だぞ？」

「こーらっ、秀ちゃん。寝ている人の陰口を叩かない」

「俺は本当の事を言っただけだぜ」

「もう……秀ちゃんったら。でもまぁ、今の言葉で秀ちゃんが普段どれだけウリアちゃんに手を焼いていて、ウリアちゃんをどれだけ大切にしているのかが解った気がするよ」

「いやいや、前者はともかく後者は解らないだろ」

「私には解るんだよ。だって、私は秀ちゃんの幼馴染なんだよ？」

「幼馴染は関係無いと思うが……」

幼馴染は幼馴染の心を読む事が出来ると言うのか。

それならば、霧歌が時折俺の考えている事を手に取るように把握し

ている事も理解できるが……。

ていうか、それがもし本当ならば俺も霧歌の考えが解るはずなんだよな。

しかし、霧歌の考えは出会って既に１０年以上が経つけれど――よく解らない所がまだ数々ある。

何と言うか、霧歌の考えは常識を逸しているんだよなぁ。

エリートである人の思考回路は常人には理解する事など到底不可能な構造をしているのだろうか。

「でも、本当に羨ましいなぁ。私もこの家に住もうかな」

「えっ、マジで！？」

「じょーだん。だから、そんなあからさまに喜ばないで」

「何だ、冗談かよ……」

「そして、そんなあからさまに残念がらないで」

そんな事言ったってなぁ……。

だって、物凄く期待してしまったんだもの。

「だって、秀ちゃんと一緒に住んだら何をされるか堪ったものじゃないからね」

「そういえば、霧歌の中で俺の信頼は地に着きそうなんだったか」

「秀ちゃんと一緒に住むのなら、毎日が変態行為の嵐だと覚悟しておかないと」

「オイ、流石の俺でも毎日変態行為はしねーよ」

「本当に？」

「当たり前だろ。三日に一度に抑えるよ」

「それでもかなりの頻度だね……」

苦笑する霧歌。

「ていうか、“抑える”って言っているという事は、三日に一度でも秀ちゃんはまだ本気を出していないんだね」

「ああ、勿論だ。本気を出した俺は神をも凌駕する」

「一体全体どんな事柄で？」

「でもまぁ」と霧歌。

「私は秀ちゃんの家に住んだりしないからね。余り期待されたら困るよ、秀ちゃん」

「解ってるよ。ウリアと違って、お前にはちゃんと家があるもんな」

「……でもさ」

「えっ？」

「でも……それでももし、私がこの家に住むって言い出したら」

「そう言い出したら」と霧歌は俺を振り向いた。

「秀ちゃんは……私のその行動をどう捉えるのかな？」

「どう捉えるって――それは勿論、嬉しいに決まってるだろ」

「それは、私をちゃんと心の底から受け入れてくれるという事なのかな？」

「当たり前だろ。他でも無い霧歌だぜ？」

「……そっか」

すると、霧歌は俺から視線を逸らしつつ静かに微笑んで。

「……でも、今のは例えの話だから。私は絶対にそんな事は言わないけどね」

「だから、解ってるって」

「……うん、それじゃあ、お昼ご飯作って来るね」

「あっ、手伝うよ。それ以前に俺に何か手伝える事があるならだけど」

「アハハ、ありがと、秀ちゃん。それじゃあねぇ、えーっと……うーん」

そう言って――顎に人差し指を当てて暫し考えて霧歌は先ほどのようにまた苦笑を浮かべてこう言った。

「そ、それじゃあ……うん、何かしら手伝って貰おうかな、秀ちゃんには」

「霧歌……俺に出来そうな仕事が無いのなら無いでハッキリ言ってくれていいんだぞ？」

霧歌はそう言って――明らかに俺を気遣ってくれていた。

何だか割とマジで泣きそうになった。

◆◆◆

一応俺は頑張った。

とりあえず、頑張った――何かしらを、頑張った。

その頑張りだけはどうにか認めて欲しい。

幾ら頑張った所で結果が全てだとかそんな事は言わないで欲しい。

「その……秀ちゃんは、頑張ったよ？」

「止めてくれ、霧歌。本当に泣いてしまいそうだ」

「え、えっと……しゅ、秀ちゃんくらいの男の子は普通料理なんて出来ないものだよ？」

「それじゃあ、霧歌は料理の出来ない俺と料理の出来る俺とじゃどっちが良いんだよ」

「え、えっと……料理が出来る方、かな？」

俺はその場に膝から崩れ落ちた。

「しゅ、秀ちゃん！？　だ、大丈夫！？」

「い、いや……大丈夫だ。意外と心に来るものがあったが――大丈夫だ、気にするな」

相変わらず、霧歌は自分の思っている事を素直に述べてくれる。

そのお陰で助かる事もあれば、今みたいに致死量のダメージを負う事もあるのだけれど。

「大体……野菜の方がいけないんだよ、特に人参（にんじん）。何なんだよ、人参って。あれってどこからどこまでが一体全体皮なんだよ。訳が解らねえよ」

「ま、まぁ、確かに……皮を剥いた事が無い人にとっては、人参ってどこまでが皮なのか解らないよね」

「霧歌ぁ……俺、泣いてもいいかなぁ」

「な、泣かないで、秀ちゃん。ほら、一緒にテーブルにカレー運ぼう？　ね？」

ちなみに、俺と霧歌が作った朝食のメニューはカレーだった。

まぁ――殆ど俺の出番が無かったから、正確に言わせて貰うと霧歌の作ったカレーなのだが。

「よしよし。ほら、立てる？　秀ちゃん」

「うん……ありがとう、霧歌」

俺は霧歌に手を引かれながらその場に立ち上がる。

その結果、二重の情けなさを感じる事になってしまったのだが――。

今となっては、最早それは後の祭り以外の何物でも無かった。

◆
◆
◆

「しっかし……気持ち良さそうに寝てるよねー、ウリアちゃん」

その霧歌の言葉の通り、昼食を食べ終えてもウリアが起きる事は無

かった。

未だにソファーの上で横たわったまま――ウリアは静かに寝息を立てている。

「本当にな。普段は色々と五月蠅（うるさ）い奴だけど、静かになると中々可愛い奴だよな」

「おっ、今思わず可愛いって言っちゃったね、秀ちゃん」

「口が滑ったんだ。ウリアには言うなよ、絶対にからかって来るから」

「ハイハイ、言わないよ」

「そんな事言って、霧歌。お前、ウリアに俺がウリアを心配してた事を話したんだろうが」

「えっ？　話してないよ？」

「そうなのか。まぁ、霧歌がそう言うならそうなんだろうな――ってオイ」

そんな真顔で否定するなよ。

危うく信じそうになったじゃねーか。

すると、俺の言葉に霧歌は苦笑を見せた。

「そっかぁ、ウリアちゃん話しちゃったんだね。でもまぁ、秀ちゃ

んの好感度の上昇に一役買ったんだから、別に良いじゃない」

「まぁ、それは確かに有り難い話だが……」

「有り難いんだ」

「う、うるせーな。何だそのニヤニヤとした顔は」

「べっつにー」

しかし、依然としてニヤニヤとした笑みを浮かべている霧歌。

一体全体何だと言うんだ。

「あっ、そういえばさ、秀ちゃん」

「何だ？　霧歌」

「秀ちゃんって――その、未来の秀ちゃんから、世界を護る為に力を授かったんだよね？」

「まぁ、授かったと言うか、今更ながら覚醒したって感じだな。それがどうかしたのか？」

「う、ううん、何でも無いの」

「何でも無いんだけど……」と苦笑と共に霧歌は俺から視線を逸らす。

「何と言うか、その……羨ましいなぁ、って」

「羨ましい――のか？　それはまぁ、無いよりはマシだろうけどさ。有ってもそこまで得するような能力じゃないぞ？」

「違うの。そういう意味での羨ましいって事じゃなくて」

「それじゃあ……どういう事なんだ？」

「何か……うん、そうね。正確に言えば――何だか、私だけ置いてけぼりにされているような、どうしてもそんな感じを否めないと言うか、何と言うか」

「置いてけぼり？　どうして霧歌だけが置いてけぼりになるんだよ」

「だってほら、秀ちゃんやウリアちゃんと同じで、私も少なからずこの一件に関わってしまっているじゃない？」

「まぁ、俺が関わらせてしまったと言うのが正しいんだろうけどな」

「そう言うのはもう言いっこ無しだよ、秀ちゃん。それに、私から望んで巻き込まれた事を選んだんだし」

「それでね？」と霧歌は続ける。

「私が秀ちゃんやウリアちゃんから置いてけぼり感を覚えたのは――その、私だけこの一件に関わっているくせに、何の力も持っていないから、なの」

「何でそんな事で置いてけぼり感を覚えてしまっているんだよ……」

「そ、そんな事じゃないよ。秀ちゃんやウリアちゃんが戦っているのに何も出来ないなんて――そんなの、何だか悲しいじゃない」

「……まぁな」

霧歌の気持ちは痛いほど解る。

何故なら――俺も少し前までは霧歌と同じ気持ちをずっと味わっていたからだ。

俺の為にウリアが戦っているのにも関わらず、その護られている俺

はただその場に立ち尽くしているだけで――何も出来ない。

ウリアに何もしてやれない。

目の前でウリアが傷付いていたとしても、少し前の俺なら何も出来なかった。

――けれど。

今は、違う。

今はウリアと一緒に戦う事が出来る。

もうただ見ているだけの俺じゃない。

傍観者では無く、俺は当事者になってしまった。

だからこそ――元々傍観者の立ち位置に居た俺だからこそ。

霧歌の気持ちは――本当に、痛いほど解った。

「霧歌の気持ち……解るよ。俺も少し前まで霧歌と同じだったから」

「でも……もう、違うんだよね。秀ちゃんはもう私と同じ立ち位置には居ない」

「……ああ」

「はぁ……まさかなぁ。秀ちゃんに何かに対して追い抜かれる日が来るなんて、夢にも思っていなかったよ」

秀ちゃんは凄いね――と霧歌は俺に笑みを見せた。

「私には出来ない事を、難無く熟しちゃう」

「それはこっちの台詞だよ。お前の方が、俺よりも遥かに色々な事を熟せるじゃないか」

「それは確かにそうかも知れないけれど――それでも、そんな私でも出来ない事は多々あるんだよ、秀ちゃん」

秀ちゃんに出来て私には出来ない事もある。

逆もまた然りだけどね――と霧歌は言う。

「それでも……やっぱり、凄いのは霧歌の方だ。勉強においても、料理においても、その他様々な事においても――俺よりも、霧歌の方が才能は上手なんだからさ」

「そう言ってくれると本当に助かるなぁ。自分の無能さを呪わなくて済むよ」

「オイオイ、霧歌が無能なら俺は一体全体何なんだよ」

「うーん……私と同じで、無能なんじゃないのかな？」

「それは褒められているのか、それとも貶されているのか、一体全体どっちなんだよ」

「意味的には……貶しちゃってる感じかな？」

「最終的に俺は貶されていたのかよ」

さり気無く俺を罵倒する霧歌なのであった。

「でも……それについては、余り気にする事は無いと思うよ？」

「どうしてだ？」

「だって、私の考えでは――勿論私自身も含めて、人は皆無能だと思っているから」

「これはまた……霧歌は平然と何か深そうな事を言うよな」

「深くは無いよ。私はただ自論を述べているだけなんだから」

人は皆無能だよ――と霧歌は言う。

「例えば、世界屈指の物凄い会社の社長さんでも、１００メートルを１０秒以内で走れる訳が無いよね？　いやまぁ、走れる人も居るかも知れないけれど、その人でもきっと――他に何か必ず出来ない事がある」

誰にでも出来ない事はある。

だからこそ、人は皆無能なんだよ――と霧歌は言った。

「確かになぁ……その霧歌の言葉通りに言えば、逆もまた然りなのか？」

「人は誰でも有能なのか――って事？」

「ああ」

「それはまぁ……うん、そうなんだけど。でも、それは違うかな。人は確かに誰しも何かしらの才能を持ってはいて、誰しも何か一つは出来る事がある」

「でもね？」と霧歌は人差し指を立てて続ける。

「それでも――人が出来ないと出来る事の差は、悲しいくらいに歴然としているの。幾ら才能を沢山持っている人であっても、それでも……出来ない事の方が、“無能”の方が――圧倒的に多いだろうからね」

「そうだなぁ……確かに、霧歌の言う通りだな」

「でしょう？」

「……でもさ、霧歌？」

「うん？」

「どうして俺達……こんな真面目な話をしているんだろうな」

「うーん……何でだろうね？」

そう言って苦笑する霧歌。

「何かこう、もっと楽しい話をしようぜ、霧歌」

「そ、そうだね。折角ウリアちゃんも無事に退院出来た事だし、もう少し楽しい話をしないとね、物語的にも」

「霧歌、そう努めるのは良い事かも知れないが、最後の言葉は余計だからな？」

「それじゃあ、何の話をしようか？　最近話題のＴＰＰの話でもする？」

「止めてくれ、霧歌。霧歌はその話で盛り上がる事が出来るかも知れないが、俺は盛り下がって行く一方なんだよ」

「駄目だよ、秀ちゃん。最近話題になっているニュースくらい、ちゃんと観ておかないと」

「ていうか、霧歌。俺からも一言言わせて貰うが、この時間軸ではまだＴＰＰに日本が参加表明を出す事は報道されていないからな？」

「まぁ、この世界は設定上で言う平行世界だからね」

「上手い事言ってんじゃねーよ」

「別の世界線だからね」

「だから上手い事言ってんじゃねーって」

その後も、俺と霧歌はウリアの寝ているリビングで会話を重ねたのだった。

しかしまぁ、俺は霧歌の出す話題に付いて行くだけで精一杯だったのだけれど。

◆　◆　◆

「さて、と……私はそろそろ帰るとするかな」

「そっか。それじゃあ、玄関まで見送るよ」

「ありがと、秀ちゃん」

互いに椅子から立ち上がった俺と霧歌は二人して玄関へと向かった。

「結局今の今まで起きなかったね、ウリアちゃん」

玄関にて、靴を履きながら霧歌は言った。

「ああ、日頃の疲れでも溜まっていたんじゃないのか？」

「それか、秀ちゃんが何かウリアちゃんに酷い事をしたのか」

「オイ」

「アハハ、冗談だよ、冗談」

「それじゃあね」と食材等を運んで来た鞄を片手に霧歌は玄関扉を押し開ける。

「また来るね、秀ちゃん」

「ああ、またな、霧歌」

俺は霧歌に手を振る。

霧歌も俺に手を振り返しながら――玄関扉を閉めて帰って行った。

「……さて、と」

霧歌を見送った俺はリビングへと戻る。

ソファーでは相変わらずウリアが寝息を立てていた。

「何で今日に限ってお前はそこまで寝ているんだよ……」

そう呆れながら俺はウリアが寝ていないソファーに腰を下ろすとテレビの電源を入れた。

リモコンによって音も無くテレビに明りが灯り――そこに映像が映し出される。

偶然そこに映し出されたのはとある夕方のニュース番組だった。

女性のニュースキャスターが止め処なくニュースを読み上げて行く。

俺は更にリモコンを操作してテレビの音量を下げた。

「う……」

すると、そんな微かな呻き声が聞こえて来た。

それはウリアのものだった。

俺はウリアの方を振り返る――それと同時にウリアが寝返りを打った。

彼女の寝顔がこちらを向く。

その際――ウリアの目から透明な雫が流れ落ちた。

「……えっ？」

見間違いかと思った。

しかし、涙の落ちたソファーがゆっくりと濡れて行く事によって――俺はその涙が見間違いでは無い事を知る。

ウリアが、泣いていた。

「……ウリア？」

そう呟きながら俺は少し前にもウリアが何やら夢に魘（うな）されていた事を思い出す。

そして今も――ウリアはおそらく夢に魘されているのだろう。

悪夢を見ているのかも知れない。

「……」

そんなウリアを観て、俺はとりあえず立ち上がる。

それから、ウリアが眠っているソファーの傍にしゃがみ込んだ。

何かが出来るとは思っていない。

それ以前に、俺は何も出来ないだろう。

悪夢に魘されている人をどうやって救えば良いと言うのか。

「折角力を手に入れても……こういう事には使えないな」

俺はそう言いながら思わず自嘲的な笑みを漏らしてしまった。

少なからず無力を感じる俺。

きっと――これが先ほど霧歌の言っていた“無能”なのだろう。

なるほど確かに……今の俺は途轍もなく“無能”だ。

悲しいくらいに、俺には何もする事が出来ない。

俺はウリアに何もしてやれない。

「……う」

すると、またウリアの口が動く。

何を言っているのだろうか――そう思いながら俺はウリアの口元に耳を近付けてみた。

「……しゅ、う」

「！」

紡がれたその言葉に俺はハッと目を見開く。

ウリアは――俺の名前を呼んでいた。

俺を、呼んでいた。

「……」

そして、俺は呆然とウリアから顔を離す。

「……秀」

すると、今度はハッキリとウリアの口から俺の名前が零れ落ちた。

俺に縋るような、俺を求めるような――そんな声だった。

「……」

――そして。

ウリアから名前を呼ばれた事に俺はおそらく――“嬉しさ”を感じたのだろう。

静かに微笑んだ俺はウリアの頭を撫でてやった。

「……どうした？　ウリア」

そう問いかけながら俺はウリアの左手へと右手を持って行く。

すると、ウリアはその俺の手を握り返してくれた。

その瞬間――ウリアの顔に安堵したかのような微笑が浮かんだ。

「……」

それから、そのウリアの微笑を見据えながら――俺は思う。

これは俺の予想に過ぎないのだが……きっと、ウリアには何か秘密がある。

俺や霧歌にはまだ話していないような――そんな秘密が存在する。

話していないだけなのか、話さないだけなのか。

それとも話したくないのか――そのどれかは解らないけれど。

何となく、ウリアは俺達に何かを隠している。

そんな感じが、する。

それは――俺や霧歌が少なからずウリアにまだ完全に信頼されていない証拠なのだろうか？

それとも、信頼していたとしても話せない事柄なのか。

それは解らない――だけど。

ただ、一つだけ言える事は。

少なくとも、俺はウリアを心の底から信頼している――という事だ。

自分でも、ここまでウリアに信頼を置いている事を驚くほどに、俺はこいつの事を信頼している。

以前までは――初めて出会ったあの7月27日の時点では信じられないほどに。

俺はウリアを、信頼している。

ウリアは今まで俺を数々の脅威から護ってくれた――それもその信頼の原因の一つなのだろうけれど。

多分、俺がここまでウリアを信頼している理由を述べるとするならば。

それは、今までウリアと過ごしてきた――時間だ。

１２日間――まだウリアと初めて出会ってから二週間も経っていないけれど。

その１２日間という時間をウリアと一緒に過ごして来て。

正直……俺は楽しかったのだろう。

「……本当に、驚きだな」

俺は苦笑と共にそんな言葉を漏らす。

しかし、本当に俺は驚いている。

俺がウリアと過ごしてそんな感情を抱いているなんて。

だって、初めて出会った時の印象が最悪だったもんなぁ、こいつ。

未来少女に加えて魔法少女だぜ？

今だって設定が多いって思う時が時々あるくらいだもんなぁ。

１２日前の俺は――細かい心情は覚えていないけれど。

多分、と言うか確実にこいつは信用できないって思っていると思うな。

ウリアの事を単なる痛い奴としか捉えていなかっただろう。

だから――ウリアと一緒に居て楽しいと思えている自分に俺は少なからず驚いているのである。

「……」

何となく、俺はウリアの頬を人差し指で押してみた。

弾力のある柔らかく白い肌。

俺がその頬を何度か突いてみると――ウリアは擽ったそうに顔を顰めた。

「う……う、ん」

そして、ウリアはそう呻き声を上げながら寝返りを打って俺に背を向けてしまった。

「……落書きでもしてやろうかな」

おでこに『肉』とか。

ベタ過ぎるだろうか？

それじゃあ、頬に渦巻きを描くとか――うーん。

「駄目だな……どれもこれも在り来たりなアイデアばかりだ」

何かもっと斬新な落書きは無いかな――と。

俺がそんな事を呟いていた時だった。

テレビから先ほどのニュースキャスターの声が聞こえて来たのである。

今の今まで――音量を下げたからなのか、一向に気にならなかったその声。

その声を俺の耳が捉えたのは。

その読み上げたニュースの内容が――引っ掛かったからだった。

奇奇怪怪？

（――今日の昼頃、●●町の住宅街で、身元不明の外国人男性が殺されているのが発見されました）

そのテレビから聞こえて来た女性の声に俺は思わずその画面の方を振り向いていた。

そして――俺の視線の先に映ったテレビ画面の奥で女性のニュースキャスターは続ける。

（警察からの情報によると、その殺された男性は身元を特定できるものを一切所持していなかった模様です）

「身元不明の……外国人男性？」

（男性の胸には拳銃で撃たれたような痕がありましたが、どの銃弾の口径にも穴の大きさが合わず、また、背中まで貫通している事から、男性は拳銃に非常に似た武器で殺された可能性があると警察は見解しています）

「……」

どの銃弾の口径にも合わない――体に空いた穴。

体を貫通するほどの威力を持つ武器。

そして、何よりも。

俺の中で引っ掛かった言葉は――その殺された男性が“身元不明”だという事。

身元不明だという事は、それはつまり――飛躍した表現をするならば、この世界に存在しないという事だ。

「……まさか」

（なお、この●●町には先日謎の巨大な龍のような生物や一角獣のような生物が出現しており、この男性はその事件に何らかの形で関わっていたのではないかと思われています）

（そして）とテレビ画面の向こう側でニュースキャスターは続ける。

（その男性の容姿ですが、金髪のオールバックにハーフフレームの赤い縁の眼鏡を掛けていたようで、格好は黒い軍服のような服装をしていたようです）

「！」

ニュースキャスターの口からその言葉が紡ぎ出された瞬間――俺は確信する。

金髪のオールバックに、ハーフフレームの赤い縁の眼鏡を掛けていて。

黒い軍服のような、服装。

ここまでの偶然が存在するのだろうか――いや、存在しないだろう。

有り得ない事ではないが、しかし、この状況ではこんな偶然は有り得ない。

その男に数日前に出会ったばかりの俺ならば――尚更、偶然ではないとハッキリと断言できた。

何故？　どうして？

どうして――あの男が殺された？

俺の頭の中をそんな疑問が過ぎった。

とりあえず、そんな疑念が渦を巻いた。

しかし、考えてみても答は出なくて。

それ以前に、今は考えるだけで無駄だった。

俺はテレビ画面を見据える。

すると、ニュースキャスターは既にそのニュースとは別のニュースを読んでいた。

けれど、そのニュースは――そのニュースキャスターの声は俺の耳には届かない。

様々な疑念によって聴覚器官がおかしくなってしまったのか。

いつ、あの男が殺されたのかは――解らない。

それは解らない。

――だけど。

今日、この日、8月7日。

驚くべき事に――それ以上に、奇妙な事に。

8月5日に俺とウリアを襲った張本人。

『科学発展側』の『強硬派』のメンバーの一人である――オッド・サスペクター。

彼の死を、俺は確認した。

「……」

薄情かも知れないが、俺はそのオッドの死について――何の感情も抱かなかった。

いや、敵の死に対して悲しみの感情を抱くという事自体が間違っているのかも知れないのだけれど。

敵味方以前に――オッドは俺と同じ人間だったから。

この世で生きている誰かが死んでしまった時には何かしらの感情を抱くのが人というものなのだろう。

でも、俺は彼の死に対して何の感情も抱かなかった。

きっと、彼が俺の敵であり、彼が俺と同じ人間だったからなのだろう。

敵であるという事実と人が死んだという事実が互いに相殺し合って——俺の感情を心の奥へと押し込んだのだ。

けれど、何の感情も抱かない代わりに、俺はそのオッドの死に妙な違和感を覚えた。

奇妙な感覚を——感じざるを得なかった。

どこか変で、何がおかしいのかを一概に説明しろと言われたら——それは出来ないけれど。

何となく、俺はそう感じた——感じざるを得なかった。

「……」

それから、俺はそのニュース番組が終わってもテレビ画面を呆然と見つめ続けた。

テレビから聞こえてくる音が俺の左耳から入って——右耳へと抜けて行く。

——そして。

俺が漸く我に返る事が出来たのは。

「んっ……ん？　いつの間にか寝ちゃってた……秀、お腹減った。何か作って」

半分寝惚けた声色でウリアが今の雰囲気に似付かない言葉を漏らした後だった。

「この前私達を襲った奴が殺された！？」

素っ頓狂な声を上げるウリア。

ちなみに、現在は少しばかり時間的には早い夕食中であり――まぁ、夕食と言ってもウリアしか食べていないのだけれど。

例の如く、カップラーメンであり、また例の如く、俺がウリアにそれを食べさせているのであった。

「それ、本当なの？」

「いや、まぁ、俺もニュースで聞いただけだし、そうと決まった訳じゃないんだけど……でも、多分外見からしてそうだと思う」

「誰が殺したのかしら……ストレンド？」

「あいつは敵だけど――でも、味方を態々殺すような奴じゃないと思うんだけどな」

「でも、あいつこの前私と戦った時に言っていたわよ？　『強硬派』の人達を代わりに私達が殺せって」

「どうしてそんな事を？」

「何か、『強硬派』の人達よりも先に私達が殺されるのが我慢ならないんだって」

「それはまた真っ当な理由だな……」

俺は皮肉をたっぷりと込めてそう呟いた。

あいつの事だから、この俺達の会話もどこかで聞いているのかも知れない。

確証は無いが。

「でも……本当にあの男が殺されたとしても、まだまだ気を抜けないわね」

「そうだな。『強硬派』と言うからにはまだ他にもメンバーが居るはずだ――でもまぁ、もし本当にオッドが殺されていたとしたら、その『強硬派』の連中も下手に動く事は出来ないだろうけどな」

「あら、秀にしては中々理解が早いじゃない」

「お前は素直に人を褒めるという事を知らないのか」

まぁ、何はともあれ。

何だかんだで――気を抜けないというのは本当の事で。

先ほども言ったように『強硬派』の奴等は今回の謎の事件によって下手に動く事は無いだろうけれど。

それでも、『強硬派』はあんなオッドのようなメンバーが勢揃いしているような派閥（はばつ）だ。

いつ、どこで、今回のような過度な騒ぎを起こしてくるかは解らない。

そもそも、オッドを殺したのは『強硬派』のメンバーである可能性も否めないのだ。

あんな真昼間から町の上空に『魔導獣機』を召喚して――歴史の改変も恐れないような連中である。

任務に失敗した仲間の一人くらい平然と殺してしまいそうで怖い。

「まぁ……確かに今回の事件は奇妙なものだけれど、敵が一人減ったと考えてしまえば、それはそれで得だと思わない？」

「それはそうだけど……何か複雑な気分だなぁ。敵であれ何であれ、誰が死んだとなると」

「もう、秀はヘタレよねぇ。だからいつまで経ってもあだ名が『チキン』なのよ」

「誰が『チキン』だ。ていうか、俺は今までそんなあだ名で呼ばれた事なんか一度も無いからな」

「当たり前よ。だって、今私が命名したんだもん」

「勝手に人のあだ名を命名してんじゃねーよ……貧乳」

「貧乳!?　今、貧乳って言葉が聞こえたんだけど気のせいかしら!?」

「うるせーな。俺が『チキン』なら、お前のあだ名は『貧乳』で十分だこの貧乳」

「また貧乳って言った！　しかも二回も！　あ、あなたこそ、秀こそ『チキン』よりも『変態』の方がお似合いよ！」

「誰が変態だ！　その俎板（まないた）を揉んで大きくしてやろうか、この貧乳！」

「また貧乳って言った！？　し、しかもっ、今度は俎板って――余計なお世話よ！　胸が無い方が余計に有るよりも将来性があるのよ！」

「フンッ、それは所詮貧乳の戯言だろ」

「くっ……こ、この……っ！　い、いつか見てなさいよ、秀！　私を貧乳と呼んだ事を後悔させるくらいに大きくなってやるんだから！」

俺を真っ直ぐに指差しながら頬を赤らめて目に涙を浮かばせてそう宣言するウリア。

「そうか、それは楽しみにしておくよ。５０年後位に」

「５０年も時間は要りません！　私の場合は１０年で十分です！」

「１０年後か……霧歌の胸はどのくらい大きくなっているんだろうな」

「ちょっと！　霧歌の胸じゃなくて私の胸の話をしなさいよ！」

「お前の胸の話をしたって薄い内容の話しか出来ねーよ。貧乳なだけに」

「全然上手くないから！」

「大体、貧乳と呼ばれたくないのなら霧歌クラスのバストサイズに成長してから言うんだな。そしたら俺はお前を貧乳とは呼ばないよ」

「あ、あんな……あんな大きさ、無理に決まってるじゃない！」

「ウリアよ、最初から諦めていては勝てるものも勝てないぞ」

「えっ……わ、私の胸にも霧歌の胸に勝てそうな希望は詰まっているかな？」

「いや、少したりとも詰まっていないな」

「何よそれ！　ちょっと希望の光が見え掛けてしまったじゃないの！」

「お前の胸には希望どころか、夢さえも詰まってなんかいねーよ。貧乳なだけに」

「だから上手くないって言ってるでしょ！」

ウリアが左手をテーブルに強く着く。

その衝撃でカップラーメンの容器から少量のスープが零れて、テー

ブルの上に落ちた。

「ていうか、霧歌の胸と比べないでよ！　今も１０年後も、霧歌の胸に私の胸が勝てる訳ないでしょ！」

「そうだなぁ……逆にお前の胸は１０年後凹んでいそうな気さえするもんなぁ」

「凹まないから！　それだけは絶対に無いわよ、人間の性質上絶対に無いから！　多分！」

「いや、多分も何も絶対に凹まないからな？　何で自信無さげなんだよ」

「秀がそんな事言うからじゃない！」

「全くもう……」と不満気に頬を膨らませながらウリアは椅子に座り直す。

そして、彼女は左手をセーラー服の上から自らの胸に当てた。

「はぁ……何かこう、手っ取り早く霧歌クラスの胸になる方法は無いかなぁ」

「これ何かどうだ？　俺がウリアの胸を――」

「秀が私の胸を揉む以外の方法で」

俺が最後まで言い切る前にウリアは光の速度でその言葉を遮った。

何たる条件反射だ。

そこまで嫌なのか……いやまぁ、現実的に考えたら嫌だろうけれど。

その一蹴過ぎるほどの一蹴に、俺は何だか心にダメージを受けた。

臥竜鳳雛？

「他に胸が大きくなる方法ねぇ……聞く所に寄れば、牛乳を飲めば大きくなると聞いた事があるな」

「えっ？　それって本当？」

「あくまで噂であって、少なくとも俺は信じていないけどな」

「どうして信じていないのよ」

「胸を揉む以外にバストサイズがアップする方法がこの世に蔓延っては困るからだ」

「それって秀の都合じゃないの！」

「牛乳を飲むなんて邪道だ、胸は揉めば大きくなる――って昔の偉い人が言っていたような気がする」

「誰もそんな馬鹿げた名言を残す人は居ないわよ！　精々居て歴史上で秀くらいのものよ！」

「いや、絶対にそれは無い！　織田信長辺りは歴史に残っていないけれど絶対に生涯に一回くらいは言ってたね！」

「その自信は一体全体どこから湧き上って来るのよ！」

「織田信長だからだよ！」

「意味解んない！　秀はどれだけその織田信長って人を信頼しているのよ！」

段々と話が逸れて収集が着かなくなってきたので閑話休題。

「……とまぁ、とにかくだ。牛乳を飲めば胸が大きくなると言うから、そこまでバストサイズをアップさせたければ一度試してみればどうだ？」

「うーん……解った、やってみる」

「まぁ、どうしても飛躍的に胸を大きくしたい時は俺にいつでも言って――」

「それは大丈夫だから」

「よし！」と俺の言葉をまたもや一蹴したウリアは駆け足でキッチンへと向かった。

「それじゃあ、今すぐにでも牛乳を――って秀！　牛乳が無いわよ！」

「まぁ、元々からこの家に牛乳なんてものは存在していないからな」

「えーっ。買って来てよ、秀」

「ふざけるな。何で俺が……自分で買って来いよ」

「嫌よ。だって、怠いもの」

「嫌なら嫌でもう少し真っ当な理由を挙げろ」

正直なのか捻くれているのか解らない奴である。

「解ったよ……それじゃあ、一緒に行こうぜ。それなら良いだろ？」

「嫌よ。だって、怠いもの」

「怒るぞ、いい加減にしないと怒るぞ。ていうか、もしも俺が一人で外出したとして、また『魔導獣機』にでも襲われたらどうしてくれるんだ」

「秀は私でも倒せなかった『魔導獣機』を倒したんでしょ。それなら、別に私がずっと隣に居なくても大丈夫なはずよ」

「お前の存在価値を問い掛けてみてもいいか？」

その言葉が罷り通るのなら、お前の今後の出番は無いに等しくなると思うんだが。

「まぁ、お前がそれで良いなら別に良いか……それじゃあ、ちょっと行って来るな」

「いってらっしゃーい。私はここでゆっくりテレビでも観ているからお構いなく」

「いい加減にしないと本当に怒るからな、お前」

◆◆◆

牛乳と――それから、ついでにカップラーメンを幾つかスーパーで買った俺は建物の中から外へと歩みを進める。

本日、８月７日の夕方は夏にも関わらずそれほど暑く感じなかった。

きっと、それは天空を覆う灰色の雲のせいなのだろう。

夏の暑さを遮断してくれているその雲は幻想的な茜色の光も遮ってしまう為――。

夕暮れ時の風景を好む俺にとっては、感謝と迷惑の二つの気持ちが入り混じる事となった。

「本格的に雲が出始めたな……帰ったらいつ頃に雨が降るのか天気予報でも観て確かめるか」

そんな事を呟きながら俺が帰路を歩いていた時だった。

進行方向の先――住宅街の通路のど真ん中に俺は彼女の姿を捉えた。

黒髪の首の辺りまで伸びたポニーテールが特徴の彼女――架凪呀琴羽がそこには居た。

まぁ、住宅街の通路のど真ん中に居たとは言っても、無論架凪呀はそこで呆然と突っ立っている訳では無く。

ほんの少しだけ見えるその横顔にはどことなく真剣な表情が浮かんでいて――彼女はそんな表情のまま誰かと携帯で通話しているよう

だった。

誰と話しているのだろうか？

そんな何気なく浮かび上がった疑問に俺は抜き足差し足忍び足で再度歩みを再開する。

段々と架凪呀との距離が縮まって行く。

余程その通話の主と集中して会話しているのか――俺が真後ろに立ってもまだ気付いていない。

そして、俺が真後ろ――つまりは架凪呀とその通話の主との会話が聞き取れる位置に辿り着いたと同時に。

「――解りました」

タイミング良くと言うべきか、タイミング悪くと言うべきか――架凪呀は通話を終え、携帯を閉じると。

「……はぁ」

何やら疲れたようなため息をついてスカートのポケットに携帯を仕舞う。

すると、架凪呀は後ろを振り返って――こちらの方へと不意に歩き始めた。

それと同時に俺は架凪呀に声を掛けてみる。

「よっ」

「ひゃあっ！」

俺の声にその場で跳び上がった架凪呀はすぐさま傍にあった電柱にその身を隠す。

それから、彼女は顔半分だけを電柱からこちらに覗かせた。

臥竜鳳雛？

「……な、何だ、真之乃秀か……もう、ビックリさせないでよ！」

「お、おう、悪かった……まさかそんなに驚くとは思わなくて」

俺も少なからず驚いたしな。

だって、急に悲鳴上げるんだもん、こいつ。

「全くもう……真之乃秀に外で声を掛けられて悲鳴を上げない女性なんか居ないわよ」

「オイ、それは一体全体どういう意味だ」

「今の言葉をどう捉えるかは真之乃秀の想像力にお任せするわ」

「いや、想像力も何も今の言葉の真意は一つしか無いよな？」

「時に真之乃秀。私をここまで驚かしたからにはそれ相応の用事があるんでしょうね？」

「用事も何も、俺はお前をちょっとからかってやろうと画策しただけだ」

「なるほどね。殴るわよ、真之乃秀」

俺を睨み付けてくる架凪呀。

どうやら、少なからず予想外にも怒らせてしまったらしい。
ここは……何か話題を変えて架凪呀の気を逸らさなくては。
「……と、ところで……架凪呀？」
「何よ」
「何か、お前今さっき物凄く剣幕で誰かを電話してたみたいだけど……誰と電話してたんだ？」
すると、その俺の問いかけに架凪呀の表情は驚愕一色へと染まって――。
「あ、アンタ……まさか、さっきの会話、聞いてたの？」
「ああ、いや、聞いた訳じゃないよ。ただ、お前から何かただならぬ雰囲気を感じたからさ、ちょっと気になって」
「そ、そっか……それなら、良いんだ」
「ふぅ」と架凪呀は安堵の息を吐いて微笑を浮かべる。
「別に……何でも、ないから。ちょっと、その、何だ――バイトの面接に落ちて、ね。だからちょっと、そんなただならぬ雰囲気を醸し出してしまっていたんだと思うわ」
「へーっ。架凪呀、バイトの面接なんか受けていたのか」
「う、うん、まぁね。年頃の女の子には幾らお金があっても足らな

いのよ」

「そういうものなのか」

「そういうものなのよ」

「ちなみに……えっと、どこの面接を受けたんだ？」

「秘密よ」

「どうしてだよ――って、まさか。人に言えないようなアダルトなバイトの面接を受けて――」

「うっ、受ける訳無いでしょっ！？　な、何で私がそんなっ……あ、アダルトなバイトの面接なんて受けなきゃならないのよ！」

「ていうか、架凪呀。お前、“アダルトなバイト”と言ってどんな内容のバイトか解るんだな」

「うっ……！」

俺がニヤニヤとしながらそう問いかけると架凪呀は頬をカァッと赤く染めて――。

「……は、謀ったわね、真之乃秀」

「謀っていないさ。俺の言葉巧みな話術に引っ掛かったお前が悪いんだ」

「それを世間一般的には“謀った”って言うのよ」

「学級委員長であるお前を謀って少なからず引っ掛ける事が出来たというのは何だか……その、嬉しいものがあるな。ハッハッハ」

俺は笑う。

そして、気付けば架凪呀はボーっとほんの少しだけ頬を上気させてこちらをジッと見つめていた。

「……か、架凪呀？」

「ハッ！　い、いや……」

何でも無い――とその言葉の通りハッと我に返った架凪呀は俺からゆっくりと視線を逸らす。

「やっぱり……アンタと居ると、楽しいわね」

「えっ？」

「な、何でも無いっ！」

そう言って俺に背を向けてしまう架凪呀。

「そ、それじゃあ……私はもう行くから」

「ああ、またな、架凪呀」

「……」

「……架凪呀？」

「あっ……う、うん」

「またね」と架凪呀は歩き出す。

俺の目の前から――歩き出す。

「……真之乃秀」

◆◆◆

私は歩く。

住宅街の通路を――歩き続ける。

歩いて、歩いて、歩いて、歩いて――。

後ろを、振り返った。

無論、そこにあいつの姿は無かった。

「……はぁ」

私はまたため息を吐く。

ため息と言うよりも――安堵の息を吐く。

危ない所だった。

あの電話の内容を……聞かれてしまったと、そう思ったから。

危なかった。

本当に危なかった。

あの電話の内容を聞かれてしまっていたら――もう全てが駄目になってしまう所だった。

それは、駄目だ。

全てが駄目になってしまうなんて。

全てが――無かった事になってしまうなんて。

それは、駄目だ。

そんな事は――絶対に、嫌だ。

私は自らの胸に右手を当てる。

すると、私の体の中で脈打つ心臓の鼓動が――手に伝わってきた。

ドクン、ドクンと比較的速く鼓動している私の心臓。

それは先ほどの電話の内容をあいつに聞かれていたかも知れないと焦った事もあったのだけれど。

本当の理由は――もう一つの、理由は。

「……」

――知られてはならない、事がある。

いつかは知られてしまうその事実――けれど、今は知られてはならない事柄がある。

きっと……いや、確実に。

その事柄を知られてしまった暁には――全てが壊れてしまうだろう。

私の過ごしているこの日常は崩壊してしまうだろう。

それこそ、跡形も無く――無に帰してしまうのだろう。

「それは……嫌ね」

私は呟く。

苦笑と共に――そう呟いた。

折角積み上げてきたこの日々。

長い間過ごしてきた――この大切な日々。

決して、壊したくはない。

決して、無くしたくはない。

決して――失いたくはない。

――だけど。

「……」

――神様は、残酷だ。

最近は特にそう思う事が多くなってきた。

神様は残酷で、現実も残酷で、人生でさえも――残酷。

私の周囲を取り巻く世界は全てが残酷で構成されている。

何て嫌な世界なのだろう。

ただ生きる事で嫌味を感じるなんて――この世は何て残酷なのだろう。

そんな世界を創造した神様は何て残酷なのだろう。

恨んでも仕方が無い事は解っている。

神様を恨み、妬(ねた)んだとしても――何も変わらない。

何も変わりは、しない。

現実は、世界は、人生は――何も変わらない。

――だけど。

「……」

私はスカートのポケットから携帯を取り出す。

それを開いた私はそこにある番号のボタンをプッシュした。

画面に表示されるとある番号。

後は一つボタンを押せば――起動する。

そんな時、上空から甲高い音が聞こえて来た。

私は空を仰ぐ。

天空を覆う灰色の雲の下――戦闘機が一機凄まじいエンジン音を響かせながら飛んでいた。

私の目はその戦闘機よりも、どんよりと淀んだその灰色の空の方を捉えた。

曇りに曇ったその空。

それは何だか――今の私の気持ちを、表しているようで。

「……本当に、もう」

そう呟く私は自然と笑みを零していた。

自嘲的な笑みを、零していた。

「私は一体……どうしたらいいって言うのよ」

誰かに縋るようなその声。

誰かを求めるようなその声。

だけど――その声に応えてくれる人は勿論居なくて。

私は呆然とその場に立ち尽くしたまま暫し灰色の空を仰ぎ続けた後。

そのボタンを――押した。

◆◆◆

「ただいまー」

架凪呀と別れた俺はそのまま家に辿り着く。

「おかえりー」

リビングの方から返って来る声。

その直後、小走りでウリアが玄関にやってきた。

「牛乳、買って来てくれた？」

「当たり前だ。お前と違ってお遣いくらい俺は出来るからな」

「何を勝手に私がお遣いも出来ない無能なキャラにいつの間にかされているのよ。私だってお遣いくらい出来るわよ」

「ウリア、嘘吐きは泥棒の始まりって言葉知ってるか？」

「だから、何で私が嘘吐き扱いされているのよってばっ！」

「ていうか」と靴を脱ぎ終わった俺は玄関に立つ。

「ウリア、俺の悩みを少し聞いてくれるか？」

「……何よ、唐突に」

「実はさ、最近ちょくちょくウリアが右腕を負傷している事を忘れてしまうんだよな」

「忘れている？　目の前で私のこの包帯でグルグル巻きになっている右腕を見ているくせに？」

「いや、描写的に忘れてしまうんだよ」

「……秀、それって本当にあなたの悩みなのよね？　別の誰かの悩みじゃないのよね？」

「話の流れ的にお前は右腕を負傷してしまった訳だが、何と言うか――その、物語を書き進める内にどうしてもその設定を忘れてしまうんだよ」

「それ、絶対にあなたの悩みじゃないわよね？」

「そこで相談だ。ウリア、その設定を忘れない為にはどうしたらいいと思う？」

「知らないわよ。この物語を書いている人がその程度の設定を忘れ

るほどの頭の持ち主なんでしょ」

何だか冷たいウリアなのであった。

自分に関する設定を忘れられた事に腹でも立っているのだろうか？

まぁ、実際問題、これは俺に責任は無いので――俺は別に気にする必要は無いのだが。

「秀も気を付けなさいよ」

「俺？　俺は別に怪我なんてしていないから大丈夫だよ」

「違うわよ。いつか存在そのものが忘れ去られる可能性があるって事よ」

「ねーよ。俺が主人公で語り部である時点でそれはねーよ」

「解らないじゃない。ていうか、いっその事忘れ去られてしまえばいいのよ」

「何て事を言うんだ、お前は！」

「五月蠅いわね。八つ当たりよ」

「何で俺に八つ当たりをするんだよ！」

とんだ責任転嫁である。

濡れ衣も甚（はなは）だしい。

「……さて、牛乳冷蔵庫に入れないと。買って来たばかりだから冷えてるけど、すぐに飲むか？」

「あっ、それじゃあそうしようかな。秀、悪いけどコップに注いでくれる？　私、右腕を怪我しているから」

「……ああ、解った」

その事を強調して言うウリアなのであった。

少しばかり怒りの感情が混じっているようにも思えたのだが――気のせいだろうか。

ていうか、何度も言うけれど別に俺が悪い訳じゃないからな。

「やれやれ……」

そして、そんな事を思いながら俺は玄関から歩みを進めてリビングへと足を踏み入れる。

それから、俺はキッチンにある冷蔵庫の前にスーパーの袋を下ろして――。

どこからともなく放たれた白い光を視界に捉えた。

「！」

俺はハッとしてズボンの右ポケットに手を突っ込む。

そこから取り出した魔術的な古代兵器――『輪廻終焉（ラグナロク）』は眩いばかりの白い光を放っていた。

「『魔導獣機』か……！」

「秀！」

そして、その光に気付いたのか――キッチンにウリアがやってきた。

「この魔力……どこかでまた『異空繋門（ワームホール）』が開いたわ！」

「……解った。俺が行く」

「ええそうね。勿論、私も――」

「お前は駄目だ」

俺はウリアのその言葉を突っ撥ねた。

「ど、どうしてよ！」

「お前は怪我をしているから駄目に決まっているだろうが」

「こ、こんな怪我くらい、私は――」

「ああ、そうだな。そんな怪我でお前が『魔導獣機』なんかに負けるとは思っていない。俺もそんな事は思っていない――だけどな」

俺は言う。

「少なからず、お前のコンディションが万全じゃない状態で戦って欲しくないんだよ、俺は。それでお前が今度こそ――怪我じゃ済まされない事になってしまったら、どうするんだ」

「……秀」

「俺はお前を信用している――だから、お前も俺の事を信じてくれないか？」

ウリアは確かに強い。

しかし、先日あの人型の『魔導獣機』に負けたのは事実だ。

ウリアの力を信じていない訳じゃない――むしろ、俺は多大なる信頼をウリアに置いている。

だから――だからこそ。

今回ばかりは、ウリアには手を引いて欲しかった。

そして――俺のその思いが通じたのか。

「……解っ、た」

渋々ながらもウリアは俺の言葉に頷いてくれた。

「……安心しろ、ウリア」

「いつものお礼だ」と俺はリビングの出入り口の扉を開けた。

「今日は――俺が、お前の事を護ってやる」

◆◆◆

俺は自宅の玄関先から跳び出し――門前の住宅街の通路に着地する。

「『輪廻終焉（ラグナロク）』！」

そして、俺はその兵器の名前を叫んだ。

足元に出現する神々しい程の白い光を放つ魔方陣。

その瞬間、俺の右手の中でペン状の白い欠片が――解（ほど）けた。

臥竜鳳雛？

渦潮のように渦を巻きながら宙を舞う白い欠片達。

一度宙に散ったそれらは再び俺の右手に集い、その形を象り始める。

気付けば、俺の右手には身の丈ほどの細長い白銀の刀が握られていた。

鍔を持たない刀身と柄を無理矢理結合させたような――そんな刀を片手に俺は空を仰ぐ。

季節的に今の時間帯ではまだ太陽は沈んでいないはずなのだが――曇天によって天から降り注いでいるはずの太陽の光が遮られてしまっていた。

薄暗い景色。

しかし、その灰色の空のどこにも――その雲よりもどんよりとした漆黒の闇の穴は見えなかった。

ウリアが『異空繋門（ワームホール）』の出現を感知し、その魔力を俺の『輪廻終焉（ラグナロク）』も捉えた。

出現していないはずはないのだが――。

「……どういう事だ？」

俺は怪訝にそう呟く。

その時だった――不意に天空を覆う灰色の雲の蓋に穴が空いたのである。

……雲の向こう側から放たれた光の弾――それが分厚い雲の層を貫いたのだ。

そして、『異空繋門（ワームホール）』が視認できなかった事も俺はそれと同時に理解する。

これは予想でしかないが、きっと空を覆うあの灰色の雲よりも上空に『異空繋門（ワームホール）』が出現したのだろう。

それから、そこに出現した漆黒の穴から出て来た『魔導獣機』が俺目掛けて攻撃を仕掛けてきた。

「くっ……！」

完全に不意を突かれた俺はただただその場で身構えるしかなかった。

段々と俺とその光の弾の距離が縮まって行く。

「《太陽の斬閃（ソーラーレイ）》！」

突如頭上から降って来たその声。

俺が上を振り仰ぐと同時に二階のベランダからオレンジ色の閃光が解き放たれた。

文字通り光速で空を滑るように飛んだその閃光は迫り来る光の弾を

呑み込む。

その瞬間、二つの光は上空で大爆発を起こした。

凄まじい轟音が周囲に響き渡る。

眩いばかりの光、激しい突風と衝撃波――それらが全て同時に地上へと齎(もたら)される。

「何やってるのよ！」

そして、それらが治まった頃――再度、頭上から先ほどの声が聞こえて来た。

俺ももう一度二階のベランダを振り仰ぐ。

そこには背中から光を纏った翼を生やし、頭の上に天使の輪を浮かばせているウリアの姿があった。

その左手にはオレンジ色の光の剣が握られている。

どうでもいいかも知れないが、服装はセーラー服で、髪型もツインテールではなく下ろされたままであった。

「ああいう攻撃は地上に到達する前に何らかの形で破壊しなきゃ駄目じゃない！　でないと、地上でさっきの爆発が起こる事になるのよ！？」

「あ、ああ……その、ゴメン」

「謝って済むなら警察は要らないのよ。全くもう……何が俺が護るから、よ、全然護れていないじゃない。心配して観に来てみれば結局こんな始末なんだから」

「……」

言われたい放題だった。

でもまぁ、ウリアの言葉も少なからず間違ってはいない訳で。

例え、力を手に入れたとしても――戦いに関しては全くの素人だもんな、俺。

「秀！」

「は、ハイッ！」

思わず声が裏返ってしまった。

今のウリアと俺の立ち位置は上官とその部下のようなものであった。

無論、ウリアが上官で俺が部下である。

「私がバックアップをするから、秀は『魔導獣機』の方に特攻を仕掛けなさい！」

「あ、ああ、解った！」

ウリアにそう応えて、俺は空を覆う灰色の雲の蓋に空いた穴を見上げる。

その穴の向こう側には茜色の空が見えた。

そして、俺の両足の下に出現する小さな白い魔方陣。

それを確認した俺は地面を蹴って跳ぶと――更に空中を蹴って跳躍を開始した。

跳躍を繰り返す度に地上が遠退き、段々と灰色の空が近付いてくる。

俺は何度もそんな跳躍を繰り返した後、空に空いた穴を潜って灰色の雲の上に到達した。

「……」

目の前に広がった景色に――俺は思わず息を呑んでいた。

眼下に広がる真っ白な雲海。

地平線の彼方なのか、水平線の彼方なのか、表現には迷うが――ともかく、果てしなく広がる雲海の彼方に浮かぶ茜色の太陽。

夕暮れ時に放たれるその日光が真っ白な雲海にその色を浴びせていて――風景が更に幻想的で美しいものへと変化している。

「……凄い」

俺がその景色に感嘆の声を漏らした直後の事だった。

鼓膜を震わせた甲高い何かの雄叫び。

俺は後ろを振り返る――その瞬間、何か巨大な物体がこちらへと突進してきた。

「うわっ！」

その迫ってきた巨体に思わず声を上げた俺はその場から跳び退いて、先ほどよりも少し低い高さに足を着いた。

両足の下にある魔方陣を足場に俺は上空を仰ぐ。

その瞬間――太陽の光を遮って何かの黒い影が俺に差した。

どうやら、今回この時代に転送されてきたのは俺とウリアが最初に出会った『魔導獣機』――巨大な鳥の形をした機械の怪鳥のようだった。

相変わらず、その巨大な翼を羽ばたかせながら空中に留まっているその姿は機械ではなく生物のそれを思わせた。

俺はその機械の怪鳥と対峙したまま両手で白銀の刀の柄を握り締める。

すると、機械の怪鳥の向こう側――茜色に染まった空に現れた小さな影を俺は捉えた。

淡い深紅の光を帯びた翼を携えたその天使は『魔導獣機』目掛けて光の剣を振り上げる。

「――《太陽の斬閃（ソーラーレイ）》」

光の剣が振り下ろされ、解き放たれるオレンジ色の閃光。
それは『魔導獣機』の巨体を軽々と呑み込んで――そして。
俺を呑み込まんとばかりにこちらへと迫って来た。

「ってオイオイオイオイオイオイオイ！」

俺はそう声を上げながらその場から跳躍して襲い掛かって来たその閃光を回避する。
爆発するオレンジ色の閃光。
俺の体は更にその爆風によって吹き飛ばされた。

「殺す気か！」

俺は叫んだ。

とりあえず、ウリアに向かってそう叫んだ。

「仕方ないじゃない。あそこであの攻撃を繰り出すにはあのタイミングしか無かったんだから」

「だとしてももう少しあっただろ！　もう少し別のタイミングがあっただろ！」

「……ちっ、もう少しタイミングが良ければ巻き添えに出来たのに」

「そして、聞こえているからな！」

お前は俺を護りたいのか、それともこの世から葬り去りたいのか、どっちなんだ。

すると、ウリアの放った一撃によって空中に生み出された爆煙が不意に渦を巻く。

そして、その煙の塊の中から『魔導獣機』の巨体がウリアに向かって飛び出した。

ウリアはその突進に臆する事無く、飛翔してその巨体を避けると俺の傍まで飛んで来た。

「何だ、まだやられていなかったのね……」

「ていうか、ウリア。お前大丈夫なのか？　左腕だけで」

「当たり前でしょ、私を誰だと思っているのよ」

「現代の生活にすっかり慣れて堕落してしまったら未来人だろ？」

「……」

「あれ、何も言葉を返さないのか？」

「その件についてはノーコメントを貫かせて貰うわ」

俺達がそんな会話を交わしていると、前方から機械の怪鳥が光の弾をその口から放って来た。

迫り来る光弾に俺の前のウリアは身構える。

すると、俺はウリアの持つ剣に何かが集まって行く感覚を感じ取った。

その何かの感覚がウリアの剣に大量に集中していき――ある程度集まった所でそのオレンジ色の剣が光を放つ。

「――《太陽の斬閃（ソーラーレイ）》」

光を放つ刀身が振り下ろされた。

オレンジ色の剣から解き放たれる先ほどと同じ閃光――それは光弾を呑み込み、『魔導獣機』が放った一撃と共に爆発を起こす。

「……これじゃあ、埒が明かないわね」

吹き荒れる突風と衝撃波を真正面から受けながらウリアはそんな事を呟いた。

「右手も使えればまだ何とか出来るんだけど……やっぱり、片手じゃ決定打に欠けるわ」

「ねぇ」とここで俺を振り向いてくるウリア。

「秀のその武器、何か遠距離攻撃とか出来ないの？」

「出来ないのって聞かれてもなぁ……未来の俺はこの武器の機能には一言も触れなかったし」

「何よもう、使えないわね」

「……お前こそ、片腕になった途端に全く使えなくなったよな」

「何ですって？」

「何だよ」

互いに睨み合う俺とウリア。

俺達がバチバチと火花を散らしていると前方に留まっていた『魔導獣機』がその巨大な翼を羽ばたかせてこちらに突進を繰り出してき

た。

「……あっ、そうだ」

その『魔導獣機』の行動を見たウリアは何か思い付いたような口調で言う。

「秀、あなたはあの――こちらから見て『魔導獣機』の左の翼を斬り落としなさい」

「斬り落としなさいって……簡単に言ってくれるよな」

「あら、出来ないの？　古代兵器を未来から託されたくせに？」

「別に出来ないとは言っていないだろ。お前がそう言うならやるだけやってみるけど……でも、何で？」

「良いから、秀は私の言った通りにやればいいのよ。その後はまぁ……何とかなると思うから」

そんな会話を交わしている内にも機械の怪鳥はその巨体で俺達を轢き殺すべく猛スピードで雲海の上を滑空して来ていた。

ウリアの隣に立つ俺は――またウリアの持つ光の剣にその何かが集まって行くのを感じていた。

徐々に俺達と『魔導獣機』との距離が縮まって行く。

――そして。

「今よ！」

その合図と共に俺は左に――ウリアは右にそれぞれ跳躍する。

「《太陽の一閃（ソーラーブレード）》！」

右方からウリアのそんな声が聞こえて来た。

しかし、彼女が今何をしているのか――それをいちいち確認している余裕など今の俺には皆無だった。

迫り来る『魔導獣機』の巨大な翼。

失敗すれば確実にその翼は俺の体に牙を剥くだろう。

すぐ傍に迫っている死の感覚を感じ取りながら――俺は『輪廻終焉（ラグナロク）』を左下から右上へと振り上げた。

白銀の刀を振り上げた瞬間、何か刀身に引っ掛かった感触を俺は覚える。

『魔導獣機』の翼の付け根に俺の放った斬撃が命中したのだ。

俺の一撃と自身の突進の勢いによって切断されていく『魔導獣機』の鋼鉄の翼。

俺は白銀の刀を完全に右上へと振り上げる。

それと同時に、『魔導獣機』の鋼色の右翼が茜色の空に舞った。

更に、俺の視界の端に同じく宙を舞う同じ鋼色をした巨大な翼が映る。

どうやら、ウリアも『魔導獣機』の翼を切断する事に成功したようだ。

「や、やった――」

そして――喜んだのも束の間。

俺は不意に感じた左手の感触に口を噤む。

頭上を振り仰いでみる――そこには自身の左手で俺の左手を掴んでいるウリアの姿があった。

「……えっ？」

怪訝にそう声を漏らす俺にウリアはニッコリと微笑んで。

「ちょっ、ウリア――」

それ以上俺が言葉を紡ぐ前に――ウリアは俺の体を持ち上げる。

それから、遠心力を利用して俺の体を雲海に向かって放り投げた。

「ちょっ……！」

訳が解らなかった。

どうして、俺は今ウリアに放り投げられたのか――本当に訳が解ら

なかった。

「秀ーっ！」

そして、俺がその事を疑問に思っていると、段々と小さくなっていくウリアの方からこんな言葉が飛んで来た。

「止めはあなたが刺しなさい！」

「……は？」

再度怪訝な表情を浮かべると共に俺の体が雲海に呑まれて――視界が真っ白に染まった。

それから、徐々に周囲の雲が灰色へと染まって行き――。

遂に、俺の体は分厚い雲の層を突き抜けた。

別にウリアの俺の体を投げた力が逆らえないほどに強い訳では無く、単なる自由落下だったので――途中で空中に足を着いても良かったのだが。

雲海を沈んでいく中で俺はウリアの言葉の真意を何となく理解する事が出来ていた。

だから、俺は途中で落下を止めなかった。

そして、俺は頭上を――落下していく方向を見上げてみる。

そこには案の定、両翼を失って地上へと落下していく『魔導獣機』の姿があった。

「……なるほど、ね」

苦笑と共にそう呟いて俺は両足の下に小さな魔方陣を出現させる。

それを足場にして――俺は落下していく『魔導獣機』に向かって跳んだ。

落下速度を意図的に加速させた俺の方に段々とその巨体が近付いてくる。

その巨体に狙いを定めながら――俺は白銀の刀を振るった。

俺の放った斬撃は『魔導獣機』の首を捉える――先ほどの両翼と同様に機械の怪鳥の首から上が宙を舞った、のだが。

「……あれ？」

俺は『魔導獣機』の体の上に着地しながら怪訝な声を漏らす。

何故なら、首を刎ねてもその機体が爆発を起こさなかったからだ。

「あっ……そういえば、機体の中にある『核（コア）』を破壊しないと駄目なのか」

確かウリアが前に説明してくれたはずだが――如何せん、俺は『魔導獣機』と戦うのが今回でまだ二回目なのだ。

そんな初期設定すらも忘れていた。

「『核（コア）』――って、どこにあるんだよ」

俺は少し焦り始める。

こうしている間にも段々と地上が近付いていた――俺はともかく、このままこの巨体を地上に落下させるわけには行かない。

「……そうだ」

そして、ある事を思い付いた俺は先ほど刎ねた『魔導獣機』の首の淵を見下ろす。

すると、予想通りそこは空洞となっていて――機体の内部構造をハッキリと確認する事が出来た。

薄暗い鋼鉄の塊の中、水色の光を放っている球体を俺はその視界に捉える。

その瞬間、俺は確信した。

「……あれが『核（コア）』か」

そう呟いて俺は白銀の刀を機体の空洞へと刺し込む。

あの『核（コア）』の位置からして……この刀の長さを以てすれば切先（きっさき）は届くだろう。

そんな事を思いながら――俺は勢い良く白銀の刀を機体の内部に向かって刺し込んだ。

直後、バキンッという何かが割れる音が聞こえた。

鋼鉄の機体を切断した時とはまた違う――何かが割れるような、砕

けるような。

そんな音が聞こえて来た。

「やったか……？」

俺が誰にでも無くそう問いかけた直後、不意に『魔導獣機』の体全体に亀裂が走った。

「……やったみたいだな」

そう呟いて俺は素早くその刀を引き抜くと急いでその場から離脱する。

眼下で地上に向かって落下していく『魔導獣機』。

俺の視線の先でその巨体は光を放ち――空中で大爆発を起こした。

薄暗い町並みをその爆発の光がまるで昼間のように照らし出す。

そして、その機体の行く末を見送った俺は次に空を振り仰いだ。

灰色の空に空いた穴――茜色の光射す雲の穴から一人の天使が舞い降りて来るのを俺はその視界に捉える。

背中に太陽の光を受けている事もあってか、比喩でも何でも無くその時こちらに向かっているウリアは――。

本当に、天使に見えた。

「やったわね、秀」

笑みと共に俺の隣に並ぶウリア。

「初めてにしては上出来だったわよ。初めてにしては、ね」

「うるせえな。それ以上言うなよ？　俺だって少しグダグダになった感じは否めないでいるんだからな」

「大丈夫よ、グダグダになっても。秀が失敗した分は私がカバーして上げるから。だって、私達はもう既にパートナーでしょ？」

「何の相談も無く急に相方を放り投げる奴の事を俺はパートナーとは一概に呼べないんだが」

「仕方ないじゃない、相談する暇なんか無かったんだもの」

「それに」とウリアはそう言って——俺に微笑んだ。

「私が何も言わなくても、秀はちゃんと私の言いたい事を理解してくれたでしょ？」

「……ま」

「まぁな」と俺はウリアから視線を逸らす。

何だか——その微笑を見ていられなくて。

ジッと見つめては、いられなくて。

「早く地上に降りましょうか。急がないと、今回の戦闘で自衛隊の戦闘機とか来ちゃうかも知れないし」

「あ、ああ、そうだな」

「それじゃあ……ハイ」

そう言って――ウリアは俺に左手を差し出して来る。

「また俺を放り投げるつもりじゃねーだろうな」

そんな冗談交じりの言葉と共に俺はウリアの左手を右手で握り返した。

「そんな事言ってたら、本当に地上まで投げるわよ？」

「冗談だよ、冗談に決まってるだろ。ほら、早く帰ろうぜ？　俺は今途轍もなくカレーのカップラーメンが恋しいんだよ」

「そうね。私も返って“しーふーどー”を食べないと」

「いや、お前さっき食べてたよな？」

「た、戦った後は、その……お腹が減るものなのよ」

「またそれっぽい理由だな……太っても知らねーぞ」

「秀、あなたはどうやら私にまた投げられたいみたいね？」

「スミマセンでした、本当にゴメンナサイ」

俺は大仰にウリアに向かって頭を深々と下げた。

――そして。

「……ぷっ」

「……ぷっ」

俺達は二人同時に吹き出していた。

何が笑いのツボに嵌ったのかは解らなかったけれど――とりあえず、俺達は同時に笑っていた。

いつの間にか、笑い合っていた。

空に響き渡る二人の笑い声。

互いに手を繋ぎ合ったまま――俺達は笑い合う。

――どうしてだろう。

命を賭した戦いの後だというのに、つい先ほどまで未来の兵器と戦っていたというのに。

俺の心の中は――何か温かな感情で満たされていた。

それこそ、ウリアとこうして今笑い合えているような――こんな状況でも笑う事が出来るような。

そんな、温かな感情で。

いつまでもこんな日々が続けばいいと思った。

命を賭した戦いをしてもいい、こんな戦いばかりの日々が続いてもいい。

ただ――その中で少しでも笑えるのなら。

誰かと一緒に笑い合う事が出来るのなら。

こんな日々が続いてもいいと――俺はそう思えた。

――けれど。

思った通りになってくれないのが。

自分の思い通りにならないのが。

現実であり、世界であり、人生であり。

運命である――訳で。

翌日、８月８日。

とある一本の電話が――俺の運命の歯車を更に、激しく。

狂わせた。

表裏一体

8月8日。

「暑いわねぇ……」

リビングのソファーにて、ウリアがテレビを観ながらそんなだらけ切った声を漏らした。

セーラー服の裾をパタパタとしながらウリアは続ける。

「ねぇ、秀。クーラー点けましょうよ、クーラー」

「駄目だ。クーラーなんて贅沢なんだよ、電気代の無駄だ」

「何よ……無駄なのは秀の苗字の『の』の数でしょう？」

「何で俺の苗字を巻き込むんだよ、その話題に」

俺の苗字は関係無いだろ。

それから、前にもやったネタを今更引っ張って来るな。

くどいと思われたらどうするんだ。

「ていうか、点けないならクーラーなんてあっても無意味じゃない」

「無意味じゃねーよ。もう少し暑くなるのを待ってから点けるんだ」

「秀なんて居ても居なくても同じじゃない」

「だから、何で俺をその話題に巻き込むんだよって！」

「もう少し暑くなるのを待つって……さっきニュースで、今日の８月８日は立秋だって言ってたわよ？」

「えっ、マジで？」

「マジよ、大マジ。まぁ、その疑いたくなる気持ちも解らないでもないわ。秋の訪れとか言っておいて、この暑さはまだまだ夏真っ盛りよねぇ」

「まぁ、実際問題、８月はまだ始まったばかりだからな」

そう言いながら俺はリビングにある大窓から外の景色を振り仰ぐ。

外の景色と言うよりも、俺は空の状態を確認した。

昨日に引き続いて――空は相も変わらず灰色の雲に覆われていた。

それも、昨日よりも更にどんよりとした雰囲気は一層強まったように思える。

天気予報によれば、今日の夕方頃に遂に雨が降るようだ。

早くあの曇天も全ての雨を降り切らせてどこかに消え去ってくれないだろうか。

空を覆うあの灰色の雲の軍勢のせいで夏の蒸し暑さが更に倍増され

ているような気がする。

「あーっ、暑い暑い、あーつーい」

「うるせえな。“暑い”って単語を連呼するなよ。こっちまで暑くなってくるだろうが」

「仕方ないじゃない……暑いものは暑いんだもん。ああ、暑い」

「だから、止めろって。“暑い”と言えば言うだけ暑く感じるぞ」

「あーもう……ねぇ、秀。クーラー点けましょうよ、クーラー」

「駄目だって言ってるだろうが。世はエコの時代なんだぞ？　節電だよ、節電」

「そんな事言って、どうせ周りの人達はエコなんかせずにどんどんクーラーを使っているに決まっているじゃない……」

「どうしてそんな事が言い切れるんだ。確証も無しに他人を疑うのは駄目だぞ、ウリア」

「地球が温暖化の一途を辿っている事が何よりの証拠よ」

「……」

返す言葉が見付からない俺なのであった。

まぁ、確かに、もしも世界中の皆がエコにちゃんと務めていれば地球の温暖化は完全とは言わないまでも少しは軽減されるはずなので

ある。

それなのに、依然としてまだ地球の温度がこうして上昇し続けているという事は――。

「……まぁ、正直な話を言わせて貰えば、エコエコ言ってるけど、俺も実際は節電の為だからな。電気代の問題がクーラーを使わない一番の原因だな」

「でしょう？　エコをしないといけないのは解るけれど、実際はエコをしている人の方がエコをしていない人よりも損をしているというのが世の中の現状よ」

「世知辛い世の中だよなぁ……真っ当に生きている人間の方が損をするなんて」

「世の中なんてそんなものよ。正直に生きるよりも、誰かを騙したり、誰かに嘘を吐いたりした方が世の中上手く渡れるに決まっているもの」

「その言葉、未来の戦国時代を少なからず生き抜いてきたお前が言うと更に重みが増すよなぁ……」

ウリアの言う通りであった。

世の中を上手く行き来する為には、正直に生きるよりも猫を被って自分を偽って生きる方が何かと得策なのである。

正直なのが良い事で、嘘を吐くのが悪い事なのは――まぁ、当然の事なのだけれども。

人生においては、世の中を生き抜く為にはその理（ことわり）が真逆になってしまうのだ。

人が生きる為に必要な世の中という場所はいつの間にか人が途轍もなく生き難い場所と化してしまっていた。

何て事だ。

「でも、本当にそれっておかしな話だよな。誰だって正直に生きたいはずなのに」

「まぁ、それも仕方の無い事なのよ。人生はゲームと同じで、ちょっとした裏技を行使してしまえば、楽に進めてしまうものなのよ」

「いつの間に世の中はこうなってしまったんだ……俺はただ、正直に生きて行きたいだけなのに」

「……秀」

「法律なんてものがあるから変態行為が抑制されるんだ」

「そっちっ！？　秀の正直に生きたいって意味はそっちの意味なのっ！？」

「とまぁ、今のは冗談で」

「いや、絶対少しは本気で言っていたわよね？」

否定はしない。

まぁ、それを口に出して言うつもりはないが。

嘘も方便という言葉があるように、世の中にはやはり少なからず嘘が必要なようである。

人生を生き抜く為には、少なからず、嘘も、偽りも、騙しも、致し方無いのだ。

人には誰だって表と裏があるように。

かく言う俺だって、昨日ウリアを盗撮した画像は携帯のプライベートフォルダに保存したままだ。

……いや、それは余り今の議題には関係無い話か。

ん、ゴホン。

まぁ、何はともあれ。

人生を生き抜く為には多少猫を被る事も必要な訳だ。

表裏一体？

確かに、人生は正直な人間が損をして、馬鹿を見るような――そんな世界なのかも知れない。

しかし――まぁ、それはウリアが言う所の仕方が無いという訳で。

この世界に生まれて来てしまった以上。

この人生に足を着いてしまった以上。

この現実に――生を受けてしまった以上。

その中に居る俺達はそんな現実に順応していくしかないのだ。

どこまでも狡(ずる)くて、辛くて、理不尽で、不条理な現実。

そんな現実に俺達は順応して、対応して、適応して――生きて行かなければならない。

それはきっと、この世に生を受ける事に対する代償なのだろう。

世界や人生、そして、現実と同じように神様もきっと理不尽で、不条理だから。

生を与える代わりに辛い現実を生きろ、みたいな。

神様は俺達にそんな代償を科したのだろう。

傍迷惑な話だ。

きっとそれは、仕方が無いという言葉では片付けられないほどの暴挙だ。

けれど――まぁ、うん。

それがこの世界でこうして話して、喋って、歩いて、食べて――そんな日々を生きている事への代償ならば。

それはそれでまぁ、仕方が無いと少なからず思えたりもするのである。

「ああ……慣れないツッコミなんかしてしまったから、余計に暑くなっちゃったわ。ちょっと秀、責任取ってよ」

「どんな理屈で俺に責任転嫁をしているんだよ……」

「仕方ないじゃない。私はね、腕に包帯を巻いているからその分、他の人よりも暑さに敏感なのよ」

「……お前も設定を忘れられないように必死だな」

「放っておいて」

「時にウリア、今更ながら少し気になったんだけど……お前、それお風呂とかどうしてるんだ？」

「いちいち包帯を取ってから入っているわよ。上がった後は家の救急箱から包帯を拝借しているわ」

「そうだったのか。それじゃあ、お前の応急処置が出来るという設定も強ち嘘じゃないのかも知れないな」

「逆にどうしてその設定が嘘だと思われていたのよ。この前だって、私はちゃんと立派に秀を治療して上げたでしょ？」

「いや、あれは治療と言うよりも拷問に近かったような……」

「……治療には少しくらいの荒療治は付き物よ」

「それっぽい理由で誤魔化そうとするな」

その言葉の前の間は一体全体何だ。

「あーっ。暑いなぁ、包帯を巻いているから余計に暑いなぁ。これは秀を護る事によって負った名誉ある負傷なのになぁ。暑いなぁ。物凄く暑いなぁ」

うるせえ……！

何なんだよ、本当に何なんだよこいつ。

片腕という事を利用して口が利けなくなるくらいに羽交い絞めにしてやろうか。

いや……それは流石に駄目だな。

それをやってしまったら何か人として終わってしまいそうな気がする。

「仕方ないな……それじゃあ、アイスでも食うか？」

「あいす？」と怪訝な声を上げてこちらに顔を向けるウリア。

「それって……何？　食べ物なのよね？」

「当たり前だろ。だとしたらお前に食べるか否かを問う訳ねーだろ」

「いや、秀の事だから、未来からやってきた私を騙そうと非食品を――」

「お前、どれだけ疑り深いんだよ！」

疑り深いと言うか、俺に対する警戒心の強さと言うか。

俺、お前に今までそこまでの鬼畜行為をした事があったか？

「そんな事を言うのなら上げないぞ。折角冷たくて甘くて美味しいのに」

「だ、誰も食べないとは言っていないでしょ？　ほら、早く持って来なさいよ」

「ていうか、冷蔵庫の上から二番目の左の引き出しに入っているから自分で取って来なさい」

「解ったわよ……仕方ないわね」

そう言ってソファーから立ち上がるウリア。

自力で取りに行く所を見ると少なからずアイスには興味があるらしかった。

キッチンへと姿を消すウリア。

その直後、冷蔵庫の引き出しを開ける音が聞こえて来た。

「えーっと……秀、どれ～っ？」

「水色の棒に刺さったヤツがあるだろ？」

「水色の棒に――あった。この透明の袋に入ってるヤツ？」

「そう、それだ」

そして、今度はキッチンから冷蔵庫の引き出しを閉める音が聞こえて来た。

「確かにあったけど……」

ウリアはアイスを片手にそれをマジマジと見つめながらリビングに戻って来た。

「これ、どうやって食べるの？」

「袋を開けて、棒を掴んでから、水色の部分を舐めたり、しゃぶったりして食べるんだよ」

「……本当に？」

「本当だよ。どうして俺は今お前から疑いの眼差しを向けられているんだよ」

「いや、だって……な、舐めたりしゃぶったりするって何か……ねぇ？」

「頬を赤らめるな！」

たかがアイス如きで何を言っているんだ、お前は。

女子がアイスを舐めてしゃぶって食べる光景なんか――まぁ、中々良いものではあるけれども。

……って、俺も何を言っているんだ、たかがアイス如きで。

表裏一体？

「……ていうか、舐めるでもしゃぶるでもなく、噛んで齧って砕いて食べればいいんだよ。そうすれば、画面的に問題のあるシーンにはならないはずだ」

「まぁ、そもそもアイスを食べるシーンが問題のあるシーンな訳が無いんだけどね」

「そこは価値観の問題だろうが。百人十色という言葉があるように、人それぞれ捉え方は違うんだよ」

「それ以前に、どうして私達はアイスの食べ方如きでこんな論争を繰り広げているのよ。馬鹿らしいわよ、秀」

「いや、お前が最初に何か変な解釈をし始めたんだろ！？」

ちなみに、この後は俺もウリアと一緒にアイスを美味しく戴きました。

美味しいという以外の感情や感想が浮かばないほどに夏に食べるアイスは美味に感じました。

それ以外の邪念なんて浮かばなかったから。

本当だから。

◆◆◆

前述の通り、俺はウリアと共に見事――かどうかは解らないがとにかく棒アイスを食べ切った。

いやはや、本当に危ない所だったぜ……。

湧き上る邪念を抑えるのに一苦労――っていやいや、邪念なんか湧き上らなかったんだってば。

何を言っているんだよ、俺は。

ちなみに――俺と一緒に棒アイスを食べたウリアはと言えば。

「うっ、ううう、うっ……！」

青ざめた表情で、お腹を押さえたまま、ソファーに横たわっていた。

「お、お腹が……痛い、痛いよぉ……！」

「当たり前だろ。あんなアイスを6本も一気に食べればお腹も痛くなるわ」

「くっ……しゅ、秀、あなた……毒を、盛ったわね」

「謂(いわ)れの無い罪を着せるんじゃない。その腹痛は単にお前が腹を壊しているだけだ」

「だ、だって……あ、アイスを何本も食べたらお腹を壊すなんて……わ、私、知らなかったんだもん……！」

「それ以前に、冷たいものを一気に食べたら腹を壊し易くなる事くらい知っとけよ」

お前、それでも未来人か。

応急処置が出来るほどの医療の知識があるのならそれくらい知っていそうな気もするが。

「うっ……ちょっ、もう限界。秀……私ちょっと、トイレ行って来るね」

「……」

「……な、何よ。何か文句あるの？」

「いや、何と言うか……イメージ的に大丈夫かな、って」

「こうなったらイメージとか気にしてられないのよ……！　イメージよりも、自分の体の事が大切――ううっ」

「解った。引き止めて悪かったな。速（すみ）やかにトイレに行って来い」

そして、腹を左手で押さえたまま体を引き摺るようにトイレへと向かうウリアの背中を見送る俺。

そういえば、トイレとかはどうしているのだろうか？

片手じゃ色々と不便そうだからなぁ……間に合わなかったというオチだけは避けて貰わなければ。

色々な意味で。

「……ん？」

すると、俺はズボンのポケットの中で携帯が震えているのに気付く。

携帯を取り出して、それを開く。

液晶画面には見た事も無い電話番号が表示されていた。

「……間違い電話、か？」

まぁ、俺の携帯に入っているアドレス等の情報は家族と霧歌くらいのものだから、電話番号を登録し損ねている事も無いだろうし――。

「……」

……何だか、自分で言ってて悲しくなって来たな。

とまぁ、何はともあれ。

そんな訳で、一度アドレスを交換した相手ならばその電話番号だけを知らないはずがないのである。

よって、この着信は確実に間違い電話――のはずだったのだが。

幾ら待っても俺の携帯から発せられる着信音が鳴り止む事は無かった。

きっと、この電話の主はまだ自分が間違い電話をしている事に気付いていないのだろう。

それならば、この電話に出て――その人にそれを教えて上げるのが流儀というものだろう。

だから、俺はその電話に出る事にした。

「……ハイ、もしもし？」

（あっ、もしもし？　私よ、私）

「あの……スミマセンが、多分間違い電話をしていると思いますよ？」

（そんな事無いわよ。さっきから言っているでしょ？　私だってば）

「いや、あの……そんな代名詞だけを連呼されても」

（何よ、名前を言わなきゃ解らないの？　私よ私、架凪呀琴羽よ）

「何だ、架凪呀だったのか――って」

待て、ちょっと待て。

おかしいだろ。

絶対におかしいだろ、この状況。

（全く、自分のクラスの学級委員長の声も聞き分けられないなんて

アンタの耳はどうかして――）

「ちょっと待て、架凪呀」

（何よ）

「お前がもしも、本当に架凪呀だったとして、だ。もしも本当にそうだったとして……どうしてお前が俺に電話を掛けているんだ？」

（どういう意味？　別に、私達同じクラスメイト同士なんだから、電話くらいして当然でしょ？）

「そういう意味じゃねーよ。どうしてお前が俺の電話番号を知っているのかって聞いてるんだよ」

確か、架凪呀には俺の電話番号はおろか、メールアドレスさえ教えた事は無いはずなのだが……。

表裏一体？

「お前には俺の電話番号もメアドも教えた事は無いはずだ。どうして知っているんだ。白状しろ」

（学級委員長だからよ）

「今回ばかりはその言い訳は通用しないからな」

言い訳どころか理由にさえなっていない。

学級委員長だから個人情報を網羅しているってどういう事だ。

（何よ。学級委員長がクラスメイトの個人情報を熟知している事は常識でしょ？）

「常識じゃねえよ！　むしろ非常識だ！」

（何なのよ、急に大声出して……存在自体が非常識なアンタに言われたくないわ）

「その言葉、そっくりそのままお前に返してやるよ！」

非常識な存在だなんてお前にだけは言われたくない！

（私が非常識な存在ですって？　アンタの言っている意味が解らないわ。どういう事が説明してくれる？）

「クラスメイトをストーキングしたり、クラスメイトの個人情報を

いつの間にか掌握したりしているお前は非常識の塊だろうが」

（……学級委員長の世界では常識の範囲内なのよ）

「学級委員長の世界って何だよ！」

この世には学級委員長だけで構成された別の世界が存在すると言うのか！

（学級委員長の世界にはね、全国から選び抜かれた選りすぐりの学級委員長しか出入りする事が出来ないのよ）

「何か勝手に世界観を説明し始めたぞ、こいつ」

（そして、私はその世界で言う所の学級委員長の神様なのよ）

「へー、そうだったのかー」

（……何よ、その棒読みは。まるで私の話を信じていないかのような言い方ね）

「まぁ、実際の所信じていないからな、これっぽっちも」

（何で信じていないのよ。言っておくけどね、私が一度コイントスをして表裏を当てたら私の配下の学級委員長達がアンタの命を狙いに行くかも知れないのよ）

「ただでさえ確率が五分五分な上に、コイントスを当てたとしてもお前のその配下は俺の命を狙わない可能性もあるのかよ！」

（さぁ、私に跪きなさい）

「跪くか！　誰がそんな色々な意味で曖昧な存在を前に膝を着くか！」

（引っ掛からなかったか……もしかして、意外に真之乃秀は馬鹿じゃない？）

「もしかしなくても、そんな嘘に騙されないくらいには俺の頭はちゃんとしているよ」

（……とまぁ、そういう訳で、前座はもうそろそろこの辺りでお開きにして）

「ていうか、今までの会話の全ては前座だったのかよ」

えらく長い前座だなぁ……。

「それで？　違法な手を使ってまで俺に電話を掛けて来たという事は、何か俺に用があるんだろ？」

（まぁ、違法なという部分は……否定しないけど）

「否定しろよ。肯定するな」

（うん、そうね。アンタの言う通り、私はアンタにちょっと用があるのよ）

「だろうな。それで、俺に何の用だ？」

（それがその……ちょっと、電話じゃ言い難い話と言うか）

「は？」

（面と向かって話した方が言い易い話と言うか）

「逆のパターンならよく聞くけどな……」

面と向かって言い難いから電話で話すみたいな――まぁ、どうでも良いけれど。

「それで、俺は一体全体どうすればいいんだ？」

（あの……アンタが良ければ、今から私が言う所に来てくれない？）

「ああ、別に構わないぜ？」

（そう、ありがと。それじゃあね――）

そう言って、架凪呀は俺に待ち合わせ場所を指定する。

彼女の口から出て来たその場所は――ほんの少しだけ、意外な場所だった。

◆◆◆

架凪呀との電話を終えた俺はその通話を切って携帯をポケットに仕舞う。

それから、リビングを出てトイレの方へと――もとい、ウリアに向かって俺は声を上げる。

「オーイ、ウリアーっ」

「……何～？」

トイレの方からはそんな小さく今にも消えてしまいそうな弱々しい言葉が返ってきた。

「私はその……色々と今忙しいのよ。何か用件がある、なら……さ、さっさと、言いなさいよ」

「あ、ああ……俺、今からちょっと出掛けて来るからさ。留守番、頼めるか？」

「うん……別に構わないわ。今の秀なら……一人にしていても、大丈夫そう、だし」

「そ、そっか……それじゃあ、宜しく頼むな、ウリア」

「うん……了解」

「それから……その、頑張れよ？」

「……うん、ありがとう」

「……」

依然として弱々しい声しか返さないウリアに苦笑を漏らす俺。

俺が帰って来るまでに普段の体調を取り戻してくれていたらいいのだが……。

そんな事を思いながら、俺は着替えるべく二階の自室へと向かうのだった。

◆◆◆

俺は傘を片手に外へと繰り出した。

相変わらず空を覆い隠している灰色の雲からは――今にも雨が降って来そうであった。

「降らなきゃいいけどな……」

玄関先で曇天の空を見上げたままそう呟いた俺は架凪呀との待ち合わせ場所に向かって歩き出した。

架凪呀は待ち合わせ場所を指定しただけで、待ち合わせ時間までは指定しなかった。

だから、別にいつ出向いても良いのだろうけれど……。

こういう時は女子を待たせるものではないだろう。

待ち合わせ時間が指定されていれば１０分前には着くように出発し

ている所だが――まぁ、今回は致し方無い訳で。

出来るだけ俺は架凪呀を待たせないように着替えたらすぐに家を出たのである。

「しかし……何の用だろうな、俺に」

架凪呀が俺を呼び出した場所。

それは――以前ウリアが纏めて焼き払ったあの森林があった場所だった。

表裏一体？

架凪呀曰く、人気が無い場所の方が都合が良いらしい。

「……人気が無い場所の方が良い、か」

俺は架凪呀が伝えてきたその待ち合わせ場所の条件を復唱する。

どうして、人気が無い方が良いのか。

どうして、その方が良いのか。

疑問に思う。

人気が無い場所――それはつまり、出来るだけ二人きりになれた方が良いという事だ。

でも、どうして二人きりになれた方が良いのか。

「その二人きりになれた方が良い人物が……俺だもんなぁ」

普段、あれだけ俺を毛嫌いしている架凪呀が、である。

そんな架凪呀が――俺を人気の無い場所に呼び出した。

それは……つまり。

「つまり……つまり？」

つまり、それは、えっと……。

「……ま、まさか！」

俺は思わずそう声を上げて立ち止まっていた。

女子が――男子を人気の無い場所に呼び出す理由。

そして、電話で話すよりも面と向かって話した方が良い事柄。

そ、それは、つまり……！

「こ……告白、だと！？」

い、いや、待て待て！

その考えに至るのはまだ早過ぎるだろ、俺！

大体、架凪呀は俺をいつも目の敵にして毛嫌いしているような奴だぞ！？

そんな……告白だなんて――。

「……いや」

でも、いや、しかし。

架凪呀が……あいつが、もしも。

「ツンデレだったら……全ての辻褄が合うな」

もしも、架凪呀がツンデレで、それで俺をいつもあれだけ毛嫌いしていたとしたら――。

「……って、いやいや」

それは無い。

絶対に無い。

それこそ、そんな考えに至るのは少しばかりと言うか、かなり尚早だ。

架凪呀がツンデレだなんて……そんな馬鹿な、絶対に有り得ない。

「無い無い。きっと、他の用事だろ」

いや、でも、しかし……。

いやいや、それは無いって。

でも……いや。

しかし。

◆◆◆

「……」

そんな有りもしない、確証も無い考えを巡らせている内に――。

気付けば、俺は架凪呀が指定した待ち合わせ場所に到着していた。

焼け焦げたままの黒い大地。

かつて森林があったこの場所には――今や木どころか草の一本さえも見当たらない。

何もかもが焼失してしまった空間。

『不毛の地』という言葉がここまで似合う場所を実際に目の当たりにしたのはこれが初めてではないだろうか。

――そして。

「……まだ、居ないか」

架凪呀はまだこの場所に到着していないようだった。

俺は周囲を見渡す。

そういえば、以前ここでウリアはストレンドと戦ったんだったか。

よくよく見れば、その黒い大地にはその戦闘の痕が所々に刻み込まれていた。

地割れのように斬り裂かれた大地。

破壊され、砕かれて、岩盤が捲り上がった場所も存在していた。

ここで一体全体どんな戦いが繰り広げられたのか。

それが想像できないほどに――この場所は酷く、荒れてしまっていた。

しかし、どれだけ激しい戦いが起こったのかは解った。

それほどまでに、この場所は破壊され尽くされていたから。

「酷い荒れ様ね」

不意に聞こえてきた声に――俺は後ろを振り返る。

そこには架凪呀が居た。

見慣れた黒い首元まで伸びたツインテールが――何も無い大地に吹く風に靡いている。

「原因不明の森林火災が起きた事は知っていたけれど……ここまで、この場所が荒れていたのは知らなかったわ」

「あ、ああ、俺もだ……この場所が可哀想に思えて来るくらいに、荒れているよな」

「この惨状は森林火災と言うよりも、ここで小さな戦争でも起きたみたいな惨状ね」

「……そ、そうだな」

やはり、色々と鋭いな、こいつは。

流石は学級委員長の世界の神様。

いや、あれはこいつの作り話だったか。

しかし、こいつの鋭さが神掛かっているのは本当である訳で。

表裏一体？

「それにしても……こんな不毛な大地に憐(あわれ)みの心を抱くなんて。真之乃秀、アンタはこの大地を人として見てしまうほどに友人が少ないの？」

「ほっとけ。別に、人じゃない単なる物に対して憐みの感情を抱いてもいいだろ」

「友人が少ないという部分は否定しないのね」

「……う、うるせえな。今のは少し……ミスっただけだよ」

「なるほどね。ある意味口を滑らせてしまったと素直に白状したらどう？」

「拒否権を発動させて貰う」

「アンタには人権なんて無いわよ」

「いや、流石に人権はあるよ！」

人という存在そのものを否定しようとするな！

俺は人間だ！

「それで？　俺をここに呼び出した用件は何なんだよ、一体」

「あら、もう本題に入るの？」

「これ以上本題に入らなかったら俺の心の傷がドンドン深くなっていくばかりだからな」

「心配要らないわ。アンタの心が一つや二つ砕けようと私には何の損害も無いから」

「当たり前だ！　むしろ、俺にしか損害が発生しないよ！」

「そうね、そして私は得をするからね」

「何でお前が得をするんだよ」

「他人の不幸は蜜の味だからよ」

「お前は最低だな！」

「間違えたわ、訂正させて。他人の不幸は三大珍味よりも美味しく感じるわ」

「更に最低じゃねえか！　もっと最悪じゃねえか！」

「さて、それじゃあ、そろそろ本題に入らせて貰うけれど」

「やっと本題に入ってくれるのかよ……」

だから、心の傷がドンドン深くなるって言ったんだ……。

ちなみに、既に俺の心はズタズタである。

ボロボロである。

「それで……本題と言うか、俺への用事っていうのは一体全体何なんだよ」

「……えっと、それは」

……何やら、急にどこか話し難そうに口籠る架凪呀。

「……な、何だよ」

そんな唐突に気弱になった架凪呀を俺は少しからかってみる事にした。

「まさか、俺に話し難い事って、俺への告白とかじゃないだろうな？」

「……」

冗談交じりーーと言うか、完全なる俺の冗談に対して何も答えない架凪呀。

えっ……ていうか、どうしてそこで黙るんだ？

何だか、気まずくなって来るじゃないか。

「……か、架凪呀？」

「……そうね」

恐る恐る俺は架凪呀に問いかける――すると、彼女は曇天の空を仰いでこう言った。

「アンタへの告白――なのかも知れないわね」

「えっ……ええっ！？」

「……何をそこまで驚いて――」

と、そこまで言い掛けてハッとした表情を見せる架凪呀。

「ちっ、違う……違うから！　“告白”っていうのはそんなっ……そういう意味じゃないから！」

「そ、そうなのか……だ、だよな。架凪呀が俺に告白するなんて、有り得ないよな」

俺が言うと、架凪呀はどこか悲しそうに顔を俯かせて。

「……そう、ね」

有り得ないわ――と架凪呀は言う。

「私がアンタに告白をするなんて事は……うん、そうね。どう考えたって、有り得ないわよね」

「それでその……そういう意味じゃない告白というのは、何なんだ？」

「……あのね？　真之乃秀」

「何だ？」

「その告白の前に――少しだけ前置きというか、前座を置いてもいい？」

「前座って……今までの会話は前座じゃなかったのかよ」

「前座じゃないわ。アンタを罵倒していただけよ」

「結局と言うか、やっぱり俺はお前から罵倒されていたんだな」

「心配しないで。これから置く前座は罵倒じゃないから……多分」

「物凄くアバウトだけど、今はお前のその言葉を信じておこう」

「うん、ありがとう。いつもは全く気が利かないくせに、こういう時だけは気が利くわね」

「今、早速俺の事を罵倒しやがったよな！？」

「待って、無し。今のは無し。謝るから許して」

米神（こめかみ）を指で押さえつつこちらに右手を向けてくる架凪呀。

「いや、本当にゴメン……私、人を罵倒するのが癖になってて、つい」

「まぁ、癖なら――って、仕方なくは無いな、絶対に」

幾ら癖であろうともそれだけはなぁ……。

仕方ないという言葉では流す事が出来ない癖も世の中には存在するのである。

「出来るだけその癖は抑えるから……前座を続けさせて貰ってもいいかしら？」

「まぁ、抑えるって言うのなら……」

「ゴメンね、ありがとう、ゴミ――いえ、真之乃秀」

「お前、今俺の事をゴミって言い間違えたよな？」

どうやら、こいつの罵倒を抑えるのは無理そうだ……。

だから、出来る限り架凪呀からの暴言という攻撃を俺は耐える事にする。

俺の心が耐えうる限り――だが。

表裏一体？

「もういいや……諦めるよ、お前の暴言を抑止するのは。諦めるから、早くお前の用件の前座とやらを言ってくれ」

「ああうん……解った」

すると、架凪呀はどこか躊躇いがちにそう言って――。

その前座とやらを、話し始めた。

「ねぇ、真之乃秀」

「何だ、架凪呀？」

「物事には……全てに、表と裏があるとは思わない？」

「表と、裏？」

「そう、表と裏」

「まぁ……そう、だな。俺もお前と同意見だよ」

つい先ほどまでウリアとそんな話をしていたしな。

「そっか……うん。私も、アンタと同じ考えを持っているわ。この世の全ての事象には、全て表と裏が存在しているって、ね」

架凪呀は言う。

「全ての事象、全ての物事には表と裏がある――コインとか、事件とか、人とか……その辺りの全てには表があって、裏がある」

まさしく、表裏一体ね――と架凪呀は続ける。

「表と裏は二つで一つ。表があるから裏があって、裏があるから表がある――表が表で、裏が裏、平たく言っちゃえば、元々『表』とか『裏』の概念なんて存在しないのよね」

「……何かお前、難しい話をしようとしていないか？　だったら俺、余りその話に付いて行けそうにないんだけど」

「いや、大丈夫。それなら大丈夫だから……アンタは適当に相槌を打ちながら私の話を聞いていてくれればいいから」

私が話し終わるまでずっとそこで。

ずっとそこに居てくれればいいから――と架凪呀は俺に向かって言う。

「それで……話を戻させて貰うけれど。『表』と『裏』という言葉は、それらを区別して見分ける為に作られた単なる名前であって、その名前を取り去ってしまえば、その二つは区別も見分ける事も出来ないほどに同一の存在になってしまうの」

「……ああ」

本当は……架凪呀が何を言っているのか余り解っていないのだが。

とりあえず、俺は言われた通り、適当に相槌を打つ事にする。

「だから……表は、裏であって、裏は表――全ての事象の表に存在しているものは裏であり、裏に存在しているものは表なのね？」

「ああ」

「そして、全ての事象に共通してそれが言えるのならば――無論、“人”に対しても、それは言えると思うの」

「……人？」

「そう、人」

「ほら」と架凪呀は両手を後ろで組み合わせると俺に背を向けた。

まるで、俺から顔を背けるように。

まるで、俺の視界が自分の顔を捉える事を――避けるかのように。

「人にだって、表と裏があるでしょ？　普段、世間で見せている顔と、プライベートで見せている顔は……誰しも、同じな訳じゃないじゃない？」

「ああ、そうだな」

「表の顔と、裏の顔――一見別々に見えるけれど、それらはどちらもその人の顔で、どちらも同じ顔で、その二つは……表裏一体で、同一の存在な訳ね？」

「さっき言っていたヤツだな」

「そう、そのさっき言っていたヤツよ。意外と理解が早いじゃない、真之乃秀」

「ま、まぁな」

余り理解はしていないが……。

「それじゃあ……真之乃秀に少し質問するわ」

「えっ、質問？」

「そう、質問」

問題です――と架凪呀は依然として俺に背を向けたままこう言った。

「人生において表と裏の顔を持つ人が……その裏の顔を普段の生活で見せないのはどうしてでしょうか？」

「それは……あれだろ。普段周囲に良い顔している奴が裏では――例えば、イジメとかをしていたら、その裏の顔であるイジメをしている自分を周囲に曝け出す訳には行かないからだろ？」

成績優秀な奴が裏では誰かにイジメを行っていたとしたら――確実に評判は下がるだろう。

きっと、その人物はそのイジメをしていたという事実と表と裏の顔の差も相まって評判どころか、信用さえも失ってしまうだろう。

先ほどウリアと論じていたエコもそうだ。

私は地球の事を考えてエアコンの温度を２８度にしているんですよー、とか。

そう言う人に限って家ではエアコンの温度をバンバン下げていたりするものなのである。

まさしく、これは表と裏だ。

前述で語っていたイジメほど酷くは無い話であり、裏の顔を曝け出されたとしてもそこまでその人に対するダメージは少ないだろうけれど。

架凪呀の質問に対しては――これも有力な答だっただろう。

――そして。

どうやら、先ほどの俺の例え話はその質問の的を得ていたようで。

「正解。真之乃秀にしては、良い答ね。見直したわ」

「……そりゃどうも」

もう一言少なければ素直に喜んでいた所だったんだが……。

まぁ、癖ならば仕方が無い。

いや、本当は仕方無く無いのだけれど。

表裏一体？

「そうね、今真之乃秀も言ったように、さっきの質問の答は普段表に良い顔をしている分、世間に悪い裏の顔を見せる訳には行かないから――が、正解ね」

正確には周囲に対する自分のイメージダウンが怖いから、だけど――と架凪呀は付け加える。

「周囲から自分が蔑まれるのが嫌だから、周囲から自分が見放されるのが嫌だから、周囲から自分が嫌われてしまうのが――嫌だから」

周囲から隔離されてしまうのが嫌だから。

だから、そういう表と裏の顔を持つ人は裏の顔を知られる事を嫌う――と架凪呀は相変わらず俺に背を向けたままそう言った。

「そして……それは」

――と。

そこで、架凪呀の言葉が一旦途切れた。

俺に背を向けたまま――架凪呀は顔を俯かせる。

その表情は、見えない。

俺の立ち位置からは架凪呀が今浮かべている表情を確認する事は出来ない。

まぁ、当たり前なのだけれど。

それから、架凪呀が紡いでいた言葉を一旦区切ってから――一分ほどの時間が流れた頃だろうか。

不意に、また架凪呀が語り出した。

「そして……それ、は」

その口から再度紡がれ始めたその言葉は――その声は。

心なしか、どこか震えているようにも思えた。

淡々と話していた先ほどよりも、その声は震えていて――微かに、か細くなってしまっている。

一体、どうしたのだろうか。

架凪呀に一体全体何があったのか。

俺はそれが猛烈に気になった。

だけど――俺が架凪呀に声を掛ける前に彼女は再度言葉を紡ぎ始めた。

「それは……私も、同じなの」

「……お前と、同じ？」

「そう」と架凪呀は頷く。

「私にも――表と裏の顔が、あるの」

これが告白。

ここから先が、私がアンタに伝えたい、告白――と架凪呀は不自然に言葉を区切りながら言う。

しかし、架凪呀はこちらを振り向かない。

彼女は依然として――俺にその顔に浮かんでいるはずの何かしらの表情を見せてはくれない。

「実は私……ずっと、去年教室でアンタと初めて出会った時からずっと……隠していた、裏の顔があるの」

「隠していた裏の顔？」

「ええ、そう。アンタにずっと隠してきた裏の顔――ずっと今までアンタに嘘を吐いていたと言ってもいいわ」

「嘘を吐いていたって……ただ隠し事をしていただけなんだろ？それは別に嘘を吐いていたとは言わないんじゃないのか？」

「……いいえ、違うわ」

アンタに隠し事をしていた事。

それは嘘を吐いていたも同然なのよ――と架凪呀は続ける。

「でも……言い訳を、させて頂戴。アンタに今まで嘘を吐き続けて来たのは――怖かったから、なの」

「怖かった？」

「そう、怖かったから。この私の隠し事がアンタに知られてしまう事で……私の日常はきっと、崩壊してしまうだろうから」

「……何だよ、それ。そこまで知られたら……拙い事柄なのか？」

「ええ、そう。この隠し事を知られてしまったら、私が今まで必死に積み上げてきた全てが崩壊する――そして、私は今からその隠し事を、アンタに話そうとしている」

「……それが、告白」

「ええ……そう。私の秘密をアンタに告白する事が――今日アンタを呼び出した目的」

「だったら……そこまで話したくない秘密なら、別に話さなくてもいいんじゃないのか？　お前は俺に嘘を吐いていたとか言っているけれど――でも、俺は別にそうは思っていないから」

架凪呀がどんな秘密を俺に今まで隠し続けて来たのかは解らない。

架凪呀の言うほどに――彼女の日常が崩壊してしまうほどに大きな秘密ならば。

俺はあえて話さなくてもいいと思う。

俺達の関係を壊してしまうほどの秘密ならば、尚更だ。

しかし――それでも、架凪呀の考えは変わらないようで。

「それは、駄目よ。話さないなんて――駄目。折角、決心が着いたのよ。漸く決心が着いたの――だから、今日話さなかったら、多分、私はこれからもずっと……アンタにこの秘密を打ち明ける事は出来ないわ」

「そう、か……そこまで言うのなら、俺はもう止めないよ。架凪呀の決心がそこまで固まっているのなら、俺はもう止めない」

「そう……ありがとう」

「それに……お前の考えは、少し間違っているぞ、架凪呀」

「……どういう、事よ」

「お前は今……その秘密を話したら、お前の日常が崩壊してしまうって、そう言ったよな？」

「ええ……言ったわ。この私の秘密のアンタに知られてしまったら、私の日常は崩壊してしまう。もうアンタとは……今までのような付き合いは出来ないくらいに、私の日常はバラバラに崩れ去ってしまうのよ」

「その考えが間違ってるって言ってるんだよ」

「えっ？」と俺に背を向けたまま怪訝な声を上げる架凪呀。

表裏一体？

「お前は勝手に日常が崩壊してしまうとか何とか言っているけれど……残念ながら、お前の日常はそう簡単に崩壊したりなんかしないぞ？」

「……どうしてよ」

架凪呀は俺に問いかける。

少し怒ったような口調で――俺にこう問いかける。

「どうして……そんな事が言えるのよ」

「……決まってるだろ」

そんな架凪呀の問いに対して俺はこう答えた。

架凪呀には見えないだろうけど――俺は笑みを浮かべながら架凪呀の背中に向かってこう言った。

「それは、お前がどんな秘密を俺に話した所で……俺はお前と関係を断ったりしないからだ」

「……」

「お前は確かに俺をストーキングしたり、俺に罵倒を浴びせたりと散々な奴だが……でも、俺はお前のクラスメイトで、俺のクラスの学級委員で、俺の……友達には、変わりないんだからさ」

「……」

「お前には既に知られているから言うけれど、俺って友達少ないだろ？　だから、そんな色々と散々なお前でも――言い方は悪いかも知れないけれど、居ないよりはマシ、って言うかさ」

とにかく――とにかく、だ。

色々と言葉を積み重ねて来たけれど……。

何より、俺が言いたかったのは。

俺が、架凪呀に伝えたかった言葉は。

「何を言われても、何があっても、俺はお前の……友達、だから」

そう……そうだ。

今から、架凪呀が俺にどんな秘密を告白しようとも。

俺は架凪呀の友達で居続ける事が出来る。

そんな確固たる自信が――俺の中にはあった。

――そして。

俺がその言葉を言い切るまでずっと黙っていた架凪呀は。

「……そっ、か」

消え入りそうな声でそう言って――遂に俺の方を振り返る。

俺の視界に漸く映し出された彼女の顔。

その架凪呀の頬には――止め処なく、大粒の涙が伝っていて。

「……えっ？」

俺はその架凪呀の涙に面食らっていた。

どうして――架凪呀は泣いているのか。

どうして、架凪呀は涙を流しているのか。

そんな疑問が俺の脳裏に浮かぶ。

そして、大粒の涙を流す彼女の顔には――涙を流しているにも関わらず、微笑が浮かんでいた。

泣きながら笑っている架凪呀。

そんな彼女は徐に――スカートのポケットへと右手を入れる。

そこから、架凪呀は自身の携帯を取り出した。

それと同時に何も無い荒廃した真っ黒な大地に一陣の風が吹く。

架凪呀の携帯に取り付けられたストラップが――その風に煽られて、揺らぐ。

そのストラップと同様に、架凪呀の黒髪のポニーテールも靡く。

「……ありがとう、真之乃秀」

架凪呀は言う。

俺に向かって――涙を流して、微笑んだまま。

相変わらず消え入りそうな声で、言う。

「そう言ってくれるだけで……私は、嬉しい、わ」

「でも」と架凪呀の右手が微かに動く。

その携帯を持つ右手が――動く。

おそらく、架凪呀は今携帯の何かしらのボタンを押した。

――その瞬間。

架凪呀の背後の景色が――歪んだ。

曇天によって太陽の光が遮られた薄暗い景色に突如生じたその歪み。

それは所々で渦を巻いて――数多（あまた）の小さな漆黒の穴を創造する。

「でも……きっと、それでも、アンタは私の事を軽蔑して、見放して――嫌うに、決まっている」

アンタはそう言うけれど。

私には最終的にアンタが私の事を嫌う事が解っている――と架凪呀は言う。

すると、彼女の背後に浮かぶ数多の漆黒の穴の中からゆっくりと何かが出て来た。

それは――兵器だった。

強いて言うならば、現代兵器だ。

機関銃や大砲、ロケットランチャーなど――様々な兵器が漆黒の穴からその砲口を突き出している。

殆どが名前の解らない兵器だったが、その中には形すら見た事も無い兵器もあって。

ただ一つ解ったのは――それが全て現代の兵器である事だった。

「……私が、一年前から――アンタに、隠してきた秘密ってのはね？」

架凪呀は、言う。

その目に溜まった涙を携帯を握ったままの右手の甲で拭いながら――言う。

「私が未来人だという事。そして――私が、アンタの……真之乃秀の『敵』だという事」

「私は」と架凪呀は自身の胸に左手を当てる。

その右手に握られた携帯が――パンッという音を立てて勢い良く閉じられた。

「『混合機関　科学発展側』……その第三部隊・隊長――架凪呀、琴羽」

「４５年先の未来から下った命令により」と架凪呀は左手を前方に――こちらに向けた。

「……アンタを、抹殺するわ」

――次の瞬間。

薄暗い景色から突き出した何十もの兵器の砲口。

その全てから数多の爆発にも似た轟音が鳴り響いて――そして。

雨のような砲弾の一斉射撃が俺に襲い掛かった。

虚実混交

数多の兵器から俺に向かって撃ち放たれた砲弾の雨。

一言も発する間も無く、息をする暇も無く――それらは俺の命を断とうと襲い掛かってくる。

俺は咄嗟に身を護ろうと思った。

しかし、俺にはそんな即座に身を護れるような術は無い。

そんな事を思っていたら――俺の右ポケットから勝手に『輪廻終焉（ラグナロク）』が飛び出して来た。

俺の目の前に浮かぶそのペン状の欠片は白い光を放つ。

その瞬間、その古代兵器の前に白い光の魔方陣が現れた。

幾つもの爆発音が響き渡る。

それはこちらに飛んできた砲弾によって起こった爆発による轟音だった。

けれど、その砲弾は俺に傷一つ付ける事は叶わなかった。

何故なら――『輪廻終焉（ラグナロク）』が創り出した魔方陣によってその爆発は全て遮断されていたからだ。

巻き起こる砂塵を視界に捉えながら、吹き荒れる突風をその肌で感

じながら。

俺は爆発によって起きた砂煙の奥を――見据える。

段々と晴れて行く砂煙の壁。

その向こう側には――彼女の姿があった。

黒い髪に首元まで垂れたポニーテールが特徴のその彼女。

我がクラスの学級委員長――架凪呀琴羽。

彼女はほんの少し前まで……ほんの数秒前までそうだった。

しかし、今はもう違う。

俺のクラスメイトで、俺の学級委員長で、俺が少なからず友達だと思っていた――彼女は。

もう、違うのだ。

「お前が……未来から来た、『科学発展側』の人間、だって？」

「そうよ。さっきも言ったでしょう？　やっぱり、真之乃秀の頭はそんな少し前の出来事さえも忘れてしまうほどの残念な代物なのかしら？」

「そうじゃない……少しだけ、疑問に思っただけだ」

俺は架凪呀に向かって続ける。

すると、宙に浮いたままだった『輪廻終焉（ラグナロク）』が魔方陣を消して俺の方に飛んで来た。

俺はその白い欠片を掴む。

掴んだ上で、再度架凪呀の方を振り向いて――続けた。

「お前がもし本当に俺の敵なら……どうして、お前は――架凪呀は、俺をすぐに殺そうとしなかった？」

「……」

俺のその問いかけに――架凪呀はどこか辛そうに下唇を噛んで。

「……そんな事、どうでもいいでしょう」

アンタには関係無い事よ――と彼女は言う。

「ていうか……アンタ、余裕のつもり？」

「……何がだよ」

「私にアンタが悠長にそんな質問をして来たから、よ。確かに、私が今呼び出した兵器は全てこの時代のもの――アンタが持っているのは確かに古代に栄えた文明が生み出した古代兵器だけれど……未来の兵器をも超える力を持ち合わせている事は確か」

そんな武器を持っているから私に質問なんかして来た訳？

彼女は――架凪呀は俺に向かってそう問いかけて来た。

「違うよ……俺はただ、確かめたかっただけだ。架凪呀が本当に……そうなのか、って」

「そう……それじゃあ、今一度ハッキリと言っておくわね、真之乃秀。私は――架凪呀琴羽は紛れも無く、間違いなく、一寸の狂いも無く……アンタの、敵よ」

「……そうか」

「そうよ。だから、早くその古代兵器を起動させなさい、真之乃秀。アンタがどんな力を持っているのかは――２０５６年の未来から受けた報告によって私は全て知っている」

「そうか……４５年先の未来でも、俺はお前等と対立しているんだな」

「当たり前よ。だって、アンタは『魔術発展側』の創立メンバーの一人で、リーダーなんだから」

「……は？」

俺が――『魔術発展側』の創立メンバーで。

リーダー、だって？

「それ……本当、なのか？」

「知らなかったの？　未来から受けた報告じゃ、アンタの所には既

に未来人が一人向かったって話だったけれど……」

「……俺関係の事柄はウリア――あいつは殆ど何も知らないみたいだからな」

――しかし。

俺が『魔術発展側』の創立メンバーでリーダー、か。

全く、４５年先の俺は一体全体何をやっているんだ。

時代が時代だから仕方の無い事かも知れないけれど――もう少し、真っ当な人生を送って欲しいものである。

まぁ、今の時代の俺が言える台詞でもないが。

「ていうか、そんな話はどうでもいいのよ」

そう言いながら何やら再度その右手の中にある携帯を開く架凪呀。

彼女はその携帯を操作する――すると、景色から突き出していた兵器が漆黒の穴の中へと引っ込み、その穴さえも完全に空間から消滅してしまった。

どうやら、架凪呀が持つあの携帯もオッドが持っていたそれと同じでいわゆる一種の転送装置のようだ。

――それならば。

「あれさえ……架凪呀から、奪ってしまえば」

「……さぁ」

「古代兵器を起動させなさい」と架凪呀は再度その携帯を――転送装置のボタンをプッシュし始める。

虚実混交？

「――さもないと」

架凪呀が携帯の操作を終える――そんな時だった。

「……死ぬわよ、アンタ」

俺は右側にその感覚を感じ取る。

咄嗟に右を振り向く俺――それと同時に。

俺の目の前に大砲の砲口が迫り出して来た。

「――――っ！」

咄嗟に俺は前のめりに倒れるようにして跳ぶ――その直後、頭の後ろで轟音が響いた。

地面で一回転して俺はその場に跪く。

その瞬間――その大砲が放った砲弾が真っ黒な地面の一部を粉々に吹き飛ばした。

僅かながら振動する地面。

砲弾が発射された時よりも大きな音が――何も無い大地に轟いた。

「休んでる暇なんか無いわよ！」

右方から飛んで来る架凪呀の声。

俺はそちらを振り返ろうとして――止めた。

何故なら、頭上に先ほどと同じその感覚を感じ取ったからだ。

素早くその場から立ち上がりながら俺は駆け出す。

その数秒後、今までしゃがみ込んでいた場所が爆発を起こした。

走りながら後ろを振り返ってみる。

小さな隕石でも落下したかのようなそんなクレーターの上――その場所には漆黒の穴がいつの間にか存在していて。

その穴からはロケットランチャーの砲口が突き出ていた。

「……やっぱりそうか」

そう呟きながら、俺は勢いを殺しながら立ち止まる。

予想通りだった――いや、漆黒の穴から突き出ていた武器の種類がロケットランチャーだという事では無くて。

どうやら……俺はいつの間にか俺はウリアのように魔力を感じ取る事が出来るようになっているみたいだ。

3日前に、覚醒という意味でこの『輪廻終焉（ラグナロク）』という魔術的な古代兵器を手に入れたあの日から。

最初は何の感覚なのか解らなかったけれど……この謎の感覚の正体は魔力らしい。

『輪廻終焉（ラグナロク）』が覚醒してから――俺がこの古代兵器を扱えるようになってから、俺は魔力を感知する事が出来るようになった。

だからこそ、今も先ほども俺は空間に空いたあの漆黒の穴に逸早く気付く事が出来たのだろう。

「……これから、行ける」

これなら大丈夫だ。

これならば――行ける。

あの漆黒の穴の開く位置を感知する事が出来るのならば――架凪呀の繰り出す多種多彩な兵器による攻撃を避けながら彼女のもとに行く事が出来る。

架凪呀の手から――あの転送装置を奪う事が出来る。

「……」

俺は架凪呀の右手の中にある携帯電話――の形をした転送装置を見据える。

あれさえ……あれさえ、奪う事が出来れば。

あれさえ、破壊する事が出来れば。

「……意外とやるわね、真之乃秀」

すると、架凪呀は口の端にニヤニヤと笑みを浮かべてそう言ってきた。

「当たり前だろ。この約一週間――いや、もう二週間か？　その間、一体全体どれだけお前の所属する組織から命を狙われてきたと思ってるんだよ」

「真之乃秀。言っておくけれど……それは自慢にはならないと思うわよ？」

「ほっとけ。つーか、それ以前に自慢なんかしていないし」

「それはそうと……まさか、ここまで真之乃秀が――この時代の真之乃秀が、私の攻撃を躱すとは思っていなかったわ」

「何だ、お前未来の俺と会った事があるのか？」

「直接会った事は無いわ。資料や噂でアンタの――未来のアンタの強さは知っていたから」

「なるほどな……それで、お前はこの時代の俺も強いと認めたと」

「誰がそんな事を言ったのよ、アンタはただしぶといだけ」

「そうですか……」

「ええ、そう。ゴキブリのようにしぶといだけよ、ああ気持ち悪い」

「……」

どうやら、敵に回しても架凪呀の毒舌は減らないようだった。

減らないどころか、減る傾向さえも無いようだった。

まぁ、当たり前か。

今の架凪呀は俺の敵であって……毒舌を吐いたり、罵倒をしたりするには打って付けだろうからな。

「しかし……このまま戦闘を続けたら、自衛隊とかが来て少々面倒になるかも知れないわね」

「……それじゃあ、どうする？　俺はいつでもこんな無益な戦いなんか止めても構わないと思っているけど」

「馬鹿言わないで……今日というこの日を迎える為に――私がどれだけ考えを巡らせて、心を鬼にして、決心したと思っているのよ」

この戦いは止めさせない――と架凪呀はまた携帯型転送装置を操作し始めた。

「止めさせないし……邪魔も、させないわ」

ピッ、と架凪呀の親指が携帯のボタンを押す。

次の瞬間、一瞬だけ周囲の景色が歪みを帯びて――全ての音が消えた。

どこかから聞こえて来る車の音も、空を巡回している戦闘機の甲高いエンジン音も。

全ての雑音が――消えて、しまった。

「……これは」

「空間を凍結したのよ」

その架凪呀の一言が――音の消えた閑静な空間にやけに大きく響いた。

虚実混交？

「空間を……凍結させた？」

「平たく言えば、時間を止めたの」

「時間を止めたって――オイオイ、マジかよ」

４５年先の未来人はそんな事を平気で遣って退けてしまうのか。

俺は今日まで何人かの未来人に会っている訳だが――こうして、目の前で時間を止められたりするのは初めてな訳で。

『魔導獣機』のその巨体よりも、何も無い空間から兵器を取り出すよりも。

こうやって、時間を止めるという大々的な事の方が――俺は凄いと思ったし、それと同時に驚いてもいた。

「まぁ、止めたとは言っても、フィクションの世界でよくあるような――そういうものじゃないわよ？」

「……どういう事だ？」

「正確に言えば、この周囲の空間を凍結させて、通常の時間の流れから切り離したのよ。周囲の時間が止まったように見えるのはそのせいよ――私が空間を凍結させたその瞬間の風景が切り取られているんだから」

「それじゃあ……止まっているのは、俺達の方って事になるのか」

「そういう事よ。これなら、どれだけ大きな音を立てて戦っても周囲には絶対に気付かれないわ」

「この空間の凍結を解くには……どうすれば良いんだ？」

「あら、もうこの戦いが終わった後の事を考えているの？　余裕ね、真之乃秀は」

「簡単よ」と架凪呀はその携帯型転送装置を見せ付けてくる。

「これを破壊すればこの凍結は解除されるわ。アンタもこの前、オッド・サスペクターと戦った時に見たはずだから――この携帯が何なのか、知っているわよね？」

「ああ、勿論――」

――と、そこで俺は口を噤む。

「……お前、架凪呀、どうして俺があいつと……オッドと戦った事を知っているんだ？」

「当たり前でしょ。だって、あいつからアンタとの戦いの報告を受けたのは他でも無い私だもの。隊員が隊長にそういう報告をするのは当然でしょ？」

という事は……あいつは、オッドは架凪呀の言う第三部隊の隊員だったという訳か。

「それなら……お前、昨日のニュース、観たのか？」

「昨日のニュース？」

「知らないのか？　昨日ニュースで報道されていただろ……金髪のオールバックに赤いハーフフレームの眼鏡を掛けた黒い軍服を着た男が殺されたって。あれ、絶対にお前の部下のオッドだろ？」

「ああ、それか……ええ、知っていたわ。そのニュースなら」

「観たのか」

「いいえ、ニュースは観ていないわ。そのニュースの内容を――私は、予め知っていたって言っているのよ」

「それは……未来に、２０５６年に居た頃に、残っていた新聞か何かで見たって事なのか？」

「違うわ。それ以前に、４５年の先の未来にこの時代の情報――と言うか、歴史は残っていないわよ。色々な意味でね」

「それじゃあ……一体、どうして」

「……簡単な、事よ」

「だって」と架凪呀は言った。

あくまで平然とした顔で――こう言った。

「オッド・サスペクターを殺したのは……私、だもの」

◆◆◆

「ああ……酷い目に遭ったわ」

トイレから出た私はお腹を擦りながらそう呟いた。

まさか、6本も食べるだけで生死の境を彷徨(さまよ)う事になるなんて……。

恐るべし、アイス。

今度から食べる本数には気を付けないと。

「そういえば……秀はどこかに行っちゃったのよね」

どこに行ったのかしら？

そもそも、秀は私に行き先を伝えていたかしら？

その時の記憶は曖昧でよく覚えていない。

ていうか、思い出したくも無い。

「まぁ、少しの間なら帰って来なくても私は大丈夫だけど……当分、食べ物は見たくないし」

私は依然としてお腹を擦りながら苦笑と共に言う。

すると、家の中にインターホンの音が鳴り響いた。

「あっ、ハーイ」

その音を聞いて私は小走りで玄関に向かった。

そういえば、どうでもいいけれど、私が玄関でお客さんを応対するのは初めてなんだっけ。

何だか地味に緊張するなぁ……。

でもまぁ、私くらいの人間になるとそのくらいの事は初めてでも大丈夫だけどね。

だって、秀がいつも霧歌を応対している所を見ているから。

応対を完璧に素敵に煌びやかに熟して見せますよ。

ふっふっふ。

……そういえば。

秀の家に来る人って……霧歌しか見た事無いわね。

まさか、本当に秀って霧歌以外に友達居ないのかしら……。

何だかちょっと心配になってきた。

――とまぁ、そんな事を思いながら私は玄関の鍵を開けて扉を押し開ける。

「秀ちゃ――あれ、ウリアちゃん？」

扉を開けた直後にそんな意外そうな声を上げたのは霧歌だった。

「そう言うそっちは霧歌じゃない。どうしたの？」

「今日もお母さん居ないから、秀ちゃん達に夕飯一緒にどうかな、って」

そう言って、霧歌はスーパーの袋を持ち上げて私に見せてくれた。

ぎゅうぎゅうに押し込まれたその袋の中身が薄らと見て取れる。

まだまだ野菜の名前とかは覚えられていないけれど……あれは確か“にんじん”とかいう代物だったような気がする。

他の野菜は……まだ覚えられていない。

大体、野菜って外見が似たものが多いから覚え難いのよね。

もう少しそれぞれの野菜に個性があってもいいのに。

味に個性がある事は……まぁ、認めて上げるけれど。

「それで、秀ちゃんは？　居ないの？」

「ああ、うん。少し前にどこかに出掛けちゃった」

「ふーん……そっか」

呟く霧歌。

そう呟いた霧歌の表情が一瞬悲しそうに曇ったのは……気のせいだろうか。

「ウリアちゃん、秀ちゃんの行き先とか聞いていないのよね？」

「うん、私がトイレに行っている間に行っちゃったから、聞く暇も無かったわ」

「そっかぁ――って、そう言えばウリアちゃん何か顔色悪くない？」

「あっ、いや、これはその……色々あったのよ、色々」

私は咄嗟に話を逸らして、濁す。

どうにか悟られないように笑顔で上手く誤魔化す。

「……ふーん、そっか。色々あったんだ」

「う、うん、そう、色々と、ね」

「まぁ、何があったのかはあえて聞かないよ。女の子同士、人に知られたら恥ずかしい事の一つや二つあるものだもんね？」

「そ、そう、よね」

苦笑と共にその霧歌の問いに答える私。

どうやら、霧歌は私がその事を隠したがっている事を悟ってくれたようだ。

何て良い人なんだろう。

何て出来た人なんだろう。

全く以て、秀とは大違いである。

まぁ、秀もそこまで深追いはしないだろうけどね。

多分、だけど。

「仕方ない……それじゃあ、秀ちゃんが帰って来るまで、夕飯作って待ってようか？」

「やったぁーっ、霧歌お手製のご飯だーっ！」

「言っておくけど、今日は秀ちゃんが居ない分、ウリアちゃんが料理を手伝うのよ？」

……。

「えっと……それは、味見役で？」

「あら、ウリアちゃん、面白い事を言うのね。それは一体全体何の冗談かしら？」

霧歌はそう言って私に満面の笑みを見せて来た。

その笑顔は私の言葉を本当に面白いと解釈しているから――ではなくて。

明らかに、あの脅迫染みた黒々しい笑顔だった。

そんな笑顔を見せられてしまったら……私としても、言葉を訂正するしかない訳で。

「……も、勿論、冗談よ。手伝うに……決まって、いるじゃない」

私は背筋をピンと伸ばしたまま霧歌の顔を見上げてそう声を絞り出す。

その必死に出した声は微かに震えていて、しかも私は霧歌の顔から視線を逸らす事が出来なかった。

まるで蛇に睨まれた蛙みたいな。

そんな感じ。

「そうね、手伝わなきゃね、ウリアちゃんも。働かざる者は食うべからずって諺もあるくらいなんだから」

「さぁ、お料理お料理～♪」と玄関に上がった霧歌はそんな唄を歌いながらリビングの方に姿を消した。

「……はぁ」

私は安堵の息を吐きながらホッと胸を撫で下ろす。

ああ、怖かった。

冗談抜きで取って食われるかと思ってしまった。

「……それにしても」

夕飯の時間、か。

私はたった今霧歌がやってきた玄関の方を振り返る。

よくよく考えれば――曖昧な記憶を総動員して思い出してみれば。

秀が出て行ったのは午後4時頃だったような気がする。

私はリビングの入り口まで歩いて、そこから中の時計で現在時刻を確認する。

「……午後、6時か」

という事は、秀はどこかに出て行って2時間も戻って来ていないという事だ。

いやまぁ……それは一般的には普通の事かも知れないのだけれど。

そうなのだけれど……何か。

「……1時間待って帰らなかったら捜しに行くかな」

秀への心配が降り積もり始めた心にそう言い聞かせて――私は霧歌の待つキッチンへと向かった。

◆◆◆

「……何、だって？」

「……あら、聞こえなかったの？」

それじゃあ、もう一度言って上げる――と架凪呀は俺に向かって言う。

やはり、依然とした、平然とした表情のまま彼女はその言葉を口にする。

「アンタがこの前戦った男――オッド・サスペクターは……私が、殺したのよ」

「そんな……一体、どうして」

「何を言っているのよ。失敗した隊員を粛清するのは……当然、隊長である私の役目でしょう？」

「……そんな」

そんな――そんな、理由で。

あいつは……オッドは殺されたのか。

虚実混交？

確かに、オッドは敵だ。

敵で……俺やウリアの命を狙って、殺そうとまでした。

……だけど。

それ以前に、あいつは俺と同じ一人の人間だった。

この世に生を受けた、単なる一人の人間だった。

それが……たかが任務を失敗しただけで粛清を受ける？

失敗しただけで、命を絶たれ、殺される？

失敗する事は確かに良い事では無い。

何かを失敗するという事は悪い事であり――例えば、会社ならば即座に首に繋がる可能性だって充分に有り得る。

けれど……任務を失敗しただけで、命を取られるだなんて。

未来の法律がどうなっているのかは知らないけれど、『科学発展側』のルールがどうなっているのかは知らないけれど。

そのやり方は――考えは、間違っている。

何の迷いも無く、俺はそう思う事が出来た。

そう考える事が、出来た。

「……ふざけんなよ」

「……何よ。オッドはアンタにとっての敵でしょう？　どうして敵の死に対してそんなに逆上しているのよ」

「そういう事じゃねーんだよ！」

俺は叫んでいた。

架凪呀に向かって――怒号を上げていた。

「敵だとか味方だとか、そういう事じゃない！　敵であれ味方であれ、肝心なのは人が死んだって事だ！　オッドは確かに敵だった！　だけど、それ以前にあいつも俺やお前と同じただ一人の人間なんだよ！」

「……そんなに急に怒られても困るわね。だって……そういう規則なんだから」

「……規則なら、そう取り決められたルールなら――人を殺しても良いって言うのかよ、お前は」

俺は架凪呀に問う。

対する彼女はその問いかけに考えるように少しの間を空けて――。

「……当たり、前でしょ」

俺から視線を逸らしながらこう答えた。

「規則の上では――殺しも、正当化されるのよ」

「……そうか」

「解った」と俺は右の手の内にある白い欠片を握り締める。

すると――その白い欠片は、その古代兵器は俺の思いに答えるかの如く白い光を発した。

俺の足元に現れる白い光の魔方陣。

『輪廻終焉（ラグナロク）』は白く光る粒子へと変換されて――宙を漂い始める。

「お前の――架凪呀の言いたい事はよく解った」

俺の周囲を漂う白い光の粒子。

それは再び俺の右手へと一点に集中し――細長い白銀の刀を創造する。

「だから、解った上で言わせて貰う」

――俺が今手にしているこの刀は。

未来の俺自身から託されたこの古代兵器は――何かを護る為に手渡されたものだ。

崩壊の一途を辿る運命の輪廻に終焉を迎えさせる為の兵器。

輪廻とは、運命であり、理（ことわり）であり、定めであり、そして――規則でもある。

ルールと言ってもいいだろう。

俺が手に入れたこの古代兵器は、その規則に終焉を齎す為のものだ。

――だから、俺は。

「今から俺は……お前を、救う」

「……救う、ですって？」

「その未来の規則に捕らわれてしまっているお前を……救い、出してやる」

架凪呀が未来の規則の上で誰かを殺すと言うのなら。

架凪呀が未来の規則の上で俺の命を狙うと言うのなら。

俺がその規則を――輪廻を、断ち切ってしまえばいい。

この武器はその為に――誰かを救う為に託されたものなのだから。

「……何だか、よく解らないけれど」

「まぁいいわ」と架凪呀はその携帯型転送装置を片手に言う。

「アンタがその古代兵器を起動させたという事は……戦う意思を見せた、って事で良いのよね？」

「正確には、お前を救う意思だけどな」

「救う意思なんか見せて貰わなくて結構よ……どうせ、誰も私を救う事なんて出来ないのだから」

「そんなものは……やってみないと解らないだろ！」

そう声を上げて俺は駆け出していた。

無論、向かう先は架凪呀の佇（たたず）む場所だ。

架凪呀の持つあの転送装置を壊せば――そうすれば、この戦いは終わる。

この無益な戦いは終焉を迎えてくれる。

もう、架凪呀と……戦わなくて済むのだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおっ！」

俺は雄叫びを上げながら真っ黒い大地の上を駆ける。

正面に佇んでいる架凪呀の右の親指が――携帯のボタンの上で素早く躍った。

虚実混交？

突如後方から聞こえて来る轟音。

俺は横目で後ろを振り返る――そこにはこちらに飛んで来るボウリングの玉ほどの大きさの黒い砲弾が見えた。

走りながら俺は白銀の刀を振り上げる。

俺の放った斬撃によってその砲弾は真っ二つに斬り裂かれた。

爆発する砲弾――俺はそれを背に架凪呀に向かって足を進める。

すると、架凪呀の背後の景色が再度歪んだ。

その景色の至る所が歪み――その歪みが先ほどと同様に幾つもの小さな漆黒の穴を創り出す。

そして、その穴の中から様々な兵器がその先端を突き出して来た。

連続して周囲に響き渡る大砲の音。

俺目掛けて解き放たれたそれらの砲弾を視界に捉えながら――俺は空中に出現した小さな魔方陣を踏み台に宙に跳躍した。

俺が先ほどまで居た場所が数多の砲弾によって爆発を起こし、破壊される。

その有様を視界に捉えつつ――宙で一回転して俺は架凪呀の目の前

に着地する。

真っ黒な地面にしゃがみ込んだまま俺は架凪呀の持つ転送装置目掛けて刀を左薙ぎに振るった。

「――――っ！」

すると、架凪呀は地面を蹴って後ろに跳ぶと俺の斬撃を躱した。

空を斬る俺の刀――跳び上がった状態のまま架凪呀はまた親指で転送装置を操作する。

次の瞬間、架凪呀が今立っていた場所の空間が歪み、そこに創り出された漆黒の穴から大砲の砲口が迫り出して来た。

「くっ……！」

俺は一度振るった刀を急いで持ち直し――その大砲に向かって振り上げる。

カンッという鉄が弾かれるような音と共にその巨大な筒は二つに斬り裂かれた。

その筒の中にある砲弾までも斬り裂いてしまったのだろう。

その大砲は二つに裂かれた直後に爆発を起こした。

その爆発によって巻き上がった粉塵の中を突っ切って――俺は架凪呀を追って大地を駆ける。

灰色の煙の塊の先。

そこには架凪呀の姿は無く――その代わりに、また数多の砲口が俺に狙いを定めていた。

「うっ……！」

すぐさま足を止めて俺は宙に向かって跳び上がる。

空中に足を着けた直後、様々な砲弾の雨が地上に向かって解き放たれた。

その幾多の砲弾によって吹き飛ばされる地上。

砂煙に包み込まれる大地を見下ろしていた俺は――ふと、背後にその感覚を、魔力の感覚を感じ取る。

後ろを振り返りながら白銀の刀を俺は振るった。

そこにあったのは漆黒の穴から迫り出した大砲の大きな口があった。

予め振り上げていた刀がその大砲を真っ二つに斬り裂く。

完全に振り上げられた白銀の刀――俺はその刀身に重みを感じ取った。

咄嗟に後ろを振り返る。

振り上げられた『輪廻終焉（ラグナロク）』の刀身の上には――いつの間にか架凪呀が立っていて。

「なっ……！」

俺がそんな驚愕の声を漏らした瞬間、架凪呀は俺に拳銃の銃口を向けた。

空中に響く渇いた銃声。

小さな光の魔方陣を蹴って後ろに跳んだ俺はその拳銃から発射された銃弾を何とか躱す事が出来た。

架凪呀はと言えば、『輪廻終焉（ラグナロク）』の刀身を蹴って上空に跳び上がっていた。

そして、彼女は地上に落下していく俺目掛けて銃弾を撃って来た。

何発もの渇いた銃声が俺の鼓膜を震わせる。

しかし――常人には見えないはずの銃弾の軌道が俺には見えていた。

何故かは解らないけれど、俺はちゃんと視界に捉える事が出来た。

先日、人型の『魔導獣機』と戦った時にもそうだったのだが……それはまぁ、後で考えるとして。

迫り来る銃弾に向かって俺は白銀の刀を振るう。

こちらに向かって落ちてくる銃弾を一つ一つ俺は斬り落としていく。

暫くすると、架凪呀の放つ銃弾の雨が止んだ。

「中々やるじゃない！」

上空から不敵な笑みと共に架凪呀がそんな言葉を発してくる。

「真之乃秀のくせに！」

「うるせえ！　一言余計――」

――と、俺は架凪呀に対してそう言い返そうとして。

思わず……何と言うか、口を噤んでしまった。

――それは。

「……あの、架凪呀」

「何よ！　急に何か黙っちゃって！」

「その、何て言ったら良いか解らないんだけど……その」

……何と言うか。

「何か白いものが……見えてしまっているんですけど」

「……は？　白い――ってハッ！」

その言葉の通り、ハッとした架凪呀は顔を真っ赤にしてスカートを素早く押さえる。

そう、俺が言った『何か白いもの』とは――主にスカートの中にあるそれの事で。

真剣な戦闘中に言うのは少しばかり色々な意味で不謹慎かと思ったのだが……うん。

幾ら見えてしまっているとは言え、それをずっと見続ける勇気は無い訳で。

……我ながら情けない話だが。

虚実混交？

「っ……こ、このっ、不謹慎よ、真之乃秀！」

どうやら、やはり俺の今の言動は不謹慎だったようだ。

架凪呀は依然として上空から俺に怒声を浴びせてくる。

「こういう時にまでそんな言葉を言う事が出来るなんて……流石は生粋の変態ね、真之乃秀！」

「誰が生粋の変態だ！　生粋でも無ければ、俺は変態でも無い！」

「ていうか……こんな真剣勝負の最中にそんな事を言えるなんて――アンタ、どんな神経してるのよ！」

「悪いな！　これはいつもお前と会話している時に出る癖みたいなものだ！　お前の毒舌と一緒だよ！」

「……癖、ですって？」

「ああ！　だって、こんな真剣勝負をしていたとしても、こんな殺し合いをしていたとしても――俺とお前は、まだ友達なんだからな！」

俺は言う。

我ながら途轍もなく恥ずかしい台詞だが……それでも、俺は迷いなく躊躇なく言う。

架凪呀に向かって言う。

未来の組織が対立しているという事実以前に、架凪呀の組織の規則以前に。

俺と架凪呀は――友達なのだ。

その事実はどんな時だって……変わらない。

俺はそう信じている。

「……何よ、それ」

馬鹿じゃないの、アンタ――と架凪呀は俺から視線を逸らしつつ呟くように言った。

「ハッキリと言いなさいよ……私はアンタの命を狙っている側の人間なのよ？　そんな私を――友達と思える訳が、ないじゃない」

「だから、さっきからハッキリと言っているだろ。お前は――俺の友達だって」

「……嘘」

「嘘じゃない」

「嘘よ！」

架凪呀の声が――音の無い世界に響き渡った。

「嘘って言ってよ……私なんか友達じゃないってハッキリと言ってよ！　でないと……でないと、私……！」

揺らいじゃう――と架凪呀は消え入りそうな声でそう言った。

「折角、ここまで来たのに……折角、こうしてアンタと対峙する事が出来ているのに……揺らいじゃうじゃない……！」

「……架凪呀？」

「揺らい、じゃう……だから、私を拒絶して。私なんか友達じゃないって言って。さっきの言葉は……嘘だって、言って」

「そう、言ってよ……！」と懇願するように声を絞り出す架凪呀。

「でないと、私……私、は……！」

――それでも。

例え、架凪呀がそう頼んで来ても――俺に土下座して懇願してきたとしても。

俺の考えは、変わらない。

俺の思いは変わらない。

「……嫌だ」

「……どう、して」

「それは……俺とお前が、友達だからだ」

「……言わないで」

「お前が何を言ったって、どんな事を言ったって……俺とお前は――」

「言わないでよっ！」

――その架凪呀の叫びに呼応するように。

数多の歪みが凍結した空間の天空に発生し――そこに生み出された漆黒の穴から幾多の武器が迫り出してくる。

「私とアンタはもう……友達じゃない。私とアンタは――敵同士、なんだから」

「……それでも、お前はこうなる前の俺の事を――友達と思っていてくれたんだな」

「嬉しいよ」と俺は笑みを見せる。

架凪呀に向かって、笑みを見せる。

「……止めてよ」

すると、架凪呀からは今にも消えてしまいそうなか細い声でこう言った。

「お願い、止めて……私はアンタにそんな言葉を掛けてもらう資格も、そんな笑顔を向けられる資格もないんだから……だから、だから……！」

止めてよっ――架凪呀の叫びが響き渡り。

その直後、幾つもの武器からそれこそ雨のように俺に向かって砲弾が降り注いだ。

「――『輪廻終焉（ラグナロク）』」

迫り来る砲弾の雨を見上げたまま――俺はその兵器の名前を呼ぶ。

右手に携えられた白銀の刀は俺の声に応えるように淡く白い光を発する。

その刀全体から確かに感じる魔力の感覚。

俺は刀の柄を両手で握り締めて――そして。

天空に向かって――降り注ぐ砲弾の雨に向かって刀を振るった。

白銀の刀から解き放たれた魔力が光へと変換され、その光は周囲に拡散し――巨大で歪（いびつ）な光の刃となって天へと突き進む。

俺の放った光の刃は全ての砲弾を破壊し、爆発させて、そのまま凍結した空へと飛んで行く。

そして――その刃は凍結した空に命中し、そこに亀裂を走らせた。

「……そん、な」

罅（ひび）の入った空を仰いで驚愕の声を漏らす架凪呀。

俺はその彼女が見せた隙を見逃さなかった。

虚実混交？

小さな魔方陣を足場に俺は上空に向かって跳躍する。

それから、俺は架凪呀の目の前に降り立つ。

架凪呀の視線がこちらに向けられる――それと同時に俺は白銀の刀を振るっていた。

俺の放った斬撃は今度こそ架凪呀の持つ携帯型転送装置を捉えた。

オッドの時と同じように――白銀の刀身はその転送装置の上半分を宙に刎ね飛ばす。

これで、架凪呀の手から転送装置は失われた。

これで――もう、架凪呀は武器をこの時代に転送する事は出来ないはずだ。

これでもう……俺と架凪呀は争う必要は無くなったはずだ。

「……」

半分となった転送装置を呆然と見つめている架凪呀。

「……止めない」

そして、その俺の言葉に架凪呀は壊れてしまった転送装置からこちらに視線を向けた。

ゆっくりと――視線を向けた。

「お前が何と言おうと……俺は絶対に止めない。何度でも言ってやるよ。俺とお前は……友達だ、敵同士だろうと、殺し合いをしようと――その事実だけは、絶対に変わらない」

「まぁ、友達の居ない俺が言える台詞じゃないかもしれないが」と俺は苦笑と共にそう言った。

「……」

対する架凪呀は――黙ったままだ。

黙ったまま、何も言わない。

何の言葉も――発しない。

「それでも……お前はまだ、俺と敵対するのか？　お前はまだ俺の命を――狙うのか？」

「……」

その俺の問いかけに――架凪呀は。

「……ええ、そうよ。当たり前じゃない」

「……架凪呀――」

「だって……仕方、無いのよ」

「私だって」と俺の言葉を遮る形で更に架凪呀は続ける。

「私だって……恩人を裏切りたくはないもの」

「……恩人、だって？」

「ええ、そうよ。『科学発展側』は――その組織そのものが、私にとっての大恩人」

だから、裏切るわけには行かない。

大恩人を裏切る訳には行かないの――と架凪呀は言う。

そして、そう言った架凪呀の右目が一瞬だけ赤い光を発した。

次の瞬間――架凪呀の右腕の周囲の空間が歪みを帯びた。

俺はそれと似た光景を前にも見た事があった。

それは――ストレンドが以前俺の前に現れた時と同じだった。

あの時も、あいつの右目が赤い光を発して――その後にストレンドの右腕の周囲の空間が歪んで、ガトリング砲が不意にその右手に出現した。

――という事は。

「私はその大恩人を裏切る訳には行かない――その大恩人から受けた命令を、遂行しない訳には行かないのよ」

「だから」と架凪呀がその言葉を言った瞬間、彼女の右手に突如その武器が出現した。

その武器とは――槍、だった。

先端の刃が三つに分かれた――柄の黒い槍。

「私はアンタを殺す――大恩人から、『魔術発展側』の命令を遂行する為に、アンタの命を取る」

架凪呀の携える槍の尾から溢れ出す蒼炎――彼女はその槍の柄を両手で握り締める。

その槍の刃の先端は三又に分かれていた。

「――『トリシューラ』」

架凪呀はそう言って――俺にその槍の切先を向けて来た。

「それが――この槍の、この兵器の名前」

「……トリ、シューラ」

「破壊を司る神、シヴァが持っていたとされる槍をモチーフとして、私の為に特注品として創り出された――未来にも過去にも一つしか存在しない『混合兵器（デュアルウェポン）』よ」

「へぇ……神話とかはよく解らないけど、『トリシューラ』って中々カッコイイネーミングじゃねえか」

「そんな悠長な事を言っていられるのも今の内よ、真之乃秀――さぁ、行くわよ」

「ああ、来いよ。さっさとお前を屈服させて……こんな戦い、終わらせてやる」

「……それはこっちの台詞よ」

架凪呀がそう言った瞬間、『トリシューラ』の三つに分かれた刃が蒼い炎に包まれた。

――そして。

「――《蒼炎彗星（ブルーコメット）》」

その槍の尾から爆発にも似た勢いで噴出される蒼炎。

次の瞬間、架凪呀はまるで彗星の如き猛スピードでこちらに向かって飛んで来た。

「――――っ！」

辛（かろ）うじてその架凪呀が繰り出した一撃を視界に捉えた俺は咄嗟に『輪廻終焉（ラグナロク）』を楯代わりに体の前に持って来る。

響き渡る凄まじい金属音。

何とか受け流す事の出来たその一撃――架凪呀が過ぎ去った空中にはその軌跡として蒼炎がほんの一瞬だけ残って消えた。

俺は架凪呀の一撃を受け流した事によって崩れ掛けた体勢を整えながら後ろを振り返る。

すると、架凪呀は『トリシューラ』の蒼炎に包まれた切先をこちらに向けていて――。

「――《蒼炎槍弾（ブルーバレット）》」

その槍の三又の刃が燃え盛り、そこから俺目掛けて蒼い炎の槍が撃ち出された。

俺はその槍を――間一髪の所で躱す。

それは俺がその槍を上手く視界に捉える事が出来なかったからだ。

あの人型の『魔導獣機』の動きよりも――速かったような気がする。

「……まだ、お前にそんな隠し玉があったなんてな」

俺は口の端に笑みを浮かべながら架凪呀を見据える。

「当たり前じゃない。私の手の内があれだけだなんて言った覚えは無いわよ」

「てっきり、あの転送装置を破壊すれば終わりだって思っていたんだけどな」

「考えが甘過ぎよ、真之乃秀。アンタは命を賭した殺し合いというものは全く以て解っていないわ」

「……さっき」

「えっ？」

「さっき、お前……『科学発展側』が大恩人だって――そう言ってたよな？」

「ええ、そうよ。私にとって、『科学発展側』は大恩人なの」

「それって、一体どういう意味なんだよ。単なる『魔術発展側』と『科学発展側』の抗争の為にお前は俺の命を狙っているんじゃなくて……その『科学発展側』に対する恩で、お前は行動しているんだよな？」

「その通りよ。私はその恩の下に任務を遂行しようとしているの」

「それじゃあ、そのお前が任務を遂行しようと思うほどの『科学発展側』に対する恩っていうのは……何なんだ？」

「……それは」

その俺の問いかけに――架凪呀は依然として戦闘態勢を保ったままこう答えた。

「『科学発展側』は――私に、私がこの世に存在しているという証明を与えてくれたのよ」

「存在しているという……証明？」

「そう……証明。私という存在はね、かなり曖昧なものなの」

「それは……一体、どういう」

「……真之乃秀、私から一つ質問させて貰うけれど――人の存在を証明できるものと言えば、それは一体何だと思う？」

「それは……えっと」

「……私はこう考えているわ」

答を言い淀んでいる俺を待たずして――架凪呀はその問いに自問自答する。

「人の存在を証明するもの――それは、その人の記憶だと私は思っ

ているわ」

「……記憶」

「例え誰も存在を認めてくれなくても、例え誰も存在を知らなくても――その人自身が今まで歩んできた人生の記憶を持っていれば、例え世界から存在を全否定されていたとしても、その人はそこに存在しているという事になるのよ」

「だから」と架凪呀は更に続ける。

「逆に――今まで歩んできた記憶を持たない人は、例え世界から存在を肯定されていたとしても、自分自身によって……その存在は否定されてしまうの」

例えそこに存在していたとしても。

記憶を持たなければ存在しないも同じ――と架凪呀は言う。

「そして……そんな、そんな曖昧な存在である私を、『科学発展側』は確固たる存在へと導いてくれた。私の存在を――きちんと肯定してくれたの」

「……それって、まさか、お前」

「……そうよ。今アンタが思った通り、そしてさっき私が言った通り――私の記憶は途轍もなく曖昧なのよ」

「記憶が無いって――訳じゃないのか？」

「ええ、記憶が無い訳じゃない。ただ……本当に途轍もなく、果てしなく、どうしようもないほどに――私の記憶は曖昧で、淀んでいて、濁ってしまっているのよ」

「アンタにそれがどんな事か解るかしら？」と架凪呀は自嘲的な笑みを浮かべて俺にそう問いかけた。

「自分の両親の顔を思い出そうとしても、自分の子供の頃の思い出を思い出そうとしても、大恩人であるはずの『科学発展側』の人達の顔を思い出そうとしても――そこには曖昧な記憶があるだけで、絶対に完全には思い出す事は叶わないの」

思い出そうとしても絶対に思い出せない。

霞の奥に記憶があって、手を伸ばしても届きそうで絶対に届かない――と架凪呀は言う。

そんな彼女は未だ、戦闘態勢を継続させたままだ。

「どうして、私の記憶がそうなってしまっているのか、私にも解らないわ。何かの病気なのかも知れないし、また別の原因があるのかも知れない――けれど、そんな曖昧な記憶の中で確かに残っていたものが、確かに私が覚えていたのが……私が『科学発展側』に所属している人間だという事」

「……」

……なるほど。

架凪呀の言っている事が何となく解って来た。

何故か思い出そうとしても思い出せないその記憶。

曖昧過ぎて――殆ど失ったも同然のそんな記憶を抱えたまま日々を生き抜くという事は。

多分、俺が思っているよりも……かなり、辛い事だ。

途轍もなく、苦しい事だ。

記憶の有無が自分自身への存在証明――その架凪呀の考えはおそらく正しい。

『過去』があってこそ『今』があり、『今』が『過去』に変わるからこそ『未来』がある。

自分という存在が『未来』へと歩みを進める為には――『過去』が絶対不可欠なのだ。

もし、今ここで今まで自分が歩んできた人生についての記憶が全て失われてしまったら――俺は一体全体どうなってしまうのだろうか。

……考えたくもないな。

嫌で、苦しくて、辛くて――死んでしまうかも知れない。

まぁ、記憶を喪った後の俺は自分が記憶喪失になってしまっているという事実さえも覚えていないのだけれど。

でも――架凪呀はまさに今そんな状況に陥ってしまっているのだ。

そんな彼女の記憶の中に――そんな曖昧な記憶の中に。

ただ一つだけ、確実に信じる事が出来る、信頼する事が出来る記憶があったら――どうなるだろうか。

俺だったらその記憶に縋り付くだろう。

そして、きっと架凪呀もそうしたのだろう。

だからこそ――架凪呀はここまで『科学発展側』に対して恩を感じている。

『科学発展側』を大恩人と呼ぶほどに――そこから受けた命令ならば何でも遂行しようとするほどに。

虚実混交？

「笑っちゃうでしょう？　私が正確に覚えているのは――精々、ここ最近の約二週間足らずの出来事だけなんだから」

「いや、別に笑いはしないよ。原因が解らないんじゃ、それは仕方ない事だし――」

――って。

ちょっと、待て。

今……こいつは、架凪呀は何て言った？

正確に覚えている記憶がここ最近の約二週間の記憶？

「……さて、もうそろそろこの辺で無駄話は終わらせても構わないわよね？」

そう言って、架凪呀は俺の視線の先で腰を低くして戦闘態勢を更に深めた。

俺は――その架凪呀の問いに答えない。

と言うか、答えられなかった。

何故なら――俺は先ほどの架凪呀の言葉に対して何かが引っ掛かったからだ。

「……真之乃秀？」

前方から架凪呀がそんな感じで怪訝そうに問いかけてくる。

しかし、俺は考えを巡らせる事を止めない。

考える事を――止める事が出来ない。

そもそも、架凪呀の記憶がそんな曖昧なものになってしまった理由は何だ。

本人は原因不明だと言い張っているが――物事には全て理由が存在する。

例えば、生まれた瞬間から人には何らかの形でペナルティという名の病気が科せられる事がある。

それは記憶障害も同じ事だ。

しかし――架凪呀と今まで会って、話して、喋っていても、彼女をそんな風に見える事など一度も無かった。

それだけでそう判断するのは些か理由が不足しているかも知れないけれど、とりあえず、架凪呀の記憶障害は病気によるものじゃない。

もっと、根本的な所に何か原因がある。

去年から今まで一年間架凪呀と同じ学び舎で過ごして来たのだ。

その一年間、俺は架凪後過ごして来て、彼女がそんな記憶障害を持

っている事など、気付かなかったくらいなのだから――。

「……」

……待てよ。

そう言えば……俺、去年も架凪呀と同じクラスに所属していたんだよな？

それなのに……架凪呀とどんな事を話したのか、全く覚えていないというのはどういう事だ。

いや、細かい事は覚えているんだ。

架凪呀が初めてのクラスで皆の前で自己紹介した事。

学級委員長に自ら進んで就任した事。

その頃から霧歌の学力に匹敵するくらい頭が良かった事。

特に数学がずば抜けていた事。

よく解らないけれど俺にだけ集中して注意を行って来ていた事。

それくらいの事は覚えているんだ。

でも、その一年間で架凪呀とどんな事を話していたのか……思い、出せない。

それは架凪呀と余り話した事が無いから仕方の無い事なのかも知れ

ない。

元々、俺は架凪呀に対してそこまで良いイメージを持っていなかったから……自発的に彼女を避けていた事もある。

それでも、俺はほぼ毎日学校でこいつから注意を受けていたはずなんだ。

それなのに、俺は――俺さえも、こいつが確かに居た記憶を覚えていないだって？

俺が覚えているのは架凪呀に対するそういうイメージだけだって？

オイオイ、冗談はやめろよ、俺。

それじゃあ……それじゃあ、まるで。

架凪呀が言うように、俺でさえもこいつの存在自体を否定しているみたいじゃないか。

架凪呀が――世界そのものから存在を否定されているみたいじゃないか。

まるで――最初から架凪呀の存在なんて無かったかのように。

「……まさ、か」

そして、俺の思考はその結末に辿り着こうとする。

けれど、その結末を俺は決して迎えたくは無かった。

だって――その結末を迎えてしまったら。

俺は、架凪呀の存在を真っ向から否定する事になってしまうから。

「嫌だ……止めろ」

――しかし。

俺の頭はこういう時にだけ嫌になるほど何故か冴えていて。

（――ああ、その事なら別におかしい事じゃないわ）

以前に――正確に言えば二日前に交わした会話の中のウリアのその言葉が。

俺の脳裏で強制的に再生された。

（世界線が変動して、平行世界が創造される際には、確かに歴史は変わるかも知れないけれど――それと同時に人々の過去もまた再構築されるから）

（秀だって記憶が残っただけで新しい記憶が付加されているかも知れないし――）

「……っ！」

そして――俺はその事実に気付いた。

気付いて、しまった。

それから、俺は架凪呀の言い分が――彼女の自論が正しかった事を今ここに再確認する。

確かに、架凪呀の言う通り、個人の存在証明はその個人の記憶だった。

人がここに存在しているという証明は記憶があってこそであり、また逆に記憶によってその人の存在はこの世に証明される。

記憶こそが、その人自身。

そして、俺は二日前のウリアとの会話で、その話に対してこう相槌を打っていた。

それなら色々と辻褄が合う――と。

もしも、ウリアの言う通り、世界線の変動によって新たなる平行世界が創造され――その世界で人々の過去が再構築されるのならば。

人々の記憶が再構築されるのならば。

世界が人々に対して辻褄合わせの記憶を創造するのならば。

架凪呀の記憶が曖昧なのは――世界から否定されているからではない。

むしろ、世界から肯定される事によって――創り出された記憶なのだ。

創造された、存在なのだ。

――そう。

架凪呀の記憶が曖昧なのは。

架凪呀の記憶がここ最近の約二週間――。

つまり、7月27日からの記憶しか存在しないのは。

『架凪呀琴羽』という存在が――そこから始まったからだ。

7月27日、そこで俺が『輪廻終焉（ラグナロク）』を拾った事によって起こった世界線の変動によって新たなる平行世界が創造された際に。

単なる辻褄合わせの為に――世界が新たに創り出した存在。

それが『架凪呀琴羽』だからだ。

架凪呀は――俺が世界線を変動させた事によって創り出された存在だった。

……っていや、まぁ、それは勝手に俺が言っているだけであって。

確実にそうと決まったわけではないのだけれど――でも。

そう考えると、まさしく辻褄が合うのだ。

架凪呀の記憶が曖昧なのも、彼女の記憶が約二週間前からそうなってしまっているのも。

俺が……『輪廻終焉（ラグナロク）』を拾って、世界線を変動させたからで。

新たに創り出された平行世界が辻褄合わせをしただけで。

ただその為だけに――創り出された、だけで。

「真之乃秀」

「！」

不意に聞こえて来たその声に俺はハッと我に返る。

その声は他でも無い、架凪呀のものだった。

黒い柄の刃が三又に分かれた槍――『トリシューラ』の切先を依然

としてこちらに向けたまま彼女はそこに佇んでいる。

架凪呀は先ほどからずっと腰を低くした戦闘態勢を取ったままだ。

こちらに向けられたその槍の刃は蒼く燃えていて、その柄の尾からも絶え間無く蒼炎が漏れ出している。

「さっきから何を考え込んでいるのか知らないけれど――真剣勝負の最中に考え事なんて、やっぱり余裕なのね、アンタは」

「い、いや、その……そういう訳じゃなくて」

「……何よ」

「いや……その」

「……まぁ、いいわ」

「アンタが何を考えているのか知らないけれど」と架凪呀は言う。

「とりあえず、もうこの辺で無駄話は終わり――ここからはまた、純粋な殺し合いよ」

「……架凪呀」

「……行くわよ」

その槍の尾から勢い良く噴射される蒼炎。

そして――俺の視界から架凪呀の姿が霞んだ。

「――――っ！」

俺は彗星の如くこちらに飛んで来た架凪呀の突撃を紙一重で躱す。

視界の左端に見える蒼炎の軌跡――俺は架凪呀が過ぎ去った後方を振り返る。

そこには架凪呀が居た。

すると、架凪呀は空中を蹴って上空へと跳躍した。

黒いポニーテールを翻しながら彼女は宙返りをして――『トリシューラ』の切先をこちらに向けた。

「――《蒼炎彗星（ブルーコメット）》」

次の瞬間、架凪呀が猛スピードでこちらに落下してきた。

それは彗星と言うよりも隕石に近く――俺はそれをその場から跳び退いて回避する。

蒼い炎を纏った架凪呀はそのまま勢い余って地面に墜落する。

彼女が着弾した地面が粉砕され、爆発を起こした。

改めて空中に足を着いた俺は地面を見下ろす――架凪呀が墜落した場所には大量の砂煙が立ち込めていて。

そして、その砂煙の中から突如蒼い炎の槍が飛んで来た。

目にも止まらぬほどの速さで飛んで来た蒼炎の槍に対して俺は反射的に白銀の刀を振るう。

響き渡る金属音――俺の放った斬撃は何とかその槍を弾き飛ばす。

続いて、地上に溜まっている砂煙が突如吹き飛んだかと思うと――そこから架凪呀がこちらに向かって突撃を仕掛けてきた。

再度、音の無い時間の凍結した空間に甲高い金属音が響き渡る。

俺は――こちらに迫ってきた『トリシューラ』の切先を『輪廻終焉（ラグナロク）』で受け止めていた。

足を空中で引き摺りながら、その勢いを殺しながら――何とか、その架凪呀の突撃を受け止め切る。

「……中々」

白銀の刀身に槍を突き付けたまま架凪呀は不敵な笑みと共に口を開いた。

「戦いの素人にしては――やっぱり、やるわね、アンタ」

「架凪呀……もう、止めよう。こんな事しても……何も得は無いぞ」

「確かに、私にもアンタにも得は無いかも知れない――だけど、『科学発展側』にとっては得があるのよ。私がアンタを殺せば――殺せば、私は恩人に受けた恩を返す事が出来るのだから」

「でも、そのお前の中にある『科学発展側』に対する記憶は――」

――そこで俺はまた言い淀む。

言って良いのか、それとも……駄目、なのか。

その境界線を俺はまだ引く事が出来ていなかったからだ。

「……何よ」

そして、架凪呀は俺の前で怪訝な表情を見せる。

「また急に黙っちゃって……また何が考え事？」

「いや、別に何も……」

「戦いの最中に考え事なんかしていたら――足元を掬われるわよ」

――その架凪呀の言葉の直後。

「ぐっ！」

俺は腹部に凄まじい痛みを感じた。

それは――架凪呀が足で俺の腹を蹴ったからだった。

「くっ……！」

その痛みを感じながら――俺はその衝撃で後ろにバランスを崩す。

そして、架凪呀はその俺の隙を見逃さなかった。

彼女の構えた槍の尾から――蒼炎が噴出される。

「――《蒼炎彗星（ブルーコメット）》」

俺目掛けて突撃を仕掛けてきた架凪呀。

俺はその一撃を白銀の刀を楯にして受け止める――しかし、俺はこの時、空中に足を着いていなかった。

その一撃に対して踏ん張る事が出来なかった俺はその衝撃に簡単に圧し負けて更に後方へと吹き飛ばされる。

「ぐあっ！」

背中に感じた衝撃――俺は凍結した空間の壁に激突した。

俺の体はその壁でバウンドして、そのまま落下を開始する。

「くっ……！」

背中から体中に走る痛みを耐えながら俺は何とか空中に足を着く事が出来た。

辛うじて、だが。

意識を失わなかった事を我ながら褒め称えたい。

俺が受けたダメージはそれほどまでに大きなものだった。

刀で防いだ上での――あの、衝撃。

まともにあの一撃を食らえば、ただでは済まないだろう。

ただでは済まない――と言うよりも、確実に『死』が待っているだろう。

「……そろそろ、降参したらどう？」

そして――頭上から降って来る、架凪呀の声。

荒い呼吸を繰り返しながら俺は顔を上げる――俺が立っている位置から斜め上に行った所に架凪呀は佇んでいた。

空中に立ったまま彼女はこちらを見下ろしている。

……どうでもいいが、今回ばかりは角度的にスカートの中は見えなかった。

本当にどうでもいいが。

「降参、だって？」

「ええ、そうよ。降参――そろそろ私に屈伏して、降伏したらどう？」

「俺がもしもお前に降伏したとして……俺には何かメリットがあるのかよ」

「そうね……アンタの命が少しだけ延命されるわ。アンタが降伏さえすれば、私がアンタを未来まで連れて行って、部下に処刑させるから」

「なるほどな……それは俺にとってある意味メリットであり、また、ある意味デメリットな訳だ」

「どうせ死んでしまうのなら、少しでも長く生き永らえた方が良いでしょう？　これは私なりの心遣いなんだから、素直に受け取ったらどうなの？」

「そんな心遣いなら俺は要らないよ。ていうか、そもそもお前から今まで心遣いなんか受けた覚えは無いから、な」

そう言いつつ俺は架凪呀の記憶に対する自分の考えを思わず思い出してしまった。

「当たり前でしょ。私だって、アンタに今まで気を遣った覚えはこれっぽっちも無いわよ」

「……そうだな」

確かに架凪呀の言う通り――それは当たり前の事だ。

「……ていうか、また無駄話が過ぎる所だったわね」

架凪呀はそう言うと俺に『トリシューラ』の切先を向ける。

「覚悟しなさい――真之乃秀。アンタが降伏しないのならば、私が

アンタをここで殺すわ」

「くっ……！」

……どうする。

どうするんだよ、俺。

俺が架凪呀を救うんじゃなかったのか。

未来の規則に捕らわれたあいつから――救い出すんじゃ、なかったのか。

それなのに、俺は一体何をしているんだ。

架凪呀は確かに強い――俺なんかよりも遥かに、強い。

それは生まれながらの才能の違いなのか、それとも場数の違いなのか。

そんな事を考えてしまうほどに架凪呀は強い。

……でも。

それで負けて、最終的には架凪呀を救えなくて、逆に殺されてしまいましたなんて。

笑えないぞ、俺。

「――私はアンタを、殺す」

俺が考えを巡らせている間にも架凪呀は言葉を紡ぐ。
俺に向かって――彼女はこう続けた。
「だから……だからせめて、私に殺されるのなら、せめて殺されるまでは本気で掛かって来たらどうなの？」
「……本気で」
「ええ、そうよ。本気――これは元々真剣勝負なんだから、殺し合いなんだから、本気で戦い合わないと詰まらないでしょう？」
「……」
――そう、か。
そうだったのか。
だから俺は……架凪呀を救えなかったのか。
架凪呀は――俺に対して本気で向かって来ている。
俺を本気で殺そうとしている。
それに対して――俺は、どうだ。
架凪呀を助けようとして、それで彼女を傷付けまいと出来るだけ反撃をせずに。

俺は一体全体……何をやっているんだ。

相手が本気でぶつかって来るのならば、こちらも本気でぶつかって行かなければ話にならないのは当然の事だ。

本気を出さなければ――勝利を収める事が出来ないのは当然の事だ。

俺は一体全体今まで何を考えていたんだろう。

本当に……俺は馬鹿だな。

霧歌やウリアが俺によくそう言って来るのも今更ながら解るような気がする。

本当に……俺は馬鹿で、どうしようもない奴だ。

俺は今まで架凪呀と繰り広げてきた戦いの中で彼女を救えなかったんじゃなかった。

元から――最初から、架凪呀を救おうと考えてすらいなかったのだ。

「……何を、笑っているのよ、アンタ」

その架凪呀の声に――俺は一度伏せた顔を上げた。

どうやら、俺は自分でも気付かない間に笑っていたようだ。

「……いや、そうだな、架凪呀」

「……何がよ」

「俺……今から本気で、お前と戦うよ」

――そうだ。

俺は今から、架凪呀と本気で交戦を挑む。

架凪呀を傷付ける為じゃなくて、架凪呀を殺す為じゃなくて。

架凪呀を――救う為に。

彼女を輪廻から救い出す為に――俺は今から全力を尽くす。

本気を出さなければ架凪呀どころか他の誰にも勝てないのは当たり前だ。

本気を出さないまま挑んだ生死を賭した勝負で誰も救えないのは当たり前だ。

だってそれは――本気を出していないのだから。

その事柄に対して本気で挑もうとしていないのだから。

出来るものも出来ないのは――当然の、事だ。

「何よそれ……まさか、言い訳のつもり？　今までアンタが防戦一方だったのは確かに認めるけれど――それはアンタが今まで本気を出していなかったとか、そう言いたい訳？」

「……俺はそう言ったつもりだ」

「……へぇ」

「なるほどね」と架凪呀は口の端に不敵な笑みを浮かべて言う。

「解ったわ……それなら、見せてみなさいよ。アンタの言う――本気という奴をね！」

そう声を上げる架凪呀――その瞬間、『トリシューラ』の切先が蒼炎に包み込まれる。

直後、俺に向けて蒼炎の槍が発射された。

しかし、半ばその攻撃を予想していた俺はその一撃が解き放たれた瞬間に空中へと跳び上がっていた。

小さな魔方陣を足場に空中を一気に駆け上がる。

そして、架凪呀よりも高い位置まで来た所で俺は白銀の刀に魔力を集中させながらそれを振り上げる。

「――はぁっ！」

俺は『輪廻終焉（ラグナロク）』を振り下ろす――振るわれたその白銀の刀は架凪呀目掛けて巨大で歪な光の刃を撃ち放った。

その光の刃を架凪呀は槍の尾から蒼炎を噴射する事で上空に飛び、それを回避する。

俺の放ったその刃は歪な形状のまま地上へと一直線に飛んで行き――真っ黒な大地の一部を吹き飛ばす。

音の無い世界に響き渡る轟音――その音を耳で感じながら再度俺は『輪廻終焉（ラグナロク）』に魔力を集中させる。

白い光を発する白銀の刀身。

それから、俺は凍結した空を振り仰いだ。

そこには既にこちらに『トリシューラ』の切先を向けた架凪呀が居て――。

「ブルーコメッ――」

しかし、架凪呀はその一撃を俺に放つ事は出来なかった。

何故なら、彼女の持つ槍の尾から蒼炎が噴射された瞬間――俺は刀を振り上げて再びあの光の刃を天に向かって解き放っていたからだ。

「くっ――」

迫り来る光の刃に架凪呀は顔を顰めて歯噛みしながら横に跳んでそれを躱す。

一方、対象を失った光の刃はそのまま上昇を続けて――凍結した空に命中し、爆発と共にそこに大きな亀裂を走らせた。

「――《蒼炎（ブルー）、彗星（コメット）》！」

架凪呀は空中を漂いながらも俺に正確に狙いを定めて――蒼い炎を噴射させて、俺に向かって突撃を仕掛けてきた。

彼女の姿が視界から消える瞬間、俺は地面を蹴って斜め上に跳躍する。

架凪呀は俺が立っていた場所に着弾した。

地上の一部が破壊され、砂煙が立ち込める――俺は宙返りをしながらその着弾地点から少し離れた場所に着地した。

砂煙の中に影が現れ、小さなクレーターの中に立ち上がる架凪呀を捉えると同時に俺は口を開いた。

「……やっぱりな」

「……何がやっぱりなのよ」

「お前の攻撃の事、だよ。お前の攻撃は確かに速い――それこそ、

目にも止まらないくらいの速さだ」

「だけど」と俺は続ける。

「その速さの代わりに、お前の攻撃には全て隙がある。それは、その速さを繰り出す為の下準備でその槍の尾から炎を噴射させる事だ」

炎の槍を撃つ時は刃に蒼炎を纏わせるようにな――と俺は最後にそう付け加えた。

「だったら何なのよ……それで、私の攻撃を見切ったつもり？」

「まぁ、お前にあの二つ以外の攻撃方法が無いのならそうなるのかも知れないな。多分だけど――お前の攻撃があの二つだけなら、俺にはもうお前の攻撃は……当たらない」

こんな感じで何だか得意気に言っている俺なのだが、実はつい先ほど気付いた事だったりする。

「……やけに、強気ね。それも急に」

「言ったろ……本気で行く、ってな」

「真之乃秀は本気になったら強気になるのね」

「まぁな。お前に勝つ為には――雰囲気も勝気に行かないと駄目なような気がするから」

「ふーん……それで？」

「何？」

「それで、私の攻撃をアンタが全て見切れる事は解ったわ。正直に言わせて貰うと、私の攻撃の弱点は今アンタが言った通りだし――でも、それで？　何なの？」

架凪呀は問いかける。

槍の黒い柄を両手で持ちながら――矢継ぎ早に俺にそう問いかけてくる。

「それで……まさか、私に降伏しろとか、降参しろとか――そう言わせたい訳なんじゃないでしょうね？」

「……俺は遠回しにそう言ったつもりなんだけど」

「やっぱりね……馬鹿にしないで、真之乃秀」

「言ったでしょう？」と再度俺にそう問いかけてくる架凪呀。

「私は『科学発展側』に恩を返す為にアンタとこうして戦っているのよ……私はその為にアンタと戦っているの。だから、アンタが死ぬか、私が死ぬまで――この戦いは終わらないわ。私が終わらせない」

「……それじゃあ、俺も一つ質問していいか？」

「……何よ、真之乃秀」

「お前は今、『科学発展側』に恩を返す為に――それだけの為に、俺とこうして戦っているって、そう言ったよな？」

「ええ、そうよ」

「それじゃあ……もし、お前の中にあるその恩が無かったとしたら、お前は俺と戦っていないって事なのか？」

「そ、それは……」

その問いかけに架凪呀は口を噤みながら俺から顔を背けて。

「そんな訳……ないでしょ。私は『科学発展側』の人間で、アンタは『魔術発展側』の人間――そんな恩なんか無かったとしても、私とアンタは元々相容れない間柄なのよ」

「……そうか」

――そうか。

今のでハッキリと……解った。

やっぱり、こいつは――架凪呀、は。

「それは……残念極まりないな」

「……もういいでしょう。ていうか、何でそんな事を聞いて来たのよ」

「別に……深い意味は無いよ」

「そう……何度も言うけれど、弱点を知られたとは言え――」

架凪呀の持つ槍の尾から噴き出す蒼炎――。

「――降参するつもりは、少したりとも私の中には無いからね」

「ああ……解ってる」

「……解っているのなら……っ！」

その架凪呀の声に――ほんの少しだけ怒りが混じる。

その怒りに共鳴するように『トリシューラ』の尾から噴射される炎の勢いが増した。

「そんな私の心を揺らがせるような言葉を――何度も言わないでよ！」

次の瞬間、架凪呀の姿が俺の視界から消えた。

しかし、俺はもうその攻撃の避け方を知っている――予めその彗星の如き突進を予測していた俺は左に跳んでそれを回避する。

その直後、俺が今立っていた場所に架凪呀が突撃し、地面を吹き飛ばした。

湧き上る砂煙――俺はその場所に向かって魔力を集中させた刀を振るう。

解き放たれる大量の魔力。

それは歪な光の刃へと変換されて――架凪呀の居る真っ黒な大地に創り出されたクレーター目掛けて飛んだ。

すると、不意に漂っていた砂煙の塊が蒼炎によって吹き飛ばされた。

それは架凪呀が『トリシューラ』を使って上空に飛び上がったからだった。

よって、俺の放った光の刃は目標を失って――そのまま凍結された空間の壁に激突する。

巻き起こる爆発――それによって更に凍結した壁に亀裂が走り、それは予め入っていた亀裂と繋がる。

「――《蒼炎彗星（ブルーコメット）》」

一方、空中に居た架凪呀は槍の尾から蒼炎を噴射させてこちらに再度突撃を仕掛けてきた。

先ほどから何度も言っているように――俺はこの架凪呀の攻撃の避け方を知っている。

その回避する方法を知っている。

――でも。

今回、俺はこの攻撃を避けない事にした。

何故なら――それは俺が架凪呀を信じているからだ。

勿論、無暗に架凪呀を信じている訳では無い。

ただ、架凪呀の今までの言動や仕草を加味した上で俺は彼女を信じる事にした。

俺の視界に今架凪呀は映っていない。

だから、彼女が今どの辺りまで迫っているのかは解らない。

――それでも。

架凪呀、ならば。

「えっ……？」

何も無い所から聞こえて来たその微かな声――その直後、俺の目の前に架凪呀の姿が現れた。

槍の尾から噴き出す炎の量が減少している――おそらく、彼女は意図的に炎の量を操作して勢いを殺したのだろう。

『トリシューラ』の三又に分かれたその刃は本当に、冗談抜きで俺の眼前で停止していた。

我ながら、その刃に驚愕の声を上げなかったのを褒め称えたい所だが――今はそんな時間は無い。

すると、架凪呀が徐にその口を開く。

それと同時に――俺は白銀の刀を振り上げていた。

「どうして――」

架凪呀が紡ごうとした言葉は甲高い金属音によって掻き消されてしまった。

俺の振り上げた刀は架凪呀の持つ槍を見事捉える――『輪廻終焉（ラグナロク）』

の斬撃を受けた『トリシューラ』は架凪呀の手を離れて宙を舞った。
弧を描きながら飛んだその黒い柄を持つ槍は俺達が居る場所から少し離れた地面に突き刺さる。
そして――その槍の所有者である架凪呀はと言えば、俺の斬撃の衝撃で少し後ろに弾き飛ばされていた。
「うっ！」
真っ黒い地面に尻餅を着いて呻き声を上げる架凪呀。
俺はそんな彼女の眼前に白銀の刀の切先を突き付ける。
数秒前とは真逆の立場が――今、俺の目の前に出来上がっていた。

「……どうして？」

架凪呀は徐に俺を真っ直ぐに見据えて――と言うよりも、睨み付けてそう問いかけて来た。

「どうして今……私の攻撃を、避けなかったのよ」

「……お前の事を、信じていたからだ」

「……何なのよ、それ。意味が解らない」

「お前が――俺を傷付けないって、そう信じていたからだ」

「だから……それの意味が解らないって、言ってるでしょう！？」

架凪呀は声を上げる。

俺に向かって――そう怒号を上げてくる。

「どうしてそんな……勝手に、私の事を信じるのよ！　もしかしたら、私は攻撃を止めなかったかも知れないのに、アンタは死んでいたかも知れないのに……どうして！」

「だから……それは、お前を信じていたからだって」

「何でそんなっ……だって、私はアンタを今まで殺そうとしていたのよ！？　私はアンタを本気で殺そうとしていたのに、どうしてそ

んな私の事を信じて――」

「だったら！」

俺は架凪呀の怒号を遮る。

遮って――彼女に向かって声を上げる。

「それならお前はどうして……攻撃を途中で止めたんだよ」

「！」

その俺の言葉に――架凪呀はハッとした表情を見せると咄嗟に顔を伏せた。

パキパキという音が閑静な空間に木霊している。

それは凍結した風景の壁の亀裂が侵攻していく音だった。

程無くしてこの空間の凍結は崩壊し、消えてしまうだろう。

そして、その亀裂の走る微かな音が聞こえて来るのは何の音も聞こえないからだった。

何の音も聞こえないのは――誰も何も喋っていないからだ。

俺の問いかけに――架凪呀が何も答えないからだ。

「……お前が」

だから――俺がその静寂を破る。
架凪呀の代わりに、俺が静寂を打ち破って言葉を紡ぐ。
「お前が攻撃を止めたのは……お前に、俺を殺すつもりが無かったからじゃないのか」
「……それは」
「なぁ、素直に言えよ、架凪呀」
「……」
「お前は――お前の、本当の気持ちはどうなんだよ」
「……」
「お前は……本当に、俺を殺したいのか？」
「……っ」
「『科学発展側』に対する恩がどうとか……お前はそう言ってるけどさ」
「……止めて」
「それはその恩に対する殺意であって、お前自身の殺意ではないんだろ？」
「止めてよ……ねぇ」

「大恩人である『科学発展側』から受けた命令を遂行しようとしているだけであって……本当は、お前は俺に対して殺意なんか抱いていないんだろ？」

「止めてって……お願い、だから」

「なぁ、架凪呀。本当の事を言えよ」

「……止めて」

「オイ、架凪呀」

「止めてって」

「架凪呀！」

「うるさいっ！」

俺と架凪呀の叫びが交差する――その瞬間、ガラスが割れるような音を立てて凍結していた空間が弾け飛んだ。

凍結していた風景の欠片は空中に飛び散り、地上に落下する前に宙で消滅していく。

天空の雲は流れ出し、戦闘機が動き始め、全ての喧騒が復活する。

凍結していた空間が――まさに解凍された瞬間だった。

「うるさいのよ……うるさいのよっ、アンタはっ！」

そう声を上げた架凪呀は俺が突き付けていた白銀の刀の刀身を握り締めた。

無論、架凪呀が刀を握ったのは素手だ――彼女の手からは勿論真っ赤な血が溢れ出す。

「アンタにっ……アンタに、私の何が解るのよ！」

架凪呀は怒号を上げる――それから、彼女は俺の胸倉に掴み掛かってきた。

俺と架凪呀は真っ黒な地面に倒れ込む。

その衝撃で俺は思わず『輪廻終焉（ラグナロク）』を手放してしまっていた。

俺の上に覆い被さっている架凪呀――彼女はまだ俺の胸倉を掴んだままだ。

「私の気持ちなんて……アンタにも、他の誰にだって……解る訳、ない」

――そんな時だった。

俺の頬に何かが落ちて来た。

雨だと思った――今日は確か雨が降るとか天気予報で言っていたから。

でも、それは違った。

俺の頬に零れ落ちて来たその雫は空から降って来たものではなくて
――架凪呀の瞼から零れ落ちたものだった。

それは――涙、だった。

架凪呀は、泣いていた。

ボロボロと涙を零しながら――頬に伝わせながら、顔を歪ませていた。

「最初は……私はただ、アンタを監視するだけの役目だったの」

そして、架凪呀は語り出す。

静かに――消え入りそうな声で言葉を紡ぎ始める。

「アンタが未来にどんな影響を及ぼす人間かは知っていた――だけど、私はただアンタを監視しろって、そう命令されていただけだった……でも」

途中から命令が変わった。

私はアンタを監視するだけの立場では無くなってしまった――と架凪呀は言う。

「以前までは定期的に私達の組織の人間をこの時代に送り込むだけだった――でも、アンタを護る為に『魔術発展側』の人間がこの時代に送り込まれた事が解った」

そして、私の所属する隊が選ばれた。

過去のアンタを討伐する為に私達第三部隊が選抜されたの――と架凪呀は震えた声で続ける。

「どうしてって……私はそう思った。どうして、私達なんだって、どうして、今更そんな任務を私達に任せるんだって――『科学発展側』は大恩人だけど、その時だけは恨んだりもしたわ」

架凪呀は心中を語るのを止めない。

彼女は心の底に溜まっていた思いを――ずっと、俺に向かって、俺の胸倉を掴んだまま語り続ける。

「遅かったのよ……その命令が私達に下ったのが。どうせなら、私がこの時代に来た時に命令してくれれば良かったのに……そしたら、そしたらアンタなんか何の気兼ねも無く殺して……殺し、て……！」

そこで架凪呀の声は一旦途切れる。

彼女は俺の胸倉を掴んだまま、俺の胸に顔を埋めるように項垂れて――そして。

「……ねぇ……どうして……？」

しゃくり上げながら、鼻水を啜りながら――涙をボロボロと零しながら。

架凪呀は俺に問いかける。

縋るように――そう問いかけてくる。

「どうして……アンタは、私の敵なの……？」

架凪呀は言う。

消え入りそうな声で――続ける。

「どうして、アンタが私の敵なのよ……どうして、アンタが『魔術発展側』の人間なのよ……どうして、アンタは『科学発展側』の人間じゃないのよ……どうして……どうして、どうして、どうしてどうして――どうして？」

どうして、アンタは『真之乃秀』なの？

架凪呀は――そう俺に問いかける。

涙を流しながら――その潤んだ瞳で俺を真っ直ぐに見つめたまま。

彼女はそう俺に問いかけて来た。

「アンタが『真之乃秀』じゃなかったら……私は、こんな気持ちには……ならなかった、のに……！」

「……架凪呀？」

「アンタが『真之乃秀』じゃなければ……アンタなんか、すぐに殺して、『科学発展側』に恩を返す事が出来たのよ……！」

でも、私にはもうそれが出来ない。

私にはもうそれが不可能なの――と架凪呀は必死に涙声を紡いでいく。

「一年前ならまだ良かった……だけど、一年前に、この時代に来て、アンタと同じクラスになって、アンタと話して、アンタと喋って、アンタと同じ時間を過ごして……私は、変わって、しまった……っ！」

「だって！」と架凪呀は涙を散らしながら俺に向かって声を上げた。

「だって……わたしっ、私はっ、アンタの事が……真之乃秀の、事が……っ！」

うっ、ううっ、うっ……ああ、あ、ああ……っ！

そして――架凪呀は遂に泣き出してしまった。

俺の胸に顔を埋めたまま、わんわんとまるで子供のように泣きじゃくり出す。

すると――まるで、その架凪呀の鳴き声に呼応するかのように。

共鳴するかのように。

天空を覆い隠している灰色の雲から――静かに音も無く何の前触れも無く。

雨が、降り始めた。

最初はぽつぽつと降っていた雨が――段々と激しさを増し、遂には大雨へと発展する。

長い間、空に停滞していたから雨が溜まっていたのだろうか。

凄まじい量の雨が途轍もない勢いで何もない焼け焦げた真っ黒な大地に降り注いでいる。

「うっ……ううっ、うっ、うう……っ！」

架凪呀は未だ俺の上で泣き続けている。

時折しゃくり上げながら、時折鼻水を啜り上げながら。

涙だけは絶えず流しながら――ずっとずっと彼女は泣き続けている。

「……」

俺は架凪呀の両肩にそっと手を乗せた。

それから、俺は体を起こし――架凪呀の体も一緒に起こす。

架凪呀は泣いているだけで特に何の抵抗も見せなかった。

ただ顔を伏せたまま――彼女は泣いているだけだった。

俺は地面に腰を下ろし、架凪呀も真っ黒な大地の上に座らせた。

架凪呀は両手で顔を覆って泣きじゃくっている。

「……」

……どうした、ものだろうか。

俺は……架凪呀に対して、一体全体何をして上げればいいのか。

俺は考える。

考えるけれど――何も、思い付かない。

……歯痒かった。

途轍もなく、歯痒かった。

自分が嫌になるほどに――歯痒かった。

目の前で友達が泣いているのに……架凪呀が、俺の目と鼻の先で泣いているのに。

それにも関わらず何もして上げられない、何も言って上げられない俺が――嫌で嫌で。

力を手に入れたのにも関わらず――何だか、俺自身がまた、とんでもなく無力に思えて。

歯痒くて……嫌、だった。

「ぐすっ……ねぇ、真之乃、秀……！」

そして、架凪呀は口を開く。

長い間、泣いて泣いて泣いて泣いて――泣く事を重ねた後で。

彼女は漸く口を開き、俺に向かってこう問いかけて来た。

「私は……どうすれば、いいのかな……？」

涙で濡れた顔で架凪呀はそう問いかけてくる。

いや、雨で濡れた顔なのか――今となっては、涙と雨が入り混じってしまっていてよく解らない。

それから、その架凪呀の問いかけに対して俺はどう答えればいいのか。

それも――解らなかった。

「……それは」

降り頻る雨の中――俺は架凪呀から目を逸らすように顔を伏せる。

天から降り注ぐ雨が目に入るのが嫌で。

架凪呀の答にすぐに答えられない俺が嫌で。

縋るようにこちらを見つめていて――いつもとは違う弱気な彼女を見るのが嫌で。

俺は顔を伏せた。

そして、俺は考え出す――考えを、巡らせ始める。

架凪呀はこれから一体どうすればいいのか。

何より、俺は目の前で泣いている彼女に対して一体何をすればいいのか。

架凪呀に何をして上げるのか――彼女にとって一番なのか。

どうすれば、俺は架凪呀を護り、そして、救った事になるのか。

「って……俺はまた何をやっているんだ」

降り続く雨音の裏で俺は小声でそう呟く。

いつの間にか、俺はまた考えを巡らせていた。

何をやっているんだ……それでさっき、架凪呀を救えなくなりそうになった事をもう忘れたのか、俺は。

余計な考えをするくらいならまず行動しろ。

行動して、失敗したのなら、その時は考えればいい。

打開策を考えるのは――行動して、失敗した後だ。

余計な考えを纏めていたら、護れるものも護れないし、救えるものも救えない。

だから――俺は。

「……架凪呀」

「ぐすっ……な、に……？」

「お前は……もう、俺を殺すつもりは無いんだな？」

「うん……ぐすっ、殺すつもりは無い――と言うか……私はもう、アンタを殺害する対象として、見られない、わよ」

「……そうか、解った」

架凪呀はもう俺を殺すつもりは無い。

それだけ聞けば――俺はもう十分だった。

俺はその場に立ち上がる。

降り頻る雨の勢いに負けないように、濡れた大地に足を取られないように。

しっかりと、その場に立ち上がる。

未だ地面に座り込んでいる架凪呀は不意に立ち上がった俺をゆっく

りと見上げて来た。

「……それじゃあ」

そう言いながら俺は架凪呀に左手を差し出す。

それから、俺は彼女に向かって――雨音で掻き消されないように、ハッキリとこう告げた。

「俺と改めて……友達に、なってくれないか？」

「……とも、だちに？」

「ああ、俺はお前と――架凪呀と、ちゃんとした友達になりたいんだ」

「……いい、の？」

「何がだよ」

「だって……私は、アンタを殺そうとしたのよ？　そもそも、私はアンタの敵で、敵の組織に所属している人間で……その上、私はアンタを――殺そうと、したのに……私は――」

「そんな事は関係無い」

俺は架凪呀の言葉を遮る。

どうでもいいと言うように、遮った。

そして、そんな俺の言い様に架凪呀はハッとして目を見開いた。

彼女は自分の台詞を遮った俺を無言で見上げている――そんな架凪呀を見下ろしながら、俺はこう続けた。

「……そんな事は、関係無いよ、俺にとっては。お前が敵だから何だ、お前が俺を殺そうとしたから何だよ。言っておくがな、この時代にそんな理由で誰かと友達になってはいけない――なんて法律は無いんだぜ？」

「……真之乃、秀」

「俺が敵という事実も、お前が俺を殺そうとした現実も、俺にとってはどうでもいい話だ、全く以てな。それに、その理由で友達になれないと思っているのはお前だけだろ？」

その理由が通用するのはお前だけで、そう言っているのはお前だけだ。

だから、俺はさっきそんな事は関係無いって言ったんだ――と俺は架凪呀に笑みを見せた。

「……本当に、いいの？」

架凪呀は俺を真っ直ぐに見上げたまま――恐る恐るそう問いかけて来た。

「私なんかを……友達に、して」

「ああ、構わないさ。お前はもう俺に殺意を抱いていないんだろ？

俺をまだ殺そうとしているんだったら少し考えたけれど――でも、考えを改めてくれたのなら、俺は是が非でもお前を友達にしたいんだ」

「まぁ、殺意を抱いていたとしても、どちらにしてもお前を友達にしようとしただろうけどな」と俺はそう付け加える。

「しかしまぁ、俺と友達になりたいか否かは結局の所、お前次第だ。俺と――『魔術発展側』と関わっている俺と知り合いになるって事は、お前の所属する『科学発展側』からも色々と制裁が与えられるだろうし、下手したらお前も命を狙われかねないからな」

「ええ……そう、よね」

「でもまぁ……その点については別に心配しなくていいからな？」

「えっ……？」と架凪呀は怪訝な声で俺にこう問いかける。

「どう、して？」

「だって、もしお前が命を狙われたとしても、俺がお前を護るからな」

「……アンタが、私を、護る？」

「何をそんな意外そうに言ってるんだよ、お前は。友達なんだから、友達同士、護り合って、助け合うのが当たり前だろ？」

俺は架凪呀に向かって言う――その言葉を受けた彼女は何故かほんの少し頬を赤らめているようだった。

熱でもあるのだろうか。

まぁ、さっきからずっと雨に打たれているからなぁ……夏とは言え、

ずっと雨に打たれ続けるというのは少し厳しいものがあるだろう。

「それは……本当、なの？」

「ああ、勿論だ。どんな刺客が未来から送り込まれて来たとしても、俺がお前を護ってやるよ。どんな魔の手からもお前を護って、救い出して見せる。俺が保障する」

俺が架凪呀を護る――俺にはその責任がある。

何故なら、俺は『架凪呀琴羽』を創り出してしまった張本人だから。

でも――勿論、彼女を救いたいという気持ちはそれだけじゃない。

それも理由には含まれているのだけれど、その理由の大半を占めているのは別のものだ。

それは――架凪呀が俺の友達だという事。

架凪呀は俺の事を友達と思っていないかも知れないけれど――それでも、俺は今でも彼女の事を友達だと思っているから。

だから、俺は架凪呀を護りたいと思えるのだ。

責任云々よりも――架凪呀は俺にとって友達だから。

そう、純粋に思えるのだ。

――そして。

そんな俺の言葉を受けた架凪呀は――。

「……ぷっ、くすっ」

――小さく、笑った。

「何よ、それ……俺が保障する、なんて」

「えっ、何か間違った使い方していたか、俺？　それとも、『ほしょう』の漢字が間違っていたのか？」

「違うわよ、ていうか、アンタが幾つか存在するどの『ほしょう』の漢字を使ったのか私が知る訳ないでしょ。ただ、アンタに保障されても――余り信用できないなぁって、そう思っただけよ」

「……相変わらず平然と毒舌を吐くよなぁ、お前って」

「言ったでしょ……癖だから、仕方ないのよ」

そう言って――架凪呀はその場に立ち上がる。

「……ねぇ、真之乃秀」

「何だ？　架凪呀」

「その……アンタの命を狙っていた私が言うのも少しおかしいかも知れないけれど。本当に……私なんかを友達にして、後悔しない？」

「ああ、後悔しない」

「更に『科学発展側』から命を狙われる事になっても？」

「ああ、勿論」

「更に私から毒舌を吐かれるようになっても？」

「癖なら仕方ないよな」

「……そっ、か」

そう呟いて――架凪呀は小さく微笑を浮かべると。

俺の左手を、自身の左手で握った。

「そこまで言うのなら……アンタの友達になって上げても、いいわよ？」

「上から目線という所が少し気になるが……まぁ、頼んだのは俺だからな。素直に礼を言わせて貰うよ――ありがとな、架凪呀」

「礼には及ばないわ、このくらい」

「やっぱり、そこも上から目線なんだな」

苦笑を零しながら俺は目線を斜め下へと持って行く。

そこには互いに握り交わされた俺と架凪呀の左手があった。

降り頻る雨の中で繋がった手と手――俺は本当の意味で架凪呀と友達になれた事を実感する。

「……ねぇ、真之乃秀」

そして、俺は不意に架凪呀からそう名前を呼ばれた。

「ん？　どうした――」

俺はそう言葉を返しながら顔を上げて――言い掛けたその言葉を思わず呑み込んだ。

何故なら、顔を上げた瞬間に架凪呀の体がこちらにふわりと被さって来たからだ。

平たく言えば、俺は架凪呀から抱き着かれていた。

「えっ……ええっ？」

突然のそのシチュエーションに焦る俺。

情けないが、俺はこうしたシチュエーションに対しては全く免疫が無いのである。

両腕が硬直していた。

女子から抱き着かれた時――この両手はどこに持って行けばいいのだろうか。

知っている奴が居たら今すぐ俺に連絡を入れて欲しい。

今の俺にはポケットから携帯を取り出す余裕さえ皆無なのだけれど。

「お、オイ……かな、あ？」

俺の背中に感じる架凪呀の両手の感覚。

俺の胸に感じる架凪呀の――柔らかい胸の感触。

俺の顔のすぐ横に感じる架凪呀の頭の気配。

それらを総合して――改めて俺は架凪呀から抱き締められているという事を実感する。

それから――暫しの沈黙が流れた後に。

架凪呀は俺に対してたった一言、耳元でそう囁いた。

「……ありがとう」

――その架凪呀の言葉。

おそらくは色々な意味の込められたそのお礼の言葉を――確かに耳で捉えながら。

俺はそのお礼に言葉を返す余裕も無いままに。

架凪呀から抱き締められている間――ずっと、両手を虚空で彷徨わせているままで。

依然として――降り頻る、そんな雨の中。

地上に降り注ぐ雨はまだ止む気配は無いけれど――何か、心に降り注いでいた雨は止んだみたいな。

そんな感覚を、俺は心で感じ取った。

彼女のとある頼み事

大雨の中、俺が自宅に帰り着くと家の前では霧歌が傘を差して待っていた。

「あっ、秀ちゃ――」

俺の存在に気付いた霧歌はこちらを振り返って――言い掛けた言葉を呑み込む。

それは俺が雨の中、傘も差さずに帰って来た事もあるのだろうけれど。

何よりも――霧歌がその言い掛けた言葉を呑み込んでしまうほどに驚いたのは。

俺の後ろに居る彼女の存在が大きいのだろう。

「……」

霧歌は少し驚いた表情でこちらを――いや、正確には俺の後ろに居る架凪呀を見据えている。

まぁ、その霧歌のリアクションは妥当なのだろう。

雨の中を傘も差さずに体中が泥だらけで、傷だらけで――洋服もボロボロとくればなぁ。

驚くのも無理は無い。

「いや、その……あのな？」

俺は言葉を選びながら霧歌にこの現状を説明しようとした――のだが。

どう説明したらいいのか全く解らなかった。

まずはどこから、何を話せばいいのだろうか。

そんな感じで――俺が言い淀んでいたら。

霧歌が小走りでこちらにやって来て――俺の右手を掴んだ。

「秀ちゃん！　何やってるのよ！」

「えっ、いや、その……」

「びしょびしょじゃない……ああもう、早く家の中に入りなさい！」

「お、おう、解った」

「架凪呀さんも！」

そう声を上げて俺の後ろへと視線を向ける霧歌。

「早く、もう手遅れかもしれないけれど、これ以上濡れる前に早く家の中に！」

「え、ええ……解ったわ」

後ろから架凪呀の少し戸惑った声が聞こえて来る――俺は霧歌に手を引かれるままに歩き出した。

「あっ……」

そして、一人その場に取り残されてしまいそうな、そんな架凪呀の左手を俺は掴む。

「えっ？」

架凪呀は一瞬怪訝な声を上げたものの――後は俺の手に引かれるままに付いて来てくれた。

俺達は霧歌に先導されるがままに家の中へと導かれるのであった。

◆◆◆

「ほら、二人ともそこに居て――ああもう、秀ちゃん！　玄関に上がっちゃ駄目よ、床が濡れるから！」

私がリビングでテーブルに頬杖を着いたままテレビを観ているとそんな霧歌の声が玄関の方から聞こえて来た。

確か、霧歌は秀の帰りを外で待っていたはずだけど……帰って来たのかな？

テレビの音に混じって閉じられたカーテンの向こう側から聞こえて

来る音を聞く限り――今、外は雨が降っているようだ。
秀は傘を持って行っていたのだろうか。
床が濡れる――と霧歌が言っていた事は、おそらく秀は傘を持って行っていなかったのだろうけれど。
「……って、二人？」
二人って……えっ？
秀と――もう一人は、誰？
私がそんな疑問を抱いていたら、リビングの出入り口の向こう側で霧歌が玄関の方へ駆けて行くのが見えた。
その両手には大量のタオルがあって――。
「ほら、これで体を拭いて――って、架凪呀さん、手怪我してるじゃない！　もう、本当にどうしたのよ、二人とも……後でちゃんと説明して貰うけど、今はとりあえず架凪呀さんの治療が必要ね！」
「……」
何か霧歌が秀とそのもう一人に一方的に話し掛けている声が聞こえて来るなぁ……。
秀はともかく、もう一人の方は可哀想に。
「それじゃあ、ちょっと私は救急箱取って来るから……架凪呀さん、

先にお風呂に行ってて」

「ええっ！？　わ、私が、ま、真之乃秀の家のお風呂に入るのっ！？」

「そうよ、そうじゃないと例え夏とは言え風邪を引いてしまうわ！　秀ちゃん、私が救急箱を取って来る間に架凪呀さんをお風呂場に連れて行って！」

「よし、解った。それじゃあ、俺はそのまま架凪呀と一緒に風呂に入ればいいんだな？」

「秀ちゃん！　こういう時くらいそういう発言は抑えて！」

「ご、ゴメン……」

……どうやら。

声の高さとか、秀にセクハラ発言を受けている所を加味すると――秀と一緒にこの家に帰って来たのは女の人、らしい。

秀が外出したのはその人と会う為だったのだろうか。

……何だろう。

何だか、心がモヤモヤする。

モヤモヤして、イライラして――何なのだろう、この気持ちは。

「……はぁ」

その気持ちを追い出す為に、吐き出す為に、私は大仰にため息を吐いた。

吐いてみたのだが――しかし、私の気持ちは晴れない。

それこそ、外に大雨を齎している灰色の曇り空のように。

私の心は、晴れない。

「ちゃんと架凪呀さんをお風呂場まで送るんだよ、秀ちゃん！　一緒に入るのは無しだからね！」

霧歌はそう言いながら、リビングの出入り口の前を通り過ぎる。

それから、霧歌に続いてタオルを頭に被った秀と私の知らない女の人がお風呂場の方に続く。

すると、廊下の方からこんな会話が聞こえて来た。

「そういえば、架凪呀は手を怪我しているんだったな……よし、それじゃあ俺が着替えを手伝って――」

「てっ、手伝わなくていいから！　早く出て行ってよ！」

「言っておくが、俺に疾（やま）しい下心は無いぜ？」

「どの口が言っているのよ！　アンタ、いい加減にしないと本当に怒るからね！」

「馬鹿野郎！　女子の着替えを手伝う事が男子にとってどれだけのロマンなのかお前は知らないのか！」

「出てけえええええええっ！」

……その会話に、私は怒りを通り越して呆れ顔を浮かべていた。

ていうか、あれ？

どうして、私はその秀と女の人が交わしている会話に対して怒りを覚えていたのだろう。

うーん……解らない。

解らないけれど、とりあえずイライラしたから。

だから、とりあえず私はリビングに戻って来た秀に向かって空のプラスチックのコップを投げ付けた。

「全く、架凪呀は照れ屋だな――ぷっ！？」

私の投げたコップは秀の顔面に見事命中した。

「よしっ！　百点！」

「喧しいよ！」

ガッツポーズをする私に秀は顔を赤く腫らしたままそう怒声を上げてきた。

「何よ、そんなに怒らなくてもいいでしょ？　単なる余興じゃない」

「余興で人の顔にコップを投げるとは何事だ！　ていうか、それが余興ならその後にもまだ何かあると言うのか、お前は！」

「フッ……後でフルコースを秀に堪能させて上げるわ」

「一体全体何のフルコースだよ……怪し過ぎるだろ。あっ、でも、その中にお前の女体盛りが含まれているのなら堪能してやってもいいぜ？」

「誰がするか」

そもそも何の女体盛りなのよ――って、そこは少しばかりツッコミ所がずれているように思えるのは気のせいか。

いや、気のせいじゃないわね。

うんうん。

「ていうか……誰か来てるの？　秀のでもなく、霧歌のでもない――誰か別の第三者の声が聞こえて来るけど」

「ああ、ちょっとな。後でお前にも紹介してやるから」

「ふーん……まぁ、どうでもいいけど」

そう言って、私は改めてテーブルに頬杖を着くとテレビの方へと視線を向けた。

どうでもいいとか言っておきながら、私は内心その第三者を自然と意識してしまっているのだった。

――そのせいなのだろうか。

私の心は未だ晴れ間を見せない。

どんよりと――モヤモヤとした雲が私の心の中を蹂躙（じゅうりん）していた。

◆
◆
◆

「うわぁ……生々しい傷だね。切り傷みたいだけど……転んだの？」

救急箱を開けつつ、私の右手の傷を見ながら夜華さんはそんな事を言ってきた。

「いや、違うけど……何と言うか、その」

「あっ、違うんだ。まぁ、何にしても、後で詳しく説明して貰うから……覚悟しておいてね、架凪呀さん？」

そう言って夜華さんは私にニッコリと笑みを見せ付けてくる。

「まぁ……よくよく見てみれば、転んで負うような傷じゃないよね、これって」

「え、ええ……そうね」

「包帯を――いや、まずはガーゼかな？　いや、その前に消毒か」

「消毒液、消毒液……」と救急箱の中から消毒液の瓶を取り出す夜華さん。

「ガーゼを浸して――これで良し、と。架凪呀さん、ちょっと沁（し）みると思うけれど、我慢してね？」

「あっ、ええ――って、痛っ……」

「あっ、ゴメン……そんなに痛かった？」

「う、ううん、大丈夫。少し思ったよりも……沁みた、から」

「そっか。でも、ほんの少し我慢してね？」

「え、ええ、解った――っ」

右の掌に走るその痛みに私は思わず目を瞑る。

涙が滲んでくるほどに、その消毒液は沁みて――尚且つ、痛かった。

刀を素手で掴んだ時はそれほど痛みを感じなかったのに。

感覚が麻痺（まひ）していたのかな。

「……よし、これで消毒は終わり。後はガーゼをテープで留めて、包帯を巻けば終わりだね」

次の行動を口にしながら、夜華さんはテキパキと私の怪我の治療を滞りなく熟していく。

「……何か」

「ん？　何？」

「何か……夜華さん、慣れてるね」

「ああ、これ？　慣れてると言うか、前に本でやり方を見た事があると言うか……まぁ、それだけよ」

「実際に誰かにするのは初めてだし」と夜華さんは言う。

「えっ、これが初めて人に施す手付きなの？」

私は素直に驚いていた。

初めてにしては手慣れ過ぎている。

学校でトップクラスの成績を収めている人というのはそういった知識にも精通しているのだろうか。

「……よし、これでオッケー」

そして、私がそんな感じで驚いている間にいつの間にか右手の治療は終わっていた。

「それじゃあ……今から、架凪呀さんはお風呂に入る訳だけれど」

「えっ……ほ、本当に入るの？」

「当たり前じゃない。だって、入らないと風邪を引いちゃうわよ？」

「そ、それはそうだけど……」

そうなん、だけど。

「だ、だって……このお風呂って、普段はあいつが――真之乃秀が、使っている所なんでしょ？」

「そうだけど……それが？」

「え、えっと……だから、その」

どうやら、夜華さんは同じ年齢の男子が普段使っているお風呂に入る事を余り気にしないタイプの人みたいだ。

……ていうか、それってまずどういうタイプなのよ、私。

いや、まぁ、私がそのタイプに当て嵌まる人間なのだけれど。

「……ああ、そういう事、ね」

すると、夜華さんはどうにか私の心中を察してくれたようで。

「でも、入らなきゃ駄目よ、架凪呀さん。変な意地を張って風邪を引いたんじゃ、色々と示しが付かないわよ？」

「うっ……わ、解った、わよ」

私は仕方なく――いや、本当に仕方なく、夜華さんの言葉に頷き、雨でびしょ濡れの洋服を脱ぎ始める。

普段……ここは、あいつが――真之乃秀が、使っている場所。

真之乃秀が、暮らしている、家の中。

今、勿論この場所にあいつの姿は無い。

だけど……何だか、私は変に意識をしてしまって。

「……っ」

頬が無意味に上気するのを私は感じた。

何を緊張しているんだ、私は……何を変に意識しているんだ、私は。

落ち着け、私。

落ち着け、落ち着け、落ち着け……。

そう自らに言い聞かせながらスカートに手を掛けた所で――。

「……また新手のライバルかぁ」

後ろに居る夜華さんが何か呟いたような気がした。

「や、夜華さん？　何か言った？」

「……ううん、何でも無い」

「それじゃあ」と夜華さんは脱衣所から廊下へと出た。

「私、着替えを取って来るから。夜華さんはそのままお風呂に入っててね？」

「え、ええ……解ったわ」

私はその申し出に頷く。

夜華さんは脱衣所の扉を閉めて――どこかに着替えを取りに行った。

そもそも、ここは真之乃秀の家のはずなのだが……女物の洋服は存在するのだろうか。

そんな事を思いながら、改めて私は脱衣を再開する。

雨で濡れた洋服は――当たり前だが、かなり重たかった。

そして――こちらも、当たり前なのだけれど。

洋服を脱いで、下着も脱いで、一糸纏わぬ姿になって。

私の体は……何だか、凄く軽くなった。

洋服の重みとは違う――何か、心の中にあった重荷までも脱ぎ去ってしまったような。

そんな、感じ。

「……」

私は、脱衣所の大きな鏡に全身を写す。

何も身には纏っていない――丸裸の、自分。

改めて確認するけれど、ここは普段真之乃秀も脱衣を行っている場所なんだっけ。

微かに……微かにだけど、何だかあいつの匂いがして来そうな――。

「……って、な、何を考えているのよ、私は」

最後に髪を束ねていたゴムを外して、私は曇りガラスが施されたお風呂場の扉を開けた。

◆◆◆

温かなお湯の温度が雨で冷え切った私の体に浸透していく。

包帯が巻かれた右手を湯船に浸けないようにしながら――私はお風呂場の天井を仰ぐ。

壁も、床も、浴槽も――何もかもが白い、その空間。

その空間に充満している白い湯煙が温かさに更に拍車を掛ける。

――気持ち、良かった。

こんなまったりとした、ゆったりとした……そんな時間を過ごすのはいつ以来だろう。

本当に……いつ以来だろう。

解らない。

遠い昔の事過ぎて――そもそも、私の記憶は濁り、淀んでいるから。

上手く思い出す事が、出来ない。

「……」

ぴちょん――という、天井から零れ落ちた雫が湯船に落下する。

そんな音を聞きながら私は自分の右手を見た。

彼女のとある頼み事？

そこには――包帯が、巻かれている。

そして、その包帯の下には傷がある。

私の体に刻み込まれた――その傷が。

（俺と改めて……友達に、なってくれないか？）

その白い包帯を見つめながら私は真之乃秀のその言葉を思い出した。

私に向かって差し出された――真之乃秀の左手を、思い出した。

「……」

――嬉し、かった。

それは勿論、こんな私に居場所をくれた――この世界に存在する意味を与えてくれた『科学発展側』にも感謝はしているけれど。

感謝してもし切れないほどに――している、けれど。

でも……大恩人であるはずの、『科学発展側』以上に。

『科学発展側』が私に居場所を与えてくれた時に以上に。

その言葉を真之乃秀が掛けてくれた時……私は、その恩を忘れてしまうほどに、嬉しかった。

あの時、私はあいつ以外のものが見えていなかった。
あいつ以外――私の目には、何も映っていなかった。
「……っ」
私は右手を握り締める。
すると、包帯の内側にある傷口が歪み、右手に痛みが走った。
しかし――それでいいって、私はそう思った。
この傷は一生この右の掌に残ってしまうのかも知れない。
でも、私はそれでいいって、そう思った。
この痛みがある限り、この傷が――私の右手にある限り。
私は一生――今日の出来事を忘れる事は無いからだ。
真之乃秀が私に言ってくれた事を――忘れずに済むからだ。
きっと、私はこの先、この傷を見る度に今日の出来事を思い出すだろう。
今日真之乃秀が私に掛けてくれたその言葉を――真之乃秀が私に差し出してくれた左手を。
思い、出すだろう。

だって……私はきっと、あいつの事が。

「……」

握った右の拳を、更に左手で包み込んで。

私はその両手を――胸に、当てる。

右手に刻み込まれたその傷。

その傷と共に――私の中に刻み込まれた、記憶とその想い。

新たな私の――存在証明。

私は両膝を曲げて、両足をこちらに持って来る。

膝を抱えた私――両足が浴槽の水面（みなも）を乱し、数多の波紋がその中で乱反射して、消滅していく。

幾度と水の跳ねる音が静かなお風呂場に響いて――木霊して、消えて。

（――どんな刺客が未来から送り込まれて来たとしても、俺がお前を護ってやるよ。どんな魔の手からもお前を護って、救い出して見せる。俺が保障する）

――その真之乃秀の言葉を思い出しながら。

私は、誰にも聞こえないような、そんな微かな声でこう囁いた。

「……ありがとう」

もう、それは二度目の言葉だったけれど。

そして、この場所からはきっとあいつには届かないのだろうけれど。

それでも――私は言わずにはいられなかったのだと、そう思う。

「本当にありがとう……真之乃秀」

だって……あいつは私の恩人だから。

私に新しい存在証明を与えてくれた――大恩人の、一人だから。

だから……うん。

感謝するのは、当たり前だよね。

だよね？

◆◆◆

お風呂から上がった私は夜華さんが用意してくれた女物のパジャマ（どこから持って来たのだろうか）を着て脱衣所の扉を開ける。

そして、私は廊下でうつ伏せに倒れている真之乃秀を発見した。

「ま、真之乃秀!?」

咄嗟に真之乃秀の傍に駆け寄って、しゃがみ込む私。

「……か、架凪呀、か?」

すると、そんな途切れ途切れの声で真之乃秀は顔を上げる。

こちらに向けられた顔は血の気が引いたように青ざめていた。

「ど、どうしたのよ、アンタ……こんな所に倒れて」

「い、いや、その……寒くて、さ。お前が上がるのをここで待ってたら……意識が段々と、遠退いて……がくっ」

「ちょっ、真之乃秀! 駄目よ、寝ちゃったら! こんな所で寝たら死んでしまうわ!」

「し、死にはしないさ……俺は人々の心の中で永遠に生き続けるのだから」

「真之乃秀、一体全体アンタが何を言いたいのかさっぱり解らないわ!」

「……ん？　ていうか、架凪呀」

「な、何？」

「お前……もしかして、パジャマを着ているのか？　お前は今、寝間着姿なのか？」

「え、ええ……そう、だけど」

「そうか……うん、なるほど」

「それじゃあ」と何やら一人納得した真之乃秀はその場に立ち上がって。

「お前のパジャマ姿をじっくり見るまでは死ねないな」

「……アンタ、今までの絶対に演技だったでしょ」

「何を言うか、演技な訳が無いだろうが。俺はお前のパジャマ姿を見て元気を供給しただけだ」

「ふーん、なるほどね。アンタ馬鹿なんじゃないの？　死ねばいいのに」

「何だとお前、もう一遍言ってみろ！」

「アンタ馬鹿なんじゃないの？　死ねばいいのに」

「本当に復唱してんじゃねーよ！　それも一言一句違わずに！」

「アンタが言えって言ったんじゃないの。自分の言った言葉に責任も持てないの？　死ねばいいのに」

「また死ねばいいのにって言った！」

というか、この真之乃秀のリアクションを見る限り、やはりさっきのは全て演技だったようだ。

少しでも心配した私が馬鹿だった……数秒前の私を殴ってやりたい。

「全くもう……アンタは。ほら、私は上がったから、さっさと入って来なさいよ！」

私は強引に真之乃秀の背中を押して脱衣所へと放り込む。

それから、その扉を私は閉めた。

「アンタがお風呂入り終わらないと……私、夜華さんに事情を説明できないんだから」

「どうしてだよ」と扉の向こう側からくぐもった真之乃秀の声が返って来る。

「お前一人でだって、説明くらい出来るだろ？」

「そ、それはそうだけど……その、何か、一人で私の正体を晒すのは――怖い、じゃない？」

「……怖い、ねぇ」

「な、何よぉ……あ、アンタだって、私の立場だったら怖いに決まってるんだから」

「まぁ、そうだな。お前の気持ちは少なからず解るよ」

「そういうのって、怖いよな」と扉の向こう側から聞こえて来る真之乃秀の声。

その声とほぼ同時に布が擦れるような――そんな音が聞こえて来た。

きっと、真之乃秀が服を脱ぎ始めたのだ。

「……」

その音を扉の前で聞いていた私は――ハッとして我に返る。

「……な、何を聞き耳立てているのよ、私は」

顔が少し火照っているのを感じる――それはきっと、お風呂上りだからという事だけは無い。

「ど、どうしよう……」

この場所から少しでも早く立ち去りたかったけれど、夜華さんが居る場所にはまだ行きたくない――と言うか、行けないし。

わ、私はどうすればいいのだろうか。

そんな感じで――私が脱衣所の扉の前で右往左往していると。

「……オイ、架凪呀」

「ひゃ、ひゃい！」

……突然扉の向こう側から聞こえて来た真之乃秀の声にビックリして思わず声が裏返ってしまった。

しかも、少し噛んじゃったし。

ああもう……何をやっているのよ、私はさっきから。

「な、何？　何か用？」

「……あのさ」

そして――少し間を置いた後に、真之乃秀は私に向かってこう問いかけるのであった。

「洗濯機の中にお前の下着らしきものがあるんだけど、お前もしかして今下着を着けていないのか？」

「何を勝手に見ているのよ！」

そう声を荒げながら私は脱衣所の扉を勢い良く開けて――。

「……あっ」

パンツ一丁の真之乃秀の姿を視界に捉えた私は素早く脱衣所を出て扉を閉める。

それから、私はその扉に凭れ掛かった。

「ごっ、ゴメンッ……真之乃、秀」

「い、いや、別に良いけど……俺の方こそ悪かったな、勝手に洗濯機の中を覗いたりなんかして」

「う、ううん……いいのよ……いい、のよ」

そう何度も同じ言葉を繰り返しながら私は先ほどと同じように——いや、先ほどよりも熱く顔が火照っているのを感じていた。

ああもう。

本当に……本当に、何をやっているんだ、私は。

「……し、下着は」

「えっ？」

「下着は……その、夜華さんがパジャマと一緒に用意してくれたから、ちゃんと、穿いてる」

「そ、そうか……ま、まぁ、当然だよな、そこは」

「そ、そうよ、当たり前じゃない。下着を穿かないなんて——わ、私はアンタみたいな変態とは違うのよ」

「俺は変態じゃない。桃源郷というロマンを求める冒険家だ」

「アンタ、頭沸いてるんじゃないの？」

「頭は沸いていないよ。風呂は沸いているけどな」

「全然上手くないわよ。むしろ下手ね。このド下手」

「そこまで言う必要無いだろっ！」

その後、真之乃秀がお風呂に入る事によって、この会話は強制終了へと追い込まれてしまった。

「……ていうか、絶対にあいつ逃げたわよね」

ほぼ確定しているそんな推測を呟きつつ、私はとりあえず真之乃秀がお風呂から上がるのを脱衣所の前で待つ事にした。

◆　◆　◆

暫くして、真之乃秀が脱衣所から姿を現した。

その体から上がっている微かな白い蒸気――仄かな良い香りを私は鼻で捉える。

髪でも、洗って来たのだろうか。

「……架凪呀？」

「えっ？　な、何？」

「いや、それはこっちの台詞なんだけど……どうした、こっちをじーっと見つめて。俺の顔に何か付いてるか？」

「い、いや……べ、別に何でも無いわ」

私はその真之乃秀の言葉に慌てて顔を伏せる。

今の私は少なからず顔が赤くなってしまっていただろう。

気付かれて……いなかっただろうか。

「ふーん……まぁ、それならいいんだけどさ」

頭上から聞こえて来る真之乃秀の納得した声。

良かった――どうやら、気付かれていなかったらしい。

「それじゃあ……早速、行くか」

「え、ええ……そうね」

「まぁ、そんなに緊張するなって。お前の事なら、霧歌は容易に受け入れてくれるから」

「……どうして、そんな事が言い切れるのよ。まだ話してすらいないのに」

「それはまぁ、あれだ」

そう言って――真之乃秀は私に笑みを見せる。

私を安堵させるかのような、そんな笑みを見せる。

「この家にはもう一人、お前と似た境遇の奴が居候しているからだよ」

◆◆◆

真之乃秀に連れられて、私はリビングにやってきた。

そして、そこにあったテーブルの椅子の一つに、私は座っている。

横に少しだけ長いテーブル――私の隣には真之乃秀が居た。

それから、私達の正面――そこには夜華さんと、私の知らない金髪碧眼の少女。

その少女は……えっと、あの服装は何だっけ。

確か……セーラー服とかいうものだったのだろうか。

多分、そんな感じの名前をした洋服を着ていた。

私は歴史の失われた２０５６年で、可能な限りこの時代の常識について学んだはずなのだが――。

日常的に、このセーラー服を着るという常識は確か無かったような気がする。

それとも、私が勉強不足なだけなのだろうか。

実は日常的にセーラー服を着るのが当然みたいな、この時代にはそんな常識があって――。

「オイ、架凪呀」

「えっ……な、何？」

私がそんな思考を巡らせていると隣に居る真之乃秀が肘で私の右腕を小突いてきた。

「さっさと話さないと、いつまで経っても終わらないぞ？」

「そうよ」と真之乃秀の言葉に同意したのは私の右斜め前に座る夜華さんだった。

「架凪呀さんの話が何なのかは知らないけれど、どれだけ話し難い事なのかは解らないけれど……でも、架凪呀さんが“話す”と心に決めたのなら、出来るだけ早く話した方が私は良いと思うわよ？」

「え、ええ……そうね」

「……ていうか、架凪呀さん？」

「えっ、な、何？」

「その架凪呀さんの話を聞く前に一つ質問しておきたい事があるんだけど、良いかな？」

「え、ええ、良いけど……何？」

「単なる純粋な探求心の下に私はこの事を知りたいだけだから、架凪呀さんは適当な答を適当な感じで返してくれればいいから」

「えっとね」と夜華さんはニッコリと満面の笑みを浮かべて私に向かって口を開く。

その満面の笑みは脱衣所で私に見せてくれた笑顔とはまた違うような――。

というか、夜華さんの体の周り何やらどす黒いオーラが渦を巻いているような気がする。

……き、気のせいだろうか。

私がそんな事を思っていると、夜華さんは私に向かってこう問いかけて来た。

「これは私の推測でしかないのだけれど――もしかして、夜華さんと秀ちゃん、私達に結婚報告をしに来た訳じゃないよね？」

「ええっ！？」

「はぁっ！？」

「ええ――――っ！？」

私の驚愕の声と、真之乃秀の驚愕の声と、金髪碧眼の少女の驚愕の声がそれぞれリビングに響き渡った。

「ち、ちがっ……違う、わよ！　ねぇ、真之乃秀！？」

「あ、当たり前だろ！　何を言ってくれるのかな、この霧歌さんは！」

「ちょっと！」とテーブルに足を強く着いて真之乃秀の胸倉を掴んだのは金髪碧眼の少女だった。

それによってスカートの中身が丸見えになってしまっているのだが……少女はそれを気に留める様子も無く真之乃秀に向かって怒声を放つ。

「秀！　あなたそれ、本当に違うんでしょうね！」

「だ、だから、違うって言ってるだろ！　ていうか、テーブルの上に足を乗せるんじゃねえ！」

「本当なんでしょうねぇ！」

「だから、違うって――それから、体を前後に揺さ振るのは止めろ！」

「だって」と夜華さんは依然としてどす黒いオーラを体に纏ったまま、ニッコリと満面の笑みを浮かべて言う。

その笑顔に私は少なからず恐怖を感じ取った。

どうして、私は笑顔を見て恐怖を感じているのか――自分でも意味が解らなかったけれど。

彼女のとある頼み事？

「雨の降る中、二人とも傘を差さずに意味有り気な雰囲気を醸し出しながら家に帰って来るなんて……これはもう、二人の間に何かがあったとしか考えられないじゃない？」

「霧歌、落ち着け。落ち着いて散策すれば他にも考えは見つかるはずだ」

「あら、私は至って冷静沈着よ？」

「それなら、その体から溢れ出している何か訳の解らないオーラを引っ込めたらどうだ」

……真之乃秀にも見えていたんだ、あのオーラ。

何だか安堵感を覚える私。

「本当にそういう訳じゃないから、だから――ウリア、俺を睨み付けるのをとりあえず止めないか？」

「止めないわよ。私はね、今視線で人を殺せるか否かを実験しているの」

「実験するな。本当に俺が死んだらどうするんだ」

「赤飯を炊くわ」

「炊くな！」

その真之乃秀と――金髪碧眼の少女の遣り取りを私はただ黙ってじっと観察する。

言い争いという名の会話を交わしているこの二人は何だか楽しそうで、息が合っているという感じがして。

そして――心が、ざわついた。

心がざわめき、淀み、濁って……何だか、途轍もなく不愉快な感じを私は覚えた。

どうしてだろう。

ただ――この二人は会話を交わしているだけなのに。

「オイ、架凪呀」

「！」

突然右隣から呼び掛けられた私は反射的に真之乃秀を振り返る。

「な、何？」

「さっさと説明して終わらせようぜ……この状況、何だか微妙に面倒臭く思えてきたから」

「え、ええ……そう、ね」

真之乃秀にそう言葉を返して、私は前を向く。

私の正面には夜華さんとまだ名前の知らない金髪碧眼の少女が居る。

「すぅ……ふぅ」

私は息を吸って、その吸った息を吐いて。

深呼吸をして――再度、口を開く。

「あの……夜華さんとそれから――えっと？」

「ウリアール＝ブレイザーよ」

「それじゃあ――ウリアール＝ブレイザー、さん。これから私が話す事は……きっと、二人には簡単に信じて貰えないだろうけれど」

――だけど。

「だけど、二人には私の事をよく知って貰いたいから。知った上で――私の事を、ちゃんと信頼して貰いたいから……だから、その――」

「架凪呀さん」

私のその言葉は――途中で夜華さんに遮られた。

いつの間にか俯かせてしまっていた顔を私は上げる。

そこには――夜華さんが満面の笑みを浮かべていて。

でも、その笑顔には先ほどのようなどす黒いオーラは無くて。

さっき真之乃秀が浮かべていたような――私を安心させるかのような。

そんな笑顔が、そこにはあって。

「これに近い事を……私は前にも言った事があるのだけれど。きっと、私は、架凪呀さんが何を言っても、信じる事が出来ると思うよ？」

「そんな……まだ、私の話を聞いていないのに？」

「聞いているとかいないとか、そういう事じゃないよ。架凪呀さんの事情を知っているとかいないかでもない」

「だって」と夜華さんはまた私に優しく微笑み掛ける。

「私達は――同じ学校の同じクラスに所属している同士で、友達、でしょ？」

「……とも、だち」

「……それとも、それは私がそう思っているだけで、夜華さんはそう思ってはいないのかな？」

「い、いえ……そういう事じゃないの」

そういう事じゃ――なくて。

ただ……ただ、私は。

「ただ……その、“友達”って――言ってくれた事が、嬉しくて」

私がそう言うと、夜華さんは少し驚いた顔を見せて――柔らかな笑みを浮かべる。

「……という事は、私は架凪呀さんの友達――って事で良いのかな？」

「え、ええ、勿論」

「そっか。それは良かった」

「私と架凪呀さんは友達なら」と夜華さんは言う。

「いやまぁ、友達じゃなくてもそうだけど――私は、架凪呀さんの言葉をちゃんと信じるという体で聞くから、安心していいよ？」

「あ、ありがとう……え、えっと」

私は金髪碧眼の少女――もとい、ウリアール＝ブレイザーさんの方に視線を向ける。

彼女はテーブルに頬杖を着いたまま不機嫌そうな表情でこちらに視線を向けないまま――。

「……まぁ、霧歌がそう言うのなら、私も信じて上げてもいいわよ」

「……あ、ありがとう」

私は思わず苦笑する。

何だか……私、嫌われているような、そんな気がする。

今日初めて会ったはずなのに——気のせいだろうか。

気のせいで、あって欲しい。

彼女のとある頼み事？

「……」

そして――私は最後に真之乃秀を振り向く。

振り向くと言うか、振り仰いだ。

真之乃秀って、意外と背が高いんだ。

まぁ、座高が高くて足が短いだけかも知れないけれど。

一年間も一緒に居たはずなのに――こんな事も、知らなかったんだ、私って。

それから、私の視線に気付いた真之乃秀もこちらを振り向いてくる。

真之乃秀は――こちらを振り向いて、静かに笑みを見せると、頷いてくれた。

「……うん」

その笑みに私も笑みを浮かべて頷き返すと――語り、始めた。

私という存在を皆に解って貰う為に。

「……実は――」

語り、始めた。

◆◆◆

「――以上が、今日まで私が隠してきた……秘密」

１０分ほどの思っていたよりも僅かな時間で私は全ての事を告白する事が出来た。

私が未来からやって来たという事。

私が『科学発展側』という組織の人間で――元は真之乃秀の監視役だったという事。

そして、監視役から一転して真之乃秀を抹殺する為の任務を受けていたという事。

しかし、今は真之乃秀の味方である事。

信じて貰えないかも知れないけれど。

色々な意味で信用して貰えないかも知れないけれど。

私はその全てを――曝け出した。

そして――その話をした後の夜華さんとウリアール＝ブレイザーさんのリアクションと言えば。

「……」

「……」

夜華さんはほんの少しだけ驚いた表情を。

ウリアール＝ブレイザーさんに至っては、ぽかーんと口が開けっ放しになっている。

「……っ」

その微妙な雰囲気に耐え兼ねて、私は咄嗟に顔を伏せた。

やっぱり、信じて貰えなかったのだろうか。

未来からやって来たなんて――そんな話、普通なら信じられない、だろうし。

痛い人だと思われて――。

「何だ、架凪呀さんも未来から来た人だったんだ」

「……」

えっ？

不意に聞こえて来たその声に――私はゆっくりと顔を上げる。

そこには先ほどと同様にニッコリと笑みを浮かべた夜華さんの姿があった。

「夜華さん……信じて、くれるの？」

「だから、さっきから言っているでしょう？　私は、架凪呀さんの言葉を信じる、って」

「でも……未来から来たなんて、そんな何の信憑性も無い話を」

「うーん……確かに、普通なら信じないかも知れないけれど……ねぇ？　秀ちゃん？」

「ああ」と私の隣で頷く真之乃秀。

「俺はともかく、霧歌も信じざるを得ない事になってしまっているからな」

「って……もしかして、夜華さんはまさかアンタが今どういう状況に陥っているのかも、知っているの？」

「ああ、勿論」

「何だぁ……」

私はホッと胸を撫で下ろす。

それなら最初に言って欲しかった……。

無駄に緊張してしまったじゃない。

「それじゃあ……もしかして、私と似た境遇の居候って」

「ああ、そこに居る金髪碧眼が、お前も言っていた未来から派遣された俺のボディーガードのウリアール＝ブレイザーだ」

「あっ……そ、そうだったのね」

私は正面に座っている金髪碧眼の少女を振り向く。

このウリアール＝ブレイザーさんも未来人だったんだ……。

何だか、親近感を覚えざるを得ないわね。

「え、えっと……改めて、自己紹介をさせて貰うわね。未来人同士の好（よしみ）として」

そう言って、私はウリアール＝ブレイザーさんに向かって左手を差し出す。

「私、架凪呀琴羽。ウリアール＝ブレイザーさんと同じで、未来から来た――」

――次の瞬間。

私は、差し出した左手に痛みが走った。

「――――っ」

気付けば、私の左手はいつの間にか椅子の上に立ち上がっていたウリアール＝ブレイザーさんの左足によって踏み付けられていた。

テーブルに固定される私の左手。

「な、何を――」

そして、私はウリアール＝ブレイザーさんを振り仰いで――言い掛けた言葉を咄嗟に呑み込む。

何故なら、いつの間にか私の目の前には燃え盛る炎の剣が突き付けられていたからだ。

「……！」

突如、巻き起こったその事態に私は目を見開く。

炎の剣は――私の眉間の直前で停止していた。

燃え盛る炎の熱が私の肌に、伝わる。

私は目だけを動かして――目の前のウリアール＝ブレイザーさんを見上げた。

当然だけれど、対する金髪碧眼の彼女はこちらを見下ろしていた。

そして――こちらを見下ろす彼女の目には。

殺気が、間違いなく宿っていて。

「オイ、ウリア！　止めろ！」

「ウリアちゃん！」

周囲から真之乃秀と夜華さんの叫びが聞こえて来る。

けれど――そんな二人の声を無視してウリアール＝ブレイザーさんは私に向かって口を開いた。

「……さっきの話によれば、あなたは『科学発展側』の人間みたい

ね」

「……え、ええ……そう、よ」

「秀のボディーガードという立場から解るかも知れないけれど――私はね、あなたの所属している『科学発展側』と敵対している『魔術発展側』の人間なのよ。秀や霧歌はあなたの事をもう信用しているみたいだけれど……でも、『科学発展側』に所属している人間を、私はおいそれと信用する訳には行かないのよ」

「解る？」と彼女は私に問いかけてくる。

「幾ら心を入れ替えたとしても、幾ら考えを変えたとしても――あなたはまだ『科学発展側』の人間には変わりないのよね？」

「……それ、は」

――それは。

確かに『科学発展側』は私にとって大恩人だ……だけど。

真之乃秀は私にとって、『科学発展側』よりも更に大恩人だ。

このウリアール＝ブレイザーさんが――何を言いたいのか、私には解る。

真之乃秀や夜華さんは私を簡単に信用してくれた。

あっさりと――私の言う事を信じて、私を受け入れてくれた。

――だけど。

普通ならば、このウリアール＝ブレイザーさんのような対応が正しいのだ。

少し前まで敵だった人間が――急に味方になろうとするなんて。

考えるだけでも、どこかおかしい。

信用しない方が当然なのだ。

それでも――真之乃秀や夜華さんはそんな私を受け入れてくれた。

そんな私を、信用してくれた。

それならば――私もそれ相応の犠牲を払わなければならない。

それ相応の証を見せなければならない。

「……違う、わ」

「……何？」

「私は確かに『科学発展側』の人間よ……『科学発展側』の人間、だった」

「ふーん……それで？」

「だから……もう、私は、違う。『科学発展側』の人間じゃ……ない」

「……それを証明するものは？」

「……残念ながら、そんなものは無いわ。だけど……転送装置を真之乃秀に壊された事で、私は未来に連絡を取る事は出来なくなったのは確かよ。私は未来と――もう、接触を図る事は、出来ない」

「……だから？」

「ええ……勿論、それだけで信用して貰おうとは思っていないわ。でも……私は、さっき、真之乃秀から友達になろうと手を差し出されて――その手を握り返したの。こんな私と友達になりたいと言ってくれた真之乃秀の申し出に頷いて、その手を握り返して――私は、真之乃秀にお礼を言ったの」

ありがとうって。

私はあの時――確かに、真之乃秀にお礼を言った。

雨が降り続く中、その雨音に掻き消されないようにしっかりとハッキリと――そう、言った。

それは心の底から出た言葉だった。

今までの私なら――絶対に言えない、その言葉。

嘘でもなく、偽りでもなく、偽物でもなく、作り物でもない――その本当の言葉。

その言葉を、私は真之乃秀に言ったのだ。

「そのお礼の言葉だけは――絶対に、嘘じゃないって、神に誓って、言える。絶対に嘘じゃないって――そう、言える」

「……ふーん」

「あっそう」とそう一言だけ言って、ウリアール＝ブレイザーは炎の剣を消した。

そこで、私は漸く緊迫感と炎の熱と殺気から解放されて、思わず椅子に凭れ掛かる。

安堵に似たため息――どっと額から汗が溢れ出すのを私は感じ取った。

「……まぁ、秀も霧歌もあなたの事を信じると言っているし、あなたの今の言葉には確かに揺らぎは無かったけれど――でも、私はあなたの事を信用なんかしないから――」

「信用しろ」

「だっ！」

そこで、いつの間にかウリアール＝ブレイザーさんの後ろに回り込んでいた真之乃秀がその金髪で覆われた脳天に拳を振り下ろした。

「ちょっ……いっ、痛いじゃない！　何をしてくれるのよ！」

「お前が無駄な緊張感と緊迫感を醸し出すからだろ。何を急にマジになってるんだよ、お前は」

「だ、だって……この女は『科学発展側』の人間なのよ！？」

「たった今否定したけどな、メンバーじゃないって」

「そ、そんなの……簡単には、信じられないじゃない」

「それでも信用しろ。信用出来なくても、信用しろ」

「……でも」

「まぁまぁ」とここで二人の仲介に入ったのは夜華さんだった。

「秀ちゃんもウリアちゃんも、そこまでしよう？　ね？」

「だって……ウリアが」

「うん、確かにウリアちゃんの今の行動は少し問題があるけれど――でも、ウリアちゃんは、多分この場においてちゃんと間違っていない事をやったよ？」

「えっ……そ、そうなのか？」

「だって、考えても見なよ、秀ちゃん。私は勿論今はちゃんと信じているけれど――架凪呀さんは、ついさっきまで私達が敵だと思っている組織の人間だったんだよ？」

確かに、秀ちゃんと私は無条件で架凪呀さんの事を信用した。

けれど、本当はウリアちゃんみたいな行動が正しいんだと私は思う――と夜華さんは言う。

「ウリアちゃんの今の行動は確かに度が過ぎていた所もあったけれど、元々敵の組織に所属していた人を疑うのは――当然の事だと思うよ？　私は」

「それは……うん、確かにそうなのかも知れないな」

「よし。私の言葉が理解できたのなら、ウリアちゃんを殴った事を謝ろうか、秀ちゃん？」

「あ、ああ……その、ウリア。ゴメンな」

「い、良いわよ……元はと言えば私のせいだし。こちらこそ、ゴメン。少し、やり過ぎたわ」

そして――一時的に緊迫してしまったその雰囲気は夜華さんの手によって緩和された。

それと同時に、夜華さんは凄いと私は素直にそう思った。

双方の悪い所をちゃんと挙げながら――夜華さんは今二人の仲介を遣って退けた。

片方だけを叱るのではなく、ちゃんと双方を叱りながら。

それは――その怒り方はきっと、誰もが出来るやり方ではないと私は思った。

――凄い。

学校の夜華さんとか、脱衣所で私の手当てをしてくれた夜華さんと

か。

色々と……私は凄いって、純粋にそう思う。

けれど――それは私という存在が夜華さんに到底追い付けないと自分で立証しているようなものだ。

勉学でも、スポーツでも……この一年間、私は夜華さんに一度も勝てなかった。

私がどんなに努力を重ねても。

私がどんなに練習を積んでも。

夜華さんは私が漸く辿り着いたその遥か上を――余裕で跳び越えて行ってしまう。

まさしく、雲の上の存在だ。

ただでさえ――夜華さんは、幼馴染なのに。

ただでさえ、夜華さんはいつもあいつの隣に居る事が出来るのに。

夜華さんを追い抜く事が出来なければ――私は、あいつの隣に立つ事すら出来ないというのに。

「……」

――だって。

あいつの隣に居るのはいつだって、夜華さんだったから。

初めて――最初に、あいつと出会ったあの日から。

時間を重ねて行く度に、あいつと会話を交わす度に――何だか、私の心は揺れ動いて。

そして、その揺れがいつの間にかとある感情へと変わっていて。

気付けば――私は、あいつの事を目で追うようになっていて。

だけど……あいつの隣にはいつだって、完璧な夜華さんが居て。

夜華さんを追い抜きたくて、あいつの隣に並びたくて、努力を重ねても――完璧な彼女には、到底適わなくて。

追い抜くどころか、追い付くどころか、指先さえも――届く事は無くて。

だから、私は夜華さんと出来るだけ違う立場に立ちたくて、二年生になると同時に学級委員長になって。

学級委員長になれば、夜華さんと違う立ち位置に立てば――何かが変わるような気がして。

何か違うものが見えるような気がして。

それでも――私の世界は、現実は、何も変わらなくて。

「……」

私は顔を上げて、前を見る。

そこには――三人の人物が居た。

一人は真之乃秀、一人はその幼馴染の夜華霧歌、一人はそのボディーガードのウリアール＝ブレイザー。

三人は、真之乃秀を中心に――それぞれの繋がりを持っている。

三人は既に輪となってコミュニティを築いている。

だから――今更かも知れないけれど、私はこう思った。

私はこの輪の中に入っていいのだろうか、と。

私がこの輪の中に入っても、この輪を乱してしまうだけではないのか。

真之乃秀と夜華さんは私の事を信用してくれたみたいだけど――ウリアール＝ブレイザーさんには嫌われているみたいだし。

私がその輪の中に入ってしまえば、上手く成り立っていた輪は乱れ、最終的に崩れてしまうのではないのか。

「架凪呀？」

不意に聞こえて来たその声に――私はハッとして顔を上げる。

すると、目の前に真之乃秀の顔が現れた。

「わっ！」

そう驚愕の声を上げた私は――立ち上がろうとして、足を踏ん張り、有ろう事か椅子ごと床に倒れてしまった。

背中に走る衝撃。

思いの他、それは痛くて――視界が涙で滲んだ。

「だ、大丈夫か？　架凪呀？」

歪んでしまっている世界の向こう側で真之乃秀と思われるシルエットがこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

私は手の甲で涙を拭う。

その手を目の前から外すと――すぐ隣に、しゃがみ込んでいる真之乃秀の姿があった。

「どうしたんだよ……急に大声を上げたりなんかして」

「い、いや……何でも、無いわ」

そう言葉を返しつつ私は倒れてしまった椅子を立てながらその場に立ち上がった。

「……それじゃあ、架凪呀さんも私達の仲間になった所で、ちょっと早いかもだけど、夕飯にしましょうか。秀ちゃんとそれからウリアちゃん、お皿にカレーを注いで来てくれる？」

「了解。行こうぜ、ウリア」

「あーい」

夜華さんの指示を受けて、真之乃秀とウリアール＝ブレイザーさんはキッチンへと向かって行く。

いや、この家の構造を完全に把握した訳では無いから正確には解らないけれど――夜華さんの指示から推測するに、二人が向かった場所はキッチンで相違（そうい）ないだろう。

真之乃秀とウリアール＝ブレイザーさんがキッチンへと向かい、必然的にリビングには私と夜華さんの二人だけが残される。

沈黙に包み込まれる空間――ただノイズのような雨音が閉め切られたカーテンの向こう側から聞こえて来る。

――そして。

「……ありがと、ね」

その沈黙を破ったのは――夜華さんの、声だった。

「……えっ？」

その突然紡がれた言葉に私は徐（おもむろ）に怪訝な声を漏らす。

「それは……えっと、何のお礼？」

「架凪呀さんが……自分の事を語ってくれた事に対して、だよ」

そう言って夜華さんはこちらを振り返って来る。

その顔には――何と言うか、嬉しそうなそんな笑顔が浮かんでいた。

「架凪呀さんって……こう言ったら、何か語弊があるかも知れないけれど。学校では、何だか一人で塞ぎ込んでいて、クラスの皆とは自然と壁を作っているタイプの人だったから」

「まぁ、クラスの皆の頼み事とかはちゃんと聞き入れていたけどね」と夜華さんはそう付け加えた。

「クラスの声を聞き入れていたのは――私が学級委員長だったからよ。クラスの皆との間に壁を作っていたのは……認めるわ。だって、私の仕事は真之乃秀の監視する事だったし、それ以前に私はいつか未来に帰らなければならないから――クラスの皆と絆を築いたとしても、それは最終的に無駄に終わってしまうし」

「そういうものかなぁ？」

「そういうものよ」

「私は……多分、架凪呀さんが未来に帰る――もとい、突然どこかの学校に転校するとか、そんな話になったら、悲しむと思うけどなぁ」

「……それで？」

「えっ？　何？」

「だから、さっき私にお礼を言った事よ。何か色々と夜華さんは言ったけれど――明確な理由は、まだ教えて貰っていないわ」

「ああ……うん。だからね？　普段、自分の事を話さない架凪呀さんが、私に――私達に、自分の事を……それも、かなりプライベートな事を話してくれた事に対して、お礼を言ったんだよ」

「どうして……そんな事で、私にお礼を言ったの？」

「……嬉しかったから」

「嬉しかったから？」

私はその夜華さんの意外な答に思わず声を上げていた。

嬉しかったからとは――一体全体、どういう事なのだろうか。

「そう、ただ単純に、純粋に、嬉しかったから。架凪呀さんが自分の事を話してくれて、自分の内側の事を話してくれて、しかもそれは私達以外の他の誰にも話していない事で――勿論、クラスの皆はその架凪呀さんの秘密は知らない」

「だから、嬉しくなったの」と夜華さんはその言葉の通り、嬉しそうな笑みを浮かべてこう言った。

「何だか……私達だけ、架凪呀さんの友達として、一歩先んじているような気がしたから」

「……」

「だから……ありがと、ね。架凪呀さん」

「……」

――凄い。

私は改めて――目の前に居る彼女に対してそう思った。

そうか――彼女は、夜華さんは。

こんな事でも、他人に、誰かにお礼を言う事が出来るのか。

何て純粋で……何て凄い人なのだろう、この夜華霧歌という人間は。

やはり、私には彼女を追い抜く事は出来ないのだろうか。

やはり――私には彼女と同じ立ち位置に到達する事は出来ないのだろうか。

――いや。

諦めてしまっては、駄目だ。

例え、目の前に居るこの人に追い付く事が出来なくても。

例え、既に構築されているその輪を乱し、壊す事になったとしても。

私は、変わるんだ。

今までの自分を捨てて――変わるんだ。

変わらなくては、ならないんだ。

世界を変えるには、人生を動かすには。

自分から――行動を起こす他に、術は無い。

――それならば。

「持って来たぞー」

キッチンからトレイの上にカレーライスが注がれた皿を乗せて真之乃秀が戻って来る。

その後ろには同じようにトレイを持ったウリアール＝ブレイザーさんの姿が見える。

真之乃秀がトレイを置き、ウリアール＝ブレイザーさんもトレイをテーブルに置いた所で。

「……真之乃秀」

私は、その口を開いた。

「ん？　どうした？」

真之乃秀がこちらを振り返って来る――カレーの香ばしい匂いがリビングに段々と充満していく。

「一つ……頼み事が、あるんだけど」

「頼み事？　何だ？」

「……それは」

――世界を変えるには、人生を動かすには。

夜華さんの立ち位置に出来るだけ近付く為には――自分から行動する他に術は無い。

だから、私は言う。

真之乃秀の姿を真っ直ぐに見つめながら。

若干――気恥ずかしさで頬を上気させながら。

私は、言った。

「私も……この家に、居候させてくれない？」

8月9日

8月9日。

「ほら、真之乃秀！　いつまで寝るつもり！？」

「……」

俺は――瞼の向こう側から聞こえて来たその声で起床した。

瞼を開けて、視界に景色を映し出す。

その直後、カーテンが開かれて――眩い太陽の光に俺は思わず目を瞑った。

「眩し……っ！」

俺は呻き声を上げながらベッドの上に上半身を起こす。

「アンタ、今何時だと思っているのよ」

そして、頭上から降って来たその声に俺は顔を上げる。

そこには――黒髪のポニーテールが特徴の少女、架凪呀琴羽が立っていた。

髪型こそちゃんと束ねているが、服装はまた姉が以前まで使っていたパジャマの内の一つを着用している。

「オイオイ……こんな朝早くから起こされてクイズかよ。やる気がしねーぞ」

「別にアンタにクイズを出した覚えは無いわよ。ていうか、早朝じゃなくて、もう午後1時よ、真之乃秀」

「俺にとっては午前1時も午後1時も等しく平等に早朝なんだよ」

「真之乃秀、それは違うと一応否定しておくわ」

「ほら、世の中何に対しても平等の時代だろ？　だからだよ」

「だからって、時間にまで平等の権利を与えなくてもいいのよ」

「何だと？　何を言っているんだお前は、時間を差別するつもりか」

「それはこっちの台詞よ、真之乃秀。アンタこそ何を言っているのよ、馬鹿じゃないの、死ねばいいのに」

「……一つ疑問なんだが、どうして俺は起きて早々にも関わらず、そんな罵倒を浴びせられているんだ？」

「さぁ？　アンタが馬鹿だからじゃない？　死ねばいいのに」

「最後の一言が余計なんだよ！　いい加減止めてくれ！　朝から鬱にはなりたくない！」

実際に既に成り掛けてはいるのだが。

「とにかく、早く起きなさいよ。アンタの分のお昼も作ってあるか

ら」

「お昼って……まさか、お前が作ったのか？」

「そうよ。有り難く思いなさい」

「へーっ、お前って料理なんか出来たんだな」

「カップラーメンだけどね」

「……なるほどな、俺の感謝の言葉と気持ちを返せ」

「嫌よ。貰った以上返す訳には行かないわ」

「ていうか……えっ？　カップラーメンって、まさか既にお湯を入れてあるのか？」

「勿論よ。そうね……もうそろそろ3分経つ頃かしら」

「それを先に言ってくれよ……」

そう呟きつつ、俺はベッドから出ると立ち上がって大きく背伸びをした。

視界が涙で滲み、自然と大きな欠伸が俺の口から飛び出す。

「……しかし」

俺は涙を指先で拭いつつ、窓の外に広がる景色を見て言った。

「昨日の大雨が嘘みたいに……今日は青天だな」

「まぁね。台風一過みたいなものなんじゃない？」

「言っておくが、昨日の大雨は台風による影響じゃないからな？」

「知っているわよ。真之乃秀みたいに私は馬鹿じゃないんだから」

「お前はいちいち人の事を罵倒しないと会話を進行する事が出来ないのか」

「言ったでしょ。私の罵倒は癖なのよ」

「……そう言えばそんな話もありましたね」

ていうか、今更だけど、どうしたらそんな事が癖になってしまうのか。

お前、今の今まで誰かに対してどれだけ罵倒を浴びせて来たんだよ――って。

それを言うのは……野暮、だな。

架凪呀という存在は――俺が世界線を変動させた事によって創り出されたかも知れないのだから。

そんな培った癖の経緯を探るなんて真似は――野暮以外の何物でもないのだろう。

「ていうか、架凪呀」

「何よ、真之乃秀」

「お前は俺が馬鹿だという前提でさっきから話を進めているが、俺はそこまで連呼されるほどには馬鹿ではないからな？」

「どの口が言うのよ、いつも学校の成績は底辺だったくせに」

「底辺じゃねえ。地面擦れ擦れを低空飛行していたんだよ」

「殆ど同じじゃないの」

「うるせえな。お前や霧歌みたいにいつも地上から遠く離れた遥か上空を飛んでいるような奴等には俺みたいな奴の事は解らねーよ」

「まぁ、解らないわね。解りたくもないけれど」

「俺だって、お前等みたいな頭の良い奴の考えなんて解らねーよ」

「解らないんじゃなくて、そもそも理解する事が出来ないの間違いなんじゃないの？」

「……」

見事に揚げ足を取られている俺なのであった。

やはり、馬鹿な奴は頭の良い奴には適わないのだろうか。

「まぁ、確かに真之乃秀の成績は底辺では無かったわね……この前のテストでは下から３２番目の順位だったし」

「オイ、何でお前がその事実を知っている」

その事実を知っているのは俺以外に霧歌しか居ないはずだ。

いや……そろそろこの言い訳を語るのも辛くなって来た所なのだが。

別に、俺に、友達が、居ない、からとか、そういう、訳じゃ、なくて。

8月9日？

あの時は確か……霧歌に強引に順位を見られたんだっけ。

そして、低い順位を見られただけでもショックだったのに、その仕返しで霧歌の順位も見てやったら――更に心の傷が悪化したんだっけ。

今となっては良い思い出である。

いや、実際は悪い思い出なのだが。

「まぁ、私は学級委員長だからね。アンタの成績くらい把握していて当然よ」

「だから、その理屈になっていそうで理屈になっていない理屈を止めろって何回言えば解るんだよ」

「真之乃秀、今の言い方若干回りくどいわ」

「うるせえな。喧しいよ」

「ていうか……とりあえず、アンタの底辺の成績の話はどうでもいいとして」

「どうでもいいとか言うな。底辺でも俺の成績だぞ」

「あら、それじゃあ、アンタはもっと今の話を掘り下げて欲しい訳なのね？」

「生意気言ってスミマセンでした、今すぐに話の転換をお願いします！」

「宜しい、解ればいいのよ」

宜しいって。

どこの女王様だよ、お前は。

「アンタのどん底の成績の話はどうでもいいとして」

「何だかさっきよりも表現が酷くなっているような……」

「早く下に行きましょうよ。早くしないと、アンタに用意したカップラーメンが伸びちゃうわよ？」

「そう言えばそうだな……よし、行くか、架凪呀」

「ええ、そうしましょう、真之乃秀」

◆◆◆

俺は架凪呀と共に階段を使って一階に下りる。

それから、リビングへと足を踏み入れた俺は――カップラーメンを啜っているウリアの姿を捉えた。

すっかり忘れられているかも知れないが、というか、前の話が長過ぎて俺自身も忘れそうになっていたのだが。

ウリアは左手だけで器用にカップラーメンを食べていた。

何故なら、ウリアの右腕の骨には今もひびが入っていて、その右腕は包帯でグルグル巻きになっているからだ。

ここ重要ね。

忘れないようにしないと。

――そして。

架凪呀は俺の分のカップラーメンを用意しているとは言っていたが、どう見ても現在テーブルの上にはそれらしき容器は無い。

……という事は。

「……オイ、ウリア。もしかして、お前が今食べているそれは俺の昼飯なんじゃないのか？」

「いいえ、違うわ。これは私のお昼ご飯よ」

「ああ言っているが……実際の所はどうなんだ？　架凪呀」

「あれは真之乃秀の分のカップラーメンよ。だって、あの子はさっき食べたばかりだもの」

「やっぱり俺のなんじゃねーか！」

何でお前が食べているんだよ！

「ああ、そうだったの？　何だ、てっきりテーブルの上に置かれていたものだから、そこに居るかりんとうが私の為に用意してくれたものだと思い込んでしまったわ」

「思い込むな！　先入観から抜け出せ！」

「ていうか、私の名前はかりんとうじゃなくて架凪呀！　朝から何回目よ、このやり取り！」

「だって、角砂糖が置いて行ったのが“しーふーどー”だったんだもの。この世の全ての“しーふーどー”は私のものでしょう？」

「どこの独裁者だお前は！」

「そして私の名前は角砂糖でもないから！　私の名前は架凪呀琴羽だから！」

「何よ、かりんとうも角砂糖も架凪呀もどれも一緒でしょ」

「一緒にされて堪るものですか！　駄菓子や調味料と一緒にされて堪るものですか！」

「……」

……ていうか。

「あれ？　もしかしてお前等、仲が悪いのか？」

「「当たり前でしょ」」

……そう言う割にはものの見事に声がシンクロしているが。

「刈り上げだかカメックスだか架凪呀だか知らないけどね」

「私の名前は架凪呀一択よ。髪型の名前でもポケモンの名前でもないからいい加減に覚えなさい」

つーか、お前ら、さり気無くメタな発言を会話に織り交ぜてくるんじゃねーよ。

「元々、私達の敵だったくせに――いや、もしかしたら今も私達の敵なのかも知れないけれど。馴れ馴れしいのよ、秀の家に居候したいだなんて」

「それはアンタの言う台詞じゃないわよねぇ、ウリアール＝ブレイザー？　アンタこそ、この家に居候している立場のくせに、私にそんな台詞を吐けるとでも思っている訳？」

「私は秀の味方であり、ボディーガードだからよ」

「私だって真之乃秀の味方よ」

「フンッ、信じられるものですか」

「別にアンタに信じて貰おうとはこれっぽっちも思っていないわよ。私はね、真之乃秀と夜華さんにさえ信じて貰えばいいんだから。逆に、アンタからの信用を受けるなんてこっちから願い下げよ」

「何ですって？」

「何よ？　やる気？」

ウリアはテーブルに飛び乗り燃え盛る炎の剣を、架凪呀は空間の歪みから黒い柄の槍をそれぞれ携えて――。

「ちょっと待てお前等！　ここで戦うんじゃない！　家が崩壊してしまう！」

そんな感じで俺は声を上げながらウリアと架凪呀の二人の間に入り込んだ。

8月9日？

そして、ウリアと架凪呀は俺を間に挟んだまま互いに無言で睨み合って――。

「……まぁ、いいわ」

「そうね、真之乃秀がそこまで言うのなら、ここは一旦休戦にして上げる」

そう言って互いに武器を消す二人。

その二人の行動に俺は本当に心の底から安堵の息を吐いた。

「……とりあえず、お前等の仲が悪いのは解った。俺は今からウリアが食べてしまったカップラーメンの代わりに自分のを作って来るから――お前等、絶対に喧嘩するなよ」

「はーい」

「解ったわ、真之乃秀」

言葉だけは素直に従っているようだが……互いに睨み合われたままそう言葉を返されても信憑性に欠けるんだが。

「……はぁ」

俺はため息を吐いてキッチンに向かう。

歩みを進めながら――俺は昨日の事を思い出していた。

◇　◇　◇

「私も……この家に、居候させてくれない？」

昨日の８月８日――その夜の事。

架凪呀が言い放ったその言葉にリビングの空気が完全に停止した事を俺はハッキリと覚えている。

宛（さなが）ら、架凪呀が俺と戦った際に空間を凍結させた時みたいな。

そんな雰囲気が周囲を一気に包み込んだ事を俺は覚えている――いや、実際は俺の気のせいだったのだが。

「……え、えっと」

そして、その凍結した雰囲気を打ち破ったのは――自分で言うのも何だが、意外にも俺だった。

「それは……架凪呀、一体全体何の冗談だ？」

「じょ、冗談じゃないわ。私は本気よ。この家に住みたいの」

「それはえっと……何で？」

「あの……その、まだ話していなかったんだけどね？」

「ああ」

「私――実はその、家が、無くて」

「は？　家が、無い？」

家が無いって――それはつまり、えっと。

「住む所が……無いって、事か？」

「あ、当たり前でしょ。それ以外にどんな意味が今の言葉に込められていると思ったのよ」

「家が無いって……」と俺の次に口を開いたのは霧歌だった。

「架凪呀さん……今までずっと、どうしてたの？」

「えっ？　何を？」

「いや、だから……学校に来ていた時以外は、どこで寝泊まりをしていたの？」

「どこでって……基本的に野宿だけど？」

物凄い事を平然と言ってのける奴だなぁ……こいつ。

「の、野宿って……それって本当なの？」

「ええ、本当よ？　私が元々居た２０５６年は皆知っての通り戦国

時代なのよ？　戦いが長引いて、本拠地に戻れなかったら、廃墟の中とかで野宿とかは普通だったから、別に私は平気よ？」

「いや、あの、そういう事じゃなくて……」

「ちなみに、私が野宿するのに愛用していたのはこの町の外れの森だったんだけど――この前、原因不明の森林火災で跡形も無く燃えてしまってね。それ以来にはそこら辺を適当に転々としていたわ――って、何で皆、顔を伏せているの？」

「いや……何でも無いよ？　ねぇ、秀ちゃん？」

「あ、ああ、何でも無いよ。なぁ、ウリア？」

「う、うん……そう、ね」

俺達は架凪呀の私有地では無いとは言え、彼女が野宿をする場所として愛用していた森を燃やしてしまった事に責任を感じていた。

いや、実際に燃やしてしまったのはウリアなのだが。

「……まぁ、とりあえず、私には家が無いのよ。未来からやって来た訳だから――まぁ、ある方がおかしいんだけどね。お金だけはこの時代のものを幾らか貰っていたから……食費とかには、困らなかったんだけど」

「それで俺の家に居候したいって訳か……でも、本当に家が無くて困っているのなら、霧歌の家に泊まった方が良いんじゃないのか？」

「えっ？　あっ、いや……その」

「同じ女子同士だし……何かとそっちの方が都合良いだろ？」

「い、いや、それはそうなんだけど……でも」

「……でも？」

「でも……でも、私はっ」

段々と架凪呀の顔が赤くなっていく――そして、一度顔を伏せた彼女はリビングに反響するほどの声量で声を張り上げた。

「私はっ、まっ、真之乃秀の家にっ、住みたいのよっ！」

――響き渡った架凪呀の言葉。

その言葉に、霧歌がハッとした表情を見せる。

その言葉に、ウリアが不愉快そうに眉をピクリと動かした。

「えっ……俺の家に住みたいって、な、何で？」

「な、何でって……それは、その、えっと」

そう口籠りながら――架凪呀は俺に視線を向けずにこう言った。

「わ、私が一番最初に心を開いたのが……真之乃、秀、だし。アンタの近くに居る方が――その、私も楽、って言うか、何と、言うか」

「……何だ、そのペットが飼い主に懐いている感じの理由は」

「う、うるさいわね！　と、とにかく、私はこの家に住みたいのっ！　居候したいのっ！」

「文句は言わせないんだから！」と架凪呀は顔を真っ赤にしてそう声を上げた。

8月9日？

「そ、そこまで言うのなら……俺は別に構わないけど――」

「構わないのっ！？」

ここで不意に驚愕の声を上げたのはウリアだった。

「こ、この人を……味方と認めるのは良いとして、この家に居候させるまではしなくてもいいんじゃないの？」

「だって、こいつ家無いって言うし」

「で、でも」

「それに、架凪呀が好んで野宿に使っていたあの森は――もう無いし」

「うっ……」

俺は目を細めてウリアを見据える――対するその森を一夜にして焼失させた張本人は罰の悪そうに俺から視線を逸らして。

「……い、良いわよ。解ったわ。居候したければ、幾らでもしていけばいいじゃない」

「折れてくれてありがとう。しかし、それはお前が決める事じゃないからな」

居候を許可するのは家主である俺だ。

まぁ……今ではウリアもこの家の住人の一人である事に変わりは無いのだが。

「それじゃあ……その、霧歌もそれで良いか？」

「えっ？」と俺の問いかけに霧歌は唖然とした声を上げた。

「な、何で私にそこで確認を取るの？」

「いや、だって……その、一応、お前は俺の幼馴染だから」

「幼馴染って……言っておくけれど、その理由は少しばかりおかしいよ？」

「あ、ああ、俺もそれは解ってるんだけど……」

何か……いや、何故かは解らないんだが。

何と言うか、霧歌に許可を取らなければならないような気がして。

「それで、その、どうだ？　霧歌？」

「うーん……まぁ、架凪呀さんがこの家に住みたいって言っているのなら、私はその意思を尊重すべきだと思うんだけ、ど」

そう言いつつ――霧歌は架凪呀へと視線を向ける。

「あの……架凪呀さん？」

「えっ？　何？」

「一応忠告しておくけれど――あの、秀ちゃんは変態だよ？」

……酷い事を平然と言うなぁ、こいつは。

ていうか、俺の周りには毒舌が過ぎる奴が多いような気がする。

気のせいだろうか――気のせいであればいいのだが。

「ええ、それは勿論承知の上よ？　真之乃秀は確かに変態、どうしようもないほどに変態で、救いようもないほどに変態よ」

「いや、俺はそんな救いようもないほどに変態ではないからな？」

「でも、私は別にそれでもいいと思っているわ。いや、別に私が真之乃秀の変態行為を容認する訳が無いけれど。ていうか、容認するどころか、そういった行動に移った瞬間に私は真之乃秀を返り討ちにするわ」

「だから」と架凪呀は言う。

「私は別に、真之乃秀がどうしようもない変態であっても平気よ、夜華さん」

「そう……架凪呀さんがそこまで言うのなら、私は別に構わないけれど」

「……とまぁ、そういう訳だから」

「真之乃秀」とこちらを振り返って来る架凪呀。

「今日から、お世話になるわね？　真之乃秀」

「お、おう……まぁ、その、何だ。宜しくな」

「ええ、こちらこそ宜しくね、真之乃秀」

――とまぁ、そんな感じで。

可も無く不可も無く――いや、俺の受けた精神的なダメージを加味するのならば不可はあったのだけれど。

殆どこれと言った特別な話題も何も無く、俺とウリアと霧歌の許可を経て、架凪呀は我が家の新たな居候の一人になったのだった。

◇　◇　◇

以上、回送シーン終了。

そして、その回送をしている間に俺はカップラーメンを作り終える事が出来た。

まぁ、作り終えたとは言っても、お湯を注いで3分待っただけなのだけれど。

「……そう言えば」

俺はカップラーメンの蓋を剥がしながら正面の席に座っている架凪呀に問いかける。

ちなみに、ウリアは今テーブルには居らず――テレビの傍にあるソファーに座っている。

「架凪呀、お前よくカップラーメンを作れたな」

「アンタ、私の事を馬鹿にしているの？　カップラーメンくらい誰でも作れるでしょう？」

だがしかし、作れない奴も居るんだなぁ……悲しい事に。

いや、悲しいのは俺ではないが。

「いや、でも、未来にはカップラーメンなんて無いんだろ？」

「まぁ……確かに、そうね。でも、似たようなものはあるし、それにカップラーメンの容器には作り方も載っているし――別に、作った事が無くても、作り方さえ解っていれば大丈夫でしょう？」

「ま、まぁ……そうだな」

この世には作り方が載っていても作れない奴も居るんだけどな。

あいつの場合は作れないんじゃなくて、作ろうとしないんだが。

せめて作ろうと努力してくれればいいんだけどな……まぁ、説得しても無駄だろうけれど。

「……ていうか、作り方を知っていたって事は、架凪呀はカップラーメンを作った事があるんだな」

「まぁね。自炊しようとも思ったけれど――そもそも、私には家が無いし、自炊できる環境すら存在していなかったしね」

8月9日？

「ちなみに、カップラーメンはこのシリーズを？」

「ううん、ラ王」

「なっ……ら、ラ王、だと！？」

「何をそんなに驚いているのよ……別に普通でしょ？　ラ王くらい」

「ば、馬鹿お前……ラ王がどんだけ高価なラーメンなのかお前は知っているのか！」

「知らないわよ」

「そっか……そう言えばお前、未来から支給されたお金で今まで暮らして来たんだったな。それはラ王なんて高価なラーメンを食べる事が出来て当たり前だよな」

「何だか解らないけれど……とりあえず、今まで私が食べて来たのは高価なものな訳ね？」

「ああ、そうだよ」

「それで？　アンタが今食べているものは低価な訳と」

「いや……まぁ、そこまで言うつもりはないけれど。確かにそこまで高価なものではないな」

「という事は、そこまで毎日高いものを食べていないという訳なのね……ぷっ」

「笑うな。笑うんじゃない」

「やーい、この貧乏人」

「喧しいわ！」

「可哀想ねぇ……ああ、本当に可哀想だわ。頭も悪くて、料理も出来なくて、その上お金も無いなんて」

「本当に喧しいな。俺にそんな哀れな眼差しを向けるんじゃねーよ」

「哀れな眼差しなんて向けていないわよ。これは蔑みの眼差し」

「蔑みの眼差しも向けるな！」

ていうか、毎日カップラーメンを食べているだけで何故蔑みの眼差しを向けられなければならないんだ！

「くそっ……このブルジョワめ」

「まぁ、でも心配しないで。今度からアンタと同じカップラーメンを食べるつもりだから」

「あん？　何でだよ」

「そ、それは……べ、別に理由なんてどうでもいいでしょ」

「そ、そうか？」

「べ、別に、アンタと同じ食べ物が食べたいとか、そういう訳じゃないんだからね。勘違いしないでよね」

「あ、ああ……それは勿論解ってはいるが」

「まぁ、そういう訳だから、何かオススメの味を教えてくれない？　あのカップヌードルで」

「俺の一番のオススメは――まぁ、カレーだよな」

「カレー？　朝食べたけど、何かドロドロしていて食べ難かったわよ？」

「何でお前は勝手に食べているんだよ」

ていうか、何かウリアもカレーを食べてそんな感想を前に述べていたような……。

やはり、カレーは未来人に受け入れられない運命なのか。

あれだけ美味しいのに……どうして皆カレーの味の良さが解らないんだ。

「仕方ないじゃない。食べ物を探したけれど、カップラーメンしか食べ物が無かったんだから」

「まぁ、それは確かに悪かったが……しかし、ウリアと違って勝手に作って食べてくれるから、それはそれで助かるのか」

「でしょう？　どこかの居候と違って、私はちゃんと日々の生活の暮らし方を心得ているからね。と言うか、常識？」

すると――その架凪呀の言葉を聞いていたもう一人の未来少女は。

「……あら、何かカマトトが何かほざいているわ」

「誰がカマトトよ！」

それ以前にお前はどこでそんな言葉を覚えたんだよ……。

意味を知らないで言っているのならどちらかと言うとカマトトはお前の方だからな。

「ていうか……ウリアール＝ブレイザー、アンタ、『か』から始まる言葉を適当にさっきから並べ立てているだけでしょう」

「まぁ、そうね。適当に『か』から始まる言葉を言い続けていたら、いつかあなたの名前に辿り着くかな、って」

「だから、最初から私の名前は架凪呀琴羽だって言っているでしょう！？」

「わー、この番組超おもしろーい」

「くっ……！」

架凪呀が握り締めた拳をブルブルと震わせ始めた。

その行動の根源には――多分と言うか、確実にウリアへの怒りの感情がある訳で。

そして、またこの家で戦闘紛(まが)いの事を起こされて貰っては俺としても困る訳で。

……こうなったら。

「……か、架凪呀！」

「何よ！」

「俺と一緒に……買い物に、行こう！」

「……は？」

架凪呀は唖然とした声を上げる。

ウリアは――何か、ハッとした表情と共に素早くこちらを振り返って来た。

――そして。

「……は？」

もう一度――架凪呀はこちらを振り返って唖然とした声を漏らすのだった。

◆◆◆

「全く……本当に何なのよ、あのウリアール＝ブレイザーとかいう失礼の塊みたいな奴は」

俺と一緒に家を出た架凪呀はぶつくさと文句を言い続けていた。

しかも、家から出てずっとである。

「……まぁ、俺からしたらお前も失礼の塊みたいなもの――」

「何か言った？」

「いえ……何でも無いです」

……架凪呀から物凄い剣幕で睨み付けられた。

怖いよ。

8月9日？

「……そ、それで？」

「ん？」

「だから、どうして急に私を買い物なんかに誘った訳？」

「それは……何と言うか、あのままお前等を放っておいたら家が崩壊し兼ねなかったから、かな」

「……って、それだけ？」

「それだけって――他に何か理由が必要か？」

「本当に、それだけの理由なの？」

「だから、それだけだって。何回言わせるんだ」

「ふーん……あっそ」

……何か急に架凪呀が不機嫌になってしまったんだが。

俺、何か変な事言ったか？

「今度はどうしたんだよ、架凪呀」

「……別に、何でも無いわよ」

「何だ、まだウリアの事で怒っているのか？」

「それもあるけれど――今は、ウリアール＝ブレイザーの事で、怒っている訳じゃないわ」

「それじゃあ、どうして怒っているんだよ、お前は」

「知らない。自分の胸に聞いてみれば？」

それで解ったら苦労はしないんだが……。

「それで、今私達は一体全体どこに向かって歩いている訳？　当ても無く歩いているとか言ったら殺すからね」

「どうしてそんな返答をしただけで俺は命を奪われなければならないんだ」

「この私に無駄な時間を消費させたからよ」

「この私って――お前は一体どの地位に君臨している人間なんだよ」

「学級委員長よ」

「お前の中ではその役職はどれだけ万能な答なんだよ！」

何でもかんでも学級委員長って答えるよなぁ、こいつ。

架凪呀の中ではそれだけ学級委員長は偉いというイメージでも根付いているのだろうか。

「それで、私達は今どこに向かっているの？」

「近所のスーパーだよ。お前、俺にオススメのカップラーメンを教えて欲しいんだろ？」

「……それじゃあ、実質、この外出は私の為なの？」

「ん？　ああ、まぁ……そういう事になるのかな」

「……な、何よ～」

「痛っ」

そんな間延びした声と共に架凪呀は俺の背中を軽く叩いてきた。

「そ、それならそうと、早く言いなさいよ。全く真之乃秀は……いつだってアンタは一言足りないんだから、もう」

「確かに家を出る前に行き先を言わなかったのは悪かった――って、何かお前急に機嫌が良くなっていないか？」

「そう？　さっきから私はこんな感じだけど？」

その口が言うんだ、どの口が。

さっきは俺に向かって殺すとか言っていたくせに。

まぁ、それについてはもう言及しないけどな。

下手にそれを言ってしまって、また架凪呀の機嫌を損ねるなんて真

っ平ご免だからである。

「ねぇ、真之乃秀。カップラーメンには一体どんな種類があるの？」

「そうだなぁ……うーん、ゴメン、結構種類多いから、全部は言い切れないな」

「何？　そんなに種類あるの？」

「いや、単に俺はいつもカレーとシーフードとスタンダードしか買わないから、他の種類を覚えていないだけ」

「何だ……真之乃秀の日頃の行いが悪いってだけの話か」

「そうそう――ってそれは何か違くね？」

「何を言っているのよ。真之乃秀が怠惰な生活を送らずに、毎日カップラーメンの種類を覚える努力を怠らなかったらこんな事にはならなかったのよ？」

「何か物凄く間違った事柄を途轍もなく正論っぽい感じで言われたような気がするんだが……」

まぁ、気のせいではないんだろうな。

これだから、頭の良い奴は困るのだ。

間違っている事でも、そいつが言えば何か世の中の道理に噛み合っているように聞こえて来るから。

「まぁ、種類を見たら美味しいか否かは解るからさ。とりあえず、カップラーメンの種類を決めるのはスーパーに付いてからだな」

「え、ええ、そうね、そうしましょうか」

「……ところでさ、架凪呀？」

「な、何？　真之乃秀」

「お前――どうして、学校の制服なんか着ているんだ？」

何故か、架凪呀の格好は俺が今何気なく彼女に問いかけた通り、学校の制服だった。

夏服なので暑くはないだろうけれど……。

「言ってくれたら、姉さんの私服とか貸してやったのに」

「い、いや、いいのよ。私はその……大丈夫、だから」

「大丈夫って……何がだよ。そして、どうしてお前はそこまで狼狽しているんだ」

「は、はぁ？　べ、別に、狼狽なんかしていないし」

「そうか？」

「そ、そうよ。べ、別に、アンタと初めて外出するから、洋服を着ようにも何を着たら解らないだとか――そ、そういう訳じゃないんだからね？　本当なんだからね？」

「お前、さっきから何だかえらく回りくどい言い方で自分の考えを自分で否定しているよな」

8月9日？

「そ、そうかしら？」

「そうだよ。かなり面倒臭い言い回しをしているぞ？　お前は」

「ふ、ふーん……そうなんだ。それは気付かなかったなぁ」

「……」

余りにも白々しい架凪呀さんなのであった。

「でもまぁ……制服でも、やっぱり学級委員長だけあって、似合っているよな」

「そ、そう？」

「ああ、物凄く似合っているよ。むしろ、私服よりも制服の方が似合っているって感じだな」

「そ、そっか……ま、真之乃秀がそこまで言うのなら、そうなのかなぁ」

若干頬を上気させて、明らかに少し照れながら、架凪呀は自身の服装を見下ろす。

――いかん。

予想以上に、俺の誉め言葉で喜んでいるぞ、こいつ。

夏服は下に着ている下着が薄らと見えるから最高だとか。

そんな事は絶対に言えなくなってしまった。

言ったら絶対に殺される。

冗談抜きで殺される――そんな気がする。

「……でもまぁ、やっぱり、家の中では普通の格好をしていような？」

「えっ？　どうして？」

「いや、それは……」

罪悪感があるから――とは口が裂けても言えない。

「家の中で制服を着ているのは、何と言うかその、常識を逸脱しているからだ」

「常識を逸脱しているって……ウリアール＝ブレイザーだって着ているじゃないの」

「まぁ、あいつは既に常識を逸脱してしまっているからな」

いわゆる非常識の塊である。

「ウリアを例えにしたら駄目だぞ、架凪呀。精神的に怪我をするからな」

「何だ、そうだったのね。もしかしたら、私の常識が間違っているかも知れないなんて思っていたのだけれど――何だ、あいつの方が間違っていたのか。フフフッ、いい気味ね」

「それ、ウリアに直接言うんじゃねーぞ」

「解っているわよ。真之乃秀の家が失われたら、今度こそ私は路頭に迷ってしまうし」

「そうだな。だから、金輪際家の中で戦闘紛いの事は止めてくれよ？」

「だから、解っているってば。しないわよ、そんな事」

どうだかなぁ……。

ついさっき、ウリアと睨み合ったまま即座に戦闘行為に移ろうとしただけあって素直にその言葉を信じる事が出来ないのだが。

「ていうか、お前等これからも同じ俺の家の居候として暮らすんだから、何と言うか……関係をもう少し改善してくれないか？」

「わ、私にそんな事言われても……突っ掛って来るのはあっちの方なんだから、仕方ないじゃない」

「それはだからほら、お前が大人の心を以て、ウリアの悪口を寛容に受け止めて、だな」

「えーっ。どうして私だけが損をしないといけないのよ」

「頼むよ、ウリアは確かに俺達と同じ年齢だが、ああ見えて中身は子供なんだよ」

「まぁ、それは今までの会話を踏まえれば解る事だけど……」

「それに比べて、お前はどちらかと言うと精神的には大人だろ？」

「馬鹿言わないで、私は心も体も列記とした大人よ」

「そ、そうなのか？」

「本当よ。私、脱いだら凄いのよ？」

「まぁ、確かに……昨日雨で濡れた洋服の上に浮かび上がっていたボディーラインは中々――」

「って、な、何を見ているのよ！　この馬鹿！」

「でも、胸の大きさは霧歌には到底及ばなかったな」

「う、うるさいわね！　ていうか、逆に夜華さんに勝てる人なんてこの世に居るの！？」

「まぁ、確かにそれくらい霧歌の胸は大きいよなぁ……」

……ていうか、いつの間に霧歌の胸の話に話題が転換してしまったんだ？

話を戻そう、うん。

そうしようそうしよう。

「大体、私の胸はそこまで小さくないし」

「あれ？　お前の方から話題の転換を拒否？」

「当たり前よ。言われっ放しじゃ引き下がれないわ」

いや、引き下がってくれよ。

どうしてこんな真昼間の住宅街のど真ん中で胸の話を展開しなければならないんだよ。

何で胸の話を強いられなければならないんだよ。

「確かに、私の胸は夜華さんの胸には適わないわよ？　でもね、言っておくけれど、私の胸はクラスの中では平均以上の大きさを誇っているんだから」

「誇っているって――お前、どうしてそんな情報を知っているんだ。お前、確かクラスでは一人で閉じ籠っていて俺と同じで友達は居なかったはずだろ」

「ええ、確かに私には友達と呼べるものが居ないわ」

肯定しやがった……。

何たる心の強い人間なんだよ、お前。

俺も少なからず見習わなければならない。

「でも、私には情報もがあるからね。何たって私は――」

「学級委員長ね。もういいよ」

ていうか、この遣り取りも何回目だよ。

8月9日？

「そうか……架凪呀、お前の胸の大きさは霧歌に次ぐ大きさを誇っているという事なのか」

「いいえ、クラスの中で上から七番目の順位を私は獲得しているわ」

「……幾らお前でも、そういう所では霧歌以外の奴にも負けるんだな」

「う、うるさいわね！　黙りなさいよ、真之乃秀！」

「学年順位では、毎回霧歌に次ぐ第二位だったのにな。胸の大きさでは第七位まで落ちたか」

「口が過ぎるわよ、真之乃秀。下から３２番目の学年順位のアンタにだけは言われたくないわ」

「お前、まだその話を掘り下げるのか」

「当たり前でしょ、この底辺野郎」

「口が過ぎているのはどっちだよ！」

確かに俺も架凪呀に悪口を言ったが、お前ほどの威力は誇っていなかったぞ！

「て、ていうか、確かに夜華さんには総合成績では負けていたけれど、数学のテストでは、時々だけど私の方が点数上だったんだから」

「ああ、そう言えばそんな事もあったな」

数学の授業にて最高点数を獲得した人の名前が呼ばれる訳なのだが――そこで霧歌の名前ではなく、架凪呀の名前が呼ばれた事だけは覚えている。

まぁ、尤も、その時の俺はまだ架凪呀とそこまで面識が無かったので。

ぼんやりとしか覚えていないのだけれど――って。

そうか。

これも――創られた記憶の内の一つなのか。

それならば、ぼんやりとしか覚えていなくて当然なのかも知れないな。

「架凪呀は数学が得意なんだな」

「まぁね。未来では――と言うか、未来で戦う時は計算能力が必要だからね」

「えっ？　そうなのか？」

「ええ、そう。三次元――って解る？」

「えっと……実際に居る人と幻想世界に居る人の事か？」

「それは別の意味での二次元と三次元。全くもう……アンタはそういう知識ばっかりなんだから。もう少し勉学に励んだらどうなの？」

「いや……お前がどの意味でその言葉を使っているのか解らないけれど、それってどうせまだ習っていないヤツなんだろ？」

「何を言っているのよ。三次元ならともかく、三次方程式ならこの前、習い始めたばかりじゃない」

「……」

どうやら習い始めているらしかった。

俺には全く記憶に無いが。

「そ、それで――その、三次元とやらがどうかしたのか？」

「正確には三次元ではなく、三次元の座標空間だけどね」

「ああ……ザヒョウクウカンね。うん、聞いた事ある」

「嘘仰い（おっしゃ）。座標空間って所だけかなりの棒読みになっていたじゃない」

バレたか。

「それじゃあ……X軸とか、Y軸とかは解る？」

「ああ、それくらいなら――何とか」

「何とかなのね……まぁ、そこはスルーしておくわ」

「それで、その二つの軸がどうかしたのか？」

「その二つの軸で構成されているグラフは勿論解るわね？」

「ああ、うん」

「そのX軸とY軸に更にZ軸を加えたものを三次元の座標空間って言うのよ」

そう言って、架凪呀は続ける。

「X軸とY軸だけでは、平面しか表現できなかったのだけれど、Z軸を加える事によって、立体を表現できるようになるのね――って、聞いてる？　と言うか理解出来てる？」

「あ、ああ、聞いてはいるし、何とか付いて行ってる」

「そう、ならいいけれど。それで未来で戦う時にはその三次元の座標空間が必要になってくるのね？」

「お、おう」

「自分が今居る位置を原点に見立てて、その場所から『異空繋門（ワームホール）』を出現させたい場所までの距離を三次元の座標空間で空間に浮かぶ点までの距離を求めるのと同じ原理で計算するの」

距離を計算して、その『異空繋門（ワームホール）』を出現させたい場所の座標を求める。

それから、その座標の値を転送装置に打ち込んでその場所に武器や『魔導獣機』を転送するの――と架凪呀は言う。

「だから、未来の戦いにおいては計算能力が重要になって来るの。予め持っていたもの以外の武器が必要になった時には、瞬時に座標を計算して、その場所に武器を転送しないといけないから」

「あ、ああ……なるほどね」

「……真之乃秀、正直に言いなさい。アンタ、全く解っていないでしょ？」

「なっ、何故解ったんだ！」

「驚き方が白々し過ぎるわよ！　ていうか、どうして逆に解らないと思ったのよ！」

「でもまぁ、とりあえず、未来の戦いにおいて計算能力が重要なのは解ったよ」

「本当なんでしょうね……」

相変わらず、俺に疑いの眼差しを向けてくる架凪呀。

まぁ、実際の所――解っているとは言っているが、殆ど解っていないからな。

だから、そんな眼差しを向けられるのは案外妥当だったりする。

「なるほどなぁ……日々を生き抜く為に計算能力が必要なら、お前が霧歌よりも数学の点数が高いのは納得行くな」

「まぁ、それでも夜華さんには時々しか勝てないけどね」

「時々勝てているだけで十分だよ。俺を見てみろ。俺なんか全戦全敗だぜ？」

「全戦全敗と言うか、アンタはそもそも夜華さんに相手にもされていないでしょう？」

「酷い事言うなぁ、お前！　相手にはされているよ！　多分！」

「肯定するか否かハッキリしなさいよ！」

8月9日？

「……あっ、架凪呀」

そして、俺はとある事を思い付いて、架凪呀にそれを提案する。

「お前、何か未来の特別な薬とか持っていないか？」

「薬？」

「怪我とかを治すヤツ」

「ああ、それならあるわよ。薬じゃなくて機械だけど」

「本当か？　それなら、ウリアの怪我を治してやってくれないかな？」

「ええ……あいつの怪我を？」

「そんな露骨に嫌な顔をするなよ……」

お前、どれだけウリアの事を敵対視しているんだよ。

「頼むよ、架凪呀。あいつも片腕だけじゃ今後も色々と不自由だろうしさ」

「……正直に怪我の描写を描くのが面倒だってハッキリ言ったらどうなの？」

「そう言いたいのは山々なんだが、色々と問題があると言うか、それ以前にそれは俺の問題ではないと言うか」

「はぁ……いいわよ、解ったわ」

ため息を吐いて架凪呀は俺の申し出に応じてくれた。

「あいつの怪我、治して上げるわよ」

「そうか……恩に着るよ、架凪呀」

「言っておくけれど、アンタの頼みを聞いただけだからね？　アンタには色々と――返し切れないほどの、恩があるから」

「……お前、意外と受けた恩はちゃんと返すタイプなんだな。『科学発展側』の事と言い、俺の事と言い」

「“意外と”ってどういう意味？　あいつの怪我、治してやらないわよ？」

「スマン、口が滑ってしまったんだ」

「ああそう。それじゃあ、二度と滑らないように接着剤でも塗って上げましょうか？」

「それだけは本当に勘弁してくれ」

「全く……大体、あいつはアンタのボディーガードを任せられるくらいだから、それくらいの腕を持った魔術師なんでしょ？　それなのに、どうして治癒の魔術の一つも使えないのよ」

「そう言えば……そうだな」

俺はウリアが攻撃や防御に魔術を使っている所を見た事はあるが――治癒の魔術を使っている所は見た事が無い。

どうして、ウリアは治癒の魔術を使えないのか。

「まぁ……別に良いけれどね。別に魔術師だからって、攻撃や防御や治癒――それら全ての魔術が仕えなければならない訳じゃないし」

「まぁ、な。でも、確かあいつ――初めて俺と会った時、何か自分の官職みたいなのを言っていたな」

「何て言っていたの？」

「確か――『上級魔術師（トップソーサレス）』、だったかな」

「『上級魔術師（トップソーサレス）』！？」

架凪呀の驚愕する声が――澄み渡った青空に響き渡った。

「えっ、あいつ、本当にそう言ったの？　自分が『上級魔術師（トップソーサレス）』って？」

「あ、ああ、そうだけど……何だよ、そんなに凄い官職なのか？その――『上級魔術師（トップソーサレス）』って」

「凄いも何も、確か『上級魔術師（トップソーサレス）』って言ったら、『魔術発展側』において与えられる官職で最高ランクのものだったはずよ？」

「えっ……ま、マジで？」

最高ランクって。

普段のあいつは現代の時代に呑まれた単なる自堕落な人間にしか見えないのだが。

「あいつ……そんなに凄い奴だったのか」

「確か、『魔術発展側』にもその官職を与えられる実力を持った人は少ないって聞いたけれど――でも、それなら尚更、どうしてウリアール＝ブレイザーが治癒の魔術を使えないのかが気になるわね」

「そうだな……」

『上級魔術師（トップソーサレス）』――それが架凪呀の言う通り、『魔術発展側』の組織において最高ランクに君臨する官職ならば。

それだけの実力をあいつが――ウリアが未来で認められていたならば。

逆に、治癒の魔術を使えないのはおかしい。

幾ら未来が戦国時代で、戦う為だけに魔術を学んでいたとしても――全く使えないというのはおかしいだろう。

魔術を習うならば、一応基本は全て習うはずだ。

未来の――魔術の教育方針が今と変わっていなければ、の話だが。

それならば――どうして、ウリアは治癒の魔術を使う事が出来ないのか。

いや、それとも使えるのに使っていないだけなのか。

もし、そうだとしたら――更に、謎は深まるばかりなのだが。

ウリアに直接、聞いてみるべきだろうか。

「あいつを問い質してみる？」

そして、どうやら彼女も同じ事を考えていたようで。

俺の隣を歩く架凪呀はそんな質問を口にする。

「これは私の予想だけれど――あいつは、ウリアール＝ブレイザーは、私達に何か隠し事をしていると思うわよ？」

「……ああ、それには俺も同感だ」

ウリアを疑う訳じゃない。

ただ――その可能性を完全に拭い去る事も、出来ないのだ。

今までだって、ウリアに対してそう思う事は何度かあった訳だし。

――でも。

「でも……やっぱり、問い質すまでは、しない方が良いと俺は思う。

あいつにだって――何か、言いたくない事の一つや二つあるだろうし」

「そう……まぁ、真之乃秀がそう言うのなら、私は別にそれでいいけれど」

8月9日？

「ああ、そうしようぜ」

「しかし――真之乃秀、アンタって意外とデリカシーがあるのね」

「それは一体全体どういう意味だ？」

「そもそも、アンタってデリカシーの意味解ってる？」

「それくらい解るよ！　余り俺を馬鹿にするな！」

とまぁ――そんな会話を交わしながら。

俺と架凪呀は依然としてスーパーへと足を進めるのだった。

◆◆◆

「改めて見ると、カップラーメンにも色々とあるのね」

スーパーにて、インスタント食品が陳列している棚を前に架凪呀が発した第一声はそれだった。

少なからず感心しているような――そんな感じの声。

「醤油にカレーにシーフードに――ああ、塩味なんかもあるんだ」

「塩味なんか良いんじゃないか？　俺、前に食べてみたけど、カレーの次に気に入ったし」

「へーっ、そうなんだ。それじゃあ、それにしようかな……」

「……」

俺は意外にも真剣にカップラーメンを選び始めた架凪呀を横目で見据える。

そして、架凪呀が俺の行動によって創り出された存在だという事を再確認する。

「……いつ話すべきだろうか」

まぁ、その事は俺の推測でしかないのだけれど。

「ん？　何？」

すると、架凪呀がこちらを振り返って来た。

どうやら、独り言が聞こえてしまっていたらしい。

「今、何か言った？」

「い、いや、別に何も」

「そう……よし、それじゃあ、私はこれにしようっと」

そう言って架凪呀が棚から取り出したのは――塩味のカップラーメ

ンだった。

「何だ、結局それにしたのか」

「だって、真之乃秀、前にこれを食べて美味しいって思ったんでしょ？」

「まぁな」

「だったら、これにするしかないじゃない」

「良いのか？　確かに俺は美味しいとは言ったけど――ただそれだけの理由で」

「良いのよ。真之乃秀が美味しいと言ったのなら――私は、その言葉を信じるから」

そう言って架凪呀は笑みを見せる。

その笑顔に俺は思わず顔を逸らしてしまっていた。

顔が若干熱くなっているのを感じる――冷房の効いた店内の中にまで夏の灼熱が入り込んで来ているとも思えない。

俺はその彼女の笑顔に頬を赤く上気させていた。

「……真之乃秀？」

「えっ？」

そして、名前を呼ばれた俺は咄嗟に顔を前に向ける。
そこには――こちらを覗き込んでいる架凪呀の姿があった。
彼女は怪訝そうに小首を傾げている。
「どうかしたの？　何か今のアンタ、変よ？」
「そ、そうか？　俺は至って普通だけど？」
「そうかしら……まぁ、アンタがそう言うのなら、私はそれ以上言及はしないけれど」
「……そ、それじゃあ、架凪呀はそのカップラーメンで良いんだな？」
「ええ、良いわよ」
「それじゃあ、レジに行こうぜ。さっさと買って帰ろう――ウリアも待っている事だし」
口早にそう言って、足早にその場から歩き出す俺。
「あっ、ちょっと待ってよ」
後方から聞こえて来る声――架凪呀は小走りで俺に追い付いて来て隣に並ぶ。
「……」

俺は隣を歩いている架凪呀を――再度横目で盗み見る。

そして、先ほどの彼女の笑顔を思い出した。

教室での架凪呀と――今日の架凪呀。

同じ二人、けれども、どこか違う二人。

その二人の間に生まれるギャップが――俺の心を擽る。

「……このギャップは反則だよなぁ」

「真之乃秀？」

「えっ？」

「何をブツブツと呟いているのよ。アンタ、さっきから独り言が多いわよ？」

「あ、ああ、悪いな。少し考え事を」

「ふーん……考え事、ねぇ」

「……」

俺の言葉を――どうやら架凪呀は信じていないようで。

こちらに疑いの眼差しを向けてくる彼女に俺はただただ苦笑を浮かべる事しか出来ないのだった。

存在理由

俺と架凪呀が家に帰ると――ウリアはリビングでソファーに横たわって寝息を立てていた。

ちなみに、テレビは点けっ放しだった。

「せめてテレビは消して寝ろよ……」

そう言いつつ俺は眠りに就いているウリアの傍にあるリモコンを拾い上げると、それを操作してテレビの電源を落とす。

「全く、呑気ねぇ」

そう呆れた声を漏らしつつ架凪呀はカップラーメンの入ったレジ袋をテーブルの上に置いた。

「いつ敵が襲って来るかも解らない状況なのに」

「でもまぁ、今までだってずっとこんな感じだったけどな」

「真之乃秀、アンタは命を狙われている身なんだから、必要最低限の緊張感は持っておきなさいよ」

「それはそうなんだけど……でも、普段のウリアを見ていると緊張感を抱いていいのか否かが解らなくなるんだよ」

「……どういう事？」

「だって、こいつは未来から――それも、戦いに塗れた時代から遥々ここまでやって来た訳だろ？　だったら、テレビだとかカップラーメンに現を抜かしているこいつを咎めていいのかどうか……解らなくてさ」

「ふーん……要するに、アンタは途轍もなく甘い人なのね」

「ほっとけ」

「ラグドゥネームくらいに甘い人なのね」

「ラグドゥ――何だ？　それ？」

「砂糖の２２万倍の甘さを誇る世界で最も甘い物質の事よ」

「俺はそこまで甘い人間じゃねーよ」

「あら、それじゃあ辛い人間なのかしら？」

「辛い人間ってどういう事だよ。何だ、甘い人間の対極の存在の事か」

「何を言っているの？　私は辛い人間と言っただけで、辛い人間だとは一言も言っていないわよ？」

「振り仮名を付けろ！　まどろっこしいだろうが！」

ていうか、辛い人間と言うのも一体全体何なんだよ。

辛い人間――あれ、何だか軽く馬鹿にされているような気がするの

だが、気のせいだろうか。

何と言うか、この場のニュアンス的に。

「ちなみに、世界一辛いのはブート・ジョロギアという唐辛子の一種よ」

「へーっ、お前、そんな事よく知ってるな」

「そして、世界一変態なのは真之乃秀よ」

「俺を勝手にギネス記録に認定しようとするな」

「賞を貰えるのよ？　認定されて嬉しいじゃない」

「嬉しい訳あるか！　そんな記録で貰える賞なら俺は要らない！」

変態という部門でギネス記録に登録されたとしてもそれは単なる恥さらしである。

「しかし、架凪呀。そんな雑学まで知っているなんて――お前、意外と博識なんだな」

「当然よ。学校での昼休み、暇で暇で仕方が無くて、図書館でずっと『世界のギネス記録一覧』という本を読み耽っていた私を舐めないで貰いたいわ」

「……スマン。何だか解らないけれど、とりあえず聞いて悪かった」

「べ、別に、友達が居なかった訳じゃないんだからねっ」

「強がるな。悲しくなるだけだぞ」

お前と同じ境遇の立場から言わせて貰うが。

「い、言っておくけどね、私は友達が居なかったんじゃなくて、作らなかったのよ」

「それ、友達が居ない奴の常套句だぞ」

「だって、私はいつか未来に帰らなくちゃいけない訳だし？　だから、友達なんか作った所で、無意味だったし？」

「架凪呀、もう止めておけ。俺まで泣きそうになってくるじゃねーか」

「……ていうか、何をアンタはさっきから私の事を理解している的な感じで言葉を並べ立てている訳？」

「えっ？」

「アンタは確かに友達が居ないけれど――でも、夜華さんという友達がちゃんと居たじゃない」

「まぁ……それはそうだが」

「だから、私はそういう所も含めてアンタを抹殺しようと決めていたのよ」

「お前の俺に対する殺人意欲にはそういう原因もあったのかよ！」

な、何て私情に私情を重ねたような理由なんだ。
俺はそんな理由でこいつから殺され掛けたのか。
「オイオイ、せめて俺を殺すのなら、もう少しマシな理由で殺そうとしてくれよ」
「そうね……それじゃあ、真之乃秀の魔の手から全世界の女の子の護る為――というのはどうかしら？」
「……何が言いたい」
「ストレートに言えばこうね。変態は死ね」
「ストレートに言うな。命令形で言うな」
「死ね」
「一言でも言うな！　そして、それを言うのならせめて理由を付けろ！」
――と。
ここで突然だが、この家には小さな庭が存在する。
庭と言っても洗濯物を干す為だけに作られたような、それほどまでに小さな空間でしかないのだが。
――そして。

現在、その庭には誰がしたのか――と言っても、どうせ架凪呀がやってくれたのだろうけれど。

そこに立てられている洗濯竿には幾つかの洗濯物と一緒に――とある淡いピンク色をしたものが風に靡いていて。

と言うか、あれはどう見ても昨日洗濯機を覗いた際に偶然にも見てしまった架凪呀の上下の下着で。

存在理由？

「……」

ふぅ、やれやれ。

世界は時に――ほんの少しの幸福を齎してくれる事がある。

それがまさしく、今だった。

「オイ、架凪呀、見てみろよ。色々な意味で絶景が目の前に広がっているぜ？」

「死ねぇえええええええええっ！」

次の瞬間、俺はそんな雄叫びと共に架凪呀から後頭部を蹴られていた。

そして、前方に吹き飛ばされた俺はリビングの大窓で顔面を打つ。

「痛ってーな！　何しやがんだ！」

「うるさいっ！　黙れっ！　そして死ね！」

「何だその罵倒の三段活用は！」

「うるさいっ！　何が絶景よ！　あれはどう見たって私の下着じゃないの！」

「そうだよ！　俺はそれを承知の上で言ったんだよ！　色も桃源郷のような色をしているじゃないか！」

「全然上手くも何ともないから！　ああもう……失敗したわ、どうしてこいつを起こしに行く前に洗濯物を片付けておかなかったのかしら……！」

「俺に見せる為だろ？」

「いい加減に黙らないとその眼球と脳味噌を引き摺り出すわよ」

「リアルに怖い事を言うな！」

「ていうか、本当にアンタの眼球と脳味噌を引き摺り出せば今の記憶は消えるかしら……？」

「だから、リアルに怖い事を言うなって！　それから、そんな事をしたら記憶を喪うどころか死んでしまうわ！」

「良いじゃない。むしろ、私にとって一石二鳥だわ」

「落ち着け、架凪呀。お前、今自分が何を言っているのか解っているのか」

「勿論解っているわ。私は至って素面（しらふ）よ」

「真顔で何を言っているんだよ」

「真顔にもなるわよ、だって素面だもの」

「上手くねーよ！　お前の方こそ全然上手くねーよ！」

「と、とりあえず」と架凪呀は若干頬を赤く染めつつリビングの大窓を開けた。

「今から私は洗濯物を取り込むから、アンタは目をずっと瞑ってなさいよね」

「そうか……それじゃあ、俺は洗濯物を取り込むのを手伝おうかな」

「真之乃秀――人の眼球って、一体全体幾らで売買されているのかしらね」

「よし、俺は目を瞑っている。瞑っているから、早く取り込んでくれ」

「フンッ、解ればいいのよ。もしも、私が洗濯物を取り込んでいる途中に目を開けたら――どうなるか、解っているわね？」

「も、勿論だとも」

そう言いながら俺は目を瞑る。

俺に忠告――と言うよりも脅迫を言った架凪呀が瞼に遮られた視界の向こう側で洗濯物を取り込むのを俺は聴覚で感じ取るのだった。

◆◆◆

「目を開けていいわよ」

その架凪呀の言葉に俺は閉じていた瞼を開ける。

視界に入り込んで来る電灯の光――その直後、目の前に洗濯物が入れられた籠が置かれた。

「……お前の下着が出るまで漁っていいのか？」

「馬鹿も休み休み言いなさいよ、真之乃秀。洗濯物を畳むから、アンタも手伝いなさいって言っているのよ」

「ああ、そういう事ね」

「でも、アンタに私や――まぁ、一応ウリアール＝ブレイザーが着た衣服を触らせる訳には行かないから、選別するまで待っておきなさい」

「了解。それじゃあ、俺は麦茶でも注いで来るわ」

「ええ、ありがと、真之乃秀」

俺は立ち上がり、キッチンへと向かう。

「……そう言えばさ、架凪呀」

冷蔵庫の扉を開けながら、俺はリビングの方へと声を飛ばす。

「お前――まぁ、俺のせいでもあるんだけど、転送装置は無くなったんだよな？」

「まぁ、そうね」

背後にあるキッチンとリビングの境目に設けられた壁に空いた長方形の穴の方から返って来る架凪呀の声。

「転送装置は一人一つしか渡されないし――でも、あれは兵器を転送する為のものだから、今の私には余り必要無いかも知れないけどね」

「でも、お前怪我を治す為の機械を持っているとか言っていなかったか？　それに、お前ウリアとさっき喧嘩していた時にあの槍を出していたよな？」

俺は冷蔵庫から麦茶の入っているペットボトルを取り出す。

ちなみにこれは余談中の余談だが――我が家の麦茶は自家製である。

「ああ、あれは転送装置とはまた違った転送方法なのよ」

「それは……えっと？」

「これはまだ言っていなかったけれど、私の右目には――とある一種の転送装置が埋め込まれているの」

「えっ？　み、右目にか？」

俺は傾けようとしたそのペットボトルを持った手を思わず止めてしまっていた。

「そう、右目に、よ」

「それって――その、痛くないのか？」

「何を言っているのよ。４５年も経てば、色々な科学技術も発展するし、それと同時に医療技術も勿論発展しているのよ。確かに、移植手術をする時は少しばかり怖かったけれど――でも、手術は全然痛くもなかったし、今では移植して良かったと思えるほどに便利だと思っているわ」

存在理由？

「転送装置の名前は『転送義眼（インポートアイ）』」と架凪呀の声が聞こえて来る。

「その『転送義眼（インポートアイ）』は『魔導獣機』とかその他諸々の兵器が収納されている『共有空庫（パブリックハンガー）』じゃなくて、その個々人が所有している『占有空庫（プライベートハンガー）』に直接接続されるの」

「ぱ、パブリック……プライベート？」

「ああ、うん、その辺りはまぁ――理解しなきゃならないけれど、理解しなくてもいいわ。それ以前に、アンタは話したとしてもすぐにはどうせ理解できないだろうから」

「……心遣いをどうもありがとう」

心遣いはありがたいが、その言葉は要らなかったような気もする。

まぁ、理解できていないのは本当の事なので――これ以上は何も言えないけれど。

「それじゃあ、続きを話してもいいかしら？」

「ああ、どうぞ。出来るだけ俺が解るように話してくれ」

「それは無理だわ」

「話す前から諦めるな！　せめて話した後で無理だと諦めろ！」

「解ったわよ……それじゃあ、話すわね」

そして、再度壁に空いた穴の向こう側から架凪呀の語り声が聞こえ始める。

「えっと――どこまで話したかしら？」

「パブリックがどうとか、プライベートがどうとか言っていた所からだ」

「ああ、そうだったわね。えっと――ああ、そう、それでね？」

話を持ち直しつつ架凪呀は言う。

「この『占有空庫（プライベートハンガー）』は『共有空庫（パブリックハンガー）』とは違って、私が元々持っていた転送装置が無くても『転送義眼（インポートアイ）』で私的に接続する事が出来るから――私みたいに『科学発展側』を裏切った人間で、未来との接続手段を失った人間でも、この『転送義眼（インポートアイ）』で繋げられる『占有空庫（プライベートハンガー）』の中に何かしらの兵器を入れておけば、いざと言う時に自分でその兵器を取り出す事が出来るという訳なのよ」

「ああ……なるほどな」

俺は納得した声を漏らす。

架凪呀の話を少なからず理解した事でもそうだけど――何よりも。

俺は、以前のストレンドとの戦いを思い出す。

いや、あれは戦ったと言うよりも奇襲されたと言うべきなのだろう

が――今はそんな事はどうでも良くて。

あの時、ストレンドの右目が一瞬だけ赤く光り、その後にその右腕にガトリング砲が出現した。

今思えば、あのストレンドの右目は架凪呀の言うインポートアイというものなのかも知れない。

「その――プライベートハンガーだっけ？」

「ええ、『占有空庫（プライベートハンガー）』」

「それって、スペースに上限は無いのか？　入れられる量に限度があるとか」

「基本的には――うん、無いわね。『占有空庫（プライベートハンガー）』は四次元空間に存在するスペースだから……基本的に、入れられる量に上限は無いわ」

「四次元、か」

「そう、ドラえもんと同じね」

「そういう事は言わなくていいんだよ」

ここで俺はやっとグラスに麦茶を注ぎ出す。

架凪呀の話を聞いていて――注ぐ暇が無かったのである。

「そうか……お前の右目にはそんな秘密が隠されていたんだな」

「ええ、実はそうだったのよ。驚いたでしょう？」

「ああ、驚いたな。いや、冗談抜きで驚いた」

「右目に秘められた力――フフッ、何だかカッコいいわね」

「……お前って意外と中二病の素質があるのかも知れないな」

「中二病？　それって何の病気？」

「知らなくていい。ていうか、知るな」

グラスに麦茶を注いだ俺はそれらのグラスをトレイに乗せてリビングに運ぶ。

「よし、選別完了、っと」

それと同時に架凪呀も洗濯物の選別を終えたようだった。

男物と女物に洗濯物は分けられているようだ。

選別零（こぼ）しがある事を切に願うだけである。

「さて、畳もうか」

「ええ、そうね、畳みましょう」

そして、俺と架凪呀はそれぞれ床に直接腰を下ろして洗濯物を畳み出す。

一枚、二枚と――当然だが、洗濯物を畳む度に時間がゆっくりと、しかし、確実に過ぎて行く。

――そんな中で。

「……ね、ねぇ、真之乃秀」

「どうした？」

俺は洗濯物を畳みながら架凪呀の言葉にそう返す。

「何か……さ」

「ああ」

「洗濯物を畳んでいる私達って――その、夫婦、みたいね」

「……」

架凪呀の言葉に俺は手を止めて――思わず顔を上げていた。

すると、どうやら架凪呀も元々こちらを見ていたようで。

彼女は若干頬を上気させて――こちらに微笑を見せている。

「……」

そして、対する俺はと言えば。

「……ああ、そうだな」

「ええ、そうよね」

「見えなくは――ないかも、知れないな」

「え、ええ、そう、よね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7335x/

ボディーガードは魔法少女

2011年12月7日02時59分発行